

勝保沢中ノ山遺跡 I

— 関越自動車道 (新潟線) 地域埋蔵
文化財発掘調査報告書 第22集 —

1988

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

勝保沢中ノ山遺跡Ⅰ 正誤表

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

誤植

頁	行	誤	正
P74	4行目	◎	(大峰・三峰)
P74	15行目	◎	(大峰・三峰)
P167	註23	洞口 敦	洞口 正史

脱行・脱字

P80 37欄7	13行目 " ①礫・粗砂多②良好③暗赤褐色	2a・2b	風化。1・5～7の外側、2～4の内側両面に煤
P160 25	39行目 " 長 3.4 幅 2.1 76A02 "		

資料	(財)群馬県埋蔵文化財 調査事業団保管	01-320
	No. / -2502	平成 2年 3月31日
		40
		(6)

勝保沢中ノ山遺跡Ⅰ

— 関越自動車道（新潟線）地域埋蔵
文化財発掘調査報告書 第22集 —

1988

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



古墳時代中期の竪穴住居の埋没土上層に堆積した榛名山ニツ岳降下軽石



18号住居出土の土器

序

新しい時代の交通メディアである関越自動車道は関東北西部に位置する群馬県の交通、経済、社会に大きな影響を与えました。新しい世紀が群馬に訪れたと申しても過言とはなりません。この道路は群馬県北西部を縦断し、赤城山麓をまわって北上し、北西に転じ片品川を越えて、さらに北上し新潟に至ります。その路線下には私達の先祖の生活のあかしが埋没されて遺されて、数多くの遺跡地として存在しました。これらは国民の貴重な財産として発掘調査され、記録保存されました。

赤城山西麓は厚い火山性の土壌に覆われて遺構の存在は未確認でしたが試掘調査の結果遺跡の存在が判明しましたので、群馬県埋蔵文化財調査事業団により発掘調査が実施されました。

勝保沢中ノ山遺跡は赤城山北西麓に存在していました。遺跡は先土器時代・縄文時代・古墳時代・奈良時代の4時代の文化層を遺していました。発掘調査は昭和57年5月から11月にかけて実施され、整理事業は昭和62年度に行われました。

調査によりまして、私達の祖先の生活が、先土器時代から現代へと途絶えることなく続き、自然と闘い、調和しながら生活をしてきた様子を窺い知ることができました。

発掘調査実施期間中から報告書作成に至る間に、種々のご援助、ご協力を戴きました日本道路公団、群馬県教育委員会を始めとする関係各位に感謝いたします。

また長期にわたり、発掘調査、資料整理に携わりました関係者の労を多とするとともに、本報告書が、群馬の原始古代社会解明の資料として、広く県民各位、研究者、教育機関等に活用され、記録保存の目的が達成されることを願いつつ序文と致します。

昭和63年3月15日

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎

例 言

1. 本書は関越自動車道(新潟線)建設工事に伴う勝保沢中ノ山遺跡の発掘調査報告書第1分冊である。本遺跡は先土器、縄文、古墳、奈良時代および近世にわたる複合遺跡であり、本書はこのうち先土器時代を除いた各時代の調査結果を掲載している。
2. 本遺跡は、群馬県勢多郡赤城村大字勝保沢字前ノ原479～481、中ノ山1318に所在する。
3. 遺跡名については小字名のうち、中ノ山の地名を採用して冠している。
4. 発掘調査は、当事業団が日本道路公団および群馬県教育委員会と委託契約を締結し実施した。調査担当および調査期間は以下の通りである。(()内は当時の勤務・職名)

試掘調査 担当者 真下高幸(群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査研究員)
小野和之()

期 間 1981(昭和56)年5月14日～同年8月31日

第1次調査 担当者 石坂 茂(群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査研究員)
飯田陽一()
岩崎泰一()

期 間 1982(昭和57)年5月6日～同年11月15日

第2次調査 担当者 茂木允視(群馬県勢多郡赤城村教育委員会 指導主事)
都丸 肇()
山田八重子() 嘱託員

期 間 1983(昭和58)年5月23日～同年7月24日

5. 発掘調査参加者は下記の通りである。(五十音順)

青木ギン、青木新太郎、新井登志子、新井はな子、石田時夫、石田弘子、伊丹淳子、市田八重、井上ナミ子、岩田せつ子、上原幸江、生方ミツ子、大塚とし子、尾竹克美、金井あけみ、金子かよ子、狩野圭一、狩野トキ枝、狩野ヒロ、狩野洋子、狩野芳子、狩野吉野、川口イワ、車崎幸子、桑原恵美子、桑原セツ子、剣持広文、木暮夏子、木暮よしの、斎藤純子、島原喜久枝、須田カツ、須田邦子、須田さつ、関口ちえ子、須田富子、須田久枝、須田利江子、高橋ゆか、竹之内チカ、為谷いす、津久井末子、角田君子、角田はま、都丸昭子、都丸あさ、都丸 草、都丸信子、都丸晴美、鳥山孝子、鳥山タケ子、永井カネ、永井公子、永井しげ子、永井ミサヲ、南雲たつ、南雲やす江、萩原イネ子、萩原富子、橋詰とし子、藤井ひとみ、星野敏江、星野登美子、星野康子、増田よしえ、町田とみ子、松井大子、松島ミキヨ、宮田永子、宮崎時子、村越美恵、茂木以津子、茂木テル、茂木良子、柳井さよ里

6. 発掘調査資料の整理および報告書の作成は、1987(昭和62)年4月から1988(昭和63)年3月まで行った。
7. 本書作成の担当者は次の通りである。

事務担当 白石保三郎、井上唯雄、田口紀雄、上原啓巳、平野進一、定方隆史、国定 均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、野島のぶ江、今井もと子、松井美智子、大澤美佐保、大島敬子

編 集 石坂 茂

本文執筆 石坂 茂 下記を除いた部分

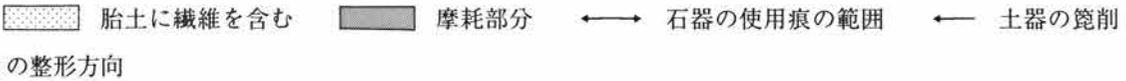
飯田陽一 I-1・4

	坂口 一 (群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査研究員) IV-2
	岩崎泰一 I-5、II-5(2)、IV-1
遺物観察表	石坂 茂、飯田陽一、坂口 一
レイアウト	石坂 茂
	青木静江 (群馬県埋蔵文化財調査事業団 嘱託員)
図版作成	細井敏子、大友幸江、宮本真由美、永井真由美、高梨房江、吉原清乃、松岡陽子、為谷美貴子、阿部由美子、安藤三枝子、金田とも (群馬県埋蔵文化財調査事業団 補助員)
	株式会社 測研
遺構写真	石坂 茂、飯田陽一、岩崎泰一
遺物写真	佐藤元彦 (群馬県埋蔵文化財調査事業団 技師)、たつみ写真スタジオ
遺物の科学的処理	関 邦一 (♪ ♪)
	北爪健二 (♪ 補助員)
	小材浩一 (♪ ♪)
遺構測量	株式会社 測研

8. 遺構内より出土した炭化材の樹種同定は、鈴木三男氏 (金沢大学教養部教授) に依頼し、その分析結果を寄稿 (V) していただいた。
9. 火山噴出物の識別同定について、新井房夫氏 (群馬大学教育学部長) の御協力をいただいた。
10. 遺物の石材同定は飯島静雄氏 (群馬地質研究会員) の御協力をいただいた。
11. 出土遺物は群馬県立埋蔵文化財センターに保管してある。
12. 本書の作成にあたり、下記の諸氏より御助言、御協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。(敬称は略させていただいた。五十音順)

青木秀雄、新井和之、新井房夫、内田憲治、鴨志田篤二、小島純一、佐々木洋治、佐藤正俊、塩谷 上、鈴木裕芳、塚本師也、中山 晋、長嶋元重、野尻 侃、能登 健、藤巻正信、梁木 誠、若月省吾

凡 例

1. 調査区域内には、工事用基準杭を使用して2×2mグリッドを設定し、南北50グリッドを1単位としてZ・A・B・Cの調査区に分割した。各グリッドは東西、南北ラインともにアラビア数字を付与し、その呼称は北東隅をあてた。各グリッドの国家座標上における位置は、付図の全体図中に記載した。
2. 挿図中に使用した方位は真北である。また、各住居の方位は長軸線に直交する軸線の方位を採用した。
3. 竪穴住居の面積算出については、1/20の平面図上でプランメーター（ローラー極式・レンズ式）による2回計測の平均値を使用した。なお、小数点以下3桁は四捨五入してある。
4. 遺構および遺物図面の縮尺は各図中に表示してある。遺物の場合、図中の縮尺と異なるものについては遺物番号の後尾に（ ）で縮尺を表示した。
5. 遺物実測図中における表示は次のことを意味する。

6. 遺構平面図中のスクリーンパターンは次のことを表す。

7. 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。
 - (1) 土器観察表における大きさの項目中の略語は、高=器体の高さ、口=口縁の直径、胴=胴部の最大径を表わすが、（ ）内の数値は推定値を示す。
 - (2) 胎土中の砂粒の大きさは、>2mm=礫、2~0.2mm=粗砂、0.2~0.02mm=細砂、とした。
 - (3) 色調については、農林省水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修の新版標準土色帖に基づいている。
 - (4) 出土状態については床面に密着して出土したものは、「床面直上」、床面から若干浮いていたものは床面からの高さ、埋没土層中より出土したものは「埋没土中」とそれぞれ記載した。
 - (5) 石器一覧表内の石材の記載は、次のように略す。
黒色頁岩=黒頁、黒曜石=黒曜、黒色安山岩=黒安、チャート=チ、灰色安山岩=灰安、変質安山岩=変安、頁岩=頁、輝緑岩=輝緑、砂岩=砂、蛇紋岩=蛇、変質玄武岩=変玄、グラノファイヤー=グ、凝灰岩質砂岩=凝砂、輝石安山岩(粗粒)=輝安、石英閃緑岩=石閃、閃緑岩=閃緑、凝灰岩=凝灰、花崗岩=花崗、溶結凝灰岩(大峰・三峰)=溶凝、玢岩=玢
8. 縄文時代の遺構内から出土した石器のうち、床面（底面）に密着しないで埋没土中より出土したものについては、遺構外からの出土石器とともに包含層出土の石器として一括して扱っている。
9. 本文中の第1図および第2図は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図（鯉沢・渋川）を、第4図は同5万分の1地形図（沼田・前橋）をそれぞれ使用した。

目 次

卷頭写真

序

例 言

凡 例

I. 発掘調査と遺跡の概要 …………… 1	III. 古墳時代以降の遺構と遺物 …… 127
1. 調査の経過 …………… 1	1. 検出された遺構の概要 …………… 127
2. 遺跡の位置と地形 …………… 3	2. 階段状遺構 …………… 127
3. 周辺の遺跡 …………… 5	3. 竪穴住居 …………… 128
4. 調査の方法 …………… 7	4. 土 壙 …………… 147
5. 遺跡の基本層序 …………… 9	5. 炭焼窯址 …………… 148
	6. 包含層の出土遺物 …………… 148
II. 縄文時代の遺構と遺物 …… 10	
1. 検出された遺構の概要 …………… 10	IV. 成果と問題点 …………… 161
2. 竪穴住居 …………… 10	勝保沢中ノ山遺跡出土の石器について …… 168
3. 集 石 …………… 37	群馬県における出現期の
4. 土 壙 …………… 43	須恵器模倣土師器 …………… 173
5. 包含層の出土遺物 …………… 57	
(1) 土 器 …………… 57	V. 科学的分析 …………… 180
(2) 石 器 …………… 88	群馬県勝保沢中ノ山遺跡出土炭化材の樹種 180

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡の位置 …………… 2	第 45 図 土壙出土遺物(39・40・44・48・49・52～56号) …………… 54
第 2 図 周辺の遺跡分布 …………… 4	第 46 図 土壙出土遺物(61・83号) …………… 55
第 3 図 各時代の遺跡分布 …………… 6	第 47 図 土壙出土遺物(95・110～113・115・116・121号) …………… 56
第 4 図 発掘調査の範囲と柱状土層図の作成地点 …………… 7	第 48 図 包含層出土土器のグリッド別分布(1) 57
第 5 図 遺跡の基本柱状土層 …………… 8	第 49 図 包含層出土土器のグリッド別分布(2) 58
第 6 図 1号住居 …………… 12	第 50 図 包含層出土の土器(1) …………… 59
第 7 図 1号住居出土遺物 …………… 13	第 51 図 包含層出土の土器(2) …………… 60
第 8 図 1号住居出土遺物 …………… 14	第 52 図 包含層出土の土器(3) …………… 61
第 9 図 2号住居 …………… 15	第 53 図 包含層出土の土器(4) …………… 62
第 10 図 3号住居 …………… 16	第 54 図 包含層出土の土器(5) …………… 63
第 11 図 2号住居出土遺物 …………… 17	第 55 図 包含層出土の土器(6) …………… 64
第 12 図 2・3号住居出土遺物 …………… 18	第 56 図 包含層出土の土器(7) …………… 65
第 13 図 4号住居と出土遺物 …………… 19	第 57 図 包含層出土の土器(8) …………… 66
第 14 図 5号住居 …………… 20	第 58 図 包含層出土の土器(9) …………… 67
第 15 図 5号住居出土遺物 …………… 21	第 59 図 包含層出土の土器(10) …………… 68
第 16 図 6号住居 …………… 22	第 60 図 包含層出土の土器(11) …………… 69
第 17 図 6号住居出土遺物 …………… 23	第 61 図 包含層出土の土器(12) …………… 70
第 18 図 7号住居 …………… 24	第 62 図 包含層出土の土器(13) …………… 71
第 19 図 7号住居出土遺物 …………… 25	第 63 図 石器の組成と石材 …………… 88
第 20 図 7号住居出土遺物 …………… 26	第 64 図 石器の器種と石材の関係(1) …………… 90
第 21 図 8号住居と出土遺物 …………… 27	第 65 図 包含層出土の石器(1) …………… 94
第 22 図 8号住居出土遺物 …………… 28	第 66 図 包含層出土の石器(2) …………… 95
第 23 図 9号住居 …………… 29	第 67 図 包含層出土の石器(3) …………… 96
第 24 図 9号住居出土遺物 …………… 30	第 68 図 包含層出土の石器(4) …………… 97
第 25 図 10・11号住居と出土遺物 …………… 31	第 69 図 包含層出土の石器(5) …………… 98
第 26 図 12号住居 …………… 32	第 70 図 包含層出土の石器(6) …………… 99
第 27 図 12号住居出土遺物 …………… 33	第 71 図 包含層出土の石器(7) …………… 100
第 28 図 13号住居と出土遺物 …………… 34	第 72 図 包含層出土の石器(8) …………… 101
第 29 図 14号住居 …………… 35	第 73 図 包含層出土の石器(9) …………… 102
第 30 図 14号住居出土遺物 …………… 36	第 74 図 包含層出土の石器(10) …………… 103
第 31 図 14号住居出土遺物 …………… 37	第 75 図 包含層出土の石器(11) …………… 104
第 32 図 集石(1～9・11号) …………… 39	第 76 図 包含層出土の石器(12) …………… 105
第 33 図 集石(10・12～19号) …………… 40	第 77 図 包含層出土の石器(13) …………… 106
第 34 図 集石の位置(1～17号) …………… 折り込み	第 78 図 包含層出土の石器(14) …………… 107
第 35 図 集石出土遺物(6～8号) …………… 41	第 79 図 包含層出土の石器(15) …………… 108
第 36 図 集石出土遺物(7～10・12・15号) …………… 42	第 80 図 包含層出土の石器(16) …………… 109
第 37 図 土壙の形態分類と形態別百分率 …………… 46	第 81 図 包含層出土の石器(17) …………… 110
第 38 図 土壙(1～7・9号) …………… 47	第 82 図 包含層出土の石器(18) …………… 111
第 39 図 土壙(8・12・15・19・21・22・25・26・33号) 48	第 83 図 包含層出土の石器(19) …………… 112
第 40 図 土壙(28・30・32・37・39・42・44・48・49号) 49	第 84 図 石器の器種と石材の関係(2) …………… 113
第 41 図 土壙(51～55・57・58・61・62・74号) …… 50	第 85 図 包含層出土の石器(20) …………… 114
第 42 図 土壙(56・81・83・95・110・111・113・121号) …………… 51	第 86 図 包含層出土の石器(21) …………… 115
第 43 図 土壙(96・112・116号)と出土遺物(1・2・4～7・9号) …………… 52	第 87 図 包含層出土の石器(22) …………… 116
第 44 図 土壙出土遺物(15・19・21・25～28・30・32・37号) …………… 53	第 88 図 包含層出土の石器(23) …………… 117
	第 89 図 包含層出土の石器(24) …………… 118
	第 90 図 包含層出土の石器(25) …………… 119

第91図	包含層出土の石器(26)	120	第110図	18号住居出土遺物	144
第92図	包含層出土の石器(27)	121	第111図	19号住居と出土遺物	145
第93図	包含層出土の石器(28)	122	第112図	19号住居出土遺物	146
第94図	包含層出土の石器(29)	123	第113図	土壌(43・122号)と出土遺物	147
第95図	階段状遺構	127	第114図	炭焼窯と出土遺物	148
第96図	15号住居	129	第115図	包含層出土の遺物	149
第97図	15号住居出土遺物	131	第116図	包含層出土の遺物	150
第98図	16号住居	132	第117図	古墳時代以降の遺構の位置 …… 折り込み	
第99図	16号住居出土遺物	133	第118図	住居出土土器の段階区分(1)	163
第100図	16号住居出土遺物	134	第119図	住居出土土器の段階区分(2)	164
第101図	17号住居	135	第120図	各段階の住居形態	165
第102図	17号住居出土遺物	136	第121図	素材剥片の形状と剝離面構成(石匙)	169
第103図	18号住居	137	第122図	素材剥片の形状	170
第104図	18号住居の炭化材出土状況と出土遺物	138	第123図	勝保沢遺跡 18号住居出土土器	174
第105図	18号住居出土遺物	139	第124図	峯岸遺跡 1号古墳出土土器	175
第106図	18号住居出土遺物	140	第125図	須恵器模倣土器	176
第107図	18号住居出土遺物	141	第126図	舞台遺跡出土土器	178
第108図	18号住居出土遺物	142	第127図	17・18号住居の炭化材の出土状況 ……	184
第109図	18号住居出土遺物	143			

写 真 目 次

<p>P L 1 1 遺跡の遠景(北より)</p> <p>2 B・A調査区の全景(北より)</p> <p>3 A調査区の全景</p> <p>P L 2 1 1号住居</p> <p>2 埋没土層の断面(A-A')</p> <p>3 遺物の出土状況</p> <p>4 遺物の出土状況(No.21)</p> <p>5 3号住居</p> <p>6 埋没土層の断面(C-C')</p> <p>7 炉</p> <p>8 遺物取り上げ後の状況</p> <p>P L 3 1 2号住居(後方3号住居)</p> <p>2 周溝と柱穴の検出状況</p> <p>3 遺物出土状況</p> <p>4 遺物出土状況(No.14)</p> <p>P L 4 1 4号住居</p> <p>2 遺物の出土状況(No.1)</p> <p>3 6号住居</p> <p>4 炉</p> <p>5 埋没土層の断面</p> <p>P L 5 1 5号住居</p> <p>2 遺物の出土状況(No.16)</p> <p>3 7号住居</p> <p>4 遺物の出土状況</p> <p>5 炉</p> <p>P L 6 1 8号住居</p> <p>2 埋没土層の断面(C-C')</p> <p>3 炉</p> <p>4 遺物の出土状況(No.9・10)</p> <p>5 9号住居</p> <p>6 埋没土層の断面(E-E')</p> <p>7 10号住居</p> <p>8 遺物出土状況(No.1)</p> <p>P L 7 1 11号住居</p> <p>2 埋没土層の断面(A-A')</p> <p>3 12号住居</p> <p>4 遺物の出土状況(No.3)</p> <p>5 13号住居</p> <p>6 遺物の出土状況</p> <p>7 炉</p>	<p>8 遺物の出土状況(No.3)</p> <p>P L 8 1 14号住居</p> <p>2 遺物の出土状況</p> <p>3 埋没土層の断面(A-A')</p> <p>4 遺物の出土状況(No.3・1)</p> <p>5 柱穴(P₄)の検出状況</p> <p>P L 9 1 Z調査区の集石遺構の検出状況</p> <p>2 1号集石</p> <p>3 2号集石</p> <p>4 3号集石</p> <p>5 同集石下の土壌</p> <p>P L 10 1 4号集石</p> <p>2 5号集石</p> <p>3 6号集石</p> <p>4 7号集石</p> <p>5 8号(手前)・9号(中央)集石</p> <p>6 8号(後方)・9号(手前)集石</p> <p>7 8号集石</p> <p>8 同集石下の土壌</p> <p>P L 11 1 9号集石</p> <p>2 10号集石</p> <p>3 11号集石</p> <p>4 12号集石</p> <p>5 12号(左)・13号(右)集石</p> <p>6 同集石下の土壌</p> <p>7 14号(後方)・15号(中央)集石</p> <p>8 15号集石</p> <p>P L 12 1 16号集石</p> <p>2 同集石下の土壌</p> <p>3 18号集石</p> <p>4 同集石下の土壌</p> <p>5 7号土壌</p> <p>6 25号土壌</p> <p>7 28号土壌</p> <p>8 44号土壌</p> <p>P L 13 1 48号土壌</p> <p>2 49号土壌</p> <p>3 51号土壌</p> <p>4 56号土壌</p> <p>5 54号土壌</p>
---	---

	6	同遺物の出土状況		4	遺物の出土状況(No. 4・11・3・1)
	7	57号土壙		5	17号住居
	8	同埋没土層の断面		6	埋没土層の断面(D-D')
P L 14	1	58号土壙		7	遺物の出土状況
	2	61号土壙		8	遺物の出土状況(No. 4・8)
	3	83号土壙の埋没土層	P L 39	1	16号住居
	4	同完掘後の状況		2	埋没土層の断面(A-A')
	5	同遺物の出土状況		3	遺物の出土状況
	6	同遺物の出土状況(No. 2)		4	遺物の出土状況(No. 1・13~15・17)
	7	95号土壙		5	貯蔵穴
	8	121号土壙	P L 40	1	18号住居(後方17号住居)
P L 15		1・2号住居出土遺物		2	埋没土層の断面(D-D')
P L 16		2~7号住居出土遺物		3	遺物取り上げ後の状況
P L 17		7~10・12号住居出土遺物		4	遺物の出土状況(北壁際)
P L 18		12~14号住居、6号集石出土遺物		5	遺物の出土状況(北壁際)
P L 19		6~8・10号集石、7・9・26・37号土壙出土遺物	P L 41	1	遺物の出土状況(東壁から北壁際)
P L 20		30・53・54・56・83号土壙出土遺物		2	遺物の出土状況(No. 84・48・49・44・25・9・30)
P L 21		95・111・121号土壙、包含層出土の土器		3	炭化材の出土状況
P L 22		包含層出土の土器		4	炭化材の出土状況
P L 23		包含層出土の土器		5	貯蔵穴
P L 24		包含層出土の土器		6	同埋没土層の断面
P L 25		包含層出土の土器		7	19号住居
P L 26		包含層出土の土器		8	遺物の出土状況
P L 27		包含層出土の土器	P L 42	1	1号階段状遺構(東より)
P L 28		包含層出土の石器		2	1号階段状遺構(南より)
P L 29		包含層出土の石器		3	122号土壙
P L 30		包含層出土の石器		4	122号土壙
P L 31		包含層出土の石器		5	同遺物の出土状況(No. 3~5)
P L 32		包含層出土の石器		6	43号土壙
P L 33		包含層出土の石器		7	1号炭焼窯
P L 34		包含層出土の石器		8	同煙道
P L 35		包含層出土の石器	P L 43		15・16号住居出土遺物
P L 36		包含層出土の石器	P L 44		16号住居出土遺物
P L 37	1	15~19号住居の埋没土層に堆積したF P (西より)	P L 45		17・18号住居出土遺物
	2	15~19号住居の完掘後の状況	P L 46		18号住居出土遺物
	3	Z調査区の土層堆積状況	P L 47		18号住居出土遺物
P L 38	1	15号住居	P L 48		18号住居出土遺物
	2	埋没土層の断面(A-A')	P L 49		18号住居出土遺物
	3	貯蔵穴と遺物の出土状況(No. 13・8・9・10)	P L 50		18・19号住居出土遺物
			P L 51		19号住居、122号土壙出土遺物
			P L 52		包含層出土の遺物

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査の経過

関越自動車道(新潟線)の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、1973(昭和48)年4月から1984(昭和59)年3月までの12年間にかけて69遺跡を調査して総ての発掘調査を終了した。

当初、県教育委員会が当該事業に伴う発掘調査を担当していたが、1978(昭和53)年7月に当事業団が設立され、1980(昭和55)年4月より同調査を受託実施することになった。

利根川以北の赤城山西麓一帯には、6世紀中葉の榛名山二ツ岳降下軽石が地表面近くを厚く覆っており、時期的にこの軽石の降下時期よりも遡る遺跡については地表面での遺物分布調査によって確認することが困難であることから、遺跡の有無の確認を主眼としてその範囲、規模、性格等を把握するための試掘調査が1981(昭和56)年5月より同年10月にかけて実施された。

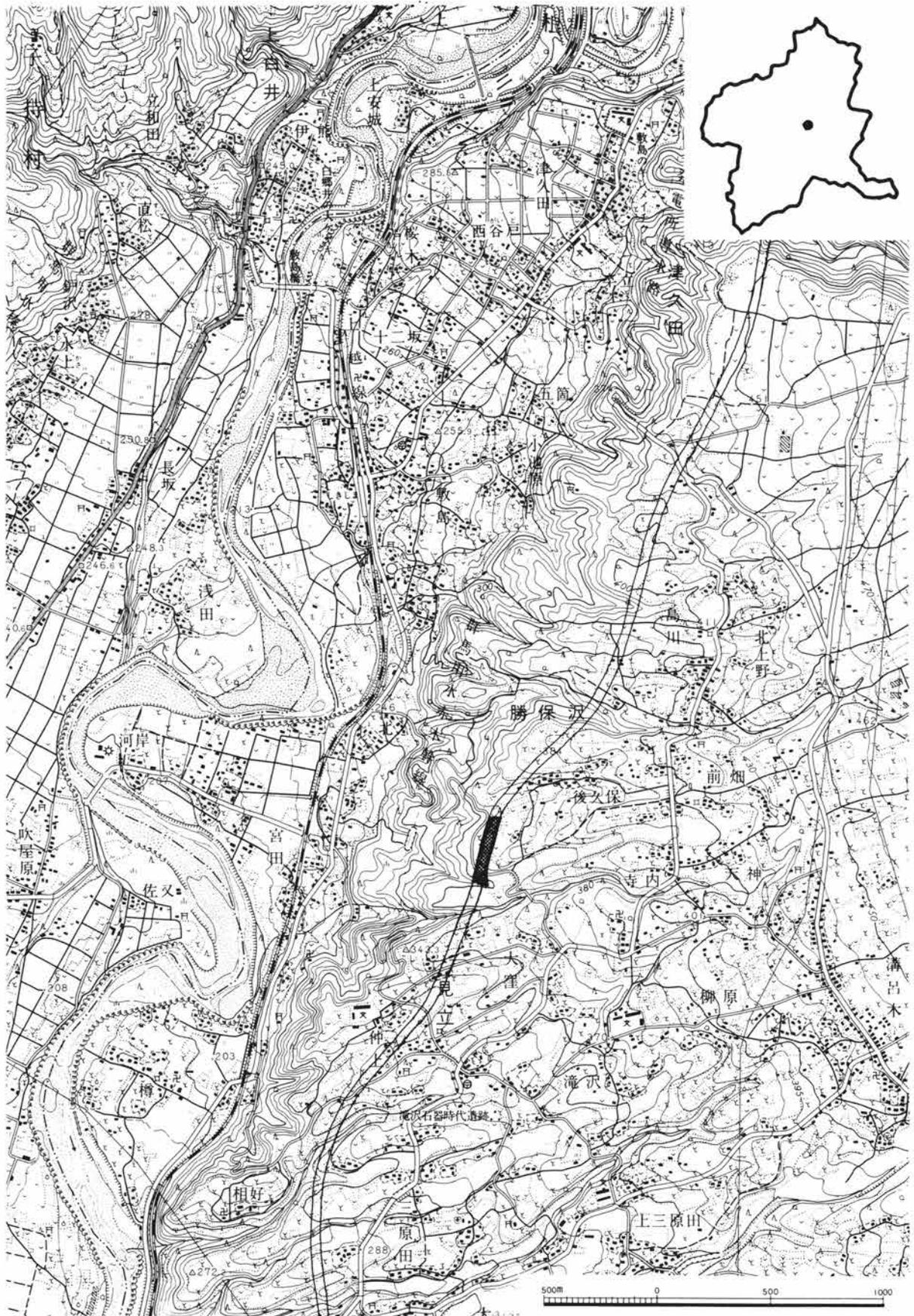
当遺跡の試掘調査は、1981(昭和56)年7月30日から同年8月5日にかけて行われ、工事対象区域全体に1辺20m方眼を組み、1方眼に1箇所割合で幅1.5m、長さ7.5~11.5mのトレンチを適宜配置して調査する方法がとられた。調査は榛名山二ツ岳降下軽石の上面、同軽石下面、ローム面、ハードローム面、と4段階にわたって作業が行われ、その結果、縄文時代の若干の遺構と遺物包含層の存在することが確認された。そこで遺跡としての認定に伴って、県教育委員会と日本道路公団との協議を経て、当事業団が翌年の1982(昭和57)年5月から同年9月までの6カ月間の予定で発掘調査を受託した。

発掘調査の要対象区域は11,600m²であったが、建設工事計画との時間的な関係から橋脚や工事用道路部分を中心とした約6,000m²について分割し、第1次調査を実施することとなった。

試掘調査の分析資料をもとにして、本調査を実施したところ、縄文時代前期の竪穴住居11軒と土壇60基、集石2基などの遺構の他に、約30~50cm厚の遺物包含層中より草創期後半から後期初頭にまたがる多量の土器・石器を検出した。また発掘調査によって生ずる多量の排土を試掘調査の対象となっていなかった3,000m²の区域に盛土する必要から、この区域に試掘トレンチを入れたところ、古墳時代中期の竪穴住居5軒、奈良時代の土壇1基、近世以降の炭焼窯1基の存在を確認し、更にその下位に縄文時代の遺物包含層と遺構の存在することが予測された。発掘調査は、新たな地点を加えて実施されることになったが、工事計画との関連からまずこの地点を6月下旬から7月下旬の1ヶ月間で先行調査することが日本道路公団側より要請され、調査開始より期間半ばにして早くも困難な事態に直面した。しかし、地元の調査作業員の多大な協力もあり、先述の遺構の他に縄文時代の竪穴住居3軒と土壇14基、集石17基を調査し、8月上旬にこの地点の調査を終了した。

その後、8月下旬までの間に当初の調査予定区域内の縄文時代遺構の調査を終了したが、その下位のローム層の堆積状況が極めて良好であったことから、先土器時代の遺物が包含されることも想定され、9月上旬にかけてその確認調査を実施した。その結果、縄文時代の遺構確認面から更に約1m下位の2.1万年前のローム層中よりナイフ形石器や石刃の出土を確認し、その分布が約3,000m²にも及ぶことから急遽調査期間延長のための協議が県教育委員会、日本道路公団を交えて9月10日に行われた。しかし、すでにこの区域の工事が発注済みであったこともあり、期間延長がかなり困難であるために11月13日までの約2カ月間で全調査を終了させざるを得ない状況となった。先土器時代の調査は3箇所のブロックから約2,000点を数える剥片や石器類を検出し、その進行は困難を極めたが、11月12日に全作業を終了した。

I. 発掘調査と遺跡の概要



第1図 遺跡の位置

2. 遺跡の位置と地形

当遺跡は勢多郡赤城村大字勝保沢に所在し、JR上越線敷島駅より南東へ約1.6kmのところの位置している。

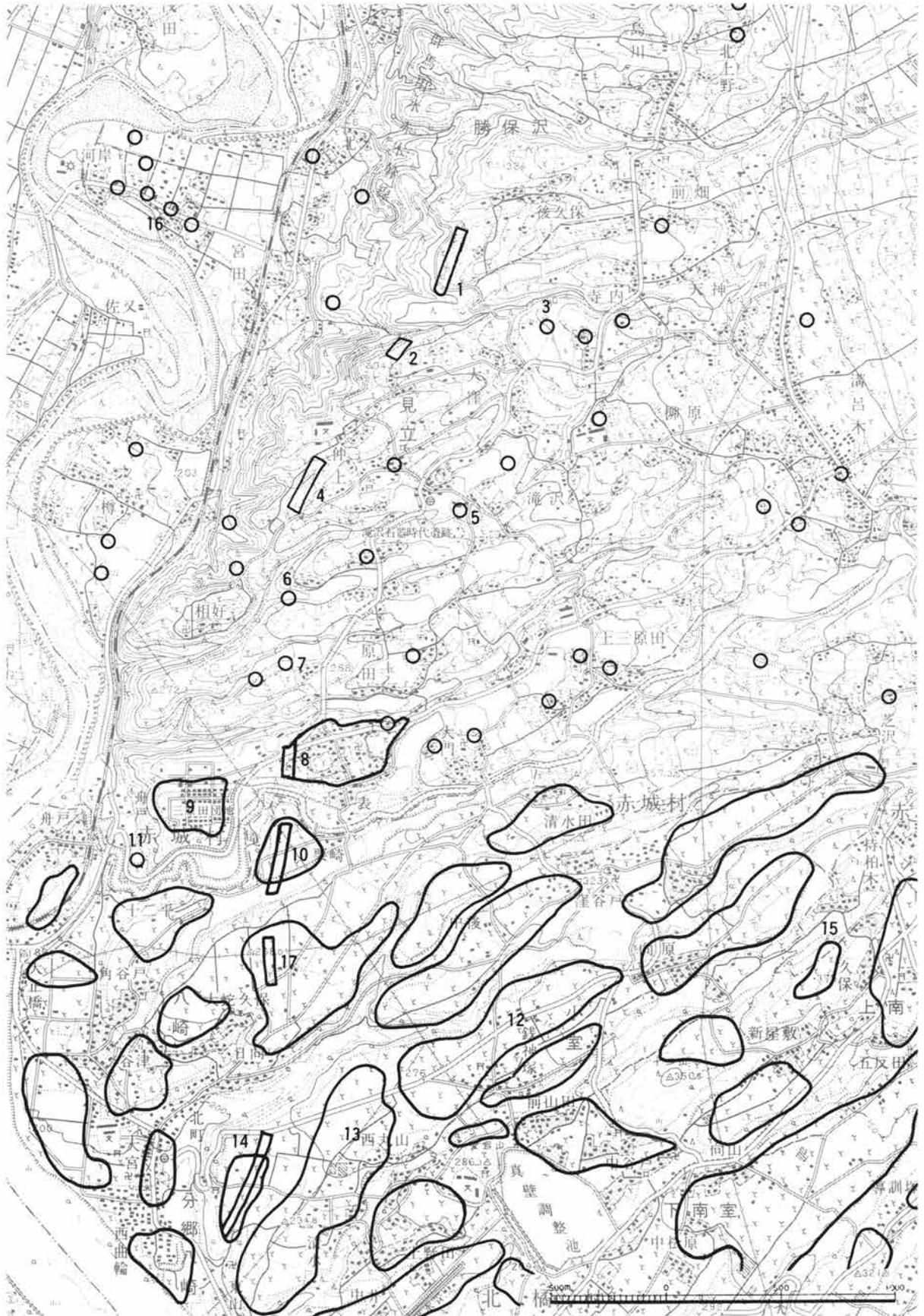
当遺跡を載せる赤城山は県中東部に位置し、県北半部をほぼ南北に貫流する利根川を挟んで榛名山、子持山および前橋台地と接している。同山は黒檜山(標高1,828m)を最高峰とした那須火山帯の南端に位置する第四紀の複合成層火山である。南麓は浅い輻射谷と緩やかな原形面からなる広大な裾野地形を呈するが、北西麓にいくにつれて比較的大規模な輻射谷が発達した丘陵地形を呈する。南・西麓ともに標高500m付近で山地地形から丘陵地形へと地形が変換している。西麓の末端部は、三国山脈に端を発する利根川によって大きく侵食され、現在では比高差約100mの急崖が形成されるとともに、同河川に近接した地点では数段の河岸段丘が形成されている。また、西麓では標高400mから300mにかけての地点に多数の「わく玉」と称される湧水点が存在し、赤城村内だけでもその数は60箇所以上のほびている。これらの流水を集めた小河川は急勾配で山麓斜面を流下し、利根川へと注いでいるが、それらの侵食作用により樹枝状の開析谷が発達している。特にその末端部では、湧水による小規模な谷地状の開析谷が形成され、これらの開析谷に挟まれた丘陵部は、幅の狭い馬背状の丘陵地形を呈している。

当遺跡もこうした幅250mほどの馬背状丘陵の突端部に位置しており、標高は342~358mである。遺跡の南側には約1.2km北方の標高約400m地点より湧出する小河川の中堀川によって幅30mの開析谷が形成されている。また、北側でも同様の開析谷が存在し、これらと丘陵部との比高差は約10~20m前後である。南側の開析谷に近接する地点では、約15度の急勾配の丘陵斜面が一旦緩やかとなって幅20mほどの平坦なテラス状の地形を呈している。この部分には、赤城山の山体崩壊によると思われる二次堆積

ロームが上部ロームの上面に載っており、これによって斜面勾配が緩和されてテラス状の平坦部が形成されている。この二次堆積ロームは、当遺跡地内の北側の開析谷に近接した地点でも同様に観察されるものであるが、その分布は当遺跡の南方約3kmに位置する房谷戸遺跡や南麓の丘陵端部に位置する荒砥北原遺跡・島原遺跡・二之堰遺跡などの小河川沿いの発掘区域においても確認されている。この堆積土中にはラミナ状の互層堆積や基盤層の輝石安山岩礫の混入などが認められることから、降雨などによって崩壊した山体が泥流となり、河川沿いの地域に再堆積したものと考えられる。その堆積時期は諸遺跡の事例からみて時間的にやや幅をもっているが、各遺跡とも上部ローム上面に堆積しており、少なくとも完新世に入ってから堆積と推定される。当遺跡では、この堆積物の上面に縄文時代中期の土壌が掘り込まれている。赤城山の西・南麓域では、この泥流堆積物によって小河川や開析谷沿いの地域に大きな地形変化が生じている可能性が強く、今後旧地形を復元する上で注意を要する存在である。

赤城山を形成する基盤層は火砕流堆積物であり、この上位に下部ロームをはじめとした中・上部ロームが堆積して原形面を形成している。遺跡内のローム層中には、浅間山を給源とする約1.5万年前の白糸軽石(A s - S P)、約1.6~2.1万年前の板鼻褐色軽石群(A s - B P)や約2.1~2.2万年前の広域テフラの始良T n火山灰(AT)、榛名山を給源とする約4万年前の八崎軽石(H P)等の更新世のテフラが堆積している。また、これらのローム層の上位には、当遺跡の西方17kmに位置する榛名山二ツ岳を給源とする6世紀初頭の火山灰(FA)と6世紀中葉の軽石が堆積している。時にこの軽石の堆積は1mもの層厚に及び、表土はこのFPを多量に含むために極めて保水性に乏しく、これを耕作土としている当地域の畠地では、こんにゃく等の農作物が栽培されている。一方、開析谷では湧水を利用した小規模な水田が経営されているが、用水を確保するために溜井などの灌漑施設も存在している。

I. 発掘調査と遺跡の概要



第2図 周辺の遺跡分布

3. 周辺の遺跡

当遺跡(1)の立地する赤城山西南麓は、近年に見られるような大規模な開発が行われていなかった地域でもあり、それを契機とするような遺跡の発掘調査は今回の関越自動車道に伴う調査が始めてと言える。また、悉皆的な遺跡分布調査等も一部の行政区域内で行われているだけと言うこともあり、集落を含めた遺跡分布の動向については不明瞭な点も少なからず認められるが、ここでは赤城山南麓地域の研究成果も踏まえて、発掘調査された周辺の遺跡を中心に各時代別のあり方を考えてみたい。

縄文時代 当時代の遺跡の立地は第3図に示されるように、利根川の川岸段丘上には殆ど認められずその大半が赤城山麓の湧水地や開析谷に隣接した標高180～450mの丘陵上に存在している。

大別時期でみると、草創期後半から早期にかけては燃糸文期の集落が検出された城山遺跡をはじめ、遺構は確認されていないものの燃糸文土器や沈線文土器・条痕文土器が検出されている諏訪西遺跡(6)、見立溜井遺跡(4)、分郷八崎遺跡(14)などがある。当該期の遺跡は、確認例が少なく実態が不明であるが、継続性に乏しい小規模なものが多いようである。

前期になると前時期に比べて明瞭に集落の形成が認められるようになる。三原田城遺跡(8)では花積下層式期、諏訪西遺跡では関山Ⅰ式期、分郷八崎遺跡では関山Ⅱ式期や黒浜式期・諸磯b～c式期、中畦遺跡(7)・見立溜井遺跡・森山遺跡(15)では黒浜式期や諸磯b式期の集落がそれぞれ検出されているが、いずれも幅の狭い丘陵の斜面や先端部に立地する一時期10軒以内の小規模なものである。このほかに、第3図の縄文時代遺跡の大半は前期に所属するものであり、他の時期を遙かに上回る遺跡分布の状況を示しているが、上記の遺跡例でも認められるようにその中でも諸磯a・c式期や十三菩提式期の遺構・遺跡は希薄となっている。

中・後期では、勝坂E阿玉台式期から堀之内式期

にかけての300軒以上の環状集落を検出した三原田遺跡(9)を代表的事例として上げることができるが、その主体を占めているのは加曾利E1～4式期の住居である。小室(12)・見立大久保遺跡(2)でも加曾利E式期の遺構が検出されており、当該期は遺跡分布の面でも前期の黒浜・諸磯b式期に次いで一つのピークを持つようである。ただ、赤城山麓の丘陵上に立地する他の遺跡の中には、三原田遺跡のような継続性のある集落は見当たらず、総体的には継続期間の短い小規模な遺跡が多い。また、前期と中期とでは遺跡の立地に差異があり、三原田遺跡に代表されるように中期はより低位な台地地域に立地する傾向が認められる。房谷戸遺跡(10)では阿玉台・勝坂式期の約700基もの土壙が検出され、かなり規模の大きい集落の可能性が窺える。国指定史跡の滝沢遺跡(5)では後期の遺構が検出されているが、概して後期の遺跡は少なく、晩期に至っては皆無となっている。

弥生時代 前・中期の遺跡は周辺に認められず、その実態は不明である。後期では樽式土器の標式遺跡である樽遺跡(11)や群馬用水分郷八崎遺跡(13)などをはじめとした遺跡が、小河川沿いの沖積地に面した標高350m以下の丘陵E台地上に立地している。その立地のあり方から見て、沖積地を利用した小規模な水田農耕が行われていたと思われるが、これらの遺跡の中には、次の古墳時代へと継続せずに単発的な立地で終わるものも認められる。

古墳時代 分郷八崎・群馬用水分郷八崎・小室遺跡などの弥生時代と複合する遺跡と房谷戸遺跡のような後期以降新たに立地する遺跡の二様が認められる。前者の遺跡では古墳時代前・中期の遺構が欠落して時間的に不連続な部分もあるが、発掘調査区域外での遺構存在の可能性等を考慮すれば、基本的には伝統的集落としての性格を持つものであろう。後者の遺跡は次の奈良・平安時代へと継続するものが多く、第一次新開集落としてとらえられるが、前者に比べてその数も飛躍的に増加している。前・中期の遺跡は少ないが、見立溜井遺跡や寺内遺跡(3)が

I. 発掘調査と遺跡の概要

ある。

墳墓は後期の群集墳を主体として、利根川の河岸段丘上や山麓端部に集中しているが、その多くは上記の伝統的集落に近接して立地している。

一方、当該期の生産址としては、宮田畦畔遺跡(16)において6世紀初頭の榛名山二ツ岳降下火山灰(F A)の直下より、1区画が約1.5×2.5mのいわゆる「ミニ水田」と呼ばれる小区画水田が検出されている。

奈良・平安時代 古墳時代に見られた伝統的集落と第一次新開集落とをベースにして、遺跡規模が拡大する傾向にあるが、当時代に入って新たに立地する第二次新開集落が認められる。中畦遺跡や羽場遺跡(17)も第二次新開集落と考えられる。こうした集落は標高350m以上の沖積地沿いにも立地しており、水田址そのものは未検出であるが、南麓と同様に小規模な谷地の水田農耕地化が執拗なままでに行われていたことを物語っている。



第3図 各時代の遺跡分布

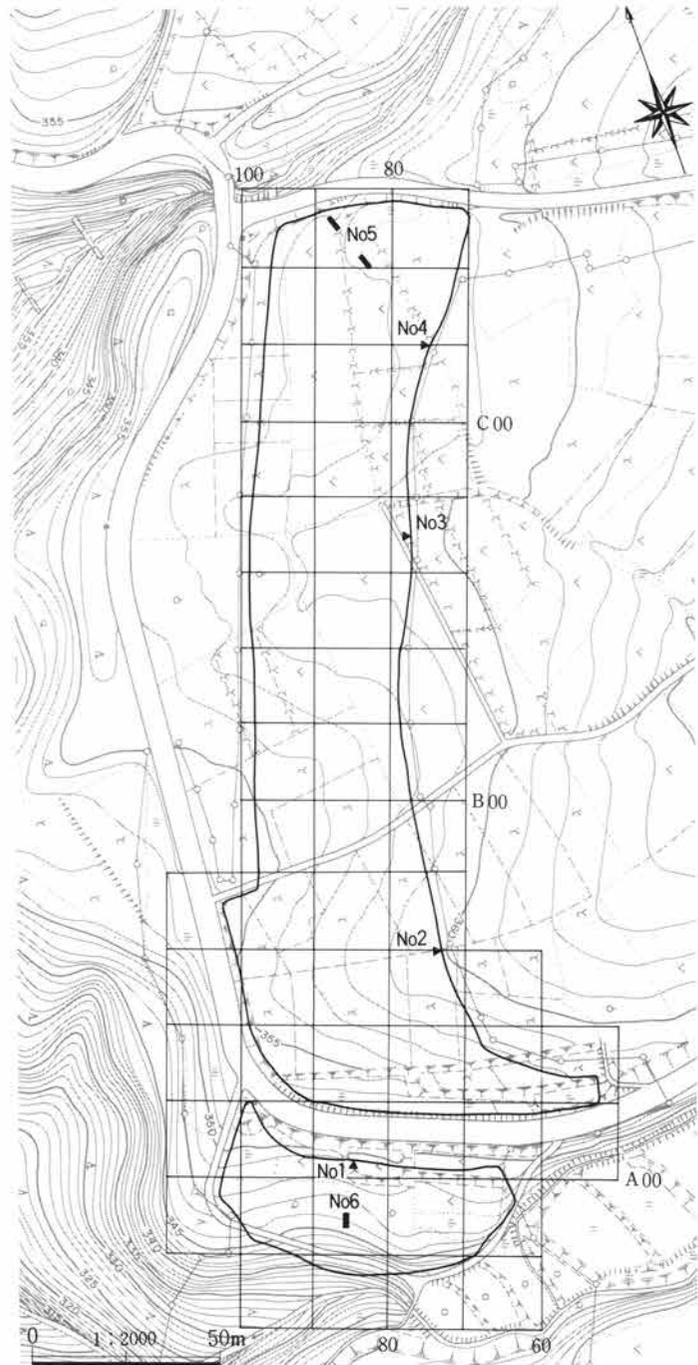
4. 調査の方法

1981(昭和56)年度に実施された試掘調査によって①表土下に6世紀中葉の榛名山二ツ岳降下軽石(F P)が約1mの層厚で堆積している②F P上面から掘り込まれている遺構やその直下に埋もれた遺構は存在しない③F Pの下位の黒色土中に縄文時代の遺物包含層が存在することや上部ロームを掘り込む当該期の遺構の存在等が確認されていた。そこで、調査面積約7,000m²の第1次調査を実施するにあたり、無遺物包含層である表土からF Pまでの約1.5mに及ぶ土層を大型掘削重機(バックホー)によって除去し、縄文時代の遺物包含層の検出を行うことにした。重機による排土後、F P下位の黒色土(V)層を人力によって掘り下げていく過程で、縄文時代の遺物包含層は更に下位の黒褐色土(VI)層中にあることが判明し、この黒褐色土上面までを再度重機により掘削・排土した。次に遺物を包含する黒褐色土上面に2×2mグリッドを全調査区域に設定し、南北を50グリッドを単位としてA・B・C区の調査区に分割した。約30cmの層厚をもつ黒褐色土を人力によって掘り下げた結果、北端のB・C区と南端のA区の約5,000m²の範囲より、縄文時代前期を中心とした遺物と竪穴住居11軒・土壙約60基を検出した。

一方、当初遺跡として認定されていなかった村道横野46号線の南側約2,000m²については、地表面の地形的な観察から遺跡の存在が予想され、試掘トレンチを入れた。その結果、F Pを掘り込んだ炭焼窯・土壙各1基とF P下位の黒色土(V)層中に竪穴住居5軒が存在することが確認されたため、土壙の周辺を除いた表土からF Pまでを重機で排土し、それ以下を人力により調査することにした。グリッドの設定は、A～C

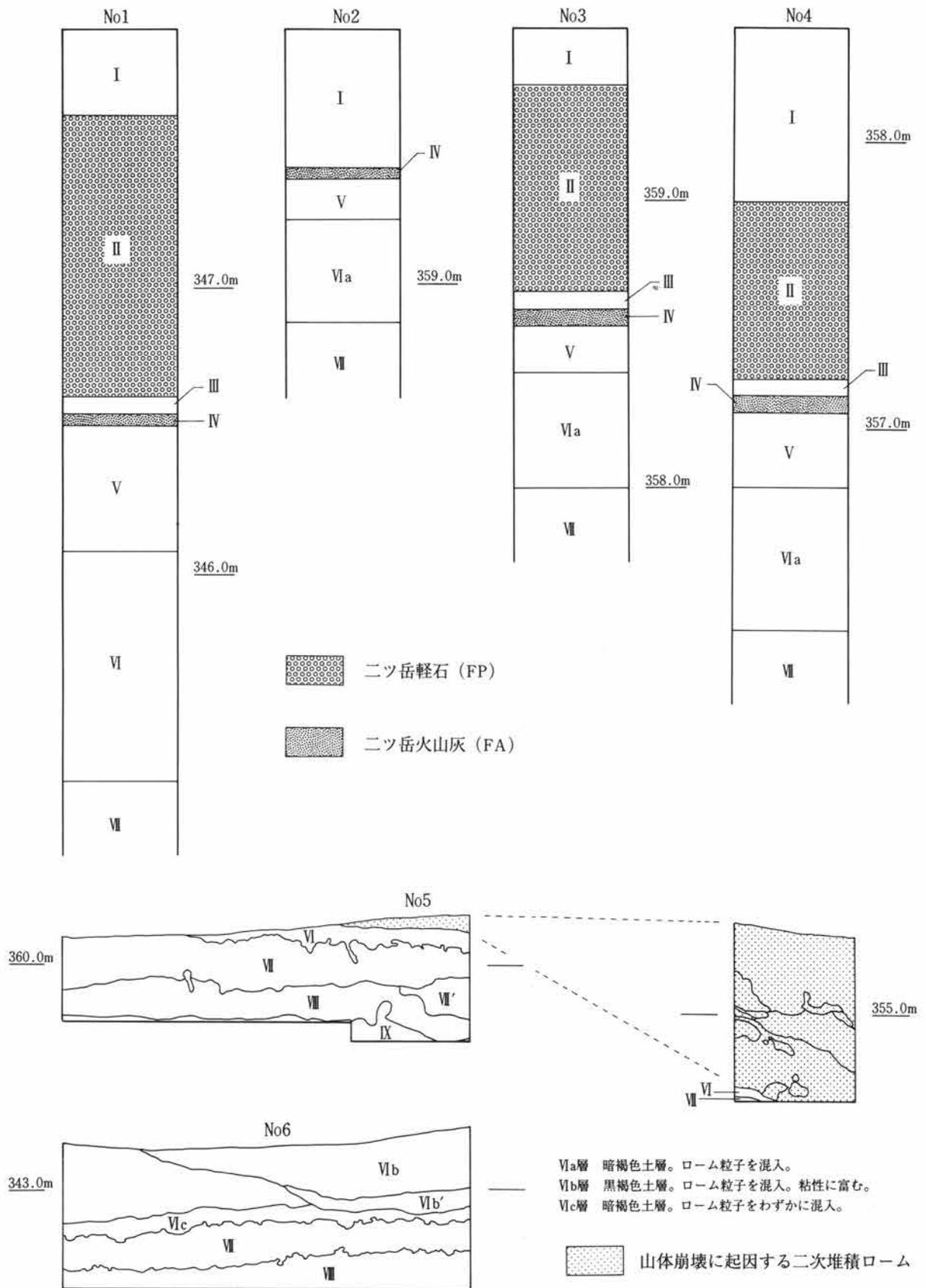
区と同様2×2mグリッドを用い、先述の調査区との重ね合いからZ区と呼称した。Z区の遺構は古墳時代中期の竪穴住居5軒と奈良時代の土壙1基、近世以降の炭焼窯1基の他に、これらの遺構の下位から縄文時代の前期を中心とした遺物包含層と竪穴住居3軒、土壙14基、集石17基の検出をみた。

第2次調査はB・C区の残り6,000m²を対象にして、第1次調査と同様の方法で実施された。



第4図 発掘調査の範囲と柱状土層図の作成地点

I. 発掘調査と遺跡の概要



第5図 遺跡の基本柱状土層

5. 遺跡の基本層序

本遺跡は、赤城山西麓に広がる丘陵性台地上に位置する。各地点(第5図、No1～6)ともほぼ同様な堆積状態を示すが、調査区内には山体の原形面を反映する凹凸が認められるほかZ区には狭小な平坦面が認められ、複雑な地形観を呈している。この丘陵性台地の南北を開析する小河川に沿ったZ区およびC区には、山体崩壊に起因する泥流堆積(第5図、No5・6)が認められ、Z区で1.8m・C区では0.9mの堆積を確認している。堆積時期については明らかではないが、Z区では縄文時代前期を主体とする土器が分布すること、C区では上層に縄文時代中・後期を主体とする土器が分布すること、Z・C区ともローム層直上のVIc層(暗褐色土層)の堆積が認められることから縄文時代早期を前後する時期に山体の崩壊期を想定することができる。赤城山西麓では同様な状況が各所に認められるが、赤城山南麓でも前橋市の東部や粕川村に同様な状況が認められる。前橋市の東部の場合では縄文時代前期後葉以降中期前葉以前の形成として、粕川村の場合では縄文時代中・後期の形成としてそれぞれ把えられている。前者の場合では流路変更を伴い2m前後の泥流により平坦な台地地形を、後者の場合では小規模ながら扇状地地形をそれぞれ形成しており、動・植物相をはじめとする環境に与える影響は大きく、遺跡の動態に密接にかかわるものと推察される。このような現象は一過性の風水害に起因するというより全国的規模の気候の変動に伴う現象のひとつとして把えるべきものであり、詳細なデータの集積を行う必要がある。遺跡の基本層序は以下のように把えられる。

I層 表土層。現在の畠地耕作土で、下層の軽石を多量に鋤込んでいる。A・C区では50～60cm、B区では20cm前後みられる。

II層 二ツ岳軽石層(FP)。近年の考古学的な成果により、6世紀中葉に爆発・降下した軽石層とされている。遺跡がFPの噴出方向に位置するため、各

地点とも良好に認められる。Z区では100cm、B区では70cm、C区では60cmの厚さで堆積するが、A区の東側は開墾により削平され、確認されなかった。

III層 黒色土層。混入物の少ない腐食土で、粘性に乏しい。各地点とも5cm前後の厚さで堆積する。

IV層 二ツ岳火山灰層(FA)。6世紀初頭に比定される火山灰層であり、各地点とも5cm前後の厚さで堆積している。

V層 ローム粒子を少量混入する黒褐色土で、粘性に乏しい。各地点とも20cm以上の厚さで堆積する。Z区では約40cmの厚さで堆積し、その上半は古墳時代中期の遺物包含層である。

VI層 ローム粒子を混入する暗褐色土層で、粘性に乏しい。各地点とも40cmの厚さで堆積するが、Z区では80cmの厚さで堆積し、a～c層に分層される。VIa層はローム粒子を多量に混入する暗褐色土で粘性に乏しい。VIb層はローム粒子を混入する黒褐色土。VIc層はローム粒子を混入する暗褐色土で粘性に乏しい。VIa層より暗い色調を呈す。VI層からは縄文時代前期を主体に創草期から後期の土器が出土しており、これらはVIb～c層にかけて混在した状態で出土しているが、遺物は前期土器片がb層を主体に、早期土器片がb層下位からc層上位にかけて、中・後期土器片がa層下位からb層上位にかけてそれぞれ出土する傾向が認められる。

VII層 黄褐色ローム層。白色パミスを多く混入する。VII層以下は良好な状態にローム層の堆積が認められ、西麓における標準的なローム層の堆積を示す。調査では、ローム層下の約5mまでを確認した。

なお、No5・6地点ではトレンチを設定し、泥流堆積の状態を確認している。トレンチでの確認のため泥流堆積物の層厚などその全容については明らかではないが、泥流堆積物はロームを主体に構成される。浅間白糸軽石(A s - S P)および浅間板鼻褐色軽石(A s - B P)をブロック状に混入するが、輝石安山岩等の礫の混入は認められなかった。著しく不整合な状態は認められないが、VIc層の堆積(5～10cm)は薄く、流出している可能性が高い。

II 縄文時代の遺構と遺物

1. 検出された遺構の概要

発掘調査によって検出された縄文時代の遺構は、
竪穴住居14軒、集石18基、土壙123基などである。

各遺構の検出は、Ⅵ層の遺物包含層を人力により掘り下げてゆく過程で適宜行ったが、最終的にはⅧ層のローム上面まで掘り下げて確認したものもある。地表面から確認面までの深さは各地点によって異なるが、およそ1~2.5mであり、調査対象区域のうち南側のZ調査区では遺物包含層も厚く最も深くなる。各遺構の帰属時期は、14軒竪穴住居のうち、2軒を除いていずれも前期の二ツ木式から諸磯c式にかけての土器を中心とした遺物を伴出しており、その大半が当該期に比定される。集石土壙はそのほとんどが明確な伴出遺物をもたないために時期的に確定できないが、集石の構築面と同一の層位やその周辺より早期末の条痕文土器や前期の羽状縄文土器などが検出されており、それらのいずれかの時期に該当すると思われる。123基の土壙のうち、土器などの遺物を伴出するものは35基にとどまり、他の88基については遺物を伴出する土壙の埋没土との類似性から縄文時代に比定されることは確実であるが、詳細な時期を確定できない。遺物を伴出している土壙の時期別内訳は、前期の二ツ木式から諸磯c式期にかけての土壙32基、中期の勝坂・阿玉台式から加曾利E1式期にかけてのもの3基である。

調査区域内における各遺構の分布状況をみると南側の谷地に近接した丘陵部斜面に集中する傾向が認められるが、時期別にみると竪穴住居や集石をはじめ前期の遺物を伴出する土壙は南側に集中するものの、中期の土壙は南側よりもむしろ馬の背状丘陵の中央部から北側の谷地に近接する丘陵斜面にかけて分布する傾向にある。調査対象区域が遺跡中心部からややはずれた丘陵突端部に限定されているため、

各時期における集落形態やその構造等については明確にし得ないが、おおよそ竪穴住居の周辺に土壙や集石などが近接して存在する状況が認められる。遺構確認面には、上記遺構の他に、Ⅴ~Ⅵ層にかけての黒色土とⅧ層のロームの層位的関係が逆転したいわゆる「風倒木痕」が30箇所以上検出され、これらの遺構と重複して、攪乱を生じさせている。風倒木痕はその逆転層のあり方からみて、いずれも東方向から西方向へと倒木しており、台風などの季節的な突風によって形成されたものと思われる。風倒木痕の形成された時期については確定できないが、前期の住居等の重複関係からみて、縄文時代以降のものも多く存在するものと思われる。

2. 竪穴住居

14軒の竪穴住居は、南側の谷地に面した丘陵斜面やテラス状の緩斜面に集中し、ちょうどA・Z調査区の範囲内におさまっている。各住居の掘り込み面は確認できなかったが、包含層中の遺物出土状況などからみて、Ⅵ層中に存在すると考えられる。

先述したように、縄文時代遺構は風倒木と重複しているものがあり、特に住居については3軒(2・4・5号住居)に倒木による攪乱が認められる。また、こうした攪乱による遺構の破壊とともに、竪穴住居の構築が北から南方向へ約15度の勾配をもつ丘陵部の急斜面をほぼ水平に掘り込んで床面としているために、北半部の壁面や床面はローム面まで到達しているが、斜面下方の南側の壁面や床面はⅥ層の黒褐色土層内に存在しており、かつ埋没土とⅥ層とが類似しているためにこの南半部の壁、床面については精査にもかかわらず検出できなかったもの(4・5・8・11号住居)もある。このように遺存状態が悪く、その形状や規模等の不明なものも存在する

2. 竪穴住居

が、これらを除いた他の住居でみると外形は長方形や隅丸方形を基調とするものが多い。長方形を呈するものは1・2・6・7・9・10・12号住居であり、残存している北半部の形状等から判断して5・8・11号住居も同形を呈すると思われる。隅丸方形を呈するのは3・14号住居であり、4・13号住居もこれらと同形となろう。

住居内の施設は、柱穴・炉・周溝等が認められるが、これらの施設は柱穴を除いて各住居に共通して存在するものでない。炉は1・2・4・10～12号住居などの風倒木や他遺構との重複関係によって床面が攪乱をうけているものを除いた総ての住居に検出されている。炉の形態は大きく分けて3種類あり、浅い掘り込み炉の周辺にコ字状に石組を施したもの(3・5～7号住)、1辺に石を置くもの(9・13号住)、全く石を施さない地床炉に近い掘り込み炉(8・14号住)等がみられる。また、その位置は、住居中央部よりもやや奥壁側に寄る傾向が認められる。周壁際に周溝をもつ住居は2・8号住居のみであり、他の住居には認められない。柱穴は各住居に認められるが、床面が攪乱されているものも多く規則的な配列を確認できるものは少ない。このうち、周壁に沿って多数の支柱穴がめぐる壁柱穴をもつものに2号住がある。また、6本の柱穴が住居の長軸に並行して1列3本で2列に並ぶものに6・7・9号住居があり、全柱穴は検出されていないが8・11号住居もこのタイプと思われる。3号住居は壁柱穴ではないが、周壁に近接して8本の柱穴がめぐっている。14号住居は4本柱穴を基本としている。住居の外形が長梯形状を呈するものは、コ字状の石組をもつ炉や6本柱穴をもつ傾向が認められるようである。

各住居の時期については、その大半が伴出土器の型式からみて時間的に相前後するものが混在し、かつ床面に密着して出土する遺物が少ないことなどから確定し難いが、およそ二ツ木式～関山式期に比定されるものが7軒、黒浜式期が2軒、諸磯a式期が3軒、時期不明が2軒である。

発掘調査範囲が狭小なこともあり、各時期別の住

居の配置に規則性を認めることはできないが、住居の長軸方向が等高線の走行方向に対して直交するように構築されているものが多い点は注目される。

1 号 住 居

位 置 80A24 **写 真** P L 2・15
形 状 長軸を南北にもち、四隅が直角に近い方形を呈する。長辺6.3×短辺5.5mを測る。四辺の壁はほぼ直線的にめぐり、壁面の勾配は60～80度である。
面 積 30.24㎡ **方 位** N-81°-W
床 面 傾斜面のロームを北東で74cm、南西で42cm掘り込んでS P層を床面としている。ほぼ平坦な床面であるが、北側よりも南側が約20cmほど低く、わずかに傾斜している。特に堅い面はないが、全体的に踏み固められている。

埋没土 第1次～第3次埋没土はロームブロックやS Pを多量に含んだ暗褐色土および褐色土であり、より上層では黒褐色土がレンズ状に堆積している。

炉 焼土等も含め、何等その痕跡も検出されなかった。

柱 穴 不規則な配列ではあるが、4本検出されている。P₁～P₂～P₄の各柱穴の心々間を結んだ距離はP₁～P₂:3.6m、P₂～P₄:4.15m、P₄～P₁:3.75mである。また各柱の規模(径×深さ)は、P₁:20×23cm、P₂:48×21cm、P₃:36×23cm、P₄:38×28cmである。

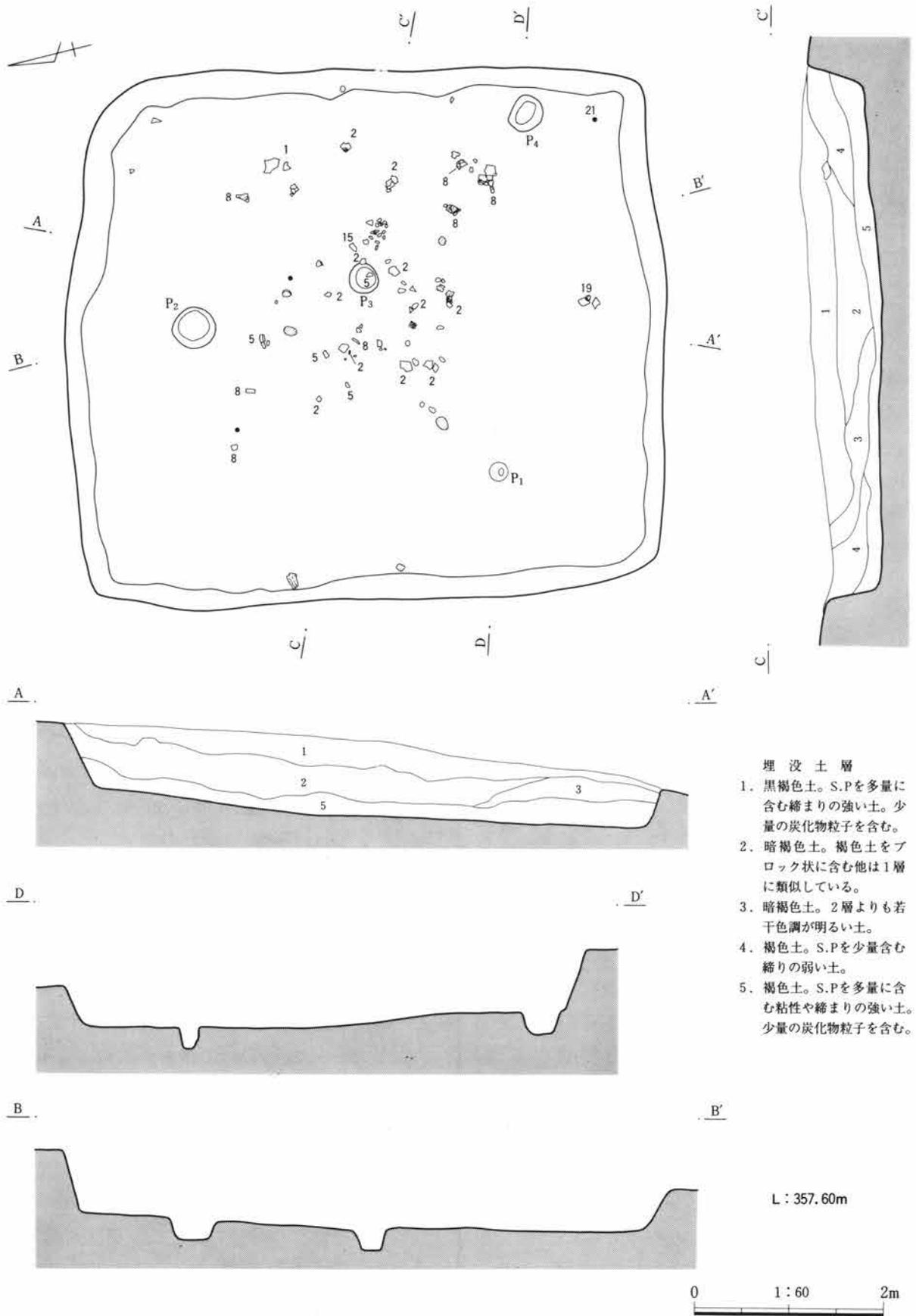
周 溝 検出されなかった。

遺 物 黒浜式を中心とする多量の土器片が埋没土の2層中より集中して出土しているが、床面に密着して出土したものはほとんどない。石器は東南隅の床面より剥片石器(21)が1点出土しているが、他は2層中より出土している。(遺物観察表:73頁)

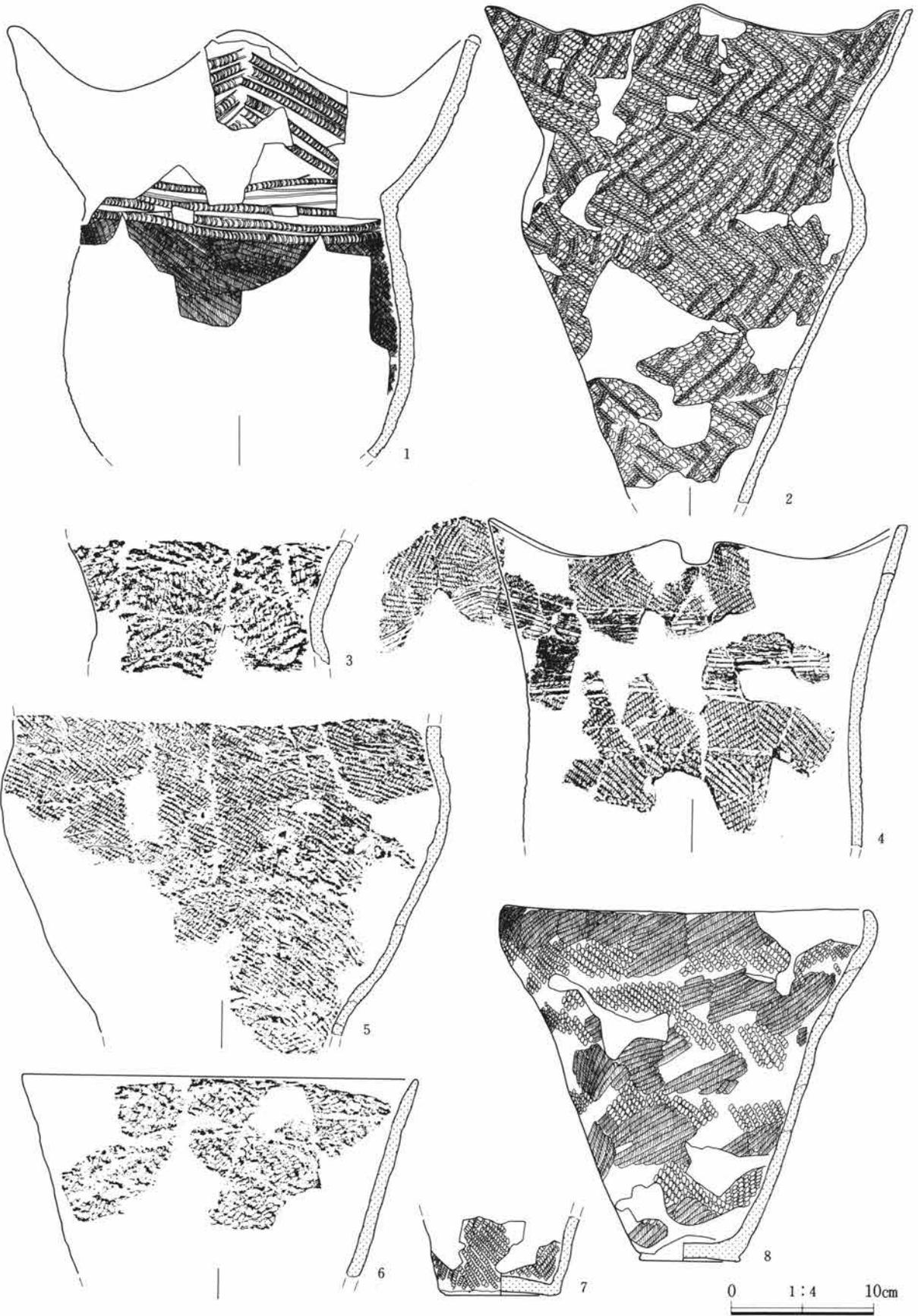
重 複 住居の南壁側で10号住居と重複するが、本住居が10号住居を切って掘り込まれている。

備 考 床面から出土した遺物が無いために住居の帰属時期については確定できないが、埋没土中の土器片が黒浜式に比定されることから、当該期に比定される可能性が強い。

II. 縄文時代の遺構と遺物

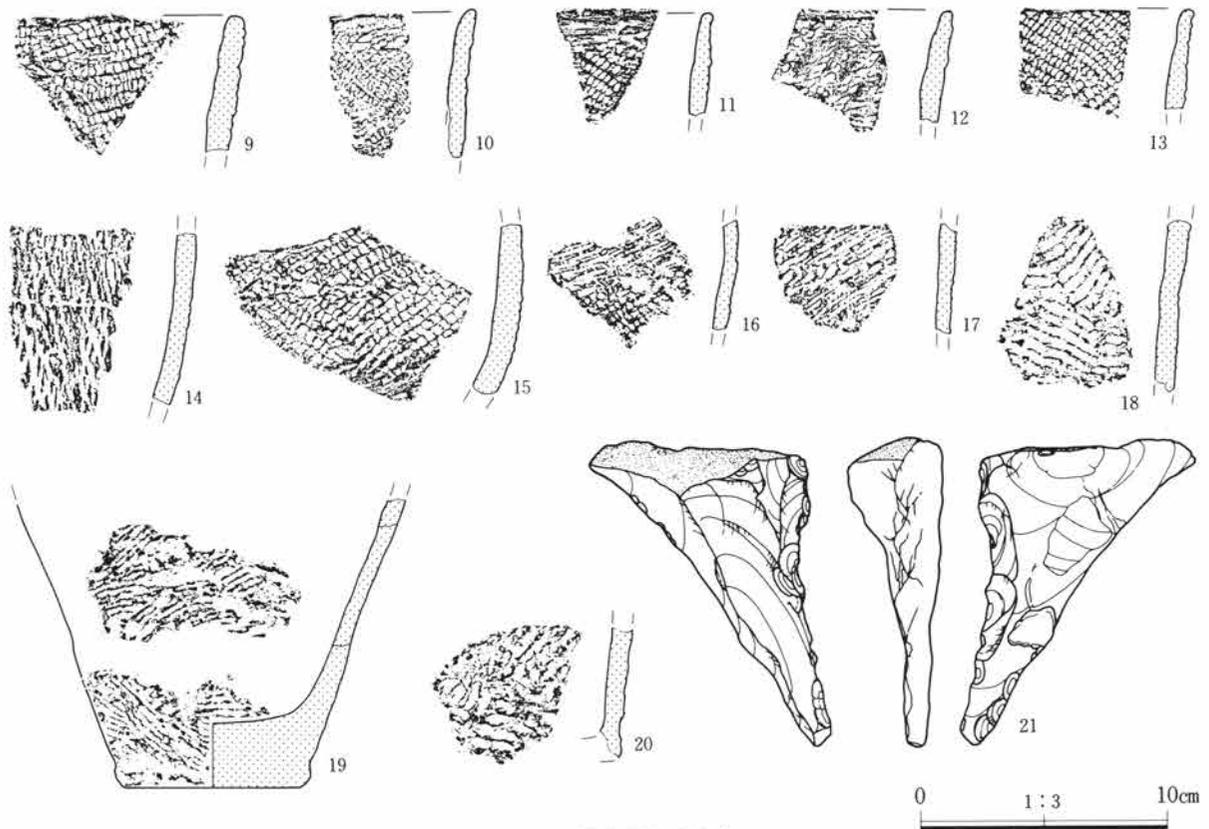


第6図 1号住居



第7图 1号住居出土遺物

II. 縄文時代の遺構と遺物



第8図 1号住居出土遺物

2号住居

位置 92A00 写真 PL 3・15・16

形状 長軸方向を南北にもったいわゆる「長梯形状」を呈し、長辺が6.4mで、短辺が4.4mと4.8mを測る。四隅はやや丸味をもち、四辺の壁は若干内側に弧を描くように掘り込まれており、壁面の勾配は約70度である。住居の長軸と等高線の走行がほぼ平行するような状態で掘り込まれている。

面積 22.96㎡ **方位** N-55°-W

床面 ロームを38~76cm掘り込んで床面としている。叩き床ほどの堅い面ではないが、全体的に良く踏み固められている。凹凸が少なく、周壁際に比べて中央部が4~10cmほど低い。

埋没土 住居の西壁から中央部にかけて風倒木による土壌攪乱が存在するため、不明瞭な部分もあるが、壁際の第1次埋没土はロームブロックを含んだ黄褐色土であり、土層には黒褐色土が堆積している。

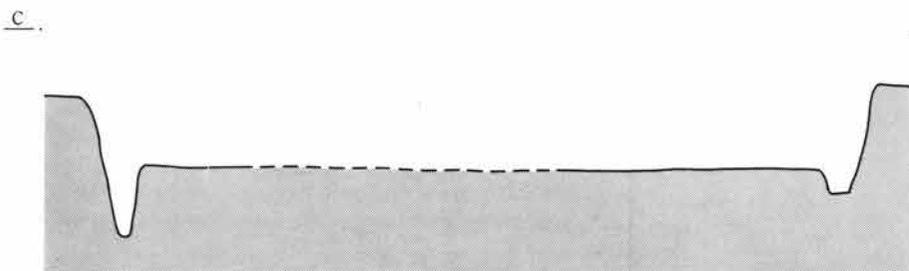
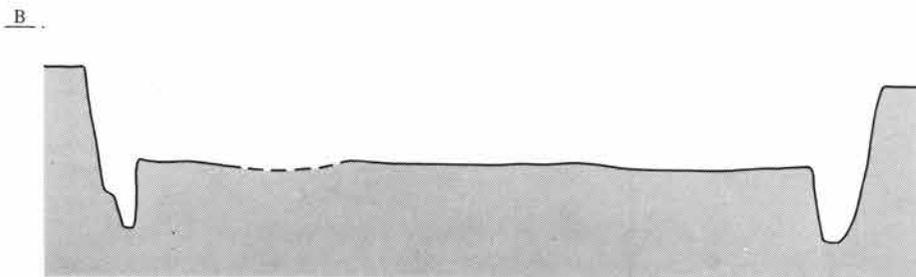
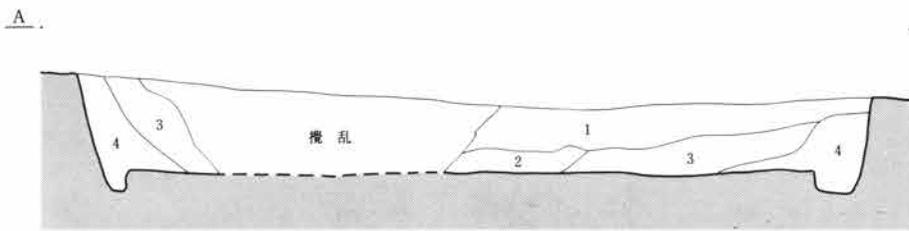
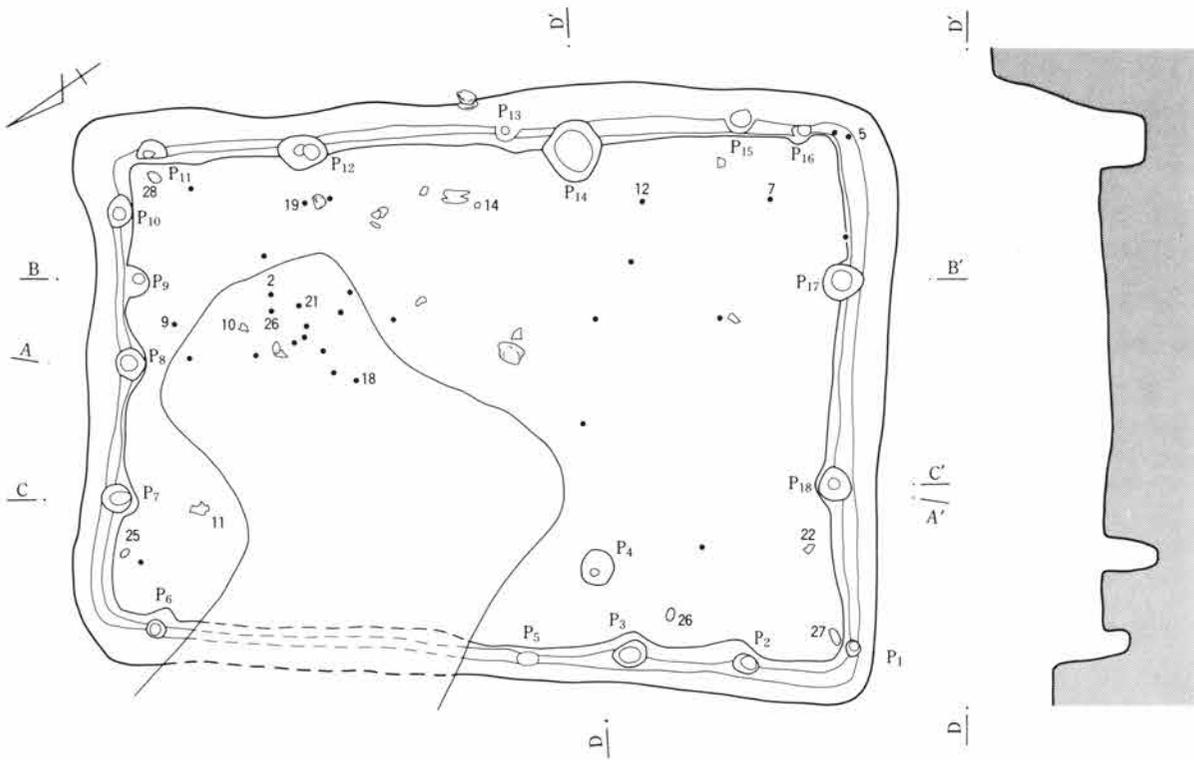
炉 風倒木の攪乱範囲内に存在した可能性が強く、それ以外の範囲からは検出されなかった。

柱穴 壁柱穴であり、周壁に沿って18本検出された。P₇・P₉とP₁₇・P₁₈は、その位置がシンメトリーの関係にあり、周溝内に位置する支柱穴的な性格をもつと考えられる。各柱穴の心々間の距離は、P₇~P₉:1.7m、P₁₂~P₁₄:2.1m、P₁₇~P₁₈:1.6mを測る。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:12×37cm、P₂:21×39cm、P₃:26×45cm、P₄:29×42cm、P₅:18×45cm、P₆:15×30cm、P₇:24×34cm、P₈:26×26cm、P₉:23×51cm、P₁₀:27×26cm、P₁₁:24×26cm、P₁₂:37×32cm、P₁₃:21×46cm、P₁₄:50×35cm、P₁₅:25×26cm、P₁₆:19×27cm、P₁₇:30×58cm、P₁₈:28×54cmである。

周溝 壁に沿って全周している。規模は幅8~20cm、深さ14~19cmである。

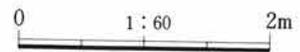
遺物 床面に密着して出土した遺物は、少量の土器片と磨石を主体とする石器である。主として1層の埋没土中より出土した遺物が多い。土器はその総てが破片であるが、関山式を主体としている。石器は磨石4点(No.25~28)が床面より出土した他は総て埋没土中より出土した。(遺物観察表:73頁)

2. 竪穴住居



- 埋没土層
1. 黒褐色土。多量のS.Pを含む締まりのある土。本層中に多量の遺物が含まれている。
 2. 暗褐色土。多量のローム粒子、S.Pを含む締まりある土。
 3. 黒色土。1層に類するがS.Pや炭化物粒子を多量に含む。
 4. 黄褐色土。褐色土とロームとの混土層。多量のS.P・炭化物粒子を含む締まりのある土。

L : 355.60m



第9図 2号住居

II. 縄文時代の遺構と遺物

3号住居

位置 88A28 写真 PL3

形状 南北方向に長軸をもった隅丸方形を呈し、長辺 3.1×短辺2.7mを測る。四辺の壁面は、外側に弧を描くように掘り込まれており、その勾配は約70度である。住居の長軸と地形の等高線の走行がほぼ平行するような状態に掘り込まれている。

面積 5.73㎡ 方位 N-58°-W

床面 ローム上面から25~45cm掘り込んでⅧ層(SP)を床面としている。斜面を掘り込んでいるため、東壁に比べて西壁が20cm低い。わずかな凹凸をもち、比高差約14cmで東側から西側へと若干傾斜している。全体的に良く踏み固められている。

埋没土 全体的な埋没土の体積状態は、傾斜面上方の東側より西側に向かって流入したようなあり方を示す。周壁際の第1次埋没土は、ロームブロックやSPを多量に含む褐色土である。

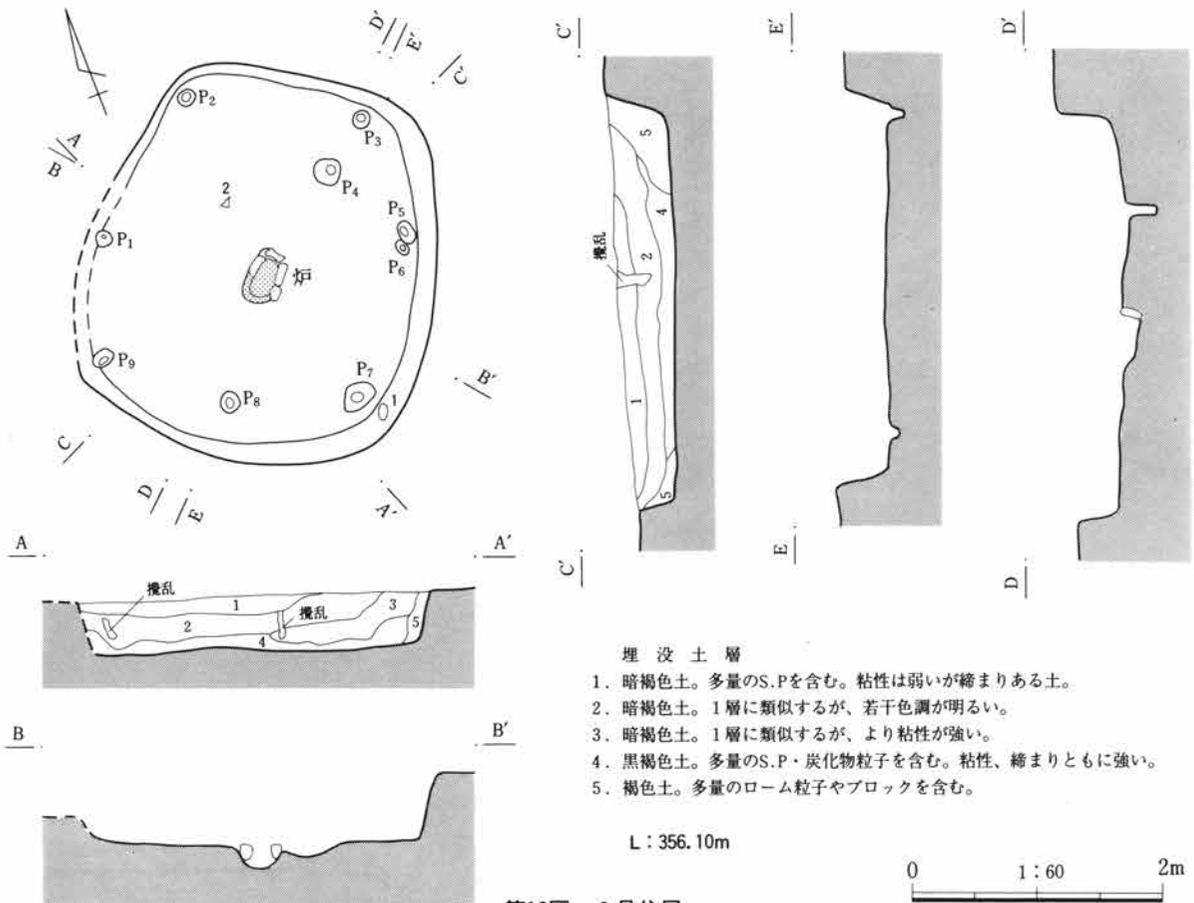
炉 住居のほぼ中央部に存在する。輝石安山岩

の垂角礫4個を28×13cmのコ字状に配した石組炉である。炉の深さは10cmで、内部には多量の炭化物とSPを含んだ黒色土が堆積しているが、焼土はほとんど検出されていない。また、炉石にも火熱による割れは認められない。炉の掘り方は、一辺45cmの隅丸方形を呈し、深さは10cmである。

柱穴 ほぼ周壁に沿って9本が検出されているが、基本となるのはP₄・P₆を除いた7本と思われる。各柱穴の心々間の距離は、P₁~P₂:1.25m、P₂~P₃:1.40m、P₃~P₅:1.45m、P₅~P₇:1.35m、P₇~P₈:1.05m、P₈~P₉:1.05m、P₉~P₁:0.95mである。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:12×13cm、P₂:15×9cm、P₃:13×13cm、P₄:22×23cm、P₅:18×10cm、P₆:12×7cm、P₇:19×18cm、P₈:17×7cm、P₉:17×17cmである。

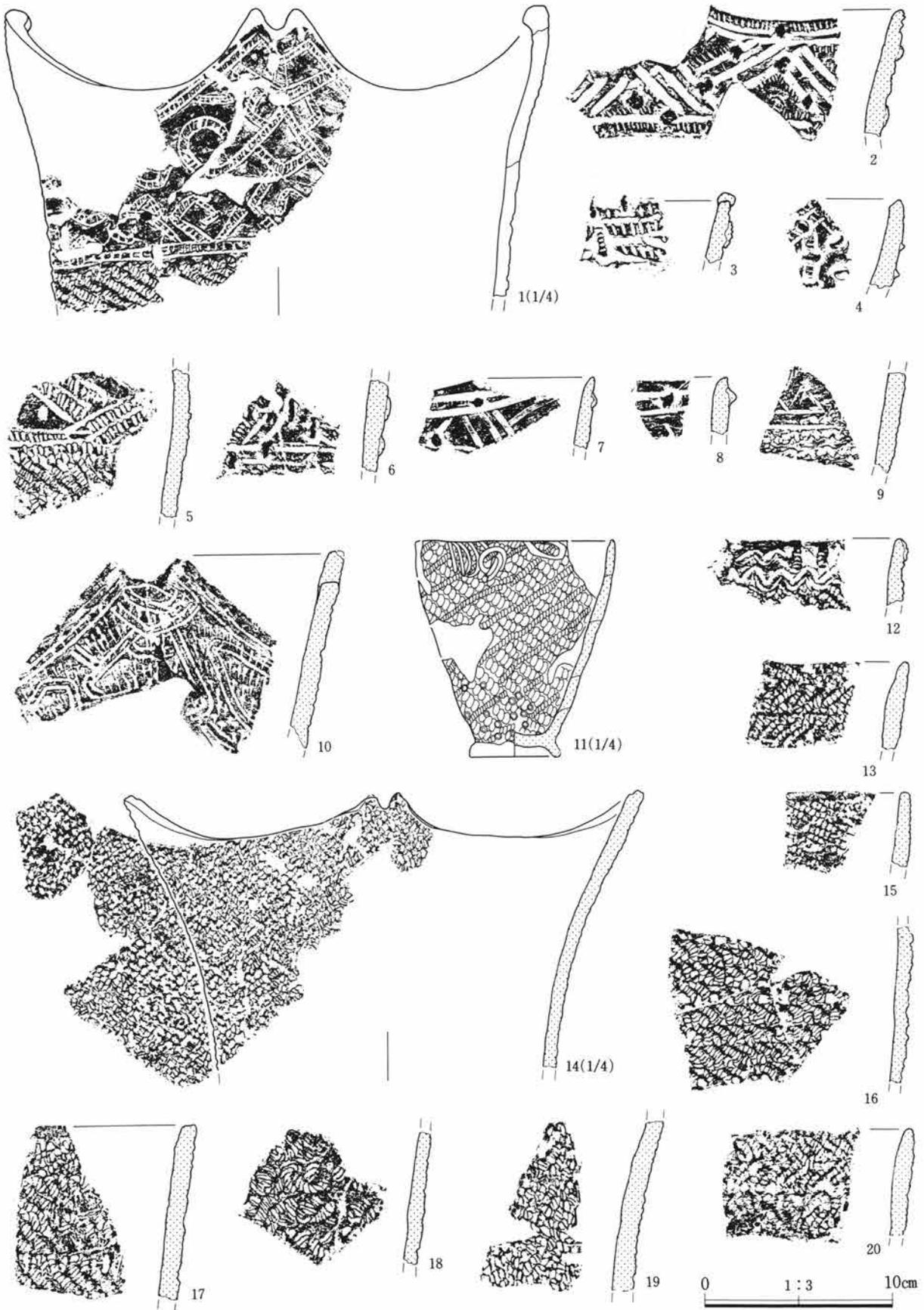
遺物 床面に密着して、削器(No.2)と凹石(No.1)が各1点、アワブキの炭化材が1点出土している。

(遺物観察表:74頁)



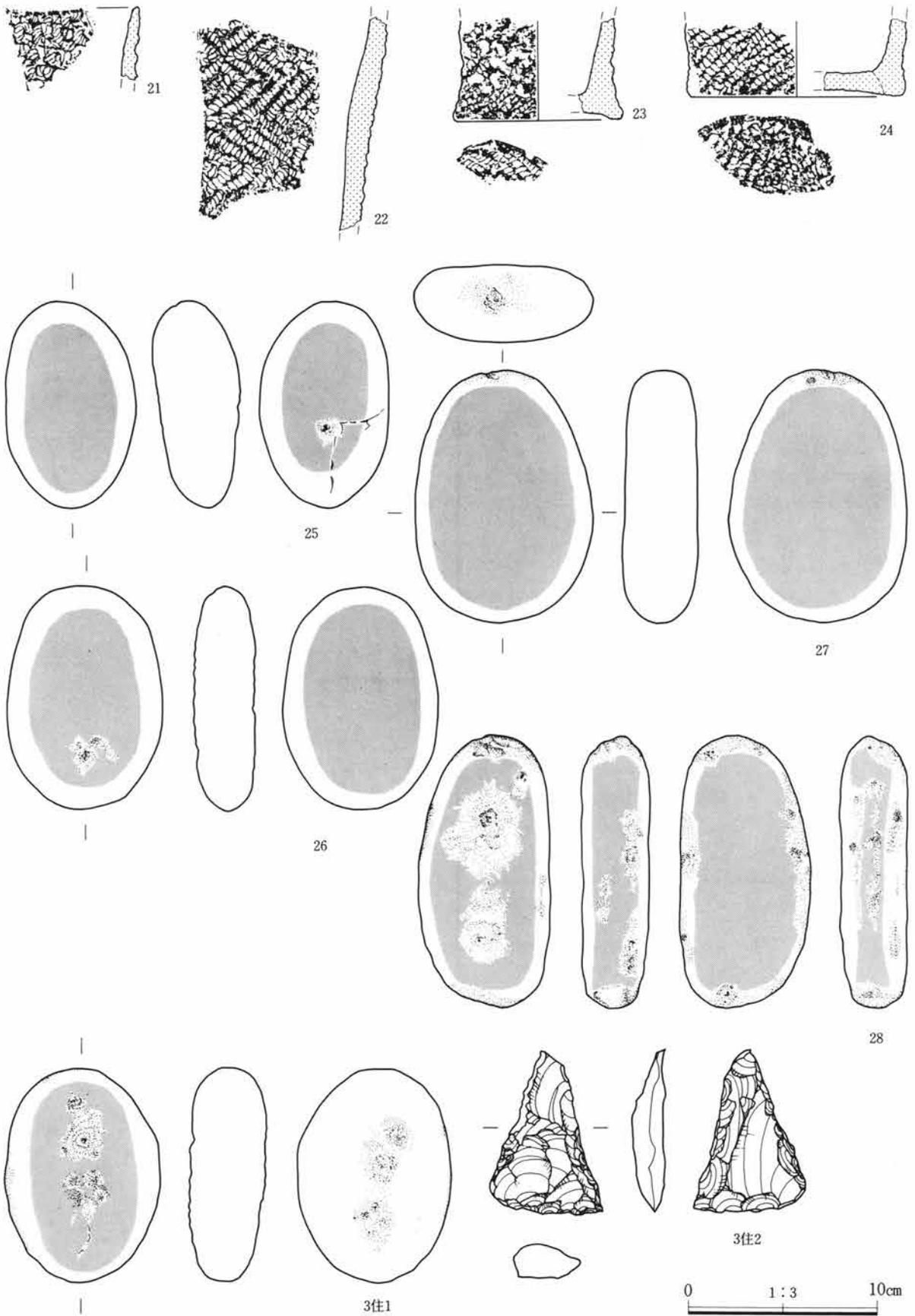
第10図 3号住居

2. 竖穴住居



第11图 2号住居出土遺物

II. 縄文時代の遺構と遺物



第12図 2・3号住居出土遺物

2. 竪穴住居

4 号 住 居

位 置 76A21

写 真 PL4・16

形 状 長軸を南北方向にもつ隅丸方形を呈する。短辺3.3mで、四辺の壁は東辺を除いてほぼ直線的に掘り込まれている。傾斜面を掘り込んでいるために、南側の壁の立ち上がりが不明瞭である。北壁面の勾配は、約80度である。

面 積 11.42m²

方 位 N-70°-W

床 面 ロームを最大28cm掘り込んで床面としている。北東隅から南壁の一部にかけての攪乱されている箇所を除き、良く踏み固められている。ほぼ平坦であるが、北壁側から南壁側に向かって比高約20cmで緩やかに傾斜している。

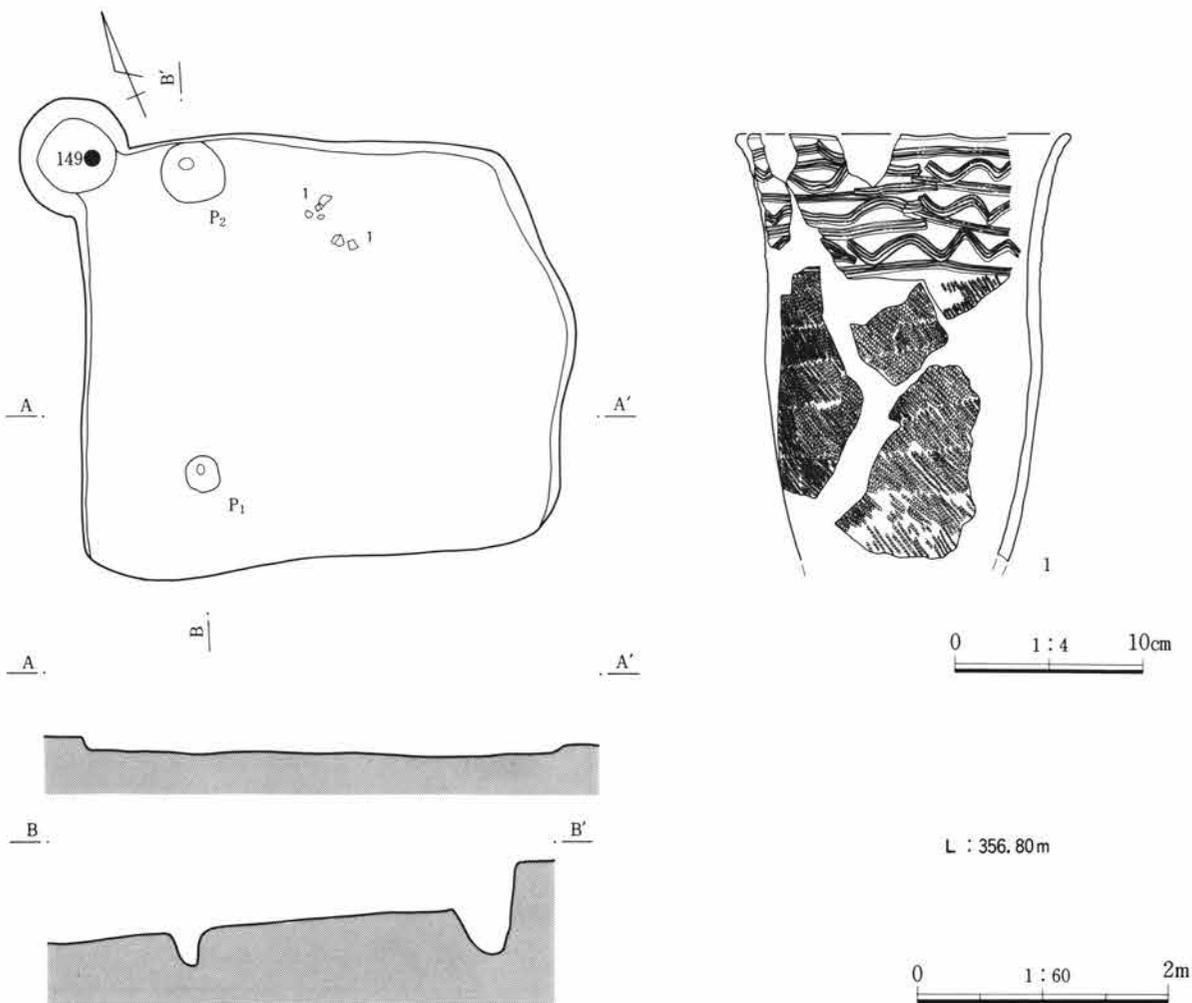
埋没土 上層は風倒木によると思われる攪乱が存在し不明であるが、下層にはSPを多量に含んだ黒褐色土が堆積している。また、周壁際にはロームブロックを含んだ褐色土が堆積している。

炉 風倒木による床面の攪乱があり、検出されていない。

柱 穴 2本検出できたが、他は風倒木の攪乱によって検出できなかった。柱穴の心々間の距離は2.4mである。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:30×23cm、P₂:54×37cmである。

遺 物 埋没土の上層より、諸磯a式期の土器片が少量出土したのみである。(遺物観察表:74頁)

重 複 北西隅で21号土壙と重複するが、先後関係は不明である。



第13図 4号住居と出土遺物

II. 縄文時代の遺構と遺物

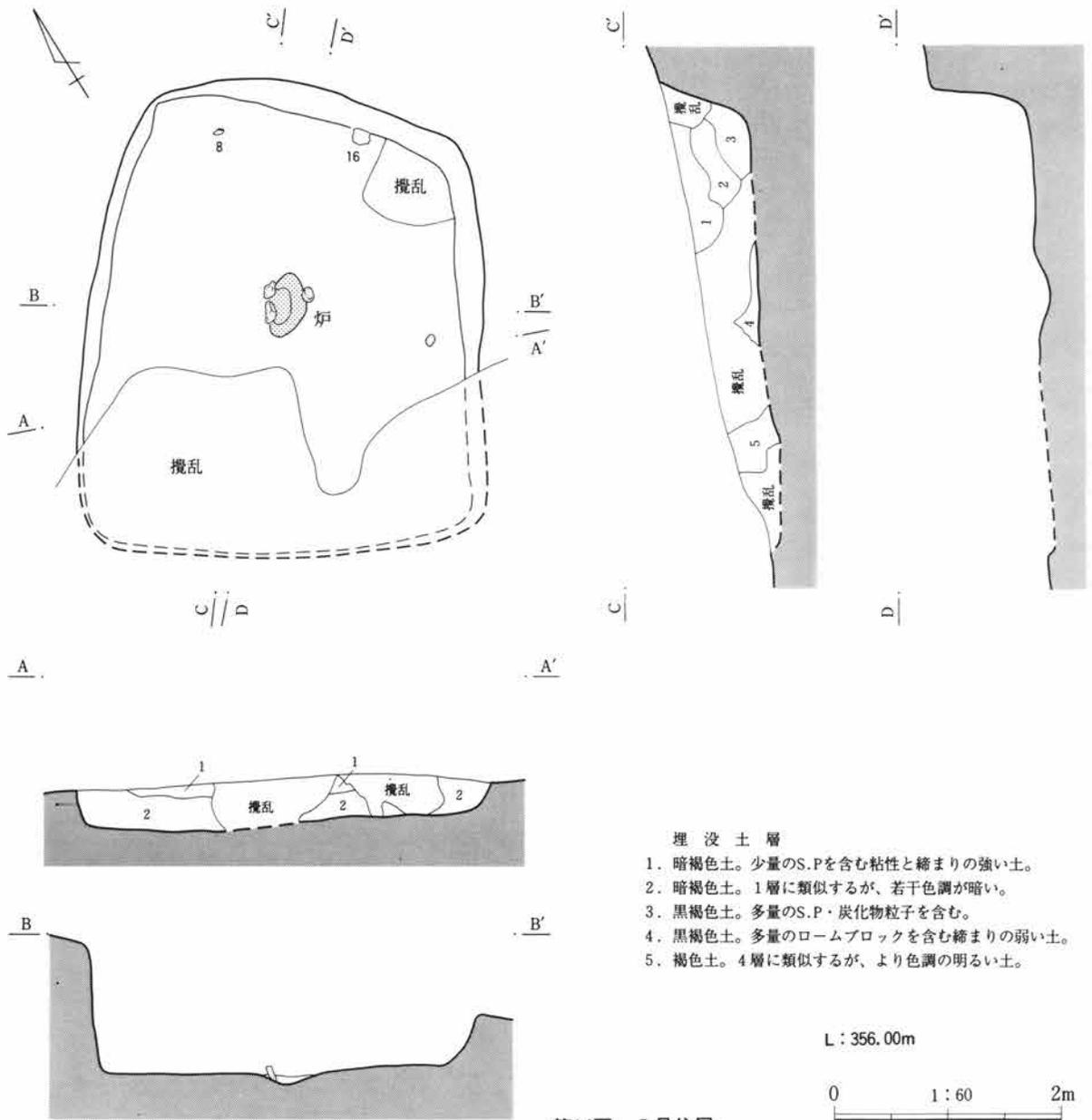
5号住居

位置 74A18 写真 PL5・16
 形状 長軸を南北にもった隅丸の台形状を呈する。各辺は外側へ弧状に張り出す。規模は長辺4.2と3.4×短辺3.6と3.0mである。壁面は約70度の勾配で立ち上がる。住居の長軸が地形の等高線の走行と直交するような状態で掘り込まれている。
 面積 11.32m²
 方位 N-57°-W
 床面 ロームの斜面を北壁側で最大82cm掘り込んで床面としているが、床面積の約三分の一が風倒木の

の攪乱を受けている。若干の凹凸がみられるものの、全体的に良く踏み固められ、南壁側から北壁側に向かって比高差25cmのわずかな傾斜が認められる。

埋没土 斜面上方の北壁方向からの埋没状態を示しており、自然埋没と思われる。

炉 住居中央部のやや北壁寄りに位置する。板状の輝石安山岩の垂角礫を西辺にのみ2石使用した石組み炉である。用石は立てて使用しており、炉の規模は長軸55×短軸25cm、深さ12cmである。炉内には多量の炭化物が認められるが、焼土は検出されていない。



第14図 5号住居

2. 竪穴住居

柱 穴 風倒木の攪乱によって検出できなかったが、壁際の床面の状態からみて、壁柱穴をもつ構造ではなかったと判断される。

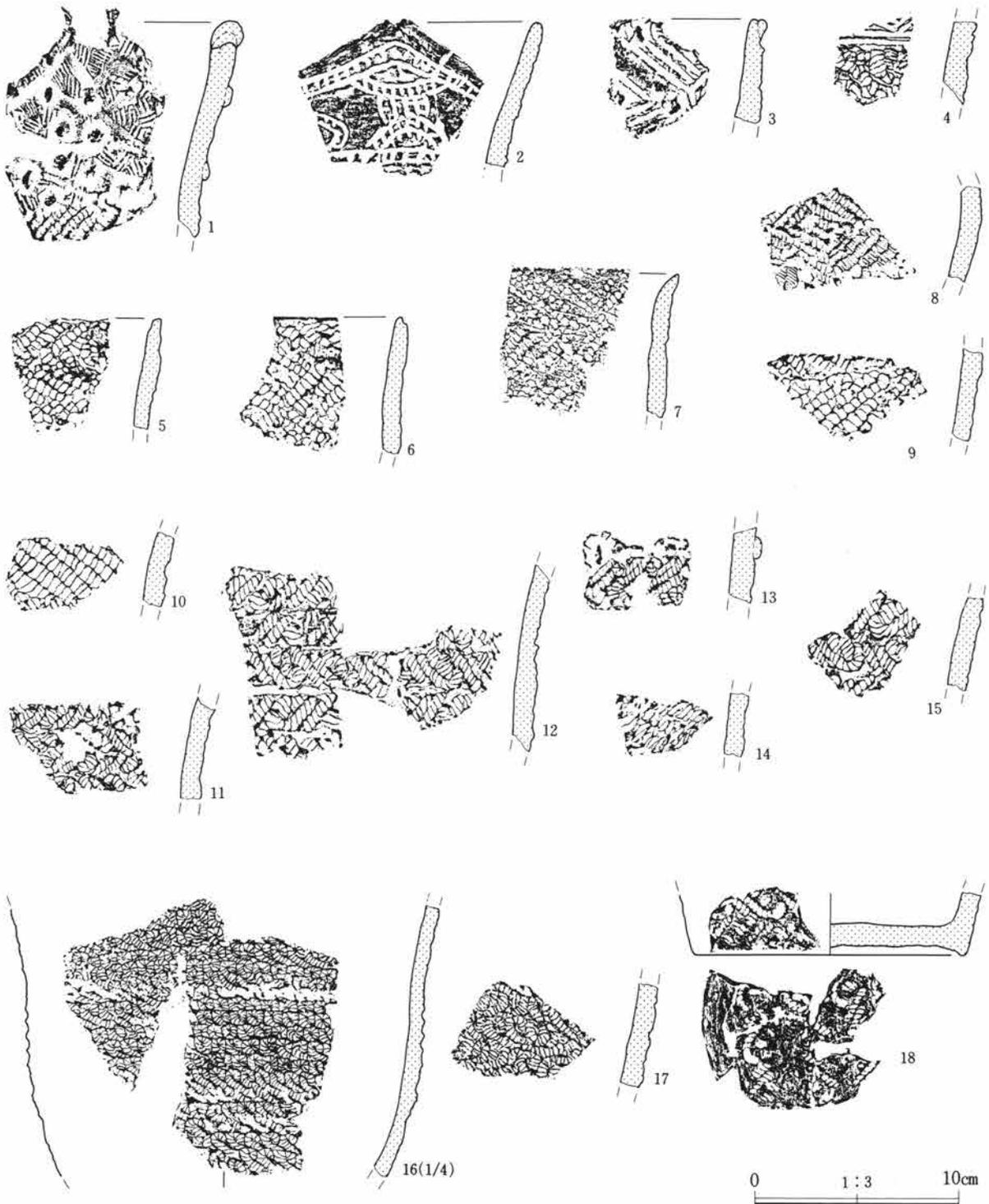
周 溝 検出されなかった。

遺 物 No.16の土器が北側の壁面に接して床面密

着で出土した他は、総て埋没土中から出土した。

(遺物観察表：74頁)

備 考 出土土器は床面直上のものを含めて関山Ⅰ式を主体としていることから、当該期に比定される可能性が高い。



第15図 5号住居出土遺物

II. 縄文時代の遺構と遺物

6号住居

位置 84A20 写真 PL16

形状 長軸を南北方向にもち、長辺4.3×短辺3.0mの隅丸方形を呈する。北辺を除いて各辺はほぼ直線的に掘り込まれており、壁面は約60～80度の勾配で立ち上がる。住居の長軸は、地形の等高線の走行と直角に近い状態で交叉する。

面積 9.88㎡ 方位 N-67°-W

床面 ロームを28～52cm掘り込んで床面としている。全体的に良く踏み固められ、特に炉を中心とした部分は叩き床状の堅い面が認められる。凹凸の起伏がかなりあり、地形の傾斜と同様の方向に比高差40cmの傾斜が認められる。

埋没土 全体的な堆積状態は、傾斜面上方の北東側より南西側に向かって流入したようなあり方を示す。上位には黒色土、壁際を含めた下位にはロームブロックやS.Pまじりの暗褐色土が堆積している。

炉 住居のほぼ中央部に位置している。輝石安山岩の垂角礫2石と円礫1石をコ字状に配した石組み

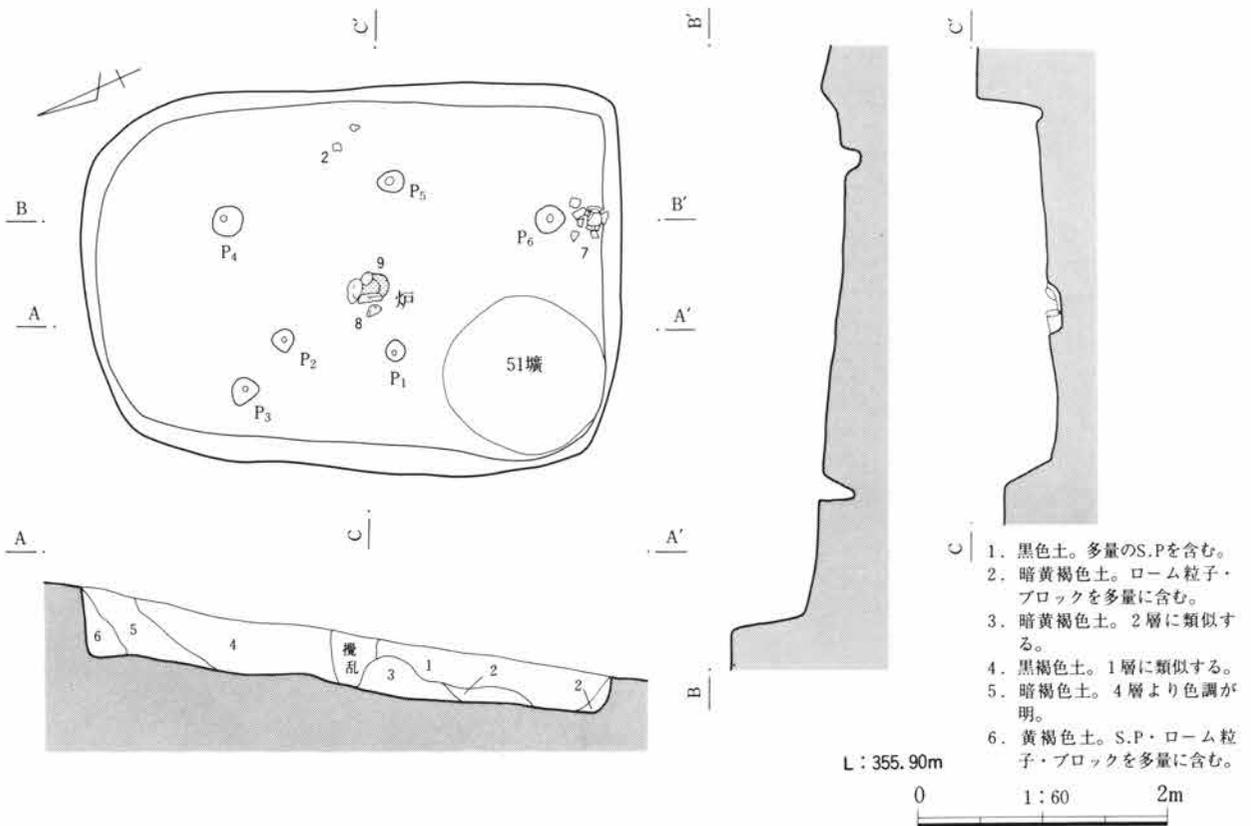
み炉である。石組みの内側での規模は長軸15×25cmで、深さ10cmである。焼土はほとんど認められないが、炭化物粒が若干検出されている。炉の掘り方は一辺約40cmの隅丸方形を呈し、深さ12cmである。

柱穴 南西隅に51号土壌が掘り込まれているためにこの部分の柱穴が検出できなかったが、計6本が検出された。P₁・P₃とP₄～P₆はほぼ対称の位置関係にある。各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:18×13cm、P₂:19×17cm、P₃:22×16cm、P₄:25×24cm、P₅:20×18cm、P₆:22×14cmである。また各柱穴の心々間の距離は、P₁～P₃:1.3m、P₃～P₄:1.4m、P₄～P₅:1.3m、P₅～P₆:1.3mである。

周溝 検出されなかった。

遺物 床面に密着していた遺物としては、凹み石2点(No8・9)があり、9は炉石として転用されていた。土器片等はいずれも埋没土の上位より出土した。(遺物観察表:74頁)

重複 南西隅で51号土壌と重複するが、先後関係は不明である。



第16図 6号住居

7 号 住 居

位 置 88A15 写 真 PL16・17

形 状 長軸を南北方向にもち、長辺4.5×短辺3.4mの隅丸方形を呈する。各辺は四隅の周辺を除いてほぼ直線的に掘り込まれている。壁面の勾配は約70~80度である。住居の長軸は、地形の等高線の走行と直角に近い角度で交わる。

面 積 12.28m² 方 位 N-68°-W

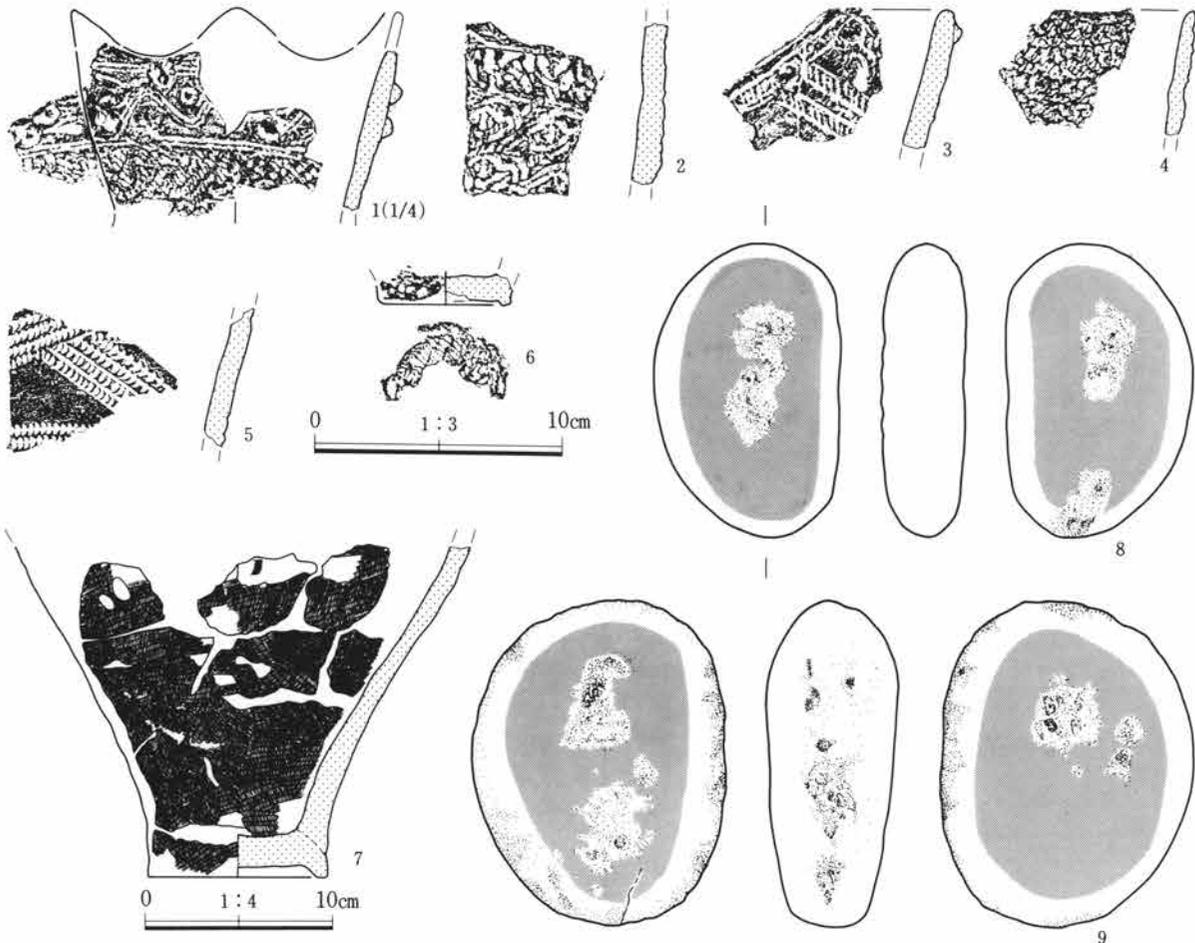
床 面 ロームを31~96cm掘り込んで床面としている。全体的に良く踏み固められ、特に炉を中心とした周辺部分は叩き床状の堅固な面が認められる。凹凸の起伏は少ないが、地形の傾斜と同様の方向に比高差20cmの傾斜が認められる。

埋没土 全体的な堆積状態は、傾斜面上方の北側より南側に向かって流入したようなあり方を示す。上位から中位層にかけては黒色土が堆積し、下位およ

び壁際にはロームブロックを多く含む褐色土が堆積している。

炉 住居中央部のやや北寄りに位置している。輝石安山岩の亜角礫4石と円礫1石を用いてコ字状に組み、底面には板状の同石を敷いている。石組みの内側での規模は、長軸70×短軸23cmで、深さ10cmである。焼土・炭化物は少量検出された程度であるが、炉石には火熱による割れや赤化が認められる。

柱 穴 住居の長軸と並行して2列の計6本が検出された。P₁~P₃とP₄~P₆は相互に対称の位置関係にある。各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:37×46cm、P₂:27×17cm、P₃:30×15cm、P₄:35×29cm、P₅:28×22cm、P₆:42×61cmである。また各柱穴の心々間の距離は、P₁~P₂:1.5m、P₂~P₃:2.0m、P₄~P₅:1.9m、P₅~P₆:1.7mであり、P₁~P₃列とP₄~P₆列との距離は1.2~1.5mである。



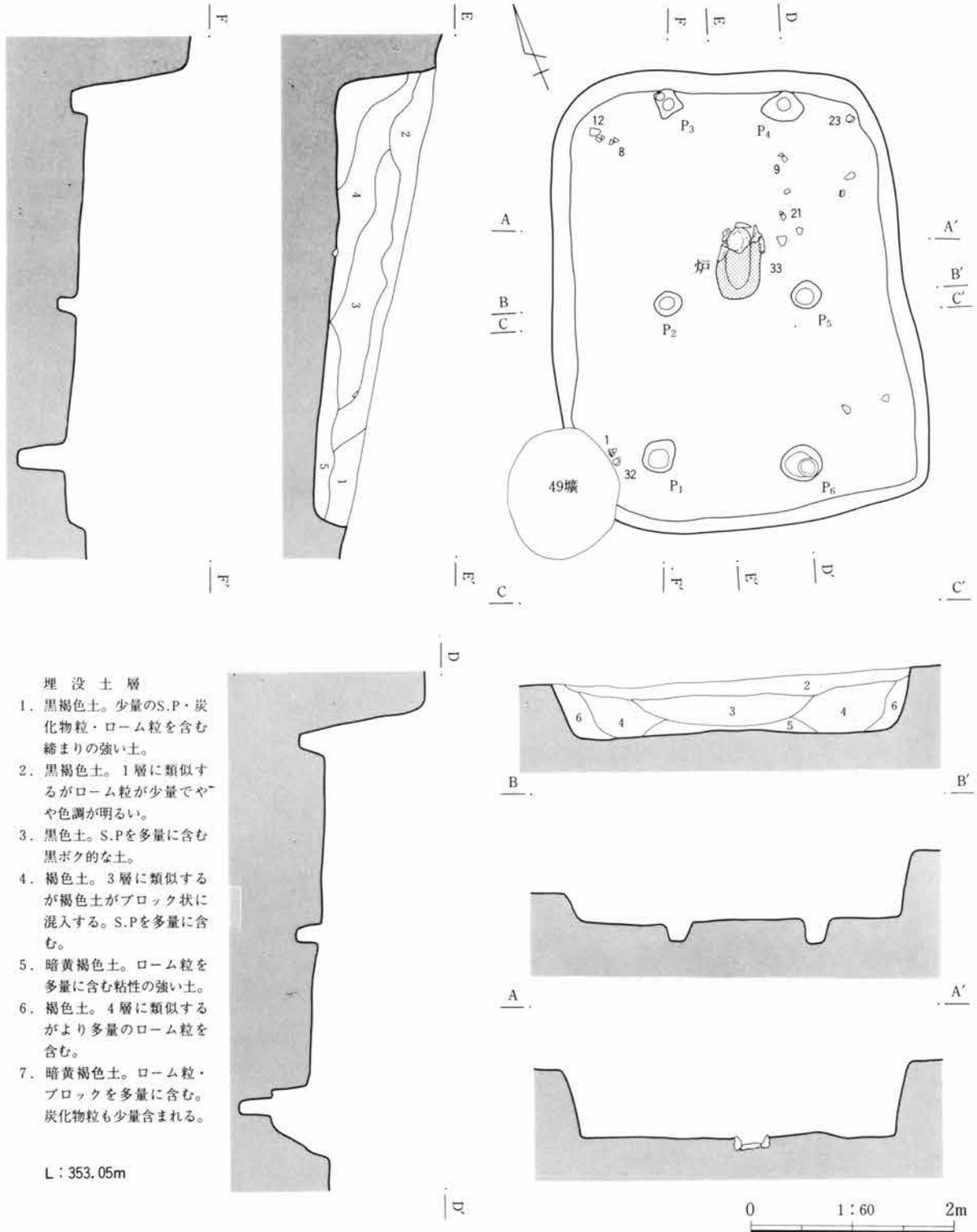
第17図 6号住居出土遺物

II. 縄文時代の遺構と遺物

遺物 出土遺物の大半は埋没土上層より出土した。床面に密着して出土した土器はNo.12・21・23であり、No.1の土器は埋没土と住居外より出土したものが接合した。石器では、磨石2点(No.32・33)が

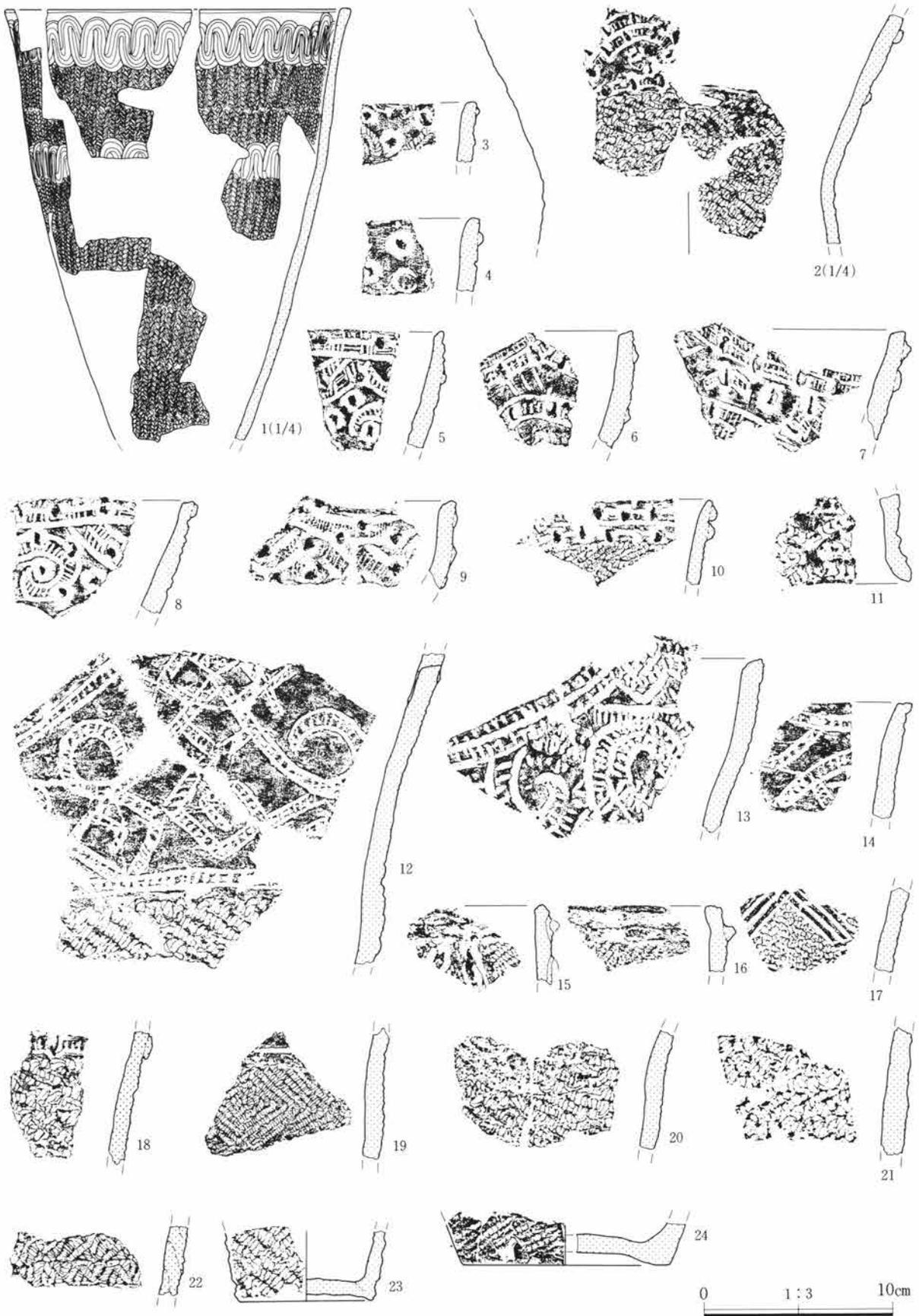
床面密着で出土しているが、No.33は東側の炉石として転用されていた。(遺物観察表:75頁)

重複 西南隅で49号土壙と重複するが、その先後関係は不明である。



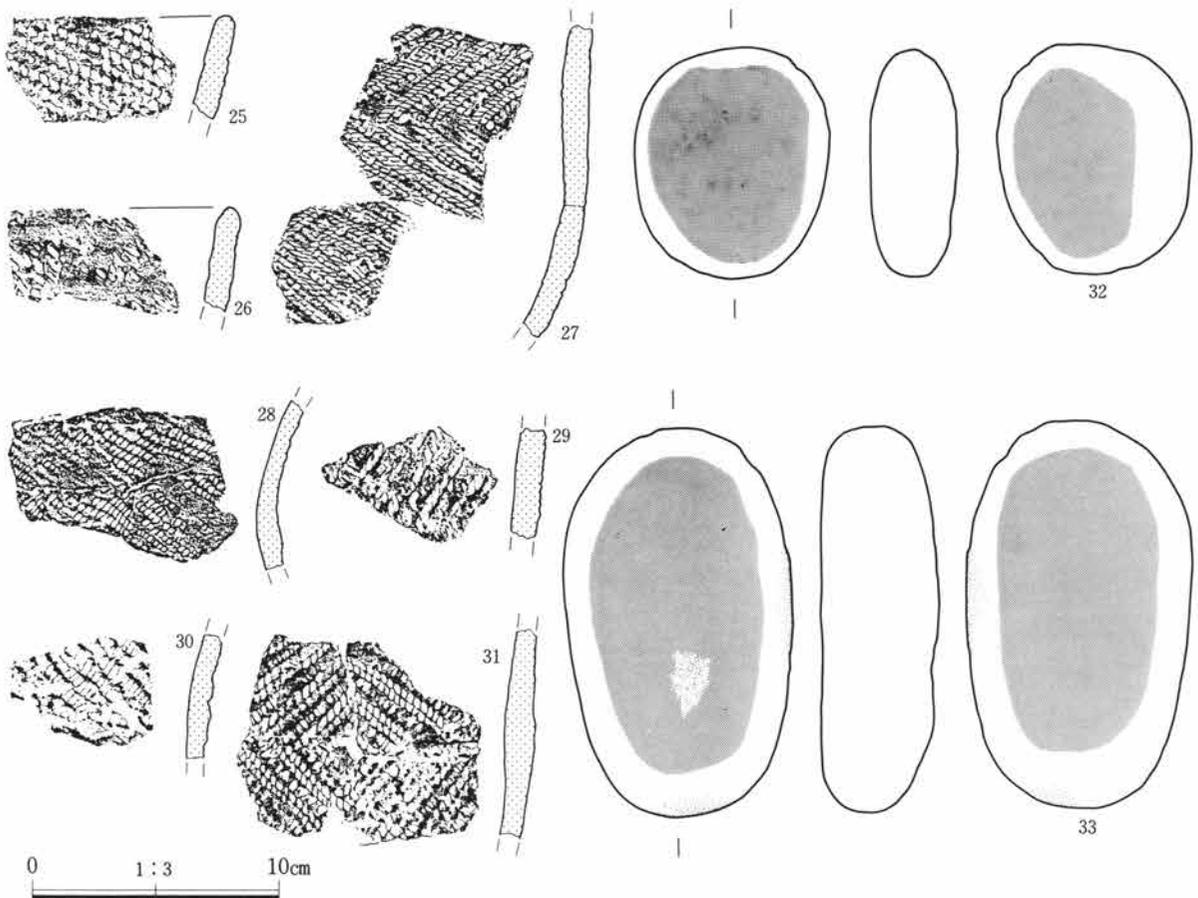
第18図 7号住居

2. 竖穴住居



第19图 7号住居出土遺物

II. 縄文時代の遺構と遺物



第20図 7号住居出土遺物

8号住居

位置 58A14 写真 PL 6・17

形状 急斜面を水平に掘り込んでいるために南側約三分の一のプランを検出できなかったが、長軸を南北にもち、短軸3.7mの隅丸方形を呈すると考えられる。検出された3辺は、西辺を除いて外側へ若干弧を描いて掘り込まれている。壁面の勾配は、北壁側で約80度である。住居の長軸は、地形の等高線の走行とほぼ直角に近い角度で交わる。

面積 9.92m² **方位** N-61°-W

床面 傾斜面のロームを最大64cm掘り込んで床面としている。特に堅い面は認められないが、全体的に良く踏み固められている。かなりの凹凸があり、地形の傾斜と同じ方向に比高差25cmで傾斜している。
埋没土 遺存状態が不良であるが、壁際および床面直上にロームブロックを多く含んだ褐色土が堆積している。

炉 住居中央部よりもやや北側に偏して存在している。長軸24×短軸17cmの楕円形状を呈した掘り込み炉で、深さ9cmである。壁面やその周辺10~15cmの範囲は、火熱による赤化が認められる。また、炉の西隣に焼土・炭化物を多量に含んだ褐色土が50×30cmの範囲に堆積しており、炉の灰掻きによる排土とも考えられる。

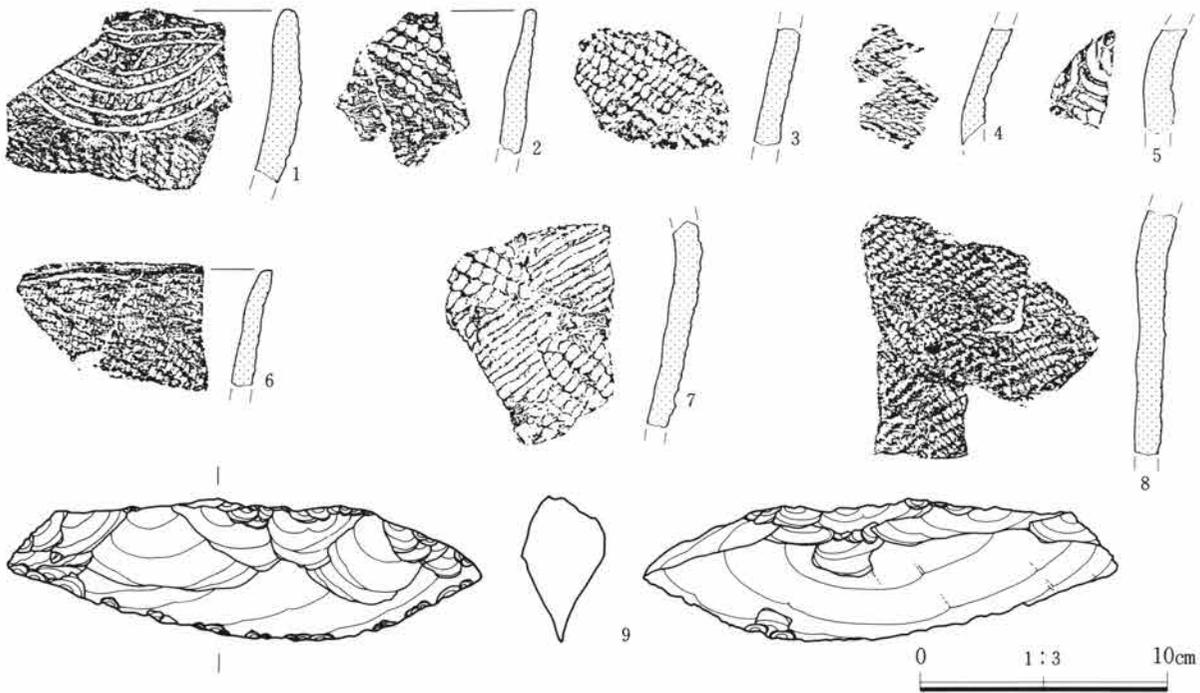
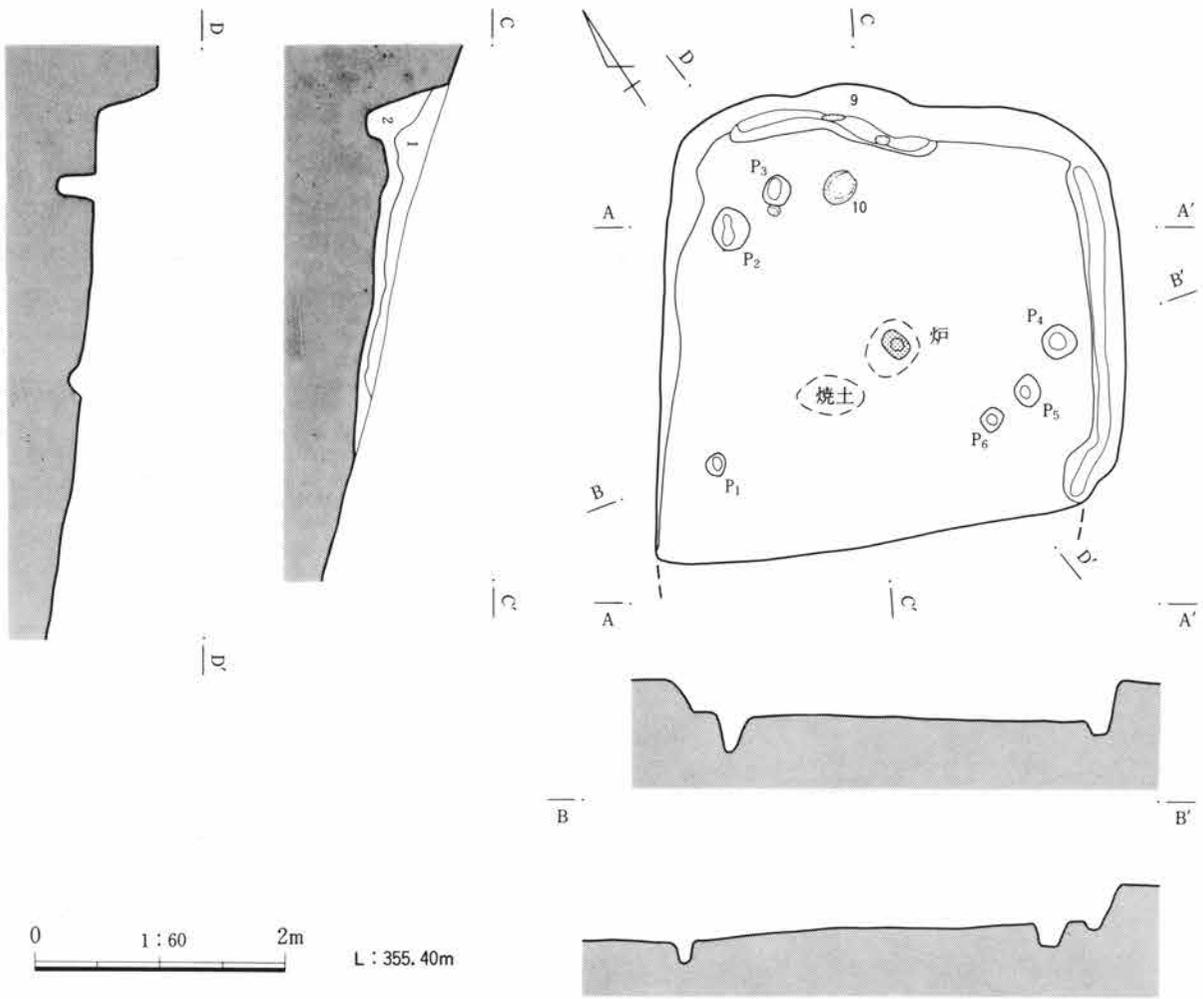
柱穴 周壁に近接して6本検出されているが、その配列は不規則である。各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:18×17cm、P₂:35×19cm、P₃:23×32cm、P₄:28×18cm、P₅:24×11cm、P₆:19×7cmである。

周溝 東壁から北壁にかけて、断続的にめぐっている。規模は、幅14~18cm、深さ8~12cmである。

遺物 北壁近くの床面および周溝内より、削器(No.9)・石皿(No.10)が出土している。土器は少量の破片のみで、総て埋没土中より出土した。

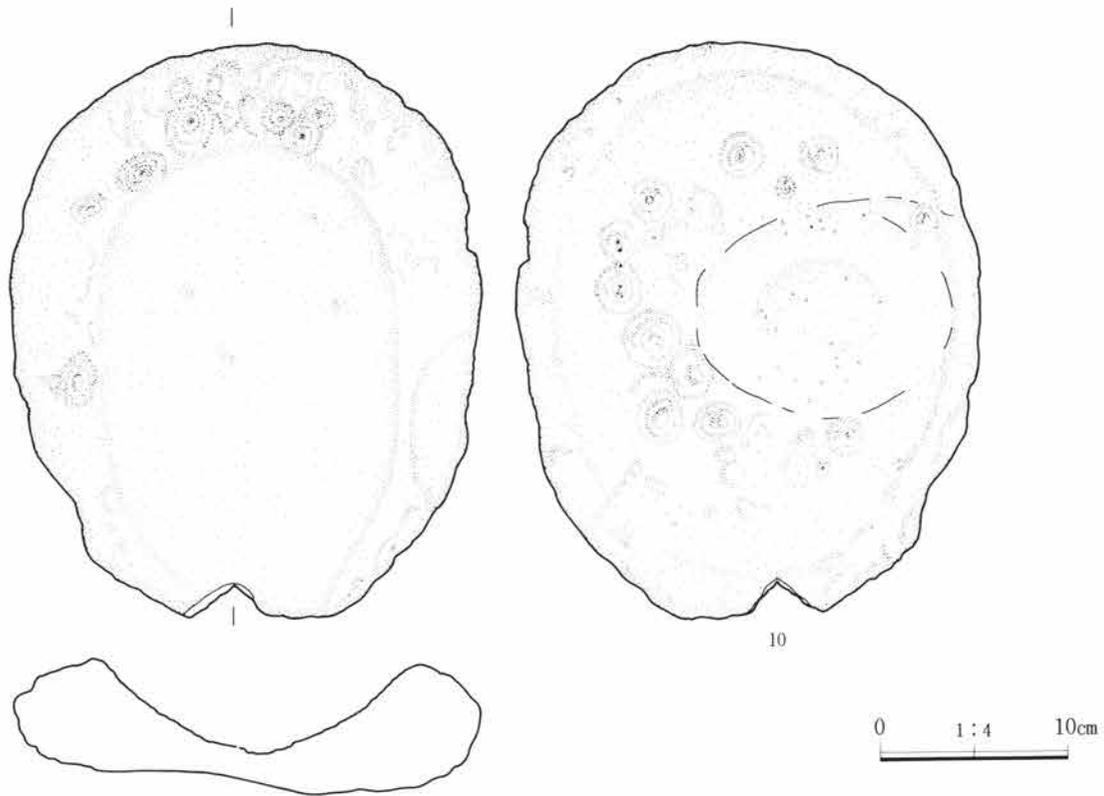
(遺物観察表:76頁)

2. 竪穴住居



第21図 8号住居と出土遺物

II. 縄文時代の遺構と遺物



第22図 8号住居出土遺物

9号住居

位置 78A12

写真 PL 6・17

形状 西壁側が弧状に張り出してやや不整形であるが、長軸を南北にもち、長軸4.1×短軸4.0mと3.0mの隅の丸い長梯形状を呈する。壁面は、70～80度の勾配で立ち上がる。住居の長軸は、地形の等高線の走行とほぼ直交している。

面積 13.93m²

方位 N-78°-W

床面 傾斜面のロームを最大1m掘り込んで床面としている。全体的に良く踏み固められ、炉の周辺は叩き床状の堅固な面が認められる。若干の凹凸があり、地形の傾斜方向と同様の北から南側に比高差22cmで傾斜している。

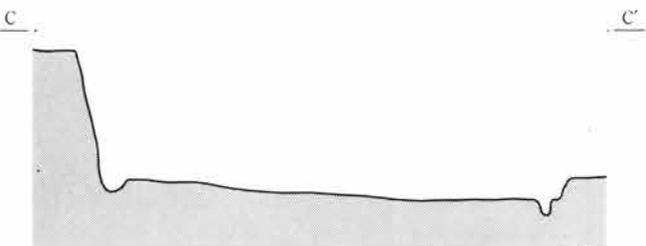
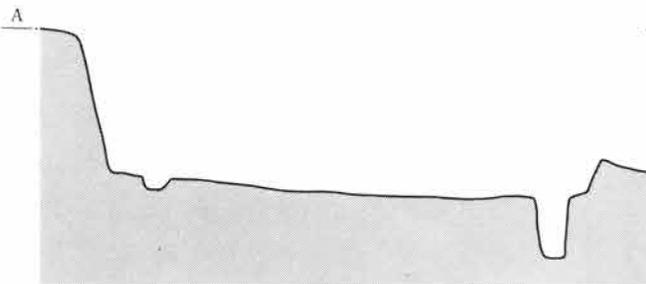
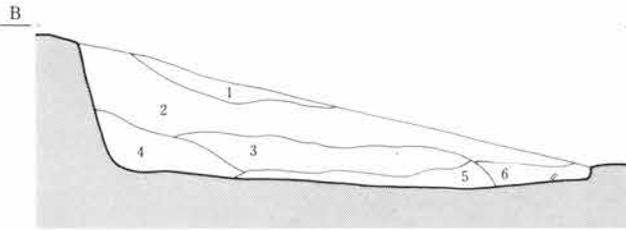
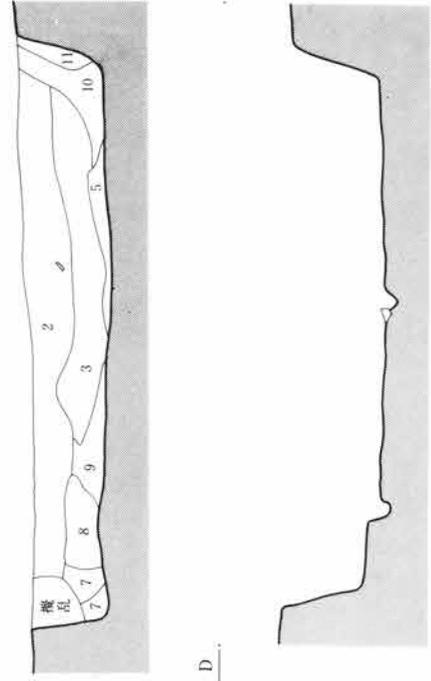
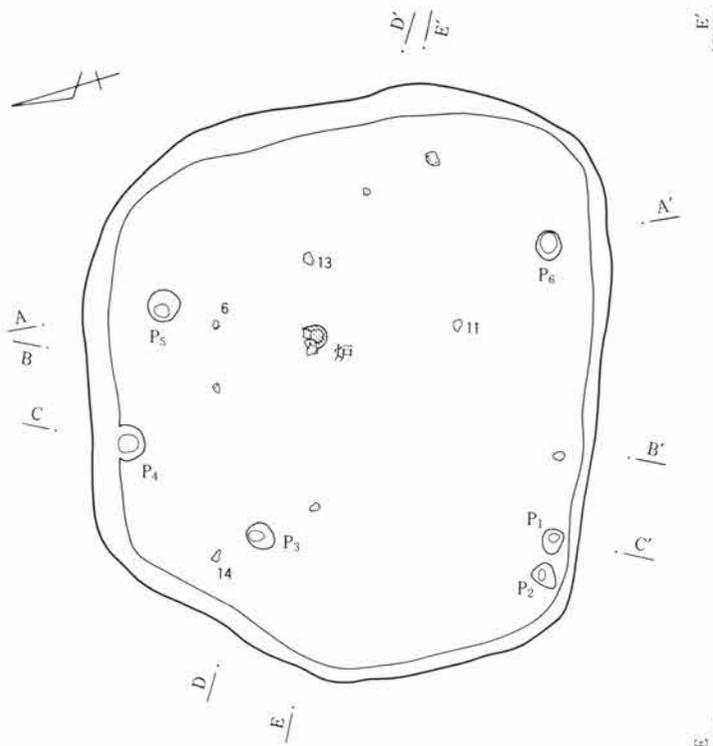
埋没土 全体的な堆積状態は、傾斜面上方の北側より南側に向かって流入したあり方を示す。壁際および床面直上には、ロームブロックを多量に含んだ褐色土が堆積している。

炉 住居中央部よりやや東側寄りに位置する。北側の炉壁面にのみ、輝石安山岩の垂角礫を1石配している。炉石の内側での規模は、長軸20×短軸12cmの楕円形状を呈し、深さ5cmのわずかな掘り込みをもつ。内壁には火熱による酸化がほとんど認められない。

柱穴 周壁に近接して6本が検出された。不規則な配列状態であるが、住居の形状に類似した方形の配列を基本としていると思われる。各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:20×16cm、P₂:22×12cm、P₃:23×16cm、P₄:30×20cm、P₅:24×8cm、P₆:25×49cmである。また、主な柱穴の心々間の距離は、P₁～P₄:3.5m、P₄～P₅:1.1m、P₅～P₆:3.2m、P₆～P₁:2.4mである。

遺物 床面に密着して出土した遺物としては、土器片1点(No.6)の他に、使用痕および加工痕のある石器が2点(No.13・14)ある。他は総て埋没土中より出土した。(遺物観察表:76頁)

2. 竪穴住居



埋没土層

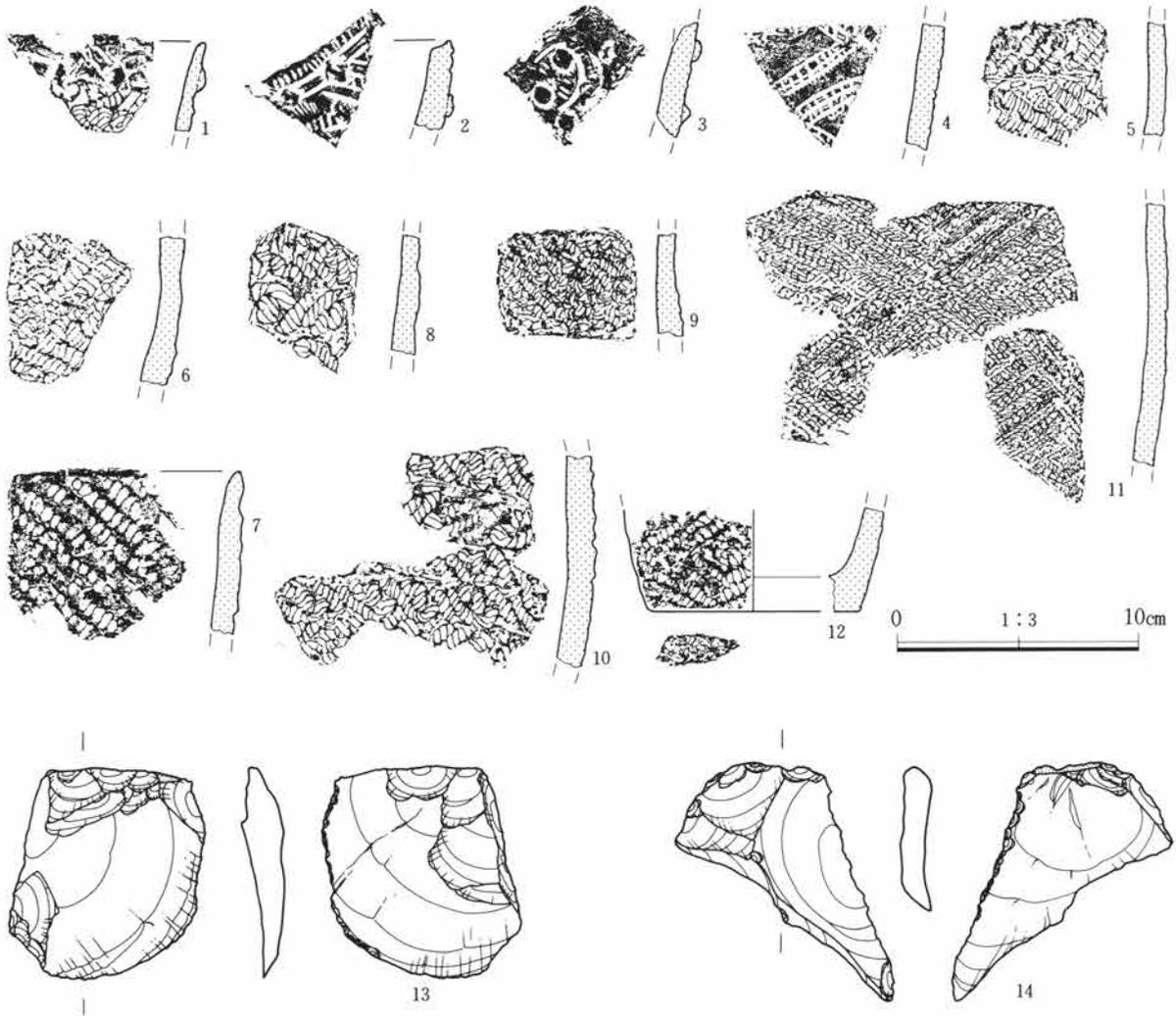
1. 暗褐色土。少量のS.P粒を含む粘性と締まりの強い土。
2. 黒褐色土。1層に類似するが、より多くのS.Pを含み色調が暗い。少量の炭化物粒も認められる。
3. 黒色土。少量のS.Pを含む黒ボク的な土。粘性と締まりの強い土。
4. 褐色土。多量のS.Pを含む粘性と締まりの強い土。
5. 黄褐色土。少量のS.P・炭化物粒を含む粘性と締まりの強い土。かなり多量のローム粒・ブロックを含む。
6. 暗褐色土。少量のS.P・ローム粒を含む粘性と締まりの強い土。
7. 黒褐色土。少量のS.Pを含む締まりが強く、粘性の弱い土。
8. 暗褐色土。4層に類似するが、色調が暗くより多くのS.Pを含む。
9. 黄褐色土。多量のロームブロック・粒子やS.Pを含む。
10. 黄褐色土。5層に類似するが若干色調の暗い土。

L : 352.40m

0 1 : 60 2m

第23図 9号住居

II. 縄文時代の遺構と遺物



第24図 9号住居出土遺物

10号住居

位置 80A23

写真 PL 6・17

形状 北半部1号住居によって、また東側を現代の貯蔵穴によって切られているために全体的な形状は不明であるが、長軸を南北にもつ方形を呈すると思われる。検出し得た短軸長は、2.9mである。南辺はやや外側に弧状に張り出す。壁面は、60~70度の勾配で立ち上がる。

面積不明 **方位** N-76°-W

床面 傾斜面のロームを40~68cm掘り込んで床面としている。堅固な面はほとんど無く、全体的に軟弱な床面である。凹凸は少ないが、地形の傾斜方向と同様の北東側から南西側へ緩やかに傾斜している。

炉 残存していた南半部からは検出されておらず、1号住居によって切られた北半部に存在した可能性が強い。

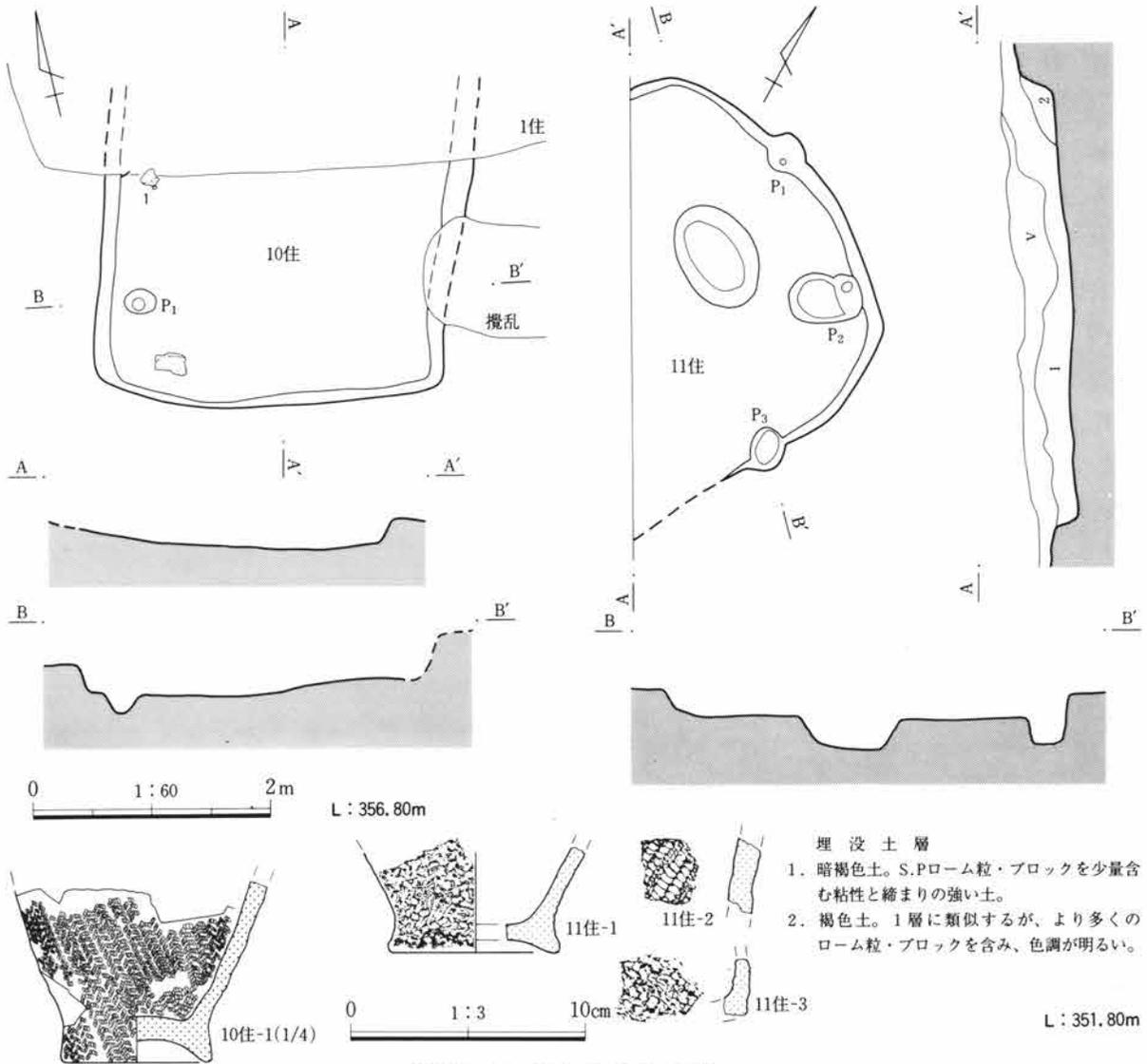
柱穴 西壁に近接して1本検出されたのみである。その規模は、径26×深さ16cmである。

遺物 床面に密着して出土した胴下半部の土器(No. 1)1点と石器剥片1点のみである。他に輝石安山岩の亜角礫が埋没土中より1点出土しているが、加工痕は認められない。(遺物観察表:76頁)

重複 北半部を1号住居によって切られている。

備考 本住居の帰属時期は、床面から出土したNo. 1の土器が関山Ⅱ式であることから、当該期に位置付けられる。

2. 竪穴住居



第25図 10・11号住居と出土遺物

11号住居

位置 92A12 写真 PL7

形状 南半部が調査範囲外にあって、完掘できなかったために全体的な形状は不明であるが、長軸を南北方向にもった隅丸方形を呈すると思われる。短軸長は3.2mである。壁面は60~70度の勾配で緩やかに立ち上がる。

面積 不明 **方位** N-69°-W

床面 急斜面のロームを最大70cm掘り込んで床面としている。特に堅固な面は無いが、全体的に良く踏み固められている。床面の凹凸は少なく、地形の傾斜方向と同様の北側から南側へと緩やかに傾斜。

埋没土 壁際を含め、全体的にロームブロックをか

なり多く含んだ褐色土が堆積している。

炉 調査可能な北半部からは検出されなかった。
柱穴 周壁に沿って壁柱穴が3本検出された。各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:35×17cm、P2:22×45cm、P3:35×20cm、である。また各柱穴の心々間の距離は、P1~P2:1.2m、P2~P3:1.5mである。

遺物 埋没土中より、少量の土器片が検出されているのみである。(遺物観察表:76頁)

備考 北壁の約60cm内側に、長径88×短径64cm、深さ20cmの土塊状の掘り込みが存在するが、この性格や住居との関係については不明である。焼土や炭化物等は検出されていないが、位置的には炉としての性格も考慮される。

II. 縄文時代の遺構と遺物

12号住居

位置 96Z48

写真 PL7・17・18

形状 土壌との重複や風倒木などの攪乱により、形状の1部が不明瞭であるが、長軸を東西にもった隅丸方形を呈すると思われる。規模は、長軸4.1×短軸3.4mである。壁面は約70度の勾配で立ち上がる。

面積 11.47m²

方位 N-16°-E

床面 ロームを16~36cm掘り込んで床面としている。特に堅固な面はなく、全体的に軟弱である。凹凸は少ないが、地形の傾斜と同様の方向に比高差20cmの傾斜が認められる。

埋没土 全体的にSPやロームブロックを多量に含んだ褐色土が埋没しているが、周壁際はロームブロックの量が多い。

炉 検出されなかった。

柱穴 住居の外形のほぼ対角線上に2本検出されたが、他は土壌や集石土壌との重複によって検出されなかった。各柱穴の規模(径×深さ)はP₁:12×5cm、

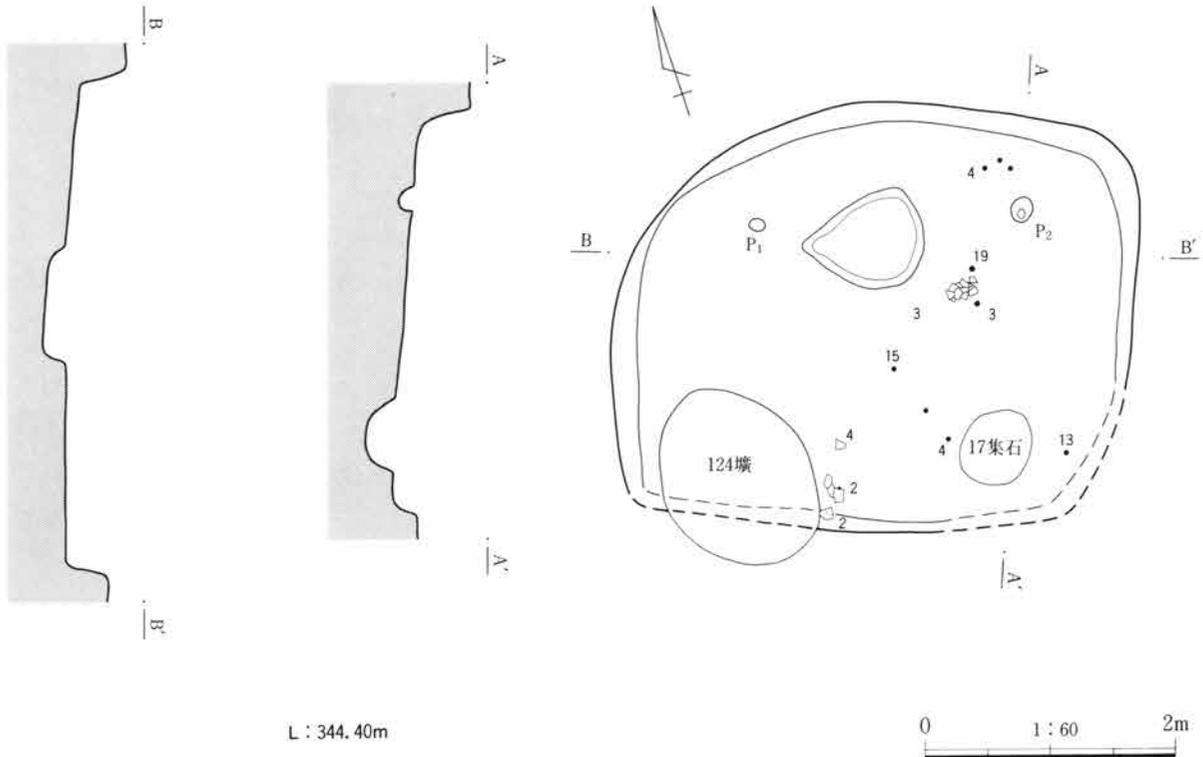
P₂:19×12cmである。また、P₁~P₂の心々間の距離は、2.1mである。

遺物 床面に密着して出土したものは無く、総て床面より浮いた状態で出土した。土器は小破片のものが多く、No.1~5のようにある程度器形の復元可能なものもある。石器は石核状のものが1点と剥片3点が埋没土中より出土した。

(遺物観察表:77頁)

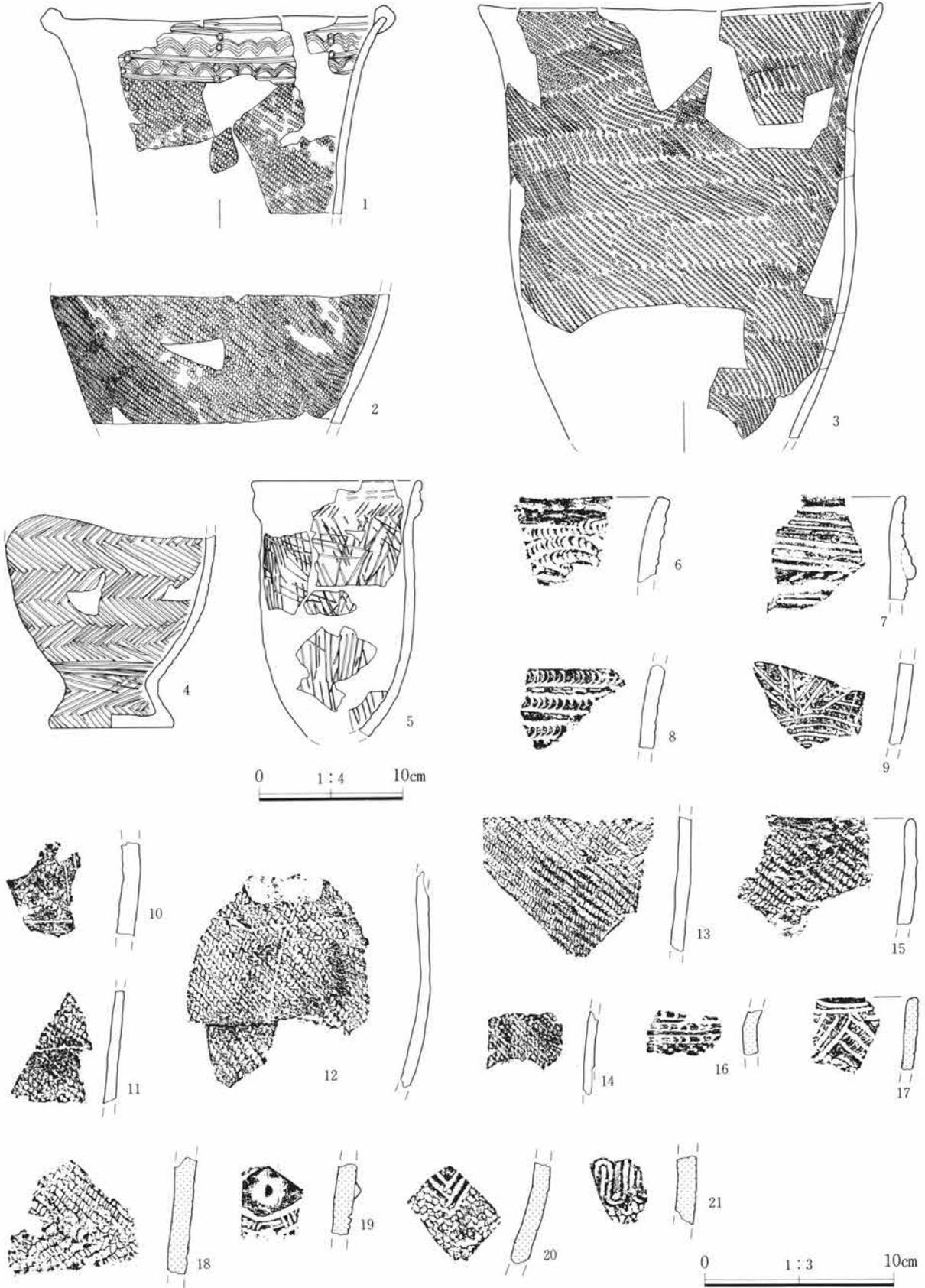
重複 南側で124号土壌および17号集石と重複し、本住居よりも17号集石が時間的に新しいが、124号との先後関係は不明である。

備考 住居中央部のやや北壁寄りに、長径98×短径76cm、深さ15cmの不整形形状の落ち込みがあるが、住居との関係やその性格については不明である。当住居の帰属時期は、出土土器が諸磯a~c式を主体としているものの確定することはできない。住居の外形については、南側が風倒木による攪乱や他遺構との重複によって不明瞭であり、更に南側へ広がる可能性もある。



第26図 12号住居

2. 竖穴住居



第27图 12号住居出土遺物

II. 縄文時代の遺構と遺物

13号住居

位置 100A06

写真 PL7E18

形状 長軸を東西方向にもち、長軸3.2×短軸2.7mの隅丸方形を呈する。各辺ともに若干外側へ弧状に張り出している。壁面の勾配は、約70~80度である。

面積 6.36m²

方位 N-5°-E

床面 ロームを18~57cm掘り込んで床面としている。特に堅固な面は認められないが、全体的に良く踏み固められている。かなりの凹凸が認められ、地形の傾斜と同様の北東から南西方向に比高差30cmで傾斜している。

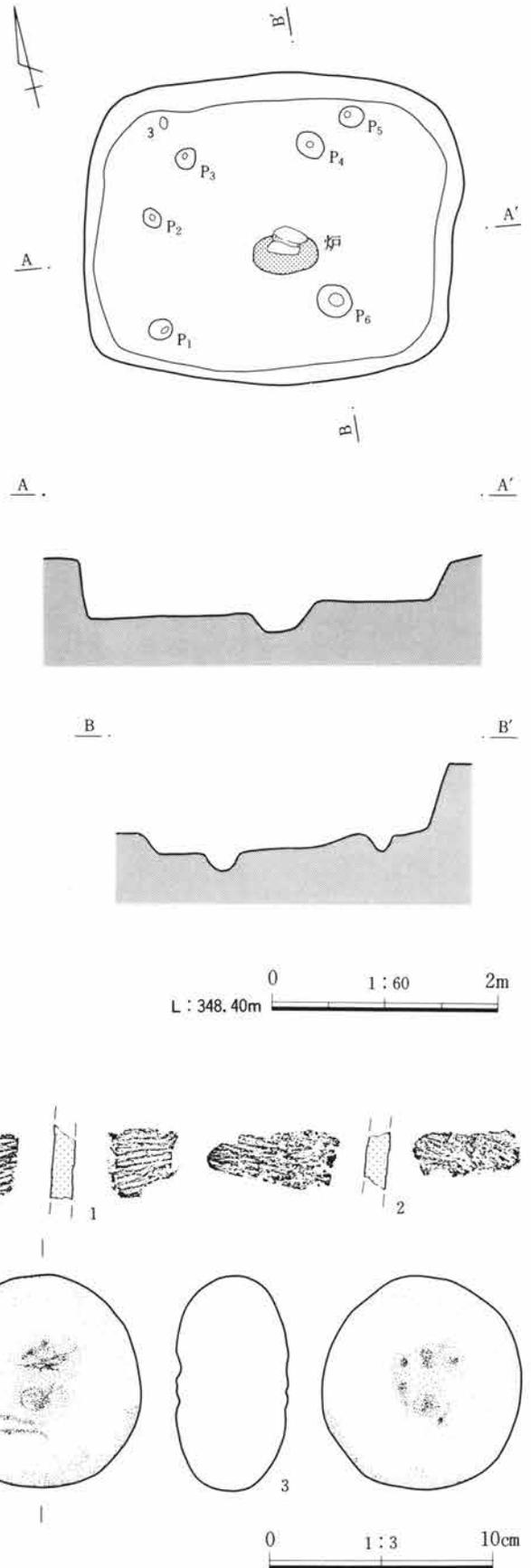
埋没土 上層の黒褐色土と下層の褐色土の2層に分かれ、下層にはかなり多量のロームブロックが含まれる。

炉 住居のほぼ中央部に位置している。長径55×短径30cm、深さ13cmの楕円形状の掘り込みをもち、北側にのみ径13×30cmの河床礫を1石配している。炉石や壁面はほとんど火熱を受けておらず、埋没土にも炭化物がわずかに認められるにすぎない。

柱穴 6本の柱穴が検出されたが、P₁・P₃・P₄・P₆の4本を基本に住居の外形と同様の方形に配されるものと思われる。各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:19×19cm、P₂:19×16cm、P₃:20×11cm、P₄:25×18cm、P₅:20×16cm、P₆:30×13cmである。また、主な柱穴の心々間の距離は、P₁~P₃:1.6m、P₃~P₄:1.1m、P₄~P₆:1.4m、P₆~P₁:1.6mである。

遺物 床面に密着して出土したものは、No. 3の凹み石1点のみである。また、埋没土中から出土したものも少なく、早期の条痕文土器2点と、石鏃1点、加工痕ある石器2点、使用痕ある石器1点のみである。(遺物観察表:77頁)

備考 本住居の帰属時期は、出土した土器が少なく確定することができない。



第28図 13号住居と出土遺物

14号住居

位置 90A00 写真 PL8・18

形状 長軸を南北にもつ円形に近い隅丸方形を呈する。1辺は約5mである。壁面は、70~80度の勾配で立ち上がる。

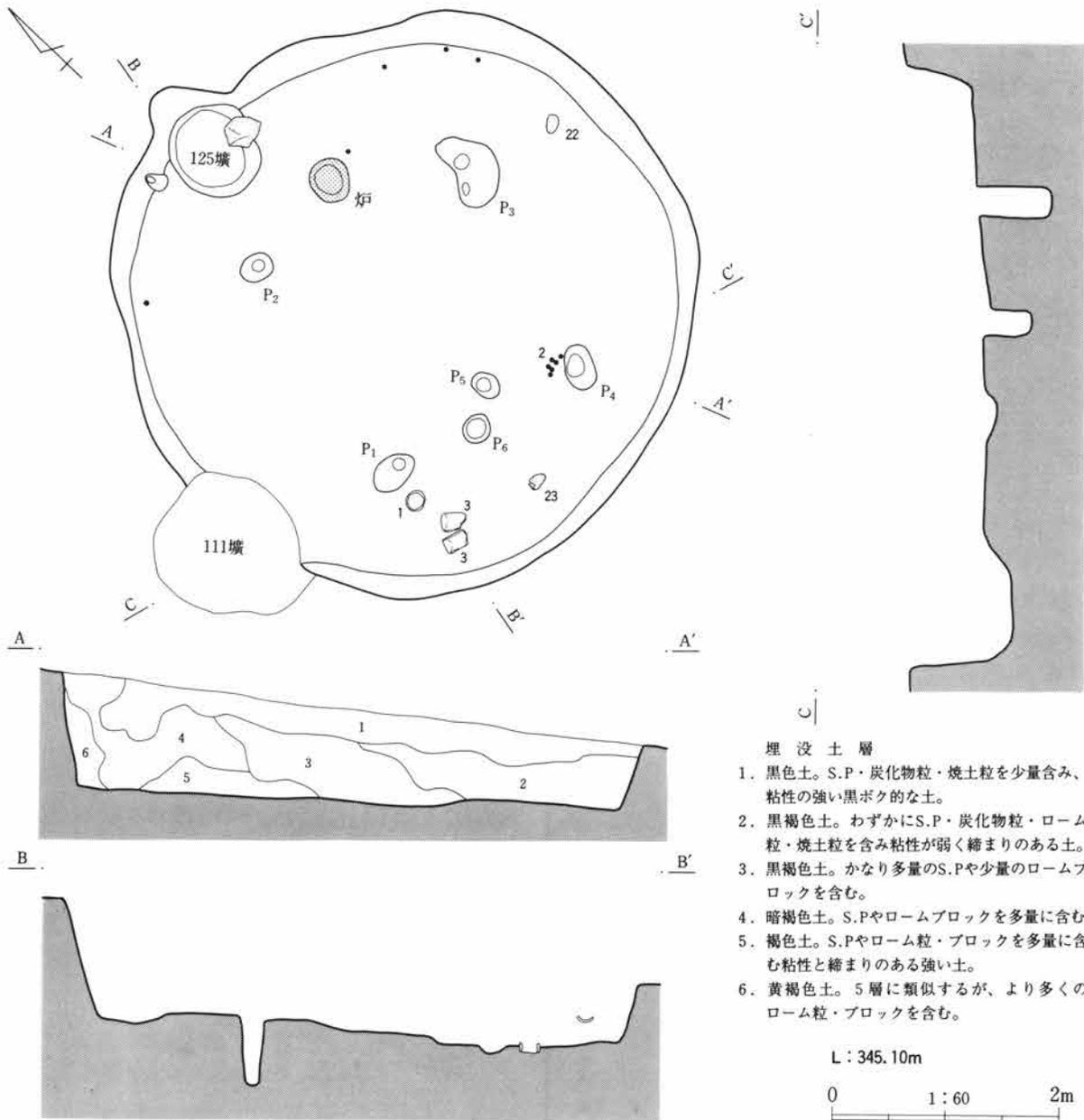
面積 15.76m² 方位 N-72°-W

床面 ロームを58~100cm掘り込んで床面としている。特に堅固な面は認められないが、全体的に良く踏み固められている。かなりの凹凸があり、地形の傾斜と同方向の北側から南側へ比高差20cmで傾斜

している。

埋没土 全体的な堆積状態は、傾斜面上方の北側から南側へ向かって流入したようなあり方を示す。上層には黒色土が、中・下層には褐色土が堆積し下位に行くにつれてロームブロックの混入量が多くなる。また、床面近くの5層内には少量の焼土ブロックが認められる。

炉 北壁から約80cm内側に位置している。直径38cm、深さ10cmの円形を呈した掘り込み炉であり、壁面は火熱により焼土化している。



第29図 14号住居

II. 縄文時代の遺構と遺物

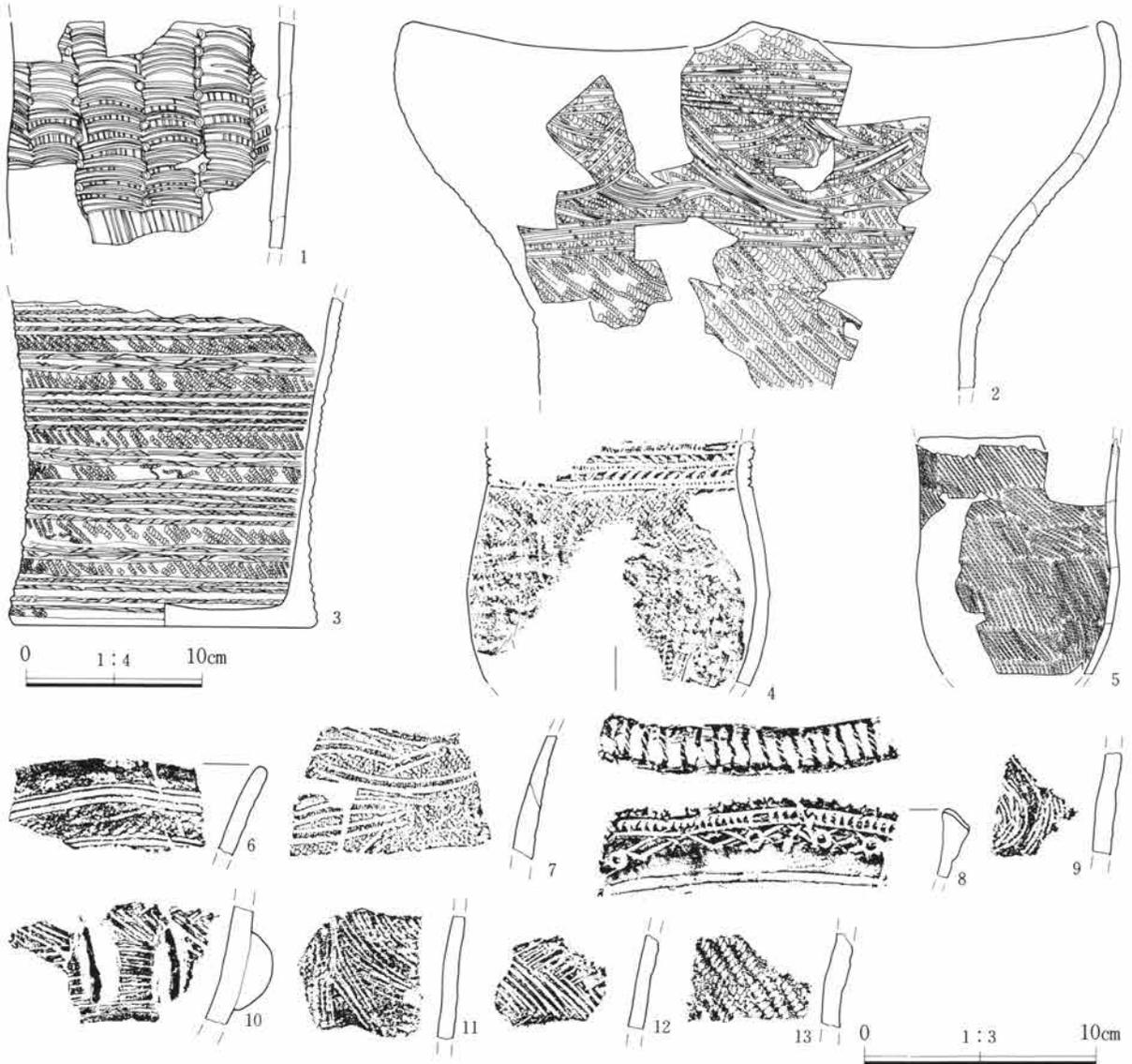
柱 穴 床面から20cm以上の掘り込みをもつ小穴が6本検出されているが、基本的にP₁~P₄の4本を主柱穴とする構造と考えられる。各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:26×56cm、P₂:23×57cm、P₃:39×40cm、P₄:23×57cm、P₅:20×21cm、P₆:24×39cm、である。また、主柱穴の心々間を結んだ形状は方形を呈し、その距離は、P₁~P₂:2.2m、P₂~P₃:2.2m、P₃~P₄:2.1m、P₄~P₁:1.9mである。

遺 物 南側壁面より55cmほど内側に、口縁部と胴部下半を欠損した深鉢形土器(No.1)が正位に埋没されていた。床面に密着していたものは、No.22の凹み石とNo.23の磨石のみである。埋没土器に近接

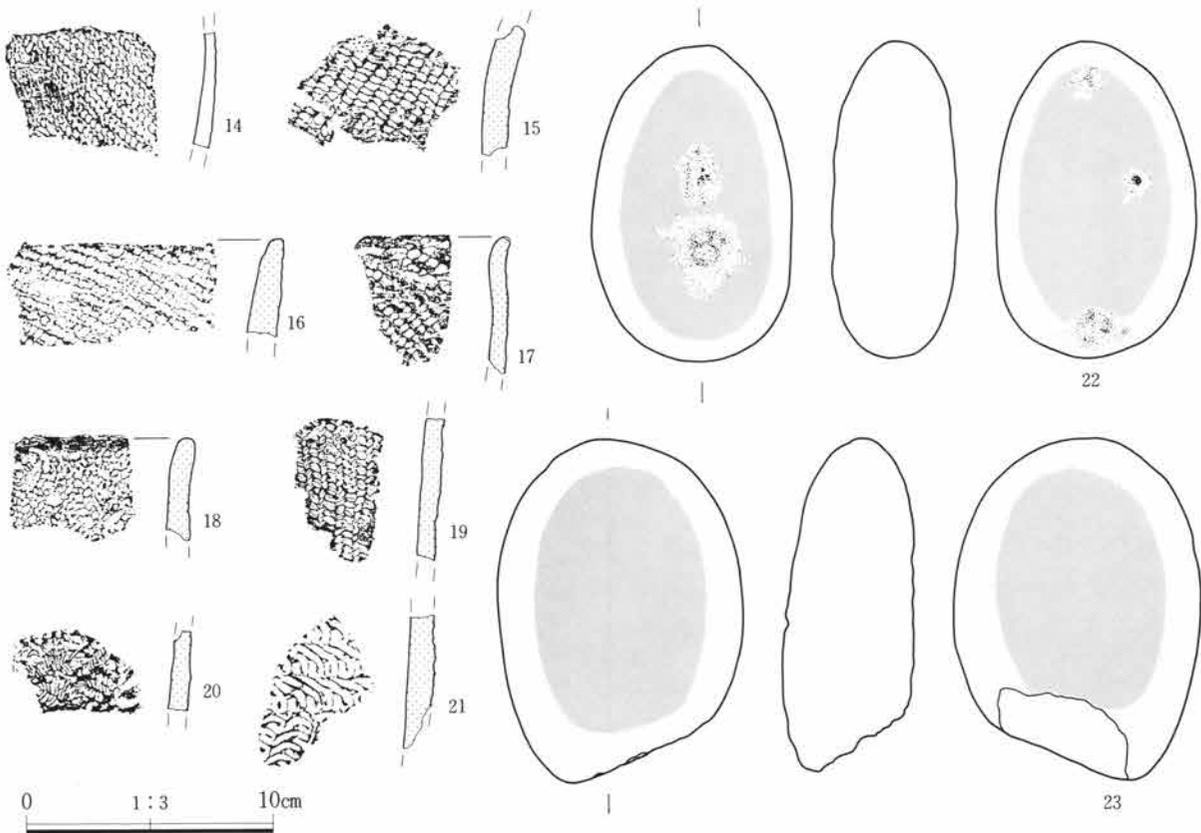
して床面より11~13cm浮いて検出されたNo.3の土器は、胴下半部のみ残存し、縦に真二つに割れて出土した。No.2の土器は、床面より9cm浮いていたが、P₄柱穴に接して小破片が集合した状態で出土した。埋没土中の他の遺物は、比較的上層から出土したものが多。(遺物観察表:77頁)

重 複 北および西側で125・111号土壙とそれぞれ重複する。125号土壙については、本住居が時間的に新しくなるが、111号土壙との関係は不明である。

備 考 本住居の帰属時期は、No.1の埋設土器が諸磯a式であることから、当該期に比定される。周溝は精査したにもかかわらず検出できなかった。



第30図 14号住居出土遺物



第31図 14号住居出土遺物

3. 集 石

Z区を中心にして19基が検出された。各集石は、基本的に集石下に土壙状の掘り込みを伴うと考えられるが、Z区の集石はその大半が黒色土(V層)中に存在するため、11基については土壙状の掘り込みの有無を確認することができなかった。石材は、各集石ごとにその大きさに差はあるものの、総て輝石安山岩の亜角礫を用いており、そのほとんどに火熱による割れや表面の赤化等の他にタール状の付着物などが認められる。集石の帰属時期については、確定できないが周辺からの出土遺物が前期を主体とすることや、当該期の住居や土壙等とほとんど重複せず、その占地に明瞭な差異が認められることから、前期に属する可能性が高い。(遺物観察表:78頁)

1号集石 94 Z 46グリッドに位置する。径20cm前後のやや大きい板状の輝石安山岩を5石用いて、方形の石囲炉のように立てるように配置している。用

石上端の内側での規模は、長軸45×短軸25cmである。用石の1部にタール状の付着物が認められる。土壙状の掘り込みは検出できなかった。

2号集石 94 Z 49に位置する。径20~30cmの石材を4個用いて、長軸73×短軸40cmの範囲に配している。用石の1部にタール状の付着物が認められる。土壙状の掘り込みは検出できなかった。

3号集石 87 Z 46に位置する。径10~20cmの石材を約40個用いているが、最上部の中心部には長径50cmの板状石が置かれている。下位に径約1m、深さ30cmの円形の土壙を伴うが、集石はこの埋没土上層の1層を主体として包含されている。上位と下位の礫層厚は約30cmである。土壙の埋没土は、焼土・炭化物を含まず、また壁面も赤化していない。

4号集石 87 A 00グリッドに位置する。径5cm前後の河床礫を含んだ小礫12個と、長径30~50cmの比較的大きな板状石2個で構成されているが、大きな石のうち1石については3号集石と同様、小礫の上に乗るような状態で出土。土壙の有無は不明である。

II. 縄文時代の遺構と遺物

5号集石 88 Z 48グリッドに位置する。径10～15cmの石材9個で構成される。径60cmの範囲に散在しているが、下位の土壌の有無は不明である。

6号集石 75 Z 48グリッドに位置する。径20～30cmの板状の石材10個で構成される。土壌の有無は不明。周辺より前期二ツ木式併行や関山I式の土器片が出土している。

7号集石 81 A 02グリッドに位置する。径20～30cmと径10cm前後の礫約20個で構成される。長軸100×短軸80cmの範囲に積み上げたような密集した状態を示す。上位から下位の礫層厚は約30cmである。土壌の有無は不明。

8号集石 84 Z 48グリッドに位置する。径10～30cmの礫約50個で構成される。当集石から9号集石にかけて、火熱を受けた礫が散在するが、これらは何らかの要因で原位置から移動したものと思われる、両集石の間に別の集石が存在した可能性もある。下位には、長径1.14×短径1m、深さ30cmの楕円形の土壌が存在し、集石は埋没土の上層約20cmの層間に集中している。埋没土の下層には、少量の炭化物粒子が含まれている。上位から下位の礫層厚は、約30cmである。周辺より前期黒浜式土器を中心に関山式、諸磯式土器などの破片が出土している。

9号集石 83 Z 47グリッドに位置する。径20cm前後の礫約35個によって構成される。径80cmの範囲に密集しているが、ほとんど積み上げられていない。土壌の有無は不明。

10号集石 77 Z 48グリッドに位置する。径20～30cmの板状の礫11個によって構成される。下位に長径80×短径60cm、深さ15cmの土壌を伴い、集石は埋没土の上層に集中している。

11号集石 72 A 01グリッドに位置する。径20cm前後の礫14個で構成される。土壌の有無は不明。

12号集石 68 A 00グリッドに位置する。径10～30cmの礫約15個によって構成される。下位に長径74×短径66cm、深さ21cmの不整円形の土壌を伴っている。埋没土は黒ボクに近似した黒色土であるが、焼土・炭化物等を含まない。集石は土壌の底面より約

10cm上位に密集し、相互に重なり合う。用石の1部にタール状の炭化物が認められる。

13号集石 68 Z 49グリッドに位置する。径10～20cmの礫約30個で構成される。下位に径90cm、深さ30cmの円形の土壌が存在し、集石はこの底面より約25cm上位に密集している。埋没土は黒褐色土であり、焼土・炭化物等を含まない。

14号集石 79 A 01グリッドに位置する。径10～20cmの礫21個が長軸1.3×短軸0.8mの範囲に存在している。土壌の有無は不明であるが、用石の1部にタール状炭化物が付着している。

15号集石 79 A 00グリッドに位置する。径20cm前後の礫約40個が、長軸1.9×短軸1.6mの範囲に存在する。用石の1部は、積み上げられるように相互に重なっている。

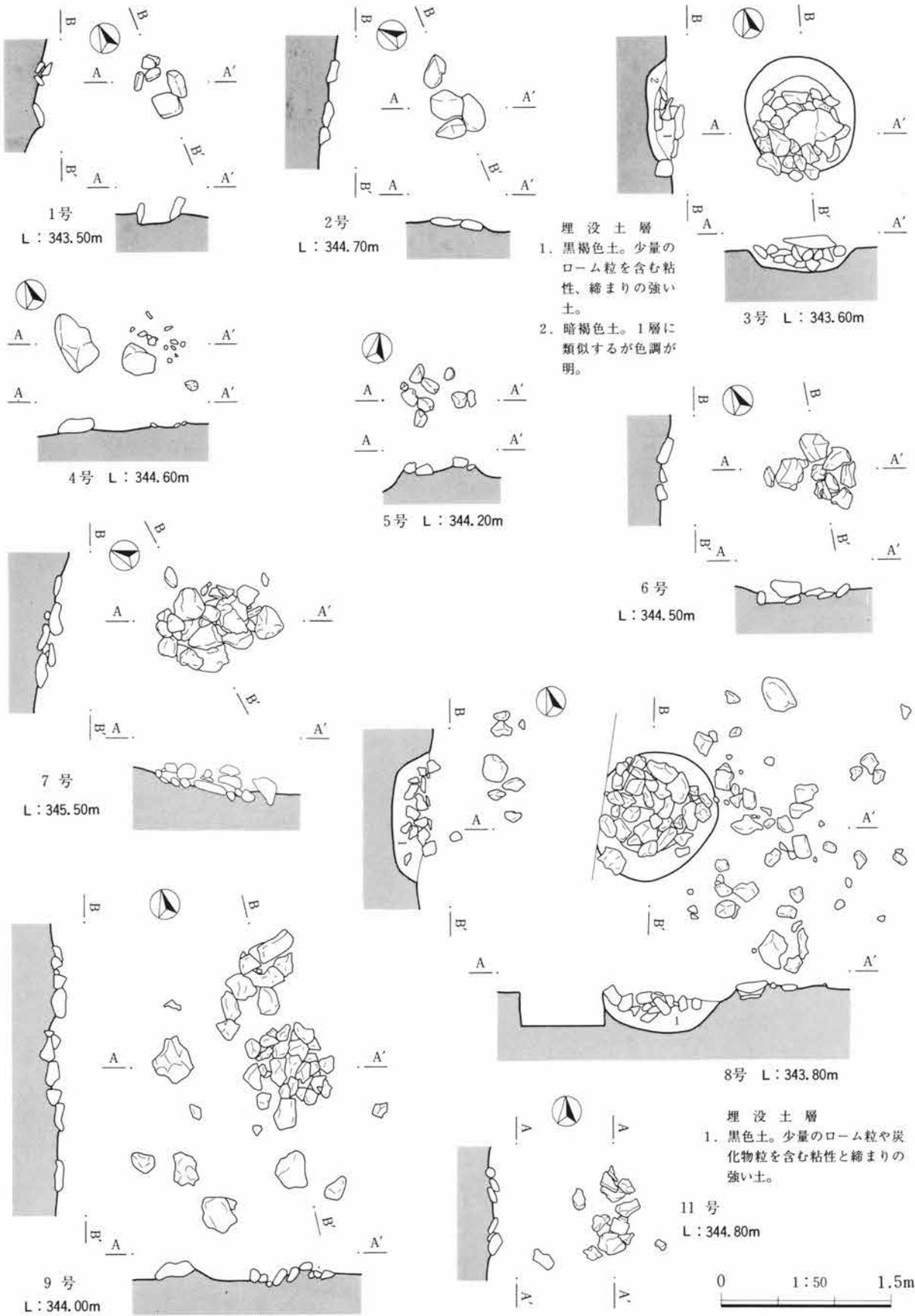
16号集石 78 Z 47グリッドに位置する。径30～40cmの礫4個が折り重なり、下位に径65cm、深さ15cmの円形の土壌が存在する。周辺に径40cm前後の比較的大きい礫が散在しているが、当集石と同様、火熱による赤化や割れが認められる。

17号集石 95 Z 48グリッドに位置し、12号住居を切って掘り込まれている。径10～30cmの河床礫4点で構成されているが、いずれも径50cmほどの大形礫が火熱によって分割されたものである。下位に長径70×短径50cmの楕円形の土壌が存在し、集石はこの底面に密着した状態で出土している。埋没土は黒褐色土であるが、焼土や炭化物を含まない。

18号集石 85 A 23グリッドに位置する。径5～20cmの礫約40個で構成される。下位に長径1.1×短径0.9m、深さ26cmの土壌を伴い、炭化物を含んだ黒色土が埋没。集石は埋没土の上層に密集し、底面から約10cm浮き上がっている。集石の上位から下位にかけての層厚は約30cmであり、相互に積み重なっている。

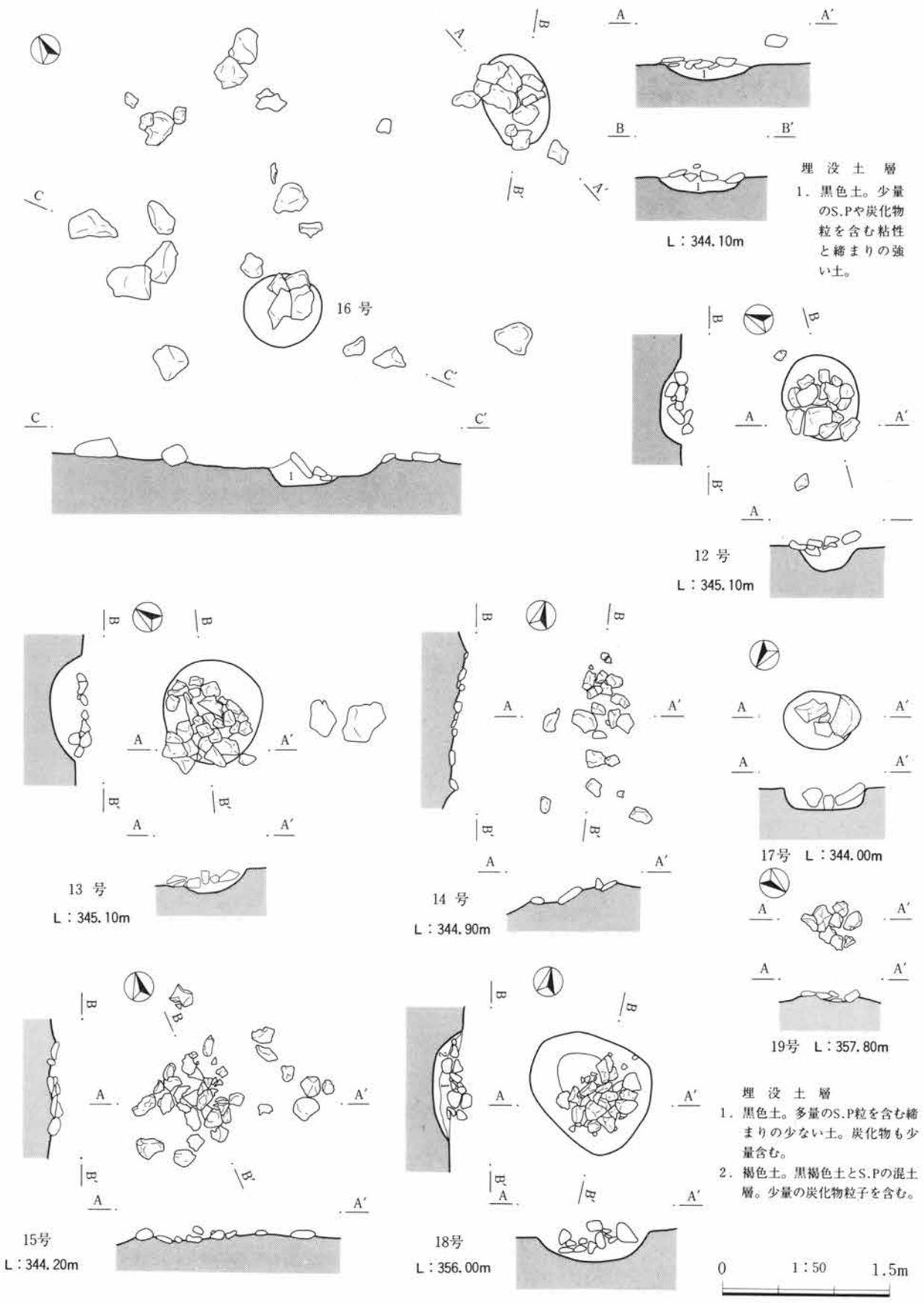
19号集石 84 B 29グリッドに位置する。径10～20cmの礫8個が、径50cmの範囲に密集している。土壌の有無は不明。

3. 集石

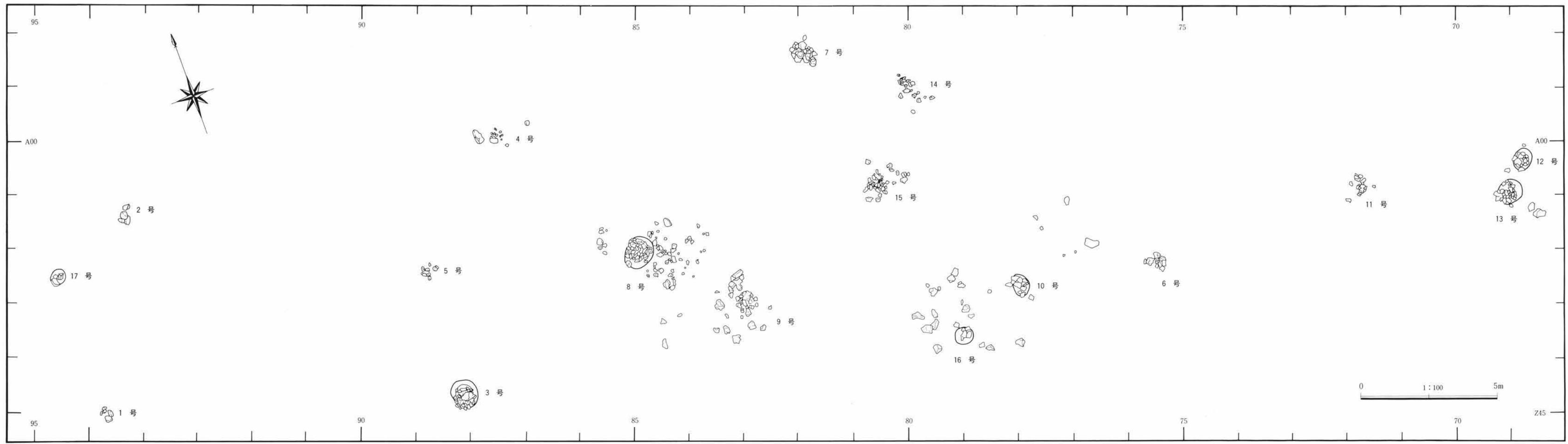


第32図 集石(1~9・11号)

II. 縄文時代の遺構と遺物

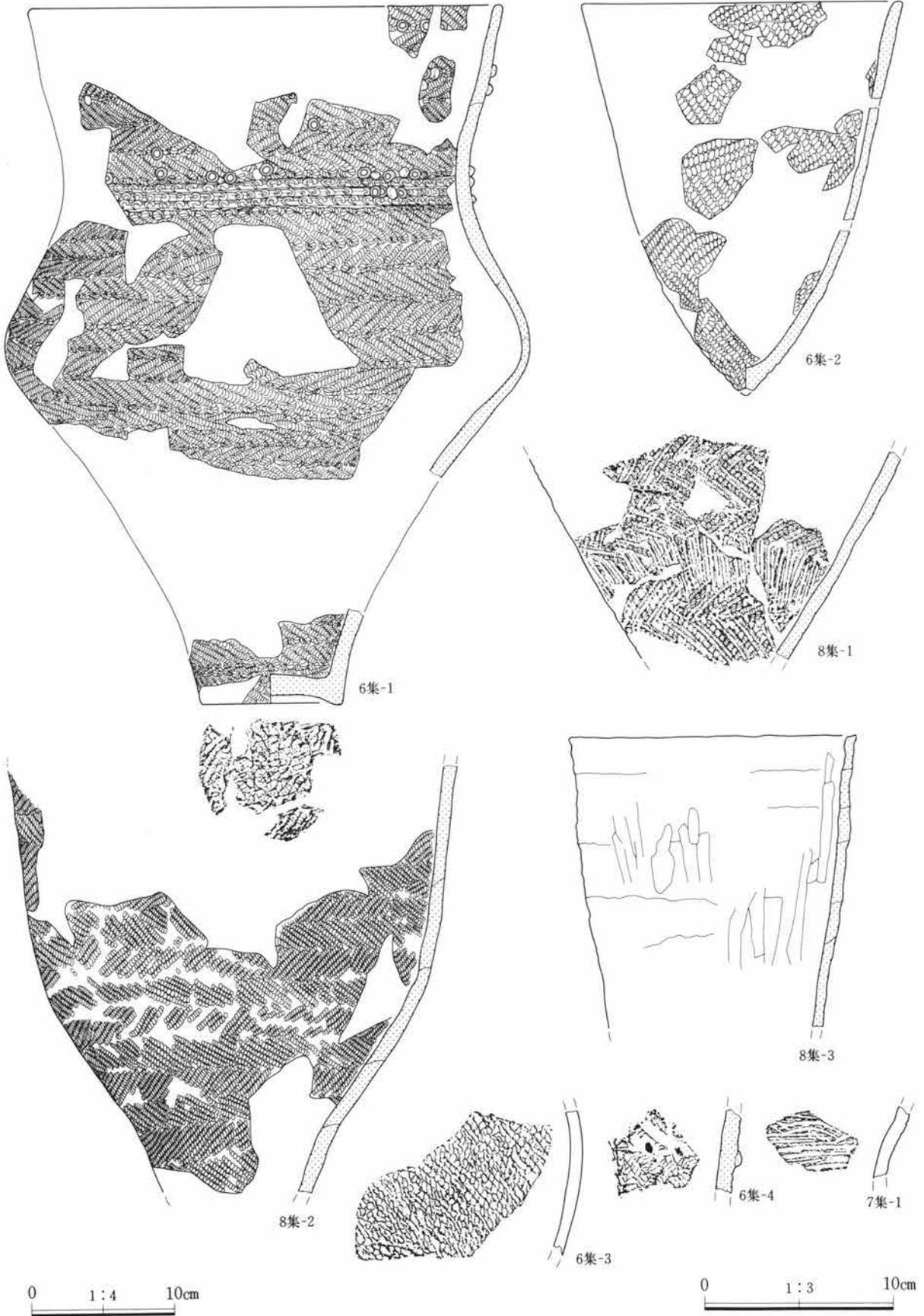


第33図 集石(10・12~19号)



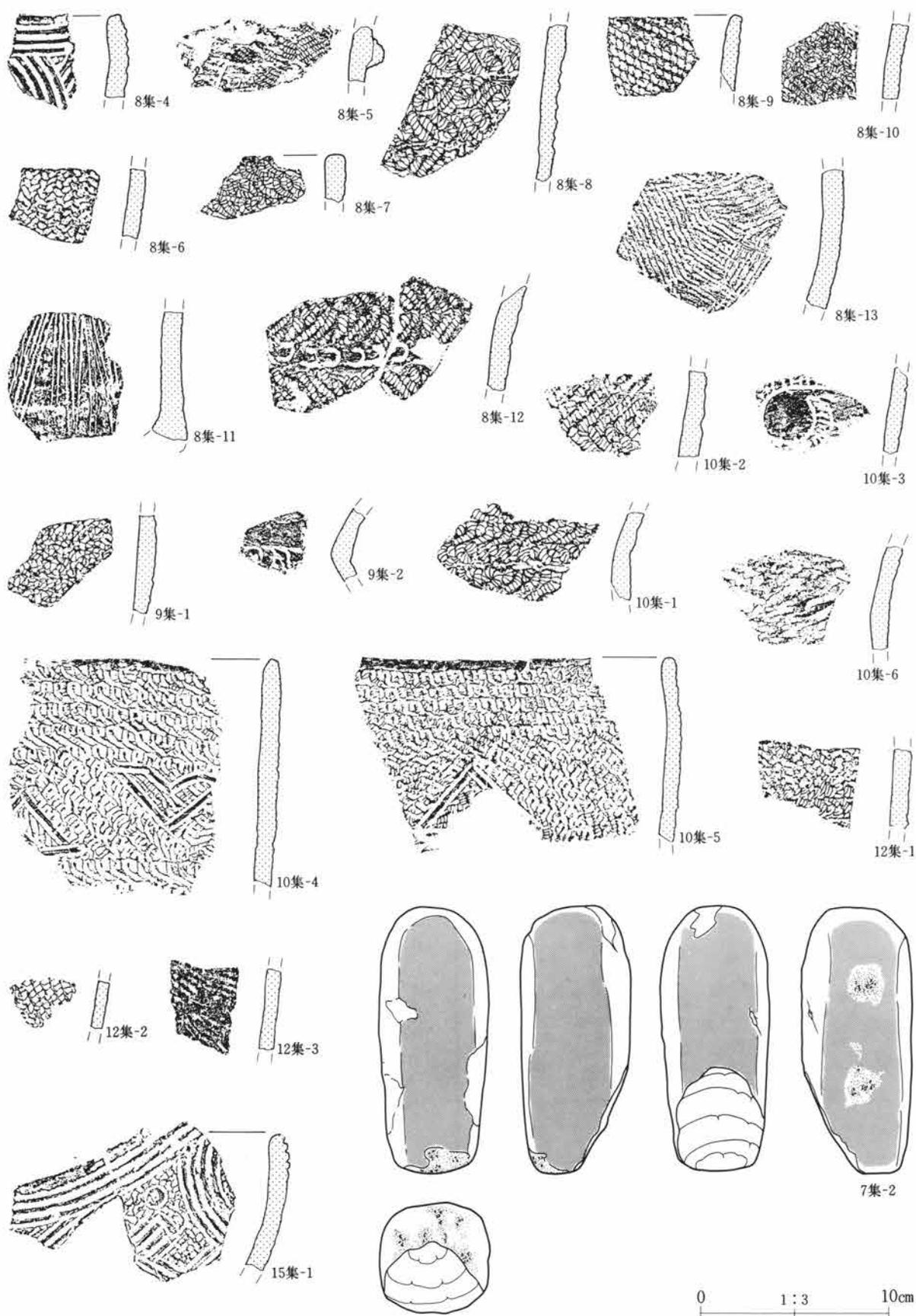
第34図 集石の位置 (1~17号)

3. 集 石



第35图 集石出土遺物(6~8号)

II. 縄文時代の遺構と遺物



第36図 集石出土遺物 (7~10・12・15号)

4. 土 壙

検出された土壙は125基を数えるが、遺物等を伴出するものが少なく、その機能・用途については確定できないものが多い。しかし、おおよその帰属時期については、竪穴住居の埋没土との比較や空間的な分布状態等から、123基が縄文時代前・中期に比定され、また、残りの2基のうち1基が奈良時代、他の1基が古墳時代にそれぞれ比定される。

縄文時代の土壙の分布は、竪穴住居の占地するA・Z区と住居の見られないB・C区の2区域に大きく分かれるが前者には前期の遺物を、後者には中期の遺物をそれぞれ伴う例が多く、両者は時期的にも空間的にも分離されるものと考えられる。各区域から検出された土壙は、A・Z区が70基、B・C区が53基である。

形態については、平面形よりA・Bの2種類に、また断面形よりa～dの4種類に分類される。平面形による分類でみると、A・Z区では圧倒的にA形態が多く、B・C区ではA・B両形態が相中ばしている。A・Z区に多いA形態を断面形による分類ごとにとみると、a～d類が51基と最も多く、次いでb類、c・d類の順となる。一般的には貯蔵穴と考えられているc類の袋状土壙は、両区域に4例づつ計8基認められるが、A形態の中で占める割合は、d類と同様極めて少ない。B・C区で主体を占めるB形態は、a・b類がほぼ同じ比率で全体の80%を占め、袋状のc類は全く存在しない。

先述したように、土器等の遺物を伴う土壙は少ないが、底面近くより完形に近い土器が横転した状態で出土しているものに、54・61・83・119・121号土壙がある。95号土壙からは多量の土器片が埋没土の中～下層にかけて出土している。完形土器を出土している土壙は、総てA-a形態をもつという点で共通している。

また、埋没土の上～中層より、径20～40cmの比較的大形の礫1点を出土するものに26・44・48・125

号があるが、これらは総てA-b形態をとる点で共通しており、前述のA-a形態の土壙との相違を含めて、機能・用途を想定する上で注意される。

各土壙の埋没状態は、黒色土あるいは暗褐色土を主体とした土が堆積しているが前者はレンズ状の堆積をなすケースが多く、後者は不規則な互層堆積となるものが多い。こうした埋没土や堆積状態の相違が、自然あるいは人為的な埋没状態を反映していると考えられることも可能であるが、断定できるまでには至っていない。以下、代表的な土壙について説明を加える。(遺物観察表：79頁)

完形土器を伴出する土壙 54・61・83・121号土壙の4基が存在する。いずれの土壙もA-b形態を呈し、上端での直径が90～150cmの規模をもつ。出土土器は完形あるいは半完形であり、61・83号は底面に密着し、54・121号は底面より6～16cm浮いているが、いずれも横転した状態で出土している。83号の土器(No.2)は倒立して出土しているが、当土壙は風倒木によって持ちあげられ、その原位置が約90度ずれてしまった状態を示しており、本来の埋没状態は横転していたものと考えられる。また、埋没土中からはNo.1・3などの大形破片や打製石斧1、加工・使用痕ある石器2、敲石1点などの石器が出土している。各土壙内には、黒褐色土やロームブロック混じりの暗褐色土がレンズ状に堆積している。各土壙の帰属時期は、出土土器の型式から判断して54号が関山Ⅱ式期、61号が五領ヶ台式期、83号が加曾利E1式期、121号が黒浜式期に比定される。

石を伴う土壙 26・44・48号の3基が存在する。いずれの土壙もA-b形態を呈し、上端での直径が1.2～1.4mの規模をもつ。径20～40cmの礫1点を伴い、26号は底面にはほぼ密着しているが、44・48号の場合は底面より12～18cm浮き上がっている。埋没土は、ロームの粒子やブロックを少量含んだ黒色土あるいは黒褐色土がレンズ状に堆積している。遺物は、埋没土中より少量の土器片が出土しているのみである。また、26号の埋没土中から広葉樹材の樹皮炭化物が1点出土している。各土壙の所属時期は、出土

II. 縄文時代の遺構と遺物

土器より、26・44号が関山Ⅰ式期であるが、48号については不明である。

フラスコ状の土壙 A-c形態に属する土壙であり、計8基検出されている。25・57・62・95号はそのうちの代表的な土壙であるが、直径が1.3~1.6mの規模をもち、壁面は100~120度の角度でオーバーハングしている。62号は、上端の開口部付近が攪乱を受けている。各土壙の埋没土は、ロームのブロックや粒子を含んだ黒褐色土がレンズ状に堆積しており、中央部に比べて比較的壁際の埋没が遅い状況も認められるが、いずれも自然埋没と思われる。遺物は、95号を除いて少量であるが、95号からは土器片

50点と磨製石斧1、打製石斧1、使用・加工痕ある石器6、敲石1点の他に剥片150点ほどが、埋没土の中層から下層にかけて出土している。各土壙の所属時期は、25号が関山Ⅰ式期、95号が諸磯b式期に比定されるが、他は不明である。

陥し穴状の土壙 52号1基のみであり、A-a形態を呈する。規模は径1.5m、深さ58cmである。底面には、細い棒状の刺突具を打ち込んだか、あるいは埋填したと思われる径10~15cm、深さ10cm前後の小穴が16個検出されている。小穴内には、締まりの弱い黒色土が堆積していた。遺物は、関山式期の土器片が1片検出されたのみである。

第1表 土壙の規模・形態一覧

(単位:m)

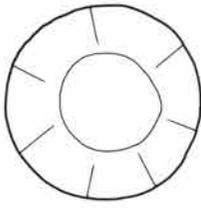
番号	位置	形態	規模(①直径②深さ)	時期	番号	位置	形態	規模(①直径②深さ)	時期
1	81A32	A-a	①1.28×1.16 ②0.38	関山Ⅰ式期 〃 関山Ⅱ式期 黒浜式期	21	76A22	A-d	①0.94×0.88 ②0.40	関山Ⅰ式期
2	87A31	A-c	①1.14×1.00 ②1.50		22	78A22	A-b	①1.60×1.53 ②0.54	関山Ⅰ式期 〃 諸磯a式期 黒浜式期 関山Ⅰ式期 黒浜式期 関山Ⅰ式期 関山式期 関山Ⅰ式期
3	84A32	A-a	①1.34×1.31 ②1.00		23	77A21	A-b	①1.12×1.10 ②0.28	
4	85A31	A-a	①1.44×1.20 ②1.30		24	78A21	A-b	①1.59×1.48 ②0.40	
5	84A30	A-b	①1.28×1.14 ②0.28		25	81A21	A-c	①1.33×1.12 ②0.85	
6	78A36	A-a	①1.38×1.26 ②0.32		26	82A21	A-b	①1.23×1.22 ②0.58	
7	77A37	A-a	①1.70×1.46 ②0.90		27	83A18	A-a	①1.17×1.06 ②1.22	
8	75A36	A-a	①1.18×1.24 ②0.56		28	82A17	A-a	①1.44×1.29 ②0.52	
9	81A23	A-a	①1.38×1.36 ②0.40		29	84A17	B-b	①1.20×0.98 ②0.28	
10	74A35	A-b	①1.26×1.06 ②0.44		30	85A24	A-a	①1.41×1.32 ②0.55	
11	74A34	A-a	①0.95×0.88 ②0.30		31	89A22	B-b	①1.52×1.26 ②0.38	
12	71A26	A-a	①1.28×1.12 ②0.54		32	87A16	A-a	①1.33×1.20 ②0.42	
13	83A38	A-d	①0.62×0.52 ②1.28		33	88A16	A-c	①1.58×1.58 ②0.50	
14	86A33	A-a	①0.88×0.80 ②0.40		34	85A13	A-a	①2.07×1.84 ②0.85	
15	98A28	A-b	①1.30×1.22 ②0.32		35	91A16	A-a	①1.51×1.38 ②0.62	
16	98A28	A-d	①2.04×1.80 ②0.98		36	98A25	A-a	①1.48×1.38 ②1.12	
17	75A26	A-b	①1.62×1.46 ②0.32		37	88A25	A-a	①1.49×1.30 ②0.68	
18	71A22	A-b	①1.52×1.38 ②0.50		38	74A16	A-b	①1.45×1.34 ②0.38	
19	74A23	B-b	①1.86×1.27 ②0.40		39	74A17	A-a	①1.58×1.46 ②0.71	
20	75A24	A-b	①1.12×0.93 ②0.22	40	77A14	A-b	①1.49×1.35 ②0.58		

4. 土 壙

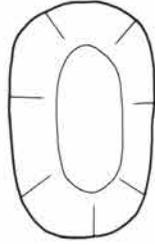
番号	位置	形態	規模 (①直径②深さ)	時 期	番号	位置	形態	規模 (①直径②深さ)	時 期
41	96A17	A-b	①1.39×1.38 ②1.28	古墳時代? 関山Ⅰ式期	84	93B30	B-a	①0.68×0.51 ②0.40	諸磯b式期
42	83A12	A-a	①1.42×1.26 ②0.48		85	93B28	A-a	①1.60×1.46 ②0.87	
43	84A11		①1.58×1.38 ②1.32		86	85B25	B-a	①1.63×1.18 ②0.54	
44	80A12	A-b	①1.36×1.28 ②0.45		87	97B22	B-d	①0.98×0.80 ②0.39	
45	79A14	A-b	①1.28×1.09 ②0.40		88	95B18	A-d	①0.81×0.69 ②0.44	
46	65A12	B-b	①1.34×1.02 ②0.70		89	78B18	B-d	①0.87×0.67 ②0.66	
47	80A17	B-b	②2.04×1.58 ②0.34		90	91B17	A-a	①0.90×0.86 ②0.36	
48	70A10	A-b	①1.14×1.05 ②0.28		91	87B14	A-a	①0.85×0.80 ②0.72	
49	88A13	A-a	①1.24×1.10 ②0.55		92	86B08	B-d	①1.02×0.64 ②0.20	
50	75A40	A-c	①0.96×0.91 ②0.56		93	90B05	B-a	①0.92×0.68 ②1.10	
51	84A20	A-a	①1.49×1.42 ②0.86	94	92B29	B-a	①1.38×0.92 ②0.72		
52	73A26	A-a	①1.54×1.49 ②0.58	95	92B08	A-c	①1.64×1.58 ②0.48	諸磯b式期	
53	75A11	A-a	①1.38×1.23 ②0.57	96	85B07	B-d	①0.78×0.62 ②0.32		
54	87A29	A-a	①1.50×1.37 ②0.52	97	88B06	B-a	①1.10×0.86 ②0.48		
55	76A19	A-a	①1.48×1.22 ②0.25	98	89B05	A-b	①1.03×0.90 ②0.22		
56	79B49	A-b	①1.30×1.12 ②0.42	99	90B03	A-a	①0.79×0.72 ②0.44		
57	77B05	A-c	①1.60×1.42 ②0.51	100	89B06	A-a	①1.60×1.35 ②0.50		
58	90C22	A-c	①1.13×1.00 ②0.38	101	95B02	A-d	①1.19×1.05 ②0.46		
59	80C12	A-a	①1.32×(1.3) ②0.84	102	87B48	B-a	①2.50×1.52 ②0.60		
60	89C22	B-b	②2.32×1.08 ②0.58	103	94B01	B-b	①1.89×1.22 ②0.46		
61	95C12	A-b	①0.86×0.74 ②0.21	104	95A47	A-d	①0.96×0.88 ②0.60		
62	91C10	A-c	①1.24×1.18 ②0.79	105	87B06	A-a	①0.87×0.82 ②0.46		
63	92C09	A-a	①1.44×1.36 ②0.32	106	86B06	A-a	①0.54×0.42 ②0.33		
64	91C12	B-b	①1.38×0.94 ②0.39	107	95B24	B-d	①0.72×0.48 ②0.28		
65	92C11	A-b	①1.52×1.43 ②0.28	108	86B00	B-a	①1.00×0.58 ②0.44		
66	94C12	B-b	①1.90×1.56 ②0.32	109	88B39	B-a	①1.04×0.85 ②0.25		
67	94C12	A-b	①1.29×1.12 ②0.34	110	95A00	A-a	①1.30×1.22 ②0.84		
68	97C10	B-b	①1.41×1.16 ②0.23	111	91Z49	A-a	①1.40×1.24 ②1.02	諸磯式期 黒浜式期	
69	99C10	A-b	①1.12×0.98 ②0.15	112	100Z47	A-a	①1.40×1.22 ②0.95		
70	98C08	B-b	①0.96×0.68 ②0.20	113	94A03	A-a	①1.58×1.48 ②1.00	関山Ⅱ式期	
71	91B47	A-a	①1.58×1.49 ②0.64	114	91A02	A-a	①1.35×1.18 ②0.82	茅山式期 〃	
72	89B45	A-b	②2.83×2.52 ②0.48	115	91A02	A-a	①1.25×1.18 ②0.68		
73	78B36	B-a	①1.33×1.01 ②0.46	116	89A02	B-a	①1.55×1.25 ②0.68		
74	93B40	A-a	①1.31×1.18 ②0.42	117	88A02	A-a	①0.98×0.97 ②0.65		
75	93B39	A-a	①0.82×0.80 ②0.23	118	88A02	A-a	①1.32× ? ②0.70		
76	91B37	B-d	①1.82×1.35 ②0.60	119	88A02	A-a	①1.65×1.60 ②0.72		
77	90B38	B-a	①1.22×0.68 ②0.33	120	98Z49	A-a	①1.20×1.12 ②0.52		
78	87B37	B-a	②2.18×1.02 ②0.32	121	85Z48	A-a	①1.18×1.18 ②0.28		黒浜式期 奈良時代
79	95B33	A-d	①1.08×1.05 ②0.25	122	83Z48		①2.77×1.62 ②0.20		
80	90B33	B-a	①1.60×1.32 ②0.52	123	71A23	A-a	①1.12× ? ②0.21		
81	92B31	A-a	①1.13×1.12 ②0.38	124	96Z48	B-b	①(1.53)×(1.19)		
82	94B31	B-a	①1.95×1.04 ②0.42	125	91A01	A-b	①(1.23)×(0.92)		
83	96B33	A-b	①0.90× ? ②0.45	加EⅠ式期					

II. 縄文時代の遺構と遺物

〈平面形〉

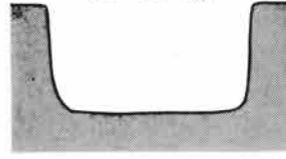


A形態

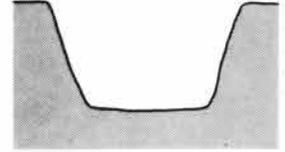


B形態

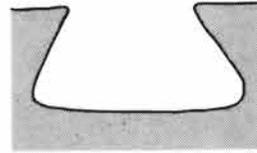
〈断面形〉



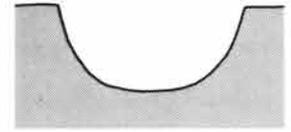
a類



b類



c類



d類

土壌の分類

①平面形

A形態. 円形 (短径:長径=1:1~1:1.2)

B形態. 楕円形 (短径:長径=1:1.2以上)

②断面形

a類. 底面が平坦で壁面がほぼ垂直に立ち上がる。

b類. 底面が平坦で壁面の勾配が60~80度で立ち上がる。

c類. 壁面が内傾してフラスコ状を呈する。

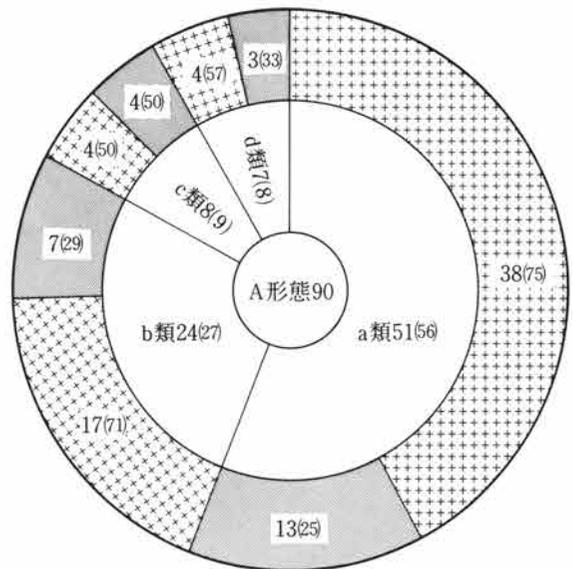
d類. 底面が丸みを持ち、鍋底状を呈する。



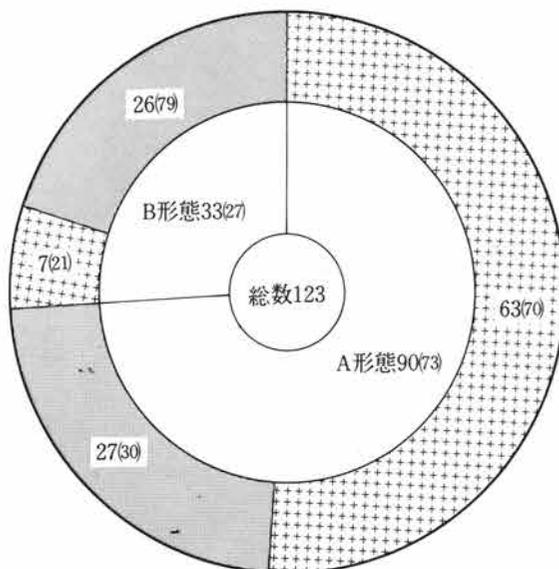
発掘区域 A・Z区



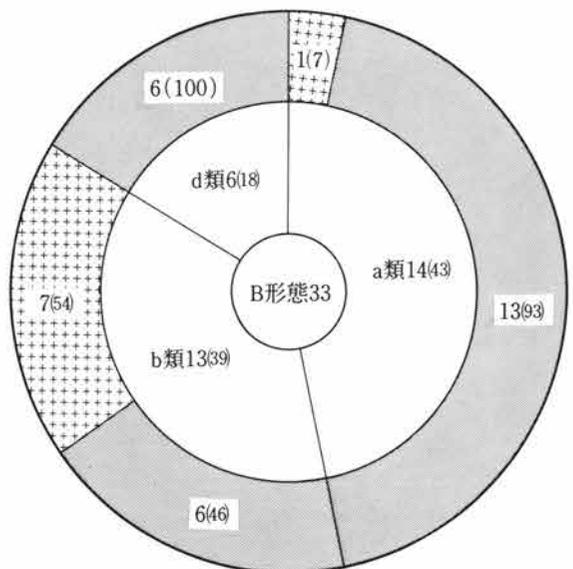
発掘区域 B・C区



[A形態の断面形別百分率]



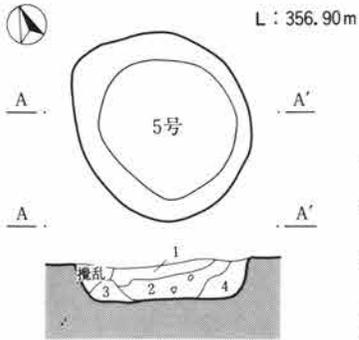
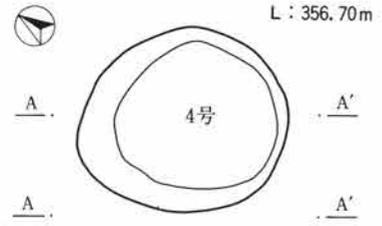
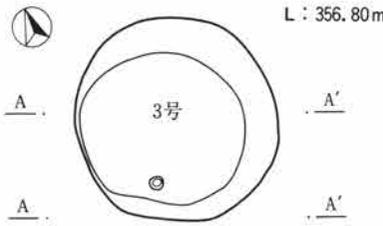
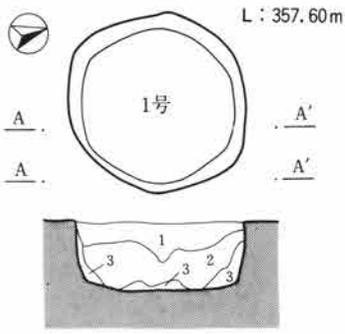
[土壌の平面形態別百分率]



[B形態の断面形別百分率]

第37図 土壌の形態分類と形態別百分率

4. 土 塚

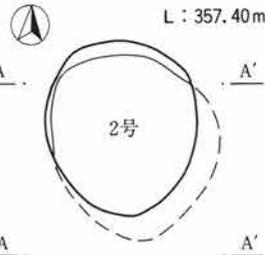


- 1号土塚
1. 黒褐色土。S.Pや炭化物粒を少量含む締まりの強い土。
 2. 黒褐色土。1層に類似するが、少量のロームブロックを含む。
 3. 暗褐色土。2層よりも色調が明るい。

- 3号土塚
1. 黒褐色土。S.Pを多量に含む。
 2. 黒褐色土。1層よりもS.Pが少量。
 3. 暗褐色土。1層よりも色調が明るい。
 4. 褐色土。S.Pやローム粒を多量に含む粘性と締まりの強い土。

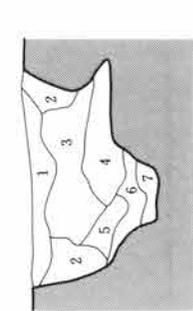
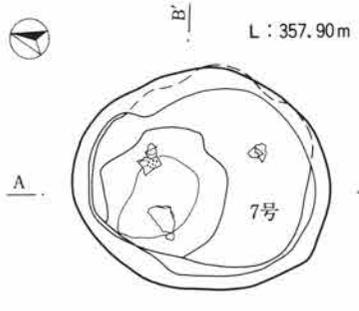
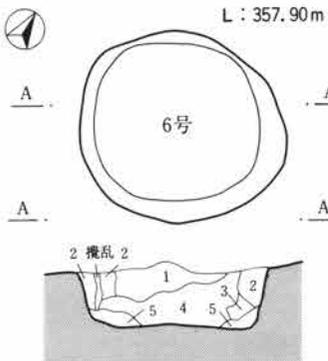
- 5号土塚
1. 暗褐色土。ローム粒を多量に含む。
 2. 暗褐色土。1層よりも色調が暗い。
 3. 黄褐色土。多量のローム粒を含む。
 4. 暗褐色土。1層に類似する。

- 6号土塚
1. 暗褐色土。S.Pや炭化物粒を少量含む、粘性が弱く締まりの強い土。
 2. 暗褐色土。褐色土ブロックを含む。
 3. 暗褐色土。1層に類似する。
 4. 黒褐色土。ロームブロックを含む。
 5. 褐色土。ローム粒を多量に含む。

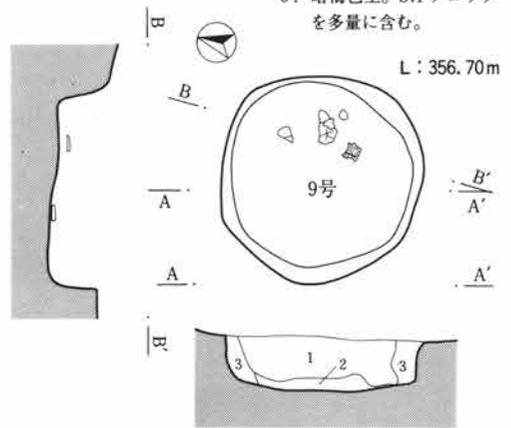


- 4号土塚
1. 黒褐色土。少量のS.Pを含む粘性と締まりの強い土。
 2. 暗褐色土。1層よりも色調の明るい土。
 3. 暗褐色土。2層に類似するが炭化物粒を含む。
 4. 暗褐色土。ローム粒を多量に含む。
 5. 褐色土。ローム粒・S.Pを多量に含む。

- 2号土塚
1. 暗褐色土。少量のS.Pを含む粘性の強い土。
 2. 暗褐色土。1層よりもS.Pを多く含む。
 3. 褐色土。S.Pやローム粒を多量に含む。
 4. 褐色土。3層よりも多くのローム粒を含む。
 5. 暗褐色土。S.Pブロックを多量に含む。



- 7号土塚
1. 暗褐色土。少量のS.Pを含む締まりの強い土。
 2. 暗褐色土。少量のローム粒・S.Pを含む。
 3. 黒褐色土。少量のS.Pや炭化物粒を含む。
 4. 黒褐色土。多量のS.Pブロックを含む。
 5. 褐色土。多量のS.Pやロームブロックを含む。
 6. 褐色土。5層よりも多くのロームを含む。
 7. 黄褐色土。多量のロームブロックを含む。

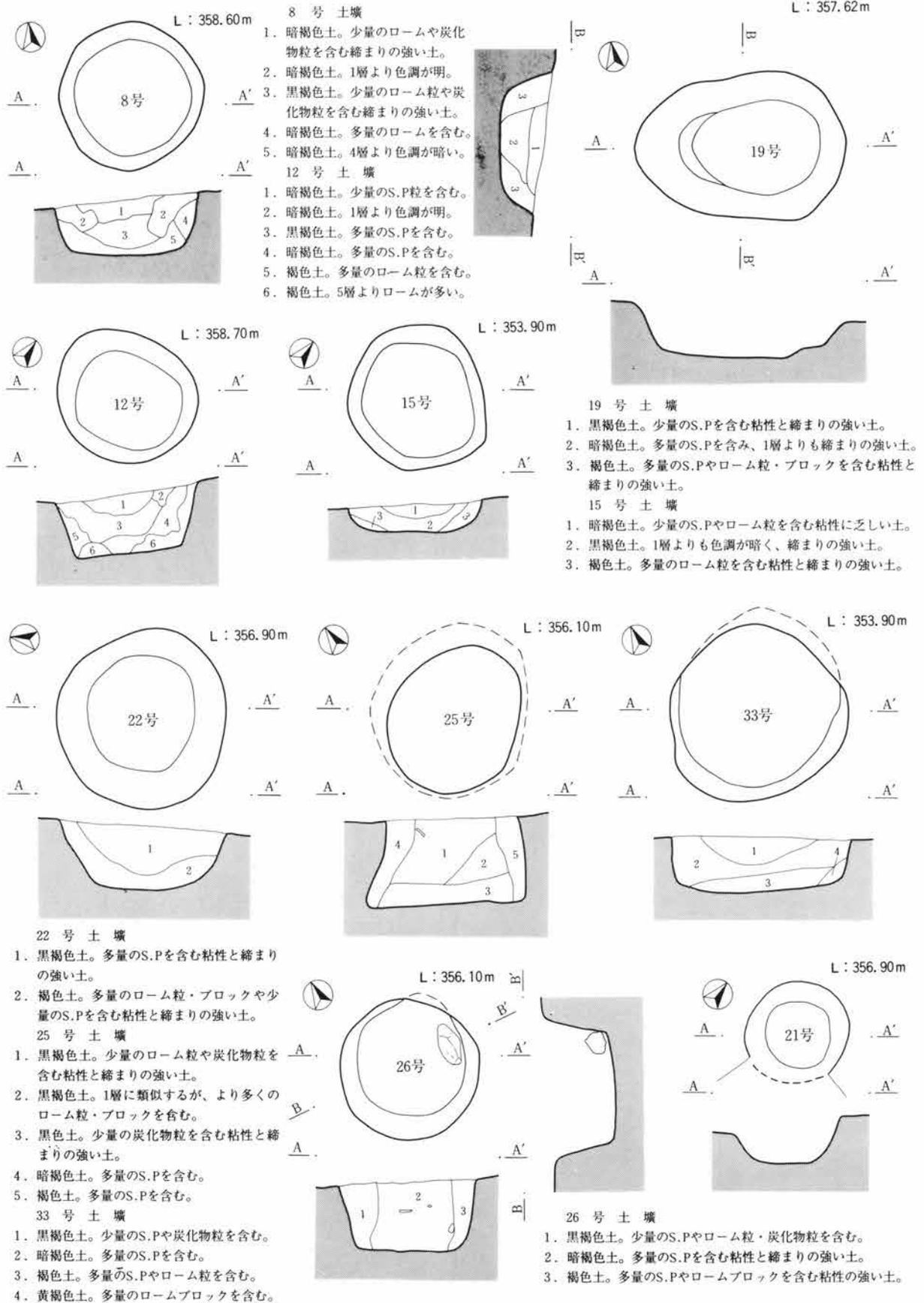


- 9号土塚
1. 黒褐色土。少量のS.Pを含む締まりのある土。
 2. 暗褐色土。多量のS.Pやロームブロックを含む粘性の強い土。
 3. 褐色土。2層よりも多くのローム粒を含む。

0 1:50 1.5m

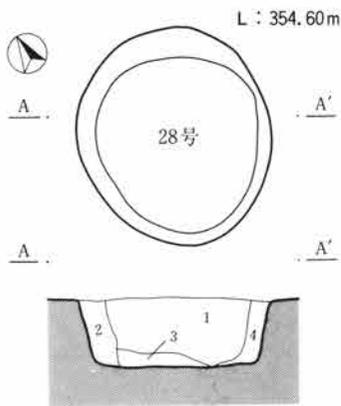
第38図 土塚 (1~7・9号)

II. 縄文時代の遺構と遺物



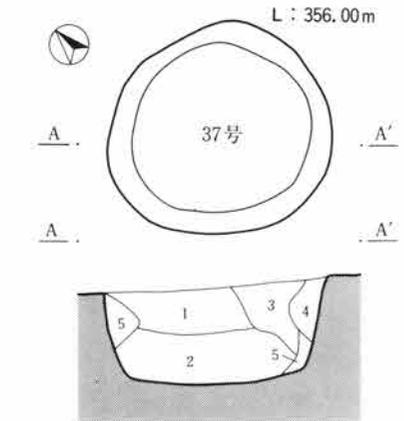
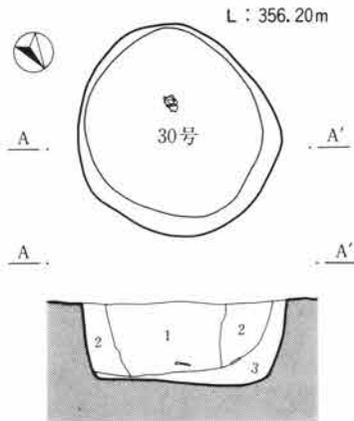
第39図 土壌 (8・12・15・19・21・22・25・26・33号)

4. 土 壤



28号土 壤

1. 黒褐色土。少量のS.Pを含む締まりの強い土。
2. 暗褐色土。少量のS.Pやローム粒を含む。
3. 褐色土。多量のS.Pやロームブロックを含む。
4. 暗褐色土。1層に類似するが、色調が明るい。



30号土 壤

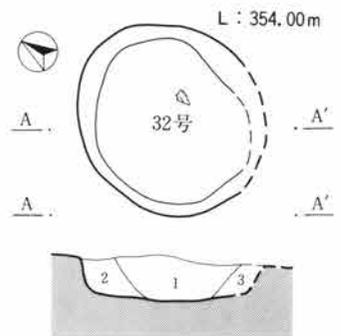
1. 黒褐色土。少量のS.Pを含む締まりのある土。
2. 褐色土。多量のS.Pやローム粒・ブロックを含む。
3. 暗褐色土。多量のS.Pやローム粒を含む。

37号土 壤

1. 黒褐色土。少量のS.Pや炭化物粒を含む。
2. 黒色土。粘性の強い土。
3. 暗褐色土。多量のS.Pを含む粘性と締まりの強い土。
4. 褐色土。3層に類似するが、色調がより明るい。
5. 黄褐色土。多量のS.Pやローム粒を含む。

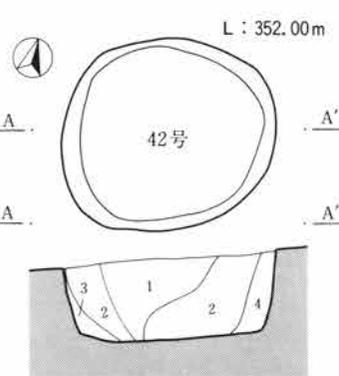
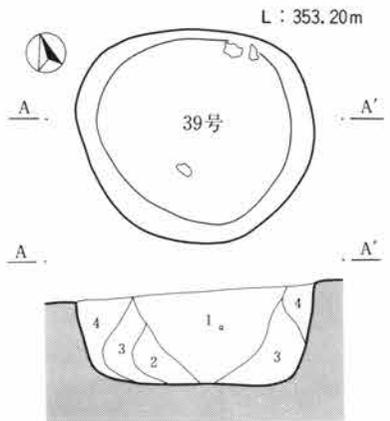
39号土 壤

1. 黒褐色土。少量のローム粒・S.Pを含む。
2. 暗褐色土。1層に類似するが、色調の明るい土。
3. 暗褐色土。多量のS.Pやローム粒を含む。
4. 褐色土。3層に類似するが、より多量のローム粒・ブロックを含む。



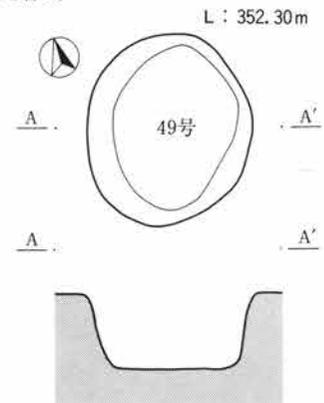
32号土 壤

1. 黒褐色土。多量のS.Pを含む粘性と締まりの強い土である。
2. 暗褐色土。少量のS.Pを含む。
3. 褐色土。多量のS.Pやロームブロックを含む。

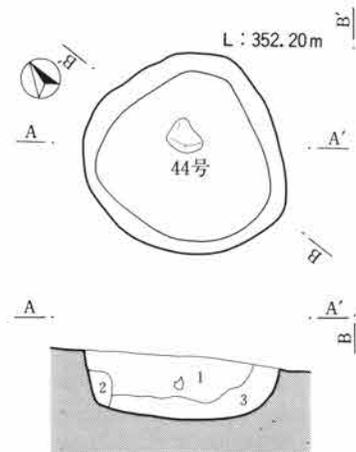


42号土 壤

1. 黒褐色土。少量のS.Pを含む粘性と締まりの強い土である。
2. 暗褐色土。多量のS.Pを含む粘性と締まりの強い土である。
3. 暗褐色土。2層に類似するが、より多くのS.Pやロームブロックを含む。
4. 褐色土。多量のS.Pを含み、ロームブロックが散在する。



49号

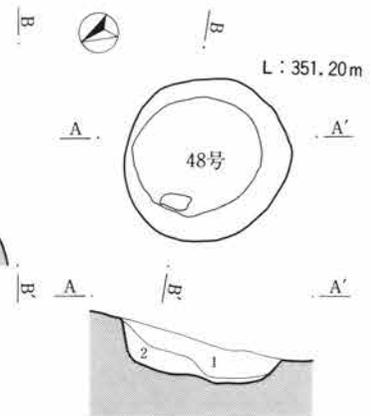


44号土 壤

1. 黒褐色土。少量のS.Pを含む締まりの強い土。
2. 褐色土。多量のS.Pを含む。
3. 褐色土。多量のローム粒やブロックを含む粘性と締まりの強い土。

48号土 壤

1. 黒色土。多量のS.Pや炭化物粒を含む。
2. 黒褐色土。多量のロームブロックと少量のS.Pを含む。

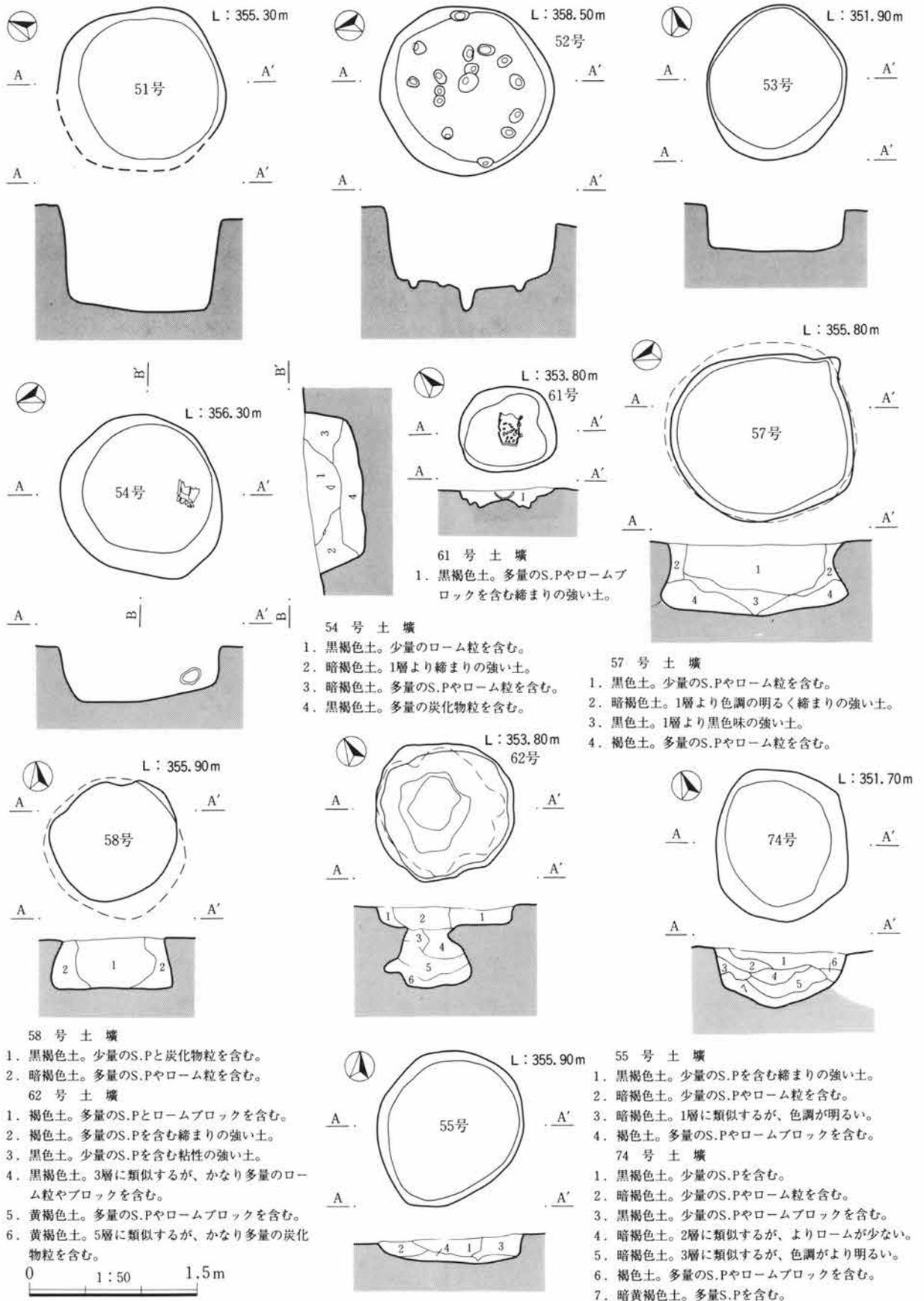


48号

0 1:50 1.5m

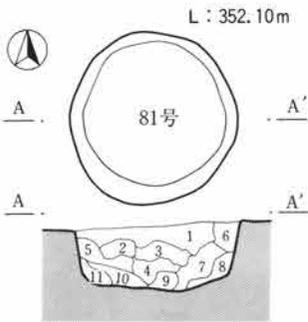
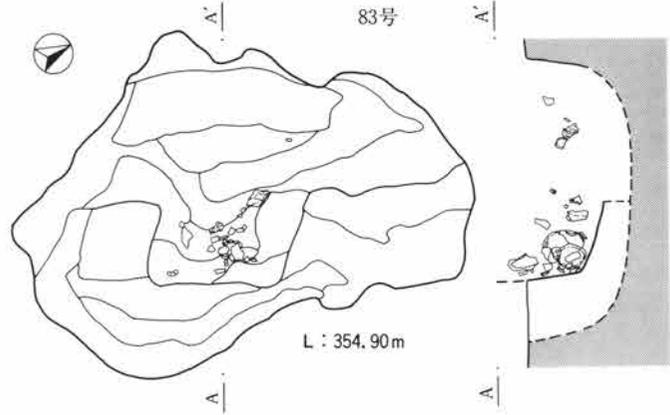
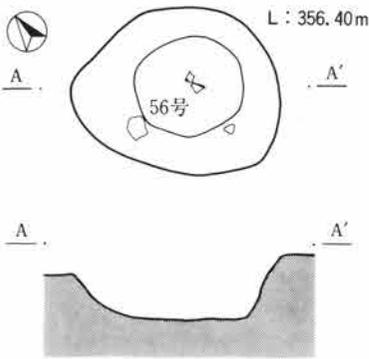
第40図 土 壤 (28・30・32・37・39・42・44・48・49号)

II. 縄文時代の遺構と遺物



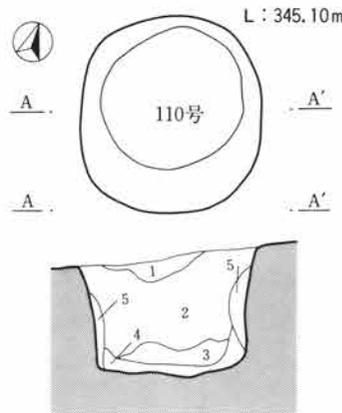
第41図 土壌 (51~55・57・58・61・62・74号)

4. 土 壙



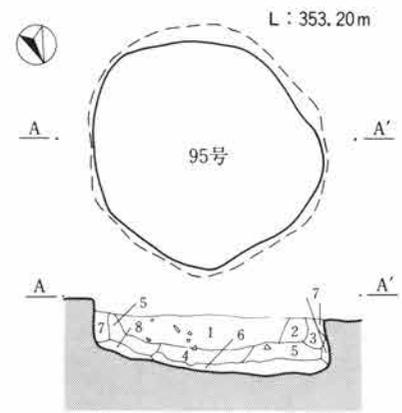
81号土壙

1. 黒褐色土。少量のロームブロックを含む。
2. 暗褐色土。1層より色調の明るい土。
3. 黒褐色土。少量のS.Pやローム粒を含む。
4. 黒褐色土。3層よりローム粒を多く含む。
5. 暗褐色土。黒色土とローム粒の混土层。
6. 黒褐色土。4層に類似する。
7. 暗褐色土。5層に類似する。
8. 黒褐色土。多量のS.Pを含む。
9. 黒褐色土。少量のS.Pやローム粒を含む。
10. 暗黄褐色土。褐色土とロームの混土层。
11. 黄褐色土。少量の黒色土を含むローム土。



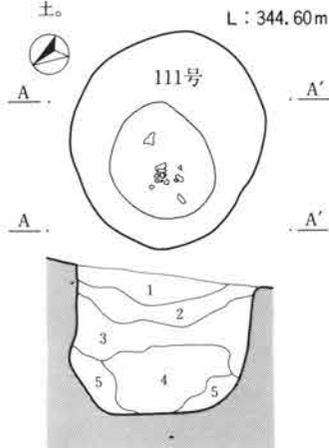
110号土壙

1. 暗褐色土。少量のローム粒を含む粘性土。
2. 黒褐色土。少量のローム粒・炭化物粒を含む。
3. 暗褐色土。多量のローム粒や焼土粒を含む。
4. 暗褐色土。多量のローム粒や炭化物粒を含む粘性と締まりの強い土。
5. 黄褐色土。褐色土とロームとの混土层。



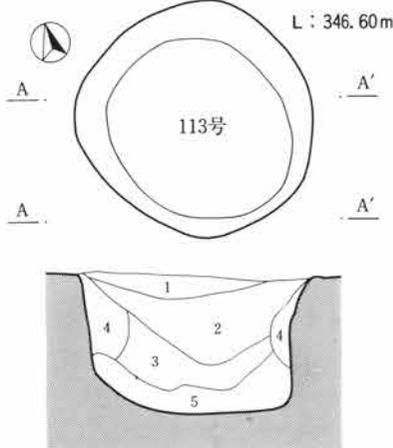
95号土壙

1. 黒色土。少量のS.Pやローム粒を含む。
2. 黒褐色土。少量のS.Pやローム粒を含む締まりの強い土。
3. 暗褐色土。多量のS.Pやローム粒を含む。
4. 暗黄褐色土。黒色土とロームとの混土层。多量のS.Pを含む。
5. 暗褐色土。多量のS.Pやローム粒を含む締まりの弱い土。
6. 暗褐色土。5層に類似するが、より多量のS.Pを含む。
7. 暗褐色土。黒色土とロームとの混土层で、締まりの弱い土。
8. 黄褐色土。ロームブロックに少量の黒色土を混じえた締まりの弱い土。



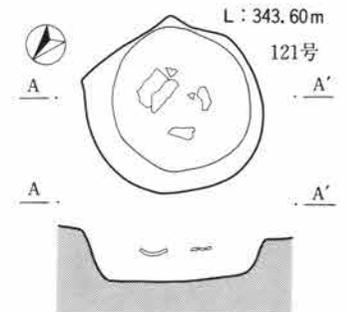
111号土壙

1. 黒褐色土。炭化物粒やローム粒を少量含む。
2. 暗褐色土。S.Pを少量含む粘性土。
3. 暗褐色土。2層より多くのローム粒を含む。
4. 暗褐色土。3層より締まりと粘性が弱い。
5. 黄褐色土。ロームと褐色土との混土层。



113号土壙

1. 黒褐色土。ローム粒を少量含む粘性と締まりのある土。
2. 暗褐色土。S.Pやローム粒を少量含む粘性土。
3. 暗褐色土。2層に類似するが、よりローム粒が多い。
4. 暗黄褐色土。ロームブロックに少量の褐色土が混入。
5. 暗黄褐色土。黒色土とロームブロックとの混土层。

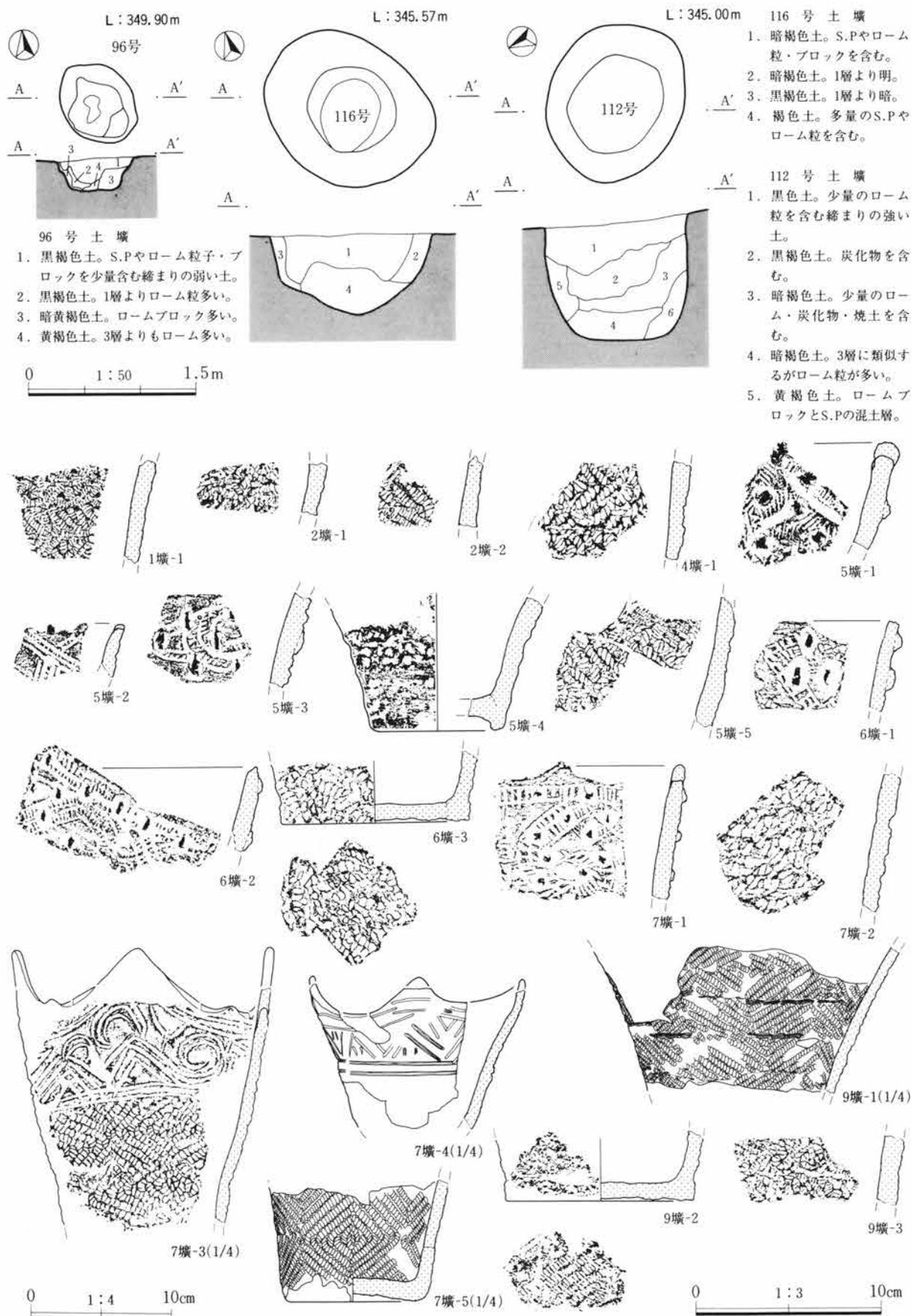


121号



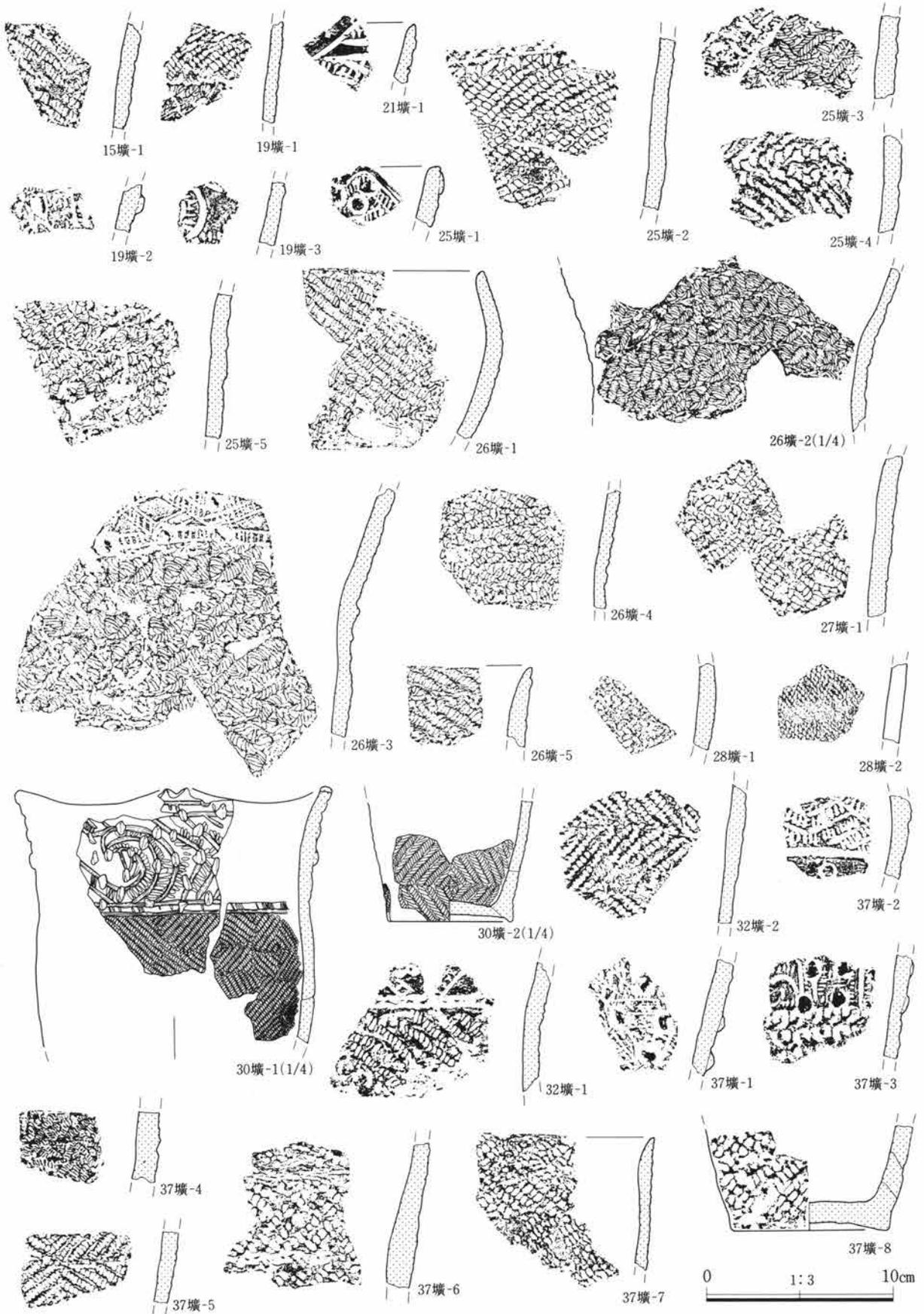
第42図 土壙 (56・81・83・95・110・111・113・121号)

II. 縄文時代の遺構と遺物



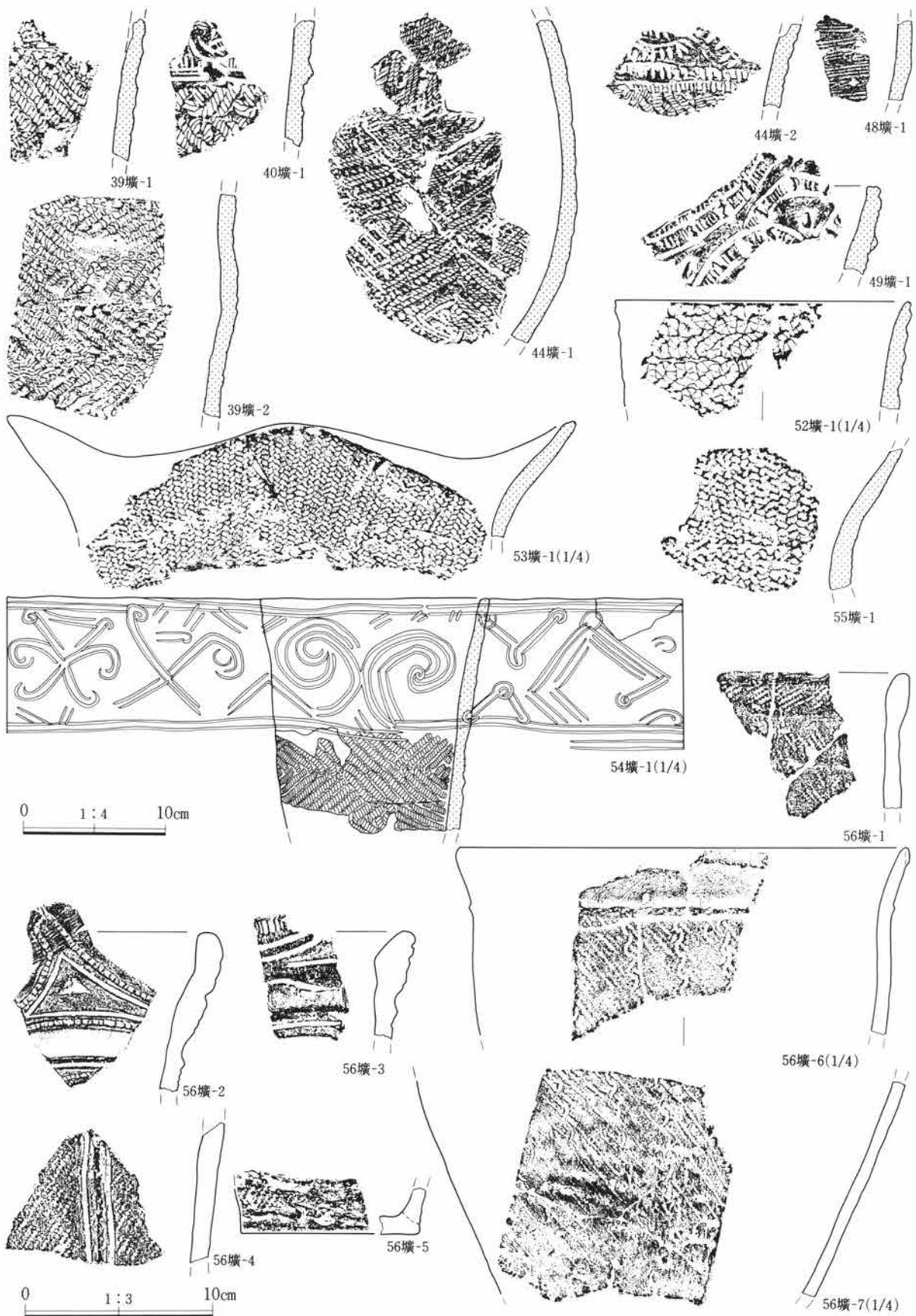
第43図 土壌 (96・112・116号) と出土遺物 (1・2・4~7・9号)

4. 土 壙

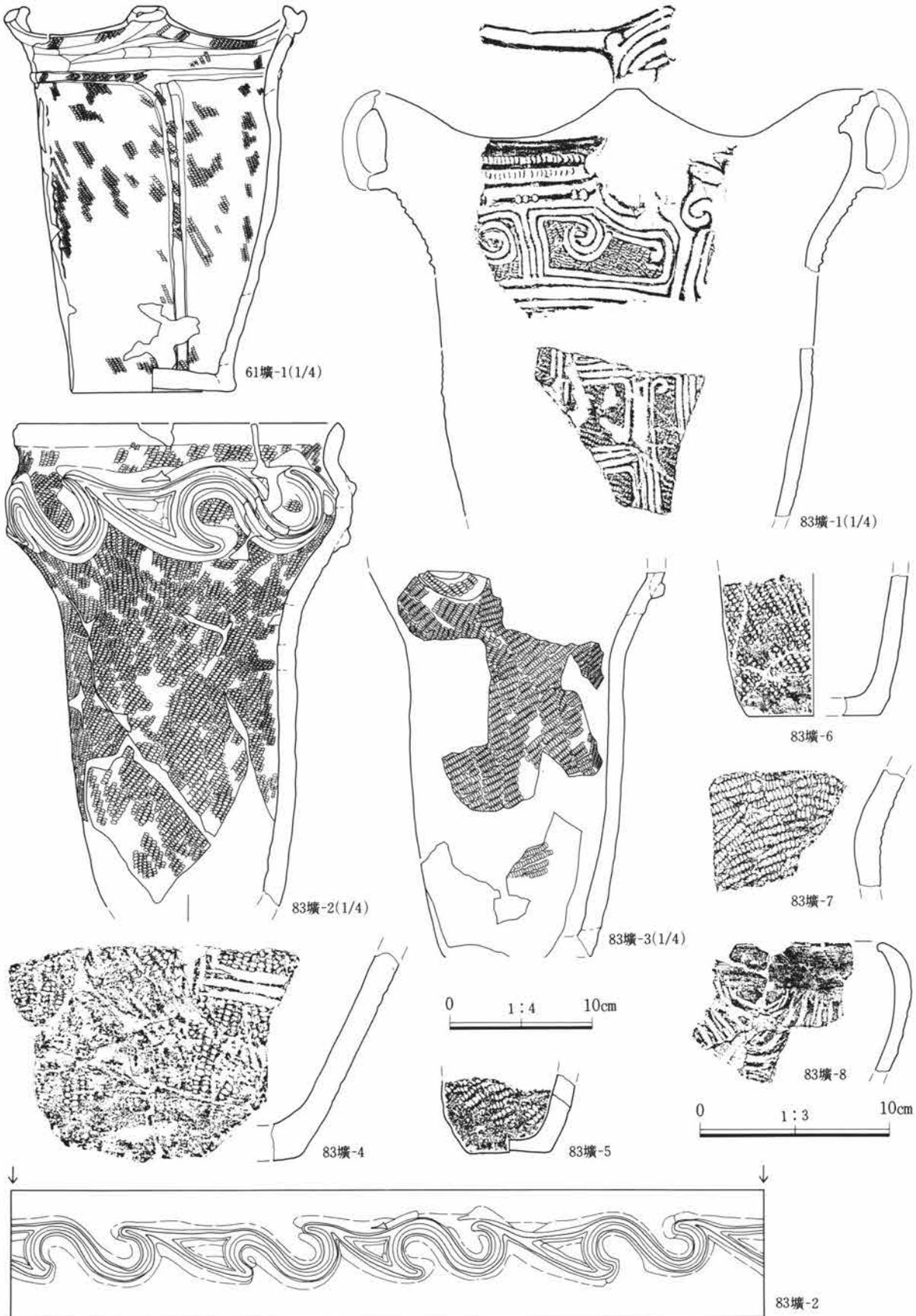


第44图 土壙出土遺物 (15·19·21·25~28·30·32·37号)

II. 縄文時代の遺構と遺物

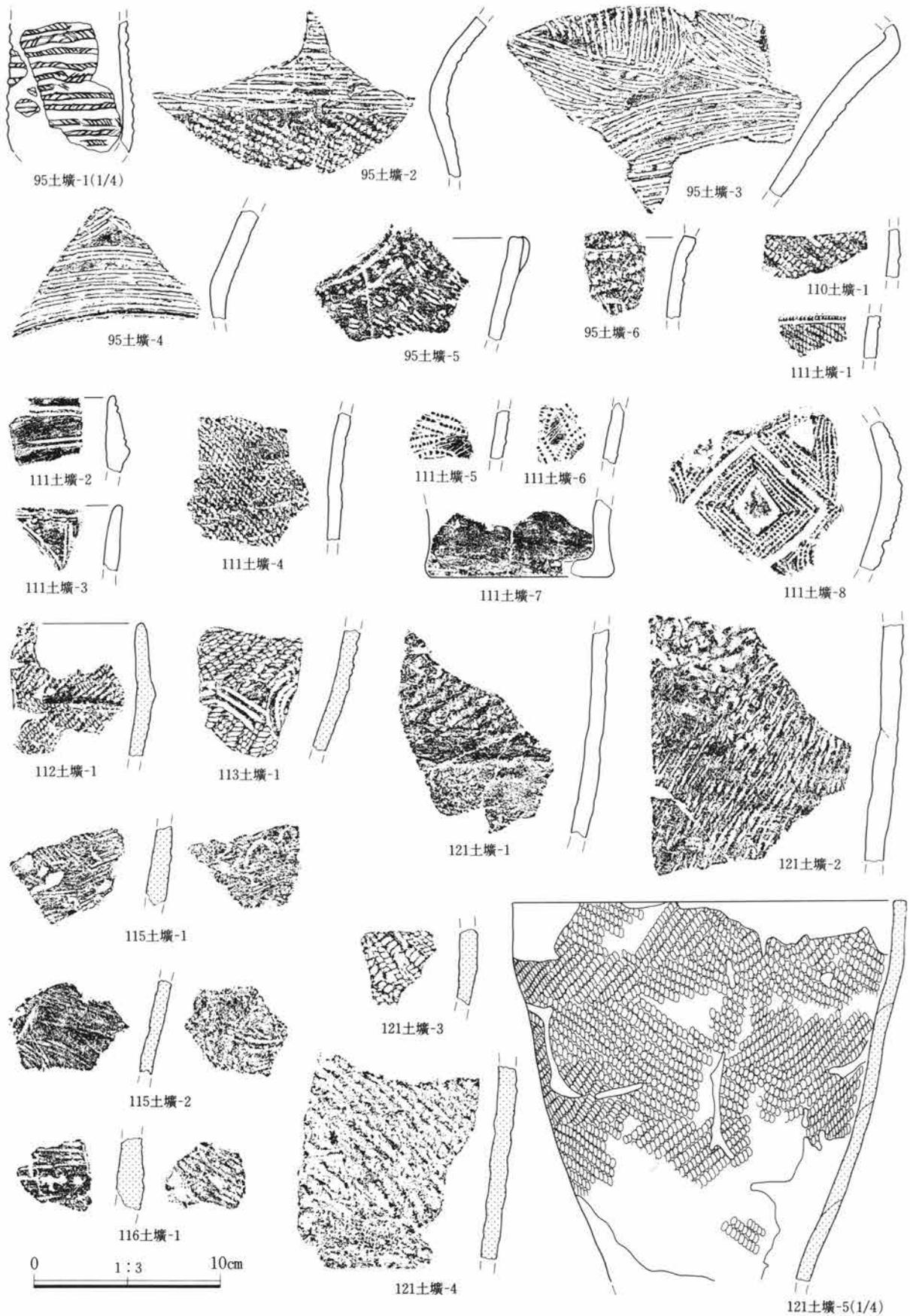


第45図 土壙出土遺物 (39・40・44・48・49・52~56号)



第46図 土壙出土遺物 (61・83号)

II. 縄文時代の遺構と遺物



第47図 土壙出土遺物 (95・110~113・115・116・121号)

5. 包含層の出土遺物

竪穴住居や土壙などの埋没土上層から出土した時期的に遺構に伴わない遺物や遺構以外の包含層（Ⅵ層）より出土したものは、土器6,211点、剥片を含む石器4,277点である。これらの遺物は時期的には前期を主体としているが、量的には少ないながらも草創期後半から後期初頭にわたって存在している。また、調査区域内におけるその分布は、当該区域の北および南端に位置する沖積地に臨むB・C区やA・Z区に偏在する傾向があり、馬背状丘陵の中央部にあたるB区南半では、その分布が極めて希薄となっている。

（1）土 器

6,211点の出土土器の時期別の内訳は、草創期後半のものが103点、早期740点、前期4,424点、中期790点、後期66点、不明88点である。

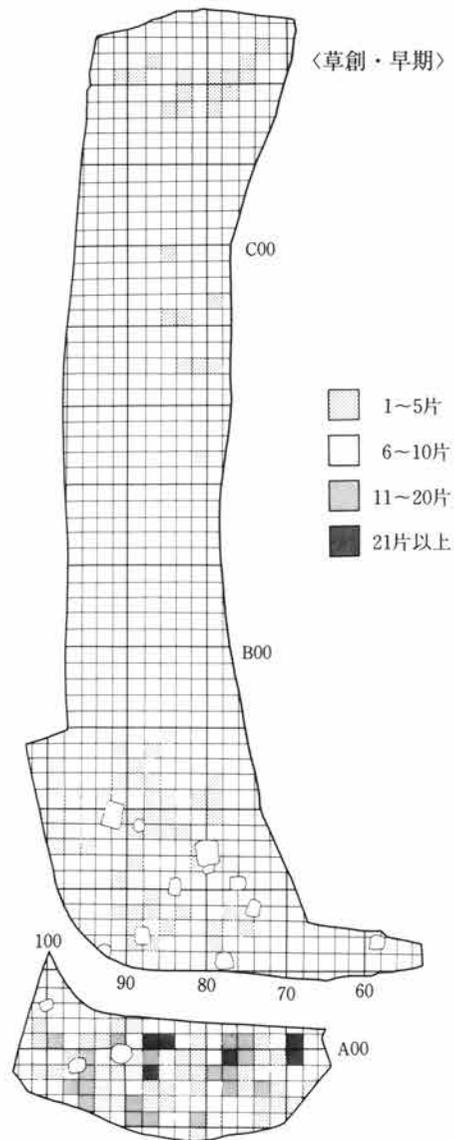
草創期後半に位置付けられる出土土器は、口唇部と胴部に文様帯を構成する井草Ⅱ式をはじめ、夏鳥式、稲荷台式やそれと併行する絡状体条痕文・無文土器などである。早期では「細久保式」に類似した刺突文をもつ山形押型文土器や三戸式、田戸下・上層式の沈線文土器、子母口式から茅山下・上層式とこれに併行する東北地方の槻木上層式系土器などの条痕文土器が出土しているが、量的には茅山式を中心とする条痕文土器が710点と全体の96%を占める。調査区内における分布は、南端のZ区を中心として北端のC区にもわずかに散在している。

前期では花積下層式から十三菩提式までの全型式を網羅的に出土しているが、主体をなすのは二ツ木式から諸磯c式までであり、他の型式は少量しか認められない。二ツ木式から関山式の土器は1,235点で、その分布は当該期に比定される2・5～7・9～11号住居の占地するA区やZ区を中心としており、B・C区にはほとんど認められない。黒浜式土器は、1,794点で、二ツ木・関山式土器とほぼ同様の分布

のあり方を示すが、A区よりもZ区により集中する傾向にある。諸磯a～c式土器は1,360点であり、このうちb式が55%（748点）を占める。その分布は、基本的には前二者と同様遺構の周辺に散在する傾向にあるが、より黒浜式土器の様相に近似する。

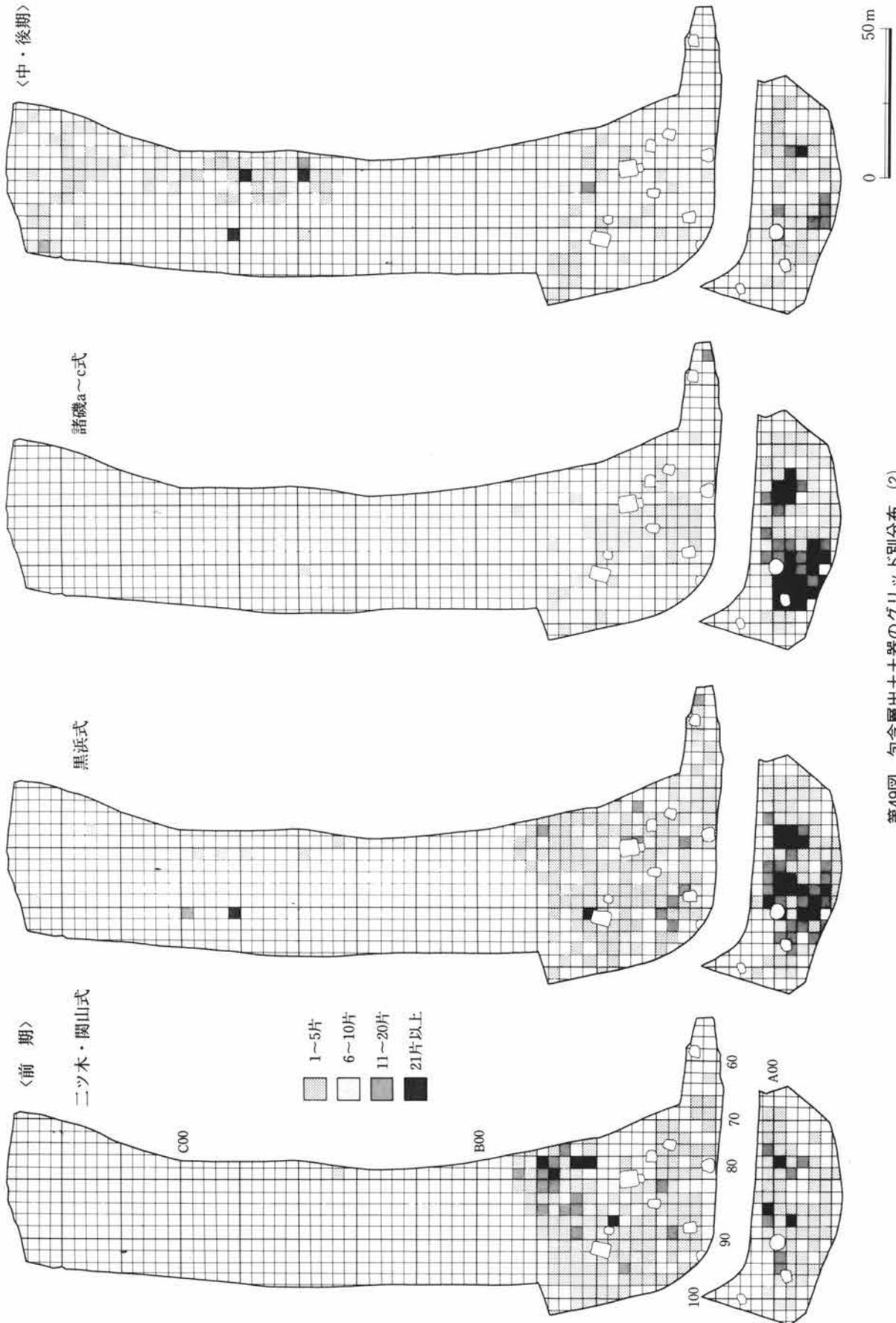
中期は五領ヶ台式から加曾利E2式にかけて網羅的に出土しているが、主体をなすのは加曾利E1式である。後期は称名寺I式から堀之内1式までであり、それ以降の土器は認められない。中・後期の分布は、当該期の土壙が占地するB・C区を中心としてC・Z区にまで散在している。

（遺物観察表：81頁）



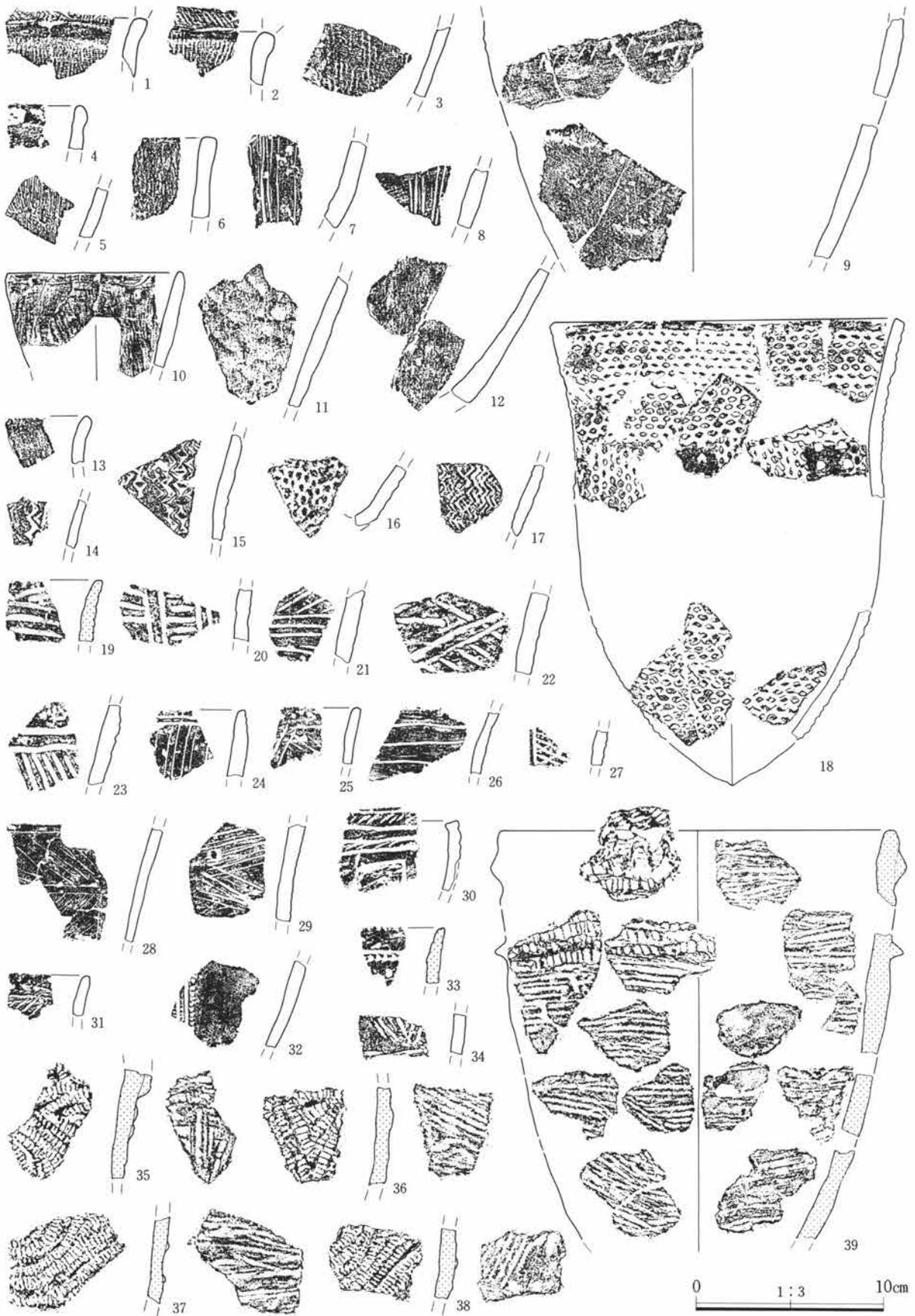
第48図 包含層出土土器のグリッド別分布 (1)

II. 縄文時代の遺構と遺物



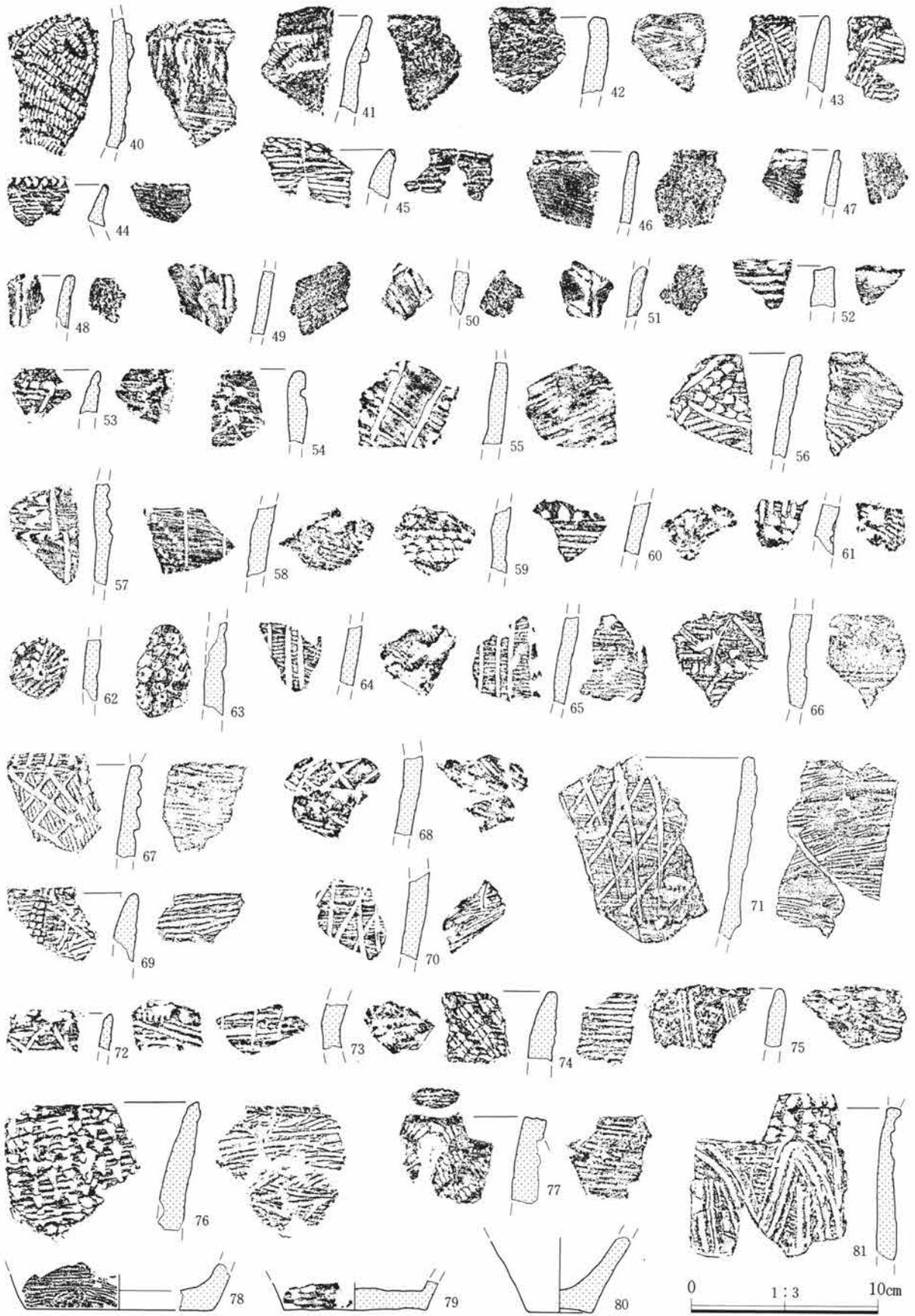
第49図 包含層出土土器のグリッド別分布 (2)

5. 包含層の出土遺物



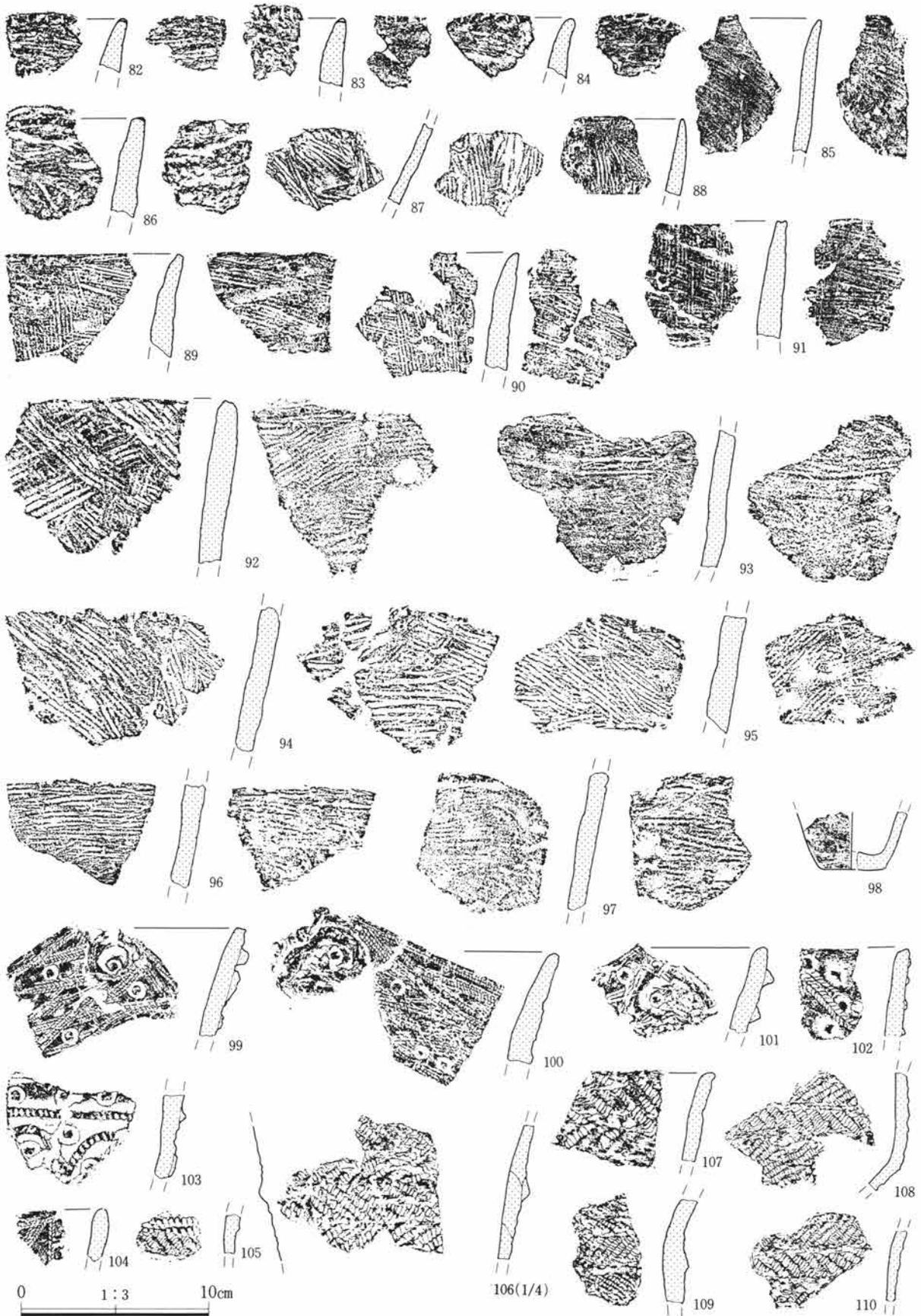
第50図 包含層出土の土器 (1)

II. 縄文時代の遺構と遺物



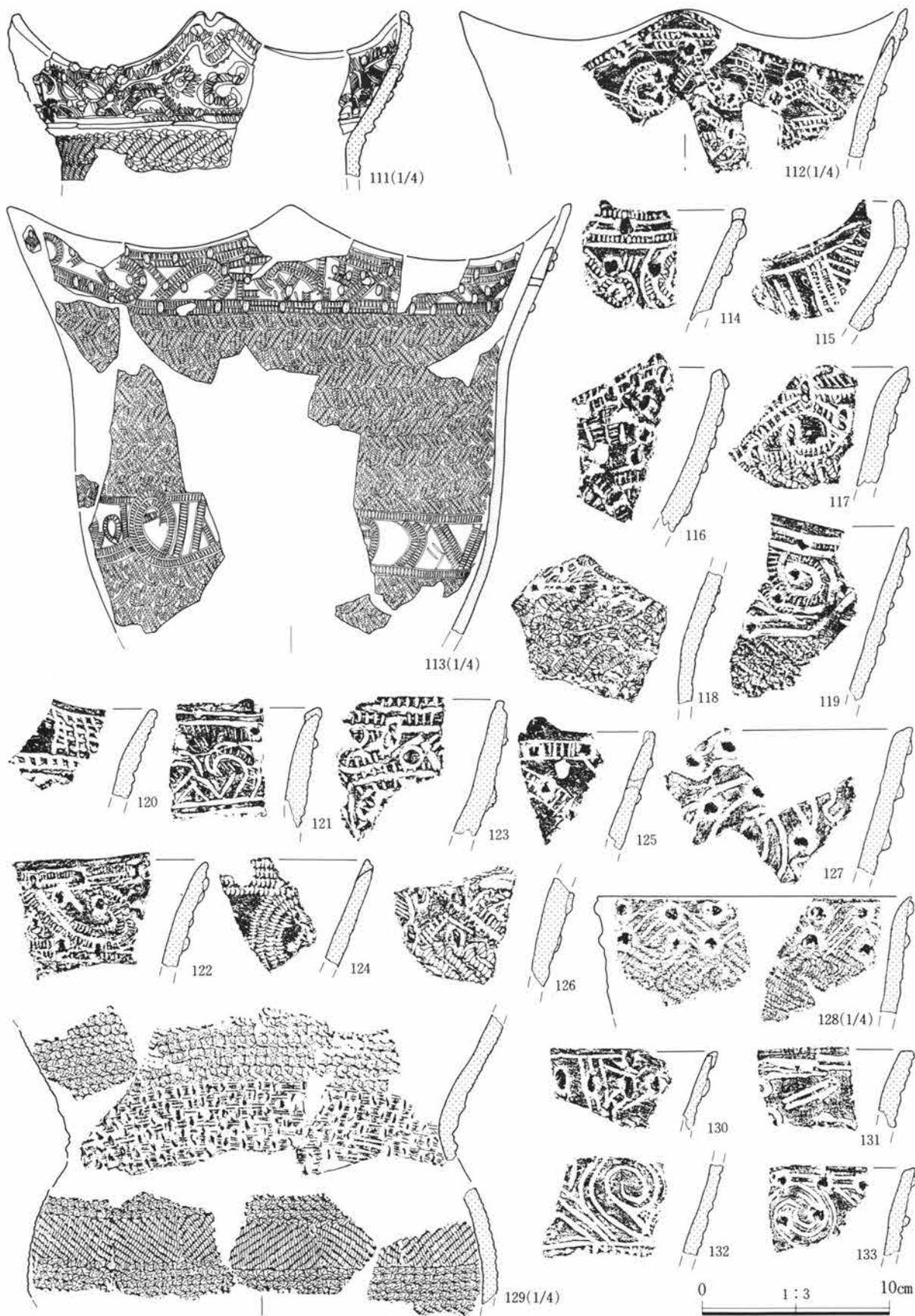
第51図 包含層出土の土器 (2)

5. 包含層の出土遺物



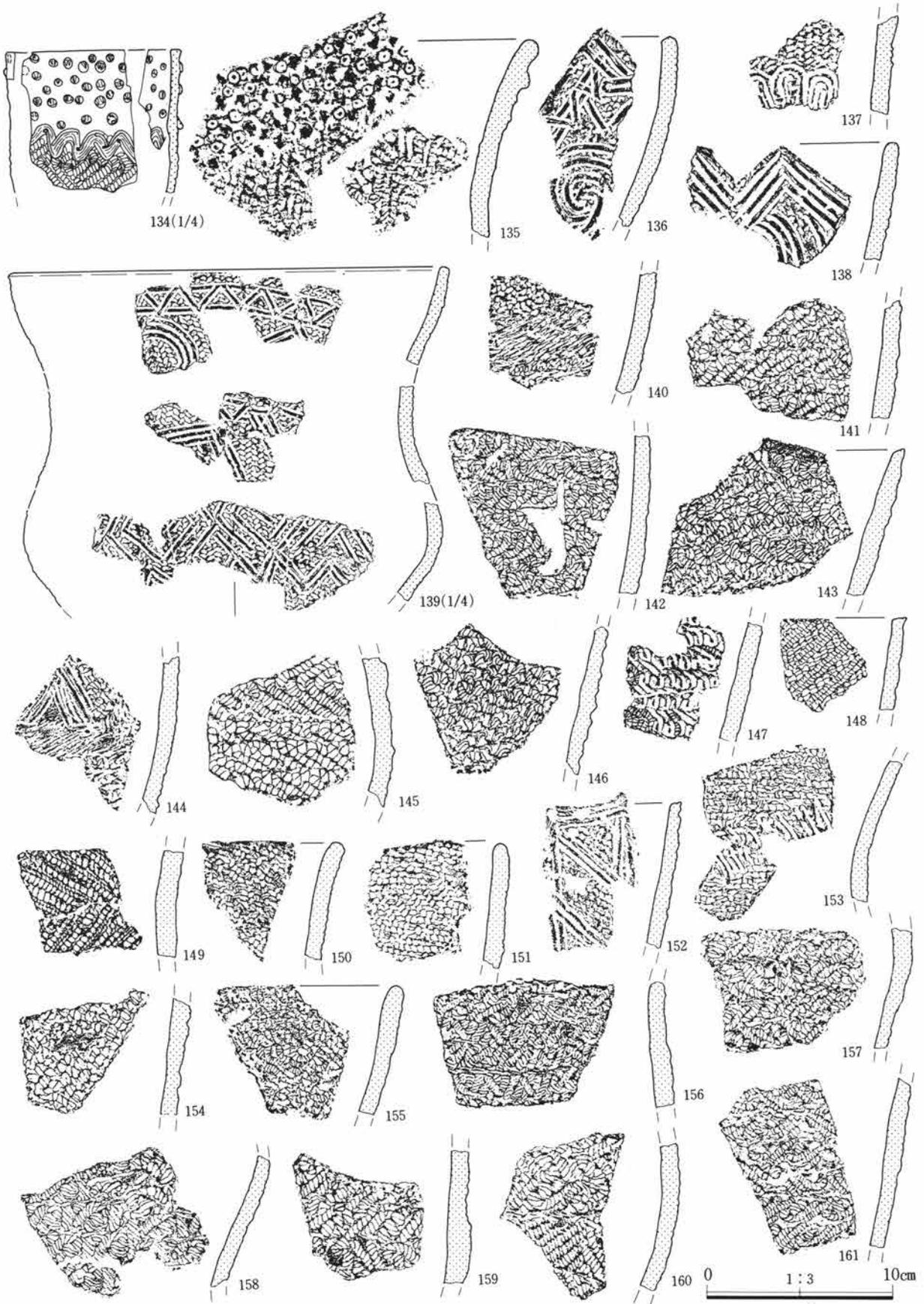
第52図 包含層出土の土器 (3)

II. 縄文時代の遺構と遺物



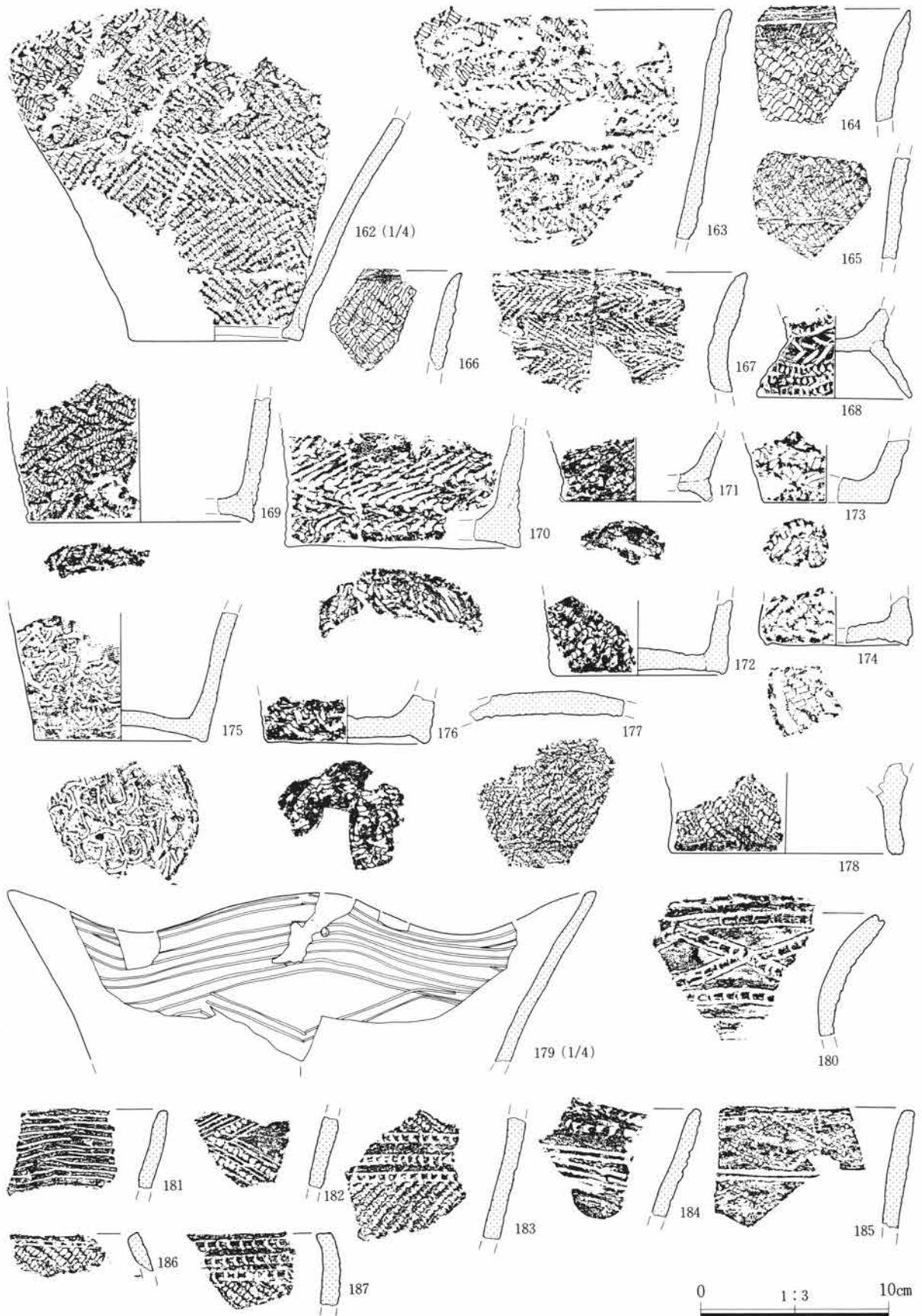
第53図 包含層出土の土器 (4)

5. 包含層の出土遺物



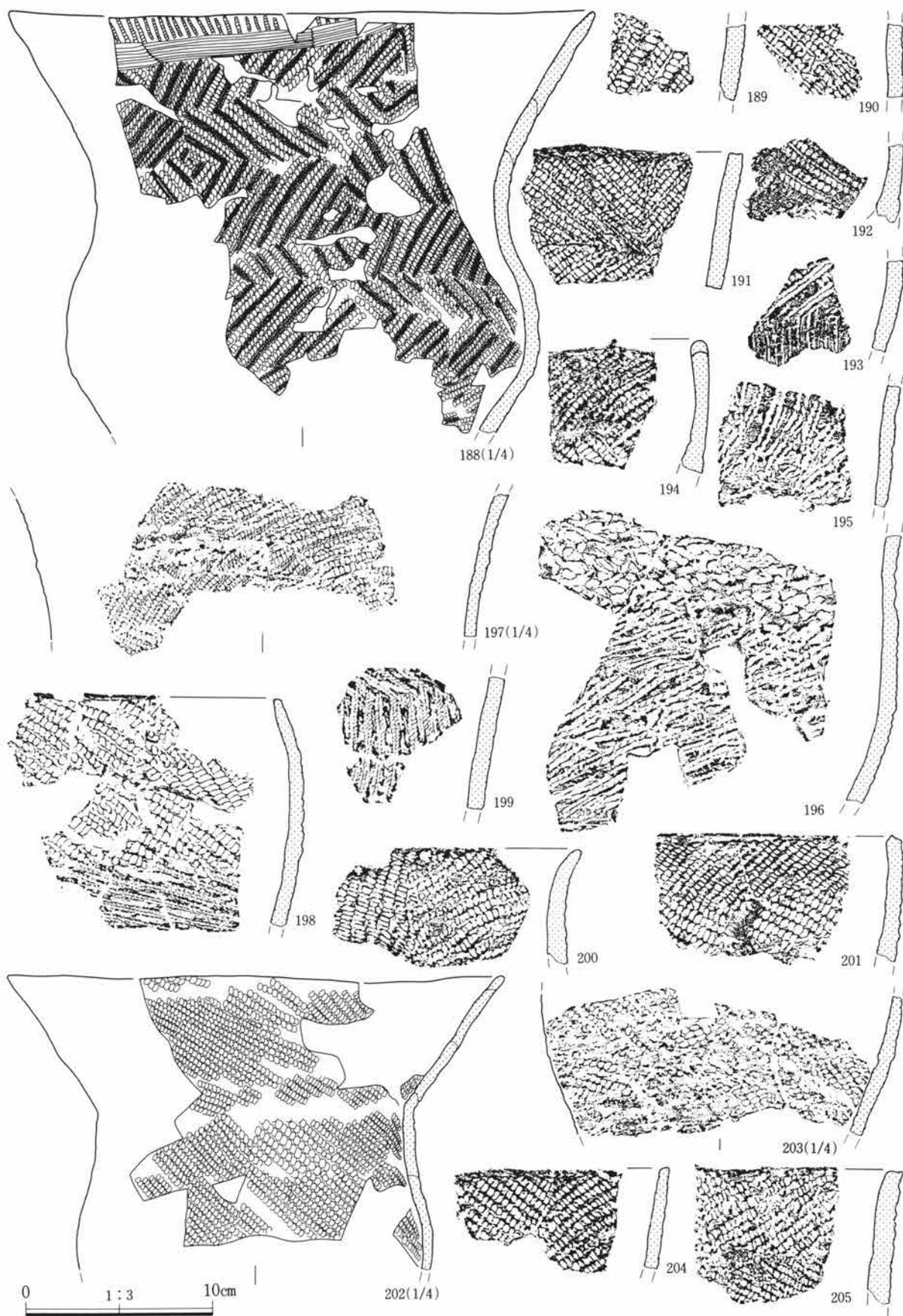
第54図 包含層出土の土器 (5)

II. 縄文時代の遺構と遺物



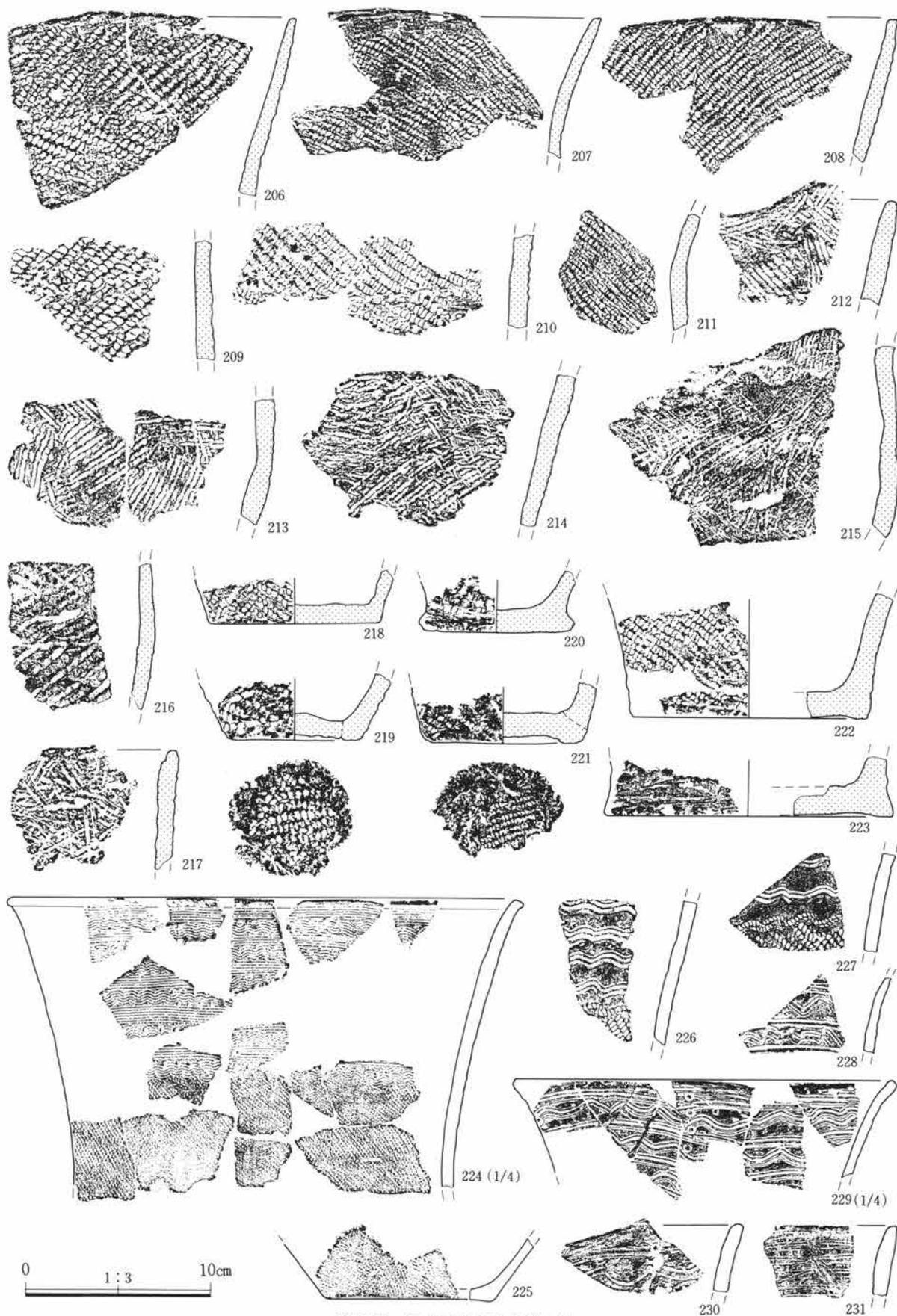
第55図 包含層出土の土器 (6)

5. 包含層の出土遺物



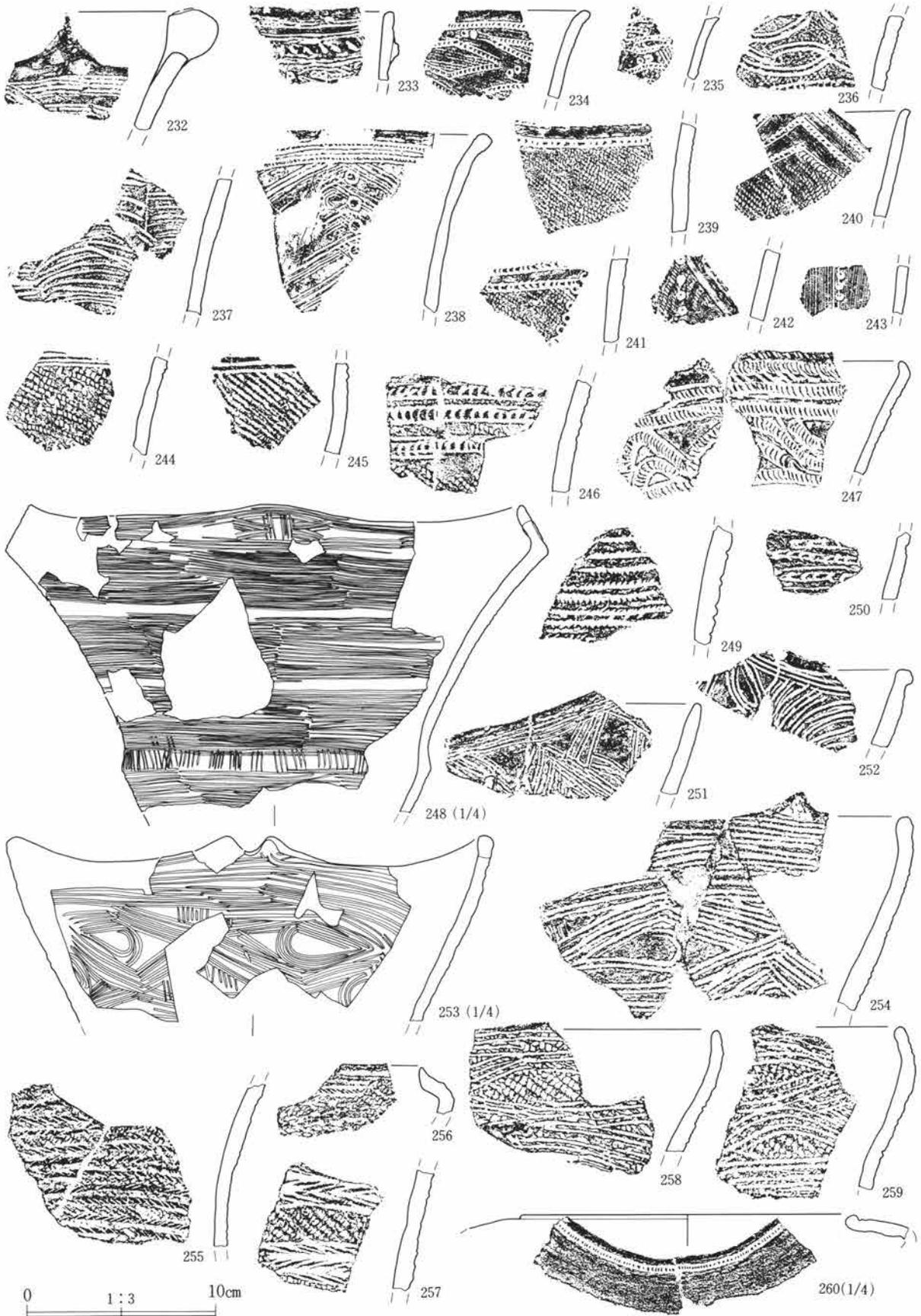
第56図 包含層出土の土器 (7)

II. 縄文時代の遺構と遺物



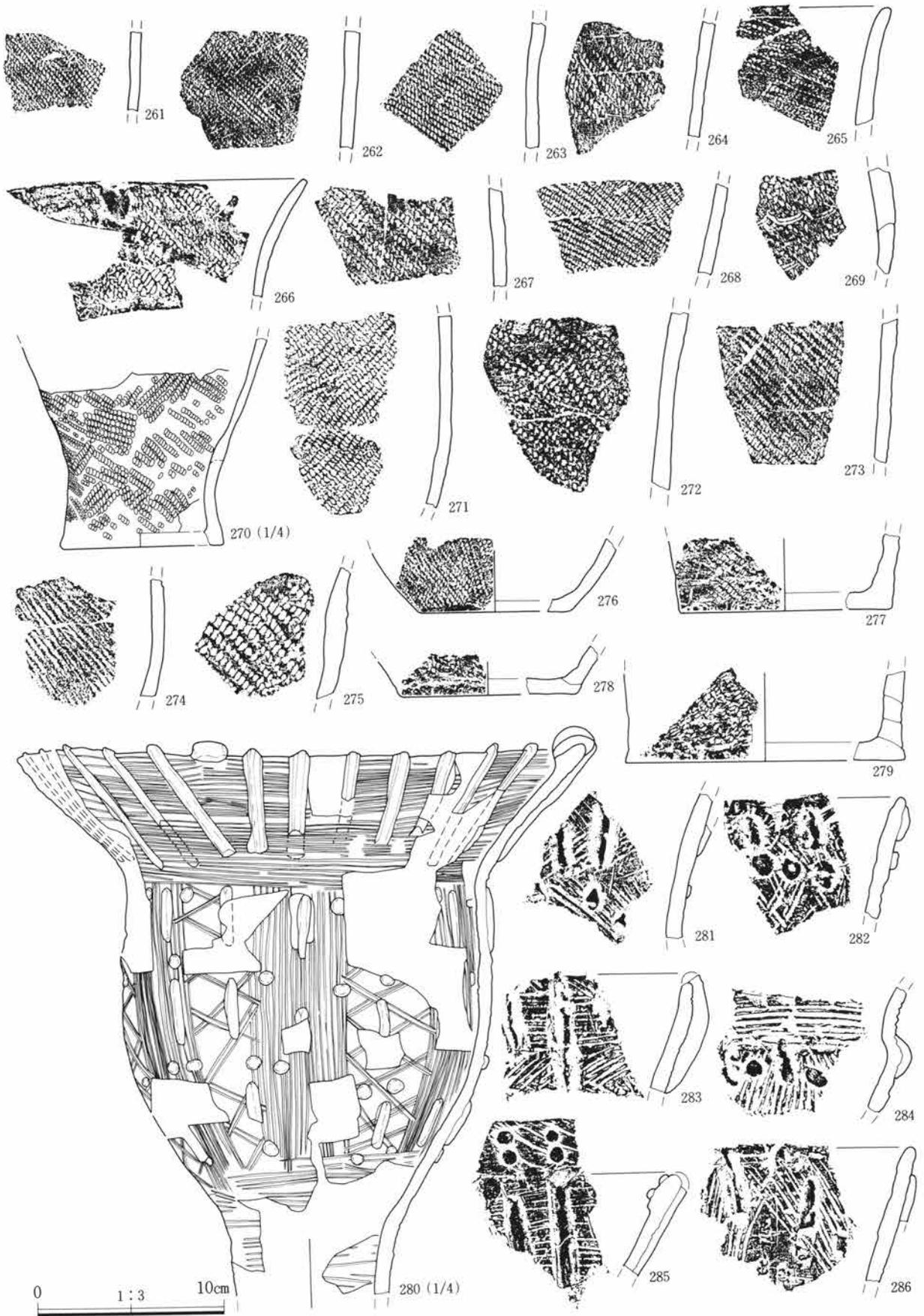
第57図 包含層出土の土器 (8)

5. 包含層の出土遺物



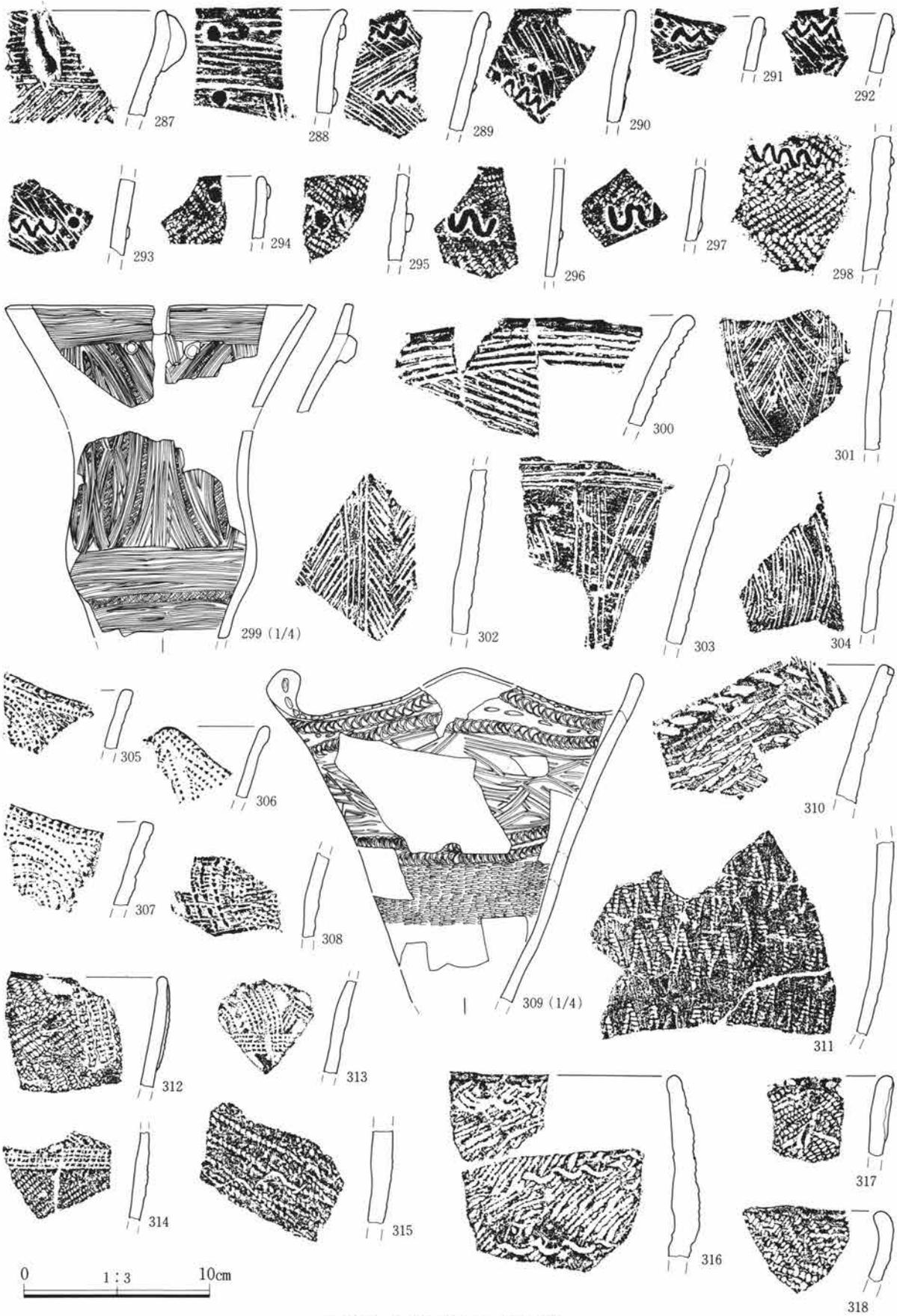
第58図 包含層出土の土器 (9)

II. 縄文時代の遺構と遺物



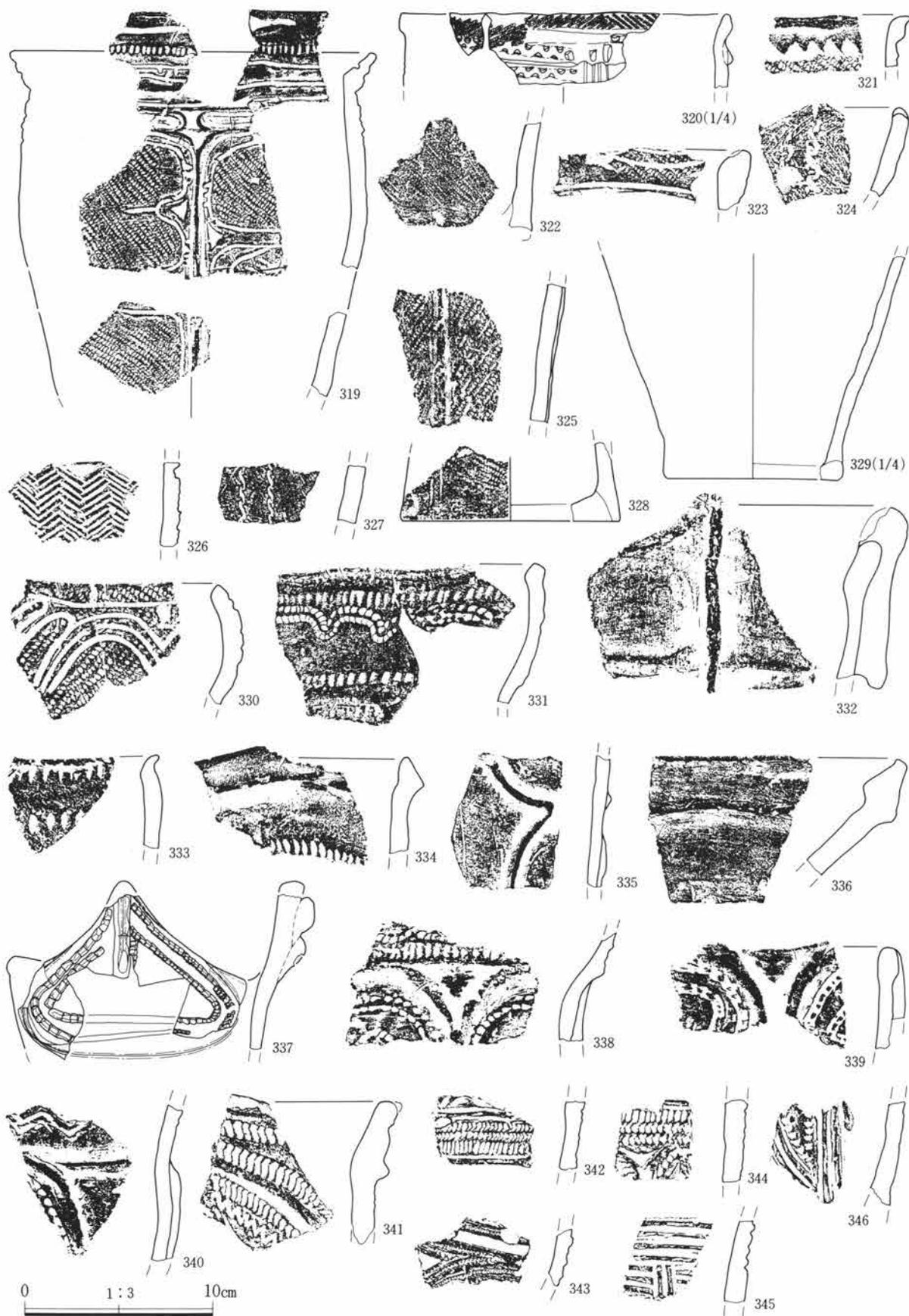
第59図 包含層出土の土器 (10)

5. 包含層の出土遺物



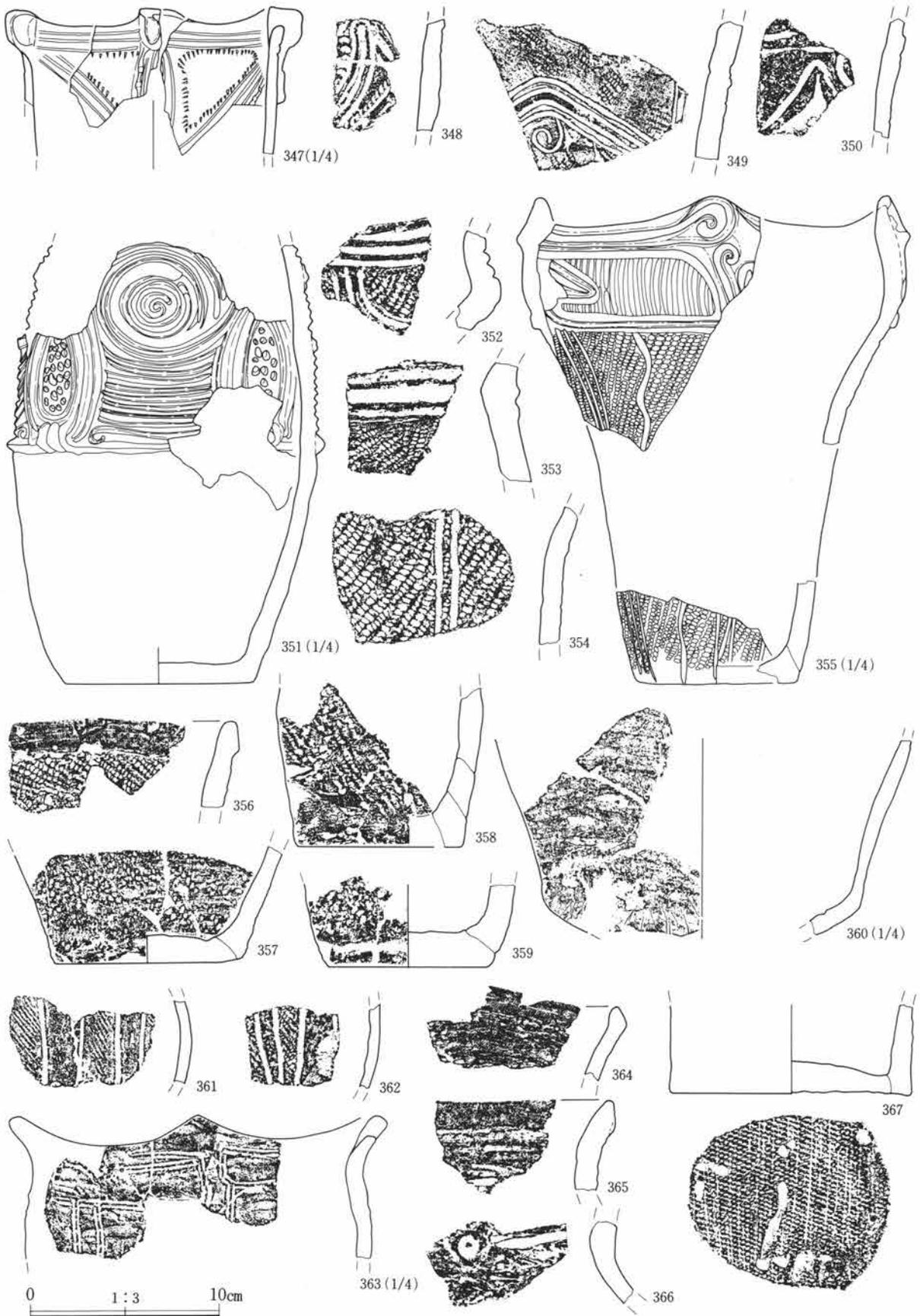
第60図 包含層出土の土器 (11)

II. 縄文時代の遺構と遺物



第61図 包含層出土の土器 (12)

5. 包含層の出土遺物



第62図 包含層出土の土器 (13)

II. 縄文時代の遺構と遺物

※ 縄文土器の施文原体については、下記の通り記号化して表記している。

例) $\circ R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right. \text{と} L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right. \text{の2種類を使用} \rightarrow 2a \cdot 2b$

◦ 附加条第1種 $L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right. + R \rightarrow 10 (2b+1b)$

◦ 附加条第2種 $L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right. + L \rightarrow 11 (2b+1a \cdot 1a)$

◦ 末端環付の前々段反燃 $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right. \text{と同} L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right. \text{の}$

2種類使用 $\rightarrow 16a (5a \cdot 5b)$

◦ 0段4条のRLとLRの結束第1種 $\rightarrow 18 (6c+6d)$

◦ $R \left\{ \begin{matrix} 1 \\ 1 \end{matrix} \right.$ を2本用いた結節RR $\rightarrow 1b (17d)$

◦ $R \left\{ \begin{matrix} 1 \\ 1 \end{matrix} \right.$ と $L \left\{ \begin{matrix} r \\ r \end{matrix} \right.$ を各2本用いた結節RRとLL \rightarrow

1b (17d) \cdot 1a (17c)

1. 無節斜縄文 $a = L \left\{ \begin{matrix} r \\ r \end{matrix} \right. \quad b = R \left\{ \begin{matrix} 1 \\ 1 \end{matrix} \right.$

2. 単節斜縄文 $a = R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right. \quad b = L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right.$

3. 複節斜縄文 $a = L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right. \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right. \quad b = R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right. \left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right.$

4. 直前段反燃 $a = L \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right. \quad b = R \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right.$

$c = L \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right. \left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right.$

5. 前々段反燃 $a = R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right. \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right. \quad b = L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right. \left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right.$

$c = R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right. \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right. \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right.$

6. 0段多条 $a = R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right. \left\{ \begin{matrix} r \\ r \\ r \end{matrix} \right. \quad b = L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right. \left\{ \begin{matrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{matrix} \right.$

$c = R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right. \left\{ \begin{matrix} r \\ r \\ r \end{matrix} \right. \left\{ \begin{matrix} r \\ r \\ r \end{matrix} \right. \quad d = L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right. \left\{ \begin{matrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{matrix} \right. \left\{ \begin{matrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{matrix} \right.$

$e = L \left\{ \begin{matrix} r \\ r \\ r \end{matrix} \right.$

7. 直前段多条

$a = R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right.$

8. 直前段合燃 (異条斜縄文)

$a = L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ L \end{matrix} \right. \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ R \end{matrix} \right. \quad b = R \left\{ \begin{matrix} L \\ R \\ R \end{matrix} \right. \left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right.$

$c = L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ L \end{matrix} \right. \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right. \quad d = R \left\{ \begin{matrix} L \\ R \\ R \end{matrix} \right. \left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right.$

$e = L \left\{ \begin{matrix} R \\ L \end{matrix} \right. \quad f = R \left\{ \begin{matrix} L \\ R \end{matrix} \right.$

9. 前々段合燃 (異節斜縄文)

$a = L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right. \left\{ \begin{matrix} L \\ R \\ L \end{matrix} \right. \quad b = R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right. \left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right.$

10. 附加条第1種

11. 附加条第2種

12. 附加条第3種

13. 組紐

$a =$ 右巻LL 左巻RR

$b =$ 右巻RR 左巻LL

14. 単軸絡状帯第1類

$a = L$ 1条 $b = R$ 1条

$c = L$ 2条 $d = R$ 2条

15. 異束縄文

$a = R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right. \quad b = L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right.$

16. 環付 (ループ)

$a = L \quad b = R \quad c = LL$

17. 結節

$a = L \quad b = R \quad c = LL \quad d = RR$

$e = LR$

18. 結束第1種

19. 結束第2種

20. 末端の結縛

$a =$ 他条結縛 $b =$ 自条結縛

21. 原体の側面圧痕

$a = L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right. \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right. \quad b = R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right. \left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right.$

5. 包含層の出土遺物

1号住居出土遺物 (第7・8図、PL15)

土 器

番号	出土状態	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備考
1	+14.0	①粗砂多②良好③鈍い橙色④口～胴欠	1b	1の口縁部は半截竹管の内側連続爪形文によって三角形に文様構成される。胴部の括れ部に4～5本の爪形文がめぐる。4の口縁部は楕円状工具による列点状刺突文と条線文がめぐる。2・3・5～20は縄文や絡状体のみで文様構成されるものであり、羽状あるいは菱形に施文される。2～4・7・8・10・13・15～18は2種類の原体を用いている。 器形は4単位の波状口縁をもつものに1・2・4などがある。2の波頂部はやや尖っているが、1・4は丸味をもつ。また、4は1箇所の波頂部が片口状となっている。口唇部は、内削ぎ状を呈するもの(2・4・6・11・12)や角頭状のもの(1・13)、丸棒状のもの(9・10)、尖頭状のもの(8)などがある。 器面の内側は良好に研磨されている。2は内・外面に、3は内面に、13は外面にそれぞれ煤状の炭化物の付着が認められる。 1～20はいずれも胎土に繊維を含んでいる。	有尾式系 黒浜式
2	+9.0	①粗砂多②良好③明赤褐色④口～底欠	11(2b+1a・1a)・ 11(2a+1b・1b)		黒浜式
3	埋没土中	①石英粗砂少②良③鈍い橙④頸～胴完	2a・2b		黒浜式
4	〃	①石英粗砂少②良③鈍い赤褐④口～胴欠	2a・2b		有尾式系
5	+9.0	①粗砂少②良好③橙色④頸～胴下欠	2a		
6	埋没土中	①石英礫・粗砂多②良好③鈍い橙色	2a		黒浜式
7	+22.0	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色④底欠	2a・2b		
8	+16.0	①礫・粗砂多②良好③鈍い黄褐色④完形	1a・2a		〃
9	埋没土中	①礫多②良好③鈍い褐色	2a		〃
10	〃	①粗砂多②良好③鈍い黄褐色	10(2b+1b)・ 10(2a+1a)		〃
11	〃	①粗砂多②良好③鈍い黄褐色	2a		〃
12	〃	①粗砂多②良好③鈍い黄褐色	11(2b+1a・1a)		〃
13	〃	①粗砂少②良好③鈍い黄褐色	2a・2b		〃
14	〃	①石英礫多②良好③鈍い黄褐色	12(2b+1b/1b)		〃
15	〃	①石英礫多②良好③鈍い橙色	2a・2b		〃
16・17	〃	①石英粗砂少②やや不良③鈍い橙色	2b・4a		〃
18	〃	①粗砂少②良好③鈍い橙色	1a・1b		〃
19	+9.0	①石英礫多②良好③明赤褐色④胴下半完	1a		〃
20	埋没土中	①粗砂多②良好③鈍い橙色	1a		〃

石 器

(単位：cm, g)

番号	器種	大きさ・重量	出土状態	石質	形状・調整加工の特徴
21	加工痕ある石器	長 11.9 幅 8.5 厚 3.7 重 192.1	床面直上	黒色頁岩	縦長の不定形剥片を素材とする。上部に礫表皮を残す。右側縁や先端部に粗い調整加工が施されている。

2号住居出土遺物 (第11・12図、PL15・16)

土 器

番号	出土状態	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備考
1	埋没土中	①礫少②良好③鈍い黄褐色④口縁欠	5a(16a)	1～8は細い棒状あるいは筒状工具による梯子状沈線文や刻目文と円・楕円形状の貼付文によって文様構成されるものである。1・3～6は梯子状沈線文により蕨手状に、2・7・8は鋸歯状に文様構成される。9はヘラ状工具による沈線文で、10は半截竹管状工具による平行沈線文と筒状工具の刺切文によってそれぞれ文様構成される。11は筒状工具によって、12は半截竹管によってそれぞれややくずれたコンパス文が施文され、更に11の胴部下半に円形竹管による刺突が加えられる。また、12は楕円状貼付文が施され3と同様の刻み目が加えられる。13～15・17・20・21は縄文のみによって文様構成される。2種類の縄文原体を用いるものに13・17・18・20・22がある。縄文はそのほとんどが横位施文であり、羽状あるいは菱形に構成される。 器形は1～4・7・8・10・14が4単位の波状口縁を呈し、波頂部が双頭状となる。11～13・15・17・20・21は平口縁をもつ。また、口唇形状は17の角頭状を除いて総て内削ぎ状となる。器面内側はいずれも良好に研磨される。6・21～23は外面が1・24は内面が、17は内外両面がそれぞれ二次焼成により風化。また、1・3・5～7・15は外面に、23は内面に煤状炭化物の付着。	関山Ⅰ式
2	+7.0	①粗砂少②良好③鈍い黄褐色			〃
3	埋没土中	①粗砂少②良好③橙色			〃
4	〃	①粗砂少②良好③鈍い橙色			〃
5	床面直上	①細砂少②良好③鈍い黄褐色	6a(16a)		〃
6	埋没土中	①細砂少②良好③橙色			〃
7	床面直上	①粗砂少②良好③褐灰色			〃
8	埋没土中	①細砂少②良好③橙色			〃
9	床面直上	①細砂少②良好③灰褐色			〃
10	+20.0	①粗砂多②良好③橙色			〃
11	+5.0	①粗砂少②良好③浅黄色④口～底欠	11(2a+1b)		関山Ⅱ式
12	+8.0	①細砂少②良好③鈍い橙色	6a		〃
13	埋没土中	①粗砂少②良好③明黄褐色	2a・2b		関山Ⅰ式
14	+17.0	①粗砂少②良好③橙色④口～胴欠	9b		関山Ⅱ式
15	埋没土中	①細砂少②良好③灰褐色	2a		関山Ⅰ式
16	床面直上	①石英粗砂多②良好③鈍い橙色	5a(16b)		〃
17	埋没土中	①粗砂少②良好③鈍い黄褐色	16b(5a・5b)		〃
18	床面直上	①細砂多②良好③褐灰色	17c・17d		〃
19	+20.0	①粗砂少②良好③鈍い黄褐色	9a		〃
20	埋没土中	①粗砂少②良好③鈍い黄褐色	2a・2b		〃
21	+3.0	①粗砂多②良好③灰黄褐色	5a(16b)	〃	
22	床面直上	①粗砂多②良好③橙色	16a(5a・5b)	〃	
23	埋没土中	①細砂少②良好③鈍い橙色	5b	〃	
24	〃	①細砂少②良好③鈍い橙色	2b	〃	

II. 縄文時代の遺構と遺物

石 器

(単位: cm, g)

番号	器 種	大 き さ・重 量	出土状態	石 質	形 状・調 整 加 工 の 特 徴
25	磨 石	長 10.5 幅 6.8 厚 4.3 重 434.3	床面直上	溶結凝灰岩 ◎	25～28はともに河床礫を素材とした磨石である。25～27は表裏両面の平坦面に、また28は側縁を含めた部位にそれぞれ摩耗面が認められる。26・27は片面に、27は上端に敲打痕が認められる。28は集合打痕による凹み穴や敲打痕を有する。また、28の表面上半部にはベンガラが付着している。
26	〃	長 11.5 幅 8.2 厚 3.2 重 431.9	床面直上	〃	
27	〃	長 13.0 幅 9.3 厚 4.0 重 763.0	床面直上	石英閃緑岩	
28	〃	長 14.1 幅 6.8 厚 3.6 重 557.2	床面直上	輝石安山岩 (粗 粒)	

3号住居出土遺物 (第12図、PL16)

石 器

(単位: cm, g)

番号	器 種	大 き さ・重 量	出土状態	石 質	形 状・調 整 加 工 の 特 徴
1	凹 み 石	長 11.0 幅 8.1 厚 4.0 重 538.0	床面直上	溶結凝灰岩 ◎	河床礫を素材とする。表裏両面に集合打痕による凹み穴をもつ。表面に摩耗面、裏面の全面に煤状の炭化物が付着している。
2	削 器	長 8.4 幅 5.7 厚 1.6 重 71.9	床面直上	黒色頁岩	不定形剥片を素材とする。左側縁部は表面方向から折断した後に調整加工を施す。右側縁および下縁には比較的丁寧な調整加工が施される。

4号住居出土遺物 (第13図、PL16)

土 器

番 号	出土状態	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備 考
1	+13.0	①軽石粗砂多②良好③鈍い赤褐色 ④口～胴下半	2a	口縁部に篋状工具による平行・波状の沈線文が施される。縄文は横位施文。器形は平口縁をもつ。器面外側の底面付近に煤状炭化物。	諸磯a式

5号住居出土遺物 (第15図、PL16)

土 器

番 号	出土状態	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備 考
1	埋没土中	①細砂少②良好③鈍い褐色	2b	1～4は細い棒状工具や篋状工具による梯子状沈線文や刺切文などによって文様構成されるものであり、更に1・3は円状や楕円状の貼付文が施される。5～7は縄文のみが施される。	関山I式
2	〃	①石英粗砂多②良好③鈍い赤褐色	16b(6a・6b)		
3	〃	①石英粗砂多②良好③灰黄褐色			
4	〃	①粗砂多②良好③褐色			
5	〃	①細砂多②良好③灰褐色	2a・2b	2種類の縄文原体を用いるものに4～13・15	〃
6	〃	①礫少②良好③褐色	2a・2b	・17・18がある。縄文は横位施文を基本とし、	〃
7	〃	①礫少②良好③褐色	6a・6b	羽状や菱形に施文されるものが多い。	〃
8	+15.0	①粗砂少②良好③褐色	5a・5b	器形は1・2が4単位の波状口縁で波頂部が	〃
9	埋没土中	①石英粗砂多②良好③褐色	2a・2b	双頭状を呈する。また5～7が平口縁をもつと	〃
10	〃	①粗砂多②良好③褐色	2a・2b	考えられる。口唇形状は3・6が外削ぎ状を呈す	〃
11	〃	①粗砂少②良好③灰黄褐色	4a(17c)・4b(17d)	る他は 総て内削ぎ状を呈する。18の底部は上げ	〃
12	〃	①細砂少②良好③暗褐色	1a(17c)・1b(17d)	底状を呈し 底面部にも縄文施文が認められる。	〃
13	〃	①細砂少②良好③鈍い黄褐色	1a(17c)・1b(17d)	器面内側はいずれも良好に研磨される。5・	〃
14	〃	①粗砂少②良好③鈍い黄色	4a	7～8・12・16は外面に、4・6・15は内面に	〃
15	〃	①細砂少②良好③赤褐色	1a(17c)・1b(17d)	9は内外両面にそれぞれ煤状の炭化物が付着し	〃
16	床面直上	①粗砂少・細砂多②良好③褐色	5a(16b)	ている。また、10の内面は二次焼成により風化	〃
17	埋没土中	①粗砂多②良好③明赤褐色	16b(5a・5b)	している。	〃
18	〃	①粗砂少②良好③赤褐色	1a(17c)・1b(17d)		〃

6号住居出土遺物 (第17図、PL16)

土 器

番 号	出土状態	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備 考
1	+ 8.0	①礫少②良好③鈍い黄褐色④口～胴上半 ④口～胴上半	1a(17c)	1は半截竹管状工具による平行沈線文+円形竹管文+円形貼付文、3は篋状工具による梯子状沈線文+楕円形貼付文、5は半截竹管状工具による外側連続爪形文でそれぞれ文様構成される。4は縄文のみで文様構成される。縄文は横	関山I式
2	埋没土中	①石英粗砂多②良好③灰黄褐色	17e(1a・1b)+20b		
3	〃	①粗砂多②良好③鈍い黄褐色			
4	〃	①粗砂多②良好③鈍い黄褐色	6a(16b)		

5. 包含層の出土遺物

番号	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備考
5	々	①粗砂多②良好③鈍い褐色		位施文を基本として施文される。 器形は1・3が4単位の波状口縁、4が平口縁をもつ。口唇形態は1が角頭状を呈する他は総て内削ぎ状を呈する。1は内面に、2・5は外面に煤状炭化物が付着。1・3・6・7は外面に二次焼成による風化。	々
6	々	①細砂少②やや不良③灰黄褐色	5b		々
7	+36.0	①礫・粗砂多②良好③明赤褐色 ④胴～底ㄥ	1a		黒浜式?

石器

(単位: cm, g)

番号	器種	大きさ・重量	出土状態	石質	形状・調整加工の特徴
8	凹み石	長 11.5 幅 7.3 厚 3.3 重 483.1	床面直上	石英閃緑岩	8・9は河床礫を素材として、表裏両面に集合打痕による凹み穴と摩擦面をもつ。また、8は下縁に、9は右側縁から上縁にかけて敲打痕をもつ。9の表面の一部に煤状炭化物の付着が認められる。
9	々	長 12.8 幅 10.0 厚 5.2 重 973.4	炉石	輝石安山岩 (粗粒)	

7号住居出土遺物 (第19・20図、PL16・17)

土器

番号	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備考
1	埋没土中	①粗砂少②良好③鈍い褐色 ④口～胴下位ㄥ	13a	1は6本単位の篋状工具によって口縁部に2段の縦長のコンパス文が施される。2・5～9・18は、細い棒状あるいは篋状工具による梯子状沈線文+円・楕円状貼付文で、12～14は同様な工具による梯子状沈線文のみでそれぞれ文様構成される。3は円形貼付文+原体の側面痕、4は円形貼付文+円形竹管文、10は棒状工具沈線文+楕円形貼付文、11は半載竹管状工具による外側爪形文、17は半載竹管状工具による沈線文により文様構成される。15・16は口縁部に鐮状の隆帯をめぐらせるもので、15は縦位の隆帯も認められる。	関山Ⅱ式
2	々	①石英粗砂少②良好③鈍い橙色	2a(16b)		々
3	々	①粗砂多②良好③橙色	21(1a+1b)		二ツ木式
4	々	①粗砂多②良好③鈍い橙色			関山Ⅰ式
5	々	①赤色粗砂多②良好③鈍い橙色			々
6	々	①細砂多②良好③鈍い橙色			々
7	々	①粗砂多②良好③鈍い橙色			々
8	+11.0	①赤色粗砂多②良好③鈍い橙色			々
9	+6.0	①石英礫・粗砂多②良好③明黄褐色			々
10	埋没土中	①細砂少②良好③灰褐色	16a(5a・5b)		々
11	々	①粗砂少②良好③鈍い黄褐色			々
12	床面直上	①粗砂少②良好③鈍い橙色 ④口～胴中位ㄥ	6a(16a)	縄文施文は、2種類の原体を用いているものに3・10・18・19・21・22・24・27・31がある。19・27・31の縄文は菱形状に施文されている。	々
13	埋没土中	①礫多②良好③鈍い黄褐色			々
14	々	①粗砂少②良好③鈍い橙色			々
15	々	①粗砂多②良好③橙色	2a	器形は6・7・9・12～14が4単位の波状口縁をもつと考えられる。また、1・3～5・10	黒浜式
16	々	①石英粗砂多②良好③橙色	5a	・15・16・25・26は平口縁である。11は高台状の底部破片であり、23・24の底部破片は上げ底状を呈する。口唇形態は、1・4・16が角頭状、	関山Ⅱ式
17	々	①礫少②良好③橙色	13b	25が丸棒状、26が尖頭状を呈する他は、総て内削ぎ状となる。	関山Ⅰ式
18	々	①石英粗砂少②良好③鈍い橙色	21(1a+1b)		々
19	々	①粗砂多・礫少②良好③鈍い橙色	18(6c+6d)		々
20	々	①赤色礫少②良好③鈍い橙色	17c(1a)		々
21	床面直上	①軽石粗砂少②良好③鈍い黄褐色	16a(2a・2b)	器面の内側はいずれも良好に研磨されている。	々
22	埋没土中	①粗砂少②良好③鈍い黄褐色	17c(4a)・17d(4b)	1・23は内外両面に、2(=18)・8・9・16	々
23	床面直上	①粗砂少②良好③灰褐色④底ㄥ	6a	・27・31は外面に、21・29は内面にそれぞれ煤状の炭化物が付着している。また、1・5・11	々
24	埋没土中	①粗砂多②良好③明褐色④底ㄥ	2a・2b	・25・31は内外両面に、8は内面に、9・21～	黒浜式
25	々	①粗砂多②良好③橙色	2a	23は外面にそれぞれ二次焼成による風化が認められる。	々
26	々	①礫少・粗砂多②良好③やや不良	2b		々
27	々	①粗砂多②良好③鈍い橙色	8a・8b		々
28	々	①粗砂多②良好③明黄褐色	2b	1～31はいずれも胎土に繊維を含んでいる。	々
29	々	①粗砂多②良好③鈍い橙色	2b		々
30	々	①細砂少②良好③鈍い橙色	5a		々
31	々	①粗砂少②良好③鈍い橙色	11(2b+1a・1a)・ 11(2a+1b・1b)		々

石器

(単位: cm, g)

番号	器種	大きさ・重量	出土状態	石質	形状・調整加工の特徴
32	磨石	長 9.0 幅 7.7 厚 3.4 重 355.4	床面直上	輝石安山岩 (粗粒)	32・33は河床礫を素材とした磨石で、ともに表裏表面に摩擦面をもつ。また33は表面や下縁・右側縁の一部に敲打痕を有する。
33	々	長 15.3 幅 9.0 厚 4.5 重 994.8	炉石	石英閃緑岩	

II. 縄文時代の遺構と遺物

8号住居出土遺物(第21・22図、PL17)

土 器

番号	出土状態	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備考
1	埋没土中	①礫・粗砂多②良好③鈍い橙色	2b	1は平行状・弧線状の文様が、2は縦長のコンパス文がそれぞれ篋状工具によって描出される。	黒浜式
2	〃	①細砂少②良好③鈍い橙色	2a		〃
3	〃	①赤色礫多②やや不良③鈍い褐色	2a	2・6は縄文のみによって文様構成されるものと思われる。縄文施文は、2種類の原体を用いているものに4・7があり、7は菱形形状に施文される。器形は1・2・6ともに平口縁を呈する。口唇形態は、1が丸棒状、2が角頭状、3が内削ぎ状を呈する。器面内側はいずれも良好に研磨されているが、3・6は内外両面に8は外面にそれぞれ二次焼成による風化が認められる。	〃
4	〃	①粗砂少②良好③鈍い黄色	11(2b+1a・1a)・ 11(2a+1b・1b)		〃
5	〃	①細砂少②良好③鈍い黄褐色			関山Ⅱ式
6	〃	①粗砂少②良好③灰黄褐色	6a		黒浜式
7	〃	①石英礫・粗砂少②良好③鈍い黄褐色	1b・2a		〃
8	〃	①粗砂多②良好③鈍い黄褐色	2a		〃

石 器

(単位:cm,g)

番号	器種	大きさ・重量	出土状態	石質	形状・調整加工の特徴
9	削器	長さ 5.5 幅 18.8 厚 3.4 重 279.4	床面直上	黒色頁岩	横長の不定形剥片を素材としている。表面に剥片剥離面が残る。下縁に微細な調整加工が施される。
10	石皿	長さ 29.8 幅 24.9 厚 6.5 重 4380.0	床面直上	輝石安山岩 (粗粒)	表面の縁辺や裏面に錐採み状の凹み穴が多数認められる。

9号住居出土遺物(第24図、PL17)

土 器

番号	出土状態	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備考
1	埋没土中	①細砂多②良好③鈍い褐色	16b(6a・6b)	1は半截竹管状工具による平行沈線+楕円形貼付文、2・3は篋状工具による梯子状沈線+十円形貼付文、4は篋状工具による梯子状沈線文によってそれぞれ文様構成される。7は縄文のみで他の文様をもたないものである。縄文施	関山Ⅰ式
2	〃	①粗砂少②良好③明赤褐色			〃
3	〃	①礫・粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
4	〃	①礫・粗砂多②良好③褐色			〃
5	〃	①礫・粗砂少②良好③鈍い褐色	5a+20a・5b		〃
6	床面直上	①礫・粗砂少②良好③鈍い褐色	16a(6a・6b)	は、7・9を除いて総て2種類の原体を用いており、11は菱形状の文様構成となる。器形は2	〃
7	埋没土中	①粗砂少②良好③鈍い黄褐色	2a	が4単位の波状口縁を呈すると思われる、1・7	〃
8	〃	①細砂多②良好③鈍い赤褐色	4a(17c)・4b(17d)	は平口縁である。口唇形態は1が丸棒状 3・7	〃
9	〃	①礫多②良好③鈍い赤褐色	5a(16a)	が内削ぎ状を呈する。器面の内側はいずれも良好に研磨。8は外面に煤状の炭化物が付着。4	〃
10	〃	①粗砂多②良好③明赤褐色	1a(17c)・1b(17d)		〃
11	+18.0	①粗・細砂多②良好③明赤褐色	8c・8d		黒浜式
12	埋没土中	①礫・粗砂多②良好③鈍い褐色	16a(2a・2b)	・12は外面に、9・11は内面にそれぞれ二次焼成による風化。	〃

石 器

(単位:cm,g)

番号	器種	大きさ・重量	出土状態	石質	形状・調整加工の特徴
13	使用痕ある石器	長さ 8.5 幅 8.0 厚 1.2 重 103.9	床面直上	黒色頁岩	縦長の不定形剥片を素材とする。上縁部の厚さを減じるような表裏面の調整加工が行われている。右側縁に刃こぼれ状の使用痕がある。
14	加工痕ある石器	長さ 9.5 幅 9.0 厚 1.2 重 84.0	床面直上	〃	縦長の不定形剥片を素材とする。上端に礫表皮を残す。右側縁に微細な調整加工が施されている。

10号住居出土遺物(第25図、PL17)

土 器

番号	出土状態	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備考
1	床面直上	①礫・粗砂少②良好③鈍い褐色 ④胴~底完	13b	組紐をやや斜位に施文する。上げ底状を呈し内面は良好に研磨されているが、外面は二次焼成によって風化している。	関山Ⅱ式

11号住居出土遺物(第25図)

土 器

番号	出土状態	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備考
1	埋没土中	①粗砂少②良好③明赤褐色④底欠	13b	1・2は底部破片であり、1は上げ底状を呈する。器面の内側は良好に研磨されている。1は内面に煤状の炭化物が付着し、3は内外両面に二次焼成による風化が認められる。	関山Ⅱ式
2	〃	①礫・粗砂少②良好③明赤褐色	10(2b+1b・1b)		〃
3	〃	①粗砂多②良好③明褐色	2a		〃

12号住居出土遺物 (第27図、PL17・18)

土 器

番号	出土状態	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備考
1	埋没土中	①粗砂多②良好③黒褐色④口~胴ㄥ	2a	1は篋状工具による平行状や波状沈線文+円形竹管文、4は半載竹管状工具による羽状の集合沈線文、5は口縁部に半載竹管状工具による内側刺突文と胴部に半載竹管状あるいは篋状工具による条線状の沈線文でそれぞれ文様構成される。6・8・16は半載竹管状工具による内側爪形文+平行沈線文、7は半載竹管状工具による平行沈線文+棒状工具による刻み目をもつ隆帯、9・10・19は半載竹管状工具による平行沈線文、17は篋状工具による梯子状沈線文、20は17と同じ文様+円形竹管文、21は篋状工具による縦長のコンパス文によってそれぞれ文様構成される。縄文施文は1~3・9~15が繊維の粗く、撚りの緩いRL原体を用いて横位に施文している。18は2種類の原体を用いて羽状に施文している。器形は1・3・5~7・15・17は平口縁であり1の口唇には単位は不明であるが小突起が付されている。5は口縁部に幅広い粘土帯を貼付し、有段状の括れ部を形成する。口唇形態は、6が角頭状、17が内削ぎ状を呈する他は総て丸棒状を呈する。器面の内側はいずれも良好に研磨。1・4・5・11は外面に、3・15は内外両面に、8・20は内面にそれぞれ二次焼成による風化。2・5~7・12~14は外面に、3は内外両面に、4は内面にそれぞれ煤状の炭化物が付着。	諸磯a式
2	+ 3.0	①礫・粗砂多②良好③鈍い黄橙色④胴完	2a		〃
3	+24.0	①礫・粗砂多②良好③褐色④口~胴下半ㄥ	2a		〃
4	+ 3.0	①礫・粗砂多②良好③鈍い橙色④胴~底完			諸磯c式
5	埋没土中	①軽石・粗砂多②良好③灰黄褐色④口~底ㄥ			浮島式
6	〃	①粗砂多②良好③鈍い褐色			諸磯b式
7	〃	①粗砂多②良好③明赤褐色			諸磯a式
8	〃	①礫・粗砂多②良好③暗赤褐色			諸磯a式
9	〃	①粗砂少②良好③鈍い赤褐色	2a		
10	〃	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色	2a		〃
11	〃	①細砂多②良好③黒褐色	2a		
12	〃	①粗砂多②良好③灰赤色	2a		
13	+ 7.0	①礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色	2a		
14	埋没土中	①礫・粗砂多②良好③鈍い橙色	2a		
15	+10.0	①粗砂多②やや不良③鈍い褐色	2a		
16	埋没土中	①粗砂少②良好③橙色			黒浜式
17	〃	①粗砂少②良好③鈍い橙色			関山I式
18	〃	①粗砂多②やや不良③鈍い赤褐色	6a・6b		〃
19	+24.0	①細砂少②良好③鈍い褐色			〃
20	埋没土中	①細砂少②良好③明赤褐色	13b		関山II式
21	〃	①粗砂少②良好③鈍い褐色			〃

13号住居出土遺物 (第28図、PL18)

土 器

番号	出土状態	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備考
1	埋没土中	①片岩礫多②良好③鈍い赤褐色		表裏両面に条痕文を施す。胎土に結晶片岩礫を多量に含んでいる。	茅山式
2	〃	①片岩礫多②良好③鈍い赤褐色			〃

石 器

(単位:cm, g)

番号	器種	大きさ・重量	出土状態	石質	形状・調整加工の特徴
3	凹み石	長さ 9.2 幅 8.7 厚 4.8 重 600.9	床面直上	輝石安山岩 (粗粒)	表裏両面に集合打痕による凹み穴をもつ。

14号住居出土遺物 (第30・31図、PL18)

土 器

番号	出土状態	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備考
1	埋没土器	①石英粗砂多②良好③明赤褐色④胴完形	15a+20a	1は胴部上半に3本単位の櫛歯状工具による肋骨文+円形竹管文が、下半に櫛歯状工具による沈線文が縦位に施文される。2は半載竹管状工具による波状・渦巻状・平行状の集合沈線文、3は篋状工具による刻み目を施した浮線文、4は半載竹管状工具による内側爪形文+棒状工具による刻み目文、6は3本単位の篋状工具による平行沈線文、7は半載竹管状工具による木葉文	諸磯a式
2	+ 9.0	①礫・粗砂多②良好③明赤褐色④口~胴ㄥ			諸磯b式
3	+12.0	①粗砂多②良好③橙色④胴下半完形	2a	〃	
4	埋没土中	①礫・粗砂多②良好③暗赤褐色④胴中位ㄥ	2a	諸磯a式	
5	〃	①礫・粗砂多②良好③鈍い褐色④胴ㄥ	2a	〃	
6	〃	①粗砂多②良好③黒褐色	2b	〃	
7	〃	①片岩礫・粗砂多②良好③鈍い褐色	2a	〃	
8	〃	①粗砂多②良好③明赤褐色		諸磯c式	
9	〃	①粗砂多②良好③明赤褐色		〃	
10	〃	①礫・粗砂多②良好③赤褐色		〃	
11	〃	①粗砂多②良好③橙色		〃	
12	〃	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色		〃	

II. 縄文時代の遺構と遺物

番号	出土状態	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備考
13	〃	①粗砂多②良好③橙色	2a	の文様が施文される。これらの土器と13はともに繊維の粗い原体(単節)を用いて、横位に施文している。20は2種類の原体を用いている。器形は、2が4単位の波状口縁、6・8・16~18は平口縁である。口唇形態は、16がやや内削ぎ状の他は総て丸棒状を呈する。器面の内側はいずれも良好に研磨されているが2・3は内面に、9・17は外面に11・13・15は内外両面にそれぞれ二次焼成による風化。1・9は内面に、2・5は内外両面に煤状の炭化物が付着している。	諸磯b式
14	〃	①礫少・粗砂多②良好③鈍い赤褐色	2a		黒浜式
15	〃	①石英粗砂多②やや不良③鈍い橙色	2b		〃
16	〃	①粗砂多②良好③鈍い橙色	2a		〃
17	〃	①粗砂多②良好③橙色	2a		〃
18	〃	①細砂少②良好③鈍い褐色	13b		関山Ⅱ式
19	〃	①細砂少②良好③鈍い黄褐色	13a		〃
20	〃	①細砂少②良好③鈍い褐色	16a(5a・5b)		関山Ⅰ式
21	〃	①細砂少②良好③橙色	1b(16b)		関山Ⅱ式

石 器

(単位:cm,g)

番号	器 種	大 き さ・重 量	出土状態	石 質	形 状・調 整 加 工 の 特 徴
22	凹み石	長 24.4 幅 7.9 厚 5.0 重 799.1	床面直上	輝石安山岩 (粗粒)	22は表裏両面に集合打痕による凹み穴をもつ。また、23とともに表裏両面に摩耗面が認められる。
23	磨石	長 13.2 幅 9.7 厚 5.2 重 977.3	床面直上	〃	

集石出土遺物 (第35・36図、PL18・19)

土 器

番号	出土状態	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備考
6集1	集石内	①細砂少②良好③鈍い褐色 ④口~胴1/2底1/2	16a(2a・2b)	1は口縁部に円形貼付文+ベンガラを塗布した円形竹管文を、頸部の括れ部に半截竹管による刺突文をもつ2条の隆線をそれぞれ施文する。4は篋状工具の沈線文+細棒状工具の刺切文+円形貼付文で文様構成される。器形は1・2ともやや内削ぎ状の口唇をもつ。1・3は外面に煤状の炭化物が付着し、2の内外面は風化。	二ツ木式 併行?
6集2	〃	①粗砂多②良好③鈍い暗赤褐色 ④口~底1/2	2a・2b		〃
6集3	〃	①礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色	2a		諸磯a式
6集4	〃	①石英礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色	1a(17c)		関山Ⅰ式
7集1	集石内	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色		半截竹管状工具による平行沈線文+波状文。	諸磯b式
8集1	集石内	①礫・粗砂少②良好③鈍い赤褐色④胴1/2	8a・8b	1は縄文+多截竹管状あるいは篋状工具による3~4本単位の沈線文、4・11は半截竹管による沈線文、12は半截竹管状工具による刺突文がそれぞれ施文される。5は瘤状の小突起が付されている。縄文施文は1・2・8・12が2種類の原体を用いて羽状に施文されている。器形は4が波状口縁を、3・7・9が平口縁を呈する。口唇形態は3・4がやや内削ぎ状を7が丸棒状を、9が角頭状を呈する。器面の内側はいずれも良好に研磨。5・8・11は内面に、2は外面にそれぞれ二次焼成による風化。1・4・5・7・9・12は外面に、2・11は内外両面に、10は内面に煤状の炭化物付着。3は無文土器で、外面に縦位の粗い整形痕や輪積痕を明瞭に残す。	関山Ⅱ式
8集2	〃	①粗砂多②良好③橙色④胴下半1/2	2a・2b		黒浜式
8集3	〃	①粗砂多②良好③明赤褐色④口~胴1/2			関山Ⅱ式
8集4	〃	①細砂少②良好③鈍い褐色			黒浜式
8集5	〃	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色	6a		関山Ⅱ式
8集6	〃	①礫・細砂多②良好③鈍い黄褐色	13b		〃
8集7	〃	①細砂多②良好③鈍い黄褐色	6a(16b)		関山Ⅰ式
8集8	〃	①細砂少②良好③鈍い黄褐色	1a(17c)・1b(17d)		〃
8集9	〃	①粗砂多②やや不良③鈍い黄褐色	7a		黒浜式
8集10	〃	①細砂多②良好③鈍い褐色	9b		関山式
8集11	〃	①粗砂多②良好③鈍い褐色			諸磯c式
8集12	〃	①細砂多②やや不良③鈍い黄褐色	2a・2b		黒浜式
8集13	〃	①礫・粗砂多②良好③橙色	1a		〃
9集1	集石内	①粗・細砂少②良好③鈍い褐色	2a(16a)	2は太目の半截竹管状工具による内側凹形文で文様構成される。1は内外両面に二次焼成による風化が認められる。	関山式
9集2	〃	①石英粗砂・礫多②良好③鈍い褐色			黒浜式
10集1	集石内	①細砂少②良好③橙色	16b(2a・2b)	3は棒状工具と篋状工具による梯子状沈線文、4(=5)は半截竹管状工具による幾何学的な平行沈線文でそれぞれ文様構成される。縄文施文は1・2が2種類の原体を用いて施文されている。24の器形は平口縁であり、口唇が丸棒状を呈する。器面の内側はいずれも良好に研磨、1・6は内外両面に、2・5は外面にそれぞれ煤状の炭化物が付着している。	関山式
10集2	〃	①粗砂多②良好③明赤褐色	18(6a・6b)		黒浜式
10集3	〃	①細砂少②良好③鈍い赤褐色			関山Ⅰ式
10集4	〃	①赤色礫・粗砂多②良好③鈍い褐色	2a(16b)		関山Ⅱ式
10集5	〃				〃
10集6	〃	①粗・細砂多②良好③灰褐色	1a		黒浜式
12集1	集石内	①細砂多②良好③鈍い褐色	2a(16b)・13b	1~3ともに器面の内側は良好に研磨されている。また、2は内面に煤状の炭化物が付着している。	関山式
12集2	〃	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色	2a		諸磯式
12集3	〃	①石英礫・粗砂多②良好③鈍い褐色	1b		黒浜式
15集1	集石内	①細砂多②良好③明赤褐色	13b	半截竹管による平行沈線文+円文(疑似円形竹管文)により文様構成される。	関山Ⅱ式

5. 包含層の出土遺物

石 器

(単位: cm, g)

番号	器 種	大 き さ・重 量	出土状態	石 質	形 状・調 整 加 工 の 特 徴
7集 -2	磨 石	長 13.7 幅 5.7 厚 5.7 重 678.7	集石内	輝石安山岩 (粗粒)	河床礫を素材とする。断面形が四角形状を呈し、総ての側面に摩耗面をもつ。また一側面と下端に敲打痕が認められる。

土 器 出土遺物 (第43~47図、PL19~21)

土 器

番 号	出土状態	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備 考
1墳1	埋没土中	①粗砂多②良好③橙色	6d(17c)・6e(17d)	内面は良好に研磨。外面に煤状炭化物が付着。	関山式
2墳1	〃	①粗砂多②良好③浅黄褐色	1a(17c)・1b(17d)	1・2ともに内面は良好に研磨されている。2の外	関山式
2墳2	〃	①細砂多②良好③灰褐色	5a(16a)	外面は二次焼成による風化が認められる。1は2種類の	〃
4墳1	〃	①細砂少②良好③橙色	1a(17c)・1b(17d)	2種類の原体を用いて縄文を施文している。	関山式
5墳1	〃	①細砂少②良好③橙色		1は幅広い篋状工具による刺切文+円形貼付文	関山Ⅰ式
5墳2	〃	①細砂多②良好③鈍い橙色		2は半截竹管状工具と篋状工具による梯子状沈	〃
5墳3	〃	①粗・細砂多②良好③橙色		線文、3は棒状工具による梯子状沈線文+楕円	〃
5墳4	〃	①粗砂少②良好③鈍い黄褐色	2a(16b)	状貼付文によってそれぞれ文様構成。器形は1	〃
5墳5	〃	①粗砂多②良好③暗赤灰色	1a(17c)	が4単位の波状口縁と思われる。口唇形態は1・2	関山式
				ともに内削ぎ状を呈する。器面は1・4・5	
				ともに内外面に二次焼成による風化。1・4は内	
				外両面に、2・5は外面に煤状炭化物が付着。	
6墳1	〃	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色		1は半截竹管と棒状工具、2は篋状工具による	関山Ⅰ式
6墳2	〃	①粗・細砂多②良好③橙色		梯子状沈線文をそれぞれ施文し、楕円形貼付文	〃
6墳3	〃	①礫少②良好③橙色	2a(16a)	を施す。口唇形態は1が角頭状、2が内削ぎ状	〃
				を呈する。1は外面に、2は内面に煤状炭化物	
				が付着。2の外面は二次焼成により風化。	
7墳1	〃	①粗砂少②良好③鈍い橙色		1は細棒状工具による梯子状沈線文+楕円形貼	関山Ⅰ式
7墳2	〃	①石英粗砂多②良好③鈍い橙色	2a(16a)	付文、3は棒状工具、4は半截竹管状工具による	〃
7墳3	+39.0	①粗砂少②良好③鈍い黄褐色④口~胴浅	18(2a+2b)	沈線文がそれぞれ施文される。3・5の縄文	〃
7墳4	+7.0	①粗砂多②良好③橙色④口~胴中位浅	風化により不明	施文は2種類の原体を用いて羽状あるいは菱形	〃
7墳5	+37.0	①礫・粗砂多②良好③橙色 ④胴下~底完形	18(6a+6b)	状に施文される。器形は1・3・4ともに4単	〃
				位の波状口縁を呈する。口唇形態もともに内削	
				ぎ状を呈する。器面の内側は良好に研磨、1・4は	
				外面に、2・3・5は内外両面に煤状炭化物が付	
				着し、2・5は内外両面、4は外面風化。	
9墳1	埋没土中	①細砂少②良好③橙色④胴中位浅	20a(2a・2b)	1・3ともに2種類の原体を用いて縄文を施し	関山式
9墳2	〃	①粗砂少②良好③鈍い黄褐色	6a	1は菱形の構成となる。器面の内側は良好に	〃
9墳3	〃	①石英粗砂多②良好③鈍い黄褐色	6d(17c)・6e(17d)	研磨されるが1・2は煤状炭化物が付着。1~3	〃
				の外面はともに二次焼成による風化。	
15墳1	〃	①細砂少②良好③橙色	6a・6b	内面は良好に研磨され、外面は火熱により風化。	黒浜式
19墳1	〃	①粗砂少②良好③鈍い赤褐色	2a(16a)	3は棒状工具による沈線文と篋状工具による梯	黒浜式
19墳2	〃	①礫少・粗砂多②良好③鈍い橙色		子状沈線文を施す。1~3の器面内側は良好に	関山Ⅰ式
19墳3	〃	①礫少・粗砂多②良好③鈍い橙色		研磨。1は外面に、3は内面に二次焼成による	〃
				風化。1の内面には煤状の炭化物が付着。	
21墳1	〃	①石英粗砂多②良好③赤褐色		棒状・篋状工具による梯子状沈線文で文様構	関山Ⅰ式
				成。波状口縁を呈し、口唇は内削ぎ状を呈する。	
25墳1	〃	①細砂少②良好③鈍い黄褐色		1は棒状工具と篋状工具の梯子状沈線文+円形	関山Ⅰ式
25墳2	〃	①粗砂多②良好③赤褐色	2a	竹管文+楕円形貼付文で文様構成。器形は波状	〃
25墳3	〃	①細砂少②良好③灰黄褐色	17e(1a・1b)	口縁で、口唇がやや内削ぎ状を呈する。1~5	〃
25墳4	〃	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色	16a(2a・2b)	の器面内側は良好に研磨。2の内側は二次焼成	〃
25墳5	〃	①細砂多②良好③鈍い黄褐色	16b(2a・2b)	により風化。1は外面に、2・5は内外両面に	〃
				4は内面にそれぞれ煤状の炭化物が付着。	
26墳1	〃	①礫多②良好③灰褐色	18(6c+6d)	3は篋状工具による梯子状沈線文+楕円形貼付	黒浜式
26墳2	〃	①礫少・粗砂多②良好③鈍い橙色	17b(4b)	文で文様構成される。1・5の器形は平口縁で	関山Ⅰ式
26墳3	〃	①粗砂多②良好③鈍い褐色	17b(4b)	口唇がやや内削ぎ状を呈する。1~5の器面内	〃
26墳4	〃	①細砂少②良好③鈍い橙色	16b(6a・6b)	側は良好に研磨。2の外面は二次焼成による風	〃
26墳5	〃	①粗砂多②良好③灰褐色	6a	化。2・4は内面に、3は内外両面に、5は外	黒浜式
				面に煤状の炭化物が付着。	
27墳1	〃	①礫少・粗砂多②良好③灰褐色	2a・2b	内面は研磨され、外面に煤状の炭化物付着。	関山Ⅰ式
28墳1	〃	①粗砂多②良好③鈍い橙色	13b	1・2ともに器面内側は良好に研磨される。	関山Ⅱ式
28墳2	〃	①礫少・粗砂多②良好③鈍い橙色	2a	2の外面には煤状の炭化物が付着している。	諸磯a式

II. 縄文時代の遺構と遺物

番号	出土位置	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備考
30壙1	〃	①礫・粗砂多②良好③鈍い褐色 ④口～胴1/4	18(2a+2b)	1は棒状・篋状工具の梯子文+楕円形貼付文が施文される。4単位の波状口縁で口唇はやや内削ぎ状を呈する。1の内面に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
30壙2	102A36	①石英礫・粗砂多②良好③明赤褐④底1/4	8e・8f		関山Ⅰ式
32壙1	+13.5	①粗砂少②良好③鈍い橙色	2a(16a)	1は棒状・篋状工具による梯子文を施す。1の外側は火熱により風化。2の内面に炭化物付着。	関山Ⅰ式
32壙2	埋没土中	①粗砂多②良好③明赤褐色	2a・2b		〃
37壙1	〃	①粗砂少②良好③暗褐色		1・3は細棒状・篋状工具による梯子状沈線文+楕円形貼付文、2は棒状工具による沈線文+細棒状工具による刺切文+円形竹管文で文様構成される。7の器形は平口縁で口唇が内削ぎ状を呈する。器面内側は良好に研磨される。1の内面、2・6の内外両面、3の外側は火熱による	関山Ⅰ式
37壙2	〃	①細砂多②良好③鈍い橙色			〃
37壙3	〃	①粗砂少②良好③橙色	16a(2a・2b)		〃
37壙4	〃	①粗砂多②良好③鈍い橙色	1a(17a)・1b(17b)		〃
37壙5	〃	①粗砂少②やや不良③褐色	2a・2b		〃
37壙6	〃	①粗砂多②良好③明赤褐色	2a・2b		黒浜式
37壙8	〃	①粗砂多②良好③鈍い橙色 ④胴下位～底1/4	2a	状炭化物が付着。	関山式
39壙1	+ 3.5	①石英粗砂多②良好③鈍い赤褐色	2a・2b	1・2の内面は良好に研磨され、2の外側には煤状の炭化物が付着している。	黒浜式
39壙2	+11.0	①粗砂多②良好③鈍い黄褐色	18(6a+6b)		関山式
40壙1	埋没土中	①細砂少②良好③明赤褐色	1a(17c)・1b(17d)	棒・篋状工具の梯子文+楕円形貼付文。	関山Ⅰ式
44壙1	〃	①細砂多②良好③鈍い橙色	11(2b+1a・1a)・ 11(2a+1b・1b)	2は篋状・細棒状工具の梯子状沈線文が施文される。1の器面外側には二次焼成による風化がまた内側には煤状炭化物の付着が認められる。	黒浜式
44壙2	〃	①石英礫・粗砂多②良好③鈍い橙色	4a(17c)		関山Ⅰ式
48壙1	〃	①粗砂多②良好③明赤褐色		表裏両面に条痕文が施文される。繊維を含む。	茅山式
49壙1	〃	①粗砂少②良好③鈍い橙色		棒状・篋状工具による梯子状沈線文+楕円形貼付文を施文。波状口縁をもち、口唇は内削ぎ状。	関山Ⅰ式
52壙1	〃	①礫・粗砂多②良好③鈍い褐色	16a(2a・2b)	平口縁をもち、口唇は角頭状を呈する。内外両面は火熱風化。外面に煤状炭化物が付着。	関山Ⅰ式
53壙1	〃	①粗砂多②良好③橙色④口縁1/4	13b	4単位の波状口縁をもち、口唇は内削ぎ状を呈する。外面は火熱風化。	関山Ⅱ式
54壙1	+ 5.0	①礫・粗砂多②良好③鈍い褐色 ④口～胴完	18(6a+6b)	半截竹管状工具による平行沈線文で文様構成される。平口縁をもち、角頭状の口唇をもつ。外面に火熱風化、内外両面に煤状炭化物。	黒浜式
55壙1	〃	①粗砂多②良好③橙色	13b	内面は研磨され、外面は火熱による風化。	関山Ⅱ式
56壙1	〃	①石英・片岩礫・粗細砂多②良好③明赤褐	2b	2は半截竹管状工具による結節沈線文+三角印刻文。3は棒状工具による沈線文が施され、口唇上にも同一工具による刻目文が施される。4は縦位の隆線とそれに沿って棒状工具による沈線文が施文される。6は括れ部に一条の隆帯をめぐらせる。1・6は平口縁、2・3は波状口縁をもち、1・3は角頭状、2は丸棒状、6は尖頭状を呈する。1・4は内外両面に、2・3・7は外面に、5は内面に煤状炭化物付着。	五領ヶ台式
56壙2	〃	①石英礫・粗砂 金雲母多②良好③黒褐色			〃
56壙3	〃	①石英礫・粗砂 金雲母多②良好③灰褐色			〃
56壙4	+ 7.0	①石英礫・粗砂 金雲母多②良好③褐色	2a		〃
56壙5	埋没土中	①石英礫・粗砂 金雲母多②良好③赤褐色	2a		〃
56壙6	〃	①石英・片岩礫・粗細砂多②良好③暗赤褐	2b+20a(1b)		〃
56壙7	+ 7.5	①石英・片岩礫・粗砂多②良好③明赤褐色	2b+20a(1b)		〃
61壙1	埋没土中	①石英粗砂多②良好③明赤褐色 ④口～底1/4	2a+20a(1b)	括れ部に横位の隆帯をめぐらせ、それに接続させて縦位の隆帯を4単位の施文。口縁の無文部は幅広い篋状工具による横方向の撫で。口唇は丸棒状で4単位の波状口縁。内外面に炭化物。	五領ヶ台式
83壙1	〃	①石英礫・粗砂多②良好③明黄褐色	2a	1は口縁部に半截竹管状工具による外側爪形文を2段、以下胴部にかけて同工具による渦巻状や窓枠・格子目状の沈線文を施文する。2は口縁部に2本単位の隆帯による横S字文を4単位の施し、棒状工具による背割り状の沈線文が加えられる。8は半截竹管状工具による平行沈線文が重弧状に施文される。1は4単位の橋状把手が付く。2・3・6は内外両面に、1・7は外面に、4・5は内面に煤状炭化物が付着している。2・4・6は内外両面に、3・5・8は外面に火熱による風化あり。	加E1式
83壙2	+36.1	①礫・粗砂多②良好③橙色 ④口～胴下位完形	2a		〃
83壙3	埋没土中	①礫・粗砂多②良好③明赤褐色 ④胴中位1/4	2a		〃
83壙4	〃	①粗砂多②良好③鈍い橙色④底1/4	2a		〃
83壙5	〃	①粗砂多②良好③淡赤褐色④底完形	2a		〃
83壙6	〃	①粗砂多②良好③鈍い褐色④底	2a		〃
83壙7	〃	①粗砂多②良好③灰褐色	2a		〃
83壙8	〃	①礫少、粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
95壙1	+14.0	①礫・粗砂多②良好③明赤褐色 ④胴中位1/4		1は篋状工具の刻目をもつ浮線文、2・3(=4)は半截竹管状工具による集合沈線文、5は同状工具の内側を使った刺突文が施される。5は口唇上にも同工具により刺突が加えられる。6は円形竹管文+篋状工具の刻目が施され、口唇上にも刻目が加えられる。1・2は外面に煤状炭化物付着。1・3は内面に、2・5は内外両面に火熱による風化が認められる。	諸磯b式
95壙2	+22.0	①礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色	2a		〃
95壙3	+17.0	①礫・粗砂多②良好③灰褐色			〃
95壙4	・4				
95壙5	+ 9.0	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色			浮島式
95壙6	+ 9.0	①礫・粗砂多②良好③褐色			諸磯a式
110壙1	埋没土中	④粗砂多②良好③鈍い褐色	2a	内面は火熱風化。外面に煤状炭化物付着。	諸磯式
111壙1	〃	①粗砂少②良好③灰褐色	2a	1は半截竹管状工具の内側爪形文、2・3は半截竹管状工具の平行沈線文、5(=6)はミミズ彫れ状の隆線+内側爪形文、8は梯子状工具	諸磯a式
111壙2	〃	①粗砂多②良好③鈍い褐色			
111壙3	〃	①粗砂多②良好③鈍い褐色			

5. 包含層の出土遺物

番号	出土位置	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備考
111墳4	〃	①粗砂多②良好③灰褐色	2a	の沈線文+内側爪形文+三角・四角形状印刻文が施文される。2は内面に、3・4・7は内外両面に火熱風化が認められる。2・4は外面に3は内外両面に煤状炭化物が付着している。	諸磯 a 式 諸磯 c 式 十三善堤式
111墳5	〃	①石英粗砂多②良好③灰褐色			
111墳6	〃	①粗砂多②良好③鈍い橙色			
111墳7	〃	①石英粗砂多②良好③鈍い橙色			
111墳8	〃	①粗砂多②良好③鈍い橙色	2b	平口縁をもち、口唇は尖頭状を呈する。口縁部に横位の隆帯をめぐらせ、屈曲部を作出する。内外面ともに火熱による風化が認められる。	黒浜式
112墳1	〃	①礫・粗砂多②やや不良③灰褐色			
113墳1	〃	①礫少②良好③橙色	8e	半截竹管状工具の平行沈線文を施す。外面は火熱による風化が認められる。	関山Ⅱ式
115墳1	〃	①石英礫・粗砂多②やや不良③鈍い赤褐色	10(2b+1b・1b)	1・2は表裏両面に条痕文を施す。1は内外両面、2は内面が火熱により風化。1は外面に煤状炭化物が付着している。	茅山式
115墳2	〃	①粗砂少②良好③鈍い赤褐色			
116墳1	〃	①粗砂多②良好③灰褐色		内外両面に条痕文を施す。稜部分に半截竹管状工具による刺突文。	茅山式
121墳1	〃	①礫・粗砂多②やや不良③暗褐色	4a	5の器形は平口縁で、角頭状の口唇をもつ。1は内面に、2・5は内外両面に火熱による風化が認められる。また、2～4は外面に、5は内面に煤状の炭化物が付着している。	黒浜式
121墳2	〃	①石英礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色			
121墳3	〃	①粗砂多②良好③褐色			
121墳4	〃	①細砂多②良好③黒褐色			
121墳5	〃	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色			
		④口～胴下1/2	2a 2a・2b		

包含層出土遺物 (第50～62図、PL21～36)

土 器

番号	出土位置	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備考
1	66Z47	①粗砂多②良好③鈍い褐色	14b	1～3は燃糸文、4は縄文、5・6は絡状体条痕文土器である。1・2は節の細かく条間隔の密なRの燃糸文が口唇部と胴部の2帯に施文される。3は条間隔の広い燃糸文を、4は口縁部に無文部を置いて縄文を斜位に施文する。6は口唇直下より条痕文を施す。1・2・4の口唇は丸頭状を呈し、肥厚外反する。6は角頭状を呈する。1・5・6の内面は風化による荒れ。	井草Ⅱ式
2	75Z46	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色	14b		〃
3	87A20	①粗砂多②良好③鈍い褐色	14b		稲荷台式
4	90B40	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色	2a		〃
5	75Z46	①粗砂多②良好③明赤褐色	14a		夏島式
6	65Z47	①礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色			
7	95Z45	①石英粗砂多②良好③鈍い赤褐色		1・2は半截竹管状工具による条線文の平行沈線文が施される。7の内面に篋状工具による整形痕。8の外面に煤状炭化物が付着している。	
8	76Z47	①石英粗砂多②良好③鈍い赤褐色			
9	69A02	①石英粗砂多②良好③明赤褐色		9～13は無文の尖底土器で、9は口縁部に篋状工具による爪形状の短沈線文がめぐる。10・13の口唇は丸棒状を呈する。9の外面は篋状工具による縦位の研磨。10の外面は同様工具による擦痕状の整形痕、内面は横位の研磨痕。11・12の外面は指頭状の整形圧痕が残る。9・11・13は内面が荒れている。	
10	94Z43	①粗砂少②良好③鈍い赤褐色			
11	75Z45	①石英礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色			
12	100Z48他	①粗砂多②良好③橙色			
13	89A36	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色			
14	68Z48	①粗砂多②良好③鈍い褐色	14・15・17は山形押型文、16・18は楕円押型文が帯状施文される。18は口縁部に横位、胴部中に縦位、以下横位に施文し、胴中位の各帯状施文間に半截竹管状工具で縦位2列の刺突を施す。原体の長さは25mm。14・16は内面、17・18は内外両面がやや風化。	細久保式 併行	
15	67Z45	①粗砂少、細砂多②良好③暗赤褐色			
16	78Z49	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色			
17	67Z45	①粗砂多②良好③鈍い褐色			
18	68Z46他	①石英粗砂多②良好③赤褐色			
19	76Z46	①石英粗砂多②良好③明赤褐色			19～23・26は棒状工具による沈線文、24・25・27～29は半截竹管状工具による平行沈線文が施される。30・34は棒状工具の沈線文+アナグラ属の貝殻腹線文、31・32は棒状工具の沈線文+刺突文、33は篋状工具の沈線文+半截竹管状工具の外側爪形文がそれぞれ施文される。19～29の沈線文は羽状や斜位、縦横位に施されるものが多いが、27は格子目状に施文されている。19・24・25・30・31・33の器形は平口縁出、19・31が丸棒状、24がやや内削ぎ状、25・30・33が角頭状を呈する。19・33はわずかながら胎土に
20	90Z49	①片岩礫・粗砂多②良好③鈍い褐色			
21	A区表採	①粗砂多②良好③鈍い黄褐色			
22	72A01	①片岩礫・石英粗砂多②良好③橙色			
23	82Z48	①片岩礫・粗砂多②良好③褐色			
24	82B35	①石英礫・粗砂多②良好③褐色			
25	75Z47	①粗砂多②良好③明赤褐色			
26	66Z45	①粗砂多②良好③灰黄褐色			
27	71A01	①石英粗砂多②良好③赤褐色			
28	96Z48	①粗砂少②良好③明赤褐色			
29	77Z46	①礫・粗砂多②良好③鈍い褐色			

II. 縄文時代の遺構と遺物

番号	出土位置	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備考
30	72Z46	①石英粗砂多②良好③明赤褐色		繊維を含む。各土器の内面はいずれも良好に研磨されているが、25・26・32・33は風化によってやや荒れており、砂粒が露出している。	田戸下層式
31	76A00	①粗砂多②良好③鈍い褐色			田戸上層式
32	69Z43	①石英粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
33	85Z42	①粗砂少②良好③明赤褐色			〃
34	82Z47	①粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
35~38・40	66Z45他	①粗砂多②やや不良③鈍い赤褐色		35~42は絡状体圧痕文により文様構成される条痕文土器。35(=36~38・40)は渦巻・三角形に施文。39は口唇から口縁部にかけて短い2~3本の隆帯を縦位に貼付し、その下位に横位の隆帯をめぐらせる。絡状体厚痕は隆帯上にも施される。41は絡状体厚痕を口縁部の横位の隆帯上と口唇部に施し、42は口唇部のみに施す。39・41・42の器形は平口縁で、39・42が角頭状、41が丸棒を呈する。	子母口式
39	80A01他	①細砂多②やや不良③鈍い褐色			〃
41	77Z48	①粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
42	76A00	①片岩礫多②良好③鈍い赤褐色			〃
43	94Z49	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色			43~45は口唇部に篋状工具による刻目をもつ条痕文土器。いずれも平口縁をもち、43は内削ぎ状、44は尖頭状、45は丸棒状を呈する。
44	80A00	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色		〃	
45	78Z49	①片岩・石英礫多②良好③鈍い赤褐色		〃	
46	96Z48	①粗砂多②良好③鈍い褐色		46~51は細隆起帯により文様構成される条痕文土器。46・47は口唇下に横位、48は口唇下より縦位、49~51は羽状、斜位に施文される。46~48の器形は平口縁で、46・47は丸棒状、48は角頭状の口唇を呈する。各土器の内面は風化によって荒れている。いずれも胎土に繊維を含む。	野鳥式
47	93A00	①粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
48	表探	①粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
49	96Z47	①石英粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
50	96Z46	①粗砂少②良好③鈍い褐色			〃
51	90Z49	①粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
52	86Z47	①粗砂多②良好③鈍い黄褐色		53~58・61・62は棒状あるいは円形竹管状工具による2本1単位の沈線でタスキ状のモチーフが描かれる条痕文土器。文様の交点や区画内には上記工具による刺突文が施される。53・55・56・60は棒状工具、54・57・61・62は円形竹管状工具による刺突文である。58・59は押し引き状の刺突が加えられている。52・53の口唇部には篋状工具による刻目が施される。52・53の口唇はやや内削ぎ状 54は丸棒状を呈する。54~56・58~61は内面に、53・57は外面に風化による荒れが認められる。52の外面に煤状炭化物付着。	鶴ヶ島台式
53	95A02	①粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
54	Z区表探	①礫少、粗砂多②やや不良③鈍い褐色			〃
55	87Z48	①粗砂多②良好③灰褐色			〃
56	90Z46	①石英粗砂多②良好③灰褐色			〃
57	83Z48	①礫少、粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
58	86Z48	①粗砂多②良好③鈍い黄褐色			〃
59	80A00	①片岩・石英粗砂・礫多②良③鈍い赤褐色			〃
60	表探	①粗砂多②良好③明赤褐色			〃
61	83Z48	①片岩・石英礫・粗砂多②良③鈍い赤褐色			〃
62	86Z41	①粗砂多②良好③明赤褐色			〃
63	85Z49	①礫少②良好③鈍い褐色		63は円形竹管状工具の刺突文、64は棒状工具の縦位沈線文、65は棒状工具の沈線文+半載竹管状工具の押し引き状沈線文、66・68・70~73は棒状・篋状工具の斜格子状沈線文、67・69は篋状工具の斜格子状沈線文+押し引き状の刺突文、74~77は多載竹管状あるいは篋状工具の押し引き状の刺突文が施される。67・71・72・75の口唇部には、篋状や棒状工具による刻目が加えられている。67・69・71・72・74~76は平口縁で77は楕円形状の小突起をもつ。口唇形態は67・69・74・77が角頭状、71が丸棒状、72・75・76がやや内削ぎ状を呈する。63・64・73・77の内面は風化により荒れている。64・75・76は内面に71は外面に煤状炭化物が付着している。胎土に石英や結晶片岩の小礫を含むものが多い。	茅山下層式
64	88A34	①粗砂多②良好③明赤褐色			〃
65	89A14	①粗砂多②良好③明赤褐色			〃
66	67A43	①石英礫・粗砂多②良好③明赤褐色			茅山上層式
67	98A27	①石英礫・粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
68	70A02	①礫・粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
69	98A01	①片岩礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色			〃
70	88Z43	①石英礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色			〃
71	87Z49	①石英礫・粗砂多②良好③赤褐色			〃
72	86A02	①粗砂多②良好③鈍い黄褐色			〃
73	88Z42	①粗砂多②やや不良③鈍い黄褐色			〃
74	88A18	①石英礫・粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
75	74Z48	①片岩礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色			〃
76	77Z49	①礫少・粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
77	87A13	①石英・片岩礫・粗砂多②良好③鈍い橙			〃
78	89A24	①石英粗砂多②良好③鈍い赤褐色		条痕文土器の底部である。80はわずかに上げ底状を呈する。78は内面に、80は外面に風化による荒れ。78・79は外面に煤状炭化物が付着。	茅山式
79	67A01	①粗砂少②良好③鈍い赤褐色			〃
80	90Z47	①礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色			〃
81	70A00	①石英・片岩礫・粗砂多②良好③明赤褐色		口唇下に半載竹管状工具による刺突文を3段に施し、その下位に同工具による波状文が施される。口唇は角頭状を呈し、上記工具の刻目が加えられる。内面風化。外面煤状炭化物が付着。	茅山上層式併行
82	67A01	①石英・片岩礫多②良好③鈍い赤褐色		82~98は表裏両面に条痕を有する。82~84・86は口唇上に篋状工具による刻目をもつ。器形は82~85・88~92が平口縁、86が波状口縁であり、口唇形態は82・83・88が尖頭状、84・85・89・90が内削ぎ状、86・91が角頭状、92が丸棒状を呈する。98は底部破片。	
83	98A34	①片岩礫多②良好③鈍い褐色			
84	73Z47	①粗砂少②良好③鈍い赤褐色			
85	88A00	①粗砂多 礫少②良好③鈍い赤褐色			
86	72Z46	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色			
87	79A02	①石英粗砂多②良好③鈍い赤褐色			
87	79A02	①石英粗砂多②良好③鈍い赤褐色			

5. 包含層の出土遺物

番号	出土位置	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備考
88	76Z46	①粗砂多②良好③赤褐色		85・86・95・98は器面内側が、97は内外両側が風化によって荒れている。また、87は内面に88・89は外面に煤状の炭化物が付着している。	
89	86Z49	①石英・片岩礫・粗砂多②良③鈍い赤褐色		胎土には石英・片岩礫を含むものが多く、先述の52～80の縄ケ島台式や茅山式土器とも共通している。	
90	100Z49	①石英・片岩礫・粗砂多②良③鈍い赤褐色			
91	100Z47	①石英・片岩礫・粗砂多②良③鈍い赤褐色			
92	91A28	①片岩礫・粗砂多②良好③鈍い橙色			
93	101A07	①石英・片岩礫・粗砂多②良好③鈍い橙色			
94	68A01	①石英礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色			
95	66Z48	①石英礫・粗砂多②良好③鈍い橙色			
96	101A07	①片岩礫・粗砂多②良好③鈍い橙色			
97	85Z47	①片岩礫・粗砂多②良好③鈍い橙色			
98	86Z47	①粗砂多②良好③橙色④底 $\frac{1}{2}$			
99	98A00	①チャート礫・粗砂多②良好③橙色	21(1a・1a・1b)	99(=100・101)は渦巻状の隆帯+円形竹管文+縄文原体の側面圧痕、102は円形貼付文+縄文原体の側面圧痕、103は刻目を施した隆帯+円形竹管文+縄文原体の側面圧痕、105は細棒状工具の刺突文がそれぞれ施文される。縄文施文は15～20mmの短い原体を用いる。99は波状口縁	花積下層式
100	101A01	々			々
101	101A00	々			々
102	87A00	①礫少・粗砂多②良好③鈍い黄褐色	21(1a・1a・1b・1b)	102・104・107は平口縁。口唇部は104が丸棒状の他は総てわずかに内削ぎ状を呈する。102・106は内面に、99・107は内外両面に火熱による風化。103は外面に、107は内面に煤状炭化物が付着。	二ツ木式
103	65A14	①粗砂多②良好③橙色	21(1a)		々
104	98A02	①チャート粗砂多②良好③褐灰色	21(1a・1b)		花積下層式
105	76Z46	①細砂多②良好③明黄褐色	5a		二ツ木式
106	78Z49	①礫少・粗砂多②良好③鈍い赤褐色	20a(5a・5b)		花積下層式
107	78Z48	①礫・粗砂多②良好③鈍い褐色	5a・5b		二ツ木式
108	76Z46	①細砂多②良好③明黄褐色	5a		花積下層式
109	88A41	①礫少・細砂多②良好③赤褐色	5a・5b		々
110	76Z46	①細砂多②良好③明黄褐色	5a		々
111	81A39	①細砂少②良好③橙色④口～頸 $\frac{1}{2}$	2a(16a)	111～122・125・126は棒状や筥状工具による梯子状沈線文や刺切文+貼付文によつて文様構成される。123は上記文様に円形竹管文が附加される。117・123の貼付文には刻み目が施される。124は半截竹管状工具による外側爪形文が施される。	関山Ⅰ式
112	74A19他	①チャート粗砂多②良好③鈍い橙④口 $\frac{1}{2}$	17e(1a+1b)		々
113	76A33他	①礫・粗砂多②良好③橙色④口～底 $\frac{1}{2}$	17c(1a・1a) 17d(1b・1b)		々
114	91A25	①粗砂多②良好③鈍い橙色			々
115	94Z49	①粗砂多②良好③鈍い褐色			々
116	77A40	①粗砂多②良好③鈍い橙色			々
117	82A36	①粗砂多②良好③鈍い橙色	2a(16a)		々
118	83A02	①細砂多②良好③鈍い褐色	17a(4a)・17b(4b)		々
119	83A24	①粗砂多②良好③鈍い黄褐色	17c(1a・1a)		々
120	85Z47	①粗砂多②良好③明赤褐色			々
121	90A37	①チャート礫・粗砂多②良好③鈍い橙色			々
122	92A00	①チャート・石英粗砂多②良好③橙色			々
123	79A18	①細砂多②良好③鈍い褐色			々
124	A区表採	①粗砂多②良好③鈍い褐色			々
125	61A27	①粗・細砂多②良好③褐灰色			々
126	72Z46	①粗砂多②良好③鈍い褐色	2a(16a)		々
127	75A36	①粗砂多②良好③明赤褐色			関山Ⅰ式
128	77A36	①チャート礫・粗砂多②良好③明赤褐色	18(5a+5b)	127・128・130は棒状工具の沈線文+円形・楕円形貼付文、129・133は半截竹管状工具の平行沈線文+円形・楕円形貼付文、131は半截竹管状工具の平行沈線文+同工具のコンパス文、132は棒状工具の沈線文+刺突文が施される。134は筥状工具の刻目を加えた円形貼付文+幅広の4半截竹管状工具の縦長コンパス文、135は円形竹管文+円形貼付文が施される。128・130・131・133・134は平口縁、127・135は波状口縁をもつ。口唇部は134・135が丸棒状となる他は総て内削ぎ状を呈する。127・129は内外両面128は内面、134は外面に火熱による風化。127・128・130の外面に煤状炭化物付着。	々
129	87Z49	①石英・チャート粗砂多②良③鈍い黄褐色	2a(16b)		々
130	88Z43	①石英礫少・細砂多②良好③鈍い褐色			々
131	82A36	①粗砂多②良好③鈍い褐色			々
132	83A38	①粗砂多②良好③鈍い褐色			々
133	87A28	①粗砂少②良好③鈍い赤褐色			々
134	78A23	①石英礫少②良好③鈍い赤褐色④口～胴 $\frac{1}{2}$	18(2a+2b)		々
135	96A26他	①粗砂多②良好③橙色	1a(17c)・1b(17d)		々
136	90A01	①細砂多②良好③橙色	13b	136・138・139は半截竹管状工具による蕨手状・鋸歯状の平行沈線文が施される。また、同様工具により137は縦長のコンパス文、152は縦・斜位、153は斜位の平行沈線文が施される。	関山Ⅱ式
137	86Z42	①粗砂多②良好③橙色	13a		々
138	78Z49他	①粗砂少②良好③橙色	不明		々
139	88A01他	①粗砂少②良好③橙色	13b		々
140	76A00	①粗砂多②良好③橙色	13b・4a(16a)	縄文施文は2種類以上の原体を用いるものが多く、160・162は4種類の原体を用いている。	関山式
141	93A24	①粗砂多②良好③鈍い褐色	2a(16a)		々
142	83A38	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色	16a(5a・5b)		々
143	81A18	①粗砂多②良好③鈍い褐色	16a(5a・5b)		々
144	80Z41	①細砂多②良好③鈍い黄褐色	2a(16b)・4a	器形は136・138・143・151・152・163は波状口縁、139・148・150・155・156・164・166・167は平口縁を呈する。口唇部の形状は、138が	々

II. 縄文時代の遺構と遺物

番号	出土位置	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備考
145	91A30	①粗砂多②良好③鈍い橙色	18(2a+2b)・ 2a(16b)	角頭状、139・150・151・155・156 は丸棒状を呈し、他は内削ぎ状となる。168~178は底部の破片であり、168は高台状を呈している。また173を除いて総て上げ底状の底部となり、168・172・178以外は底面にも縄文などを施文している。 器面の内側は良好に研磨されている。137・141・143・147・160~163・167・169~173・175・176 は内外両面に、142・154・158は外面に、144・145・149・177 は内面にそれぞれ二次焼成による風化が認められる。また、136・137・141・160・175は内面に138・140・152・168は内外両面に146は外面に煤状の炭化物が付着している。 胎土には粗砂粒を多量に含むものが多く、162・163・165・170・172・175のように石英・チャート・結晶片岩などの粗砂・礫を含むものもある。	〃
146	86A17	①石英粗砂多②良好③鈍い橙色	5a(16b)		〃
147	85A01	①粗砂多②良好③橙色	2a(16b)		〃
148	54A13	①粗砂多②良好③鈍い褐色	8a		〃
149	90A17	①粗砂多②良好③鈍い橙色	10(2a+1a・1a)・ 10(2b+1b・1b)		〃
150	88A01	①細砂少②良好③灰黄褐色	13a		〃
151	97Z49	①細砂多②良好③灰黄褐色	9b		〃
152	89Z42	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色	5a		〃
153	83A00他	①細砂多②良好③鈍い橙色	9b		〃
154	90A30	①粗砂少②良好③鈍い橙色	13b		〃
155	92A00	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色	5a(16b)		〃
156	86A01	①粗砂多②良好③鈍い橙色	17a(1a)・17b(1b)		〃
157	91A28	①粗砂少②良好③鈍い橙色	17c(1a)・17d(1b)		〃
158	81A20	①粗砂多②良好③鈍い橙色	17b(4b)		〃
159	83A35	①細砂多②良好③鈍い橙色	17c(1a)・17d(1b)		〃
160	88A16	①粗砂多②良好③鈍い橙色	17c(1a)・17d(1b)・ 6a・6b		〃
161	86A35	①粗砂多②良好③鈍い橙色	17c(1a)・17d(1b)	〃	
162	77A32	①石英粗砂多②良好③橙④胴下~底迄	17c(1a)・17d(1b)・ 5a・5b	〃	
163	76A40	①チャート・石英粗砂多②良好③鈍い橙	5a・5b	〃	
164	89A35	①粗砂多②良好③鈍い橙色	2a・2b	〃	
165	A区表採	①片岩・チャート礫・粗砂多②良③鈍い橙	20(5a・5b)	〃	
166	73A01	①粗砂多②良好③鈍い褐色	5a・5b	〃	
167	86Z47	①粗砂多②良好③明褐色	5a・5b	〃	
168	76Z44	①粗砂多②良好③明赤褐色		〃	
169	72A02	①粗砂多②良好③橙色	17c(1a)・17d(1b)	〃	
170	100A38	①チャート礫・粗砂多②良好③鈍い橙色	18(1a+1b)	〃	
171	89A16	①粗砂・礫多②良好③鈍い橙色	17a(1a)	〃	
172	79A43	①片岩・チャート礫・粗砂多②良③鈍い橙	2a(16b)	〃	
173	75A36	①粗砂多②良好③鈍い橙色	2a(16b)	〃	
174	表採	①粗砂多②良好③鈍い黄褐色	2b	〃	
175	90A31	①チャート礫・粗砂多②良好③明赤褐色		〃	
176	93A23	①粗砂多②良好③鈍い黄褐色	2a・2b	〃	
177	87Z49	①粗砂少②良好③鈍い橙色	2a(16a)	〃	
178	A区表採	①粗砂少②良好③鈍い橙色	10(2a+1a・1a)	〃	
179	77Z47他	①粗砂・礫多②良好③暗赤褐色		179・181は半截竹管状工具による平行沈線文、	有尾式系
180	59A14	①粗砂少②良好③鈍い黄褐色		180・183・184・186・187 は同様工具による平行沈	〃
181	97Z46	①石英粗砂多②良好③鈍い橙色		線文+内側爪形文、182 は同様工具による平行	黒浜式
182	A区表採	①チャート粗砂多②良好③鈍い橙色		沈線文+棒状工具による刺突文、185 は半截竹	有尾式系
183	80B40	①礫・粗砂多②良好③明黄褐色	2a・2b	管状工具による平行沈線文+櫛歯状工具による	〃
184	74A37	①粗砂多②良好③鈍い黄褐色		列点状刺突文、188は櫛歯状工具による列点状+	黒浜式
185	86A14	①粗砂多②良好③明黄褐色		横位の条線文によりそれぞれ文様構成される。	有尾式系
186	100Z48	①粗砂少②良好③灰褐色	2a	179・180・182・185 の文様はともに菱形のモチ	〃
187	90B40	①粗砂多②良好③鈍い黄褐色	2a	ーフが描かれるものであり 185は同文様が2段	〃
188	90A20	①粗砂多②良好③鈍い褐色	10(2b+1b)・ 10(2a+1a・1a)	に構成されている。183・187の爪形文は器面に	〃
189	93Z45	①粗砂多②良好③鈍い橙色	8a	対して90度に近い状態で施文されている。	〃
190	83A42	①粗砂少②良好③鈍い黄褐色	10(2a+1a)	縄文施文は、2種類の原体を用いて羽状・菱	黒浜式
191	83A02	①粗砂多②良好③鈍い橙色	10(2a+1a)・ 10(2b+1b)	形状に構成されるものに188・191・194・197・200・ 201・204~206などがある。218・219・221の底部に	〃
192	77Z48	①チャート・片岩礫・粗砂多②良③鈍い橙	10(2a+1a)	は下面にも縄文が施文されている。	〃
193	87A21	①粗砂多②良好③鈍い黄褐色	8c	器形は179・186・212(=213)は波状口縁、180・	〃
194	80Z00	①チャート・片岩礫・粗砂多②良③鈍い褐	10(2a+1a)	181・184・185・187・188・191・194・198・200~202・	〃
195	77A20	①粗砂多②良好③鈍い黄褐色	14b	204~208 は平口縁を呈する。口唇部の形状は	〃
196	73A24	①粗砂多②良好③鈍い黄褐色	14d・2a	179・188・202・206・207は内削ぎ状、180・186・187	〃
197	101Z36	①チャート礫・粗砂多②良好③明赤褐色	10(2b+1b)・1b)	・191・201・205・208は角頭状、他は丸棒状を呈す	〃
198	表採	①粗砂多②良好③浅黄色	2a・14c	る。219・221の底部はやや上げ底状となる。	〃
199	表採	①石英粗砂少②良好③橙色	14c	器面の内側は良好に研磨されるものが多いが	〃
200	76Z45	①粗砂多②良好③鈍い橙色	5b	風化して荒れているものもある。182・183・187・ 190・194・197・201・202・204~206・208~210・215・	〃

5. 包含層の出土遺物

番号	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備考
201	77Z49	①礫・粗砂多②やや不良③鈍い褐色	2a・2b	217・219・221 は内外両面に、185・191・192・203・216・223は内面に、199は外面にそれぞれ二次焼成による風化が認められる。また、186・188・196・198・201・204・207は外面に、203・220は内面に煤炭炭化物が付着している。 179は1箇所に焼成後の補修孔が認められる。	〃
202	76A00	①粗砂・礫多②良好③明黄褐色④口～胴1/2	2a		〃
203	71A00	①チャート粗砂②良好③明赤褐色	2a		〃
204	95Z46	①粗砂多②良好③鈍い黄褐色	2a		〃
205	93Z46	①粗砂・礫多②良好③鈍い赤褐色	5a・5b		〃
206	77Z49	①粗砂多②良好③鈍い褐色	2a・2b		〃
207	84A14	①粗砂多②良好③明黄褐色	2a		〃
208	95Z46	①粗砂多②良好③橙色	6b		〃
209	A区表採	①粗砂多②良好③鈍い褐色	16a(2b)		〃
210	88A30	①粗砂多②良好③褐色	5a		〃
211	80A01	①粗砂少②良好③褐色	5a		〃
212	83A02	①礫・粗砂多②良好③鈍い黄褐色	1a		〃
213	70A13	①礫・粗砂多②良好③鈍い黄褐色	1a		〃
214	79A00	①礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色	1a		〃
215	83Z45	①チャート・片岩礫・粗砂多②良好③赤褐	〃		〃
216	85Z47	①片岩・チャート粗砂多②良③鈍い赤褐	1a		〃
217	79Z43	①チャート礫・粗砂②良好③褐色	〃		〃
218	表 採	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色	2b		〃
219	88A01	①粗砂・礫多②良好③鈍い赤褐色	2a		〃
220	78A12	①粗砂・礫多②良好③褐色	2a		〃
221	83Z45	①チャート礫・粗砂多②良好③鈍い黄橙	5a		〃
222	55A13	①チャート礫少②良好③鈍い褐色	2a		〃
223	86A16	①粗砂多②良好③鈍い褐色	〃		〃
224	81A24他	①粗砂多②良好③鈍い褐色	2a	224(=225)は6～8本1単位の筒状工具を用いた支点移動による波状文+集合沈線文、226(=227)は3本単位の筒状工具による波状文 228は2本組の半截竹管状工具による波状文+平行沈線文、229・230は半截竹管状工具による波状文+平行沈線文+円形竹管文、231・232は半截竹管状工具による集合沈線文、233は同様工具による平行沈線文+棒状工具による刻目を施した隆帯+円形竹管文、234・236は半截竹管工具の内側爪形文による木葉文+円形竹管文、235は半截竹管状工具による木葉文+内側爪形文、237は同様工具による肋骨文、238も同様工具による内側爪形文+斜行沈線文+円形竹管文、239・240も同様工具による内側爪形文、241・242も同様工具による内側爪形文+円形竹管文、243は橈歯状工具による条線文+円形竹管文、244・245は半截竹管状工具による平行沈線文がそれぞれ施文される。縄文はRLの横位施文が多い。 器形は224・229～231・233・234・238は平口縁、240は波状口縁を呈する。口唇部の形状は、232が角頭状の他は総て丸棒状を呈する。器面内側はいずれも良好に研磨されている。229・235・237・244は内外両面に火熱による風化が認められる。また、224・226・229・230・233・234・238は外面に煤状の炭化物が付着している。	諸磯 a 式
225	76Z49他	①粗砂多②良好③鈍い褐色	2a		〃
226	93Z41	①チャート・片岩礫・粗砂多②良③鈍い橙	20b(2a)		〃
227	89A01	①チャート・片岩礫・粗砂多②良③鈍い橙	20b(2a)		〃
228	100A00	①細砂多②良好③淡黄色	〃		〃
229	93A00	①粗砂多②良好③鈍い褐色	〃		〃
230	97Z46	①粗砂多②良好③鈍い褐色	〃		〃
231	79A23	①粗砂多②良好③鈍い褐色	〃		〃
232	92Z48	①粗砂多②良好③明赤褐色	〃		〃
233	93Z41	①粗砂多②良好③鈍い褐色	不明		〃
234	96Z46	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色	2a		〃
235	90A00	①粗砂多②良好③鈍い褐色	2a		〃
236	92Z45	①粗砂多②良好③明赤褐色	2a		〃
237	82Z46	①粗砂多②良好③褐色	〃		〃
238	96Z45	①粗砂多②良好③明赤褐色	〃		〃
239	76A18	①粗砂・礫多②良好③褐色	2a		〃
240	84A20	①粗砂多②良好③褐色	2a		〃
241	77Z49	①粗砂多②良好③鈍い褐色	2a		〃
242	89Z42	①細砂多、石英礫少②良好③鈍い褐色	2b		〃
243	88Z42	①粗砂多②良好③褐灰色	〃		〃
244	93Z46	①粗砂多②良好③明赤褐色	2a		〃
245	86Z42	①礫・粗砂多②良好③明赤褐色	2a		〃
246	93Z49	①粗砂多②良好③鈍い褐色	2a		246・247・249・260は半截竹管状工具による幅広い内側爪形文、248・251～254・258・259は半截竹管状工具による集合沈線文、250は同様工具による内側爪形文+円形竹管文、255～257は筒状工具による刻目をもち浮線文によってそれぞれ文様構成される。縄文はRLの横位施文が多い。 器形は、248・252～254・258は波状口縁で、248は強く内折する。247・251・256・260は平口縁である。260は浅鉢形土器。口唇部の形状は、248・256がやや内削ぎ状を呈する他は、総て丸棒状を呈する。 246・254は外面に、248・255・257・258は内面に249は内外両面に火熱による風化が認められる。また、246・253・258は内外両面に 247は内面に
247	89Z47	①片岩・チャート礫・粗砂②良好③褐灰色	〃	〃	
248	調査区外	①礫・粗砂多②良好③明赤褐色④口～頸1/2	〃	〃	
249	87Z43	①片岩礫・粗砂多②良好③鈍い褐色	〃	〃	
250	89Z47	①粗砂多②良好③鈍い褐色	〃	〃	
251	88A00	①粗砂多②良好③褐灰色	〃	〃	
252	87A00	①チャート礫・粗砂多②良好③鈍い褐色	〃	〃	
253	76Z46	①石英・粗砂多②良好③明赤褐色④口1/2	〃	〃	
254	80A00	①石英粗砂多②良好③鈍い褐色	〃	〃	
255	73Z43	①粗砂多②良好③鈍い褐色	2a	〃	
256	82A13	①粗砂多②良好③暗灰黄色	2a	〃	
257	99Z48	①粗砂多②良好③鈍い褐色	2a	〃	
258	88Z46	①粗砂多②良好③鈍い褐色④胴～底1/2	2a	〃	
259	90A00	①粗砂多②良好③鈍い褐色④胴～底1/2	2a	〃	

Ⅱ. 縄文時代の遺構と遺物

番号	出土位置	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備考
260	93Z48	①粗砂多②良好③鈍い褐色		248・250・252・257は外面に煤状の炭化物が付着。	〃
261	86A13	①粗砂多②良好③赤褐色	2a	諸磯 a 式または同 b 式に比定される土器である。265・266 はラッパ状に開口する平口縁の土器で、全面に縄文が施文されている。	諸 a ~ b 式
262	93Z46	①片岩礫・粗砂多②良好③明赤褐色	2a		〃
263	97Z47	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色	2a		〃
264	95Z46	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色	2a	縄文施文は270・271 を除いて総てRLの横位施文となる。270は2種類の原体を用いている、	〃
265	73A20	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色	2a	269は原体の末端を他条を用いて結縛している。	〃
266	96Z46	①粗砂多②良好③赤褐色	2a	口唇部の形状は、265が角頭状、266が丸棒状を呈する。	〃
267	95Z45	①粗砂多②良好③明赤褐色	2a	いずれも器面内側は良好に研磨されている。	〃
268	92A00	①石英・チャート・片岩粗砂②良好③明赤褐色	2a	270・279は内外両面に、273・274・277は器面内側にそれぞれ二次焼成による風化が認められる。	〃
269	92A46	①粗砂多②良好③鈍い褐色	20a(2a)	また、267~269・273は外面に 270は内面に 275は内外両面に煤状の炭化物が付着している。	〃
270	82A00	①石英・粗砂多②良好③鈍い赤褐色 ④胴下~底ㄥ	2a・2b		〃
271	94Z47	①片岩礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色	2b		〃
272	90Z45	①礫・粗砂多②良好③鈍い褐色	2a		〃
273	93Z42	①チャート・片岩礫・粗砂多②良好③赤褐色	2a		〃
274	72Z46	①粗砂・礫多②良好③鈍い赤褐色	2a		〃
275	88Z44	①礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色	2a		〃
276	61A27	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色	2a		〃
277	73Z44	①粗砂多②良好③鈍い褐色	2a		〃
278	A区表採	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色	2a		〃
279	92A00	①礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色④底ㄥ	2a		〃
280	73Z47他	①礫・粗砂多②良好③灰褐色④口~胴下ㄥ		280~288は半截竹管状工具による集合沈線文+棒状・耳状・円形状貼付文によって文様構成される。282 は円形貼付文上に棒状工具による刺突を加えている。289~293は半截竹管状工具による沈線文+波状・円形状貼付文、294~298は縄文を地文として波状あるいは円形状の貼付文、299~304は半截竹管あるいは複数本単位の櫛歯状工具による集合沈線文がそれぞれ施文されるが、299は縄文を地文として耳状・円形状の貼付文が付加される。305~308は結節浮線文によって同心円上の文様が構成される。	諸磯 c 式
281	A区表採	①礫・粗砂多②良好③鈍い褐色		縄文を施文するものは少ないが、294~ 296・298は2種類の原体を用いている。	〃
282	87A00他	①礫・粗砂多②良好③鈍い褐色		器形は280・282・285~288・291・299・300は平口縁、289・290・294・307は波状口縁を呈する。口唇部の形状は 282・290・299・307は角頭状を呈するが、他は丸棒状を呈する。	〃
283	87A00他	①礫・粗砂多②良好③鈍い褐色		器面内側はいずれも良好に研磨されるが、火熱により荒れているものもある。 280・288・291は外面に、282・290・295・304は内外両面に、284・286・298・299は内面に二次焼成による風化が認められる。また、280・307は内面に287・294・298・302は外面に、299は内外両面に煤状の炭化物が付着している。	〃
284	表 採	①チャート礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色			〃
285	85Z42	①粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
286	75Z47	①粗砂多②良好③赤褐色			〃
287	87A00	①粗砂・礫多②良好③灰褐色			〃
288	82Z46	①粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
289	69A01	①粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
290	68A00他	①粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
293					〃
294	87A00	①粗砂多②良好③鈍い褐色	2a・2b		〃
295	80Z42	①礫・粗砂多②良好③鈍い褐色	2a・2b		〃
296	94Z48	①粗砂多②良好③鈍い褐色	2a・2b		〃
297	94Z49	①粗砂多②良好③鈍い褐色	2a・2b		〃
298	85Z47	①礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色	18(2a+2b)		〃
299	55A11	①粗砂・礫多②良好③暗赤褐色④口~胴ㄥ	2b		〃
300	77Z45	①粗砂多②良好③褐色			〃
301	88A00	①礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色			〃
302	82A00	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色			〃
303	69Z48	①礫・粗砂多②良好③褐色			〃
304	89A43	①粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
305	89Z43	①粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
307					〃
308	72A02	①粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
309	77A00	①石英粗砂多②良好③鈍い褐色 ④口~胴ㄥ		309 は口唇部に円形竹管による斜方向の刺突を施し、口縁部に半截竹管状工具の支点移動による変形爪形文+平行沈線文、胴部にアナガラ属の波状貝殻文を重帯する。310 は口唇部に棒状工具による刻目を加え、半截竹管状工具の支点移動による刺突文を施す。311はアナガラ属の波状貝殻文を施す。309・310 は4単位の波状口縁で、口唇は角頭状を呈する。309 の内外両面に煤状炭化物が付着。	浮島式
310	94Z47	①細砂多、粗砂少②良好③鈍い褐色			〃
311	92Z45	①細砂多、粗砂少②良好③鈍い褐色			〃
312	85Z47	①粗砂多②良好③鈍い褐色	19(2a+2b)		十三善提式
313	88Z42	①粗砂多②良好③鈍い褐色	2b		〃
314	76Z44	①粗砂多②良好③鈍い褐色	2b	312 は口唇下に縦位3本の結節浮線文、313(=314)は半截竹管状工具の平行沈線文+篋状工具の刻目と交互刺突+三角印刻文が施文される。	〃

5. 包含層の出土遺物

番号	出土位置	①胎土 ②焼成③色調 ④残存	縄文原体	器形・文様の特徴	備考
				312の器形は平口縁をもち、口唇が丸棒状を呈する。	
315	102A38	①粗砂多②良好③鈍い橙色	15a	315～318は器面の全面に縄文を横位に施文するものである。316～318は平口縁をもち、口唇は丸棒状を呈する。316は内外両面に、317は外面に火熱による風化が認められる。	下小野式
316	78Z49	①粗砂多・礫多②良好③鈍い橙色	1a・17b		〃
317	91Z47	①礫・粗砂多②良好③鈍い橙色	2b		〃
318	90A00	①粗砂多②良好③鈍い橙色	2a		〃
319	76A49	①粗砂少②良好③鈍い赤褐色	2b	319(=322)は口唇部に棒状工具による刻目を施し、口縁部・胴部にも同工具による沈線文や刺突文・三角印刻文を施す。胴部には隆帯による棒状の区画文やY字状文が、また、口唇部の内側には棒状工具による三叉状の印刻文が施される。320は口縁部に横位の隆帯をめぐらせ棒状工具による交互刺突を加える。321は折返しにより肥厚した口縁部に三角印刻文がめぐる。323は棒状工具による沈線文、326は半載竹管状工具による山形状の集合沈線文、325・328は隆帯・沈線の懸垂文、330は棒状工具の弧状沈線文+印刻状の刺突文が施される。319～321・323・330は平口縁、324は波状口縁を呈する。329は無文で、器面は研磨される。	五領ヶ台式
320	76Z47他	①チャート片岩礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色④口ノ	2b・3b		〃
321	83A32	①粗砂多②良好③鈍い橙色	2a		〃
322	76C10	①礫・粗砂少②良好③鈍い褐色	2b		〃
323	76C10	①石英礫・粗砂・金雲母多②良好③鈍い褐色	2a		〃
324	78C19	①片岩礫・粗砂多②良好③鈍い褐色	1a・17a		〃
325	80C17	①石英粗砂・礫・金雲母多②良好③鈍い橙	2a		〃
326	A区表探	①粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
327	90C00	①粗砂多②良好③鈍い橙色	17a		〃
328	83A36	①石英粗砂多②良好③鈍い褐色	2b		〃
329	76Z47	①石英・チャート・片岩・礫・粗砂多②良好③赤褐色④胴～底ノ			〃
330	76C10	①石英粗砂・金雲母多②良好③灰褐色	2a	〃	
331	90A00	①石英粗砂・金雲母多②良好③明赤褐色		331は棒状工具の結節沈線文+篋状工具の爪形文、332・335は断面三角形の隆帯文、333・334は篋状工具の爪形文、337・339は隆帯文+半載竹管状工具の2本単位の結節沈線文、338・340は隆帯文+棒状工具の2本単位の結節沈線文が施文される。331・333・336・339は平口縁、332・334・337は4単位の波状口縁をもち、336は浅鉢形土器。332・336は内面に火熱による風化が認められる。332・337・338は外面に煤炭炭化物が付着する。	阿玉台2式
332	87Z46	①粗砂多②良好③明赤褐色			〃
333	94Z49	①石英礫・粗砂・金雲母多②良好③鈍い褐色			〃
334	85Z42	①片岩礫・粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
335	85Z43	①粗砂金雲母多②良好③鈍い褐色			〃
336	90B40	①粗砂・礫多②良好③鈍い褐色			〃
337	90Z44	①粗砂多②良好③褐色④口ノ			〃
338	93Z46	①石英粗砂・礫・金雲母多②良好③鈍い橙			〃
339	87A01他	①粗砂多②良好③褐色			〃
340	87Z46	①石英・金雲母粗砂多②良好③灰褐色			〃
341	90A00	①粗砂多②良好③鈍い褐色		341は隆帯の区画文に沿った矢羽状爪形文や波状沈線文、342は半載竹管状工具の平行沈線区画内に矢羽状爪形文、343は隆帯の区画に沿って半載竹管状工具の爪形文、344は342に三叉文を付加、345(=346)は半載竹管状工具の半隆線状文+外側爪形文、347は半載竹管状工具の区画文に沿って篋状工具の爪形文の刺突文、348は半載竹管の平行沈線文+内側爪形文が施文される。	勝坂2式
342	88A01	①粗砂多②良好③鈍い赤褐色			〃
343	85Z42	①粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
344	88A00	①粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
345	90A00	①片岩礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色			〃
346	90A00	①片岩礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色			〃
347	Z区表探	①粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
348	85Z42	①粗砂多②良好③鈍い褐色			〃
349	82C05	①礫・粗砂多②良好③鈍い褐色	2a	隆帯に沿って棒状工具の2本1単位の沈線文を施す。隆帯文波頂下に渦巻文を施文。	
350	87Z46	①粗砂多②良好③鈍い褐色		棒状工具の沈線文+三叉文を施す。内面には火熱による風化が認められる。	勝坂3式
351	80B30他	①粗砂・礫多②良好③明赤褐④胴～底ノ		楕円状・渦巻状の隆帯区画内に棒状工具による刺突文や渦巻沈線文を施文。胴下位に隆帯をめぐらせ、以下無文。	
352	81Z47	①粗砂多②良好③鈍い黄褐色	2a	352は半載竹管状工具による横位・弧状の平行沈線文、353は隆帯+棒状工具のなぞり、354は棒状工具による懸垂文を施す。355は口縁部に渦巻状隆帯や区画文を施し、区画内に背割り状の隆帯文や棒状工具の沈線文が施文される。胴部は棒状工具の蛇行・平行状の懸垂文が施される。口唇波頂下に隆帯の渦巻文が施される。各土器の縄文はRLの縦位施文。360は浅鉢形土器。352・354・355の外面に煤炭炭化物が付着する。	加E1式
353	80B40	①粗砂・礫多②良好③鈍い褐色	2a		〃
354	Z区表探	①礫・粗砂多②良好③鈍い赤褐色	2a		加E2式
355	79C11	①礫・粗砂多②良好③赤褐色④口・底ノ	2a		〃
356	83B46	①粗砂・礫多②良好③鈍い褐色	2a		〃
357	Z区表探	①礫・粗砂多②良好③鈍い褐色	2a		加E式
358	79B29	①粗砂多②良好③赤褐色	2b		〃
359	80B30	①粗砂多②良好③明赤褐色	2a		〃
360	88Z42	①礫・粗砂多②良好③赤褐色			諸磯b式
361	76C04	①チャート粗砂多②良好③鈍い褐色	1a		361・362は棒状工具による沈線区画文、363は半載竹管状工具による結節沈線区画文、366は円形竹管状工具の刺突を施した8字状貼付文と棒状工具による沈線文がそれぞれ施文される。361・362の区画文内にはL・LR縄文が充填。367の底面には1本越え、2本潜り、1本送りの網代痕がある。363は4単位の波状口縁。364・365は平口縁である。
362	81A19	①粗砂多②良好③鈍い褐色	2b	〃	
363	76Z47	①粗砂多②良好③灰黄褐色		五領ヶ台式	
364	82B34	①礫・粗砂多②良好③灰黄褐色		堀之内1式	
365	82B35	①チャート礫・粗砂多②良好③鈍い褐色		〃	
366	82B34	①礫・粗砂多②良好③鈍い褐色		〃	
367	83B45	①礫・粗砂多②良好③鈍い褐色		〃	

II. 縄文時代の遺構と遺物

(2) 石 器

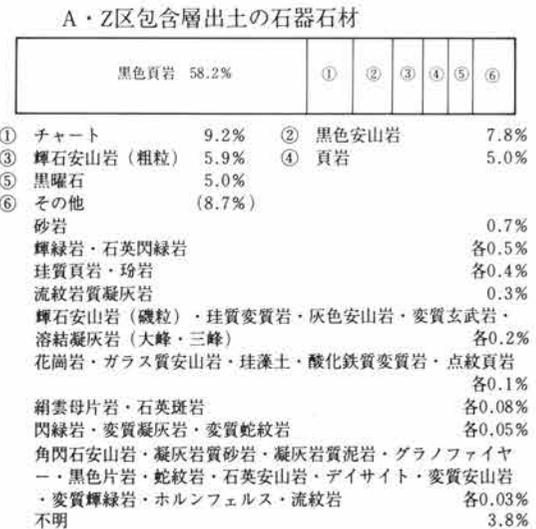
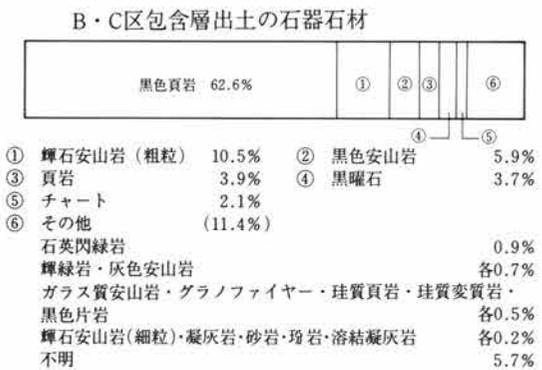
本遺跡では、総計4277点の石器・剥片類が出土しており、これらのうち、3839点(総量の90%)が住居址や土壙・集石などの集中するA・Z区で検出されている。いずれもVI層(暗褐色土層)より出土している。この暗褐色土層は調査区の全域に亘って認められ、台地平坦部では20~30cm・台地傾斜部では60cm前後堆積する。A・Z区には、第48・49図に明らかのように各種土器型式が出土しており、各々の石器の帰属時期については明確にすることができない。

A・Z区では、分類の可能な石器610点(15.9%)、剥片3063点(79.8%)、礫166点(4.3%)が出土している。分類の可能な石器は剥片石器472点(12.3%)・礫石器138点(3.6%)であり、狩猟具・採集具・加工具など多種多様な器種からなる。スタンプ形石器や特殊磨石を除いて各々の石器の帰属時期については明らかでないが、これらは包含層出土の土器の主体を占める条痕文系土器(11.4%)や前期(関山~諸磯式

期:69.8%)および中期(五領ヶ台~加曾利E式期:12.7%)のいずれかに伴い、多くは集落の形成される前期の関山~諸磯式期の段階に伴出する可能性が高い。石材は黒色頁岩(58.2%)・チャート(19.2%)・黒色安山岩(7.8%)・頁岩(5.1%)・黒曜石(5%)のほか珪質頁岩・流紋岩など多種多様な石器石材が用いられている。

B・C区では、分類の可能な石器58点(13.2%)・剥片341点(78%)・礫39点(9%)が出土している。石器として分類の可能な58点は剥片石器51点(11.6%)・礫石器7点(1.6%)からなる。A・Z区と同様に各々の石器の帰属時期については明らかでないが、B・C区には早期および中・後期を主体とする土器が分布しており、これらに伴う可能性が高い。石材は黒色頁岩(62.6%)・黒色安山岩(5.9%)・頁岩(3.9%)・黒曜石(3.7%)・チャート(2.1%)など多種多様な石器石材が用いられている。

包含層(VI層)出土の石器は多種多様な石材が用いられているが、とりわけ、黒色頁岩が用いられるこ



第63図 石器の組成と石材

5. 包含層の出土遺物

とが多く、求められる機能を充たす石材性状を備えていると言える。総量の6.8%を占める黒色安山岩は容易に採集が可能ではあるが、全般的に使用される頻度は少なく、先土器時代一般の石材選択の傾向とは著しく相違する。また、総量の10%前後を占めるチャートの場合、石鏃などの素材として用いられることが多く、総量の5%を占める黒曜石も同様な傾向にある。このような状況は遺跡周辺の諸遺跡でも同様であり、利根川上・中流域での一般的な状況となっている。石器の製作と使用・廃棄の過程については不明確な点が多く、その詳細を論ずることは容易ではないが、製作器種の限定されるチャートなどの場合、碎片を含む剥片の占める割合が高く、例えば欠損・紛失などにより直接的生産具を補充するための製作が遺跡内で行われている可能性が高い。なお、ここでは小礫や礫片を礫として分類しているが、これらのなかには磨石・敲石などの破片が含まれる可能性が高い。

石鏃 (第65図 368～389)

凹基無茎鏃27点・平基無茎鏃9点・有茎鏃1点・尖基鏃3点・未製品4点の総計44点が出土している。3点の凹基無茎鏃を除き、すべてA・Z区からの出土である。欠損は10点に認められ、先端部を欠損するもの5点・返しを欠損するもの5点である。石材はチャート(17点)・黒曜石(16点)・黒色頁岩(5点)・黒色安山岩(4点)などを用いている。

368～376・378・381の12点は凹基無茎鏃である。368～371はu字状の抉りに特徴づけられる「鏃形鏃」に近い。372は先端部が錐状を呈すいわゆる「ロケット鏃」である。377・379・382・383の4点は平基無茎鏃である。384・385・387の3点は尖基鏃である。385・387の2点は縦長剥片を素材とし、周縁部をわずかに整形することにより機能部を作出している。388は有茎鏃である。386・389の2点は石器先端部および側縁部の作出が充分ではなく、未製品として扱えられる。389は同様に未製品として扱えることが可能であるが、側縁は鋸状となっている。

石鏟 (第66図 390～393)

総計4点が出土している。すべてA・Z区からの出土である。

392・393は縦長剥片を、390・391は横長剥片をそれぞれ素材として用い、周縁部をわずかに整形することにより機能部を作出している。390は先端部をわずかに欠損している。いずれも黒色頁岩を用いている。

ピエスエスキーユ (第66図 394～400)

総計7点が出土している。チャート製の1点を除き、すべてA・Z区からの出土である。

395・396・398は紡錘形状の断面形を呈すが、他の4点はいずれも剥片を素材とする。上下両端の1箇所あるいは上下・左右両端の2箇所に両極剝離痕が認められる。石材はチャート(3点)・黒色安山岩(2点)・黒色頁岩(1点)・黒曜石(1点)を用いている。

石匙 (第66～68図 401～425)

総計36点がA・Z区から出土している。欠損は1点に認められ、いずれも先端部を欠損する。石材は黒色頁岩(32点)・黒色安山岩(2点)・頁岩(1点)・チャート(1点)を用いている。

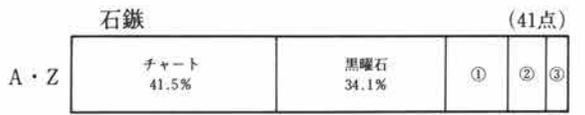
1類 石器長軸が剥片長軸に一致し、短冊状を呈す一群である。機能部は平行する左右両側縁のいずれかに求められるが、細部加工が施されるものと施されないものの両者がみられる。つまみは打面側の両側縁に浅く作出される。側縁の平行する縦長剥片が多く用いられている。石器の形状は剥片形状にほぼ一致する。総計4点が出土している。

403は縦長剥片を用い、表・裏面とも側縁に細部加工が施される。つまみは打面側の両側縁に浅く作出される。407は横長剥片を用い、つまみのみを作出する。

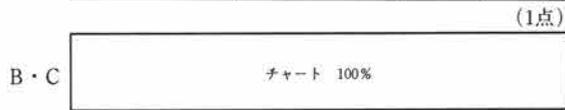
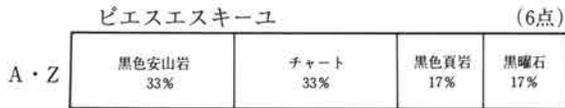
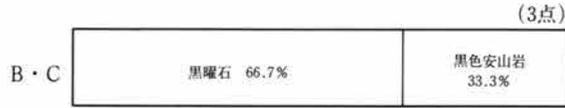
2類 体部の形状が三角形状を呈す一群である。総計10点が出土している。

a類 石器長軸が剥片長軸に対し左右いずれか40°前後斜交し、長幅比は1:2前後を示す。機能部は左右両側縁のいずれかに求められ、その形状は凹刃・直刃・凸刃状を呈しバラエティーに富む。つま

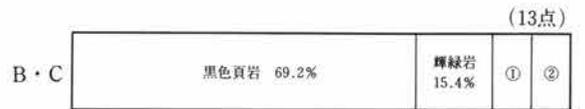
II. 縄文時代の遺構と遺物



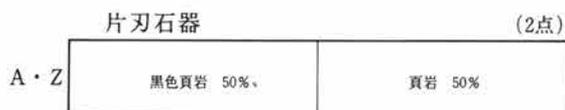
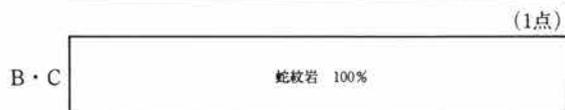
- ① 黒色頁岩 12.2% ② 黒色安山岩 7.3%
 ③ 珪質凝灰岩・珪質頁岩 各0.5%



- ① 頁岩 6.8% ② 灰色安山岩 6.8%
 ③ その他 (8.4%)
 輝石安山岩(粗粒)・黒色安山岩・砂岩・変質安山岩・変質蛇紋岩 各1.7%



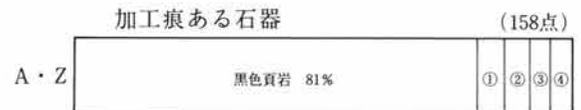
- ① グラノファイヤー 7.7% ② 頁岩 7.7%



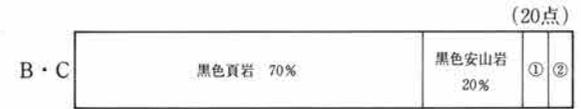
- ① 黒色安山岩 5.6% ② 頁岩・チャート 各2.8%



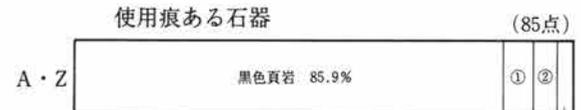
- ① 頁岩 5.6% ② 黒色安山岩 2.8%
 ③ その他 (5.6%)
 輝緑岩・黒曜石・灰色安山岩・ホルンフェルス 各1.4%



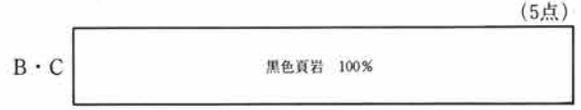
- ① 頁岩 5.7% ② 黒色安山岩 5.1%
 ③ チャート 3.8%
 ④ その他 (4.4%)
 輝石安山岩(粗粒) 1.9%
 珪質頁岩・黒曜石・灰色安山岩・変質安山岩 各0.6%



- ① 珪質頁岩 5.0% ② 黒曜石 5.0%



- ① 頁岩 5.9% ② 輝緑岩 4.7%
 ③ その他 (3.6%)
 黒色安山岩・点紋頁岩・流紋岩 各1.2%



第64図 石器の器種と石材の関係 (1)

みは打面側の両側縁に浅く作出される。石器の形状は剥片形状にほぼ一致する。6点が出土している。

401・405・406は縦長剥片を用い、両側縁には細部加工が施される。つまみは打面側の両側縁に浅く作出される。402は縦長剥片を用いる。つまみの作出は浅い。

b類 石器長軸が剥片長軸に一致し、長幅比は1:1前後を示す。機能部は左右両側縁のいずれかに求められ、その形状は直刃状を呈す。つまみは打面側の両側縁に浅く作出される。石器の形状は剥片形状にほぼ一致する。4点が出土している。

409・413・415は縦長剥片を用い、両側縁には細部加工が施される。つまみは打面側の両側縁に浅く作出される。410は横長剥片を用いる。つまみは右側縁に作出される。

3類 石器長軸が剥片長軸に対し左右いずれか40°前後斜交し、体部の形状が台形状を呈す一群である。長幅比は1:1.3前後を示す。つまみは打面側の両側縁に作出される。石器の形状は剥片形状にほぼ一致する。9点が出土している。

404・419・422・424・425はいずれも縦長剥片を用いる。側縁の細部加工が施されるもの(419・425)と施されないもの(404・422・424)とがみられる。つまみは打面側の両側縁に浅く作出される。

4類 石器長軸が剥片長軸に一致し、体部の形状が扇状あるいは三角形状を呈す一群である。長幅比は1:1.3前後を示す。機能部は凸刃状を呈す。つまみは打面側の両側縁に浅く作出される。石器の形状は剥片形状にほぼ一致する。14点が出土している。

417・418・421はいずれも三角形状を呈し、縦長剥片を用いている。機能部は凸状を呈する側縁に作出されるが、加工の施されるもの(417・418)と施されないもの(421)がみられる。つまみは打面側の両側縁に浅く作出される。408・411・414・416・420・423はいずれも扇状を呈し、横長剥片を用いている。機能部は剥片端部に作出されることが多く、凸刃状を呈するもの(416・420・423)と直刃状を呈するもの(408・411・414)とがみられる。つまみは浅く作

出されるもの(411・414・416・420)が多い。408は剥片端部に、420は剥片の側縁につまみを作出している。

打製石斧 (第69～72図 426～466)

総計72点が出土している。A・Z区では、住居址出土5点・土壙出土3点・集石出土2点・包含層出土49点の総計59点が出土している。石材は黒色頁岩(47点)、頁岩・灰色安山岩(4点)、輝石安山岩・黒色安山岩・砂岩・変質安山岩・変質蛇紋岩(各1点)を用いている。B・C区では、土壙出土3点・包含層出土10点の総計13点が出土している。石材は黒色頁岩(9点)・輝緑岩(2点)・グラノファイアー(1点)・頁岩(1点)を用いている。

1類 全体の形状が短冊状を呈する一群である。総計38点が出土しているが、形態上の特徴から以下のように細分される。

a、長さ7cm前後・幅4cm前後に計測値が集中する一群である。いずれも微細な側縁整形が施される。刃部形状は凸刃状となるが、刃部整形の施されるもの(428・450・456)と施されないもの(453)の両者が認められる。全体の形状は「短冊」状を呈す。4点が出土している。

428・450・453・456は剥片を素材とする。側縁には表裏両面に丁寧な調整加工が施されるが、刃部の整形は粗い。刃部形状は凸刃状を呈すが、わずかに偏刃となるもの(428)もみられる。なお、427は側縁部および刃部が著しく潰れた状態となっており、また、429は側縁の調整加工がやや甘く、刃部角度もやや強いため分類から除外している。

b-1、長さ14～20cm前後・幅4～6cm前後に計測値が集中する一群である。多くは丁寧な側縁整形が施される。刃部形状は凸刃状となるが、刃部整形の施されるもの(436～438・441・442・444・447)と施されないもの(434・435・439・440)の両者が認められる。いわゆる「短冊形」の打製石斧である。30点が出土している。

426・430・432～434・436～442・444・446・447は剥片を素材とする。石器に施される調整加工は素

II. 縄文時代の遺構と遺物

材として用いられる剥片の周縁に限られ、側縁に施される調整加工は比較的丁寧であるが、刃部に施される調整加工は粗い。

b-2、長さ9～16cm前後・幅4～6cm前後に計測値が集中する一群である。多くは丁寧な側縁整形が施される。刃部形状は石器長軸に対し斜交し、刃部整形の施されない場合が多い。5点が出土している。

460・462～465はいずれも横長の剥片を素材として横位に用い、側縁には丁寧な調整加工が施される。刃部には465を除き、調整加工は施されない。刃部形状は斜刃となる。463の刃部には明確な摩耗痕が認められるが、464の刃部には微細な刃こぼれが認められる。

2類 全体の形状が揆状を呈する一群である。形態上の特徴から以下のように細分される。総計14点が出土している。

a類 長さ7cm前後・幅4～6cm前後に計測値が集中する一群である。多くは丁寧な側縁整形が施される。刃部形状は直刃状となるが、刃部整形の施されるものと施されないものの両者が認められ、前者のタイプはいわゆる「トランシェ様石器」に類似する。9点が出土している。

431・451・452・454・455・457～459は剥片を素材とする。石器に施される調整加工は素材として用いられる剥片の周縁に限られ、側縁には丁寧な調整加工が施される。刃部には調整加工の施されるもの(431・452・455・459)と施されないもの(451・454・457・458)とがみられる。刃部形状は直刃状を呈すが、458はわずかに斜刃となる。明確な使用痕(摩耗痕)は認められない。

b類 多くの資料が欠損するため計測値を明示しえないが、より大形の一類である。刃部形状は凹刃・直刃・凸刃状を呈しバラエティーに富む。いわゆる「揆形」の打製石斧である。5点が出土している。

435・443・445は剥片を素材とする。石器に施される調整加工は素材として用いられる剥片の周縁に限られ、側縁には丁寧な調整加工が施されるが、刃

部に施される調整加工は粗い。

3類 全体の形状が分銅状を呈する一群である。総計4点が出土している。

448・449・466は剥片を素材とする。石器に施される調整加工は素材として用いられる剥片の周縁に限られ、側縁には丁寧な調整加工が施されるが、刃部に施される調整加工は粗い。

磨製石斧 (第72図 467～469・471～475)

総計12点が出土している。蛇紋岩製の1点を除き、すべてA・Z区からの出土である。石材は変玄武岩(5点)・蛇紋岩(4点)・黒色頁岩(2点)・頁岩(1点)を用いている。1点(467)を除き、すべて欠損している。

467・471は剥片を素材とし、刃部は片刃・円刃となる。468は器体の全面に丁寧な研磨が施され、刃部は両刃・直刃となる。いわゆる「定角式」の磨製石斧である。468は小礫を素材とし、刃部は片刃・円刃となる。472は器体の全面に丁寧な研磨が施され、刃部は両刃・直刃となる。473～475は器体の全面に研磨が施される「乳棒状」の磨製石斧である。刃部形状は明らかではないが、475は両刃・円刃となっている。

礫器 (第70図 470)

B区・35号土壇埋没土中より1点が出土している。風化が著しく明らかではないが、大形剥片を素材とし、周縁を粗く整形することにより作出される。砂岩製。

片刃石器 (第70図 466・477)

Z区・包含層より2点が出土している。石材は黒色頁岩(1点)・頁岩(1点)を用いている。

466は大形の剥片を素材とし、右側縁に機能部が作出される。477は偏平礫を素材とし、右側縁に機能部が作出される。

削器 (第73～75図 478～518)

A・Z区から71点、B・C区から5点が出土している。石器素材として用いられる剥片の形状は多種多様であるが、多くは横長の剥片を用い、85%を占める。石材は黒色頁岩(65点)・頁岩(4点)などを多

5. 包含層の出土遺物

く用いている。

478～482・484～486・488～491・493・494は横長長方形の剥片を素材とし、剥片端部には連続する浅い加工により凹刃状・凸刃状あるいは直刃状の機能部が作出される。495～498・501は横長三角形の剥片を素材が作出される。483・487・503・505・508～511は縦長剥片を素材とし、剥片の側縁に連続する浅い加工により機能部が作出される。504・506・512は木葉形状を呈し、一側縁もしくは二側縁に搔器状の機能部が作出される。499・500・502・515・518は素材として用いられる剥片の形状は明らかではないが、粗い加工により機能部が作出される。517は形状および調整加工の特徴から縦長剥片を素材とする半両面加工の尖頭器であろうか。

石核 (第75・76図 519～532)

A・Z区から22点が、B・C区から2点が出土している。石材は黒色頁岩(21点)、黒色安山岩・黒曜石・輝緑岩(各1点)を用いている。

519・524は上下両端の礫面を打面とし剥片剥離が行われる。打角は110°前後を示す。521は平坦な剥離面を打面とし周縁を巡るように剥片剥離が行われる。520は上下両端の平坦な剥離面を打面とし剥片剥離が行われる。90～180°の打面転移が認められるが、剥片剥離は作業面が限定され行われる。522・525・526～528・530・531は平坦な礫面あるいは剥離面を打面とし剥片剥離が行われる。剥片剥離は合い向かう二側縁で行われる。打角は110°前後を示す。529は平坦な剥離面を打面とし剥片剥離が行われる。90°の打面転移が認められる。532は平坦な礫面を打面とし剥片剥離が行われる。打面転移は認められない。

加工痕ある剥片 (第79～83図 565～637)

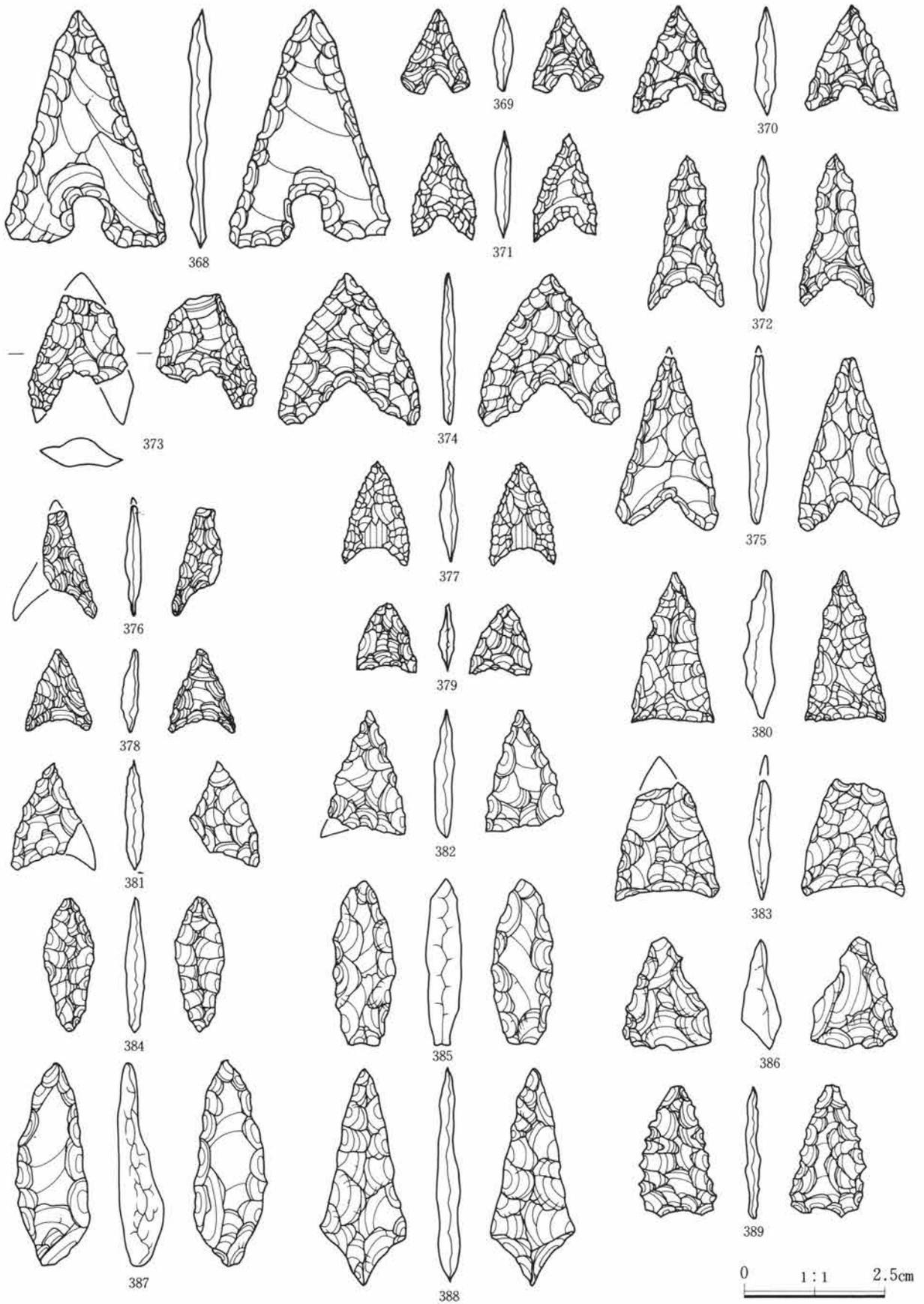
A・Z区から158点が、B・C区から20点が出土している。多種多様な形状の剥片が用いられるが、横長長方形の剥片が多く用いられる。石材は黒色頁岩(142点)・黒色安山岩(12点)・頁岩(9点)・チャート(6点)・輝石安山岩(3点)などが用いられている。

565～578・580～594は縦長の剥片を素材とするものである。総計52点が出土している。全体の形状は三角形を呈するかあるいは長方形を呈するが、三角形を呈する剥片を用いる場合が多い。機能部は一側縁あるいは二側縁に認められることが多く、この機能部の作出により剥片の形状が大きく修正されるものとはならない。595～633・635～637は横長の剥片を素材とするものである。総計117点が出土している。全体の形状は三角形を呈するかあるいは長方形を呈する。A・Z区では、三角形を呈する剥片が35点に、長方形を呈する剥片が32点に用いられている。機能部は剥片端部に認められることが多く、この機能部の作出により剥片の形状が大きく修正されるものとはならない。

使用痕ある剥片 (第77・78図 533～564)

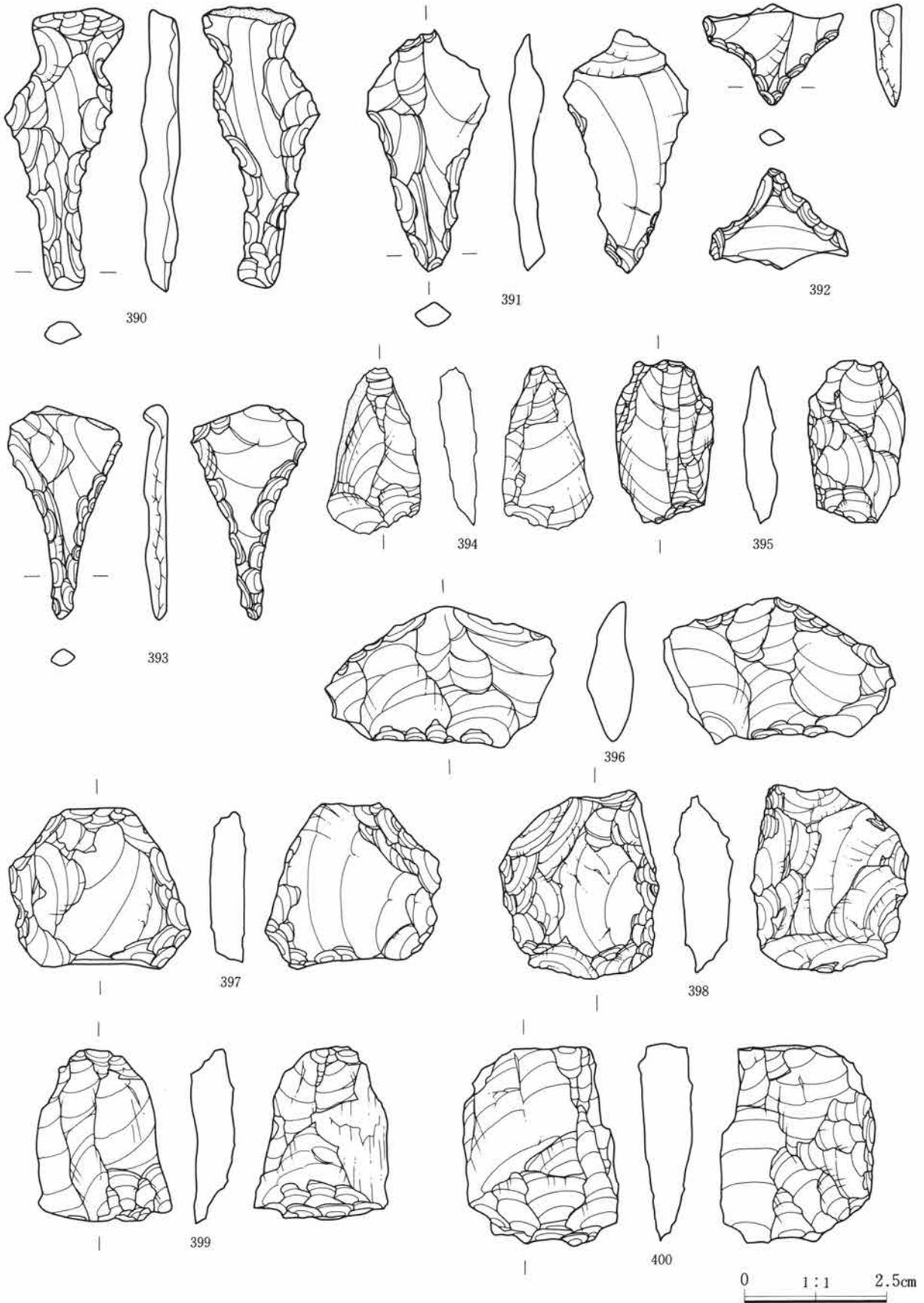
A・Z区から85点が、B・C区から5点が出土している。多種多様な形状の剥片が用いられる。石材は黒色頁岩(78点)、頁岩(5点)、輝緑岩(4点)、黒色安山岩・点紋頁岩・流紋岩(各1点)が用いられる。533～539・542は縦長の剥片を素材とするものである。全体の形状は三角形あるいは長方形を呈し、長方形を呈す剥片を用いる場合が多い。機能部は一側縁あるいは二側縁に認められることが多い。540～542・544～550・552は長幅比が1:1前後を示す剥片を素材とするものである。全体の形状は長方形あるいは台形状を呈す。機能部は剥片端部に認められることが多い。551～562は横長の剥片を素材とするものである。全体の形状は三角形・四角形状あるいは台形状を呈し、三角形を呈す剥片を用いることが多い。機能部は剥片端部に認められることが多い。

II. 縄文時代の遺構と遺物



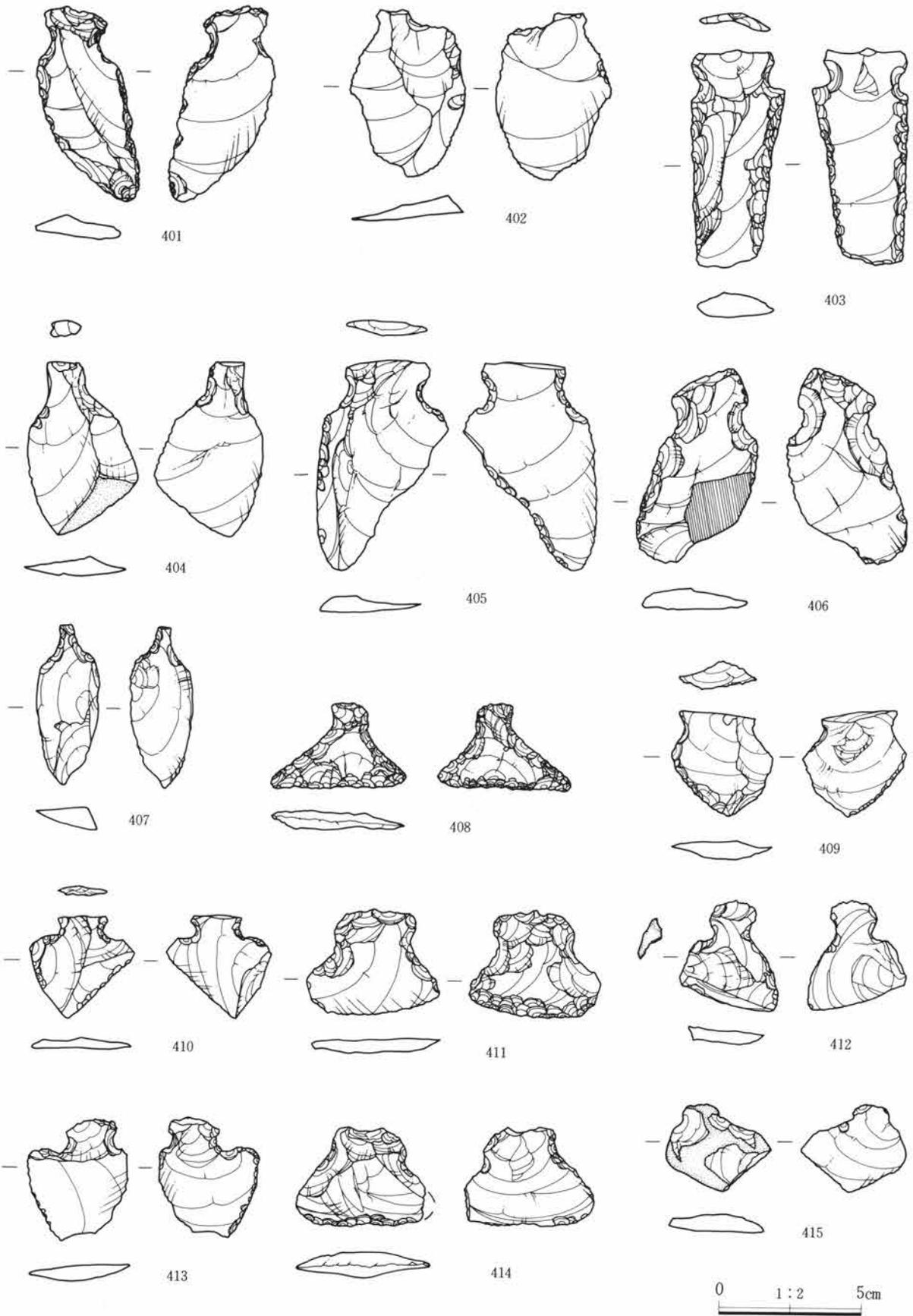
第65図 包含層出土の石器 (1)

5. 包含層の出土遺物



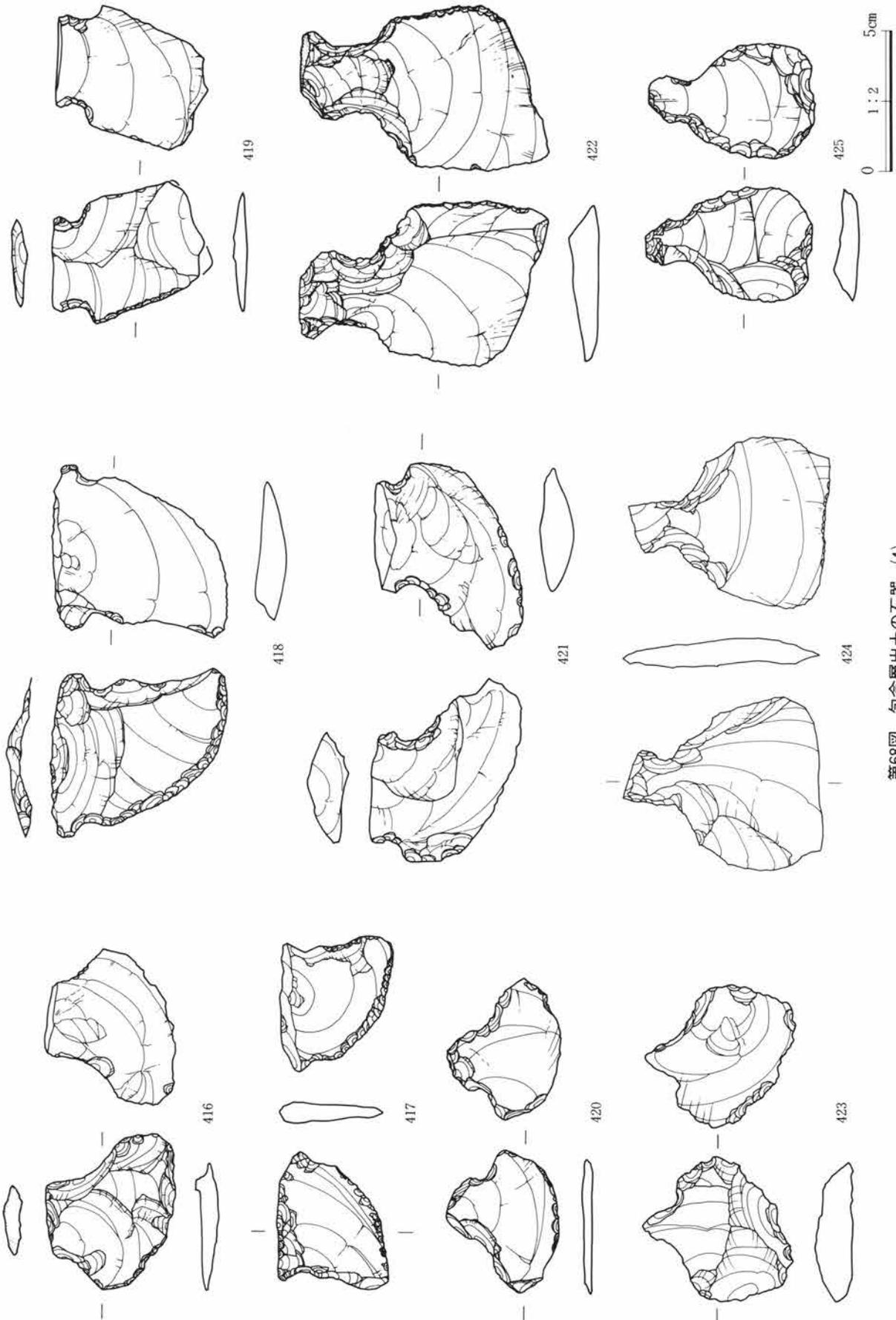
第66図 包含層出土の石器 (2)

II. 縄文時代の遺構と遺物



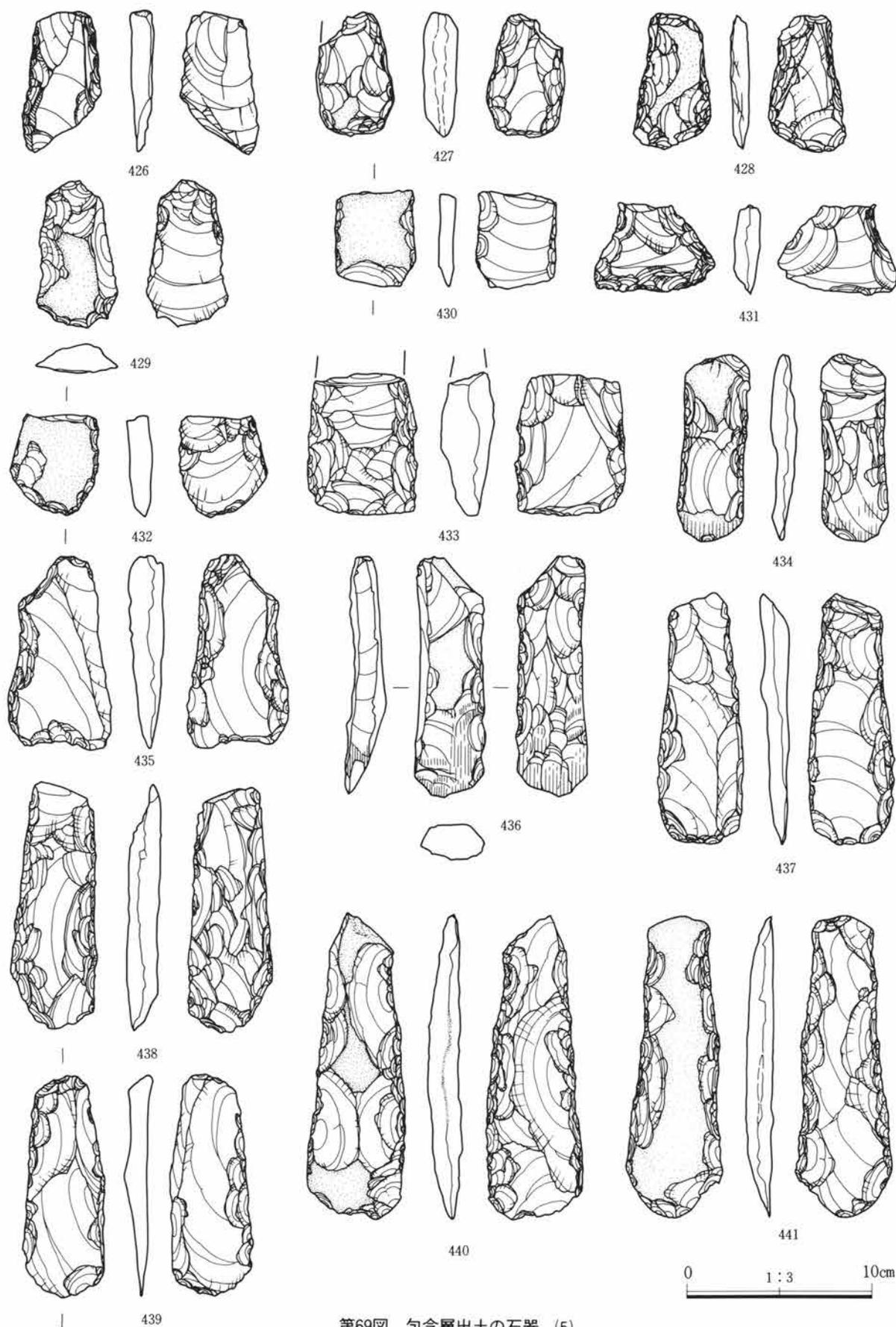
第67図 包含層出土の石器 (3)

5. 包含層の出土遺物



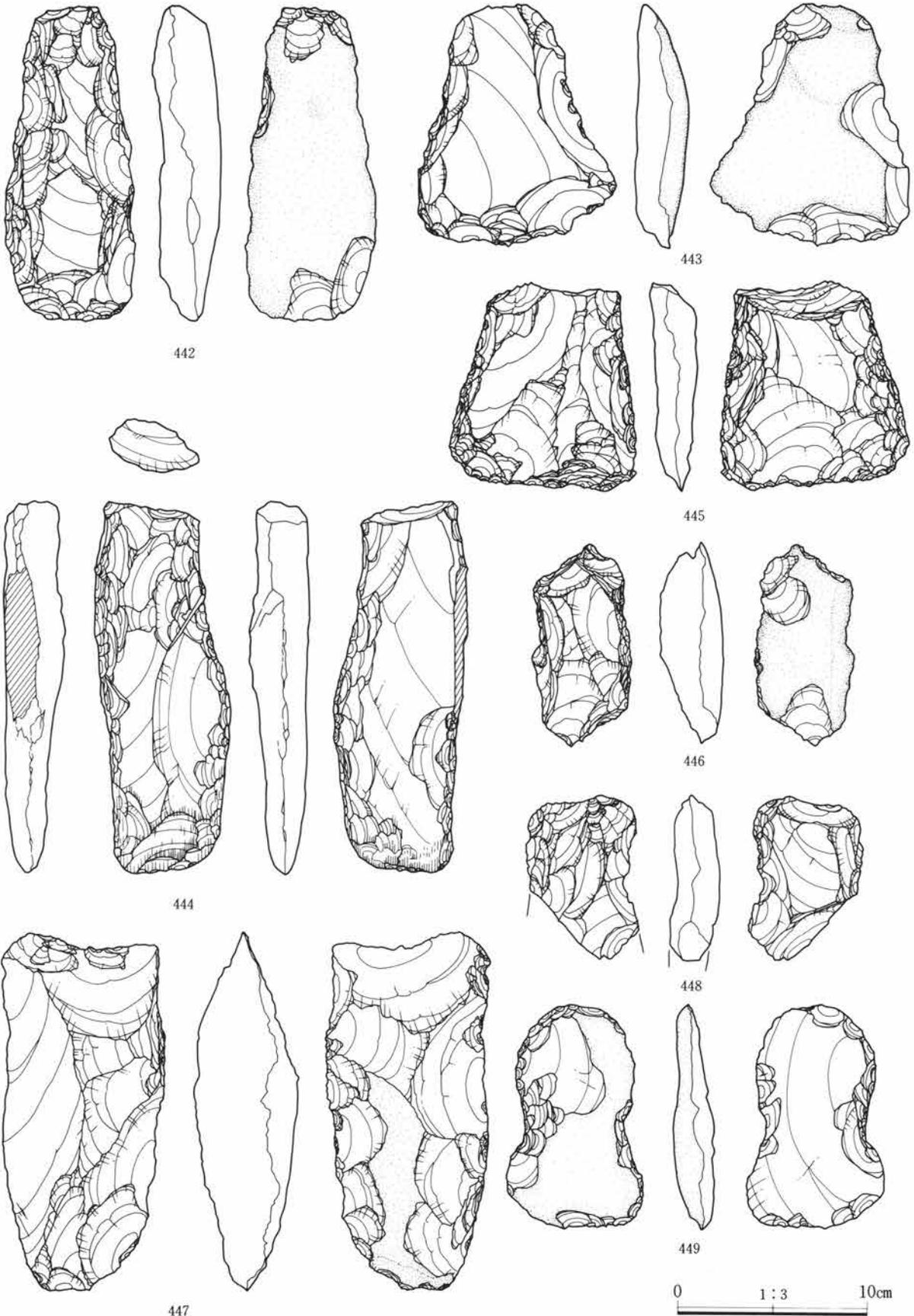
第68図 包含層出土の石器 (4)

II. 縄文時代の遺構と遺物



第69図 包含層出土の石器 (5)

5. 包含層の出土遺物



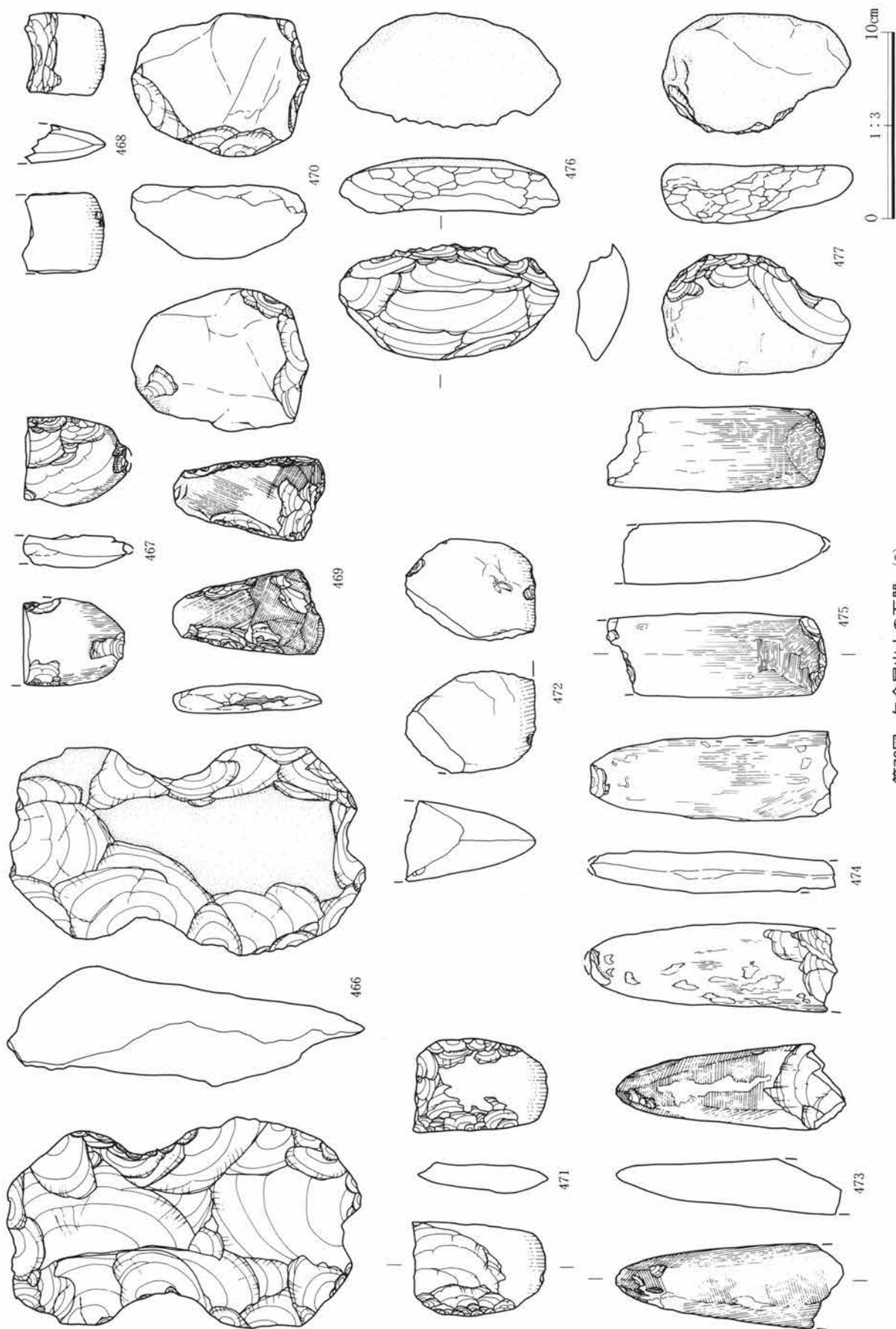
第70図 包含層出土の石器 (6)

Ⅱ. 縄文時代の遺構と遺物



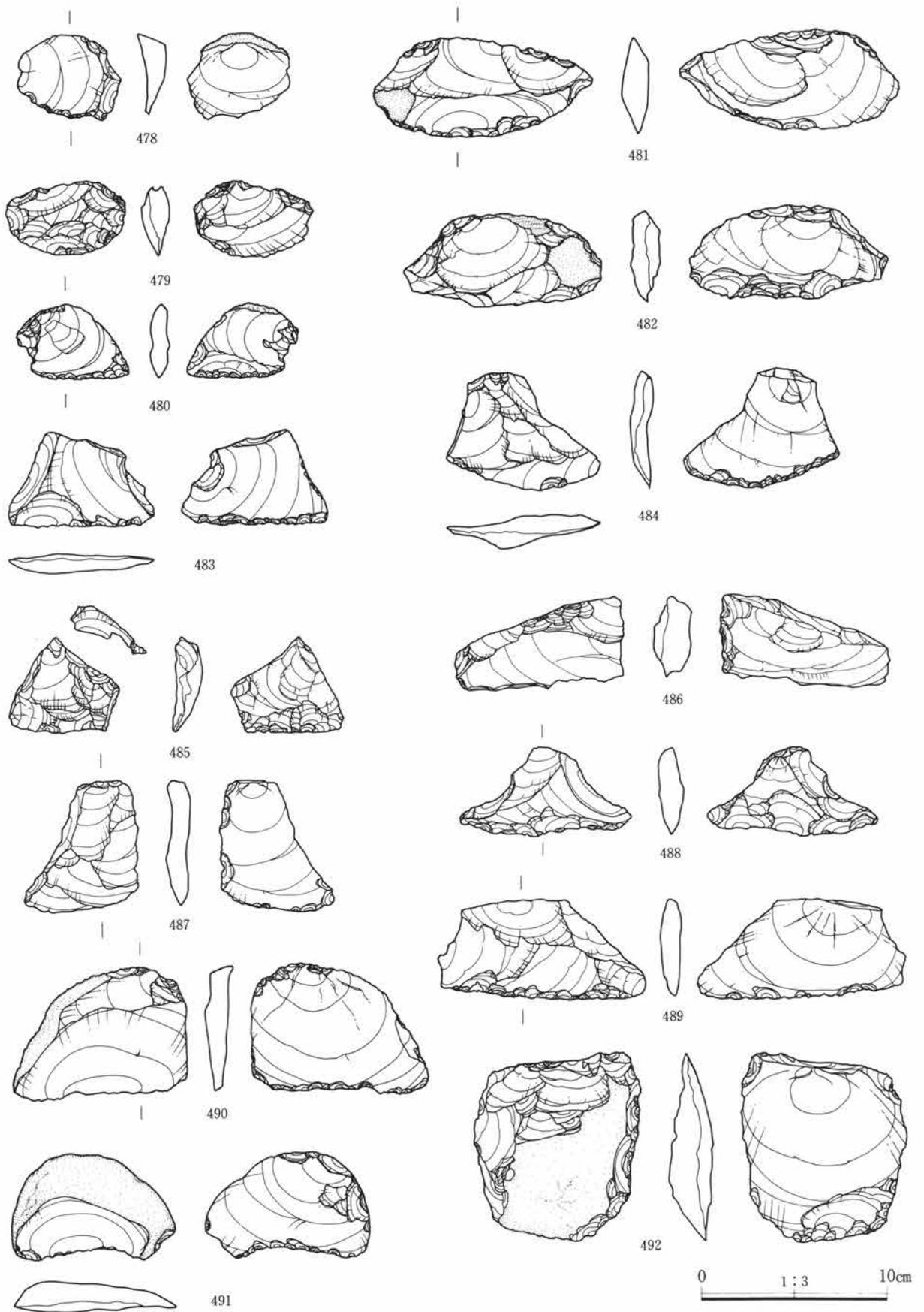
第71図 包含層出土の石器 (7)

5. 包含層の出土遺物



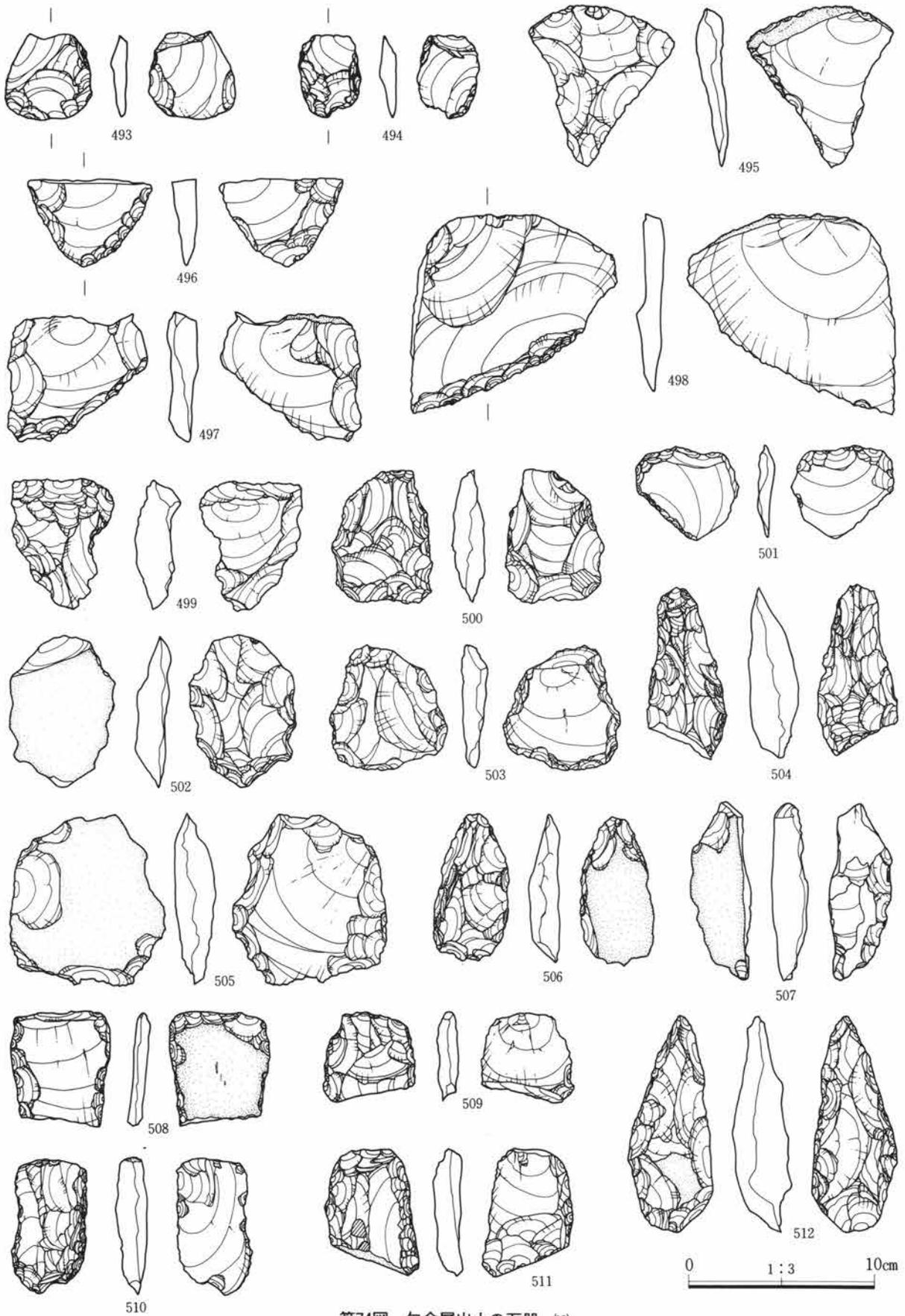
第72図 包含層出土の石器 (8)

Ⅱ. 縄文時代の遺構と遺物



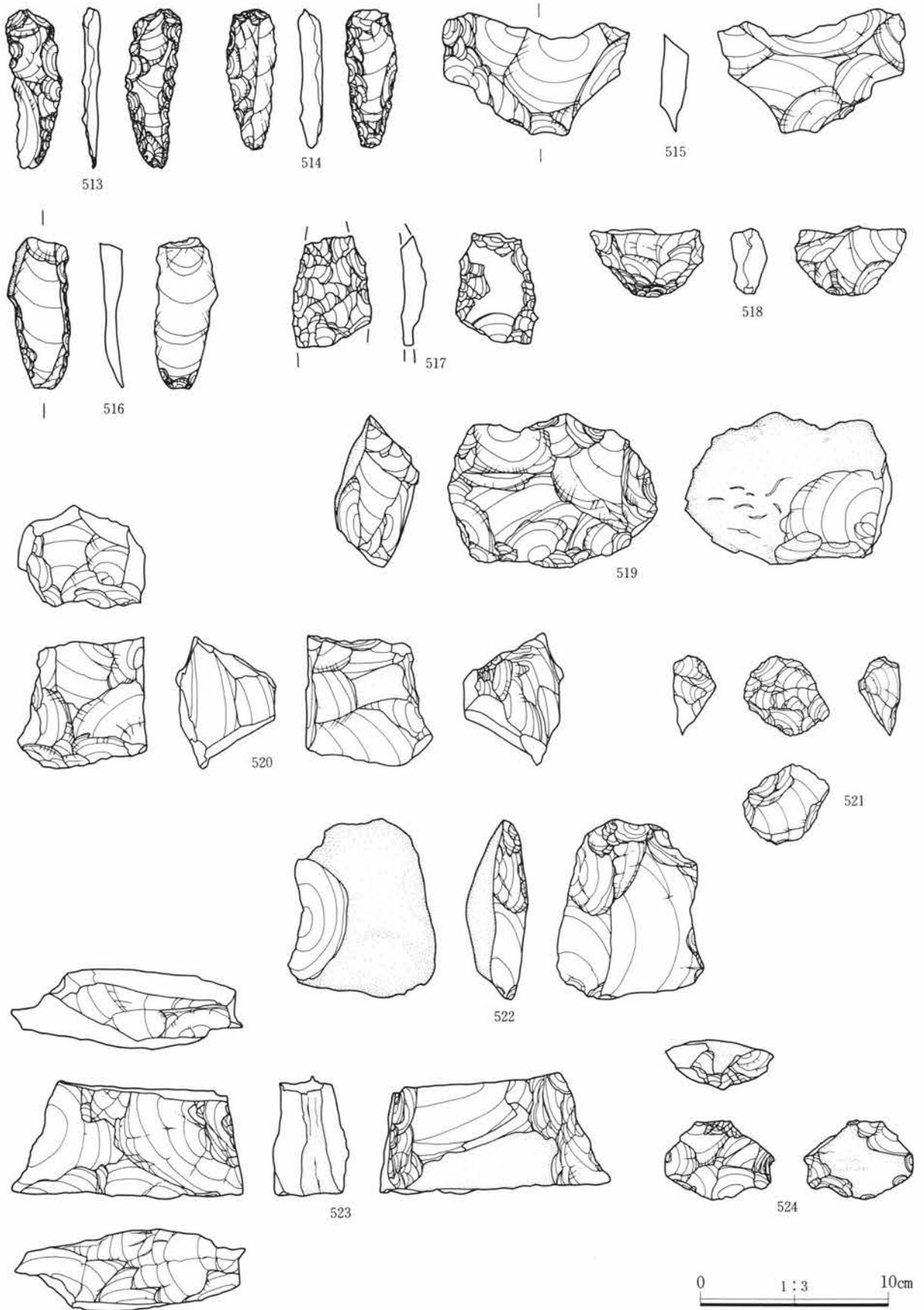
第73図 包含層出土の石器 (9)

5. 包含層の出土遺物



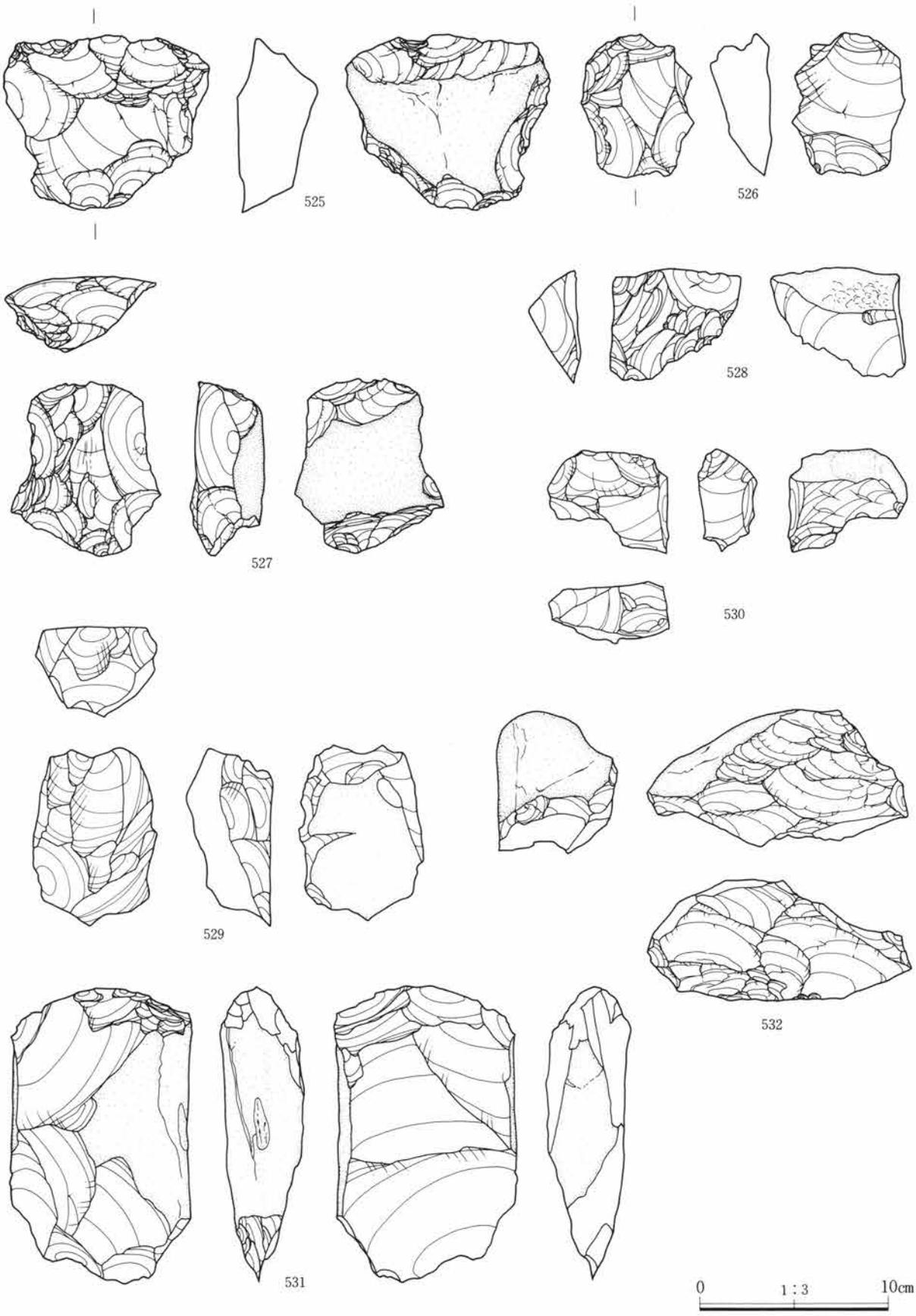
第74図 包含層出土の石器 (10)

Ⅱ. 縄文時代の遺構と遺物



第75図 包含層出土の石器 (11)

5. 包含層の出土遺物



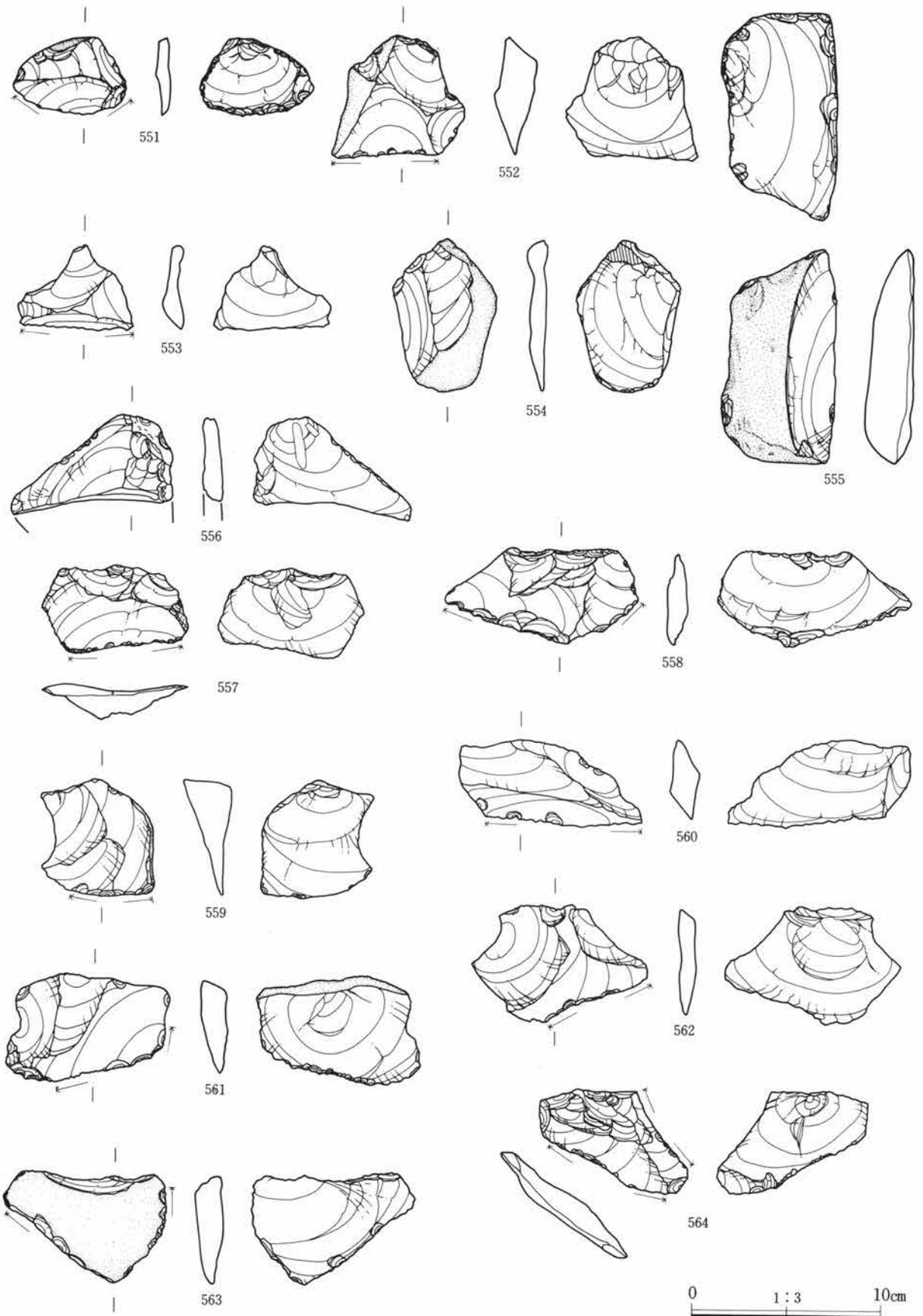
第76図 包含層出土の石器 (12)

II. 縄文時代の遺構と遺物



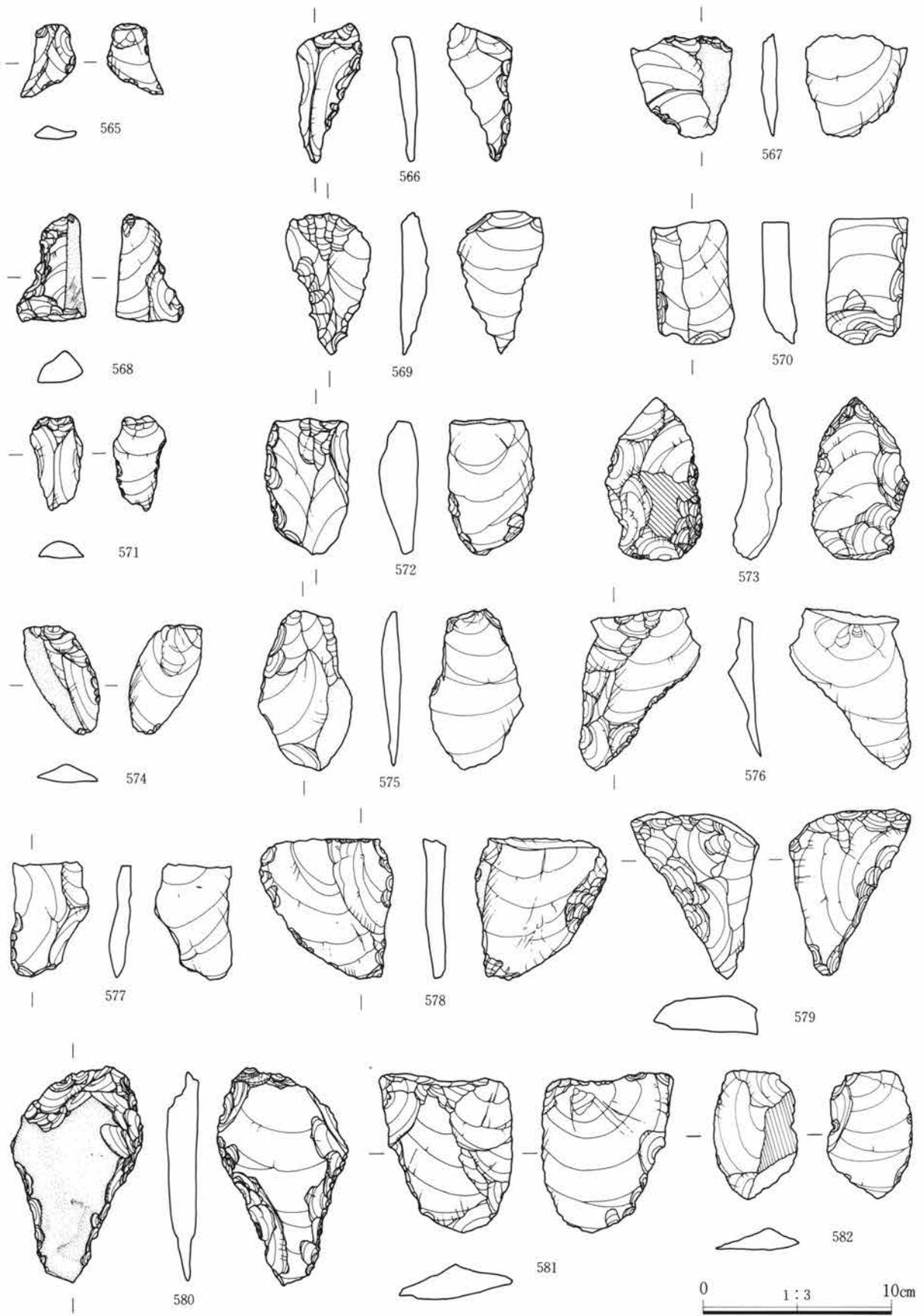
第77図 包含層出土の石器 (13)

5. 包含層の出土遺物



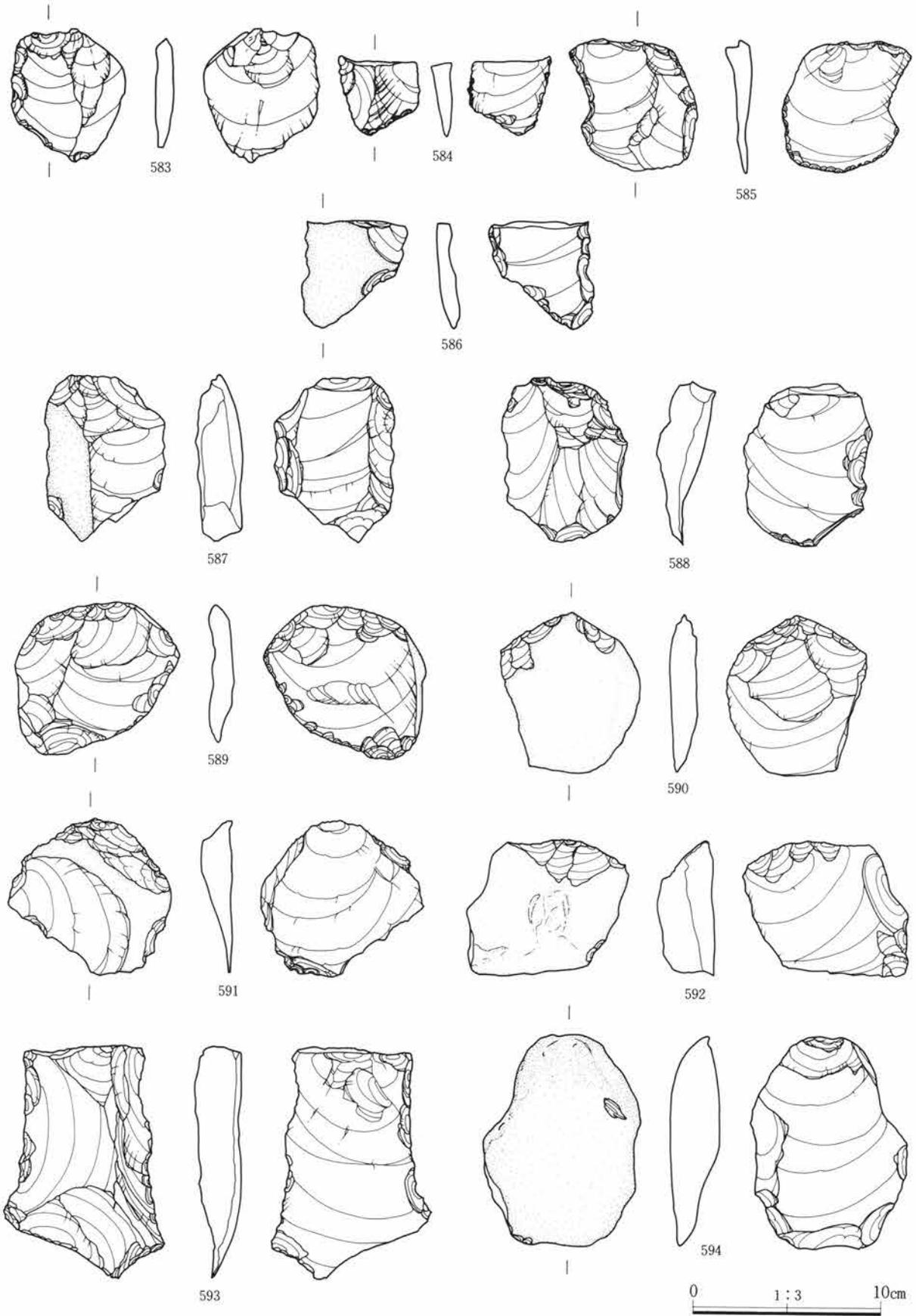
第78図 包含層出土の石器 (14)

Ⅱ. 縄文時代の遺構と遺物



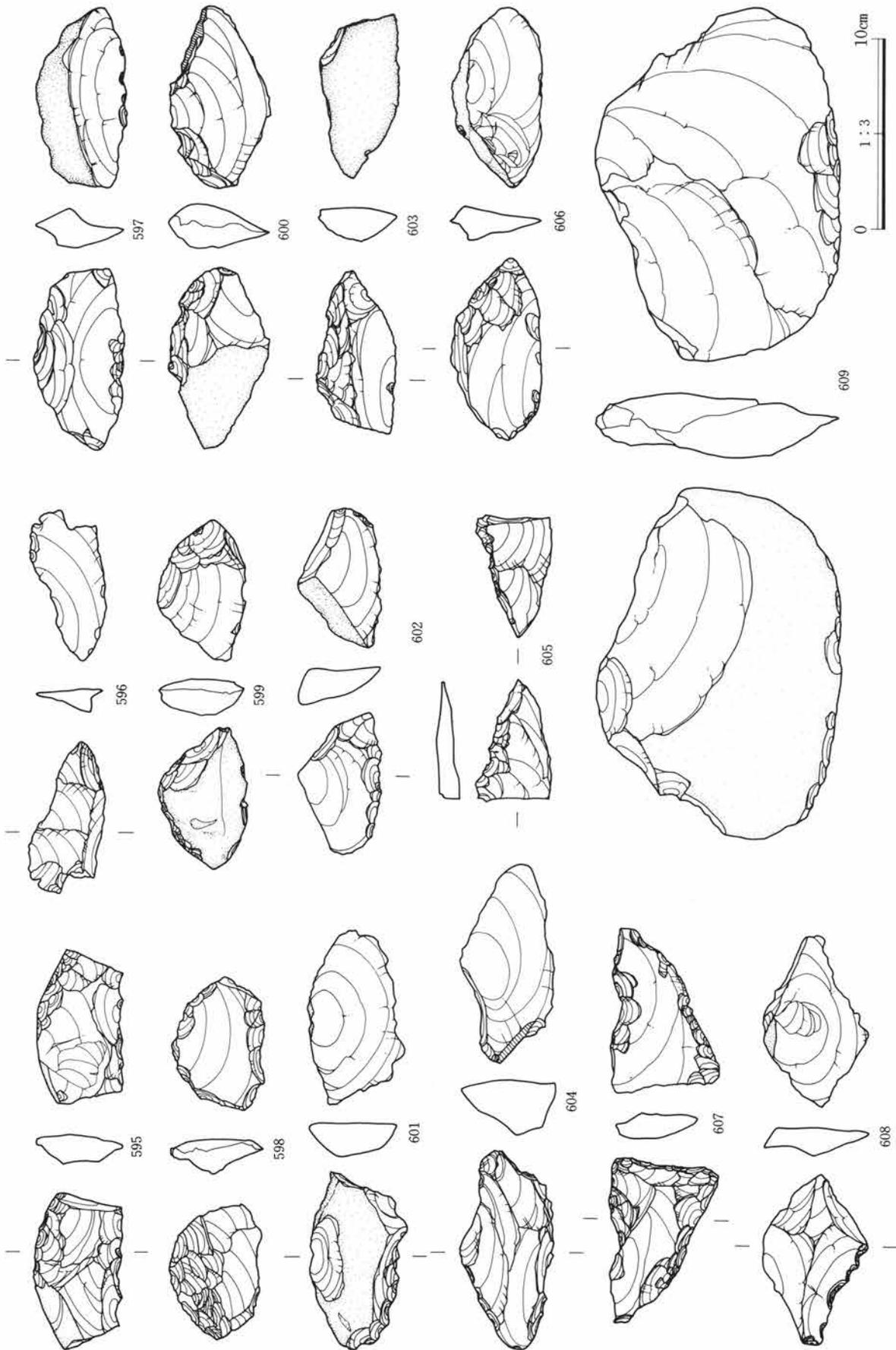
第79図 包含層出土の石器 (15)

5. 包含層の出土遺物



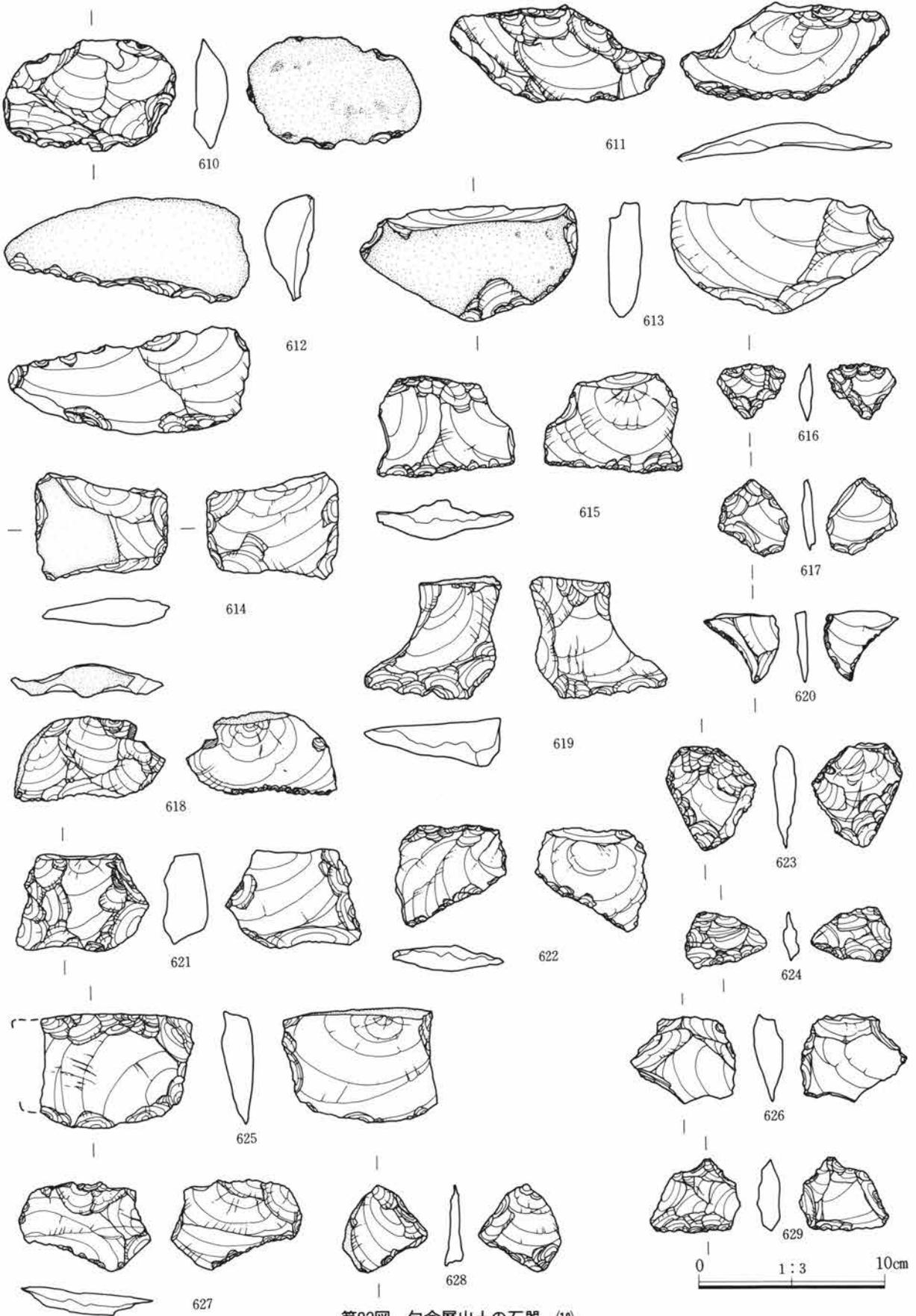
第80図 包含層出土の石器 (16)

II. 縄文時代の遺構と遺物



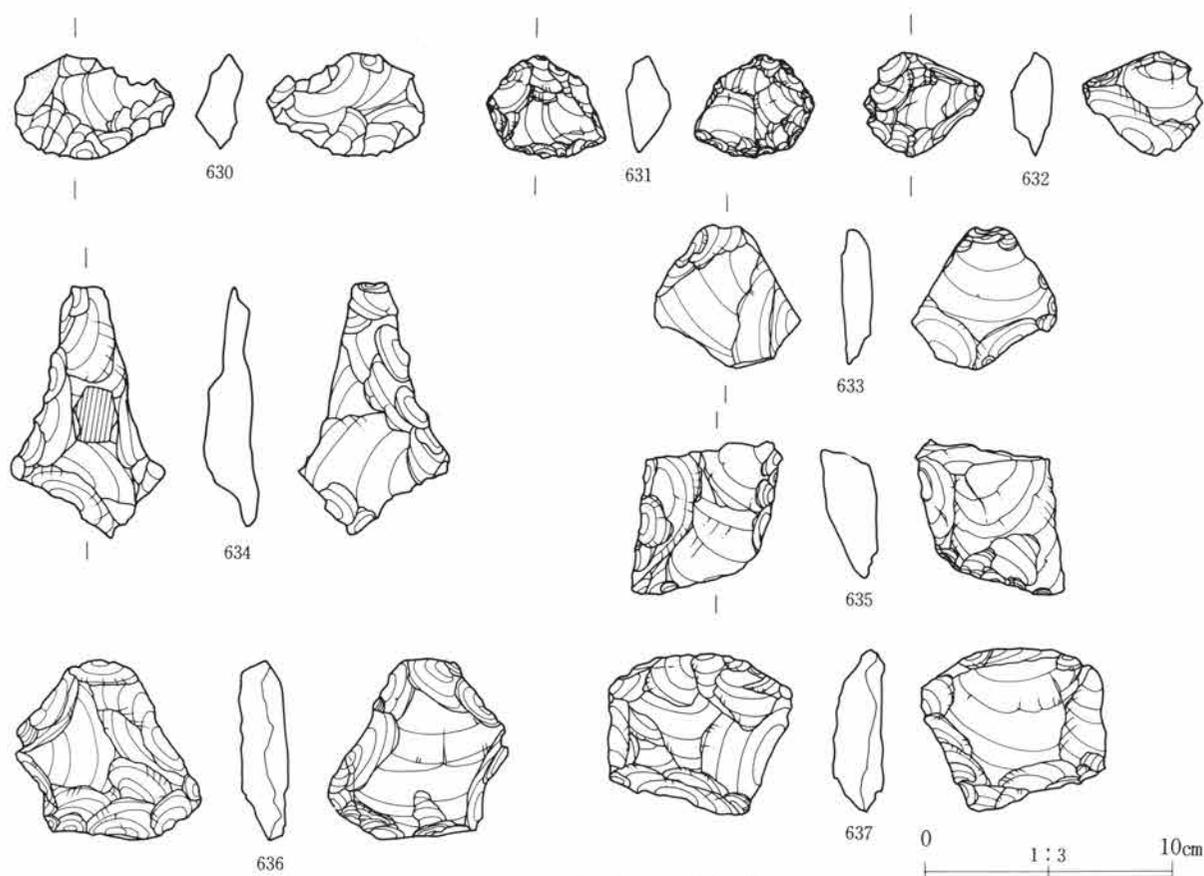
第81図 包含層出土の石器 (17)

5. 包含層の出土遺物



第82図 包含層出土の石器 (18)

II. 縄文時代の遺構と遺物



第83図 包含層出土の石器 (19)

磨石 (第85～87図 638～653)

総計55点が出土している。偏平礫を多く用いている。両側縁には、顕著な打撃痕が認められ、明確な稜線が形成されるものが認められる。稜線が形成されるもの14点・形成されないもの12点である。

特殊磨石 (第87・88図 654～660)

総計9点が出土している。1点を除き、すべてZ区からの出土である。断面三角形状を呈する棒状礫が多く用いられる。稜部には敲打痕および摩耗痕(654～660)が、小口の部分には敲打痕(654～656・660)が認められる。

凹み石 (第88～90図 661～678)

総計31点が出土している。いずれもA・Z区からの出土である。楕円形状を呈する偏平な礫が多く用いられる。平坦面には集合打痕による凹みが数箇所、側縁には打痕が顕著なものが認められる。

石皿 (第91・92図 679～686)

総計9点が出土している。A・Z区出土の6点は

いずれも破碎されている。679・681・683・685・686の5点には、意図的に凹みが付されている。

敲石 (第93図 687～694)

総計13点が出土している。棒状の礫が多く用いられ、棒状礫の小口および側縁を機能部とする。希に、平坦面に打痕が認められる。

スタンプ形石器 (第90図 695・696)

A・Z区から2点が出土している。694の底面部には顕著な摩耗が認められる。

砥石 (第94図 698)

A・Z区から2点が出土している。偏平な棒状礫が用いられ、側縁に顕著な線条痕が認められる。台石(第94図 697)

大形偏平な長円礫を用いる。広い平坦面を有し、数箇所の集合打痕が認められる。A区出土。

玦状耳飾(第94図 699)

形状は方形を呈し、比較的偏平な断面形を示す。表・裏面とも丁寧に研磨されている。

5. 包含層の出土遺物

石皿 (8点)

A・Z	輝石安山岩(粗) 87.5%	溶結凝灰岩 12.5%
-----	----------------	-------------

(1点)

B・C	石英閃緑岩 100%
-----	------------

磨石 (52点)

A・Z	輝石安山岩(粗) 43%	石英閃緑岩 35%	その他 22%
-----	--------------	-----------	---------

その他 (22.0%)
 輝緑岩・石英斑岩・珩岩・溶結凝灰岩 各4.0%
 閃緑岩・変質安山岩・不明 各2.0%

(3点)

B・C	石英閃緑岩 67%	輝石安山岩 33%
-----	-----------	-----------

特殊磨石 (9点)

A・Z	輝石安山岩(粗) 44.4%	石英閃緑岩 44.4%	砂岩 11.1%
-----	----------------	-------------	----------

凹み石 (31点)

A・Z	輝石安山岩(粗) 71%	石英閃緑岩 13%	①	②
-----	--------------	-----------	---	---

① 砂岩 7.0%
 ② その他 (0.9%)
 閃緑岩・珩岩・溶結凝灰岩 各3.0%

スタンプ形石器 (2点)

A・Z	閃緑岩 50%	珩岩 50%
-----	---------	--------

砥石 (2点)

A・Z	黒色頁岩 100%
-----	-----------

塊状耳飾 (1点)

A・Z	メノウ? 100%
-----	-----------

敲石 (10点)

A・Z	砂岩 30%	石英閃緑岩 30%	①	②	③	不明 10%
-----	--------	-----------	---	---	---	--------

① 花崗岩 10.0% ② ガラス質安山岩 10.0%
 ③ 輝緑岩 10.0%

(3点)

B・C	輝緑岩 33.3%	石英閃緑岩 33.3%	溶結凝灰岩 33.3%
-----	-----------	-------------	-------------

石核 (22点)

A・Z	黒色頁岩 86.4%	その他 13.6%
-----	------------	-----------

その他 (13.6%)
 輝緑岩・黒色安山岩・黒曜石 各4.5%

(2点)

B・C	黒色頁岩 100%
-----	-----------

剥片 (3,063点)

A・Z	黒色頁岩 60.4%	①	②	③	④	⑤
-----	------------	---	---	---	---	---

① チャート 10.6% ② 黒色安山岩 9.2%
 ③ 黒曜石 5.7% ④ 頁岩 5.6%
 ⑤ 輝石安山岩(粗粒) 3.8%
 ⑥ その他 (8.9%)
 珪質頁岩 0.4%
 輝緑岩 0.3%
 輝石安山岩(細粒)・砂岩・流紋岩質凝灰岩 各0.2%
 ガラス質安山岩・珪質変質岩・灰色安山岩・珩岩・流紋岩質砂岩・珪藻土・絹雲母片岩・酸化鉄質変質岩 各0.1%
 変質玄武岩・変質凝灰岩 各0.07%
 凝灰岩質泥岩・グラノファイバー・黒色片岩・石英安山岩・点紋頁岩 各0.03%
 不明 2.6%

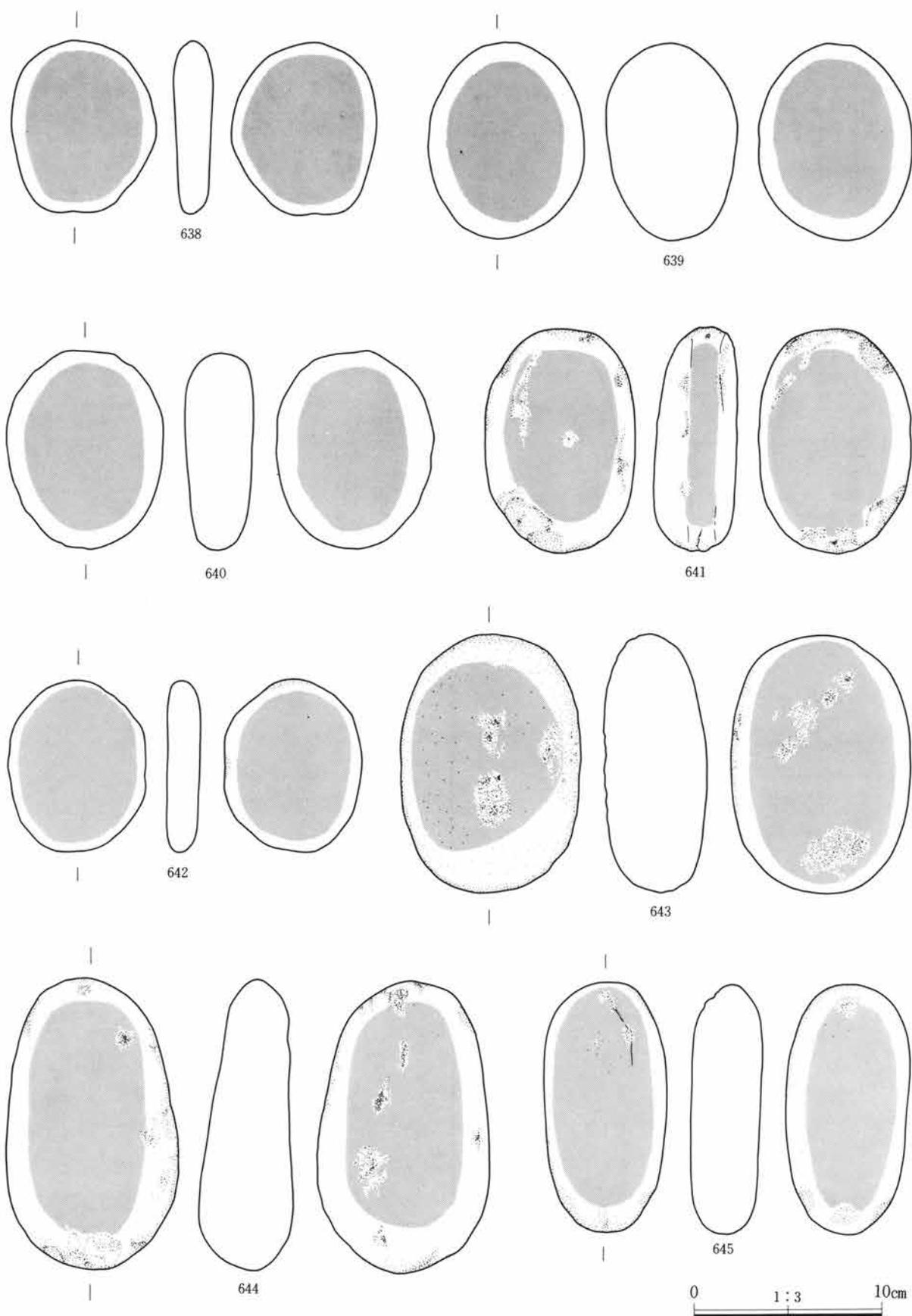
(341点)

B・C	黒色頁岩 70.6%	①	②	③	④
-----	------------	---	---	---	---

① 黒色安山岩 6.5% ② 頁岩 4.4%
 ③ 黒曜石 3.8%
 ④ その他 (14.7%)
 輝石安山岩(粗粒) 2.9%
 チャート 2.4%
 灰色安山岩 0.9%
 ガラス質安山岩・珪質変質岩・黒色片岩 各0.6%
 輝石安山岩(細粒)・凝灰岩・珪質頁岩・砂岩・珩岩 各0.3%
 不明 5.3%

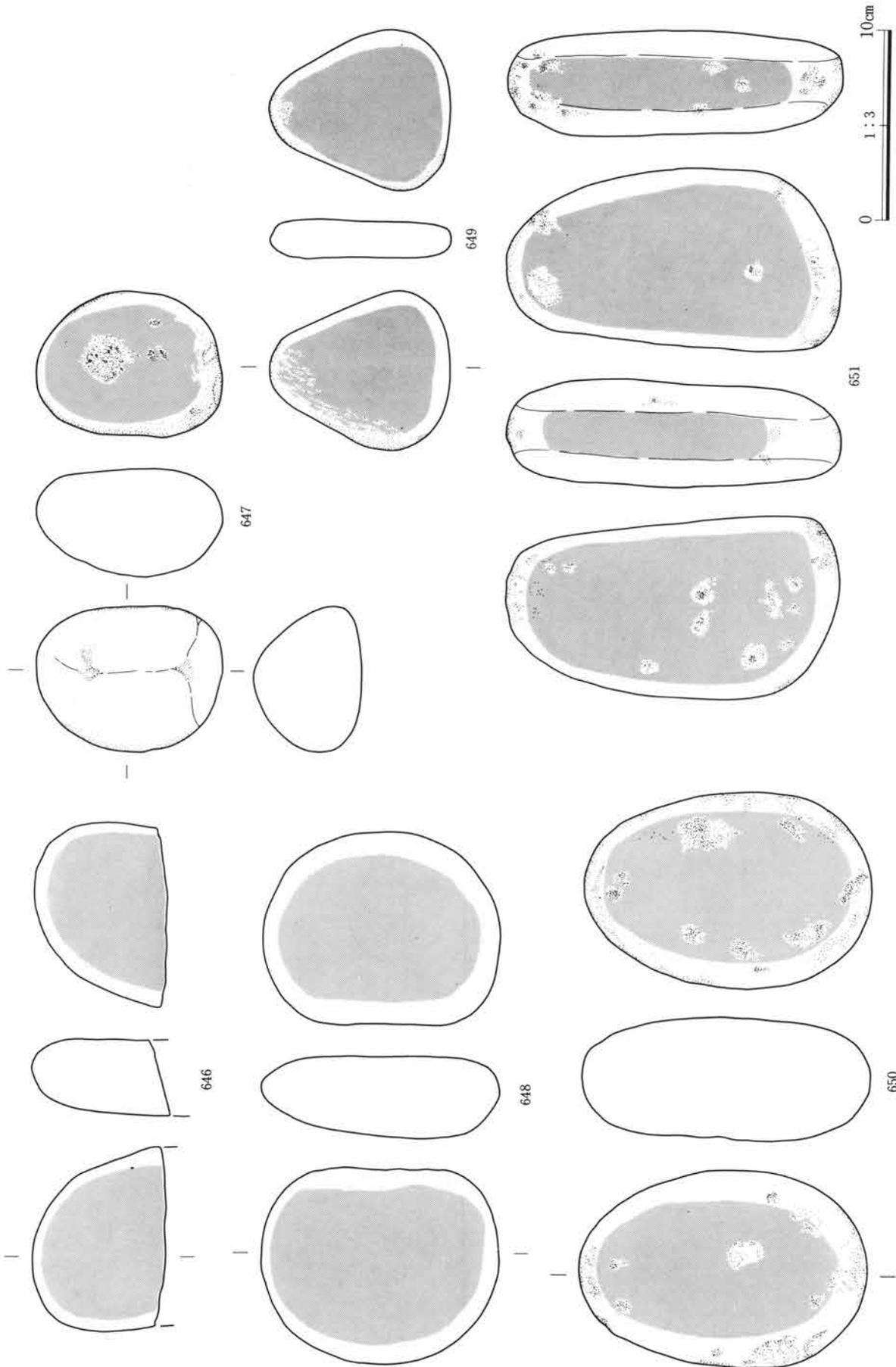
第84図 石器の器種と石材の関係 (2)

II. 縄文時代の遺構と遺物



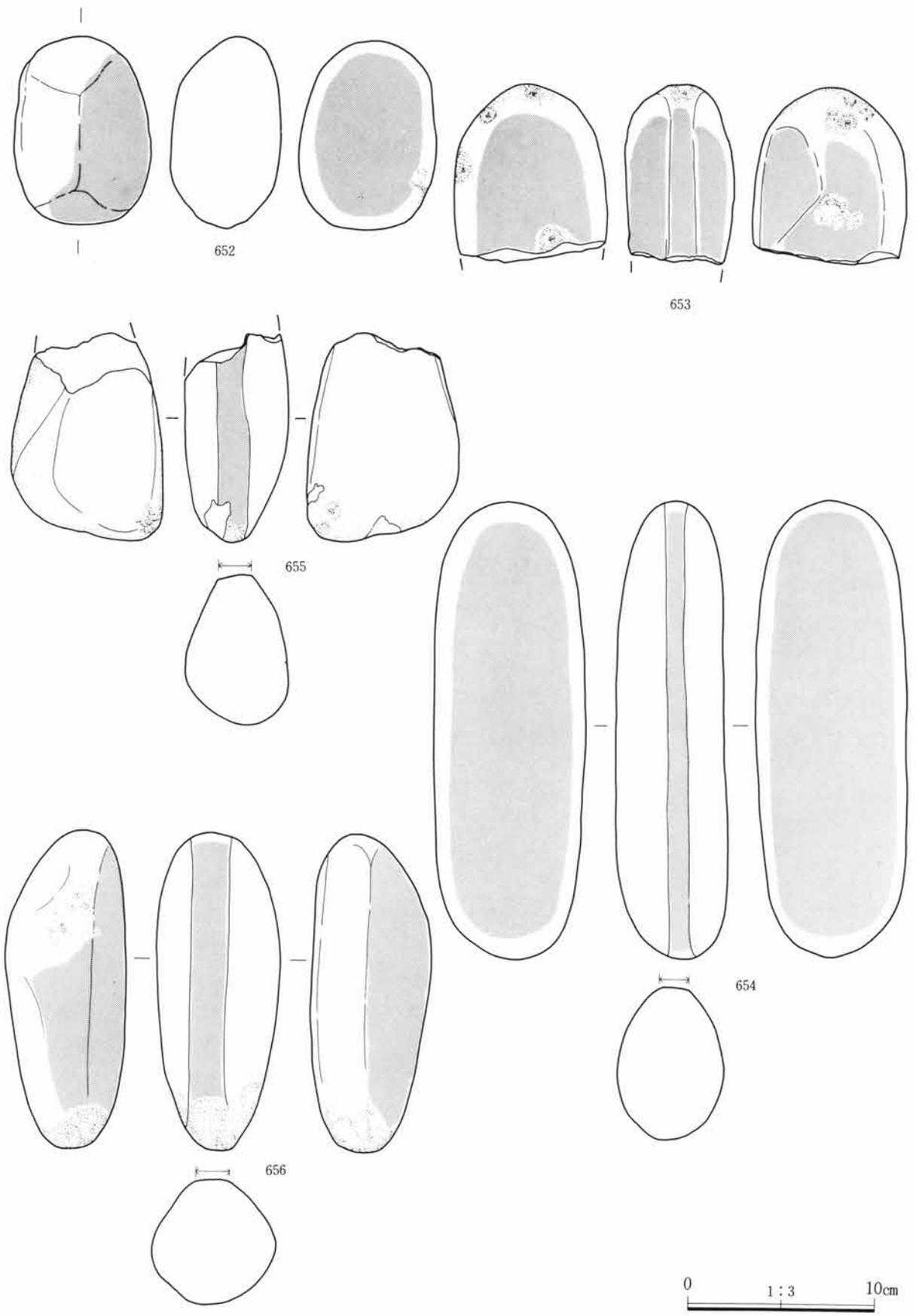
第85図 包含層出土の石器 (20)

5. 包含層の出土遺物



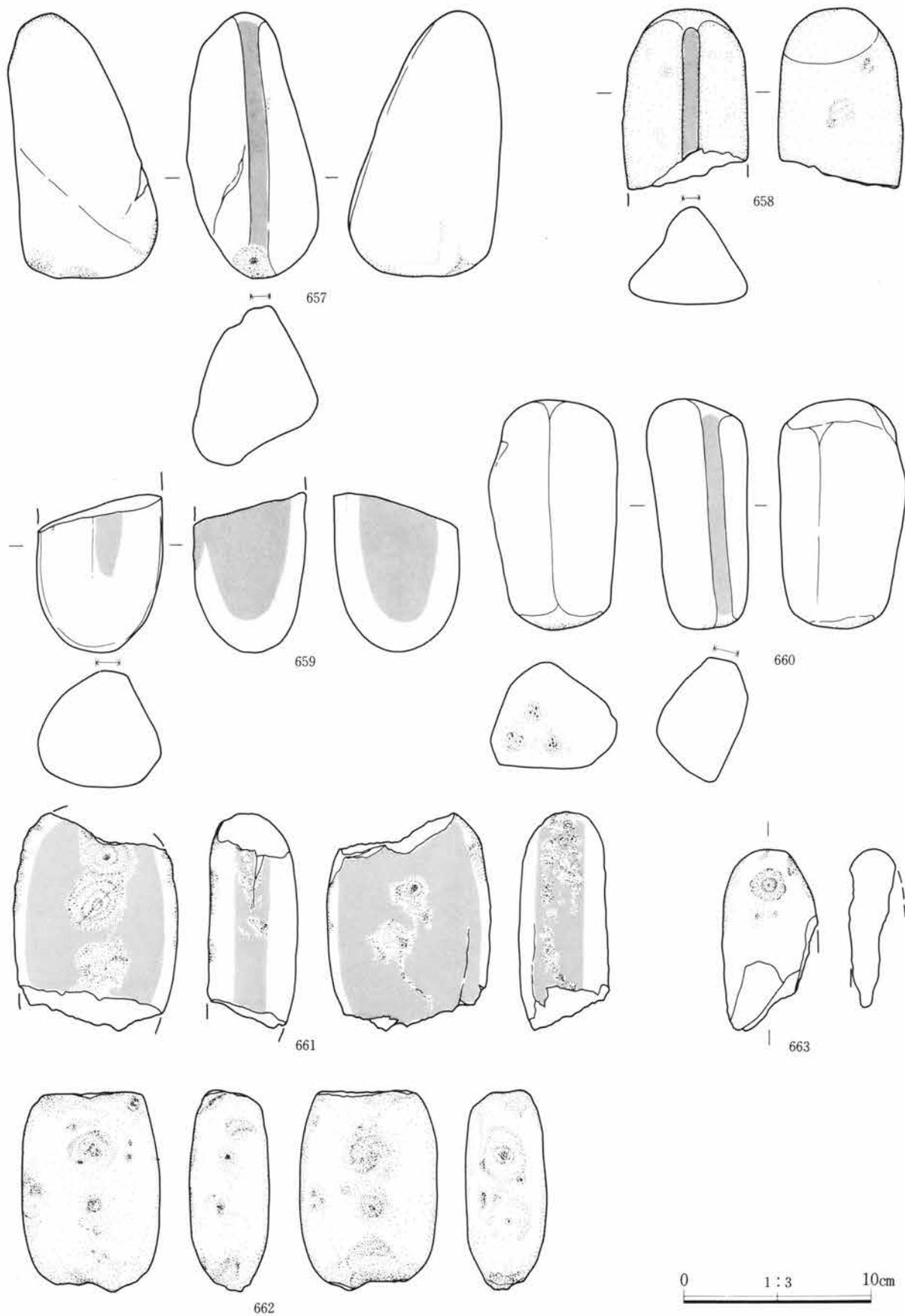
第86図 包含層出土の石器 (21)

II. 縄文時代の遺構と遺物



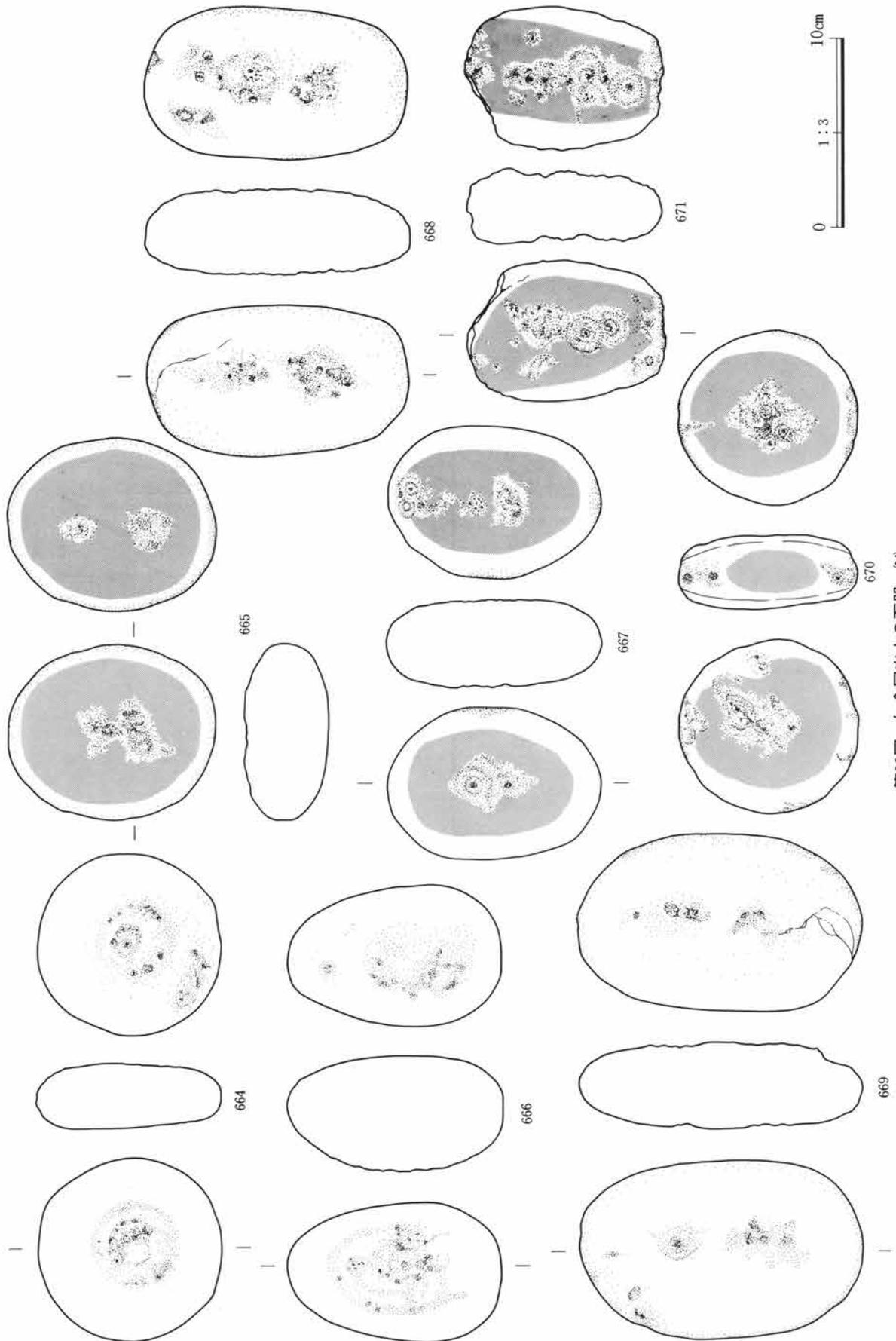
第87図 包含層出土の石器 (2)

5. 包含層の出土遺物



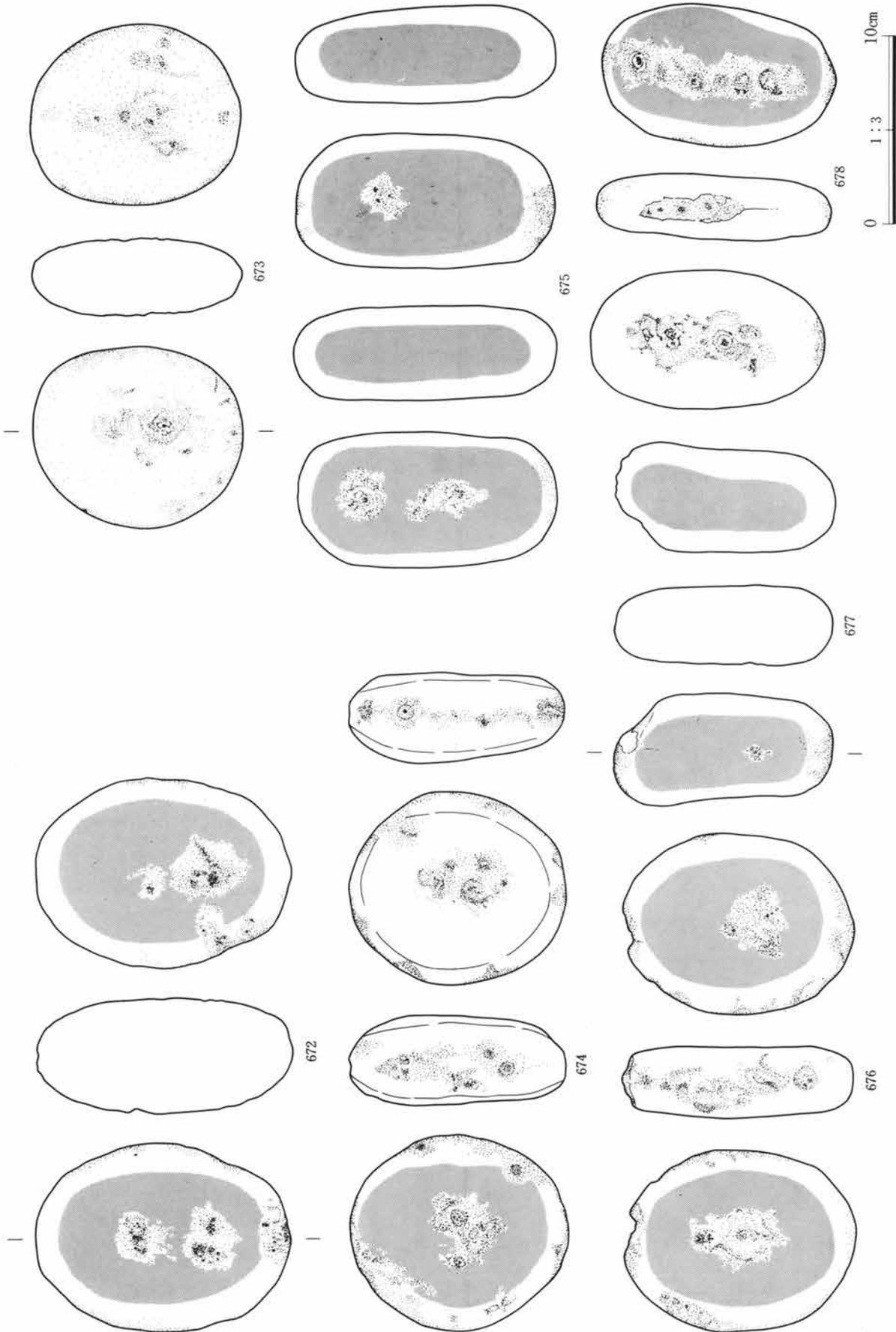
第88図 包含層出土の石器 (23)

II. 縄文時代の遺構と遺物



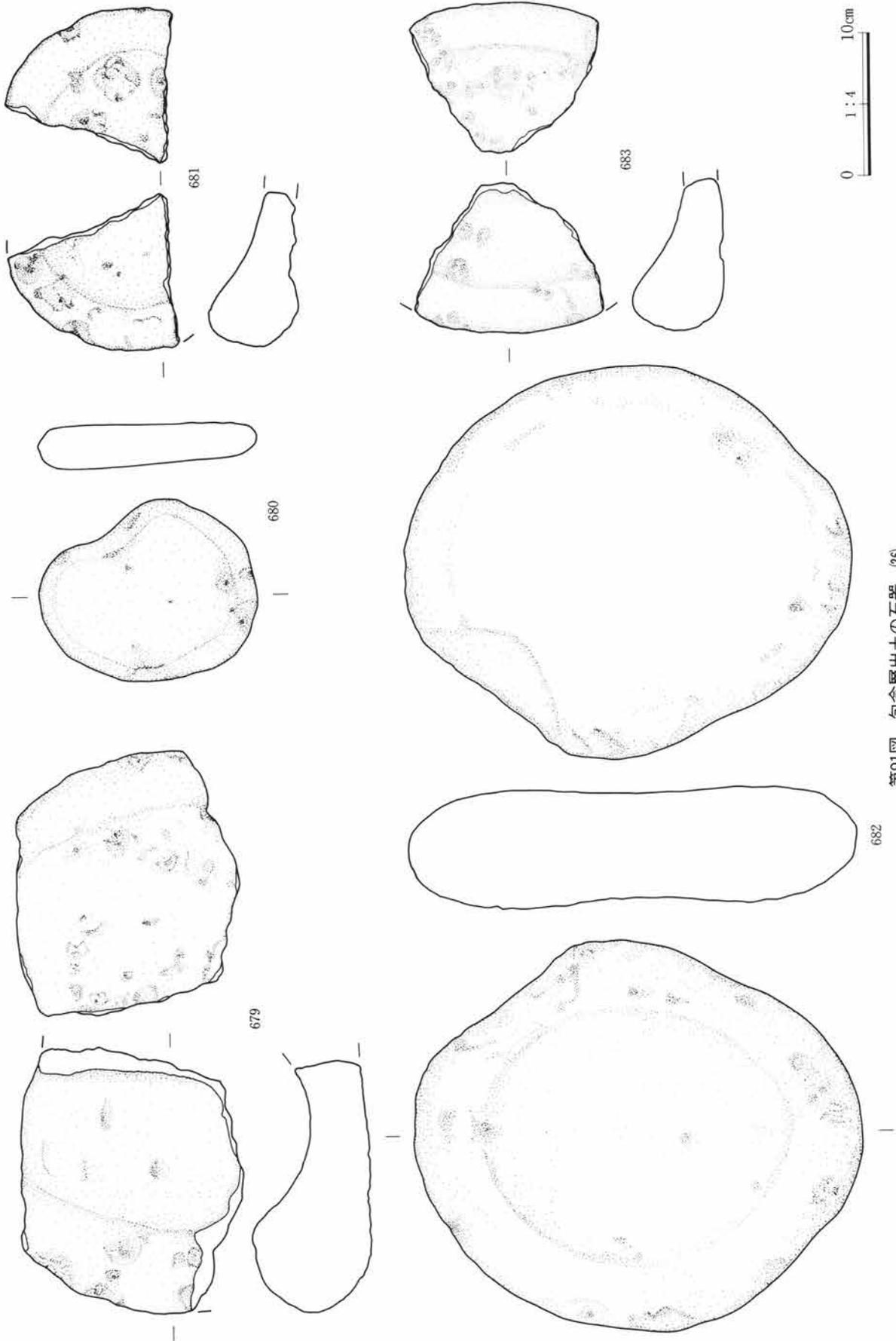
第89図 包含層出土の石器 (24)

5. 包含層の出土遺物



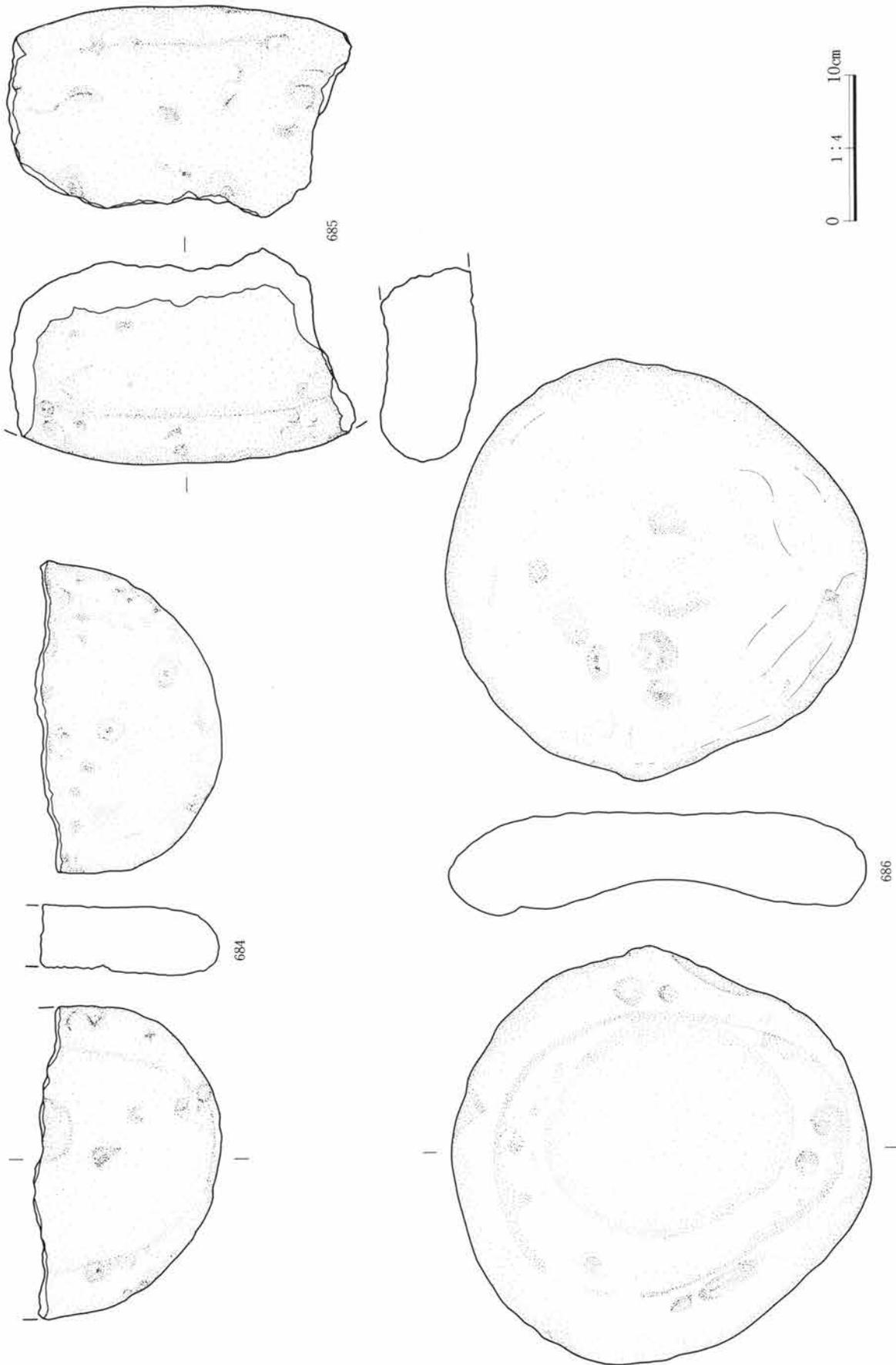
第90図 包含層出土の石器 (25)

II. 縄文時代の遺構と遺物



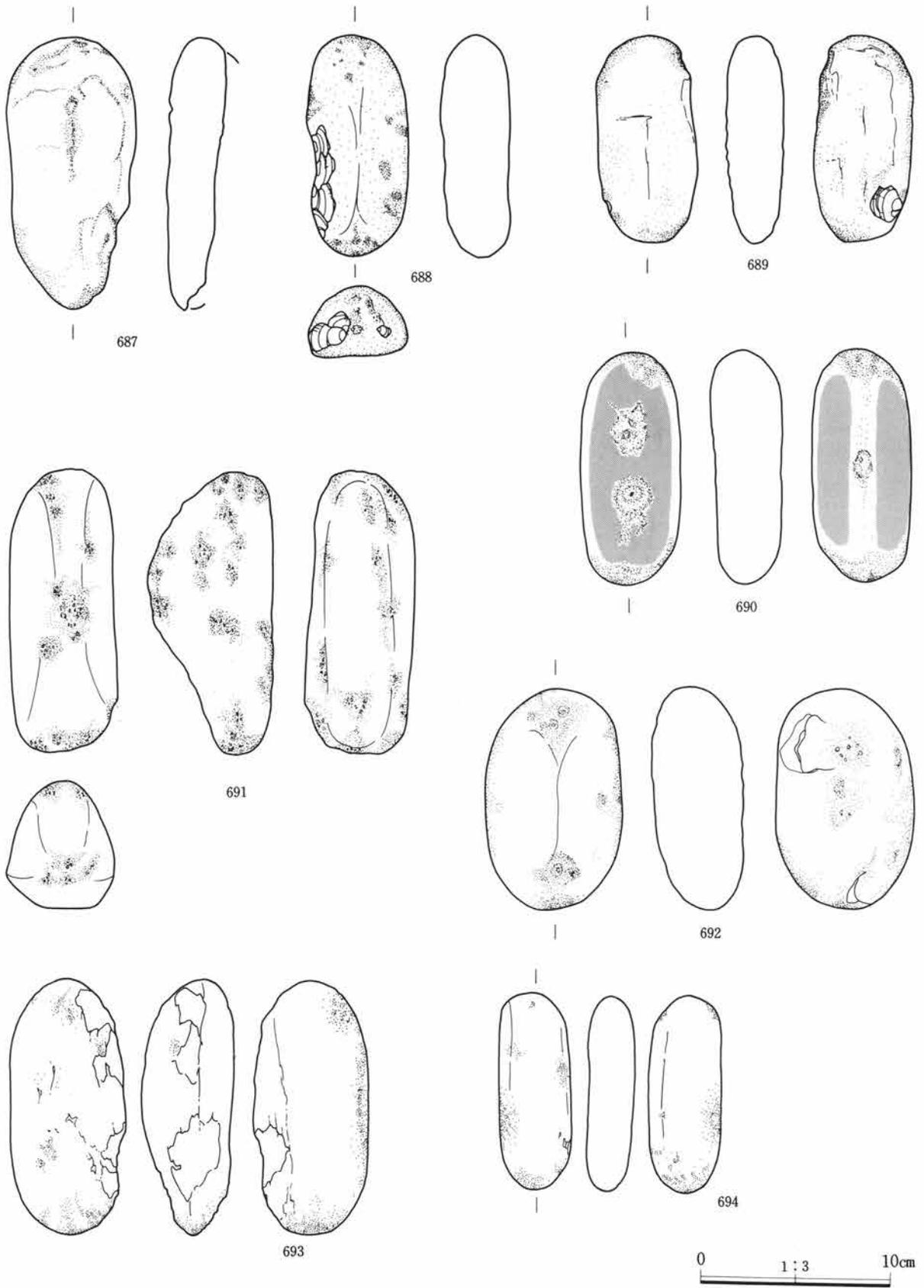
第91図 包含層出土の石器 (26)

5. 包含層の出土遺物



第92図 包含層出土の石器 (27)

II. 縄文時代の遺構と遺物



第93図 包含層出土の石器 (28)

5. 包含層の出土遺物



0 1:3 10cm

第94図 包含層出土の石器 (29)

Ⅱ. 縄文時代の遺構と遺物

第2表 包含層出土の石器一覧

(単位: cm, g)

番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材
368	A 区	石 鎌	4.1	2.9	0.4	4.4	黒頁	426	78Z47	打製石斧	(7.0)	4.0	1.1	37.9	黒頁
369	Z 区	石 鎌	1.4	1.3	0.4	0.4	黒曜	427	95墳埋土	打製石斧	(6.5)	4.1	1.8	(74.4)	黒頁
370	78A14	石 鎌	2.3	1.7	0.4	0.8	チ	428	86Z42	打製石斧	7.2	4.1	1.0	39.2	黒頁
371	7住埋土	石 鎌	1.8	1.2	0.2	0.4	チ	429	9住埋土	打製石斧	7.7	4.2	1.5	59.2	黒頁
372	96A27	石 鎌	2.7	1.3	0.3	0.6	黒曜	430	13墳埋土	打製石斧	(4.9)	4.1	0.8	31.1	黒頁
373	80C20	石 鎌	2.0	1.8	0.5	1.1	黒曜	431	7住埋土	打製石斧	(4.8)	6.3	1.3	49.2	黒頁
374	98Z40	石 鎌	2.7	2.5	0.2	1.4	黒曜	432	7住埋土	打製石斧	(5.3)	4.7	1.3	38.3	黒頁
375	90A20	石 鎌	2.9	1.8	0.4	0.8	黒安	433	88A30	打製石斧	(7.4)	5.9	2.8	173.6	黒頁
376	表 採	石 鎌	1.9	0.7	3.0	0.4	チ	434	77Z41	打製石斧	9.8	3.7	1.4	65.0	黒頁
377	76C20	石 鎌	1.8	1.2	0.3	0.4	黒曜	435	18住埋土	打製石斧	10.2	5.4	1.9	127.8	黒安
378	16住埋土	石 鎌	1.4	1.2	0.3	0.3	黒曜	436	81B39	打製石斧	12.7	3.6	2.1	127.1	黒頁
379	2住埋土	石 鎌	1.2	1.0	0.3	0.2	黒曜	437	97A35	打製石斧	13.3	4.5	1.5	109.2	灰安
380	A 区	石 鎌	2.6	1.4	0.5	1.2	チ	438	83墳埋土	打製石斧	12.9	4.6	1.7	140.9	黒頁
381	1墳埋土	石 鎌	1.9	1.5	0.3	0.5	黒曜	439	80A25	打製石斧	11.6	4.4	1.6	71.4	黒頁
382	97A00	石 鎌	2.2	1.6	0.3	1.6	黒曜	440	91A35	打製石斧	16.0	5.3	1.6	199.6	灰安
383	66Z45	石 鎌	2.1	1.8	0.4	1.7	チ	441	96A37	打製石斧	15.8	5.2	1.4	195.9	変安
384	85Z49	石 鎌	2.3	0.9	0.4	0.6	黒曜	442	4墳埋土	打製石斧	15.1	6.8	3.6	483.4	灰安
385	16住埋土	石 鎌	2.9	1.1	0.7	2.1	黒安	443	77Z48	打製石斧	12.4	10.3	2.7	386.5	頁
386	13住埋土	石 鎌	1.9	1.6	0.7	1.5	チ	444	79Z43	打製石斧	19.0	7.2	3.1	523.4	黒頁
387	87A00	石 鎌	3.5	1.3	0.8	3.3	黒頁	445	14住埋土	打製石斧	(10.7)	9.8	1.4	291.7	黒頁
388	Z 区	石 鎌	3.8	1.5	0.4	1.8	チ	446	54A13	打製石斧	(10.4)	5.2	3.2	202.8	黒頁
389	80A38	石 鎌	2.3	1.4	0.3	0.8	黒曜	447	77C05	打製石斧	(18.3)	8.4	5.4	(933.7)	黒頁
390	18住埋土	錐形石器	4.8	2.1	0.7	5.9	黒頁	448	14住埋土	打製石斧	(8.4)	5.4	2.6	146.8	黒頁
391	86Z46	錐形石器	4.2	2.1	0.6	3.0	黒頁	449	B 区	打製石斧	11.5	7.3	2.2	222.8	輝緑
392	80A34	錐形石器	1.7	1.4	0.5	1.6	黒頁	450	79A00	打製石斧	6.6	4.0	1.2	45.8	黒頁
393	16住埋土	錐形石器	4.2	2.0	0.4	2.1	黒頁	451	81A37	打製石斧	6.2	4.9	1.3	25.1	黒頁
394	2住埋土	ビスキヌエ	2.8	1.6	0.6	2.9	チ	452	6住埋土	打製石斧	8.1	5.8	1.7	101.0	黒頁
395	89Z43	ビスキヌエ	2.8	1.7	0.6	3.3	黒曜	453	74A19	打製石斧	8.0	4.4	1.4	61.5	黒頁
396	90A06	ビスキヌエ	2.4	4.0	1.3	7.8	黒安	454	83A34	打製石斧	6.4	3.6	1.4	29.0	黒頁
397	81A20	ビスキヌエ	2.2	3.0	0.6	8.2	黒頁	455	87A02	打製石斧	8.8	6.4	1.8	112.4	黒頁
398	79Z42	ビスキヌエ	6.5	5.5	2.0	74.5	黒安	456	表 採	打製石斧	7.1	5.1	1.0	41.5	黒頁
399	92A31	ビスキヌエ	3.0	2.4	0.8	6.5	チ	457	82Z47	打製石斧	6.4	5.7	1.6	55.9	黒頁
400	82C21	ビスキヌエ	3.4	2.7	1.0	12.6	チ	458	表 採	打製石斧	6.8	4.1	1.8	51.5	黒頁
401	Z 区	石 匙	6.7	3.6	0.7	18.2	黒頁	459	81A36	打製石斧	7.8	6.8	1.3	55.4	黒頁
402	76A00	石 匙	5.8	4.1	0.6	14.1	頁	460	81A18	打製石斧	4.2	12.2	1.8	87.6	黒頁
403	85A15	石 匙	7.6	3.1	0.8	25.0	黒頁	461	5住埋土	打製石斧	9.9	4.1	1.5	50.1	黒頁
404	15住埋土	石 匙	6.1	3.8	0.7	15.3	黒頁	462	75A33	打製石斧	8.8	4.3	1.6	72.8	黒頁
405	30墳埋土	石 匙	7.0	4.4	0.6	19.7	黒頁	463	96A35	打製石斧	12.3	4.2	1.5	69.7	黒頁
406	73Z41	石 匙	6.7	4.2	0.7	28.3	黒頁	464	84A14	打製石斧	16.6	4.6	2.4	147.3	黒頁
407	87A00	石 匙	5.6	2.2	0.7	6.3	黒頁	465	Z 区	打製石斧	12.7	6.6	2.9	154.9	黒頁
408	94Z46	石 匙	3.0	4.8	0.6	6.5	チ	466	72A02	打製石斧	18.9	11.1	6.2	1109.1	黒頁
409	7住埋土	石 匙	3.7	3.6	0.6	9.3	黒安	467	76A00	磨製石斧	(5.4)	(4.7)	1.7	(51.1)	黒頁
410	2住埋土	石 匙	3.5	3.7	0.3	4.8	黒頁	468	5住埋土	磨製石斧	(4.3)	4.3	(2.0)	(50.1)	黒頁
411	85A01	石 匙	3.7	4.1	0.5	11.1	黒安	469	77Z45	磨製石斧	8.0	4.5	1.5	66.7	頁
412	6住埋土	石 匙	3.8	3.4	0.5	7.9	黒頁	470	95墳埋土	礫 器	9.3	7.4	3.5	334.6	砂
413	86Z42	石 匙	4.1	3.5	0.5	6.9	黒頁	471	95墳埋土	磨製石斧	(7.0)	4.9	(1.5)	(83.5)	蛇
414	12住埋土	石 匙	3.5	4.8	0.9	12.7	黒頁	472	89Z47	磨製石斧	(6.9)	(5.3)	(4.3)	(180.1)	変玄
415	67Z45	石匙(?)	2.9	3.7	0.6	7.3	黒頁	473	96A30	磨製石斧	(12.0)	(4.5)	(2.7)	(201.7)	変玄
416	14住埋土	石 匙	4.6	5.5	0.6	17.7	黒頁	474	77Z49	磨製石斧	(13.2)	(4.5)	(2.1)	(239.4)	蛇
417	37墳埋土	石 匙	5.9	6.4	1.1	52.9	黒頁	475	95Z47	磨製石斧	(11.5)	4.4	3.2	(296.0)	変玄
418	81A20	石 匙	6.2	5.9	1.0	39.3	黒頁	476	Z 区	片刃石器	11.7	6.1	3.0	231.6	頁
419	2住埋土	石 匙	5.7	4.4	0.5	18.3	黒頁	477	73Z41	片刃石器	10.3	6.3	3.1	241.4	黒頁
420	Z 区	石 匙	4.1	5.0	0.4	9.3	黒頁	478	84A18	削 器	4.5	5.5	1.5	27.7	黒頁
421	83Z48	石 匙	5.1	5.6	1.4	34.9	黒頁	479	92Z49	削 器	4.0	6.3	1.5	34.9	黒安
422	84A22	石 匙	8.9	5.9	1.0	55.3	黒頁	480	69Z48	削 器	3.8	5.8	1.0	24.7	黒頁
423	90Z48	石 匙	5.7	5.1	1.3	29.6	黒頁	481	85Z42	削 器	5.2	11.7	1.4	86.5	黒頁
424	A 区	石 匙	7.2	6.1	0.9	36.7	黒頁	482	68A00	削 器	4.8	10.4	1.4	84.6	黒頁
425	98A37	石 匙	6.0	4.0	0.9	21.4	黒頁	483	15住埋土	削 器	5.0	7.7	1.0	34.6	黒頁

5. 包含層の出土遺物

番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材
484	78B42	削器	6.0	8.2	1.5	51.1	黒頁	546	2住埋土	使用痕跡のある削片	5.8	6.2	1.1	43.0	黒頁
485	89A17	削器	5.0	5.9	1.4	43.8	黒頁	547	87Z43	使用痕跡のある削片	4.5	4.8	0.4	13.7	頁
486	51墳埋土	削器	4.4	8.9	1.9	83.5	黒頁	548	82A37	使用痕跡のある削片	5.8	6.5	1.3	40.5	黒頁
487	94Z47	削器	6.8	6.1	1.4	46.2	黒頁	549	14住埋土	使用痕跡のある削片	8.0	8.6	6.0	91.1	黒頁
488	7住埋土	削器	4.6	9.0	1.4	41.3	黒頁	550	95A00	使用痕跡のある削片	7.4	8.4	1.2	89.5	黒頁
489	34墳埋土	削器	5.2	11.0	1.1	55.5	黒頁	551	90A00	使用痕跡のある削片	4.0	5.9	0.7	17.3	黒頁
490	16住埋土	削器	6.9	9.3	1.5	93.4	黒安	552	12住埋土	使用痕跡のある削片	6.3	6.9	2.1	78.6	黒頁
491	77Z49	削器	5.0	8.6	1.6	72.0	黒頁	553	12住埋土	使用痕跡のある削片	4.4	6.1	1.1	22.5	黒頁
492	16住埋土	削器	9.7	8.6	2.2	250.8	黒頁	554	93Z49	使用痕跡のある削片	7.7	5.3	1.0	50.7	黒頁
493	92Z46	削器	4.5	4.6	0.8	21.6	頁	555	2住埋土	使用痕跡のある削片	5.9	10.8	2.4	165.9	黒頁
494	84A36	削器	4.3	3.8	0.9	15.2	黒頁	556	1住埋土	使用痕跡のある削片	4.4	8.0	1.0	37.2	黒頁
495	90A00	削器	8.4	7.7	1.4	70.2	黒頁	557	10住埋土	使用痕跡のある削片	4.6	7.7	1.8	35.7	黒頁
496	88A13	削器	4.6	6.6	8.0	36.7	黒頁	558	94Z49	使用痕跡のある削片	4.9	10.1	1.1	48.7	黒頁
497	83Z40	削器	6.9	7.3	1.7	83.7	黒頁	559	1住埋土	使用痕跡のある削片	5.7	5.1	2.4	59.7	黒頁
498	84A25	削器	10.5	11.1	1.5	168.8	黒頁	560	18住埋土	使用痕跡のある削片	4.5	9.5	2.3	62.7	輝緑
499	15住埋土	削器	6.8	5.5	2.3	78.6	黒頁	561	6住埋土	使用痕跡のある削片	5.6	8.2	1.4	58.3	点頁
500	87A00	削器	7.0	5.4	1.7	69.3	頁	562	93Z46	使用痕跡のある削片	5.5	9.2	0.9	46.1	黒頁
501	2住埋土	削器	4.7	5.5	0.8	25.0	黒頁	563	12住埋土	使用痕跡のある削片	5.8	8.5	1.4	76.8	輝緑
502	18住埋土	削器	8.0	5.6	1.7	70.6	黒頁	564	A区	使用痕跡のある削片	3.7	8.6	1.5	43.0	黒頁
503	83Z43	削器	6.6	6.2	1.4	63.2	黒頁	565	90Z46	加工痕跡のある削片	3.8	2.9	0.7	6.0	黒頁
504	88Z44	削器	8.8	4.1	2.6	83.8	黒頁	566	82Z47	加工痕跡のある削片	7.2	3.3	1.3	20.2	黒安
505	79C22	削器	8.9	8.2	2.0	248.4	グ	567	56墳埋土	加工痕跡のある削片	5.3	5.3	0.8	24.3	黒安
506	18住埋土	削器	7.8	3.9	1.7	65.3	黒頁	568	2住埋土	加工痕跡のある削片	5.3	3.5	1.5	30.4	黒頁
507	Z区	削器	9.2	3.3	1.9	58.1	輝緑	569	89Z45	加工痕跡のある削片	2.0	1.5	0.4	1.3	チ
508	14住埋土	削器	6.0	5.3	0.7	40.5	黒頁	570	16住埋土	加工痕跡のある削片	2.2	1.3	0.5	2.1	チ
509	88A23	削器	4.7	4.8	1.1	35.9	黒頁	571	25墳埋土	加工痕跡のある削片	2.7	4.9	0.8	11.7	黒頁
510	85Z47	削器	7.0	3.8	1.7	59.7	頁	572	76Z48	加工痕跡のある削片	7.0	4.5	2.0	67.3	黒頁
511	80B30	削器	6.4	4.5	1.5	55.9	黒頁	573	83Z43	加工痕跡のある削片	8.4	4.9	2.1	78.4	黒頁
512	12住埋土	削器	11.3	4.5	3.1	147.6	黒頁	574	94Z46	加工痕跡のある削片	5.5	3.3	1.0	17.9	黒頁
513	Z区	削器	8.3	2.9	0.9	24.4	黒頁	575	76C10	加工痕跡のある削片	8.2	4.9	0.9	43.9	黒頁
514	6住埋土	削器	7.2	2.6	1.2	26.7	黒頁	576	14住埋土	加工痕跡のある削片	8.4	6.3	1.7	48.3	黒頁
515	12住埋土	削器	6.4	4.8	1.5	101.8	黒頁	577	82Z47	加工痕跡のある削片	6.0	4.0	1.1	34.9	黒頁
516	93A18	削器	7.8	3.3	1.2	34.9	黒頁	578	6住埋土	加工痕跡のある削片	7.2	7.0	1.2	82.2	黒頁
517	89A36	削器	1.9	1.3	0.4	1.3	黒曜	579	90A00	加工痕跡のある削片	8.5	6.6	1.9	100.0	黒頁
518	96A28	削器	3.7	5.4	1.7	35.3	黒頁	580	16住埋土	加工痕跡のある削片	11.2	6.9	1.6	120.4	頁
519	73Z41	石核	8.0	10.9	4.3	408.7	黒頁	581	82B32	加工痕跡のある削片	8.1	6.9	1.8	118.1	黒頁
520	79A00	石核	6.8	6.6	5.2	254.8	黒頁	582	83墳埋土	加工痕跡のある削片	4.3	6.7	1.1	32.2	黒頁
521	14住埋土	石核	4.1	4.5	2.1	38.5	チ	583	30墳埋土	加工痕跡のある削片	6.9	6.0	1.0	63.2	黒頁
522	A区	石核	9.3	7.8	3.3	246.1	黒頁	584	67Z45	加工痕跡のある削片	4.1	4.3	1.1	14.4	黒頁
523	83A31	石核	5.9	12.1	4.0	376.3	黒頁	585	9住埋土	加工痕跡のある削片	6.8	6.7	1.3	47.8	黒頁
524	67A14	石核	4.1	5.7	2.7	59.3	黒頁	586	81墳埋土	加工痕跡のある削片	5.5	5.5	1.2	44.0	黒頁
525	83Z48	石核	9.0	10.8	4.2	456.0	黒頁	587	83Z40	加工痕跡のある削片	8.5	6.3	2.4	165.2	黒頁
526	56墳埋土	石核	7.3	6.0	3.1	133.2	黒頁	588	表採	加工痕跡のある削片	8.5	6.6	3.0	138.9	黒頁
527	83Z40	石核	9.0	7.8	4.8	290.0	黒頁	589	18住埋土	加工痕跡のある削片	7.1	8.4	1.1	106.8	黒頁
528	15墳埋土	石核	5.7	6.9	2.6	95.6	黒頁	590	88Z42	加工痕跡のある削片	8.2	7.0	1.3	110.4	頁
529	86Z43	石核	3.0	2.1	1.4	10.6	黒曜	591	87A00	加工痕跡のある削片	8.2	8.5	1.6	99.4	黒頁
530	14住埋土	石核	5.3	6.1	3.1	126.0	黒頁	592	54A13	加工痕跡のある削片	7.0	8.4	2.9	222.0	黒頁
531	59墳埋土	石核	15.2	9.3	4.1	884.3	黒頁	593	98A25	加工痕跡のある削片	12.0	8.4	2.5	233.9	黒頁
532	A区	石核	13.8	7.4	6.2	627.8	黒頁	594	69Z45	加工痕跡のある削片	10.9	8.3	2.6	279.7	黒頁
533	14住埋土	使用痕跡のある削片	3.1	1.5	0.9	3.7	チ	595	88A24	加工痕跡のある削片	4.6	8.0	1.5	85.7	黒頁
534	8住埋土	使用痕跡のある削片	5.8	4.5	1.6	44.5	黒頁	596	80B30	加工痕跡のある削片	3.5	7.7	1.2	26.2	黒安
535	85Z41	使用痕跡のある削片	6.5	4.8	1.3	41.3	黒頁	597	15住埋土	加工痕跡のある削片	4.7	9.5	2.1	71.2	黒頁
536	90B40	使用痕跡のある削片	1.7	1.6	0.6	1.4	黒曜	598	73Z41	加工痕跡のある削片	4.8	7.0	1.8	55.9	頁
537	85Z47	使用痕跡のある削片	8.9	4.2	1.2	14.5	黒頁	599	78A29	加工痕跡のある削片	4.6	7.3	1.9	70.3	黒頁
538	80A25	使用痕跡のある削片	8.4	5.4	2.2	100.5	黒頁	600	81A38	加工痕跡のある削片	5.2	9.4	2.2	89.8	黒頁
539	5住埋土	使用痕跡のある削片	7.8	4.8	1.4	38.2	黒頁	601	78A33	加工痕跡のある削片	5.0	9.1	1.8	90.4	黒安
540	2住埋土	使用痕跡のある削片	3.7	3.5	0.8	15.6	黒頁	602	76Z46	加工痕跡のある削片	4.4	7.3	1.8	49.4	黒安
541	7住埋土	使用痕跡のある削片	5.2	5.3	1.1	37.9	黒頁	603	16住埋土	加工痕跡のある削片	4.1	8.5	1.8	69.0	変安
542	96Z46	使用痕跡のある削片	3.5	4.0	0.9	12.4	頁	604	表採	加工痕跡のある削片	4.9	10.3	2.8	123.7	黒頁
543	97A25	使用痕跡のある削片	6.5	7.1	1.5	48.2	黒頁	605	A区	加工痕跡のある削片	6.3	4.0	1.2	26.6	黒頁
544	13住埋土	使用痕跡のある削片	6.1	6.0	1.7	57.8	黒頁	606	97A34	加工痕跡のある削片	4.7	9.3	1.3	68.3	黒頁
545	42墳埋土	使用痕跡のある削片	4.4	4.7	0.7	11.5	黒頁	607	51墳埋土	加工痕跡のある削片	5.6	8.4	1.3	60.3	黒頁

II. 縄文時代の遺構と遺物

番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材
608	Z 区	加工痕ある剥片	5.5	8.8	1.4	47.4	黒頁	654	93Z45	特殊磨石	24.0	8.0	5.7	1885.9	輝緑
609	84A41	加工痕ある剥片	12.9	18.2	3.4	814.5	輝安	655	79Z47	特殊磨石	10.7	8.0	5.5	609.5	輝安
610	15住埋土	加工痕ある剥片	5.8	9.2	1.8	114.0	黒頁	656	69Z45	特殊磨石	16.6	6.3	6.2	973.0	輝安
611	1住埋土	加工痕ある剥片	4.8	11.3	1.2	75.3	黒頁	657	79Z48	特殊磨石	13.7	7.5	6.7	891.0	石閃
612	76A00	加工痕ある剥片	5.1	12.9	2.5	179.2	輝安	658	76A02	特殊磨石	8.8	6.3	5.0	423.2	石閃
613	14住埋土	加工痕ある剥片	6.0	11.7	1.8	146.6	灰安	659	14住埋土	特殊磨石	7.8	6.5	6.1	433.9	砂
614	91Z45	加工痕ある剥片	6.8	5.7	1.4	67.6	黒頁	660	69Z46	特殊磨石	12.0	6.8	5.4	648.2	石閃
615	4住埋土	加工痕ある剥片	5.3	7.3	2.1	62.0	黒頁	661	2住埋土	凹み石	10.4	8.7	4.8	704.1	石閃
616	14住埋土	加工痕ある剥片	2.9	3.6	0.7	6.0	黒頁	662	90Z46	凹み石	10.4	7.2	4.3	538.3	閃緑
617	95墳埋土	加工痕ある剥片	4.0	3.8	0.5	10.2	黒頁	663	88A13	凹み石	9.0	4.9	2.2	116.9	砂
618	5住埋土	加工痕ある剥片	4.3	8.0	1.7	44.5	黒頁	664	A 区	凹み石	9.7	9.6	3.3	459.1	輝安
619	2住埋土	加工痕ある剥片	6.2	7.2	2.4	95.8	黒頁	665	7住埋土	凹み石	10.9	9.1	4.4	673.2	石閃
620	83Z48	加工痕ある剥片	3.7	3.9	5.5	8.1	黒頁	666	86Z40	凹み石	11.2	7.3	6.0	726.8	輝安
621	14住埋土	加工痕ある剥片	5.1	7.0	2.5	100.2	黒頁	667	8住埋土	凹み石	11.2	7.9	4.3	582.4	輝安
622	88Z43	加工痕ある剥片	5.4	5.9	1.4	36.9	黒頁	668	116墳埋土	凹み石	13.8	7.9	4.3	758.3	輝安
623	93Z41	加工痕ある剥片	5.4	4.8	1.2	32.4	黒頁	669	39墳埋土	凹み石	14.9	9.2	4.6	945.4	輝安
624	89A20	加工痕ある剥片	2.9	4.3	0.9	10.2	チ	670	1住埋土	凹み石	9.4	9.1	3.8	508.1	輝安
625	91Z43	加工痕ある剥片	6.0	8.0	1.7	109.2	黒頁	671	90A00	凹み石	10.4	7.4	3.9	453.8	不明
626	66Z45	加工痕ある剥片	4.6	5.5	1.5	38.7	黒頁	672	84A41	凹み石	13.4	9.9	6.0	1257.8	輝安
627	7住埋土	加工痕ある剥片	4.7	7.0	1.2	39.7	黒頁	673	77Z48	凹み石	11.1	9.5	4.0	680.5	輝安
628	16住埋土	加工痕ある剥片	4.2	4.4	0.9	15.8	頁	674	1住埋土	凹み石	11.5	10.2	4.6	766.4	石閃
629	91Z43	加工痕ある剥片	3.8	4.7	1.2	21.8	黒安	675	93A28	凹み石	13.7	7.0	5.0	858.4	輝安
630	A 区	加工痕ある剥片	1.3	2.1	0.6	1.5	黒曜	676	5住埋土	凹み石	12.0	9.5	3.7	775.9	輝安
631	79A42	加工痕ある剥片	4.0	4.7	1.7	31.0	チ	677	7住埋土	凹み石	11.4	5.6	4.1	424.7	輝安
632	12住埋土	加工痕ある剥片	4.1	4.7	2.1	34.3	黒頁	678	9住埋土	凹み石	12.3	7.2	3.3	468.7	輝安
633	95墳埋土	加工痕ある剥片	5.6	5.7	1.2	46.2	黒頁	679	75A20	石皿	15.6	17.5	8.3	2620.0	輝安
634	85A01	加工痕ある剥片	3.3	2.0	0.7	3.6	チ	680	84C20	石皿	15.4	12.8	3.1	945.6	石閃
635	76C10	加工痕ある剥片	6.0	6.0	2.2	79.9	黒頁	681	87A01	石皿	11.4	10.7	6.3	714.2	輝安
636	93Z42	加工痕ある剥片	7.0	7.2	1.8	110.1	黒安	682	92A00	石皿	31.5	27.2	8.2	9950.0	輝安
637	85Z47	加工痕ある剥片	6.3	7.2	2.0	101.4	黒安	683	90Z46	石皿	(13.3)	(10.5)	6.3	(803)	輝安
638	12住埋土	磨石	8.8	7.3	1.9	198.8	輝安	684	81A02	石皿	(12.4)	21.2	5.0	(1900)	溶凝
639	14住埋土	磨石	10.1	8.1	6.7	801.2	凝砂	685	98Z48	石皿	23.2	14.2	6.3	2920.0	輝安
640	5住埋土	磨石	10.2	8.2	3.5	498.7	輝緑	686	84A29	石皿	28.4	27.0	6.5	6700.0	輝安
641	87Z46	磨石	11.6	7.9	4.3	652.3	輝安	687	86A24	敲石(?)	14.0	6.7	2.9	402.7	砂
642	74A32	磨石	8.9	7.2	1.7	209.5	輝安	688	92Z46	敲石	11.3	5.2	3.5	349.3	石閃
643	A 区	磨石	13.4	9.4	5.3	1073.2	輝安	689	83墳埋土	敲石	10.6	5.1	3.0	256.9	輝緑
644	19住埋土	磨石	15.1	9.0	5.0	968.6	輝安	690	6住埋土	敲石	12.0	5.1	3.7	376.7	石閃
645	83A31	磨石	13.0	6.4	3.6	530.8	輝安	691	71A00	敲石	14.6	5.4	6.5	783.5	花崗
646	109墳埋土	磨石	(7.0)	9.2	4.0	(405.3)	輝安	692	73Z47	敲石	11.4	7.2	4.6	570.8	石閃
647	A 区	磨石	9.7	7.5	5.6	608.0	輝安	693	18住埋土	敲石(?)	13.2	6.0	4.8	551.2	不明
648	83Z42	磨石	12.5	10.0	4.3	864.2	石閃	694	86A29	敲石	10.3	3.8	2.4	164.3	砂
649	90A00	磨石	9.5	8.3	2.0	230.9	輝安	695	表探	スタンプ形石器	11.5	8.8	4.8	671.8	閃緑
650	Z 区	磨石	15.1	10.2	6.3	1502.6	輝安	696	88A34	スタンプ形石器	11.8	7.6	5.5	828.8	玢
651	82Z44	磨石	17.5	9.4	5.4	1434.6	石閃	697	84A29	台石(?)	38.3	24.3	10.3	16.3kg	石閃
652	18住埋土	磨石	9.8	7.2	5.7	600.7	輝安	698	72Z45	砥石	11.9	7.0	4.3	481.4	黒頁
653	86C17	磨石	6.2	8.0	5.7	589.7	石閃	699	A 区	球状耳飾	2.3	2.1	0.6	5.9	瑪瑙

Ⅲ 古墳時代以降の遺構と遺物

1. 検出された遺構の概要

古墳時代以降に属する遺構は、竪穴住居5軒と土壙2基、階段状遺構2基、炭焼窯1基が検出された。これらの遺構は、調査対象区域の南側に位置する谷地に臨むテラス状地形の緩傾斜面のZ調査区とその周辺に集中している。各遺構の検出面は、竪穴住居と階段状遺構が6世紀初頭とされる榛名山二ツ岳降下火山灰(F A)のIV層下面、土壙1基が6世紀中葉の榛名山二ツ岳降下軽石(F P)のII層下位、炭焼窯がII層上面、土壙1基がVI層下面である。

各遺構の帰属時期は、竪穴住居と階段状遺構がともにF A(IV層)の下位に存在することやその位置的関係から、古墳時代中期のほぼ単一時期に営まれたと考えられる。階段状遺構はテラス状緩傾斜面の先端部に位置しており、5軒の集落址と南側の谷地とを絡ぐ通路と判断される。2基の土壙のうち1基は時期を確定できないが、他の1基は8世紀後半の真間式の土師器を伴出しており、当該期に比定される。

炭焼窯はF P(II層)を一部掘り込んで輝石安山岩

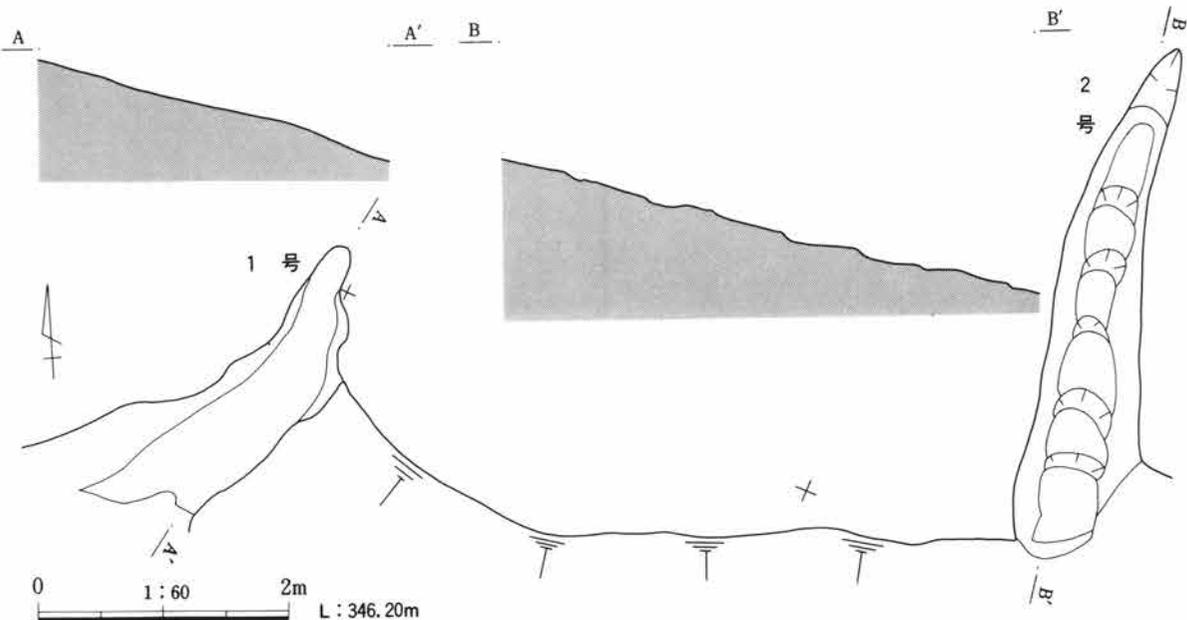
の乱石積みにより構築され、1741年製造の寛永通寶を一点伴出していることから、すくなくとも1741年以降の構築と考えられるが、時期の確定はできない。

2. 階段状遺構

テラス状の緩斜面が南側の谷地に向かって急勾配となる標高346mの地点に2基検出された。各階段状遺構の検出状況は、ともにその遺構上面にIV層のF Aが5mm前後の薄層をなして堆積し、その直下に踏み固めによる極めて堅緻な面として確認された。

西側に位置する1号階段状遺構は、2号のような明瞭な段差を形成していないが、上面には凹凸があり、南側へ向かって約15度の勾配で傾斜している。幅は40~70cm、検出長は約3mで、南側に行くに従って、V層からVI層にかけての黒色土を徐々に掘り下げている。

2号階段状遺構は、1号の約6m東側に位置しており、先述したように明瞭な階段状の段差をもち、1号と同様の約15度の勾配で傾斜している。各段の最大落差は約15cm前後であり、ステップ面は南側へ



第95図 階段状遺構

Ⅲ. 古墳時代以降の遺構と遺物

の若干の勾配をもっている。各ステップは、幅25～45cm、長さ35～45cmを測り、検出長は約4mである。1号と同様、南側へ行くに従ってV～VI層を掘り込んでいく。

土器等の遺物を伴出しないためにその帰属時期を確定することは難しいが、その埋没がF Aの降下時期と近接していることや、5軒の竪穴住居との位置的關係等を考慮すれば、それらの集落と同一時期に比定される可能性が高い。

これらの階段状遺構が下っていく谷地状の沖積地は、竪穴住居の占地するテラス状の緩斜面との比高が約7mで、現在では幅30m、奥行き1.2kmの谷地田状の水田耕作地となっているが、近年実施された圃場整備事業により丘陵部斜面を掘削して拡張され、原地形をとどめていない。この工事に伴ってこれらの階段状遺構も削り取られており、その全容は明らかにできないが、おそらくこの谷地を流れる沢水を生活水として得るためか、あるいはこの谷地を水田農耕地として利用し、集落との往来にこの階段状遺構を通路として使用したのと考えられる。

3. 竪穴住居

検出された5軒の竪穴住居は、南北幅約30m、東西幅約50m、面積1,300㎡ほどの狭小な範囲に密集している。住居の存在を確認したのは、大型重機によりII層のF Pを掘削・排土している段階であり、写真図版P L 37-1のような円形状のF Pの落ち込み部分としてそのおおよその輪郭を把握した。しかし、各住居の掘り込み面は黒ボクに近い黒色土のV層中に存在し、また住居内の埋没土がV層に類似した黒色土を主体としているために、F Pを除去した段階でもその外形を明確に把握することはできなかった。そこでとりあえず、F Pがレンズ状に堆積しているところを住居の中心部分と仮定してセクションベルトを設定し、それに沿ったトレンチ調査を先行させて、床面や周壁の把握に努めた。

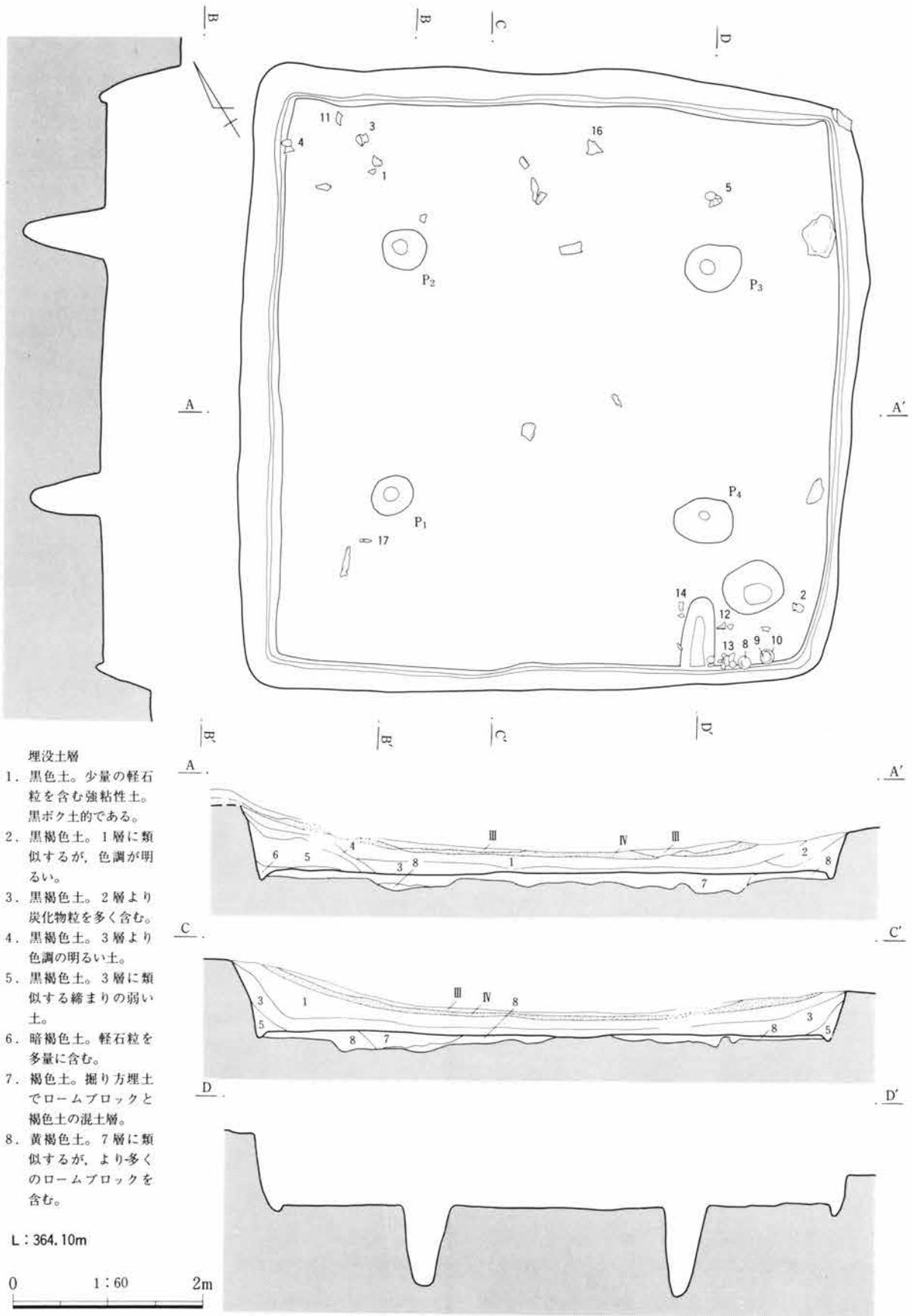
各住居の規模は一定していないが、いずれも外形

が正方形やそれに近似した長方形を呈し、4本の主柱穴をもつ点で一致している。各住居は一辺の長さがおおよそ3～4mの規模をもつ小型のもの(17・19号住居)や約8～9mの大型のもの(16・18号住居)と、その中間的な約6mの規模をもつもの(15号住居)の3種類が存在する。貯蔵穴や周溝などの施設を検出できなかった住居もあるが、基本的には両施設を具有するものと考えられる。各住居ともに焼失家屋であり、遺存物の量的な差は認められるが、いずれの住居からも炭化材や焼土痕が検出されている。また、時期的にみて各住居にはあまり掘り込みをもたない地床炉が施設として付属すると考えられるが、検出し得たのは18・19号住居のみであり、他は焼失時の焼土痕が床面に散在しているためにこれとの区別が難しく、その位置を特定できなかった。

住居の外縁部には、調査段階では、最近子持村黒井峯遺跡や渋川市中筋遺跡などの古墳時代の竪穴住居に共通して認められた周堤帯状の高まりを明確にとらえることはできなかったが、写真図版P L 38-1・2のように15号住居の東側の土層断面には、F Pの下位にわずかにではあるが周堤帯状の高まりを認めることができる。各住居間の距離は、19号住居が15号や16号住居に2～3mと近接しているが、他はほぼ4mの間隔を置いている。

5軒の住居からはいずれも5世紀前半に位置付けられる和泉式の土師器が出土しており、各土器ともに型的差異もなく、かつ住居同士の重複関係もみられないことから、これらの住居は同一時期に存在した可能性が高い。住居内の出土遺物では、高坏・埴輪をはじめ坏・甕・壺・台付埴輪などの土師器が主体を占めているが、18号住居では高坏が77点、埴輪が167点も出土しており、全体的な土器の出土総量もさることながら、これらの特定器種の出土量が他の器種を圧倒している点で注目される。また、小型粗製(手握ね)土器や刀子状鉄製品、滑石製模造品などもわずかながら15・16・18・19号住居内より出土している。

3. 竪穴住居



第96図 15号住居

Ⅲ. 古墳時代以降の遺構と遺物

15号住居

位置 67Z48 写真 PL38・43

形状 一辺が6.4mの正方形を呈する。四隅はほぼ直角をなし、各辺も直線的に掘り込まれている。壁面の勾配は、70~80度で立ち上がる。

面積 30.01m² 方位 N-53°-W

床面 黒色土(V層)上位から下位にかけて64~90cm掘り込み、更にその上面に最大厚約20cmの貼り床を行っている。全体的に良く踏み固められているが、特に4本の支柱穴を結んだラインの内側は、堅緻な面となっている。凹凸が少なく、ほぼ平坦な床面であるが、中央部が周壁際に比べて、5cm程低く、わずかな窪地状を呈する。柱穴P₄の南側から壁側にかけて、基盤層を掘り残した長さ70cm、幅35cm、高さ11cmの高まりが認められる。

埋没土 四方向から徐々に挿鉢状に堆積している。V層に類似した黒色土が上層から中層にかけて堆積しているが、壁際や床面直上などの下位層はより色調の明るい土が堆積している。また、最上層にはFPが堆積し、その下位には層厚約4cm前後の黒色土の間層を挟んで層厚約5cmのFAが堆積している。

炉 焼土等の痕跡を伴ったものは検出されていないが、床面中央部に位置する長さ15×15cmの輝石安山岩の垂角礫の周辺に炭化物が散在しており、炉の可能性が高い。

貯蔵穴 南東隅に位置している。長径62×短径54cmの楕円形を呈し、深さ57cm出ある。穴内には、締めりのない黒色土が堆積している。

柱穴 住居の外形の対角線上に4本検出された。各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:40×73cm、P₂:45×83cm、P₃:55×83cm、P₄:50×92cmである。また、各柱穴の心々間の距離は、P₁~P₂:2.5m、P₂~P₃:3.2m、P₃~P₄:2.5m、P₄~P₁:3.3mである。

周溝 幅7~12cm、深さ5~8cmの規模で全周。

遺物 北西隅と南東隅の床面に集中して埴4点、高坏5点、甕3点、坏1点の土器と、柱穴P₁に近接して刀子1点が出土している。No.10の中に9が入れ子の状態で出た。南東隅の一群中に短頸埴が

1点検出されたが、盗難に遭い図化されていない。埋没土中から若干の土器片が出土しているが、いずれもFAの下位より出土している。その他には、柱穴P₁の南側より長さ35cmの炭化材が出土している。

(遺物観察表:151頁)

備考 炭化材の出土点数は少ないが、焼失家屋の可能性が高い。住居の掘り込み面が黒色土中にあるために、発掘時点では確認できなかったのであるが、住居の掘削時の排土と思われる周堤帯状の高まりの存在することが、発掘区境界の土層断面(写真図版PL38-2)で確認される。おそらく、住居外側を圍繞するように盛土されていたと思われる。

16号住居

位置 73Z47 写真 PL39・43・44

形状 一辺の長さが8.0mの正方形を呈する。四隅は直角をなし、各辺も直線的に掘り込まれている。壁面の勾配は70~80度で立ち上がる。

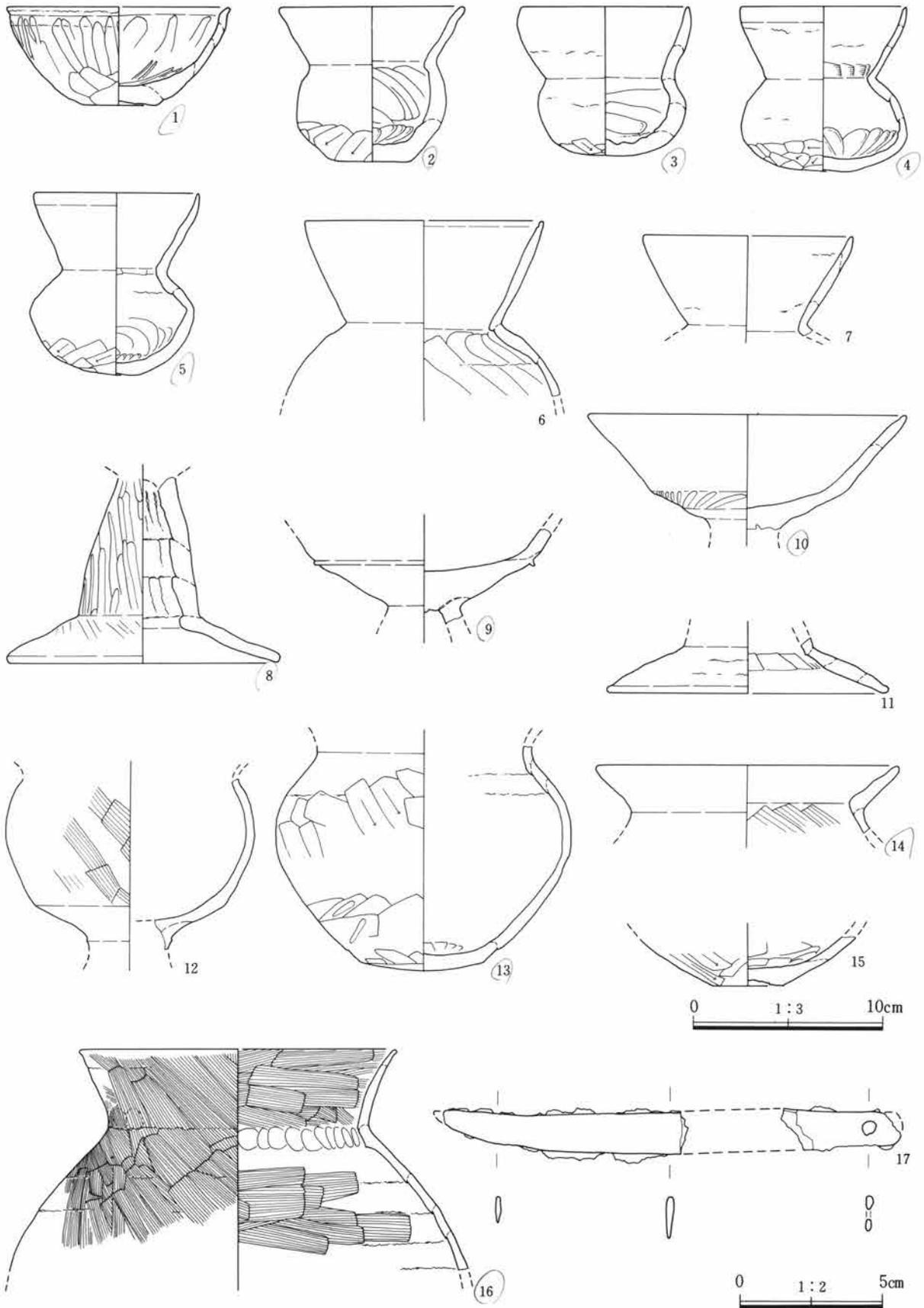
面積 54.76m² 方位 N-74°-W

床面 北側では黒色土(V層)上位から下位にかけて約90cm前後、南側では黒色土中位から褐色土(VI a層)中位にかけて70cm前後掘り込み、更にその上面に最大厚12cmほどのわずかな貼り床を行っている。叩き床ほどの堅固な面は認められなかったが、4本柱穴を結んだ線の内側や貯蔵穴の周辺は、良く踏み固められていた。床面中央部が周壁際に比べて約10cmほど低くなるが、ほとんど平坦に近い。

埋没土 四方向から黒ボクに類似した黒色土が徐々にスリ鉢状に自然堆積したことをうかがわせるが、南半部の周壁際には周堤帯状の盛土が崩落・埋没したことを示すと思われるロームブロック混じりの褐色土が堆積している。また、床面直上には焼土粒や炭化物を多量に含んだ暗褐色土が堆積しており、本住居は焼失家屋であると判断される。15号住居と全く同様に、最上層にFPが堆積し、間層を挟んでFAが堆積している。

炉 床面上には炉を思わせるような掘り込みや焼土等の痕跡は認められなかった。

3. 竖穴住居



第97图 15号住居出土遺物

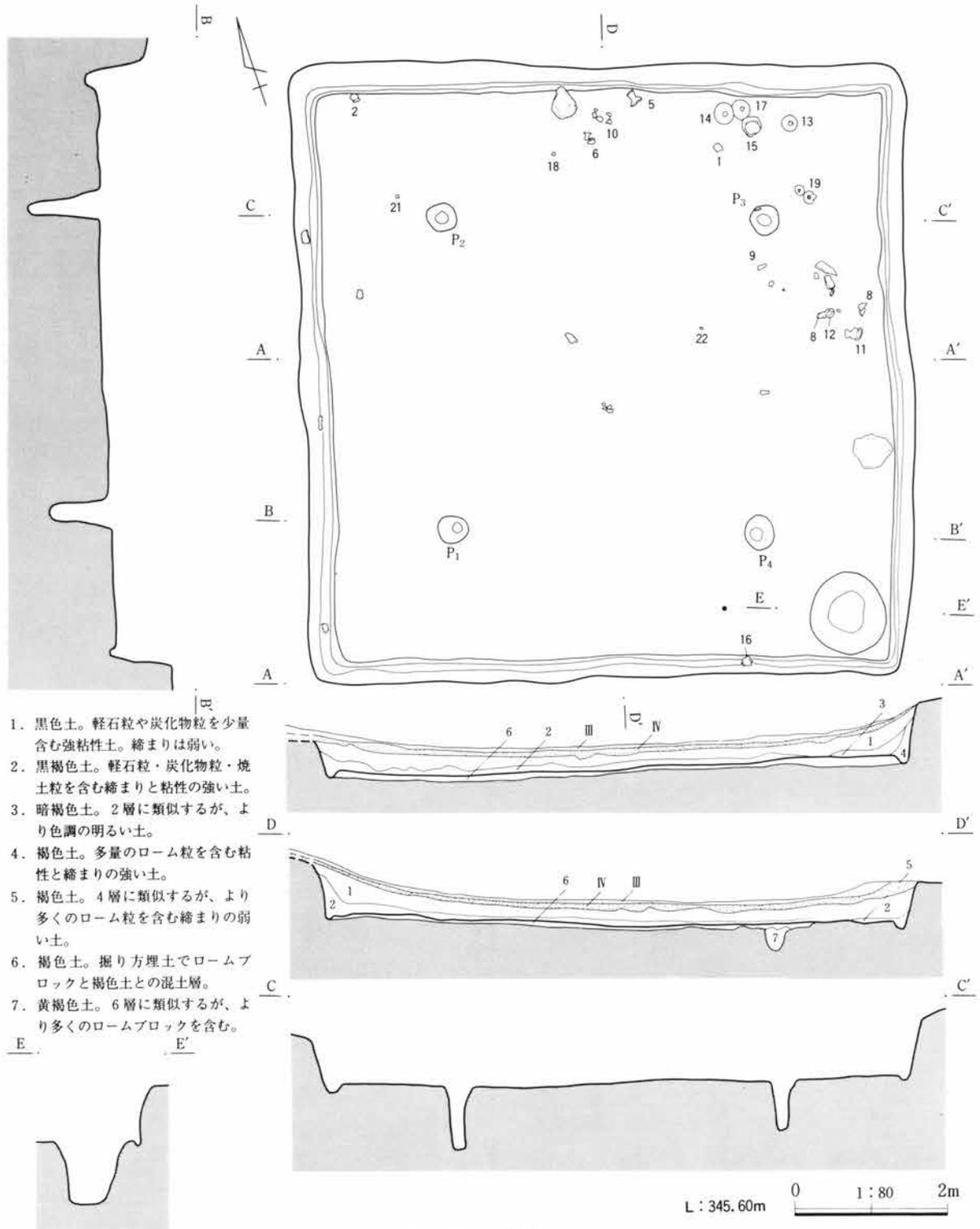
Ⅲ. 古墳時代以降の遺構と遺物

貯蔵穴 南東隅に位置している。直径約1mの円形を呈し、深さ80cmである。内部には締まりのない黒色土が堆積し、遺物は検出されていない。

柱 穴 住居外形の対角線上に4本検出された。各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:41×94cm、P₂:41×

83cm、P₃:37×66cm、P₄:43×78cmである。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形とほぼ相似形を呈し、その距離はP₁~P₂:4.1m、P₂~P₃:4.2m、P₃~P₄:4.1m、P₄~P₁:4.0mである。

周 溝 幅7~14cm、深さ5~15cmの規模で全周して



第98図 16号住居

3. 竪穴住居

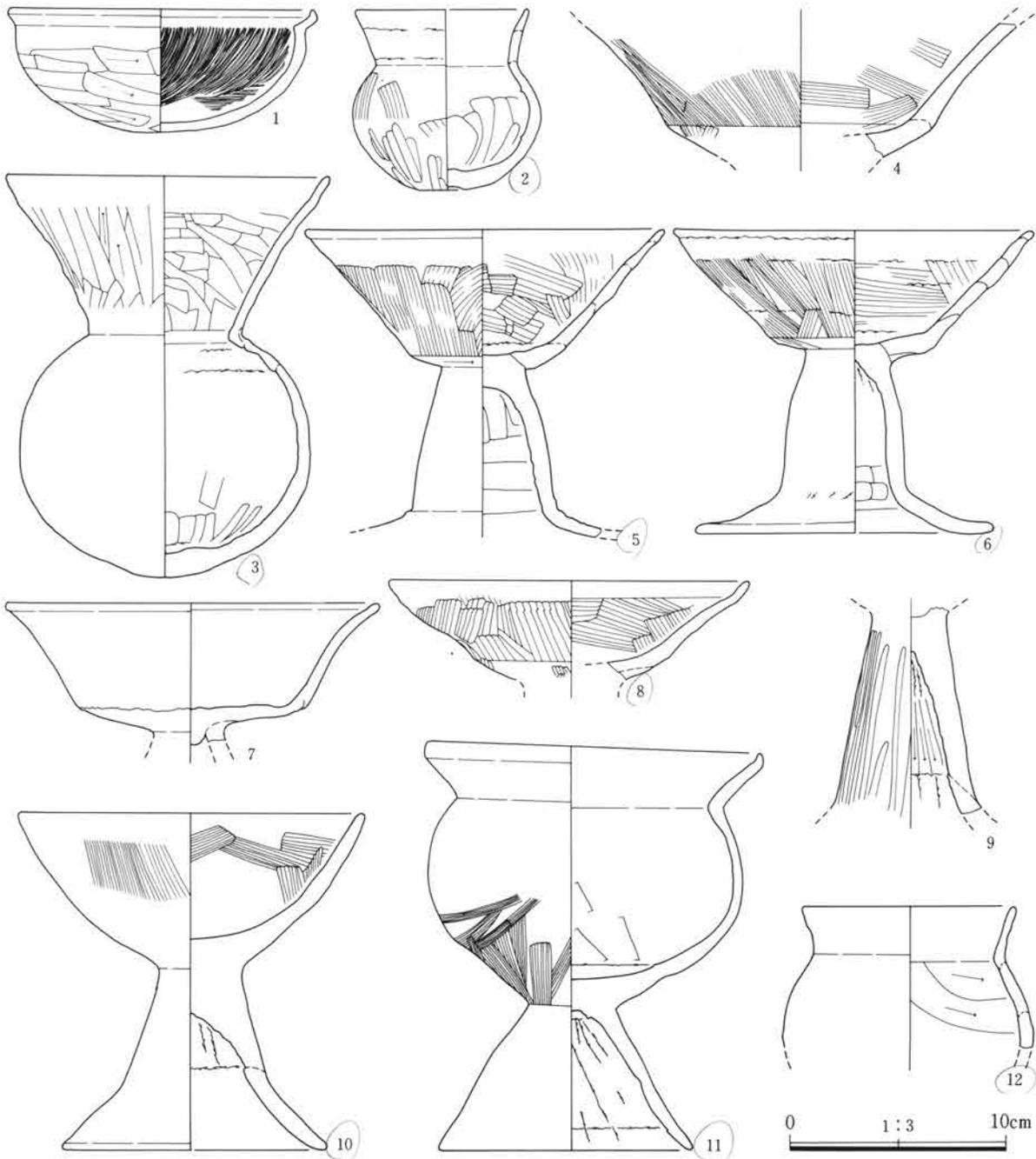
いる。

遺物 床面に密着して壺形土器1点、甕5点、高坏3点、埴2点、脚付埴1点、小型粗製土器3点が出土しているが、出土位置は東壁から北壁にかけてのややかたよった範囲である。また、東壁近くの床面より9cm浮いた位置に、半分を欠損した滑石製の紡錘車が1点出土し、住居外部の北側より出土したもう半分と接合している。埋没土中の土器は坏1点、

甕5点、高坏51点、脚付埴2点、小型粗製土器1点である。

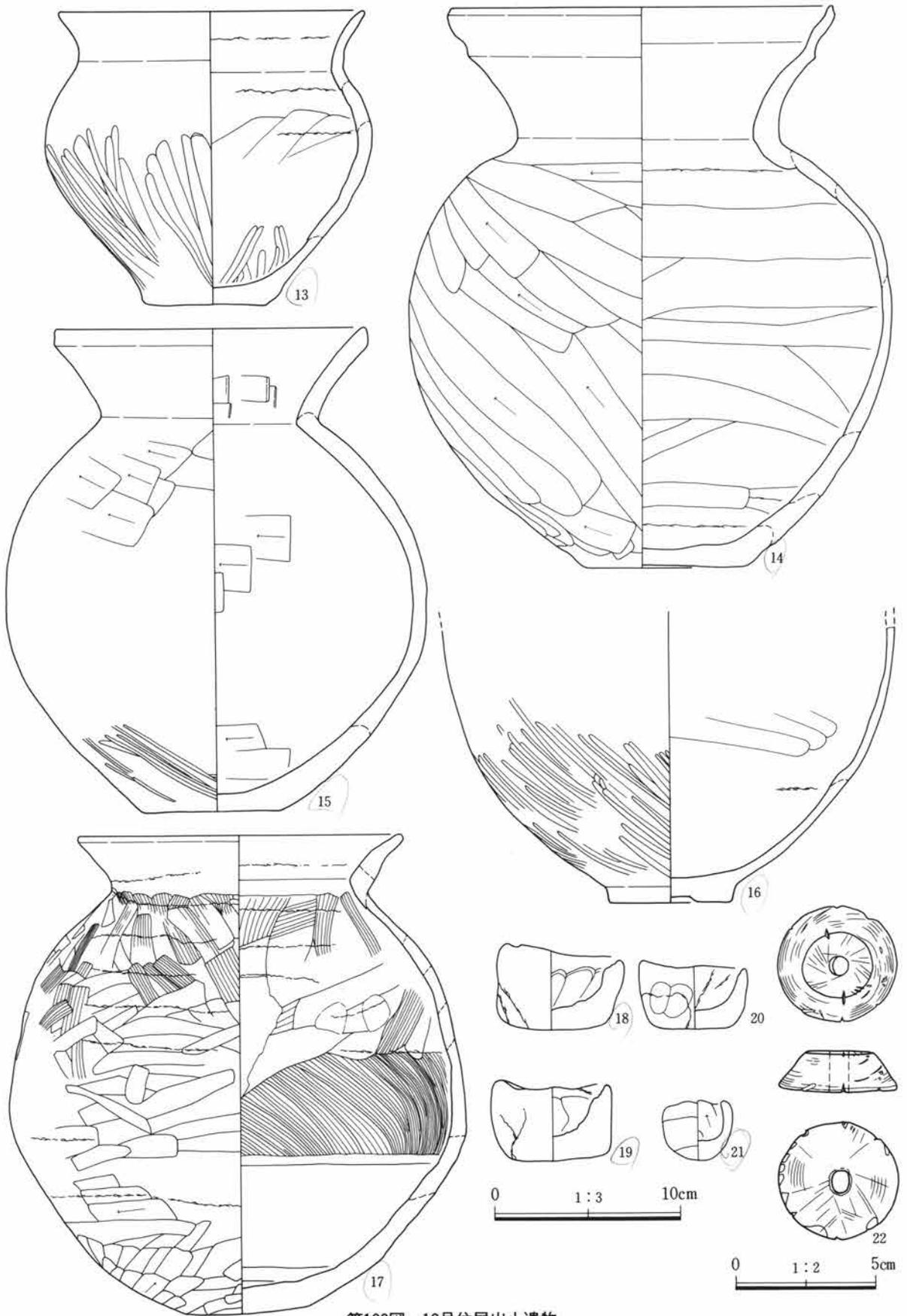
(遺物観察表：151頁)

備考 本住居と15号住居の空間部には南北に走る幅0.5~1mの道路状の堅固な面が認められた。周堤帯等を検出できなかったために、これとの関係は明らかでないが、谷側方向へと続いている点からすると谷側斜面で検出された階段状の遺構とも何らかの関係をもつと思われる。



第99図 16号住居出土遺物

Ⅲ. 古墳時代以降の遺構と遺物



第100図 16号住居出土遺物

17号住居

位置 78Z44 写真 PL38・45

形状 一辺の長さが4.2mの正方形を呈する。四隅は直角をなし、各辺もほぼ直線的に掘り込まれている。壁面の勾配は70~80度で立ち上がる。

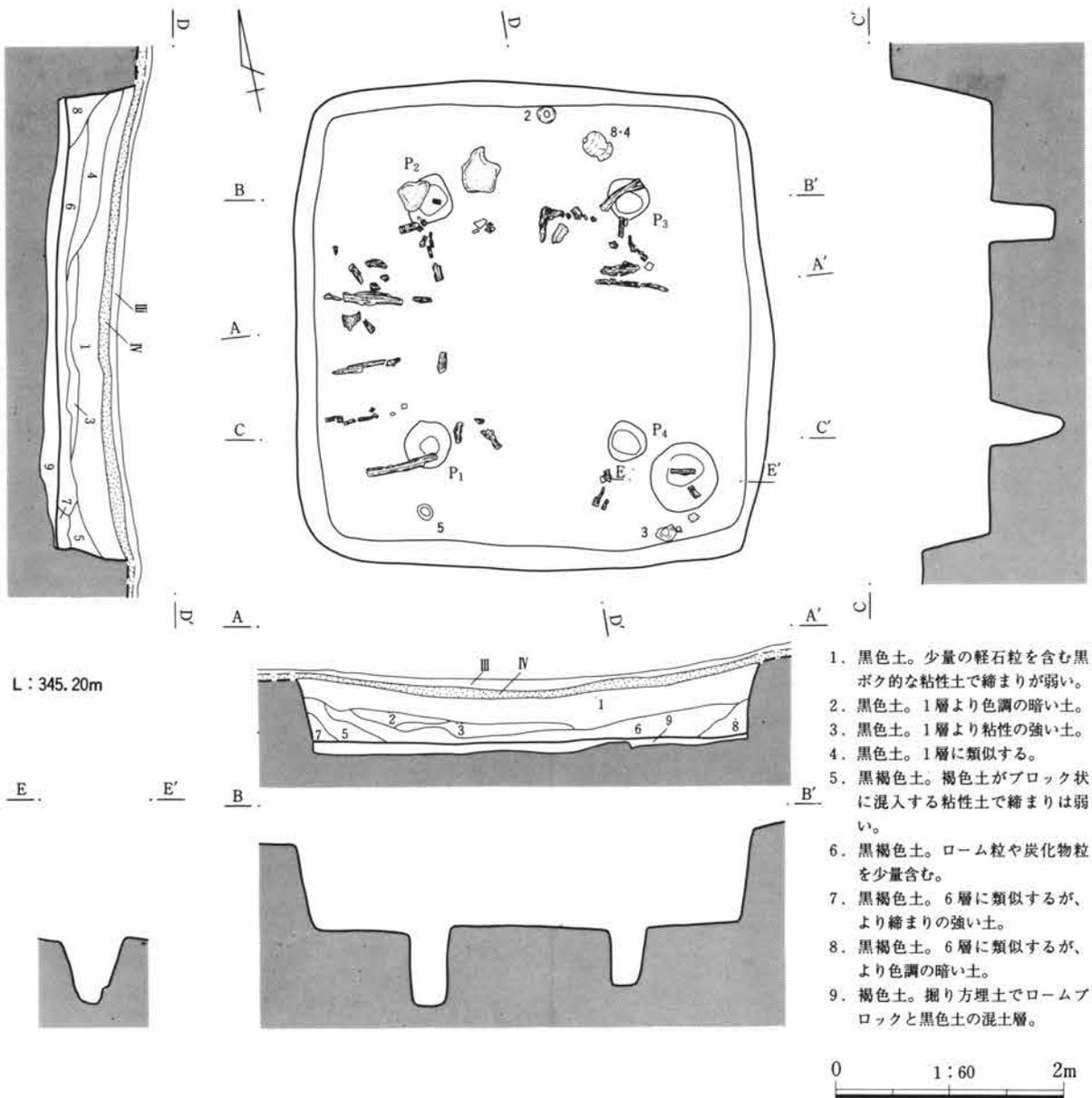
面積 12.61m² 方位 N-78°-W

床面 黒色土(V層)上位からソフトローム(VI a層)上面にかけて90~95cm掘り込み、更にその上面に最大厚15cmのわずかな貼り床を行っている。柱穴と結んだ線の内側や貯蔵穴周辺はかなり良く踏み固

められているが、叩き床ほどの堅固な面は認められない。凹凸が少なく、平坦な床面である。

埋没土 四方向より、黒ボクに類似した黒色土が自然堆積した状態を示す。下位層および壁際には、上位層よりも若干色調の明るい黒褐色土が堆積している。また、床面直上の埋没土中には、多量の炭化物が包含されている。15・16号住居と全く同様に、最上層にF Pが堆積し、間層を挟んでF Aが堆積する。

炉 床面上には、炉と認定できるような掘り込みや焼土等の痕跡は検出されなかった。



第101図 17号住居

Ⅲ. 古墳時代以降の遺構と遺物

貯蔵穴 南東隅に位置している。長径62×短径56cmの不整円形を呈し、深さ55cmである。内部には締まりのない黒色土が堆積し、遺物は検出されていない。

柱 穴 住居の外形の対角線上に4本検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形に比べてやや南北軸の長い長方形を呈し、その距離はP₁~P₂・P₃~P₄:2.2m、P₂~P₃・P₄~P₁:1.7mである。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:43×63cm、P₂:45×65cm、P₃:36×47cm、P₄:35×54cmである。

遺 物 床面に密着して甕1点、高坏2点、埴3点が出土しているが、その位置は北壁および南壁側に片寄っている。また、床面上には径30cmの板状の輝石安山岩が2個と、各周壁に並行するように家屋材と思われる炭化材が14点出土している。埋没土の上・中層より出土した土器は、甕3点、高坏16点、埴15点である。(遺物観察表:152頁)

備 考 床面直上の炭化材の出土状況から焼失家屋と判断される。周溝は検出できなかった。

18号住居

位 置 83Z47 **写 真** P L 40・45~50

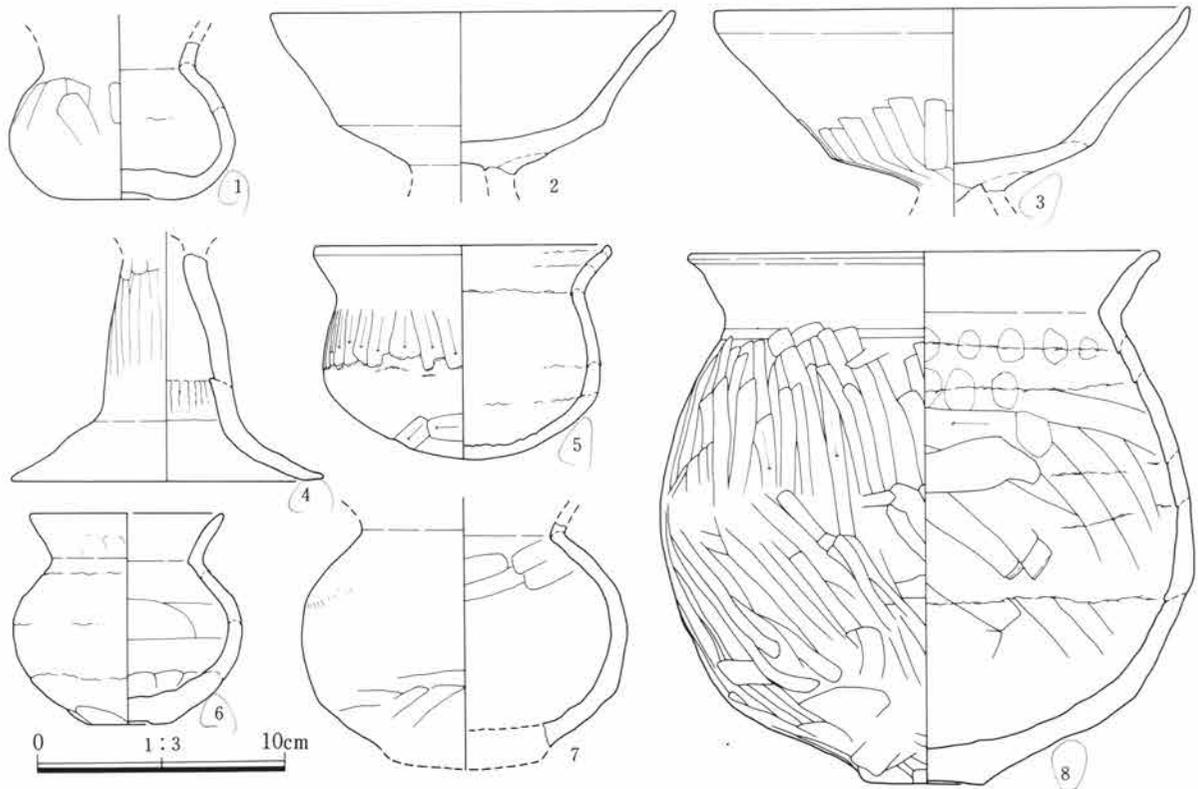
形 状 一辺の長さが9.0mの正方形を呈する。四隅は直角をなし、各辺も直線的に掘り込まれている。壁面の勾配は約80度で立ち上がる。

面 積 70.56m² **方 位** N-66°-W

床 面 黒色土(V層)上位から下位にかけて約50~94cmほど掘り込み、更にその上面に最大厚14cmの貼り床を行っている。全体的に良く踏み固められているが、特に南東隅の貯蔵穴周辺(点線の範囲)に叩き床状の堅固な面が認められる。凹凸面が少なく、ほぼ平坦な床面であるが、柱穴P₁とP₄を結んだライン周辺が他に比べて15cmほど低い窪地状となっている。

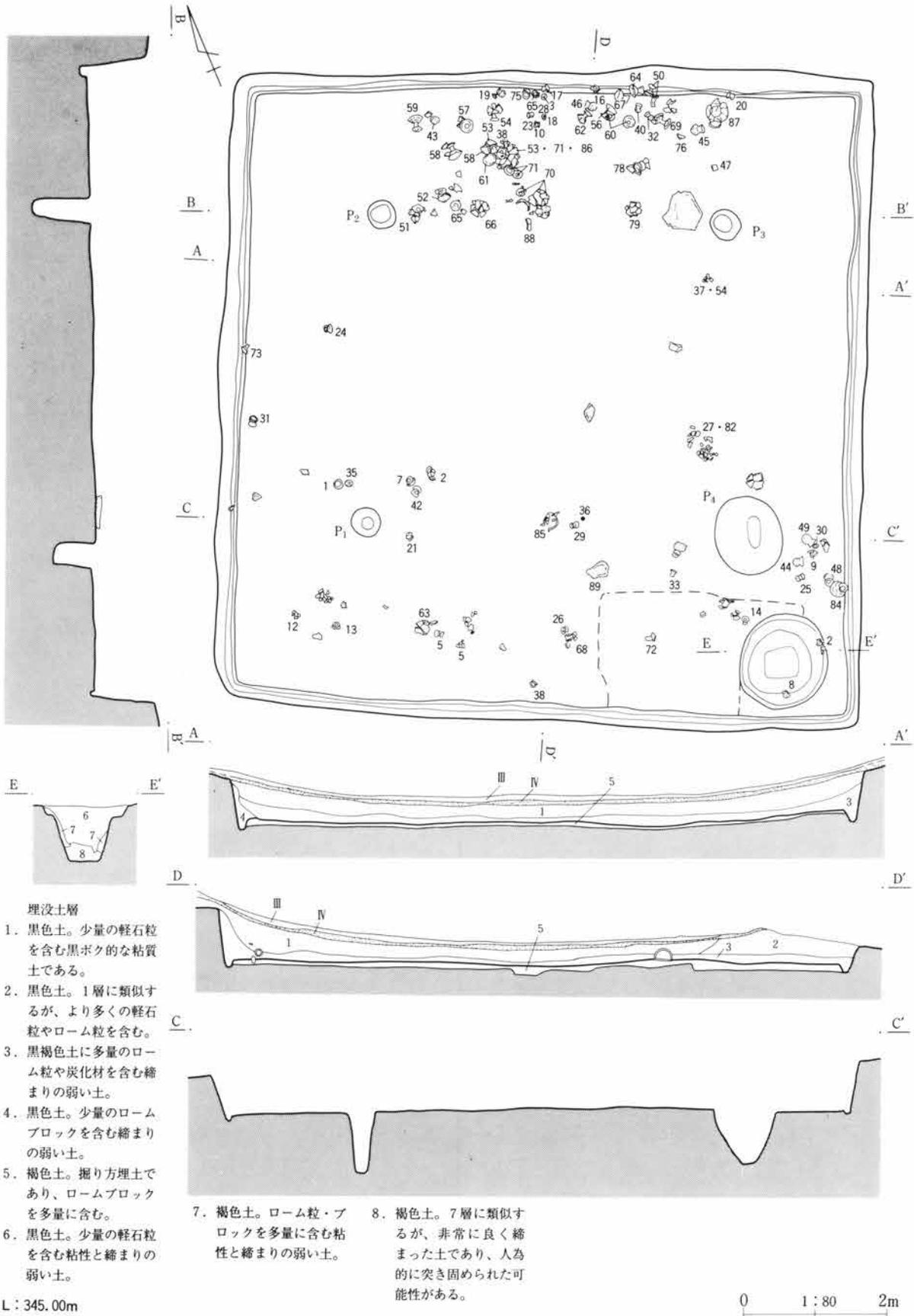
埋没土 V層に類似した黒色土が、四方向より徐々に自然堆積したことを示している。下層には炭化物を多量に含んだ黒褐色土が堆積している。15~17号住居と全く同様に、最上層にF Pが堆積し、その下位に間層を挟んでF Aが堆積している。

炉 炉と断定できる痕跡は認められなかったが、住居中央部に位置する径25cmほどの輝石安山岩の垂



第102図 17号住居出土遺物

3. 竪穴住居



第103図 18号住居

Ⅲ. 古墳時代以降の遺構と遺物

角礫の西隣には、わずかな窪みと炭化物の集中などが確認されており、炉の可能性もうかがえる。

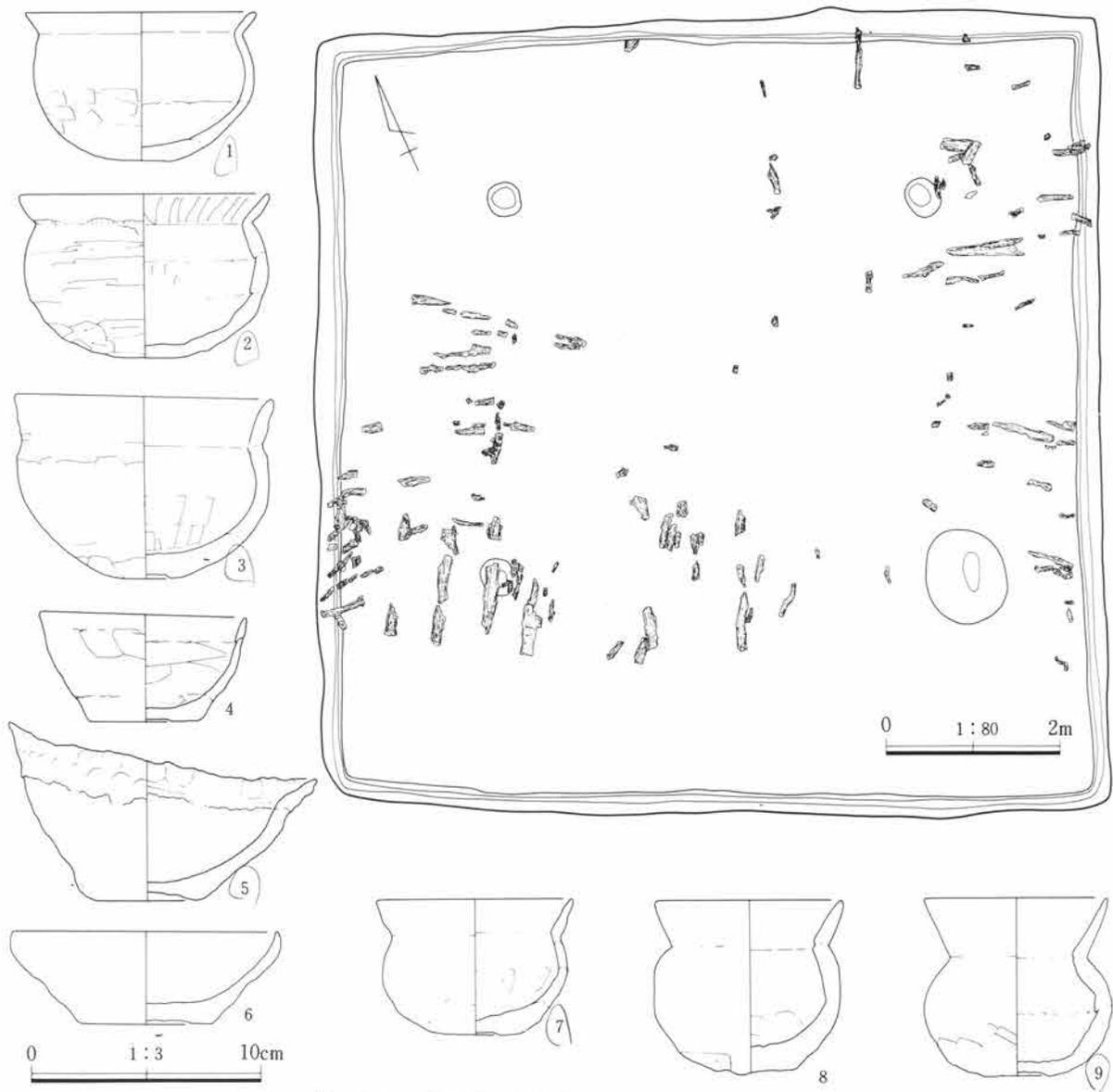
貯蔵穴 南東隅に位置する。直径約1.3mの円形を呈し、深さ73cmの規模をもつが、上端から約10cm下がった位置に10~20cm幅の平坦面があり、有段状の断面形となる。全体的に締まりの弱い黒色土で埋没しているが、底面および壁際にはロームブロックを含んだ褐色土が堆積している。

柱 穴 住居外形の対角線上に4本検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形に比べてやや東西軸の長い長方形を呈し、その距離は $P_1 \sim P_2 \cdot P_3 \sim P_4$: 4.3m、 $P_2 \sim P_3$: 4.8m、 $P_4 \sim P_1$: 5.4m

である。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、 P_1 : 40×82cm、 P_2 : 40×79cm、 P_3 : 43×55cm、 P_4 : 94~108×70cmである。なお、 P_4 の底面よりNo.15の完形の埴が正位で出土。

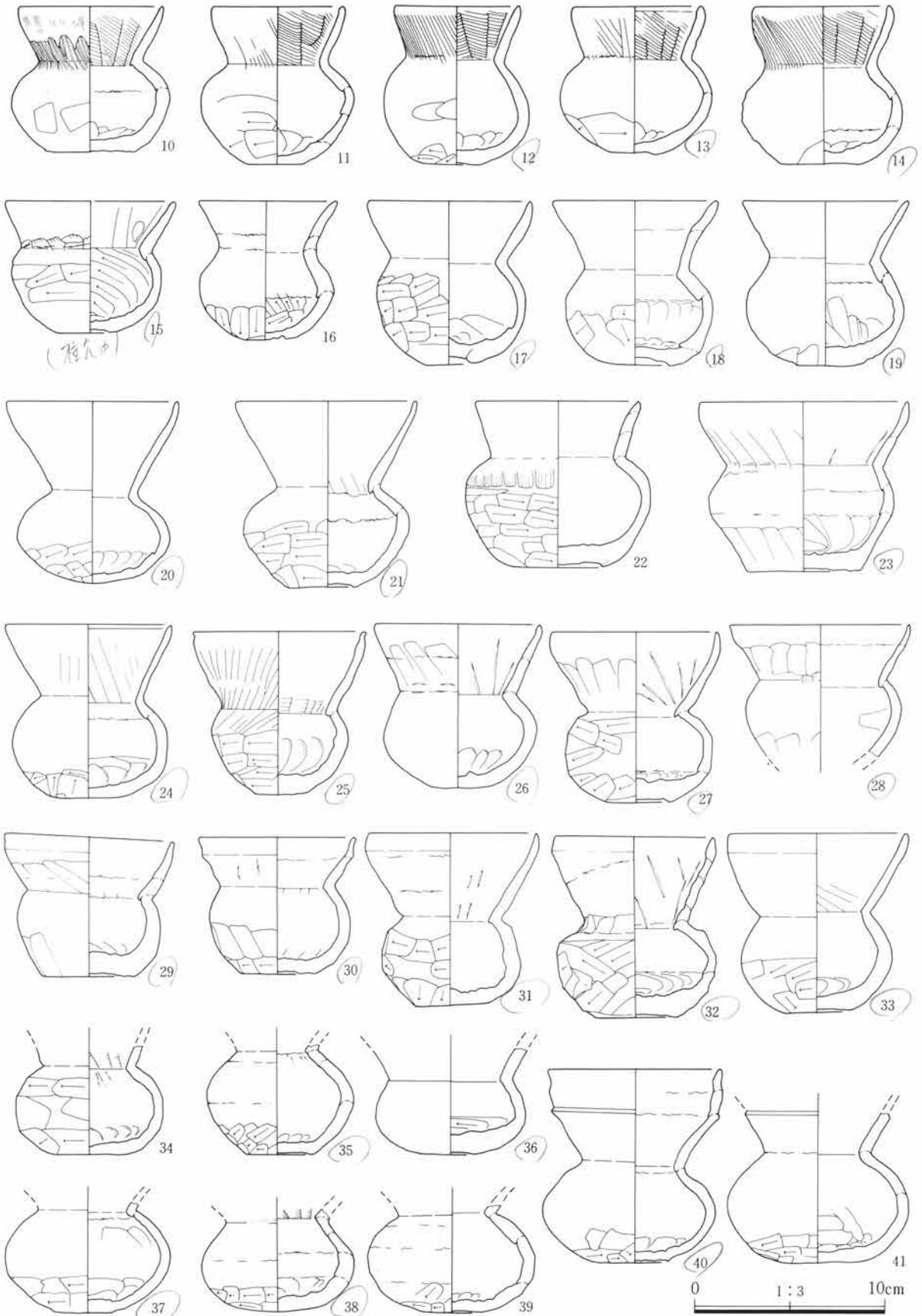
周 溝 幅10~18cm、深さ4~11cmの規模で全周。

遺 物 床面に密着して、甕6点、高坏23点、埴34点、脚付埴2点、短頸埴4点、鉢1点もの多量の完形・半完形の土器が出土している。出土位置は、北壁際を主体としているが、南東の貯蔵穴の周辺にも若干認められる。床面より浮いて埋没土中位より出土した土器は、埴78点、高坏31点、坏1点、甕34点、甑5点、脚付埴1点である。また、床面上には屋根



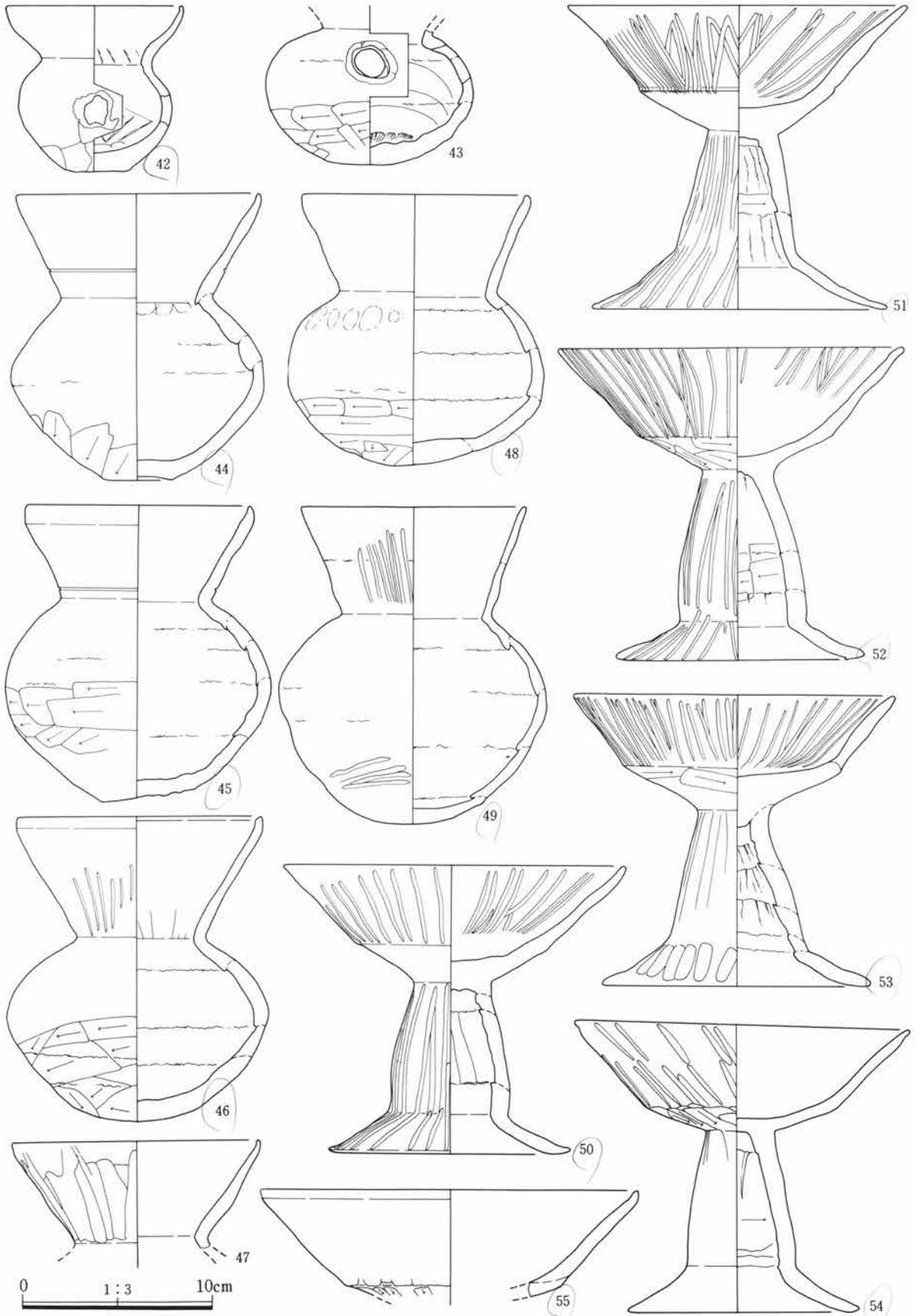
第104図 18号住居の炭化材出土状況と出土遺物

3. 竖穴住居

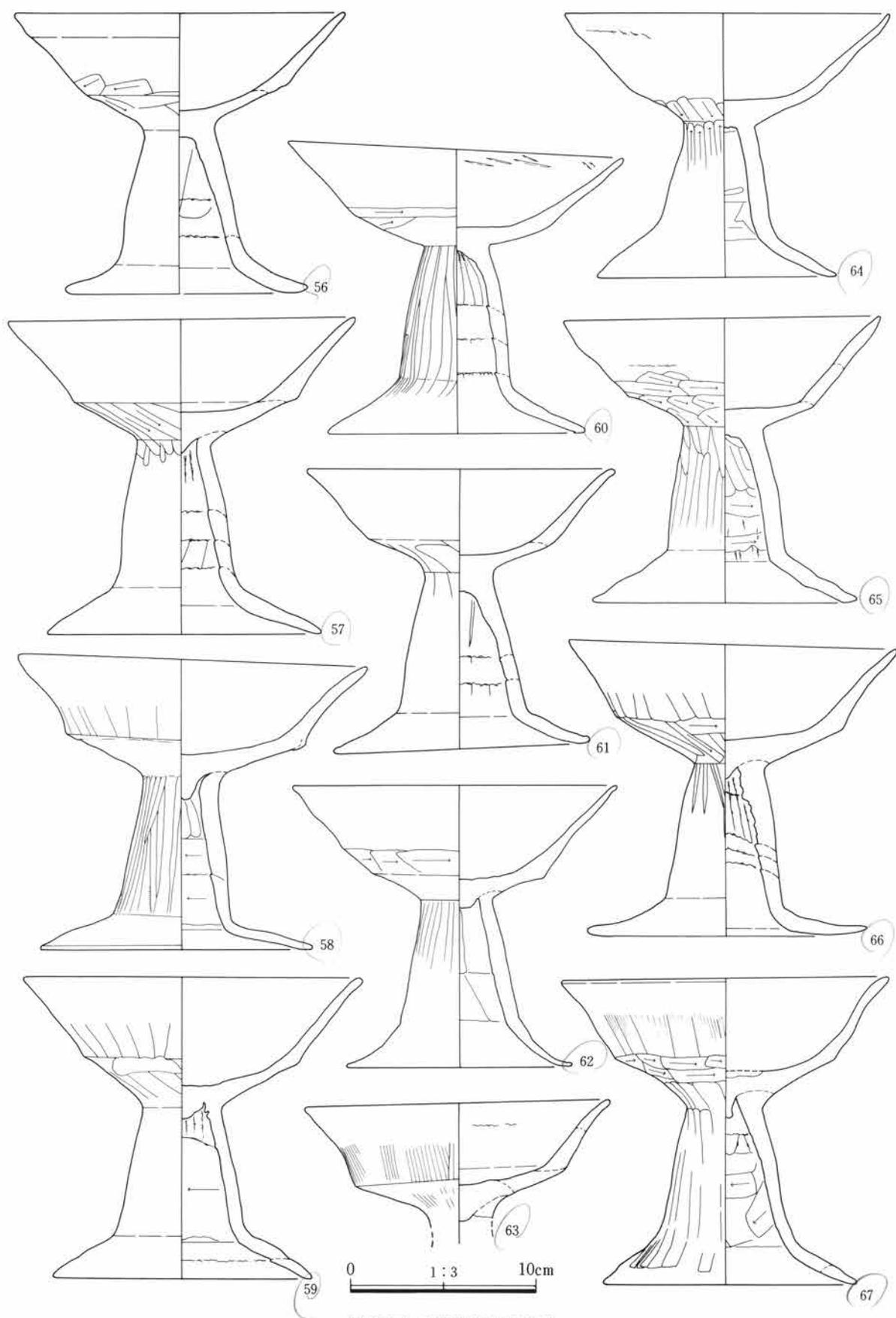


第105图 18号住居出土遗物

Ⅲ. 古墳時代以降の遺構と遺物

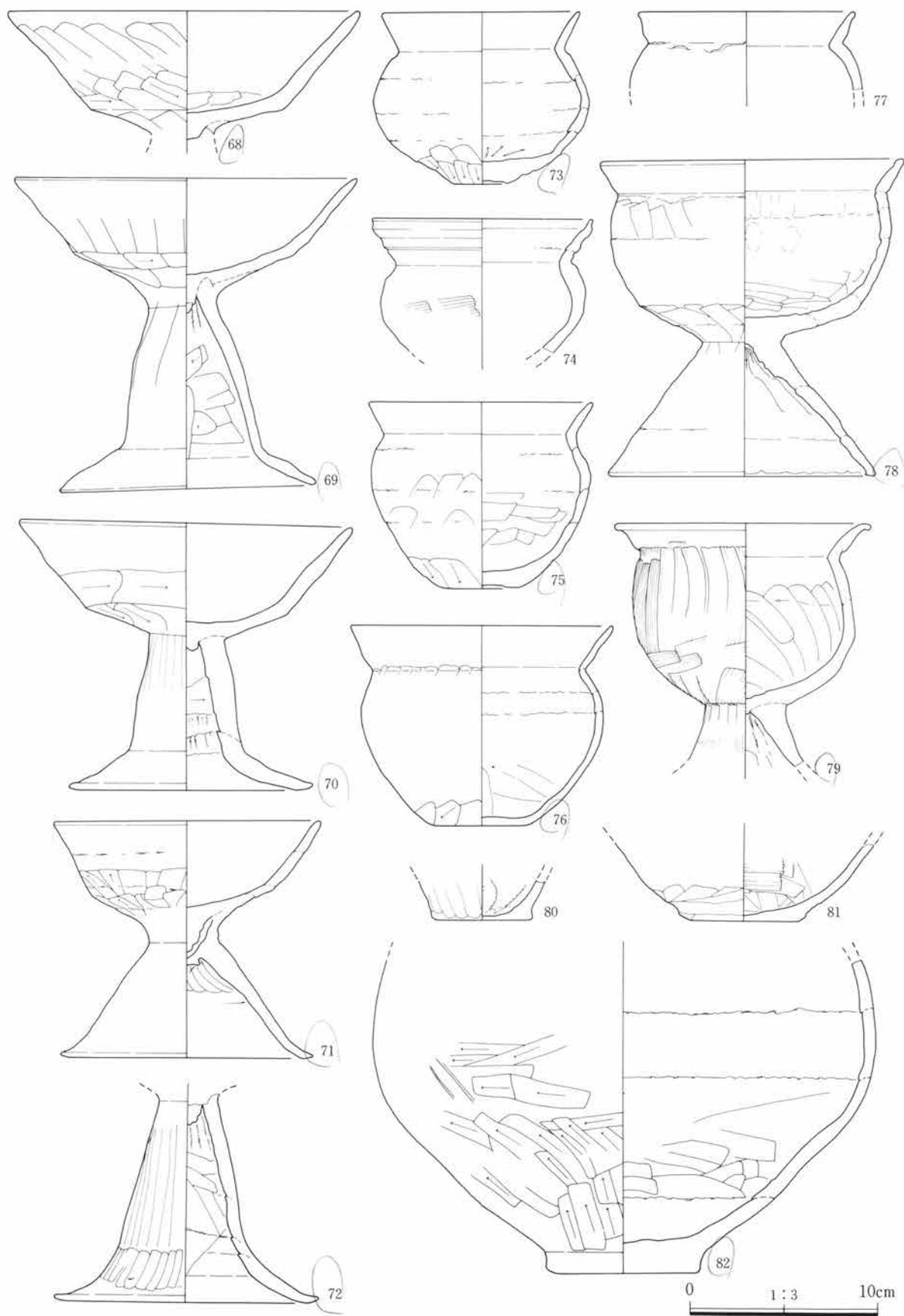


第106図 18号住居出土遺物

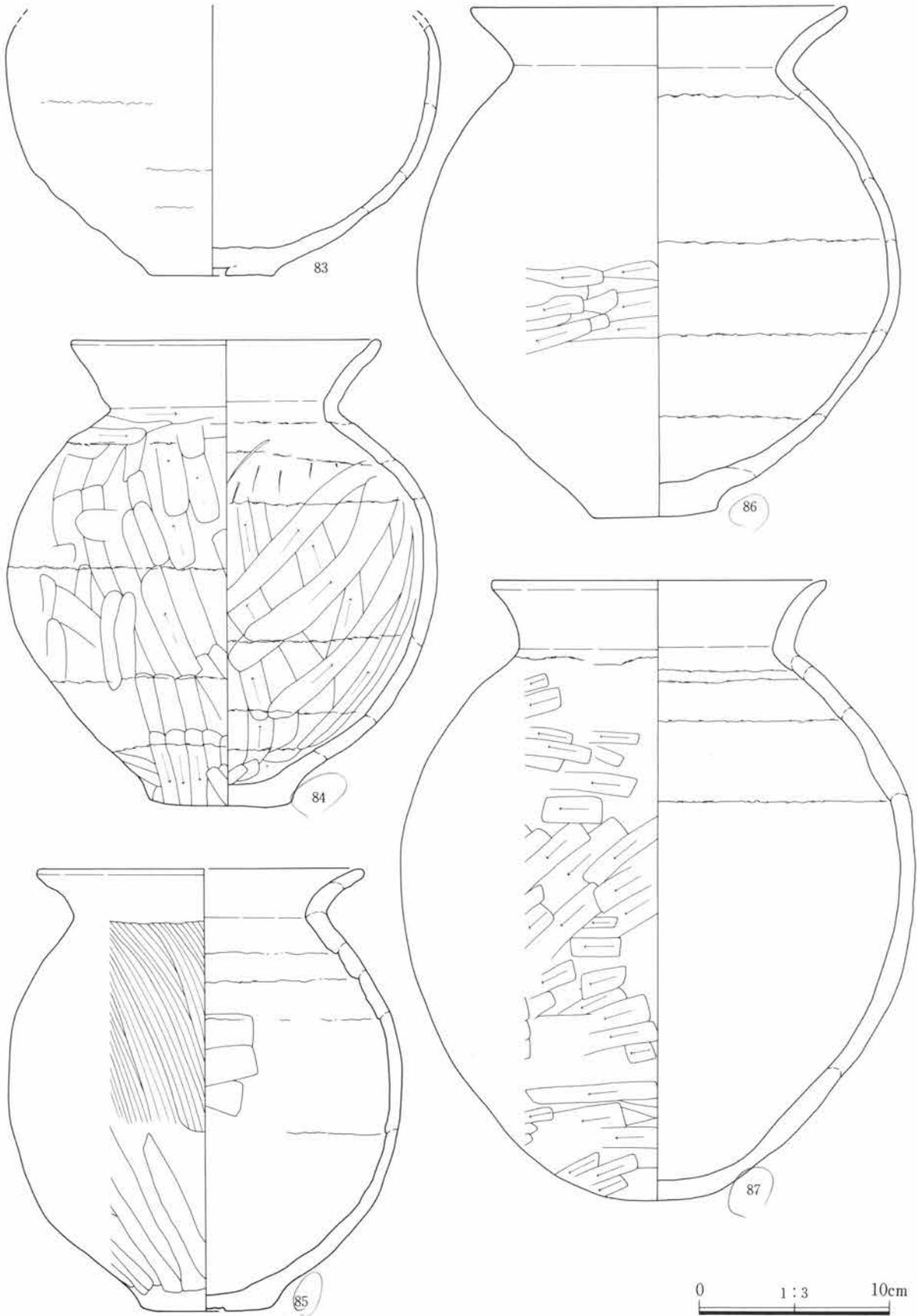


第107图 18号住居出土遺物

Ⅲ. 古墳時代以降の遺構と遺物

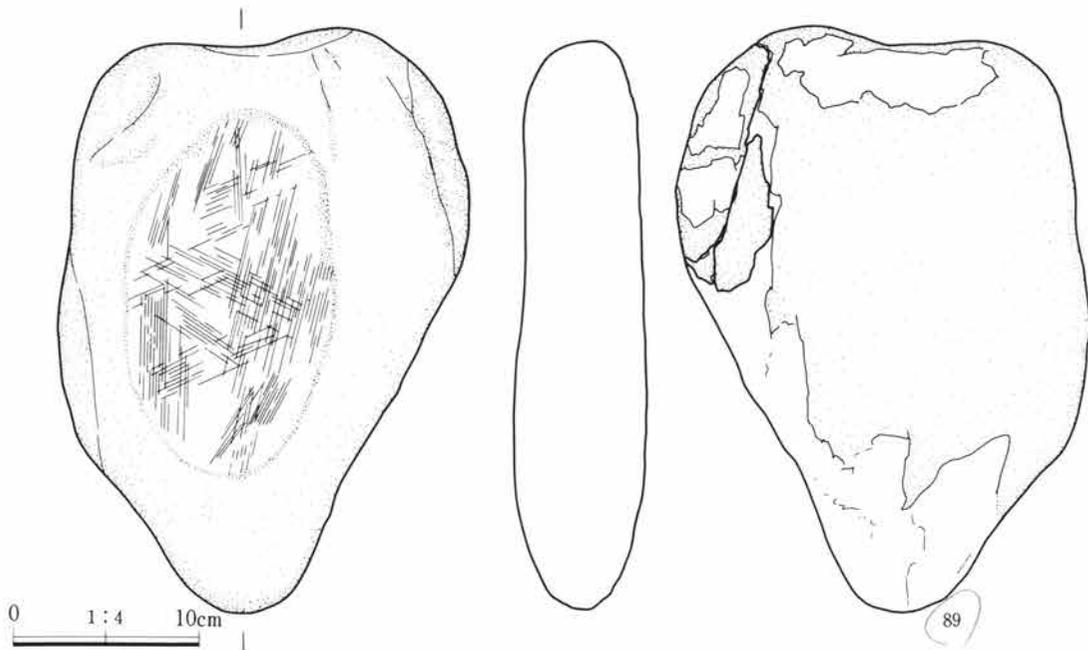


第108図 18号住居出土遺物



第109図 18号住居出土遺物

Ⅲ. 古墳時代以降の遺構と遺物



材あるいは支柱材と思われる炭化材が、各壁面に並行するような状態で検出されている。ほとんどが丸木状の心材であり、板材は認められなかった。

(遺物観察表：153頁)

19号住居

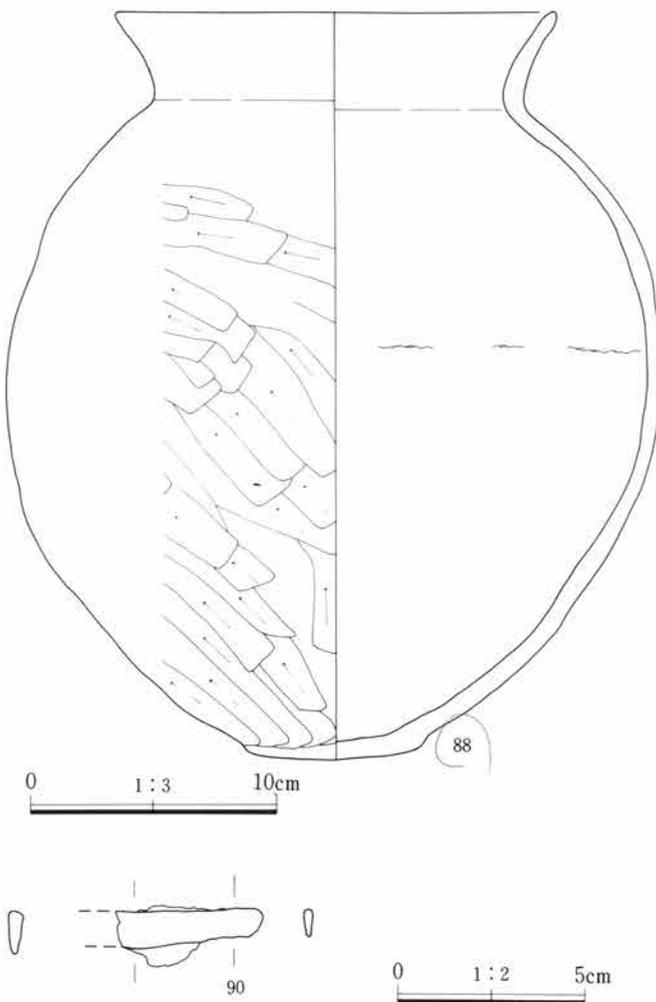
位置 70A01 写真 PL41・50・51

形状 長軸を南北方向にもち、長辺3.2×短辺2.7mの長方形を呈する。四隅は隅丸ほどではないが若干の丸みをもつ。また、各辺は外側にわずかな弧を描くような状態で掘り込まれており、壁面の勾配は60～80度で立ち上がる。住居の長軸は、地形の等高線の走行と直角に近い状態で交叉する。

面積 6.61㎡ 方位 N-62°-W

床面 黒色土(V層)の上位から下位にかけて、約42～63cm掘り込んで床面としている。全体的に良く踏み固められているが、特に堅固な面は認められない。若干の凹凸が認められるがほぼ平坦な床面である。

埋没土 V層に類似した黒色土が、四方向より徐々に自然堆積した状態を示す。最上層にFAが最大厚約10cmで堆積しており、FA降下時にはわずかな窪地の状態をとどめるのみで、ほとんど埋没していた



第110図 18号住居出土遺物

3. 竪穴住居

と判断される。床面直上には、炭化物・焼土粒を多量に含んだ暗褐色土が堆積している。

炉 住居のほぼ中央部に位置する。床面を長径60×短径50cm、深さ12cmの楕円形状に掘り窪めた炉である。炉壁面はあまり焼けていないが、焼土や炭化物の混じった褐色土が堆積している。

柱 穴 住居外形の対角線上に4本検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居外形と相似形を呈し、その距離はP₁~P₂:2.1m、P₂~P₃:1.6m、P₃~P₄:1.9m、P₄~P₁:1.7mである。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:26×35cm、P₂:30×29cm、

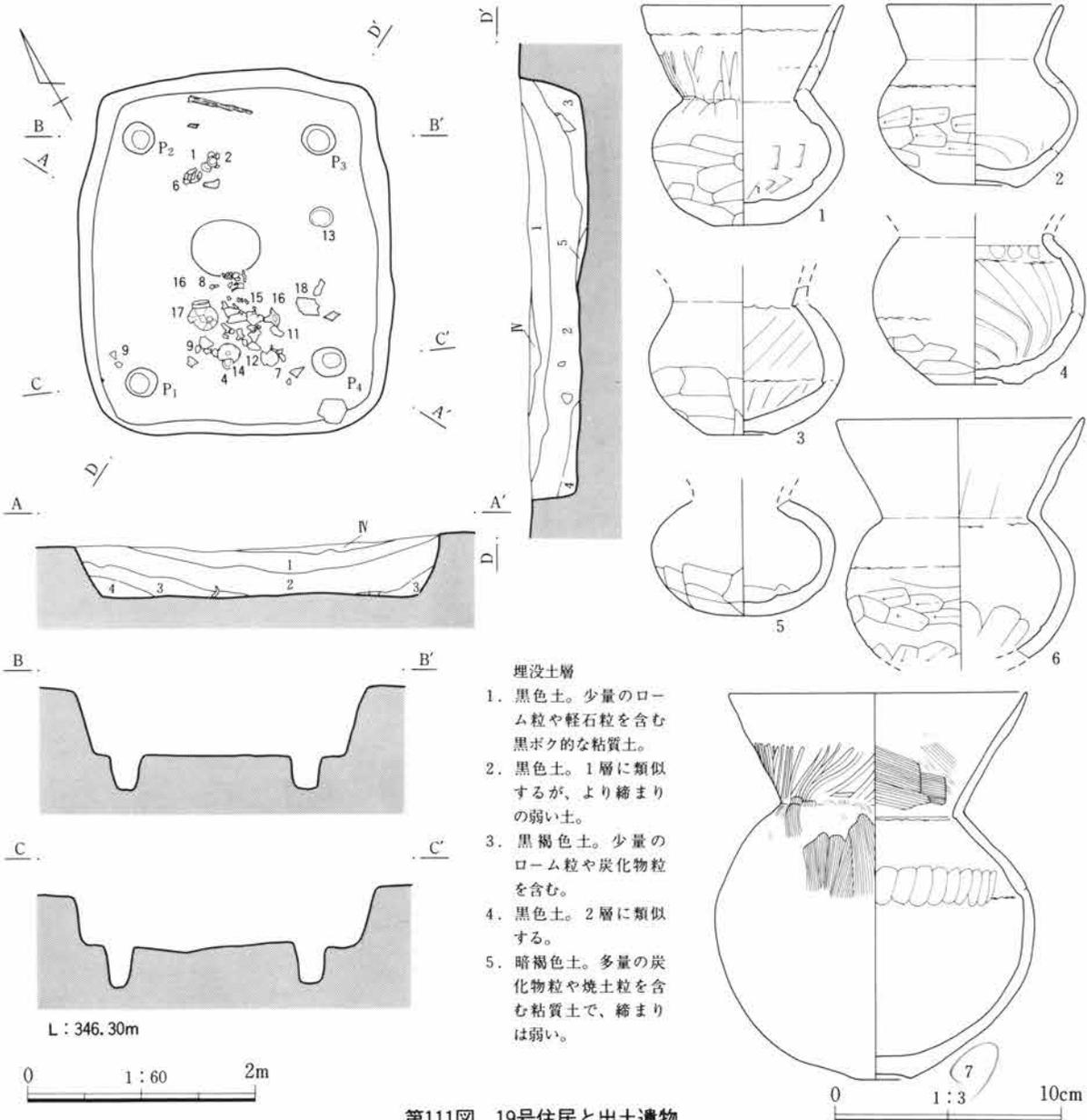
P₃:28×26cm、P₄:30×32cmである。

周 溝 検出されなかった。

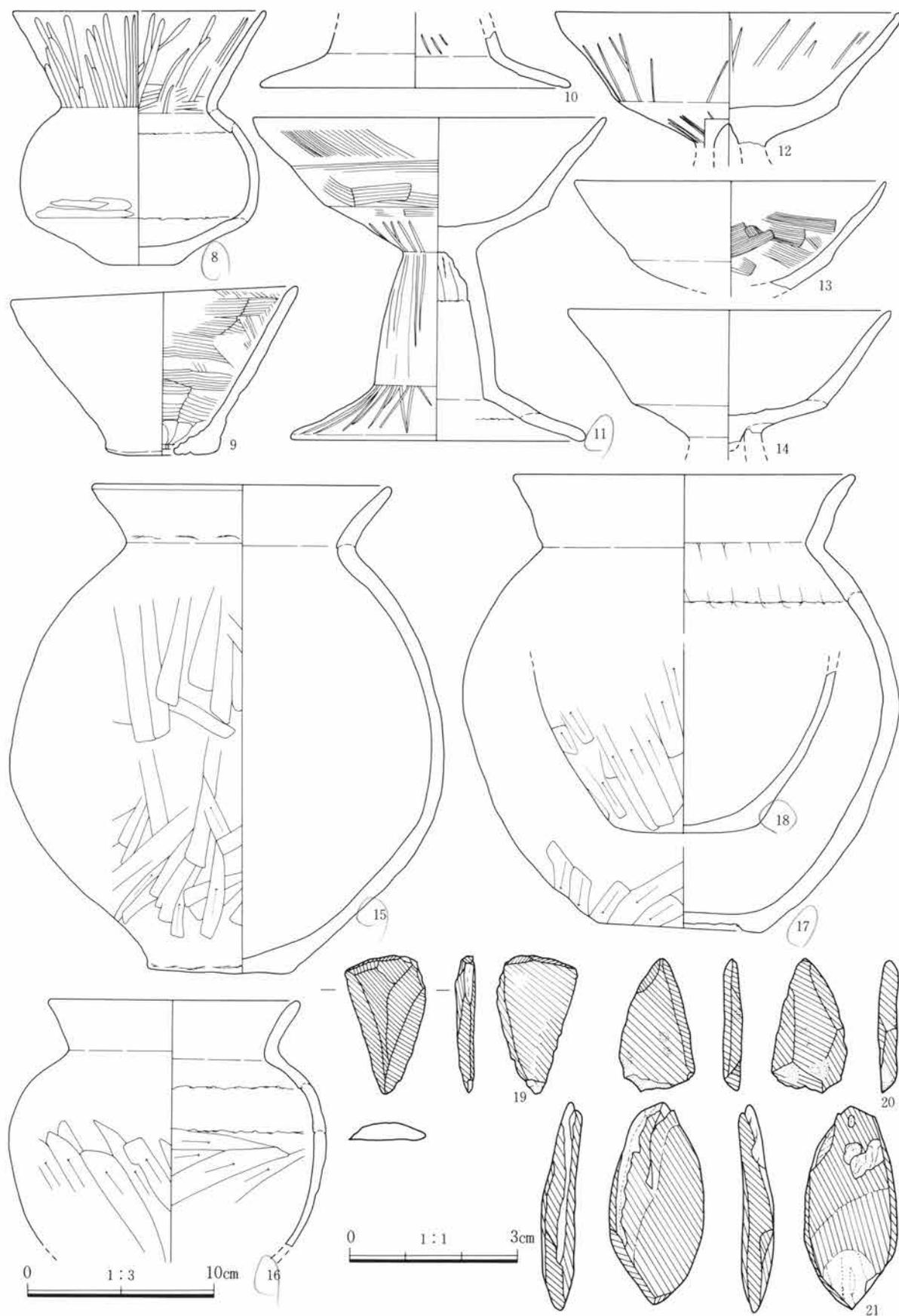
遺 物 床面に密着して甕4点、高坏1点、埴2点、が出土した。出土位置は炉の南側を中心とするが、床面よりも若干浮いていたものもこの地点を中心に出土している。埋没土中からは小型粗製土器7点、高坏7点、埴19点、甕1点が出土している。また、北壁際に炭化材が2点検出された。

(遺物観察表:158頁)

備 考 埋没土下位層中の炭化物・焼土粒や炭化材の出土状況からみて、焼失家屋と判断される。



Ⅲ. 古墳時代以降の遺構と遺物



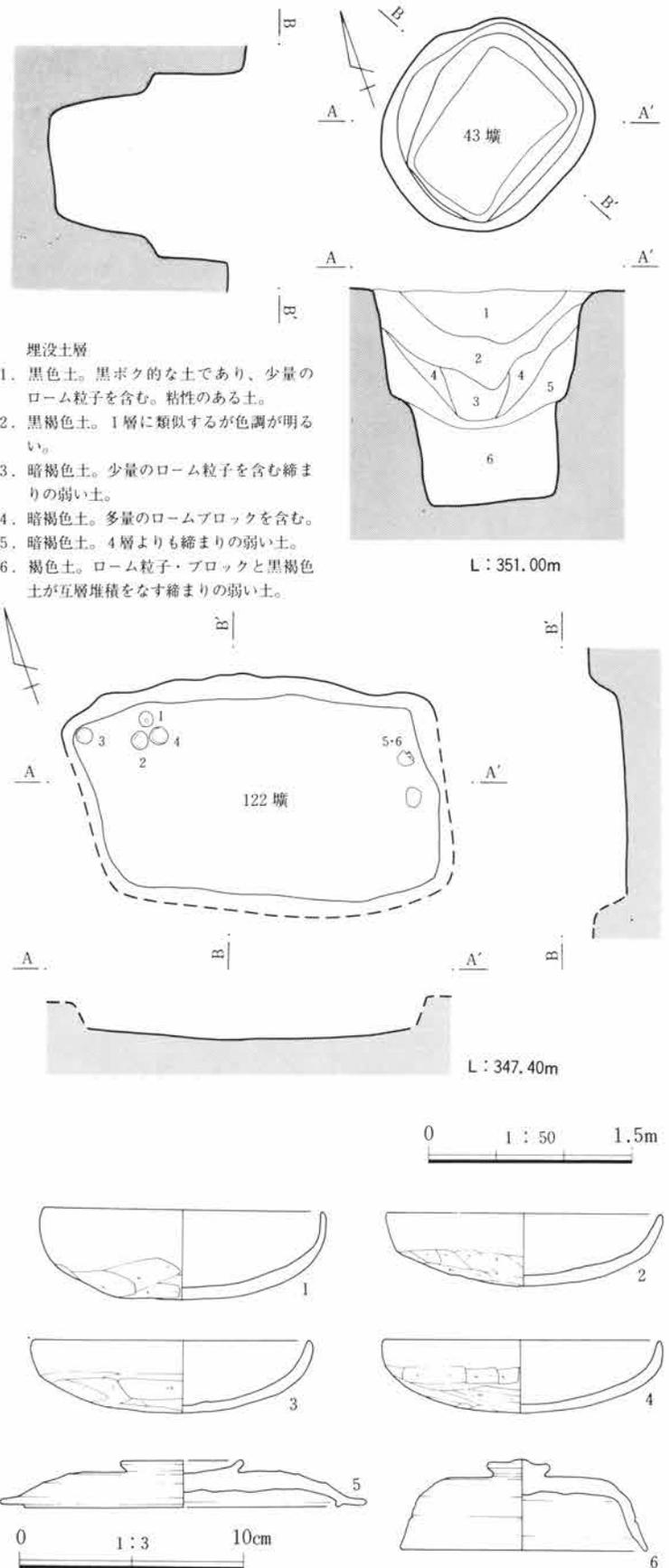
第112図 19号住居出土遺物

4. 土 壙

古墳時代以降に属すると考えられる土壙は、43号土壙と122号土壙の2基が存在する。43号土壙は伴出遺物が無く、時期を特定することができないが、土壙内の埋没土が15～19号住居のそれと類似している点でこれらの住居と近接した時期に位置すると思われる。また、122号土壙は8世紀代の土師器や須恵器を伴出しており、当該期に位置付けられる。

43号土壙 84A11グリッドに位置している。確認面はⅥ層上面である。平面形状は開口部が隅丸方形で、底面が長方形を呈する。壁面は垂直に近い勾配をもち、底面から約70cmの位置に段を形成して2段の掘り込みとなる。規模は開口部が1.6×1.4m、底面が1.1×0.7mで、深さが1.3mとなる。埋没土は上半部の1～5層に黒褐色土を主体とした土がレンズ状に自然堆積しているが、その下位の6層にはロームと褐色土が互層をなして堆積し、人為的な埋没状態を示している。

122号土壙 Ⅱ層のF Pを排土中に検出されたものであり、18号住居の埋没土上層に堆積したF Pを掘り込んでいる。平面形状は長方形を呈する。規模は2.8×1.6mであり、残存壁高は20cmを測るが、層厚約1mのF Pを掘り込んでいることから、掘削深度は1.2m以上となろう。埋没土はF Pを多量に含んだ黒色土である。出土遺物は8世紀後半に比定される土師器の坏4個と須恵器の坏蓋2個および径15cmの河床礫1個が底面に密着して出土した。No. 6の上位よりNo. 5が入れ子の状態で出土。底面のほぼ全面よりヨシ属の炭化物が多量に出土しており、火を焚いたことが想定される。（遺物観察表：159頁）



5. 炭焼窯址

Z調査区の西端、96Z48グリッドに位置している。Z調査区の地目は畑地であったが、地表面の観察からは本炭焼窯の存在を確認することができず、表土およびⅡ層のF Pを大型重機(パワーショベル)によって掘削・排土している段階で確認された。掘り込み面は把握できなかったが、Ⅱ層からⅤ層上面まで掘り下げ、輝石安山岩の亜角礫を用材として乱石積みにし燃焼部を構築している。残存状態が悪く詳細な規模は不明確であるが、燃焼部はおよそ幅2 m、奥行3 m前後であり、焚き口は南側に位置する。底面は偏平な輝石安山岩を用いてほぼ平坦に敷きつめている。奥壁部中央下位の底面と接する位置に、長さ40×高さ15 cmの石組みによる方形の煙道があり、約45度の角度で立ち上がっている。確認し得た煙道の長さは約80 cmである。壁面および底面には最大長約1 m弱の用石を配置し、各用石の間隙に小礫を充填している。用石の裏込めにはF Pの軽石粒を使用している。構築年代については確定できないが、焚き口の付近より寛保元年(1741)铸造の寛永通寶が出土しており、少なくとも当該期以降に位置付

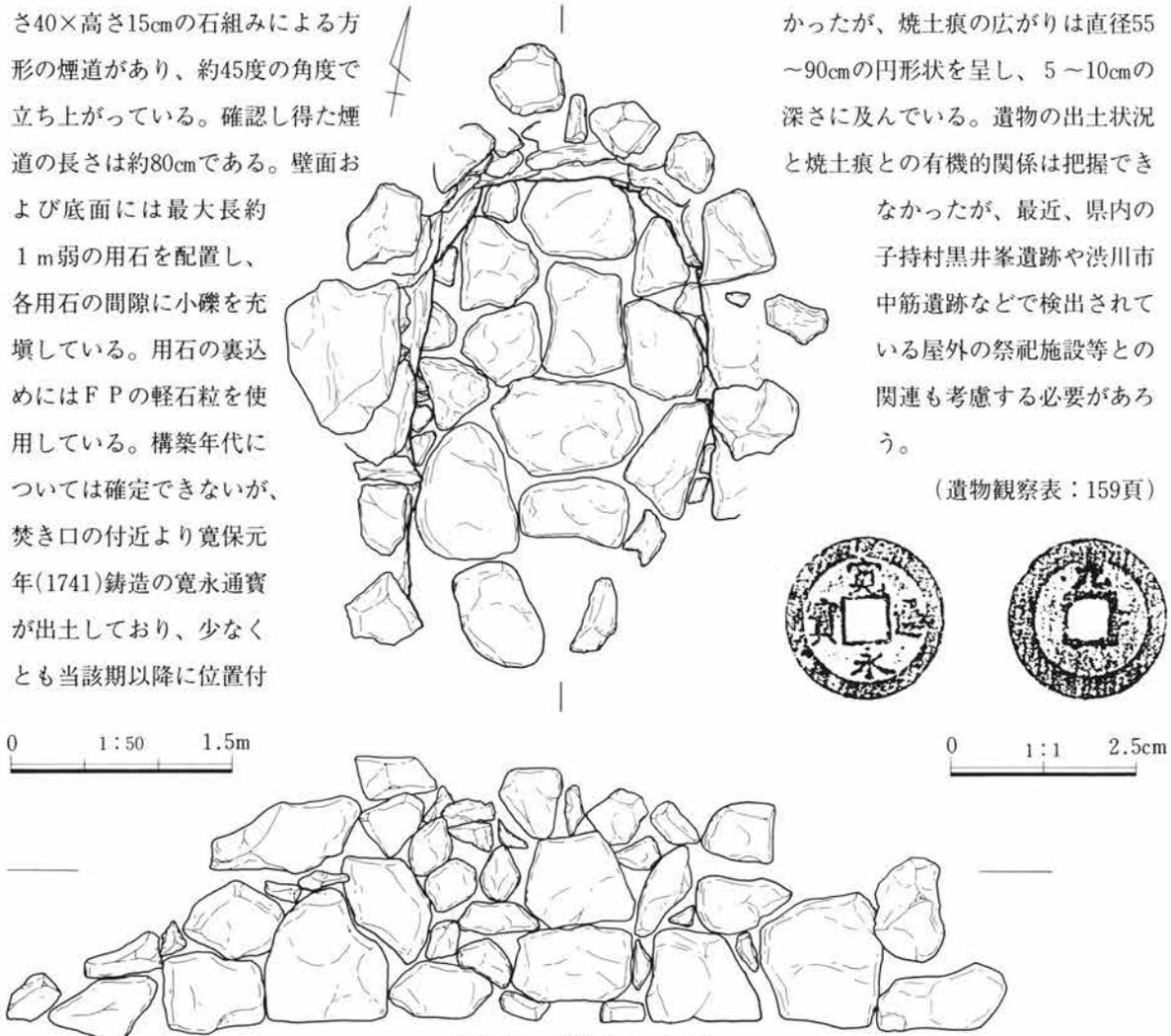
けられよう。

(遺物観察表：159頁)

6. 包含層の出土遺物

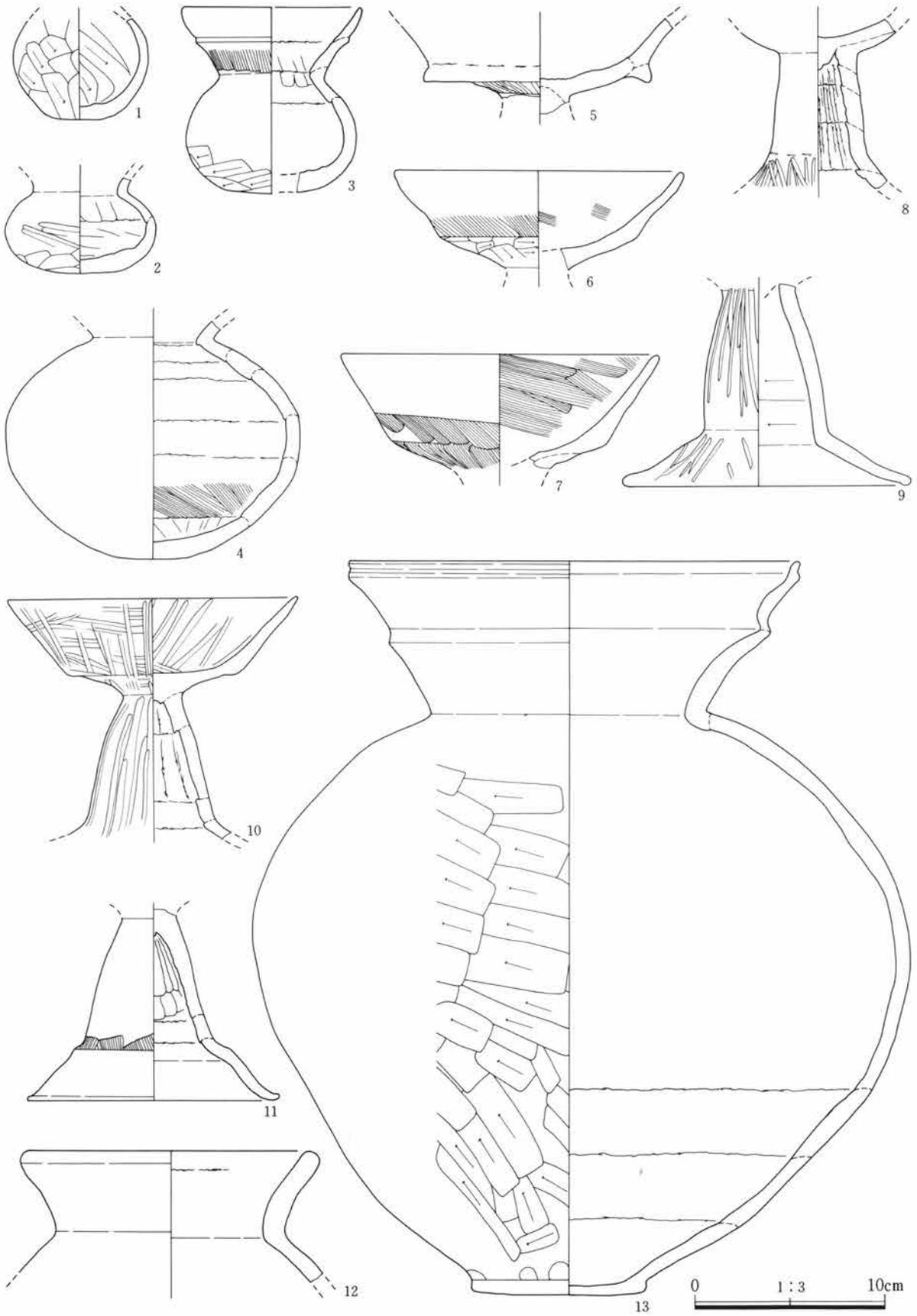
竪穴住居や土壙などの遺構以外から出土した遺物としては、土師器や滑石製模造品、鉄器などがある。これらの遺物は時期的にみて、15～19号住居出土の遺物と同一であり、しかもその出土層位や位置がこれらの住居の掘り込み面のⅤ層であることやそれに近接したZ調査区の71～80A00～01を中心として出土していることから、竪穴住居と密接な関係をもつと考えられる。また、これらの遺物とともに18号住居の北西側3～5 mの位置に火を焚いた痕跡が2箇所確認されている。明瞭な掘り込みは確認できなかったが、焼土痕の広がり直径55～90 cmの円形状を呈し、5～10 cmの深さに及んでいる。遺物の出土状況と焼土痕との有機的関係は把握できなかったが、最近、県内の子持村黒井峯遺跡や渋川市中筋遺跡などで検出されている屋外の祭祀施設等との関連も考慮する必要がある。

(遺物観察表：159頁)



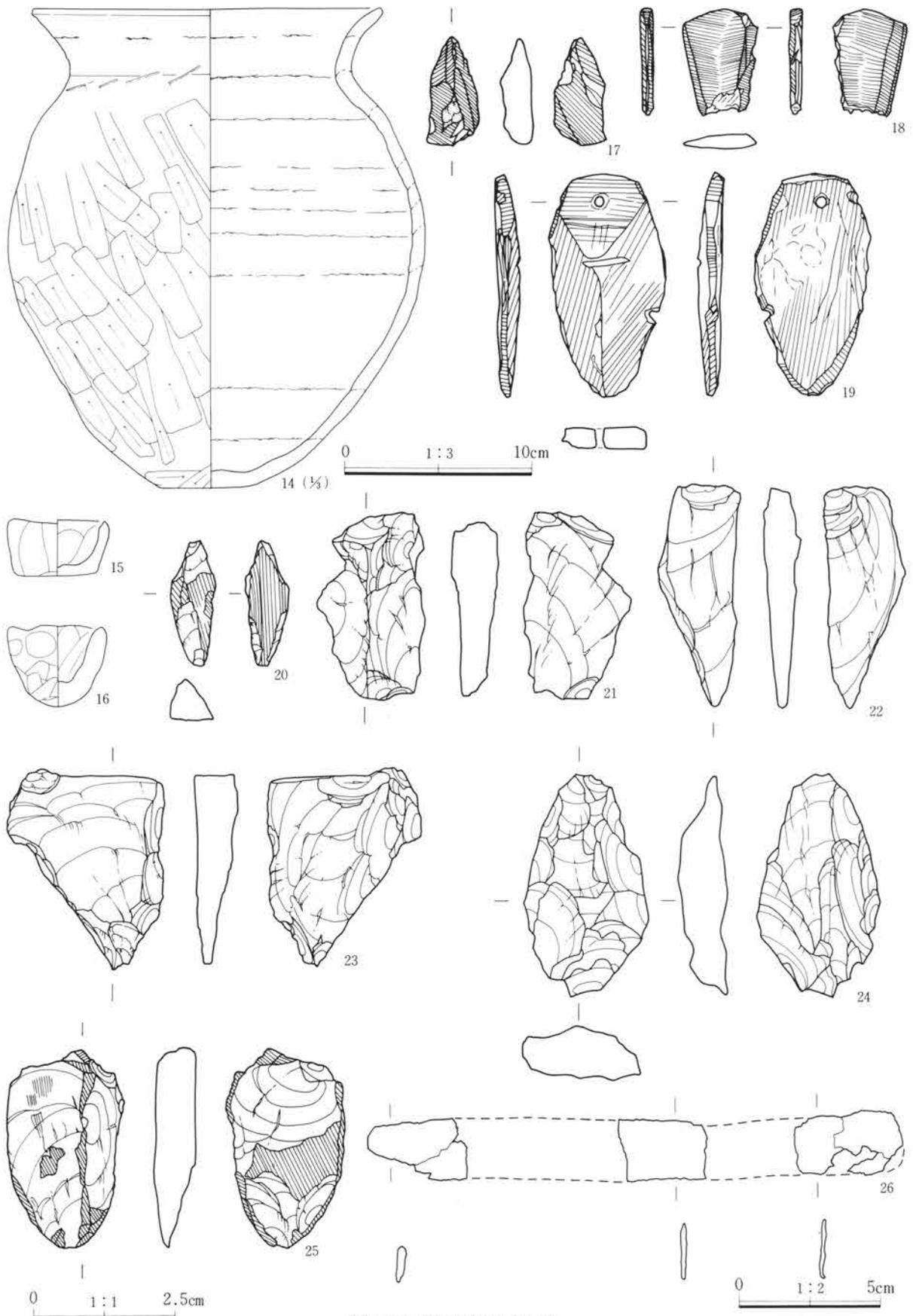
第114図 炭焼窯と出土遺物

6. 包含層の出土遺物

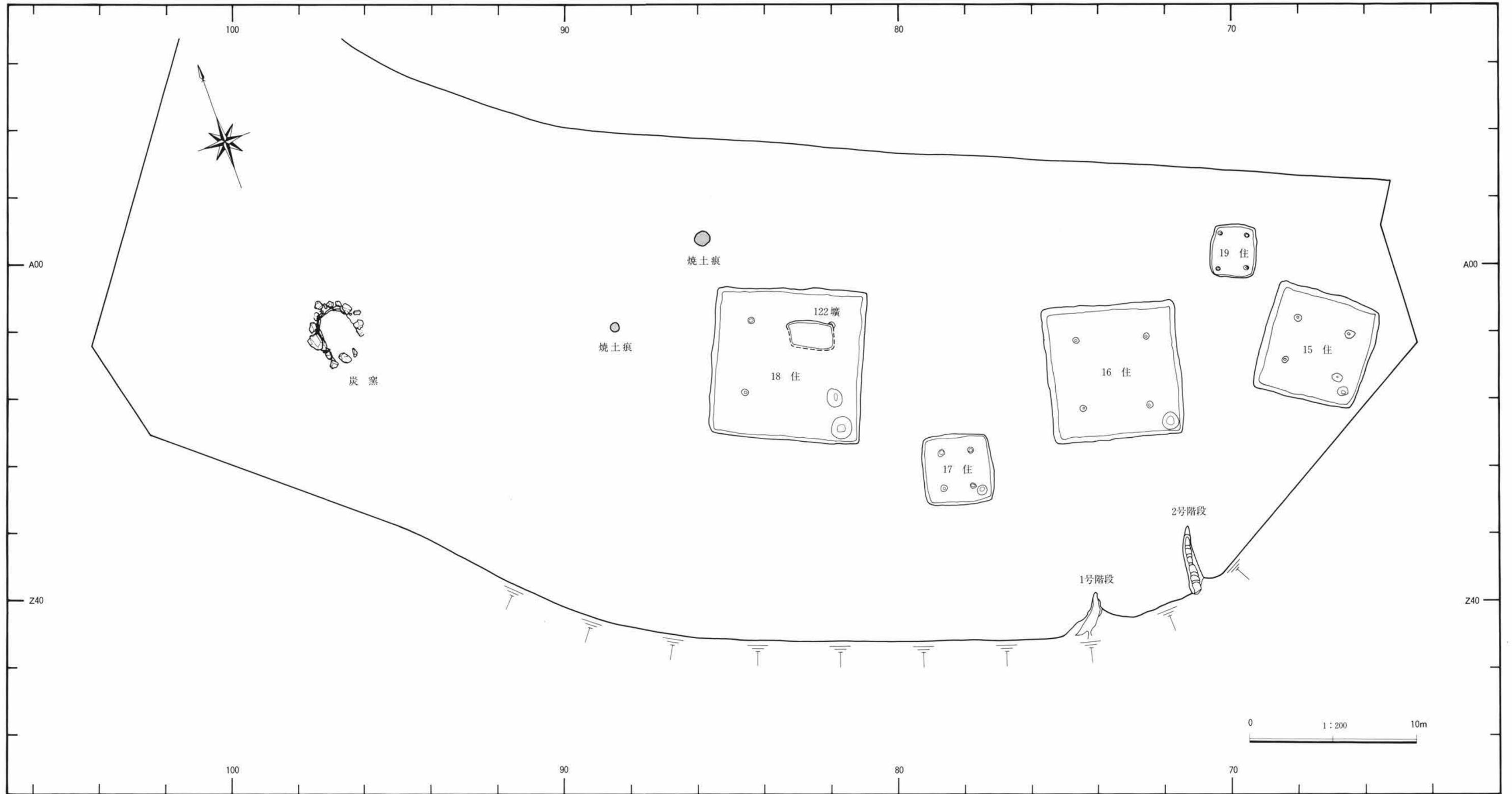


第115図 包含層出土の遺物

Ⅲ. 古墳時代以降の遺構と遺物



第116図 包含層出土の遺物



第117図 古墳時代以降の遺構の位置

6. 包含層の出土遺物

15号住居出土遺物 (第97図、PL43)

土 器

(単位:cm)

番号	大きさ	出土状態	①胎土②焼成③色④残存	器形の特徴	成・整形技法	備考
1 坏	口 (10.8) 底 4.2 高 5.1	床面直上	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③暗赤褐色 ④½欠損	平底、僅かに外反する口縁部	外面 体部縦位斲研磨、口縁部横撫で。 内面 体部斜縦位斲研磨。	
2 罎	口 9.8 底 4.0 高 8.2	〃	①細砂粒・石英②酸化・普通③鈍い橙色④完形	厚い底部、直線的に外反する頸部、平底	外面 体部下位∟斲削り、同中・上位撫で 頸部横撫で。 内面 底面指撫で、体部撫で頸部横撫で。	内面に煤状の付着物
3 罎	口 9.0 底 2.5 高 7.8	〃	①白色粗砂粒・石英②酸化・普通③鈍い褐色④完形	内彎気味の口縁部	外面 体部下位斲削り、同中・上位から頸部撫で、口縁部横撫で。 内面 体部指撫で、頸部横撫で。	内外面に煤状の付着物
4 罎	口 9.8 底 4.0 高 8.5	〃	①白色細・粗砂粒②酸化・良好③明赤褐色④完形	内彎気味の口縁部	外面 体部下位∟斲削り後撫で、同中・上位撫で、頸部横撫で。 内面 底面指撫で 体部撫で 頸部横撫で。	内外面に煤状の付着物
5 罎	口 8.8 底 2.0 高 9.5	〃	①白色細・粗砂粒②酸化・良好③鈍い赤褐色④完形	内彎気味の口縁部	外面 体部下位∟斲削り後撫で、同中・上位撫で、頸部横撫で。 内面 底面指撫で 体部撫で 頸部横撫で。	
6 罎	口 (12.6) 底 --	埋没土中	①白色細・粗砂粒②酸化・普通③鈍い赤褐色		外面 体部斲研磨、口縁部横撫で。 内面 斜縦位指撫で、口縁部横撫で。	④体部上半½残存
7 罎	口 (11.0) 底 --	〃	①白色細・粗砂粒②酸化・普通③鈍い赤褐色		内外面 横撫で。	④頸部½残存
8 高坏	口 -- 底 14.4	床面直上	①白色細・粗砂粒②酸化・普通③橙色④坏部欠損		外面 裾部横撫で、脚部縦位斲研磨。 内面 裾部横撫で、脚部未調整。	脚部に輪積痕
9 高坏	口 -- 底 --	〃	①白色細・粗砂粒②酸化・普通③鈍い橙色	体部と口縁部の境に段差	外面 体部撫で、口縁部横撫で。 内面 横撫で。	内面僅かに摩滅 ④坏部下半残存
10 高坏	口 16.8 底 --	〃	①白色粗砂粒・石英②酸化・普通③橙色		外面 体部斜縦位斲研磨、口縁部横撫で。 内面 口縁部横撫で。	内面底部が摩滅 ④脚部欠損
11 高坏	口 -- 底 (14.8)	+ 5.0	①粗砂粒・白色粗砂粒②酸化・普通③鈍い赤褐色		内外面 横撫で。	外面に輪積痕 ④裾部のみ残存
12 脚付罎	口 -- 底 --	+ 4.0	①白色細・粗砂粒・石英②酸化・普通③橙色		外面 斜縦位斲撫で。 内面 斲撫で。	④体部残存
13 甕	口 -- 底 6.5	床面直上	①白色細・粗砂粒②酸化・普通③黒褐色		外面 胴部下位斜横位斲撫で、同中・上位斜縦位斲撫で。内面 撫で。	④口縁部欠損
14 甕	口 16.0 底 --	〃	①細・粗砂粒・石英②酸化・普通③鈍い橙色		外面 口縁部横撫で。内面 胴部斜縦位斲撫で後撫で、口縁部横撫で。	④口縁部½残存
15 甕	口 -- 底 3.8	埋没土中	①粗砂粒・礫粒②酸化・普通③鈍い橙色	僅かな窪み底	外面 斜縦位斲撫で。 内面 横位斲撫で。	④胴部下位残存
16 甕	口 (16.5) 底 --	床面直上	①粗砂粒・礫粒・石英②酸化・普通③鈍い赤褐色		外面 胴部から口縁部斜縦位斲撫で。 内面 胴部から口縁部横位斲撫で。	④胴部下半欠損

鉄 製 品

番号	器 種	寸法・重量	出土状態	摘 要
17	刀 子		床面直上	角背・平造の刀身をもつ。茎には径 4mmの目釘穴が1箇所穿たれている。

16号住居出土遺物 (第99・100図、PL43・44)

土 器

(単位:cm)

番号	大きさ	出土状態	①胎土②焼成③色④残存	器形の特徴	成・整形技法	備考
1 坏	口 14.0	+15.0	①白色細・粗砂粒②酸化・良好③赤褐色	短く外反して立ち上がる口縁部	外面 体部横位斲削り、口縁部横撫で。 内面 体部放射状斲研磨、口縁部横撫で。	④底部欠損
2 罎	口 (8.1) 高 8.3	床面直上	①白色細・粗砂粒・礫粒②酸化・普通③鈍い黄橙色④口縁部一部残存	丸底	外面 体部縦位斲研磨、頸部横撫で。 内面 体部斜縦位指撫で、頸部横撫で。	
3 罎	口 15.1 底 3.0 高 13.6	〃	①白色細・粗砂粒・黒雲母②酸化・普通③明赤褐色④体部一部欠損	直線的に開く頸部	外面 体部撫で、頸部↑斲撫で、口縁部横撫で。内面 底面斲撫で、体部撫で、頸部斜横位斲撫で、口縁部横撫で。	底部は削り残した程度の段差
4 高坏	口 -- 底 --	埋没土中	①白色細・粗砂粒②酸化・普通③鈍い赤褐色	外反気味の口縁部	外面 斜縦位斲撫で。 内面 斜横位斲撫で。	④坏部下半½残存

Ⅲ. 古墳時代以降の遺構と遺物

番号	大きさ	出土位置	①胎土②焼成③色④残存	器形の特徴	成・整形技法	備考
5 高坏	口 16.7 底 -- 高 --	床面直上	①粗砂粒・石英②酸化・普通③橙色④裾部欠損	直線的に高い口縁部、短い脚部	外面 脚部撫で、口縁部下・中位斜縦位篋撫で同上位横撫で。内面 脚部一箇削り口縁部下・中位斜横位篋撫で同上位横撫で。	
6 高坏	口 16.6 底 (12.8) 高 14.0	〃	①白色細・粗砂粒②酸化・不良③鈍い橙色④裾部欠損	短い脚部、括れた脚部上端	外面 裾部横撫で、脚部撫で、体部から口縁部中位縦位篋撫で、口縁部横撫で。内面 裾部横撫で、脚部横位篋削り、口縁部下・中位斜横位篋撫で、同上位横撫で。	坏部底面摩滅
7 高坏	口 17.3 底 --	埋没土中	①白色細・粗砂粒・石英②酸化・普通③鈍い橙色	外反する口縁部	外面 体部から口縁部下位縦位篋撫で、同中・上位横撫で。内面 口縁部横撫で。	④脚部欠損
8 高坏	口 16.2 底 -- 高 --	床面直上	①白色細・粗砂粒②酸化・普通③鈍い黄橙色④坏部欠残存	外反気味の口縁部	外面 体部から口縁部中位縦位篋撫で、口縁部横撫で。内面 口縁部下・中位斜横位篋撫で、同上位横撫で。	
9 高坏	口 -- 底 --	+18.0	①白色細・粗砂粒・礫粒②酸化・普通③鈍い橙色	直線的に開く脚部	外面 縦位篋研磨。 内面 縦位指撫で。	④脚部残存
10 高坏	口 16.0 底 (12.4) 高 15.5	床面直上	①白色細・粗砂粒・礫粒②酸化・不良③鈍い橙色④裾部欠損	ラッパ状に開く脚部、内彎気味の坏部	外面 裾部横撫で脚部撫で、坏部下・中位縦位篋撫で、口縁部横撫で。内面 裾部横撫で脚部縦位指撫で、口縁部横位篋撫で。	
11 脚付埴	口 15.8 底 11.8 高 18.6	〃	①白色細・粗砂粒・石英②酸化・良好③明赤褐色④完形	直線的に開く脚部	外面 脚部撫で、体部下半斜縦位篋撫で、同上半横位篋撫で後撫で、口縁部横撫で。内面 脚部横位篋撫で後横撫で、体部横位篋撫で後撫で、口縁部横撫で。	
12 小型甕	口 10.0 底 --	〃	①白色細・粗砂粒②酸化・普通③鈍い橙色		外面 胴部撫で、口縁部横撫で。 内面 胴部へ篋撫で、口縁部横撫で。	④胴部下半欠損
13 甕	口 14.4 底 6.6 高 15.6	〃	①白色細・粗砂粒・黒雲母②酸化・普通③明赤褐色④完形	外彎気味の口縁部	外面 胴部下半縦位篋撫で後撫で、同上半撫で、口縁部横撫で。内面 胴部下位斜縦位篋研磨、同中・上位斜横位篋撫で後撫で口縁部横撫で。	胴部上位から口縁部の一部煤付着。
14 壺	口 20.4 底 8.5 高 29.7	〃	①細・粗砂粒・礫粒・石英②酸化・普通③鈍い褐色④完形	口縁部上位に段差	外面 胴部斜縦位篋削り、口縁部横撫で。 内面 胴部横位篋撫で、口縁部横撫で。	
15 甕	口 16.6 底 7.4 高 25.6	〃	①細・粗砂粒・礫粒・石英②酸化・普通③明赤褐色④完形	直立気味の口縁部上端	外面 胴部斜横位篋削り、口縁部横撫で。 内面 胴部横位篋撫で、口縁部横撫で。	胴部外面下半煤付着。
16 甕	口 -- 底 6.6	〃	①細・粗砂粒・礫粒・石英②酸化・普通③赤色④胴部下半残存	突出した底部	外面 胴部下位斜縦位篋研磨、同中位撫で 内面 胴部下位篋撫で後撫で、同中位横位篋撫で。	
17 甕	口 17.2 底 6.6 高 25.5	〃	①白色細・粗砂粒・礫粒②酸化・普通③鈍い赤褐色④完形		外面 胴部下位へ篋削り、同中位横位篋撫で、同上位斜縦位篋撫で、口縁部横撫で。 内面 胴部下位撫で、同中・上位斜縦位篋撫で、口縁部横撫で。	胴部下位に接合痕
18 小型粗製土器	口 4.5 底 4.2 高 3.1	〃	①白色細・粗砂粒②酸化・普通③鈍い赤褐色④完形		外面 底面から体部撫で。 内面 指撫で。	手握ね
19 小型粗製土器	口 4.0 底 3.5 高 3.0	〃	①粗砂粒②酸化・普通③鈍い橙色④完形		外面 底部から体部撫で。 内面 指撫で。	手握ね
20 小型粗製土器	口 4.3 底 3.0 高 2.4	埋没土中	①白色細・粗砂粒②酸化・普通③鈍い赤褐色④完形		内外面 撫で。	手握ね
21 小型粗製土器	口 3.8 高 3.2	床面直上	①白色細・粗砂粒②酸化・普通③鈍い赤褐色	丸底	内外面 撫で。	手握ね ④完形

石 器

(単位：cm, g)

番号	器種	大きさ・重量	出土状態	石質	形状・調整加工の特徴
22	紡錘車	上面径 2.6 厚 1.5 下面径 4.3 重 37.1	+ 9.0	滑石	器面に条線状の整形痕が残る。上面や下面の縁辺部7箇所刻目状の削痕が認められる。中央の孔は上面から下面への片面穿孔で、直径 7mm。

6. 包含層の出土遺物

17号住居出土遺物 (第102図、PL45)

土 器

(単位:cm)

番号	大きさ	出土状態	①胎土②焼成③色④残存	器形の特徴	成・整形技法	備考
1 罎	口 -- 底 --	床面直上	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③鈍い赤褐色	底部外面窪み底	内外面 篋撫で。	全体に粗雑 ④頸部欠損
2 高坏	口 16.4 底 --	+ 4.0	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③鈍い橙色	外反気味の口縁部	内外面 横撫で。	内面摩滅 ④脚部欠損
3 高坏	口 19.2 底 -- 高 --	床面直上	①白色細・粗・礫粒②酸化・普通③鈍い橙色④坏部欠残存	内彎気味の口縁部	外面 体部から口縁部下位縦位篋撫で、口縁部中位撫で、同上位横撫で。内面 底面から口縁部中位撫で、同上位横撫で。	内外面に煤付着
4 高坏	口 -- 底 12.6	々	①細砂粒・石英②酸化・普通③鈍い橙色		外面 裾部横撫で、脚部縦位篋撫で。 内面 裾部横撫で、脚部横位篋撫で。	脚部下半と輪積痕 ④脚部欠損
5 罎	口 12.0 高 8.5	々	①白色細・粗砂粒・礫粒・石英②酸化・普通③赤色④完形	丸底	外面 体部下位篋削り、同中位撫で、同上位↓篋撫で、頸部横撫で。 内面 体部剥離のため不明、頸部横撫で。	
6 罎	口 (7.8) 底 3.4 高 8.4	々	①白色細・粗砂粒②酸化・普通③橙色④欠損	底部外面僅かな窪み底	外面 体部下位篋削り、同中・上位撫で、頸部横撫で。 内面 体部指撫で、頸部横撫で。	体部外面輪積痕
7 罎	口 -- 底 --	埋没土中	①白色細・粗砂粒②酸化・普通③鈍い赤褐色		外面 体部下位篋削り、同中・上位撫で。 内面 撫で。	④頸部、体部下位欠損
8 甕	口 19.0 底 4.8 高 21.2	床面直上	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③明赤褐色 ④完形	稜線をもつ胴部下位、上げ底気味の底部外面	外面 胴部斜縦位篋撫で、口縁部横撫で。 内面 胴部斜縦位篋撫で、口縁部横撫で。	胴部内面上位に輪積痕

18号住居出土遺物 (第104~110図、PL45~50)

土 器

(単位:cm)

番号	大きさ	出土状態	①胎土②焼成③色④残存	器形の特徴	成・整形技法	備考
1 罎	口 10.0 底 2.8 高 6.4	床面直上	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③鈍い橙色 ④頸部欠損	平底	外面 体部下位篋撫で、同中・上位横位篋撫で後撫で、頸部横撫で。内面 底面篋撫で後撫で、体部撫で、頸部横撫で。	
2 罎	口 10.9 高 7.0	貯蔵穴・床面直上	①白色細・粗砂粒・礫粒・石英②酸化・普通③明赤褐色④体部欠損	丸底	外面 体部下位←篋削り、同中・上位横位篋研磨、頸部横撫で。内面 体部撫で、頸部横撫で後縦位篋研磨。	
3 短頸罎	口 11.2 底 2.0 高 7.8	床面直上	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③橙色④完形	窪み底	外面 体部下位←篋削り、同中・上位撫で、頸部横撫で。 内面 体部篋撫で後撫で、頸部横撫で。	
4 鉢	口 (9.0) 底 4.7 高 4.7	埋没土中	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③橙色④胴部欠損	平底	外面 底部から胴部撫で、口縁部横撫で。 内面 篋撫で後撫で。	
5 鉢	口 13.6 底 5.0 高 7.7	床面直上	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③鈍い橙色 ④口縁部欠損	窪み底	外面 胴部撫で、口縁部に強い篋当て痕。 内面 撫で。	口縁部の輪積痕は顕著
6 坏	口 (12.1) 底 6.0 高 4.0	埋没土中	①白色細・粗砂粒・礫粒・石英②酸化・普通③鈍い橙色④体部欠損	平底、内彎気味の口縁部	外面 底部から体部撫で、口縁部横撫で。 内面 撫で。	内面摩滅
7 罎	口 8.6 底 4.0 高 5.9	床面直上	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③鈍い褐色 ④完形	平底、短い頸部	外面 体部下半篋削り後撫で、同上位撫で頸部横撫で。 内面 体部篋撫で後撫で、頸部横撫で。	
8 罎	口 8.2 高 7.5	貯蔵穴内	①白色細・粗砂粒・黒雲母②酸化・普通③鈍い橙色④完形	丸底、短い頸部	外面 体部下位篋削り、同中・上位撫で、頸部横撫で。 内面 底面指撫で、体部撫で頸部横撫で。	
9 罎	口 8.0 底 3.0 高 7.6	床面直上	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③橙色④頸部欠損	僅かな窪み底、短い頸部	外面 体部下半斜縦位篋撫で、同上半撫で頸部横撫で。 内面 体部撫で、頸部横撫で。	体部内面中位輪積痕。
10 罎	口 7.7 底 4.5 高 7.5	+ 9.0	①白色細・粗砂粒・黒雲母②酸化・普通③鈍い橙色④完形	平底、内彎気味の口縁部上端	外面 体部撫で、頸部縦位篋撫で、口縁部横撫で。内面 底面指撫で、体部撫で、頸部篋撫で後横撫で。	
11 罎	口 7.2 底 3.0 高 8.2	埋没土中	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・不良③鈍い黄橙色④完形	平底	外面 体部下半←篋削り、同上半撫で、頸部縦位篋撫で後撫で、口縁部横撫で。 内面 底面指撫で 体部撫で 頸部篋撫で。	

Ⅲ. 古墳時代以降の遺構と遺物

番号	大きさ	出土状態	①胎土②焼成③色④残存	器形の特徴	成・整形技法	備考
12 埴 高	口 6.5 底 3.3 高 8.3	床面直上	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③鈍い橙色 ④完形	平底	外面 体部撫で後撫で、頸部斜縦位 撫で後撫で、口縁部横撫で。内面 底面指撫 で、体部撫で、頸部横撫で後撫で。	全体に粗雑
13 埴 高	口 7.0 底 2.5 高 7.6	〃	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③鈍い橙色 ④完形	平底	外面 体部下横位筋削り、同上半撫で、 頸部斜縦位筋撫で後撫で、口縁部横撫で。 内面 底面指撫で、体部撫で、頸部横位筋 撫で後撫で。	
14 埴 高	口 7.5 底 4.0 高 8.2	〃	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③鈍い橙色 ④完形	平底	外面 体部撫で、頸部斜縦位筋撫で後撫で 口縁部横撫で。 内面 底面指撫で、頸部横位筋撫で。	全体に粗雑
15 埴 高	口 9.0 底 3.2 高 6.9	柱穴内	①白色細・粗砂粒・黒雲 母②酸化・普通③鈍い赤 褐色④頸部欠損	僅かな窪み底、短 い頸部	外面 体部下・中位横位筋削り後撫で、同 上位撫で、頸部横撫で。 内面 体部指撫で、頸部横撫で。	
16 埴 高	口 7.3 底 2.1 高 7.2	+ 9.0	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③橙色④完 形	平底、彎曲する体 部上位から頸部、 短く直線的な頸部。	外面 体部下半筋削り、同上半撫で、頸 部横撫で。内面 底面指撫で、体部横位筋 撫で、頸部横撫で。	
17 埴 高	口 8.6 底 2.3 高 8.5	床面直上	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③鈍い褐色 ④完形	窪み底	外面 体部下・中位筋撫で、同上位撫で 頸部横撫で。 内面 底面指撫で、体部撫で頸部横撫で。	外面に黒斑
18 埴 高	口 8.8 底 2.6 高 8.5	〃	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③鈍い橙色 ④完形	窪み底、外反気味 の頸部上半	外面 体部下半筋削り後撫で、同上半撫で 頸部横撫で。 内面 体部内面指撫で、頸部横撫で。	
19 埴 高	口 8.6 底 4.0 高 8.6	〃	①白色細・粗砂粒・礫粒 ・石英②酸化・普通③鈍 い赤褐色④完形	平底、直線的に外 反する頸部	外面 体部撫で、頸部横撫で。 内面 底面指撫で、頸部横撫で。	体部下半の撫では 雑
20 埴 高	口 9.0 高 9.5	〃	①白色細砂粒・黒雲母② 酸化・普通③橙色④完形	丸底、長い頸部、 内彎気味の口縁部 上端	外面 体部下位筋削り、同中・上位から 頸部撫で、口縁部横撫で。 内面 底面指撫で、頸部横撫で。	
21 埴 高	口 9.6 底 3.7 高 9.5	〃	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③橙色④完 形	僅かな窪み底、内 彎気味の口縁部上 端	外面 体部下半横位筋削り、同上半撫で、 頸部撫で、口縁部横撫で。 内面 底面指撫で 体部撫で 頸部横撫で。	
22 埴 高	口 (8.6) 底 4.6 高 8.6	埋没土中	①白色細・粗砂粒・黒雲 母②酸化・普通③鈍い橙 色④欠損	窪み底、直線的に 外反する頸部	外面 体部下半筋削り、同上半縦位筋撫 で後撫で、頸部斜縦位筋撫で後撫で。内 面 体部斜縦位筋撫で後撫で 頸部横撫で。	全体に粗雑
23 埴 高	口 10.9 底 5.9 高 8.8	床面直上	①白色細・粗砂粒・黒雲 母②酸化・普通③明赤褐 色④完形	平底、外反気味の 体部下半、内彎気 味の口縁部上端	外面 体部下半縦位筋削り後撫で、同上半 撫で、頸部縦位筋撫で後撫で、口縁部横撫 頸部横撫で。	体部内面中位に顕 著な輪積痕
24 埴 高	口 8.8 底 3.7 高 9.0	〃	①白色細・粗砂粒・礫粒 ・石英②酸化・普通③鈍 い褐色④完形	平底、内彎気味の 口縁部上端	外面 体部下位筋削り、同中・上位撫で、 頸部撫で、口縁部横撫で。内面 底面指撫 で 体部筋撫で 頸部横位筋撫で後撫で。	
25 埴 高	口 9.0 底 2.8 高 8.5	〃	①白色細・粗砂粒・礫粒 ・石英②酸化・普通③鈍 い褐色④完形	平底、内彎気味の 口縁部上端	外面 体部下半筋削り、同上位撫で、頸 部斜縦位筋撫で後撫で、口縁部横撫で。 内面 底面指撫で、体部撫で、頸部横位筋 撫で後撫で。	外面に黒斑
26 埴 高	口 8.8 高 8.5	〃	①白色細・粗砂粒・礫粒 ・石英②酸化・普通③鈍 い褐色④完形	丸底、僅かに内彎 気味の口縁部上端 太い頸部	外面 体部から頸部撫で、口縁部横撫で。 内面 底面指撫で、体部撫で、頸部横位筋 撫で後撫で。	
27 埴 高	口 8.8 底 3.2 高 8.8	〃	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③明赤褐色 ④完形	窪み底、長い頸部 内彎気味の口縁部	外面 体部筋削り、頸部撫で、口縁部横 撫で。 内面 底面指撫で、頸部筋撫で後撫で。	
28 埴 高	口 9.6 底 -- 高 --	〃	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③鈍い赤褐 色④体部下欠損	下端の弱い稜線か ら直立気味の口縁 部	外面 体部撫で、頸部縦位筋撫で後撫で、 口縁部横撫で。 内面 体部撫で、頸部横撫で。	全体に煤付着
29 埴 高	口 8.9 底 5.0 高 5.5	〃	①白色細・粗砂粒・礫粒 ・石英②酸化・普通③橙 色④完形	僅かな窪み底、内 彎気味の口縁部上 端	外面 体部から頸部撫で、口縁部横撫で。 内面 体部から頸部下半撫で、頸部上半か ら口縁部横撫で。	
30 埴 高	口 (8.3) 底 3.8 高 7.0	〃	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③橙色④口 縁部欠損	平底、下端の弱い 稜線から直立気味 の口縁部	外面 体部下半横位筋削り後撫で、同上位 撫で、頸部から口縁部横撫で。内面 体部 筋撫で後撫で、頸部から口縁部横撫で。	
31 埴 高	口 9.0 底 3.9 高 9.0	〃	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③明赤褐色 ④完形	平底、内彎気味の 口縁部上端	外面 体部筋削り、頸部撫で、口縁部横 撫で。 内面 体部撫で、頸部横位筋撫で後撫で	頸部外面輪積痕

6. 包含層の出土遺物

番号	大きさ	出土状態	①胎土②焼成③色④残存	器形の特徴	成・整形技法	備考
32	口 8.4 底 4.3 高 9.5	ク	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③鈍い橙色 ④完形	僅かな窪み底、僅かに内傾する口縁部上端	外面 体部下・中位ノ鏡削り、同上位撫で 頸部撫で、口縁部横撫で。内面 底面指撫で、頸部横位鏡撫で後横撫で。	
33	口 9.5 底 (3.5) 高 9.3	ク	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③鈍い赤褐色 ④体部ノ欠損	平底、内彎気味の口縁部上端	外面 体部下ノ鏡削り、同上半撫で、頸部縦位鏡撫で後撫で、口縁部横撫で。 内面 底面指撫で、体部撫で、頸部斜縦位鏡撫で後横撫で。	
34	口 -- 底 4.0	埋没土中	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③鈍い褐色	平底	外面 体部ノ鏡削り、頸部横撫で。 内面 体部撫で、頸部横位鏡撫で後撫で。	全体に粗雑 ④頸部欠損
35	口 -- 底 3.6	床面直上	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③橙色	平底	外面 体部下位ノ鏡削り、同中・上位撫で 内面 底面指撫で、体部鏡撫で後撫で。	全体に丁寧 ④頸部欠損
36	口 -- 高 --	ク	①白色細・粗砂粒・礫粒・石英②酸化・普通	丸底	外面 体部下半鏡撫で、同上半撫で。 内面 体部撫で、頸部横撫で。	③鈍い褐色 ④体部ノ残存
37	口 -- 底 3.2	ク	①白色細・粗砂粒②酸化・普通③鈍い赤褐色	丸底	外面 体部下位ノ鏡削り、同中・上位撫で 内面 底面指撫で、体部撫で。	④体部ノ残存
38	口 -- 高 --	ク	①白色細・粗砂粒・黒雲母・石英②酸化・普通	丸底	外面 体部下位ノ鏡削り後撫で、同中・上位撫で。内面 底面指撫で、体部撫で。	③鈍い褐色 ④体部ノ残存
39	口 -- 高 --	埋没土中	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③橙色	丸底	外面 体部下半鏡削り後撫で、同上半撫で 内面 底面指撫で、体部撫で。	④頸部欠損
40	口 9.0 底 3.6 高 10.0	床面直上	①白色細・粗砂粒・黒雲母②酸化・普通③赤褐色 ④完形	平底、口縁部下位に凸帯状の段差、直立する口縁部	外面 体部下位鏡撫で、同中・上位撫で、頸部から口縁部横撫で。 内面 底面指撫で頸部から口縁部横撫で。	全体に煤付着
41	口 -- 底 3.8 高 --	埋没土中	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③橙色④口縁部欠損	平底、頸部と口縁部の境に稜線	外面 体部下位ノ鏡削り、同中・上位撫で 頸部横撫で。 内面 底面指撫で、体部撫で頸部横撫で。	
42	口 9.4 底 3.3 高 8.6	床面直上	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③鈍い褐色 ④頸部ノ欠損	平底、内彎気味の頸部	外面 体部下ノ鏡削り、同中・上位撫で 頸部横撫で。 内面 体部撫で、頸部横撫で。	体部中位に焼成後の穿孔
43	口 -- 高 --	+ 7.0	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③鈍い赤褐色 ④頸部欠損	丸底	外面 体部下位ノ鏡削り、同上半撫で。 内面 底面鏡撫で、体部撫で。	体部中位の穿孔は焼成前
44	口 12.8 底 3.6 高 15.0	床面直上	①白色細・粗砂粒・黒雲母②酸化・普通③鈍い赤褐色④完形	僅かな窪み底、内彎気味の口縁部上端	外面 体部下ノ鏡削り、同上半撫で、頸部横撫で。 内面 体部横位鏡撫で後撫で 頸部横撫で。	
45	口 12.0 底 6.0 高 15.4	ク	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③褐色④完形	平底、内彎気味の口縁部上端	外面 体部下半鏡削り後撫で、同上半撫で 頸部横撫で。 内面 体部撫で、頸部横撫で。	体部内面輪積痕
46	口 13.0 高 15.9	ク	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③鈍い赤褐色 ④完形	丸底、内彎気味の口縁部上端	外面 体部下ノ鏡削り後撫で、同上半撫で、頸部縦位鏡撫で、口縁部横撫で。 内面 体部撫で、頸部斜横位鏡撫で、口縁部横撫で。	体部内面輪積痕
47	口 13.1 高 --	+ 8.0	①白色細・粗砂粒・礫粒・石英②酸化・普通		外面 頸部縦位鏡撫で、口縁部横撫で。内面 斜横位鏡撫で後撫で、口縁部横撫で。	③明黄褐色 ④頸部のみ残存
48	口 12.0 高 14.2	床面直上	①白色細・粗砂粒・礫粒・石英②酸化・普通③鈍い褐色④完形	丸底、僅かに内彎気味の口縁部上端	外面 体部下ノ鏡削り後撫で、同上半撫で、頸部横撫で。 内面 体部撫で、頸部横撫で。	体部内面顕著な輪積痕
49	口 11.8 高 16.5	ク	①白色細・粗砂粒・黒雲母②酸化・普通③鈍い赤褐色④完形	丸底、直線的に開く口縁部上端	外面 体部下斜横位鏡撫で後撫で、同上半撫で、頸部横撫で。 内面 体部撫で、頸部横撫で。	体部内面輪積痕
50	口 18.1 底 12.6 高 15.0	ク	①白色細・粗砂粒・礫粒 ②酸化・普通③鈍い赤褐色 ④口縁部ノ欠損	外彎気味の口縁部 僅かに膨らむ脚部下位	外面 脚部撫で後縦位鏡研磨、体部鏡削り 口縁部撫で後縦位鏡研磨。 内面 脚部横撫で、坏部撫で後縦位鏡研磨	坏部内面摩滅
51	口 18.0 底 15.5 高 15.7	ク	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③赤褐色④完形	口縁部と体部の境に弱い段差、屈曲の弱い裾部	外面 脚部縦位鏡研磨、体部鏡撫で、口縁部横撫で後縦位鏡研磨。 内面 裾部横撫で、脚部ノ鏡撫で、口縁部横撫で後斜縦位鏡研磨。	脚部内面に巻き上げ痕
52	口 18.2 底 13.0 高 16.3	ク	①白色粗砂粒・石英・黒雲母②酸化・普通③明赤褐色④完形	外反気味の口縁部 膨らんだ脚部下位 括れた同上位	外面 脚部撫で後縦位鏡研磨、体部ノ鏡削り、口縁部横撫で後縦位鏡研磨。 内面 裾部横撫で、脚部ノ鏡撫で、口縁部横撫で後縦位鏡研磨。	坏内面摩滅、裾部黒斑

Ⅲ. 古墳時代以降の遺構と遺物

番号	大きさ	出土状態	①胎土②焼成③色④残存	器形の特徴	成・整形技法	備考
53 高坏	口 17.0 底 14.2 高 15.2	〃	①白色粗砂粒・石英・黒雲母②酸化・普通③鈍い橙色④完形	短い口縁部	外面 脚部縦位篋撫で、体部→篋削り後撫で、口縁部横撫で後縦位篋研磨。 内面 裾部横撫で、脚部上位縦位指撫で、坏部横撫で後縦位篋研磨。	脚部下半未調整で輪積痕をそのまま残す
54 高坏	口 17.6 底 12.1 高 15.3	〃	①白色粗砂粒・石英②酸化・普通③橙色④完形	外反気味の口縁部	外面 裾部横撫で、脚部撫で、体部→篋削り、口縁部縦位篋撫で後撫で。 内面 裾部横撫で、脚部→篋撫で、口縁部横撫で。	坏部内面摩滅
55 高坏	口 (19.8) 底 -- 高 --	〃	①白色細・粗砂粒・黒雲母②酸化・普通③明赤褐色④坏部 $\frac{1}{2}$ 残存	外反気味の口縁部 直立気味の口縁部 上端	外面 体部縦位篋撫で、口縁部下半縦位篋撫で後撫で、同上半横撫で。 内面 口縁部横撫で。	坏部内面摩滅
56 高坏	口 17.8 底 (13.0) 高 15.0	〃	①白色細・粗砂粒・石英②酸化・普通③鈍い赤褐色④裾部 $\frac{1}{2}$ 欠損	僅かに括れる脚部 上端	外面 脚部撫で、体部篋削り、口縁部横撫で。 内面 裾部横撫で、脚部撫で、口縁部横撫で。	坏部底面摩滅
57 高坏	口 18.2 底 14.7 高 16.8	〃	①白色細・粗砂粒・黒雲母②酸化・普通③鈍い橙色④完形	外反気味の口縁部 屈曲の弱い裾部	外面 裾部横撫で、脚部撫で、体部篋削り後篋撫で、口縁部下半縦位篋撫で、同上位横撫で。 内面 裾部横撫で、脚部篋撫で、坏部底面撫で、口縁部横撫で。	坏部底面が僅かに摩滅、脚部上端に絞り痕
58 高坏	口 18.8 底 15.6 高 15.4	〃	①細砂粒・粗砂粒②酸化・普通③明赤褐色④完形	外反気味の口縁部 屈曲して開く裾部	外面 裾部横撫で、脚部撫で後縦位篋研磨 体部篋削り後撫で、口縁部横撫で。 内面 裾部横撫で 脚部→篋撫で 口縁部横撫で。	坏部底面が僅かに摩滅
59 高坏	口 18.0 底 13.8 高 16.0	〃	①白色粗砂粒・礫粒・石英②酸化・普通③橙色④完形	外反気味の口縁部 高い体部	外面 裾部横撫で、脚部撫で、体部篋削り口縁部下半縦位篋撫で後撫で、同上半横撫で。 内面 裾部横撫で、脚部→篋削り、口縁部横撫で。	坏部内面摩滅、坏部に黒斑、脚部上端にホゾ
60 高坏	口 18.0 底 13.9 高 15.5	〃	①細砂粒・白色粗砂粒・黒雲母・石英②酸化・普通③橙色④完形	屈曲の弱い裾部	外面 脚部撫で後縦位篋研磨、裾部横撫で体部篋削り後撫で、口縁部横撫で。 内面 裾部横撫で、脚部下半横位撫で、同上半縦位指撫で、口縁部横撫で。	
61 高坏	口 16.6 底 13.8 高 15.2	〃	①白色細・粗砂粒・石英②酸化・普通③橙色④裾部 $\frac{1}{2}$ 欠損	外反気味の口縁部	外面 裾部横撫で、脚部撫で、体部篋削り口縁部横撫で。 内面 裾部横撫で、脚部横位篋撫で、口縁部横撫で。	坏部内面摩滅
62 高坏	口 17.5 底 12.2 高 14.9	〃	①白色粗砂粒・石英②酸化・普通③鈍い褐色④裾部 $\frac{1}{2}$ 欠損	外反気味の口縁部	外面 裾部横撫で、脚部撫で、体部篋削り後撫で、口縁部下位→篋削り、同上位横撫で。 内面 裾部横撫で、脚部横位篋撫で、坏部に横撫で。	坏部内面摩滅
63 高坏	口 16.5 底 -- 高 --	〃	①白色細・粗砂粒・黒雲母②酸化・普通③鈍い赤褐色④坏部のみ	外反気味の口縁部	外面 体部から口縁部下半縦位篋撫で後撫で、口縁部上半横撫で。 内面 口縁部横撫で。	坏部内面摩滅
64 高坏	口 17.4 底 12.8 高 14.0	〃	①白色細・粗砂粒②酸化・普通③橙色④完形	外反気味の口縁部 屈曲の弱い裾部	外面 裾部横撫で、脚部縦位篋削り後篋撫で後撫で、体部篋削り後撫で、口縁部下半撫で、同上半横撫で。 内面 裾部横撫で、脚部→篋削り、口縁部上半横撫で。	坏部内面摩滅
65 高坏	口 17.0 底 14.0 高 15.1	〃	①細砂粒・白色粗砂粒・礫粒②酸化・普通③橙色④完形	外反気味の口縁部	外面 裾部横撫で、脚部縦位篋削り後撫で体部篋削り、口縁部横撫で。 内面 裾部横撫で、脚部下半→篋撫で、同上位指撫で、口縁部横撫で。	坏部内面摩滅
66 高坏	口 17.6 底 15.0 高 15.8	〃	①白色細・粗砂粒・石英②酸化・普通③鈍い橙色④完形	外反気味の口縁部 平たい裾部	外面 裾部横撫で、脚部縦位篋撫で後撫で体部横位篋削り後篋撫で、口縁部下半縦位篋撫で、同上位横撫で。 内面 裾部横撫で脚部横位篋撫で、口縁部横撫で。	脚部上半絞り痕
67 高坏	口 17.6 底 13.5 高 16.3	〃	①白色細・粗砂粒・黒雲母②酸化・普通③鈍い橙色④完形	外反気味の口縁部 上位、屈曲の弱い裾部	外面 裾部撫で、裾端部横撫で、体部→篋削り、口縁部下半縦位篋撫で後撫で、同上位横撫で。	坏部内面摩滅
68 高坏	口 18.6 底 -- 高 --	〃	①白色細・粗砂粒・礫粒・石英②酸化・普通③赤色④坏部のみ残存	外反気味の口縁部	外面 体部篋撫で、口縁部下半→篋撫で、同上半→篋撫で後横撫で。 内面 横位篋撫で後横撫で。	
69 高坏	口 18.1 底 13.4 高 16.4	〃	①白色細・粗砂粒・石英②酸化・普通③鈍い赤褐色④完形		外面 裾部横撫で、脚部撫で、体部→篋削り 口縁部下半縦位篋撫で 同上半横撫で。 内面 裾部横撫で、脚部→篋削り、口縁部横撫で。	坏部内面摩滅

6. 包含層の出土遺物

番号	大きさ	出土位置	①胎土②焼成③色④残存	器形の特徴	成・整形技法	備考
70	口 17.8 底 12.9 高 14.1	✳	①細砂粒・白色粗砂粒・黒雲母②酸化・普通③橙色④坏部欠損		外面 脚部撫で、体部斲削り、口縁部横撫で。内面 裾部横撫で、脚部→斲撫で、口縁部横撫で。	坏部内面摩滅 脚部下半に巻上げ痕
71	口 14.2 底 (13.4) 高 12.5	✳	①白色粗砂粒・石英・黒雲母②酸化・普通③鈍い赤褐色④裾部欠損	大きく開いた脚部	外面 脚部撫で、体部↑斲撫で、口縁部横撫で。内面 脚部下半横撫で、同上半斜縦位指撫で、口縁部横撫で。	坏部内面摩滅、ホゾ
72	口 -- 底 (14.3) 高 --	✳	①白色細・粗砂粒・石英②酸化・普通③鈍い黄橙色④脚部のみ残存	僅かに括れた脚部上端	外面 裾部↓斲撫で、脚部縦位斲撫で後撫で。内面 裾部横撫で、脚部斲撫で。	外面に黒斑
73	口 10.5 底 3.0 高 9.0	✳	①白色細・粗砂粒・石英②酸化・普通③鈍い赤褐色④完形	僅かな窪み底、彎曲した体部中位	外面 体部下位斲撫で後撫で、同上半撫で頭部横撫で。内面 底面斲撫で、体部撫で頭部横撫で。	体部下位に輪積痕
74	口 (10.8) 底 -- 高 --	埋没土中	①白色細・粗砂粒・石英・黒雲母②酸化・普通③鈍い赤褐色④欠残存	中に括れをもつ頸部、直立気味の口縁部	外面 体部斜縦位斲撫で後撫で、頭部横撫で。内面 体部撫で、頭部横撫で。	
75	口 12.0 底 4.1 高 9.8	床面直上	①白色細・粗砂粒・黒雲母・石英②酸化・普通③橙色④完形	僅かな窪み底	外面 体部下位↓斲削り、同中・上位斜縦位斲撫で後撫で、頭部横撫で。内面 体部横位斲撫で後撫で頭部横撫で。	体部外面輪積痕
76	口 14.0 底 4.7 高 10.5	✳	①白色細・粗砂粒・石英②酸化・普通③橙色④体部一部欠損	平底	外面 体部撫で、頭部横撫で。内面 体部斲撫で後撫で、頭部横撫で。	
77	口 (10.5) 底 --	埋没土中	①白色細・粗砂粒・黒雲母②酸化・普通		外面 体部撫で 頭部縦位斲撫で後撫で。内面 体部撫で 頭部横位斲撫で後撫で。	③鈍い赤褐色 ④頸部欠残存
78	口 16.2 底 14.2 高 16.6	床面直上	①白色細・粗砂粒・石英②酸化・普通③明赤褐色④完形	直線的に開いた脚部	外面 脚部撫で、坏部下位↓斲撫で、同中位撫で、同上位横撫で。内面 脚部横位斲撫で後撫で、坏部下位横位斲撫で、同中位撫で、同上位横撫で。	坏部上位指頭圧痕
79	口 13.6 底 -- 高 --	✳	①細・粗砂粒・黒雲母②酸化・普通③鈍い橙色④台部下半欠損	僅かに括れた胴部上端	外面 台部から胴部縦位斲撫で後撫で、口縁部横撫で。内面 台部縦位撫で、胴部斜縦位指撫で、同上位横位斲撫で、口縁部横撫で。	胴部上位輪積痕
80	口 -- 底 5.4	埋没土中	①白色細・粗砂粒・礫粒②酸化・普通③鈍い橙色		外面 撫で。内面 底面指撫で、胴部←斲撫で。	④底部残存
81	口 -- 底 (5.8)	✳	①白色細・粗砂粒・石英・黒雲母②酸化・普通		外面 撫で。内面 斲撫で。	③鈍い赤褐色 ④底部残存
82	口 -- 底 8.0 高 --	床面直上	①白色細・粗砂粒・石英②酸化・普通③橙色④胴部下半残存	球状の胴部	外面 胴部下位↑斲撫で後撫で、同中位←斲撫で。内面 胴部下位斜縦位斲撫で後撫で、同中位横位斲撫で後撫で。	底部の突出明瞭
83	口 -- 底 6.5	埋没土中	①白色細・粗砂粒・礫粒・石英②酸化・普通	底部外面に窪み、球状の胴部	外面 斲撫で後撫で。内面 剥離が著しく不明。	③明赤褐色 ④胴部下半残存
84	口 16.0 底 7.5 高 24.2	床面直上	①白色細・粗砂粒・礫粒・石英②酸化・普通③明赤褐色④口縁部欠損		外面 胴部斲撫で、口縁部横撫で。内面 斜縦位斲撫で、口縁部横撫で。	胴部外面以上煤付着
85	口 (17.2) 底 6.7 高 22.8	✳	①白色細・粗砂粒・石英②酸化・普通③鈍い赤褐色④口縁部欠損	底部外面中央に窪み、外彎気味の口縁部	外面 胴部斜縦位斲撫で、口縁部横撫で。内面 胴部横位斲撫で後撫で、口縁部横撫で。	胴部内面輪積痕
86	口 19.8 底 6.5 高 26.5	✳	①白色細・粗砂粒・礫粒・石英②酸化・普通③鈍い赤褐色④完形	球状の胴部	外面 胴部斲撫で後撫で、口縁部横撫で。内面 胴部撫で、口縁部横撫で。	胴部内面輪積痕
87	口 17.5 高 32.2	✳	①白色細・粗砂粒・黒雲母・石英②酸化・普通③橙色④完形	丸底、長い胴部	外面 胴部下位←斲撫で、同中位✓斲撫で同上位←斲撫で、口縁部横撫で。内面 胴部横位斲撫で後撫で、口縁部横撫で。	胴部外面煤付着
88	口 17.9 底 6.8 高 29.8	✳	①白色細・粗砂粒・礫粒・石英②酸化・普通③明黄褐色④完形	球状の胴部、外彎気味の口縁部	外面 胴部下位斜縦位斲撫で、同中位斜縦位斲撫で、同上位撫で、口縁部横撫で。内面 胴部撫で、口縁部横撫で。	胴部外面煤付着

石器

(単位: cm, g)

番号	器種	大きさ・重量	出土状態	石質	形状・調整加工の特徴
89	砥石	長 29.9 幅 20.3 厚 7.0 重 7200.0	床面直上	黒色頁岩	表面の中央部に砥面があり微細な線条痕が認められる。裏面の周縁部には火熱による割れが生じている。

Ⅲ. 古墳時代以降の遺構と遺物

鉄製品

番号	器種	寸法・重量	出土状態	摘要
90	刀子		埋没土中	茎と刃部の一部残存。角背・平造の刀身と思われる。

19号住居出土遺物 (第111・112図、PL50・51)

土器

(単位: cm)

番号	大きさ	出土状態	①胎土②焼成③色④残存	器形の特徴	成・整形技法	備考
1	口 8.9 底 3.3 高 9.7	+13.0	①粗砂粒②酸化・普通③鈍い黄褐色④口縁部欠損	平底、口縁部が内彎気味	外面 体部→斲削り、頸部下半縦位斲研磨同上位横撫で。内面 底面から体部中位斲撫で、頸部から口縁部横位斲撫で後撫で。	体部外面に黒斑 口縁部に輪積痕
2	口 (7.8) 底 3.6 高 8.0	+22.0	①白色粗砂粒・黒雲母②酸化・普通③鈍い赤褐色④口縁部欠損	底部外面上げ底	外面 体部撫で、中位のみ斲削り後撫で、口縁部横撫で。内面 底面から体部中位指撫で、口縁部横撫で。	口唇部に煤付着、 体部外面上位に輪積痕
3	口 -- 底 3.0	埋没土中	①粗砂粒②酸化・普通③鈍い橙色④頸部欠損	底部外面上げ底気味	外面 体部斲削り。 内面 底部斲撫で、体部指撫で。	
4	口 -- 底 3.8	+16.0	①粗砂粒・白色粗砂粒②酸化・普通③鈍い赤褐色	底部外面上げ底	外面 体部斲削り後撫で。内面 底面から体部上位指撫で、上端に指頭圧痕。	体部外面に黒斑 ④頸部欠損
5	口 --	埋没土中	①白色粗砂粒・礫粒・黒雲母②酸化・普通	丸底	外面 体部下位斲削り、同中・上位撫で。 内面 底面指撫で、体部中位撫で。	③鈍い褐色 ④頸部欠損
6	口 11.0 底 -- 高 --	+10.0	①粗砂粒・白色粗砂粒②酸化・普通③明赤褐色④底部欠損	頸部中位で緩やかに屈曲	外面 体部中・上位→斲削り後撫で、口縁部横撫で。内面 体部下位指撫で、頸部下位横位斲撫で後撫で、同上位横撫で。	口唇部に煤付着
7	口 (13.2) 底 2.4 高 16.9	床面直上	①細砂粒・白色粗砂粒・黒雲母②酸化・普通③橙色④口縁部欠損	底部外面窪み底	外面 体部下半横位斲撫で後撫で、同上位縦位刷毛目後撫で、頸部縦位刷毛目後斜縦位斲研磨、口縁部横撫で。内面 体部刷毛目後撫で、頸部斜横位刷毛目後撫で。	全体に煤付着
8	口 (13.6) 底 4.0 高 13.4	々	①白色粗砂粒・礫粒②酸化・普通③橙色④頸部欠損	平底、内彎気味の体部下位	外面 体部下位斲削り後撫で、頸部縦位刷毛目後撫で後縦位斲研磨、口縁部横撫で後縦位斲研磨。 内面 体部斲撫で、頸部横位刷毛目後撫で後縦位斲研磨、口縁部横位斲撫で後横撫で	
9	口 (15.4) 底 6.0 高 9.0	+11.0	①細砂粒・白色粗砂粒・礫粒・黒雲母②酸化・普通③明赤褐色	直立気味に立ち上がる胴部下端	外面 縦位刷毛目後撫で。 内面 横位刷毛目、底面強い指撫で。	④口縁部欠損
10	底 (16.6)	埋没土中	①細砂粒・粗砂粒・黒雲母②酸化・普通③橙色	屈曲して開く裾部	外面 横撫で。 内面 横撫で。	④裾部のみ
11	口 19.0 底 15.8 高 17.1	床面直上	①白色細・粗砂粒・礫粒・黒雲母②酸化・良好③明赤褐色④完形	外彎気味の口縁部屈曲して開く裾部	外面 脚部撫で後縦位斲研磨、坏部刷毛目後縦位斲研磨。内面 裾部横撫で、脚部→斲削り、坏部撫で、口縁部横撫で。	脚部上端に絞り痕 坏部内面摩滅
12	口 18.5 高 --	+21.0	①細砂粒・白色粗砂粒・石英粒②酸化・良好③橙色④脚部欠損	外彎気味の口縁部	外面 体部縦位斲撫で、口縁部斜横位刷毛目後横位斲撫で後縦位斲研磨。内面 口縁部斜横位刷毛目後撫で後縦位斲研磨。	斲研磨の間隔は広い。
13	口 16.7 高 --	+6.0	①細砂粒・粗砂粒・黒雲母②酸化・普通③鈍い赤褐色④脚部欠損	体部と口縁部の境に弱い段差	外面 体部から口縁部縦位刷毛目後撫で、口縁部上位のみ横撫で。内面 斜横位刷毛目後撫で、上位のみ横撫で。	
14	口 17.3 高 --	+21.0	①細砂粒・白色粗砂粒②酸化・普通③橙色④脚部欠損	外彎気味の口縁部	外面 体部縦位刷毛目後横撫で、口縁部撫で、同上位横撫で。内面 底面から口縁部下半撫で、同上位横撫で。	ホゾ、口縁部内外面黒斑
15	口 15.8 底 7.5 高 25.8	床面直上	①白色細・粗砂粒・礫粒・石英②酸化・普通③橙色④完形	球状の胴部	外面 胴部下・中位斜縦位斲撫で後撫で、同上位撫で、口縁部横撫で。 内面 胴部撫で、口縁部横撫で。	
16	口 (13.5) 底 -- 高 --	々	①細砂粒・白色粗砂粒・礫粒・黒雲母②酸化・普通③鈍い赤褐色	球状の胴部	外面 胴部下半刷毛目状斲撫で、同上位撫で、口縁部横撫で。 内面 刷毛目状斲撫で、口縁部横撫で。	最大径は胴部上位 ④胴部下位欠損
17	口 18.2 底 8.7 高 24.3	々	①白色細・粗砂粒・礫粒・石英②酸化・普通③明赤褐色④完形	窪んだ底部中央	外面 胴部下・中位斜縦位斲撫で後撫で、同上位斜縦位斲撫で後撫で、口縁部斜縦位斲撫で後横撫で。 内面 胴部撫で、口縁部横撫で。	全体に粗雑
18	口 -- 底 7.6	々	①白色細砂粒・白色粗砂粒・礫粒②酸化・普通		外面 ↑斲撫で。 内面 斲撫で。	③鈍い赤褐色 ④胴部下半

6. 包含層の出土遺物

石 器

(単位：cm, g)

番号	器 種	大 き さ・重 量	出土状態	石 質	形 状・調 整 加 工 の 特 徴
19	滑石製 模造品	長 2.4 幅 1.4 厚 0.3 重 1.2	埋没土中	滑 石	19～21のいずれも剣形模造品である。各面は研磨によって整形されている。 長さ 2.3～ 3.5cm、幅 1.3～ 1.7cm、厚さ 0.3～0.6cmと小形である。
20	〃	長 2.3 幅 1.2 厚 0.4 重 1.2	埋没土中	〃	
21	〃	長 3.5 幅 1.7 厚 0.6 重 5.9	埋没土中	〃	

炭焼窯出土遺物 (第114図、PL52)

鉄 製 品

(単位：cm)

番号	器 種	寸法・重量	出土状態	摘 要
1	古 銭	直径 2.1	石敷直下	寛永通寶。寛保元年(1741)初鋳。裏面は「元」。

122号土壌出土遺物 (第113図、PL51)

土 器

(単位：cm)

番 号	大 き さ	出土状態	①胎土②焼成③色④残存	器 形 の 特 徴	成 ・ 整 形 技 法	備 考
1 坏	口 12.4 高 4.0	床面直上	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③鈍い橙色	体部に削りによる 稜線	外面 体部斲削り、口縁部横撫で。 内面 底面撫で、体部から口縁部横撫で。	内外面煤付着 ④完形
2 坏	口 12.4 高 3.2	〃	①細・粗砂粒・黒雲母② 酸化・良好③橙色	内彎気味の体部	外面 体部斲削り、口縁部横撫で。 内面 底面撫で、体部から口縁部横撫で。	④残存
3 坏	口 11.2 高 3.2	〃	①細・粗砂粒・黒雲母② 酸化・普通③橙色④完形	体部に削りによる 稜線	外面 体部斲削り、口縁部横撫で。 内面 底面撫で、体部から口縁部横撫で。	
4 坏	口 12.4 高 3.2	〃	①白色細・粗砂粒②酸化 ・普通③鈍い橙色	体部に削りによる 稜線	外面 体部斲削り、口縁部横撫で。 内面 底面撫で、体部から口縁部横撫で。	④完形
5 坏蓋 須恵器	口 16.4 高 2.0	〃	①白色粗砂粒・礫粒②還元 ・普通③灰色④欠残存	内傾する短い返り	外面 天井部右回転斲削り後回転撫で。 内面 回転撫で。	
6 坏蓋	口 11.1 高 4.0	〃	①粗砂粒・石英②還元・ 不良③灰黄色④完形	高い口縁部	外面 天井部右回転斲削り。 内面 回転撫で。	内面にタール状の 炭化物付着

包含層出土遺物 (第115・116図、PL52)

土 器

(単位：cm)

番 号	大 き さ	出土位置	①胎土②焼成③色④残存	器 形 の 特 徴	成 ・ 整 形 技 法	備 考
1 罎	口 -- 底 3.2	72A00他	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③灰褐色		外面 \ 斲撫で後撫で。 内面 斜縦位指撫で。	④体部欠残存
2 罎	口 -- 底 --	76Z44他	①白色細砂粒・黒雲母② 酸化・普通③鈍い橙色		外面 体部下位斲撫で、同中・上位撫で。 内面 斲撫で。	④頸部欠損
3 罎	口 9.5 底 --	Z 区	①白色細・粗砂粒・黒雲 母②酸化・普通③橙色	口縁部下端に段差	外面 体部撫で、頸部縦位斲撫で、口縁部 横撫で。内面 体部撫で、頸部横撫で。	④欠残存
4 罎	口 -- 高 --	72A00他	①細・粗砂粒・礫粒・石 英②酸化・普通	丸底	外面 撫で。 内面 斲撫で後撫で。	③鈍い赤褐色 ④頸部欠損
5 高坏	口 -- 底 --	66Z45他	①白色細・粗砂粒・礫粒 ②酸化・普通		外面 体部縦位斲研磨、口縁部横撫で。 内面 撫で。	③鈍い橙色④坏部 下位のみ残存
6 高坏	口 (15.3) 底 --	〃	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③鈍い褐色	外反気味の口縁部	外面 体部斲撫で、口縁部斜縦位斲撫で後 横撫で。内面 口縁部横撫で。	④坏部のみ残存
7 高坏	口 (15.4) 底 -- 高 --	79Z40他	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③鈍い橙色 ④坏部欠残存	外反気味の口縁部	外面 体部斲撫で、口縁部下位斜縦位斲撫 で、同中・上位横撫で。 内面 斜横位斲撫で。	
8 高坏	口 -- 底 -- 高 --	66Z45他	①粗砂粒・黒雲母②酸化 ・普通③鈍い橙色④脚部 のみ残存		外面 撫で。 内面 未調整。	内面に輪積痕をそ のまま残す
9 高坏	口 -- 底 15.0 高 --	Z 区	①白色細・粗砂粒・黒雲 母②酸化・普通③明赤褐 色④坏部欠損		外面 裾部から脚部横撫で後縦位斲研磨。 内面 裾部横撫で、脚部←斲削り。	丁寧なつくり
10 高坏	口 15.4 底 -- 高 --	76Z44他	①白色細・粗砂粒・石英 ②酸化・普通③橙色④口 縁部欠、裾部欠損	外反気味の口縁部 僅かに括れた脚部 上端	外面 脚部縦位斲研磨、体部斲撫で、口縁 部横位斲撫で後縦位斲研磨。 内面 脚部撫で、口縁部斜縦位斲研磨。	

Ⅲ. 古墳時代以降の遺構と遺物

番号	大きさ	出土状態	①胎土②焼成③色④残存	器形の特徴	成・整形技法	備考
11 高坏	口 ー 底 13.3 高 ー	66Z45他	①白色細・粗砂粒・礫粒・石英②酸化・普通③赤色④坏部欠損	弱い段差をもつ裾部	外面 裾部横撫で、脚部撫で。 内面 裾部横撫で、脚部縦指撫で。	脚部上位に絞り痕
12 甕	口 15.8 底 ー 高 ー	82A00他	①白色細・粗砂粒・礫粒・石英②酸化・普通③鈍い赤褐色④口縁部のみ	平坦な口唇部	内外面 口縁部横撫で。	器肉が厚い
13 甕	口 23.6 底 9.3 高 38.3	73A00他	①白色細砂粒・粗砂粒・礫粒・石英②酸化・普通③橙色④完形	突出した底部	外面 胴部下半斜縦位篋削り、同中・上位斜横位篋削り、口縁部横撫で。内面 胴部斜横位篋撫で後撫で、口縁部横撫で。	
14 甕	口 18.5 底 5.5 高 25.2	76A00他	①白色細・粗砂粒・石英・黒雲母②酸化・普通③鈍い赤褐色	突出のない小さな底部	外面 胴部へ篋撫で、口縁部横撫で。 内面 胴部横位篋撫で後撫で、口縁部横撫で。	全体に丁寧 ④胴部一部欠損
15 小型粗製土器	口 5.5 底 4.5 高 3.0	72A00他	①白色細・粗砂粒②酸化・普通③鈍い橙色④完形		外面 底面、体部撫で。 内面 指撫で。	手捏ね
16 小型粗製土器	口 (5.4) 高 4.2	ク	①白色細・粗砂粒②酸化・普通③鈍い橙色④欠損		外面 指頭によるおさえ。 内面 指撫で。	手捏ね

包含層出土遺物

石 器

(単位：cm, g)

番号	器種	大きさ・重量	出土位置	石質	形状・調整加工の特徴
17	滑石製模造品	長 1.9 幅 8.5 厚 5.5 重 1.0	72A00	滑石	17～20・25は剣形模造品であり、各面とも研磨によって整形されている。19は比較的形狀の整った模造品で、上端と右側縁下位の2箇所に径1.5mmの孔が存在する。上端の孔は表から裏への片面穿孔、右側縁は表裏両面からの穿孔である。他の剣形模造品は穿孔されておらず、また形割段階の剝離面を研磨せずに残すものが多い。21～24は形割段階の未製品であり、研磨による整形痕をもたない。長さ3.0～3.8cm、厚さ6.0～9.0mmと製品化された模造品に比べてやや大きい。
18	ク	長 1.8 幅 1.3 厚 0.2 重 1.0	72A00	ク	
19	ク	長 3.9 幅 2.1 厚 0.4 重 5.5	72A00	ク	
20	ク	長 2.2 幅 0.8 厚 0.8 重 0.9	72A00	ク	
21	ク	長 3.2 幅 1.9 厚 0.9 重 4.5	72A02	ク	
22	ク	長 3.8 幅 1.4 厚 0.6 重 3.7	86Z49	ク	
23	ク	長 3.3 幅 2.7 厚 0.8 重 8.4	76A02	ク	
24	ク	長 3.9 幅 2.1 厚 0.8 重 6.6	76A02	ク	
		厚 0.7 重 6.7			

鉄製品

番号	器種	寸法・重量	出土位置	摘 要
26	刀子		76A02	刃部の一部のみ残存。腐蝕による刀身の剥落が著しい。平造の刀身か。

IV 成果と問題点

当遺跡では先土器時代を始め、縄文時代、古墳時代、奈良時代、近世などの遺構・遺物が検出されており、断続的ではあるが長期間にわたる複合遺跡と言える。

先土器時代については、第二分冊で報告する予定であり、本稿では除外するが、これらの中でも縄文時代と古墳時代の遺構・遺物は、かなりまとまった資料が得られており、これらを中心として若干の問題点を記述してみたい。

(1) 縄文時代

縄文時代に属する遺物は草創期後半の燃糸文土器をはじめとして、後期初頭の堀之内式土器までの各型式に比定される土器とともに、これらに伴う石器群が検出されている。一方、遺構については、竪穴住居14軒、土壇123基、集石19基が検出されているが、その所属時期は前期の関山式期から諸磯式期を主体としている。特に竪穴住居は、明確な伴出遺物を持たないために時期の判定できないものを除いて総て当該期に比定され、これらの住居に近接して占地するA・Z調査区の土壇69基や17基の集石もその大半が当該期に比定されるものと思われる。

竪穴住居は丘陵部斜面を水平に掘り込んでいるために明確に周壁をとらえられなかったり、あるいは風倒木痕による攪乱を受けているために、その外形や柱穴・炉などの施設が不明瞭となっているものも認められる。しかし、その多くは長台形や隅丸方形を基調とした外形を呈し、炉や柱穴の在り方にも規則性が窺えるようである。そこで各住居からの出土土器の位置付けを通じて、その形態の変遷について考えてみたい。

まず各住居に伴出すると思われる床面出土の土器を中心として、その型式的特徴から時間軸を設定すると、おおよそⅠ～Ⅴの5段階に区分することができる。

Ⅰ段階 口縁部に篋状・あるいは細い棒状工具による梯子状沈線文や刺切文、円形竹管文、貼付文などが施文され、胴部には鋸歯状のループ文や幅の短い原体によって規則的な横位の帯状の縄文施文が行われるものを主体としている。器形は4単位の波状口縁をもつものが多く、波頂部は双頭状を呈する。また、口唇部は内削ぎ状となるものが多い。

本段階は、これまで関山Ⅰ式の範疇でとらえられていたこともあるが、最近では千葉県二ツ木第2貝塚の資料について篠遠喜彦氏によって提示された「二ツ木式」^{註1}を当てる考え方もある。本段階を二ツ木貝塚の資料と対比すると、b類とされたものと共通する要素を含んでおり、後者の見解に立つならば二ツ木式として認定されるものと思われる。特に、梯子状沈線文が篋状・棒状工具による一本引きの平行沈線文であること^{註2}や横位の縄文施文が幅の狭い等間隔のあり方^{註3}＝「幅狭等間隔縄文横帯区画法」を持つ点は、二ツ木式土器のメルクマルとされているものであり、次段階のⅡ段階とは時間差としてとらえられるものであろう。二ツ木式については、各研究者において共通認識が形成されているとは必ずしも言えない現状でもあり、当段階の位置付けに

註1 篠遠喜彦「千葉県葛飾郡二ツ木第2貝塚」『日本考古学年報』3 1955

註2 新井和之「文様系統論—関山式土器—」『季刊考古学』第17号 1986

註3 黒坂禎二「2.第Ⅱ群土器について」『深作東部遺跡群』1984

IV. 成果と問題点

については今後の検討を必要としている。

2・5・7号住居ではやや後出的な土器も混在しているが、比較的床面に近い土器を重視するならばこれらの住居は当該期に比定されよう。

II 段階 口縁部に梯子状沈線文や刺切文・円形竹管文・貼付文などが残存する点でI段階と類似しているが、梯子状沈線文は簡略化されて半截竹管による平行沈線文へ変化し、刺切文もまばらとなって貼付文上には刻み目の施されるものも見られる。また、半截竹管によるコンパス文も認められる。縄文施文のあり方は明確ではないが、結節や正反合燃りの縄文が多いようであり、遺構外の包含層出土のNo.129を参考とすれば、「異間隔縄文横帯区画」^{註4}が存在すると考えられる。器形は波状と平口縁の両者があり、前者は双頭状の波頂部や波底部に小突起がみられる。口唇部の形態は、内削ぎ状を呈するものが多い。

註4 註3に同じ

上記の特徴からみて本段階は関山I式期に比定され、6・9号住居が当該期に位置付けられる。

III 段階 口縁部の文様帯が不明瞭となり、櫛歯状工具による縦長のコンパス文や半截竹管による鋸歯状の平行沈線文が施文される。縄文は組紐が大半を占め、正反の合燃りや附加条なども認められる。器形はII段階と同様、波状と平口縁があるが、平口縁がより多い。口唇部の形態は、角頭状や丸棒状を呈する。

本段階は関山II式期に比定される。10・11号住居は外形が不明であるが、ともに当該期に位置付けられる。

IV 段階 口縁部には半截竹管状工具による爪形文・平行沈線文や櫛歯状工具による列点状刺突文・条線文などが施文される。また、これらの文様を持たずに器面の全面に縄文を施文するものも多い。縄文は単節縄文(0段多条を含む)が主体を占め、羽状あるいは菱形状に施文される。器形は、平口縁と波状口縁があり、後者には波底部に小突起がつくものもある。口唇部は内削ぎ状となるものの他に、丸棒状となるものも多い。

註5 新井和之「黒浜式土器」
『縄文文化の研究』3 1982

当段階は黒浜式期に比定されるが、現在黒浜式土器は5細分案も提示されており、^{註5}こうした考え方に従うならば、IV段階として把握した中には当然のことながら新旧の型式が混在しているものと思われる。また、口縁部に菱形状や三角形の文様を構成するものや菱形状の縄文施文を行うものは「有尾系土器」^{註6}としてとらえられているものであり、異系統土器に対する分析も必要であろう。ただ、明確に当段階に位置付けられるのは1号住居のみであり、上記の問題に関してはとりあえず今後の課題としておきたい。

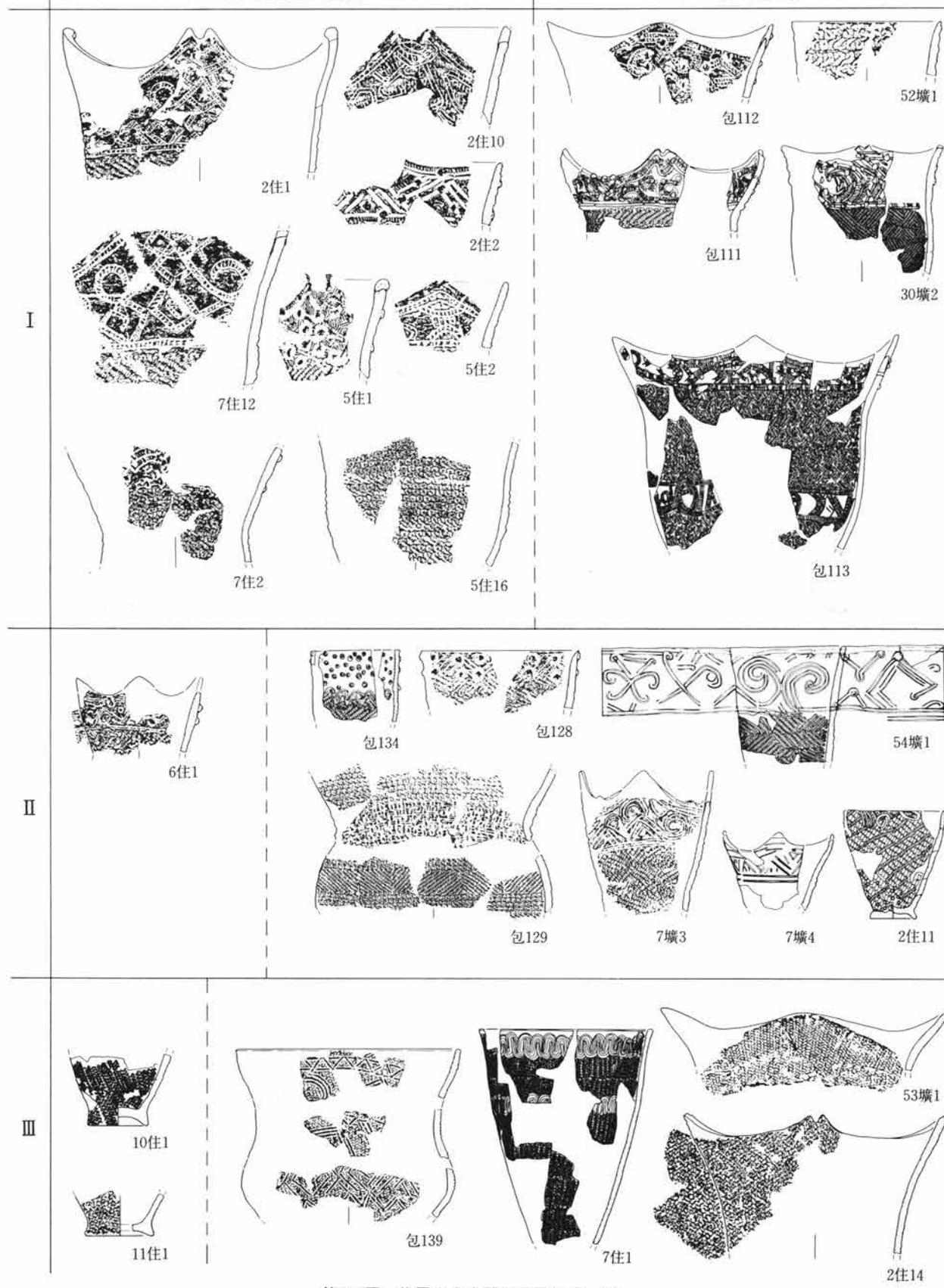
註6 註5に同じ

V 段階 胎土に繊維を含まず、口縁部に櫛歯状工具および複数の半截竹管状工具による波状・平行状の沈線文や半截竹管による肋骨文・内側爪形文・木葉文、円形竹管文などが施文される。また、頸部の括れ部に刻み目を施した隆線文を巡らせて文様帯を区画するものもみられる。縄文は繊維の粗いRLを横位に施文するものが大半を占める。器形は、口唇部に小突起を付した波状口縁も認められるが、平口縁が多い。

本段階は諸磯a式期に比定され、12・14号住居が当段階に位置付けられる。

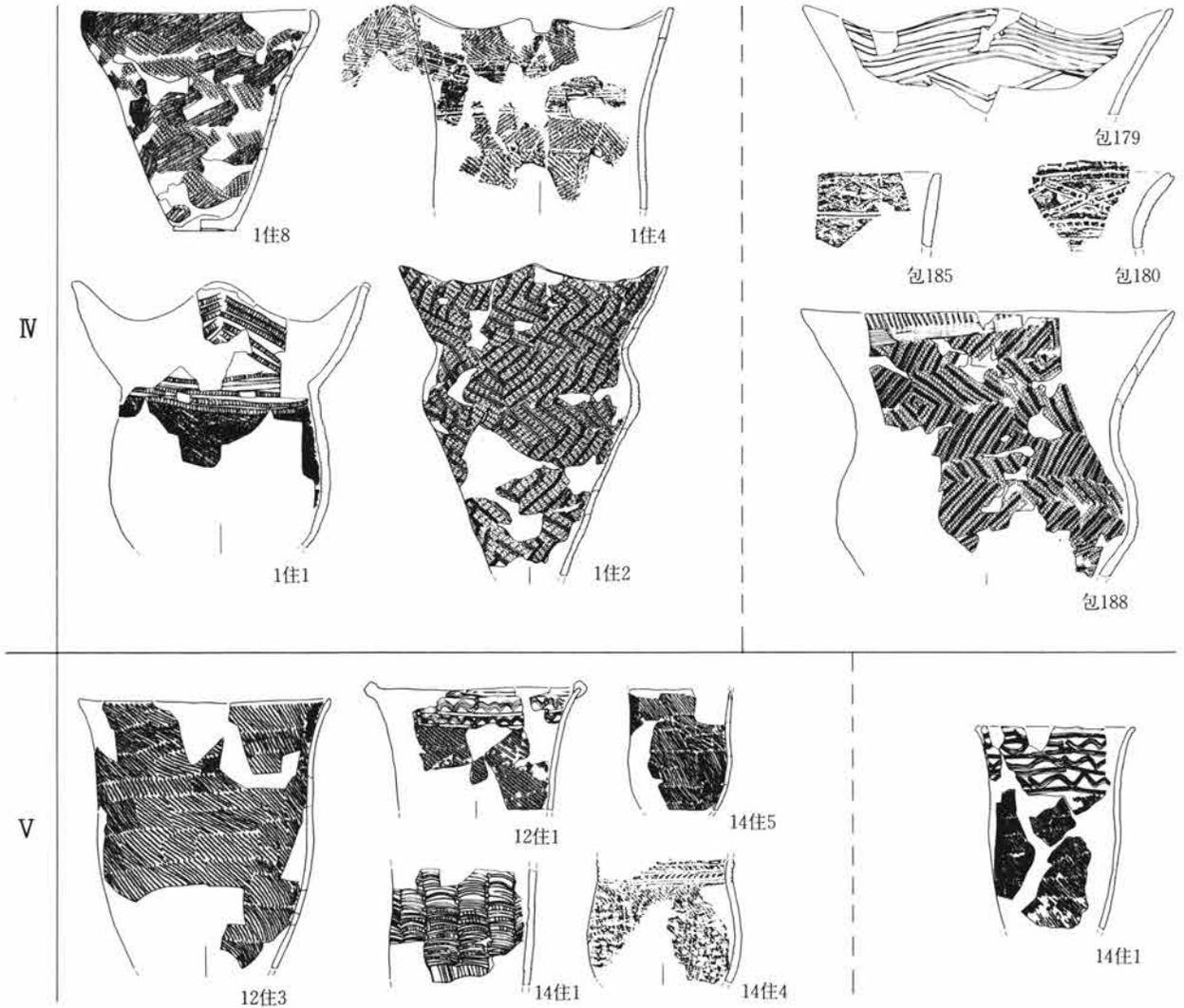
各住居出土の土器

参考資料



第118図 住居出土土器の段階区分 (1)

IV. 成果と問題点



第119図 住居出土土器の段階区分 (2)

以上、住居を中心とした遺構の時期的な位置付けを行って見たが、次に各住居形態の時間的な変遷をたどってみたい。

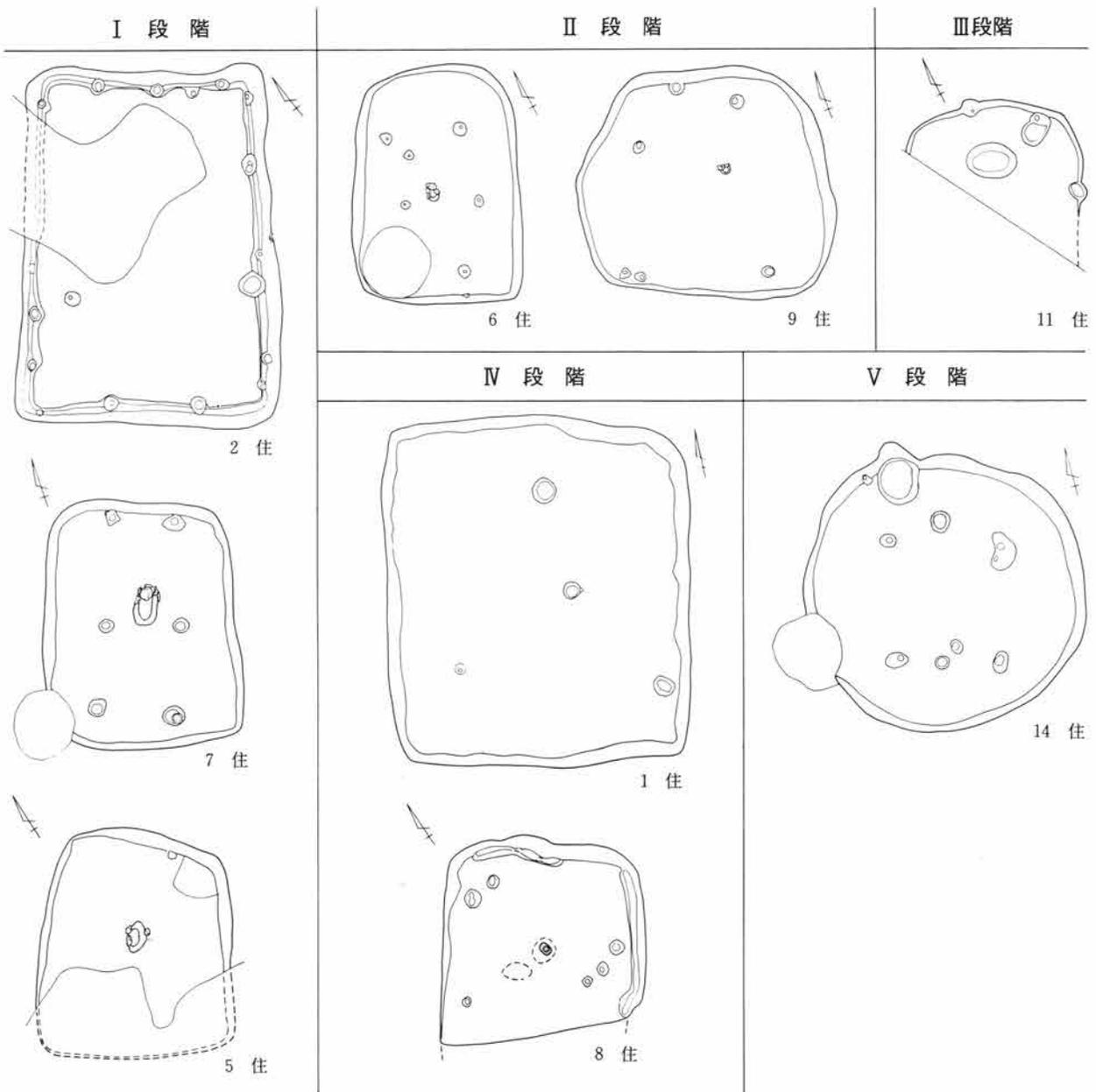
まず、住居の外形でみると、Ⅰ～Ⅲ段階は共に長台形あるいは長方形を基本としているが、時間的に下るにつれて隅丸状を呈する傾向にある。例えば、Ⅰ段階の2号住居は「定角的」な外形となるのに対し、Ⅱ段階の6号住居は四隅の丸味が強くなっている。10号住居との切り合いもありやや不明瞭な点もあるが、Ⅳ段階の1号住居では正方形に近い方形を呈し、Ⅴ段階になると14号住居にみられるようにほぼ円形に近い隅丸方形に変化している。

次に内部施設を見ると、周溝はⅠ段階の2号住居に認められるが、他段階には周壁に沿って全周するようなものは存在しないようである。柱穴は、Ⅰ～Ⅲ段階は6本の支柱穴が住居の長軸に沿って3本2列に並び、Ⅳ段階は不明瞭であるがⅤ段階では4本の支柱穴となっている。Ⅰ段階の2号住居は風倒木による攪乱をうけて支柱穴の配列が不明瞭となっているが、6本の支柱穴のすべてが周溝内に存在するか、あるいはそれらのうちの上・下位4本が周溝内に存在するものと考えられる。また、同段階の

7号住居の上位2本は周壁に接して掘りこまれているが周溝は無く、下位の2本の柱穴も床面上に存在している。炉は、I・II段階ではコ字状に石囲いを施し、床面中央部よりやや北側に位置しているが、V段階では2本の支柱穴を結んだ線上の中央に位置し、石囲いを持たない地床炉となっている。III・IV段階には良好な事例がないが、少量の黒浜式の土器片を出土している8号住居をIV段階に位置付けることができるならば、すでにIV段階では地床炉に変化していると考えられる。

こうしたI～V段階にみられる住居形態の変遷については、すでに多くの研究者によって論じられているところであり、特に笹森健一氏の^{註7}論考に詳しいものがある。笹森氏によれば、当該期の住居には多系の変遷過程が存在するようであるが、当遺跡でみられたようなその外形が長台形(長梯形)から隅丸方形へと変化することや、柱穴

註7 笹森健一「縄文時代前期の住居と集落(1)～(3)」『土曜考古』第3～5号 1981～1982



第120図 各段階の住居形態

IV. 成果と問題点

が6本から4本へと変化する点などは、関山タイプ→打越タイプ→殿山第1種タイプ→城第1種タイプ→城第2種タイプ(あるいは稲荷山タイプ)→南堀タイプ(あるいは鷲森9号住タイプ)としてとらえられた変遷過程と類似した内容をもっていると考えられる。しかし、その一方で上記のような変遷過程とは異なった様相も認められる。その一つは、Ⅰ段階で周溝内に存在した6本のうちの4本の主柱穴が、Ⅱ段階ではすでに6本全部が床面上に存在している点である。主柱穴がこのようなあり方を示すのは、黒浜式期の城第1種タイプからとされており、当遺跡の例はそれよりも1段階早い関山Ⅱ式期である。また、もう一つはⅠ～Ⅱ段階にみられたコ字状の石組みみ炉の存在である。当該期の住居の炉に石を配するのは、上福岡貝塚、打越遺跡、長宮遺跡^{註10}、渡場遺跡^{註11}、後山遺跡^{註12}などの埼玉県内の遺跡に類例が認められるが、その多くは炉の一部に用いているのみであり、群馬県内以外にはコ字状の石組みをもつものは存在しないようである。これらの2点に関して群馬県内の事例でみると、市之関遺跡^{註13}をはじめ、分郷八崎遺跡^{註14}や諏訪西遺跡^{註15}などの関山Ⅰ～Ⅱ式期の住居に共通して存在しており、当地域においてはかなり普遍的なものであることがうかがえる。こうした様態は、一タイプとして認定できるだけの内容を具備しており、ここではかつて笹森氏が主柱穴のあり方の特異性に着目しつつも他に類例が存在しなかったためにその呼称を留保した「市之関タイプ」の名称を改めて付しておきたい。ただ、コ字状の石組みみ炉の形態については、県内では赤城山西南麓に立地する三原田城遺跡^{註16}において、すでに花積下層式段階の堅穴住居に存在しており、系譜的には少なくとも前期初頭にまで確実に遡ると考えられる。

以上、出土土器の分類にもとずいた堅穴住居の変遷過程について考えてみたが、何分にも遺構の残存状態が悪く、かつ遺構に伴う土器が乏しい中で上記のような想定を行うことは、少なからず問題を含んでいると思われる。不十分な点に関しては、後日を期したい。

また、住居以外の土壌や包含層出土の草創期後半から後期にかけての土器については、本稿で触れることができなかったが、他遺跡の資料と比較検討する中で取り上げる機会を得たいと考えている。

(2) 古墳時代

当該期に比定される遺構は、15～19号住居の5軒であるが、いずれも5世紀前半の土師器を出土している。これらの住居の中で注意されるのは、18号住居の土器の出土状況と器種別の組成比率である。当住居からは、高坏54個、坏1個、甕42個、埴116個、甗5個、脚付き埴3個の総計221個もの土師器が出土しているが、そのうちの32%にあたる71個は床面に密着して出土したものである。これらの土師器の中で最も大きな比率を占めているのは、埴であり、全体の55%(39個)を占めている。

このように遺物の出土量の多さと共に、そのなかに占める埴の割合が非常に高い点に関しては、管見にふれた範囲では類例を見いだすことができず、極めて特異なあり方を示していると言えよう。ただ、遺跡全体で見れば18号住居と同様な傾向が認められるのであり、18号住居のみが特例という訳ではない。こうした点に関しては、現段

註8 関野 克「埼玉県福岡村縄文前期住居址と堅穴住居の系統に就いて」『人類学雑誌』第53巻第8号 1938

註9 「打越遺跡」富士見市教育委員会 1978

註10 「川崎遺跡第3次・長宮遺跡発掘調査報告書」上福岡市教育委員会 1980

註11 「小岩井渡場遺跡」飯能市教育委員会 1977

註12 「後山遺跡」上尾市教育委員会 1974

註13 「市之関遺跡」宮城村教育委員会 1964

註14 「分郷八崎遺跡」群馬県教育委員会 1986

註15 「中畦遺跡・諏訪西遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986

註16 「三原田城遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987

註17 ちなみに、本遺跡全体からは当該期の埴591、高坏396、甕331、小型粗製土器13、脚付埴9、甗8、鉢2、坏1、壺1、の計1359点が出土しており、やはり埴が最多となっている。

階では明言できないが、当遺跡そのものの個別性＝特殊性として把握されるものかもしれない。

5 軒の住居の時期は、出土した須恵器模倣の土師器の年代観や土師器相互の比較検討からともに5世紀前半に位置付けられる^{註18}。これらの住居は相互に近接して位置しているが、住居内におけるF Aの堆積状況や住居間に認められた道状の遺構の存在を加味するならば、共に同一時間内に存在したものと判断される。

当該期の住居は、最近県内でも下佐野遺跡5区6住・7 C住^{註19}や田中田遺跡13・31住^{註20}、堀ノ内遺跡F A-24^{註21}、下東西遺跡S J 11^{註22}などの類例が知られてきているが、これらの住居も当遺跡と同様、外形が正方形状を呈し、竈を持たない炉付き住居である点で共通しており、住居構造的には極めて斉一性のあるものとなっている。

一方、集落の継続性という面から見ると、当遺跡の存続は時間的にも短く、表面的には前時期からや次時期への連続性のない単発的な集落となっている。こうした集落のあり方を皮相的にとらえるならば、「伝統的集落」あるいは「第一次新開集落」^{註23}のいずれにも合致しないものであるが、この点に関しては一集落のもつ占有範囲や周辺遺跡との関連を含めた分析を経た後に再検討する必要がある。また同時に、丘陵部の小規模な開析谷や冷温な湧水を利用しての水田経営の生産性と集落を維持・発展させるための経済的基盤という点についても考慮する必要がある。

なお、当該期の住居については、最近子持村黒井峯遺跡や渋川市中筋遺跡で榛名山二ツ岳の降下火山灰(F A)および降下軽石(F P)によって埋没した竪穴住居が調査され、上屋構造などがかなり明確にとらえられてきている。当遺跡の18号住居は焼失家屋であり、多量の炭化材が検出されているが、これによって上屋構造を復元するまでには至っていない。ただ、上屋や主柱と思われる部材にいずれも二次林に成育する樹木を使用しており^{註24}、当遺跡ではすでに5世紀前半までの段階において、集落周辺の原生林が二次林へと変化するような契機が存在したことを示している。これが直接的に人為的な開発状況を反映していると見ることは短絡的であるのかもしれないが、赤城山南麓地域において古墳時代以降急速に拡大する居住域や水田農耕地のありかたと重ねてみたときに、そうした開発行為が森林の植生までも変化させる規模のものであったことを想起させる。これは、単に用材としての樹木の伐採ということだけを意味しているのではなく、畑地などの農耕地への転換による可能性のあることも考慮しなければならぬであろう。

以上、縄文時代と古墳時代に関する調査成果と問題点について簡単に触れてみた。分析及び問題点抽出の不十分さについては自ら恥じ入るところであるが、研究者諸氏の御教授、御批判をいただければ幸いである。

なお、本論では扱いきれなかった縄文時代の石器と古墳時代の土師器については、後段に岩崎泰一氏と坂口 一氏による論考がなされており、詳細な分析はそちらに譲りたい。

(石坂)

註18 173ページの坂口氏の論文を参照。

註19 「下佐野遺跡Ⅱ地区」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986

註20 「田中田遺跡E窪谷戸遺跡・見眼遺跡」富士見村教育委員会 1986

註21 「堀ノ内遺跡群」藤岡市教育委員会 1982

註22 「下東西遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987

註23 能登 健・洞口 敦・小島敦子「山棲み集落の出現とその背景」『信濃』第37巻第4号 1985

註24 180ページの鈴木氏の論文を参照。

註25 能登 健・小島敦子「弥生から平安時代の遺跡分布」『新里村の遺跡』新里村教育委員会 1984

註26 「粕川村の遺跡」粕川村教育委員会 1986

勝保沢中ノ山遺跡出土の石器について

岩崎 泰一

註1 第63図参照。

総計4,277点の石器^{註1}の多くは包含層より出土している。これらは明確な分布域を形成することなく多時期に亘る土器群とともに出土しているため、各々の石器の帰属時期について明らかにすることは困難である。また、接合資料および母岩別資料の抽出・検討も時間的な制約から不十分であり、石器群を分析するにあたり多くの問題を含んでいる。

ここでは、素材として用いられる剥片形状の把握の容易な石匙・削器・加工痕ある剥片を分析資料とし、主体的に作出される剥片形状を把握し、剥片剥離・調整加工の実態を把握し、石器群の構造を明らかにして行きたい。

1 出土資料の分析

〈素材剥片の形状とその特徴〉

a, 石匙(第121図) 石匙には製作意欲の強い諸形態が認められ、各々の形態の石匙には形状の類似する剥片が多く用いられる。石匙はいずれも素材となる剥片の形状を変えることなく作出され、石器の形状と剥片の形状はほぼ一致する。

1類 剥片の形状は左右両側縁が平行し、長方形を呈する。剥片の長軸は石器長軸に一致することが多いが、剥片が横位に用いられることもある。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向に一致することが多いが、90°異なる剥離方向が観察されることも多い。

2類 2a類の場合、剥片の形状は三角形(長幅比1:2)を呈する。剥片の長軸は石器長軸に対し、斜交する。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向にほぼ一致するが、90°異なる剥離方向が観察されることも多い。2b類の場合、剥片の形状は三角形(長幅比1:1)を呈す。剥片の長軸は石器長軸に一致することが多いが、剥片が横位に用いられることもある。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向にほぼ一致するが、180°異なる剥離方向も観察される。

3類 剥片の形状は台形状を呈する。剥片の長軸は石器長軸に対し斜交する。剥片が横位に用いられる場合もみられる。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向にほぼ一致するが、90°異なる剥離方向が観察されることも多い。

4類 剥片の形状は扇状あるいは横長・三角形を呈する。剥片の長軸は石器長軸に一致することが多い。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向に一致することが多いが、90°異なる剥離面が観察されることも多い。

b, 削器(第122図) 削器には多種多様な形状を示す剥片が用いられるが、素材として用いられる剥片には一定の傾向が窺われ、類型化が可能であった。削器はいずれも素材となる剥片の形状を大きく変えることなく作出され、石器の形状と剥片の形状はほぼ一致する。

縦長・長方形を呈するもの(第73図483・492、第74図509・511) 剥片の形状は縦

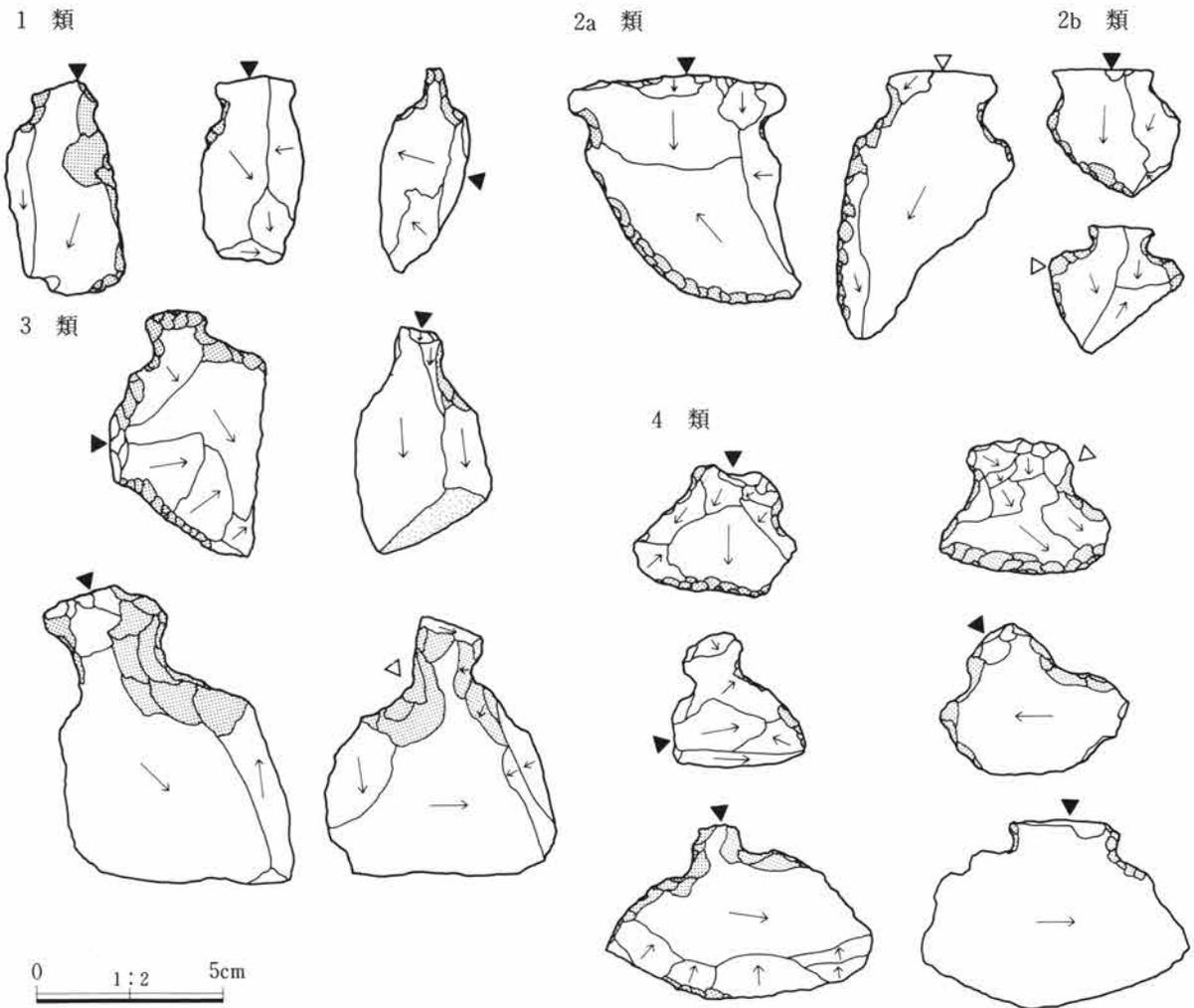
長・長方形を呈する。剥片の長軸は石器長軸に一致することが多いが、斜交することも多い。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向に一致するが、90°あるいは180°異なる剥離方向が観察されることも多い。

三角形状を呈するもの(第74図495・497) 剥片の形状は三角形状を呈する。剥片の長軸は石器長軸にほぼ一致する。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向に一致する。

台形状を呈するもの(第73図484・490) 剥片の形状は台形状を呈する。剥片の長軸は石器長軸に対し斜交する。石器背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向に一致するが、90°あるいは180°異なる方向の剥離も認められる。

横長・長方形を呈するもの(第73図482・486) 剥片の形状は横長・長方形を呈する。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向に一致するが、90°あるいは180°異なる方向の剥離も認められる。

c, 加工痕ある剥片(第122図) 多種多様な形状を示す剥片が用いられるが、素材として用いられる剥片には一定の傾向が窺われ、類型化が可能であった。いずれも素材



第121図 素材剥片の形状と剥離面構成 (石匙)

IV. 成果と問題点

となる剥片の形状を大きく変えることなく作出され、石器の形状と剥片の形状はほぼ一致する。

縦長・長方形を呈するもの(第79図572・575、第80図587・593) 剥片の形状は縦長・長方形を呈する。剥片の長軸は石器長軸に一致することが多いが、斜交することもあり。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向にほぼ一致する。

三角形を呈するもの(第79図578・580) 剥片の形状は三角形を呈する。剥片の長軸は石器長軸にほぼ一致する。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向にほぼ一致する。

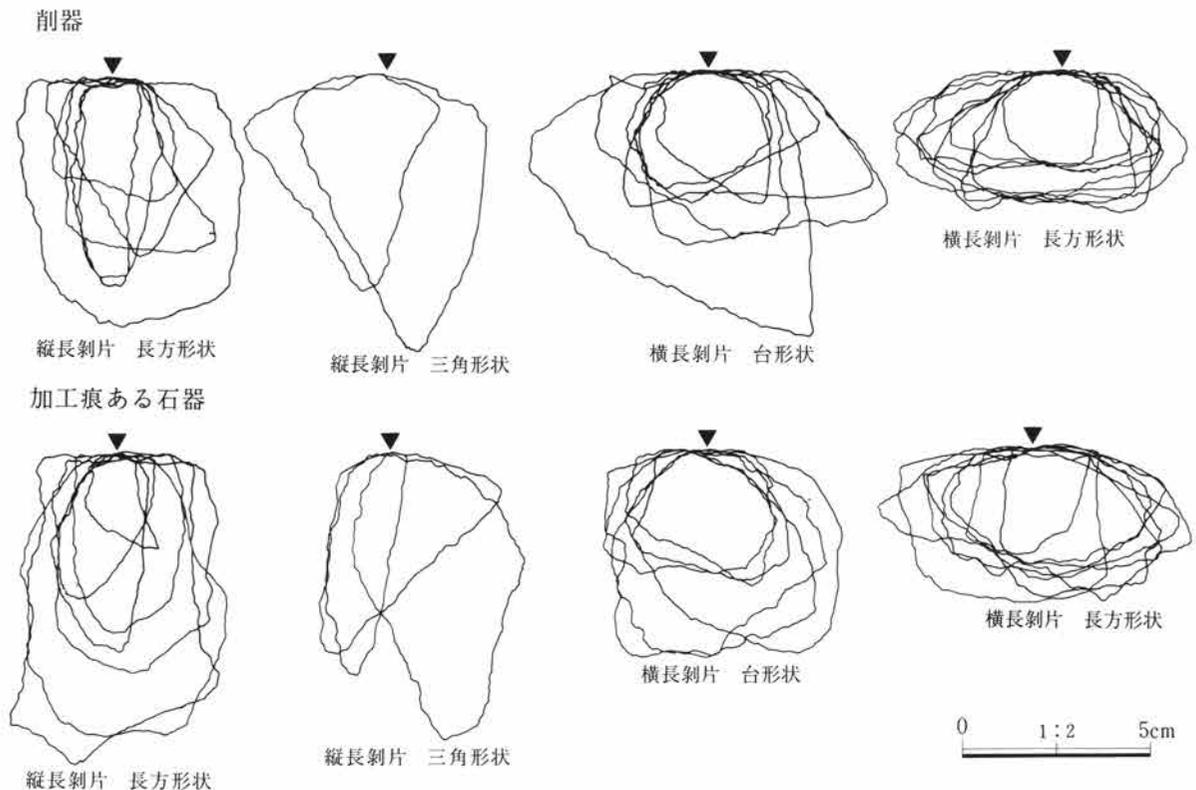
台形状を呈するもの(第80図589・591) 剥片の形状は台形状を呈する。剥片の長軸は石器長軸に対し斜交する。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向にほぼ一致するが、90°あるいは180°異なる方向の剥離も認められる。

横長・長方形を呈するもの(第81図595~609) 剥片の形状は横長・長方形を呈する。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向に一致するが、180°異なる方向の剥離も認められる。

《主体的に作出される剥片形状》

以上の分析より、石器素材となる剥片の形状には第121・122図に示されるような類似性が認められ、主体的に用いられる剥片形状(目的的剥片)として4形態を抽出することが可能である。技術的な側面より以下のような特徴が指摘される。

縦長・長方形剥片は、背面に形成される稜線はその中央付近に認められ、剥離方向はこの稜線に引かれ、剥片端部はこの稜線に制約される。打点はこの稜線上にほぼ



第122図 素材剥片の形状

一致し、大きくずれることはない。打面形状は三角形状をなす。

三角形状剥片は、背面に形成される稜線はその中央付近に認められるが、剥離方向はこの稜線に引かれ、剥片端部はこの稜線に制約される。打点はこの稜線上にほぼ一致し、大きくずれることはない。打面形状は三角形状をなすものと帯状をなすものがある。

台形状剥片は、背面に形成される稜線上に打点を選択されることはない。打点前方にこの稜線が存在する場合には、頭部調整を施すことによりこの稜線は除去されるが、剥離方向は斜交する稜線に引かれ、剥片の形状は台形状を呈すこととなる。打面形状は三角形状をなすものと帯状をなすものがある。

横長・長方形剥片は、背面に形成される稜線上に打点を選択されることはない。打点前方にこの稜線が存在する場合には、頭部調整を施すことによりこの稜線は除去される。打面形状は帯状をなす。

2 剥片剥離のあり方

類型化の可能なこれらの剥片には、背面に示される剥離面構成はいずれもほぼ同様な状態を示し、類似する剥片剥離工程上に作出される可能性が指摘される。と同時に、〈縦長長方形剥片・三角形状剥片〉の一群および〈台形状剥片・横長長方形剥片〉の一群には打撃点の選択および頭部調整の有無など技術的な相違が認められ、これらは互いに異なる剥片剥離工程上に作出される可能性も指摘される。現状では、類型化の可能なこれらの剥片(4種)は分析資料に主体的に用いられることから目的剥片として扱われ、剥片剥離は明確な意図のもとにおこなわれることが明らかである。資料的な制約により明確ではなく可能性として指摘されるに過ぎないが、互いに異なる剥片剥離工程・二種の存在する可能性が強い。

3 調整加工のあり方

a, 石匙 調整加工は浅くつまみ部および機能部の作出にはほぼ限定されることが多く、素材となる剥片の形状を大きく変えることはない。縦長剥片を用いる場合には両側縁に、横長剥片を用いる場合には剥片端部にそれぞれ施される。

b, 削器 調整加工を浅く連続的に施すことにより機能部は作出されるが、素材となる剥片の形状を大きく変えることはない。縦長剥片を用いる場合には両側縁に、横長剥片を用いる場合には剥片端部に施される。

c, 加工痕ある石器 調整加工は浅く、かつ、素材となる剥片の形状を大きく変えることはない。縦長剥片を用いる場合には両側縁に、横長剥片を用いる場合には剥片端部に施される。

調整加工は機能部(つまみ部・刃部)の作出、あるいは、バルブの除去に限定され、素材となる剥片の形状を大きく変えることない。

4 石器群の構造

石器群の構造は単位的な石器群に組成するすべての器種を対象とし、器種レベルあるいは形態レベルにおける石器の製作工程を明らかにするなかで把えうるが、集団の規範あるいは規制をも反映するはずである。

IV. 成果と問題点

註2 『三原田城遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
註3 『中棚遺跡』昭和村教育委員会 1986

註4 前期・初頭段階の三原田城遺跡では、細粒で比較的均質な石材(黒色頁岩など)が両面調整の施される石匙(以下、精製タイプと呼称する)8点・周縁調整の施される石匙(以下、粗製タイプと呼称する)42点に、極細粒で均質な石材(黒曜石など)が精製タイプの石匙11点・粗製タイプの石匙1点に用いられている。前期・後半の中棚遺跡では、黒色頁岩などが精製タイプの石匙2点・粗製タイプの石匙30点に、黒曜石などが精製タイプの石匙4点・粗製タイプの石匙1点に用いられている。

註5 中島庄一 「使用痕」『縄文文化の研究』7 1983

本遺跡および周辺^{註2・註3}の遺跡より出土する石器には、石器石材および石器形状など互いに類似する傾向が指摘される。

石器石材については、各々の器種レベルにおいて比較した場合には主体的に用いられる石器石材として黒色頁岩を挙げることができる。これらのうち、石鏃および石匙には対象的な石材選択の傾向が認められ、石鏃には黒曜石・チャートなどが、石匙^{註4}には黒色頁岩などがそれぞれ主体的に用いられる。

石器形状の作出状況については、石鏃には石材による相違は認められないが、石匙には石材による石器石材による作出状況に相違が認められる。調整加工(両面調整と周縁調整)の相違より、石匙には精製タイプの石匙と粗製タイプの石匙とが認められ、精製タイプの石匙には黒曜石・チャートなどが、粗製タイプの石匙には黒色頁岩などがそれぞれ多く用いられる傾向が指摘される。精製タイプの石匙と粗製タイプの石匙とを比較した場合には、数量的には粗製タイプの石匙が多くを占めるが、当然のことながら石器形状の指向性に著しい相違が認められる。

本遺跡出土資料を対象とする分析より、各々の剥片は類型化も可能であり、体系的な剥片剥離工程を背景に作出されること。調整加工は機能部の作出およびバルブの除去などに限定されること。の二点が指摘され、石器形状は剥片形状に一致することが多い。これらが同一の技術基盤上に存在することは明らかである。

石器石材・石器形状の作出状況および本遺跡出土資料を対象とする分析により指摘される以上のことから、石器の製作には明確な「製作意図の相違」の存在が指摘される。石器のかたちには「機能的側面」のほかに「文化のかたち」あるいは「生活様式を示す側面」などが重複することが指摘されているが、石器が一連の石器製作工程を経た後に作出されることから、石器の製作にもこれらの側面を反映することが明らかであり、この場合の「製作意図の相違」には後者に近い意味が含まれる。石匙の場合、精製タイプの石匙と粗製タイプの石匙との相違が素材剥片の形状に制約されるものではなく、対象あるいは用途の違いを反映する可能性が指摘される。

豊富な器種組成を示す縄文時代において、石器の製作が明確な技術体系のもとにおこなわれ、素材剥片の形状には類型化も可能であり、また、素材剥片の形状によって調整加工の増減が図られるが、石器器種と石器石材および石器形状などには明確な指向性が指摘されることより石器の製作には明確な製作意図の相違が認められ、これらが互いに密接にかかわり、単位的な石器群は構造をなし存在するものと捉えられる。

分析には資料的な制約により多くの不十分な点が指摘され、また、単位的な石器群による検証が不可欠であるが、石器製作の様相についておよそその見通しを得ることとなった。石器の製作および組成には地域性を反映することが予想され、上記の分析より石器群の変遷および石器群の構造的変質について少なからず推察することも可能であるが、早期段階あるいは中期段階の石器群の様相については不明確な点が多く、地域性を示すためには今後における資料の集積と詳細な検討をおこなう必要がある。

群馬県における出現期の須恵器模倣土師器

坂 口 一

1 はじめに

近年、群馬県の各地で5世紀代に属すると考えられる須恵器の出土例が増加し、その様相が徐々に明らかとなってきた。一方、これらの須恵器に平行する土師器についても類例が増加し、主として編年の研究の成果が次第に蓄積されつつある。とはいえ、これらを初期須恵器^{註1}に限定すると依然として類例は少なく、平行すると考えられる土師器についても出土例は少ないのが現状である。

ところで、筆者はかつて県下における古墳時代中期の土器を検討するなかで、当時県下で須恵器の共伴例が得られなかったTK-208型式以前にも須恵器が存在することを予測し、その根拠のひとつとして初期須恵器に平行すると考えられる土師器には、既に須恵器を模倣した器種が存在することを挙げた。ここで提示する勝保沢遺跡18号住居から出土した土師器は、須恵器の共伴は得られないものの、初期須恵器の段階に平行する時期の良好な一括遺物であり、さらに、これらの一部に須恵器の存在を暗示する器種が含まれている。

したがって、ここでは勝保沢遺跡18号住居の出土土器を中心にしてこの時期の土師器の様相を検討し、次に須恵器を模倣した土師器について、他の遺跡の例も含めて若干の推察を試みたい。

2 勝保沢遺跡18号住居出土土器の概要

これらの土器群は全て床面に密着し、さらに土器の直上を焼失した住居の炭化材が覆っているため、住居に共伴する一括遺物と考えられる。ここでは、これらの概要を記した上で、年代的位置付けを試みたい。

甕 最大径を中位にもつ球状の胴部を呈し、外面には斜縦位の篋削りか篋撫でを施す(第123図-20~22)。**高坏** 脚部上位に僅かな括れをもつa類(第123図-12)と、直線的な脚部のb類(第123図-13・14)に分けられ、外面には縦位の篋研磨か篋撫でを施す。**埴** 大型のa類(第123図-7~9)と小型のb類(第123図-4~6)に分けられ、いずれも屈曲気味の体部から上端が僅かに内傾する頸部に至るものと、球状の体部から直線的に外傾する頸部に至るものの2種類がある。なお、b類には凸帯状の稜線から直立する口縁部に至るもの(第123図-1)と、体部中位に焼成後の穿孔を施すもの(第123図-2)、同上位に焼成前の穿孔を施すもの(第123図-3)がある。**短頸埴** 上位が膨らむ体部から、屈曲する短い頸部に至る。脚付短頸埴 下位に稜線をもつ体部に、直線的に開く脚を付す。**坏** 体部が大きく開き、上位が内傾気味のものと、体部の開きが小さいものの2種類があり、いずれも径の大きな平底を呈す。

さて、以上に記した球状を呈す甕、上位に僅かな括れをもつ高坏、屈曲気味の体部をもつ埴の特徴及びこうした器種の構成は、例えば高崎市下佐野遺跡5区7C号住居・5区69号住居^{註3}、太田市矢場遺跡10号住居^{註4}、下東西遺跡S J 11^{註5}、富士見村田中田遺

註1 初期須恵器の概念は陶邑古窯址群における田辺昭三氏による規定に準拠した。田辺昭三「初期須恵器について」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集 1982

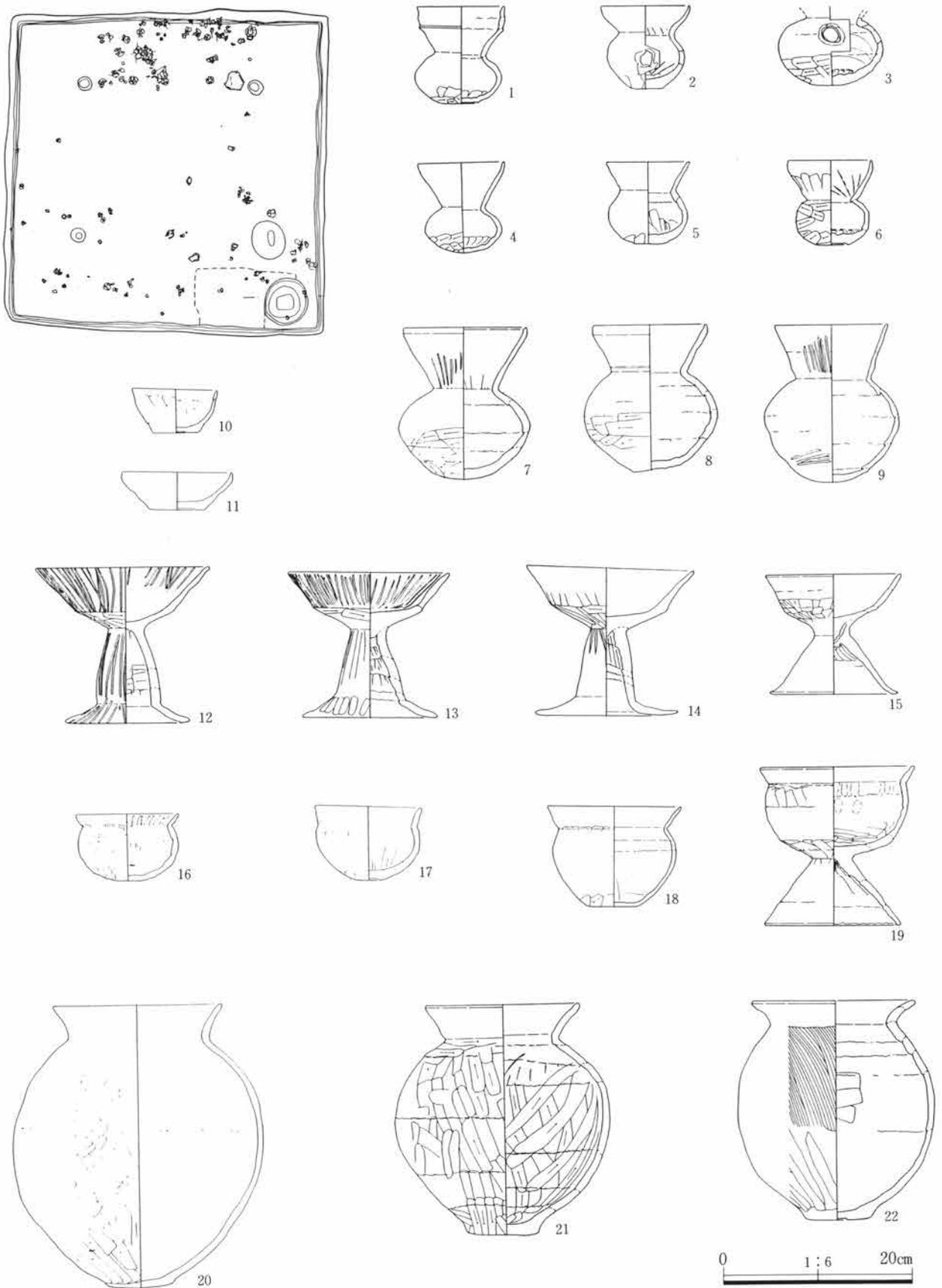
註2 坂口一「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」『研究紀要』4 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986

註3 女屋和志雄・飯塚卓二・外山政子・新井順二「下佐野遺跡」II地区 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986

註4 未発表の資料を赤山容造氏の御好意で、前掲註2で掲載させて頂いた。

註5 神谷佳明・三浦京子「下東西遺跡」群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987

IV. 成果と問題点



第123図 勝保沢遺跡 18号住居出土土器

跡31号住居出土の土器に近似している。これらの土器群は後で盛行する坏類が極めて少ないことと、下佐野遺跡、矢場遺跡では刷毛目のない台付甕を共伴していることに特徴を示す。一方、境町三ツ木遺跡^{註7}125号住居、前橋市荒砥東原遺跡^{註8}21号住居出土土器は、甕及び高坏に比較的近似した形態を示してはいるが、その器種構成に坏類を多く含み、逆に埴類が少ない。さらに高坏は脚部上端の括れがなく、外面に施す筥研磨も雑になり、総じて先の下佐野遺跡、矢場遺跡より新しい傾向を看取することができる。したがって、勝保沢遺跡18号住居出土の土器群は、下佐野遺跡、矢場遺跡などに近い年代を想定することができ、これはかつて筆者が編年した古墳時代中期の土器のⅠ段階に比定されよう。また、近接する勝保沢遺跡15・16・17・19号住居にも、甕、高坏、埴の特徴から、ほぼ同様な位置付けが可能である。

ところで、これらの土器群のうち、埴には①頸部に明瞭な稜線をもつもの、②体部中位に焼成後の穿孔を施すもの、③体部上位に焼成前の穿孔を施すものが含まれている。いずれも県下で設定されている石田川式土器^{註10}にほとんどその類例がなく、穿孔をも含めるとこれらの系譜を先行する土器群に求めることができない。一方、県下における最古の須恵器は、新里村峯岸遺跡1号古墳出土のTK-73型式の特徴を備えた壺^{註12}で(第124図)、伴出する高坏及び埴の様相から、筆者のⅠ段階を前後する時期には既に須恵器の出現があったことを暗示している。

したがって、これらの土器には須恵器の影響を想定することが可能であり、①と②は共伴する埴類に形状が近似していることから従来の土器を基調とし、③は焼成前の穿孔であることと上位が屈曲気味に膨らむ体部の特徴が、須恵器壺の比較的忠実な模倣であると推察されるのである。また、これらの土器の形状から模倣した須恵器の原型を特定することはできないが、先の土器群の年代比定が正しいとすれば、土師器と須恵器の平行性から初期須恵器に平行する段階のものであると想定している。

3 須恵器を模倣した土師器の概観

ここでは、県下における須恵器を模倣した土師器を概観し、その編年を試みたい。

柳久保遺跡H-1号住居^{註13} 埴(第125図-1) 球状の体部から直線的な頸部に至り、体部上位に穿孔を試みた痕跡を残す。形状は従来の埴と一致し、須恵器の原型を特定

註6 羽鳥政彦『田中田遺跡』富士見村教育委員会 1986

註7 大木紳一郎『三ツ木遺跡』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984

註8 飯田陽一『荒砥東原遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1979

註9 坂口一 前掲註2

註10 尾崎喜左雄・今井新次・松島榮治『石田川』1968

註11 唯一の例外として昭和村中棚遺跡NY-1号住居に、一見壺のような壺が古墳時代前期の土器と伴出している。

註12 内田憲次『峯岸遺跡』新里村教育委員会 1985

註13 前原照子・浜田博一・前原豊『柳久保遺跡群』Ⅰ前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1985



第124図 峯岸遺跡 1号古墳出土土器

IV. 成果と問題点

註14 飯田陽一 前掲註8

することはできない。

註14 荒砥東原遺跡21号住居 甑 (第125図-2) 大型で上位に膨らみをもつ胴部から、短く外反する口縁部に至る。把手はないが初期須恵器を比較的忠実に模倣したものと考えられ、同時期の胴部が直線的に開く小型のものとは大きく形態を異にする。

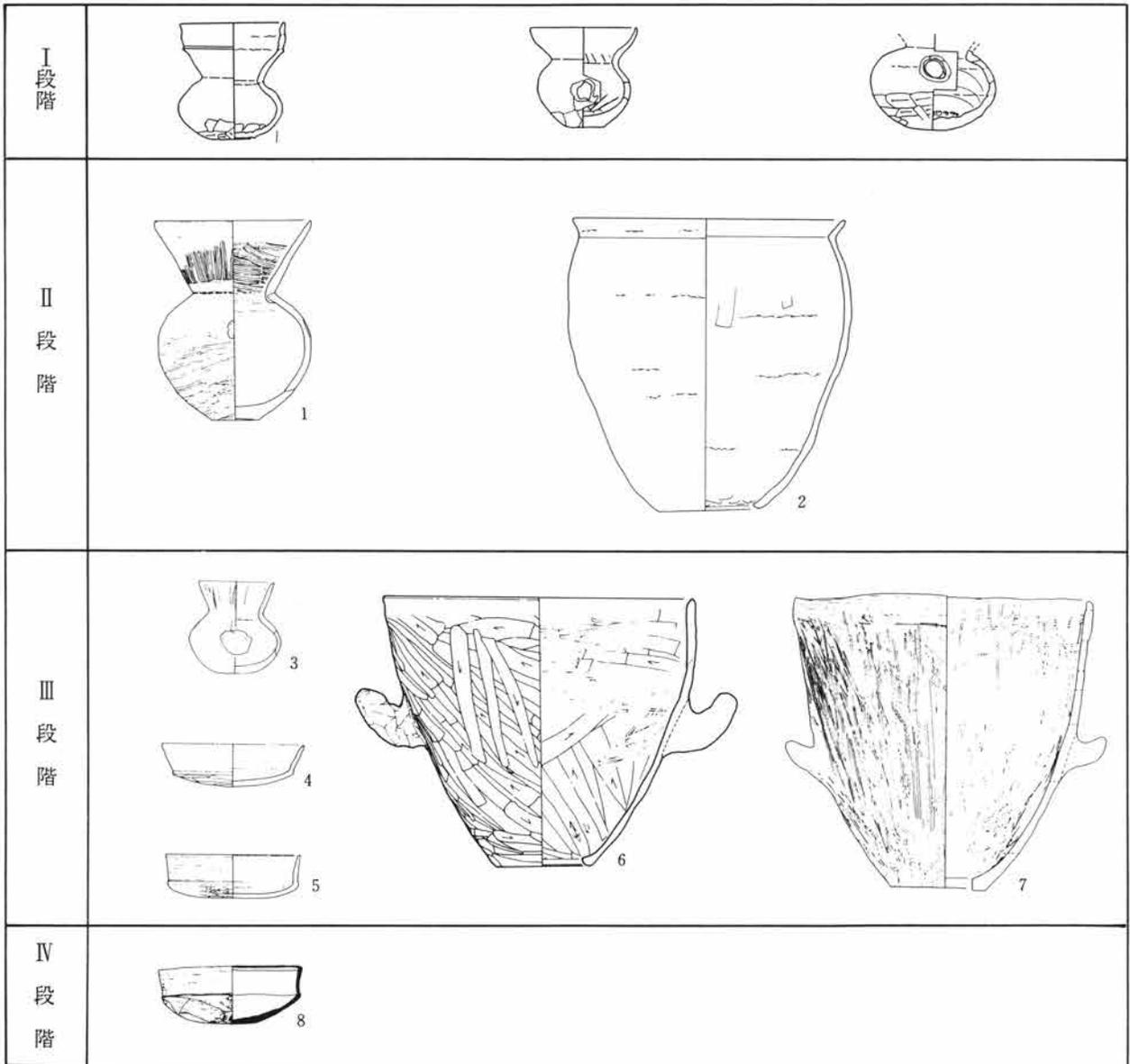
註15 大木紳一郎 前掲註7

註15 三ツ木遺跡8号住居 埴 (第125図-3) 屈曲気味の体部から短い頸部に至り、体部中位に焼成後の穿孔を施す。形状は従来埴と一致し、須恵器の原型を特定することはできない。 埴 (第125図-4) 浅い体部から、体部と口縁部を画す稜線を経て、上端が僅かに内傾する外傾した口縁部に至る。須恵器の原型を特定することはできないが、少なくとも陶邑古窯址群における田辺昭三氏による編年(以下田辺編年と略す)の、I期後半に比定されるような埴蓋を模倣したものではない。

註16 田辺昭三『須恵器大成』1981

註17 木暮誠・中野覚・原田和博・福田瑞穂『南田之口遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団1985

註17 南田之口遺跡H-2号住居 埴 (第125図-5) 浅い体部から、体部と口縁部を画す



第125図 須恵器模倣土器

稜線を経て、外傾気味の口縁部に至る。田辺編年におけるⅠ期中葉の坏蓋を比較的忠実に模倣したものと考えられる。

荒砥島原遺跡B区2号住居^{註18} 甑（第125図-6） 僅かな膨らみをもつ胴部に牛角状の把手を付す。胴部の形状は初期須恵器に近似している。

新宿遺跡BH-4号住居^{註19} 甑（第125図-7） 僅かな膨らみをもつ胴部に、端部がやや上向き把手を付す。

引間遺跡B区32号住居^{註20} 坏（第125図-8） 深い体部から、体部と口縁部を画す稜線を経て、やや外傾する口縁部に至る。この坏と共伴するような、田辺編年Ⅰ期後半の坏蓋を比較的忠実に模倣したものと考えられる。

以上、須恵器を模倣した土師器を概観した。次にこれらを筆者の編年に同定することで年代的な位置付けを行うが、ここに提示した住居の多くは既に筆者の編年に含まれているので、ここではそれ以外のものに限定して同定したい。勝保沢遺跡18号住居は、先によりⅠ段階に比定することができる。次に荒砥島原遺跡B区2号住居、新宿遺跡BH-4号住居は、小さな底部をもつ坏及び胴部下位に最大径をもつ甕の形態がⅢ段階に近似している。なお、須恵器の年代観を根拠にしてⅠ段階は5世紀第1四半期を、Ⅱ段階は同第2四半期を、Ⅲ段階は同第3四半期を、Ⅳ段階は同第4四半期をそれぞれ想定している。

4 結語

以上、須恵器を模倣したと考えられる土師器を概観し、その年代的な位置付けを試みたが、これから指摘することのできるいくつかの様相について若干の推察を試みたい。

1) 須恵器を模倣した土師器の出現期について

勝保沢遺跡18号住居を代表例とするⅠ段階は、今のところ須恵器を模倣した土師器が出現する最も古い段階で、筆者の編年においてⅠ・Ⅱ段階は概ね初期須恵器に平行する時期を想定している。このうち、県下ではⅡ段階の土師器とTK-216型式の特徴を備えた須恵器の共伴例は乏しいが、関東地方全域では例えば栃木県権現山北遺跡2号住居^{註21}、埼玉県船木遺跡11号住居^{註22}、千葉県大篠塚遺跡45号住居^{註23}などで認めることができる。一方、Ⅰ段階の土師器とTK-73型式の特徴を備えた須恵器の良好な一括遺物の出土例は、関東地方全域でも極めて少ないことと、長野県前田遺跡H-61号住居^{註25}でTK-73型式とTK-216型式に比定される甕が共伴していることから、Ⅰ段階にTK-73型式が模式的に共伴するか否かは今後の資料の増加を待たねばならない。しかし、栃木県権現山北遺跡などの例にみるように、Ⅱ段階にTK-216型式の共伴する確率が高い以上、理論的にはⅠ段階をTK-73型式に平行する段階と想定することが可能であろう。

したがって、須恵器を模倣する土師器の出現は、先行する古墳時代前期に系譜を求められる甕を基調として、最も古い須恵器の段階には既にその出現をみとすることができるのである。

2) いわゆる模倣坏について

従来、いわゆる模倣坏は引間遺跡B区32号住居のような、比較的深い体部と直立す

註18 石坂茂「荒砥島原遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団1983

註19 小島純一「柏川村の遺跡」柏川村教育委員会1985

註20 神戸聖吾・今井敏彦・佐々木恵子「引間遺跡」高崎市教育委員会1979

註21 久保哲三・大島和子・斉藤均「権現山北遺跡」宇都宮市教育委員会1979

註22 『新編埼玉県史』資料編埼玉県1982

註23 栗本佳弘・平野元三郎「東関東自動車道(千葉-成田線)関係埋蔵文化財発掘調査報告書」千葉県文化財保護協会1970

註24 関東地方における初期須恵器と土師器の平行性に関しては、別稿を準備している。

註25 堤隆「前田遺跡」御代田町教育委員会1987

IV. 成果と問題点

註26 岡田淳子・服部敬史「土師器の編年に関する試論」『八王子中田遺跡』八王子市中田遺跡調査会 1968

註27 谷井彪・横川好富『舞台』埼玉県教育委員会 1974

註28 徳江秀夫氏より御教示を頂いた。

註29 前原豊氏より御教示を頂いた。

註30 これはおそらく陶質土器、赤褐色軟質土器を指すものと思われる。

註31 外山政子「甑について」前掲註2

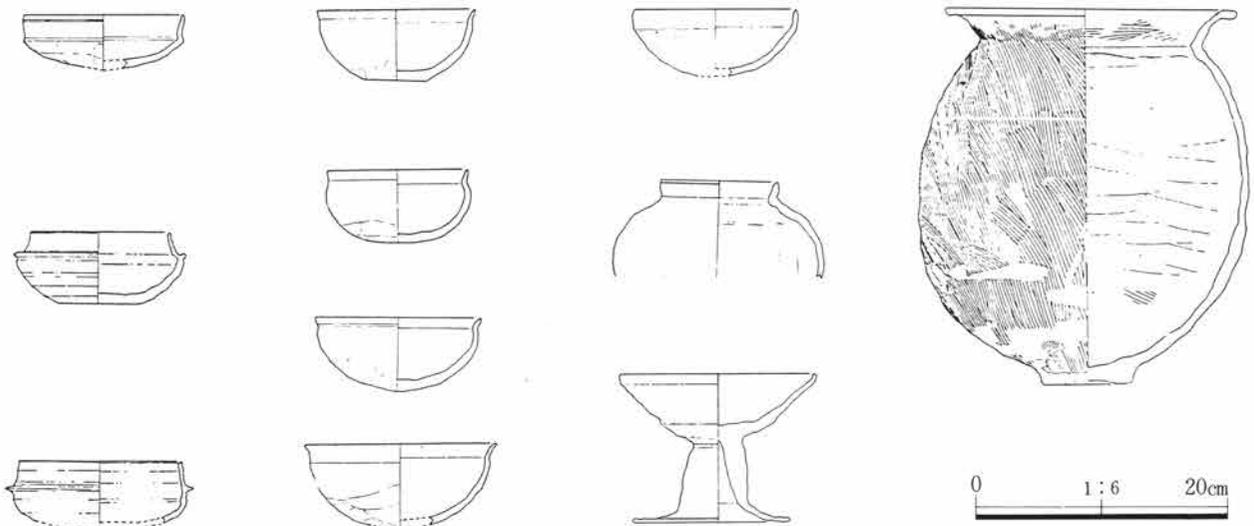
る口縁部の形態を示すものが出現期のものであるという認識に立ち、この坏をもって註26関東地方における鬼高式の概念を規定していることは周知のとおりである。鬼高式の概念規定についてここでは触れないが、こうした深い体部と直立気味の口縁部の形態をもつ坏以前に、南田之口遺跡にみられる体部の浅い坏が存在し、この形態上の差は模倣した原型である須恵器の差であると考えられる。すなわち、南田之口遺跡の坏は田辺編年におけるⅠ期中葉の坏蓋を、引間遺跡の坏は同Ⅰ期後半の坏蓋をそれぞれ忠実に模倣した結果であり、これにはⅢ段階にTK-208型式の特徴を備えた須恵器が、Ⅳ段階にTK-47型式の特徴を備えた須恵器がそれぞれ位置付けられるという、土師器と須恵器の平行関係を傍証とすることができる。

ところで、Ⅲ段階に比定した三ツ木遺跡8号住居には、浅い体部から外傾する口縁部に至る坏が出土し、これは一見すると6世紀中葉以降における忠実さの薄れた模倣坏に近似している。註27類例としては埼玉県舞台遺跡4号住居(第126図)に近似したものがあり、ここではTK-208型式の特徴を備えた須恵器坏身を伴出している。さらに、註28県下では前橋市荒砥天の宮遺跡C区12号住居で同様な坏と樽形甕が出土し、前橋市柳久保遺跡H-9号住居では筆者のⅡ段階に相当する坏との伴出例がある。註29これらの類例にみるように、この坏と伴出する土師器は、例えば引間遺跡のような坏が須恵器を忠実に模倣する段階以前の特徴を示すと言わざるを得ず、須恵器では少なくともTK-47型式以前であるという結論に達する。

したがって、この坏が須恵器を模倣したものであると仮定するならば、南田之口遺跡のようなTK-208型式を模倣した坏と相前後する、県下で最古の模倣坏ではないかと密かに考えている。

3) 土師器大型甑について

県下で出土した土師器大型甑については、その模倣した原型が須恵器ではなく、朝註30鮮半島の灰陶系、埴質系の土器にあるという見解が示されている。註31こうした大型甑に



第126図 舞台遺跡出土土器

ついて畿内では、TK-73型式段階の韓式系土器^{註32}が、次第に土師器として同化したとする見解があることから、^{註33}県下の大型甗の原型としては、①韓式系土器、②須恵器、③韓式系土器が同化した土師器の三種類が可能性として考えられることになる。

まず、原型と考え得る土器自体の出土例をみると、県下では今のところ韓式系土器の甗の報告例はなく、関東地方全域でも認められないという。また、^{註34}5世紀代の須恵器甗及び、韓式系土器が同化した畿内の甗も管見に触れていない。したがって、県下では原型として考え得る土器自体が不明であると言わざるを得ず、畿内と同様に韓式系土器から土師器へという変遷をたどることはできない。一方形状であるが、底径が口径に対して比較的小さく、中位が僅かに膨らむ胴部の土師器大型甗は、胴部が比較的直線的に外反する韓式系土器よりは、初期須恵器に近いものと考えられるが、三者ともに比較的近似した形状を示すため、決定的な決め手とは言い難いのが現状である。

以上のことから、県下における土師器大型甗は、今のところその原型が特定できないとするのが妥当かと思われる。但し、ここでは①形状が須恵器に比較的近似していること、②東国においては韓式系土器の出土例が少なく、したがってこれが土師器に与えた影響は少ないとする指摘があること、^{註35}③須恵器の影響を受けた土師器は、既に最古の須恵器の段階から存在し、大型甗が出現する時期を相前後して、これらの出土例が増加することの3点から、一応須恵器の模倣として扱った。これについては県下の韓式系土器をも含めたかたちで、稿を改めて再考したいと考えている。

以上の、須恵器を模倣した土師器に関するいくつかの現象から、県下では初期須恵器自体の出土例は少ないものの、土師器に写された形を通してその存在を窺い知ることができ、既に最古の須恵器の段階から土師器は須恵器の影響を受けていたことを指摘することができる。また、西弘海氏は関東地方の鬼高式を、模倣坏が従来の土器様式を一変させる「須恵器指向型」と規定しているが、ここに提示した須恵器模倣土師器^{註36}の出現期は、鬼高式に先行する言わば「須恵器指向型」の萌芽的段階と規定することができよう。

(昭和63年3月11日 稿了)

小考を草するについて、井上唯雄・赤山容造・能登 健・佐藤明人・石坂 茂・飯田陽一・前原 豊・小島敦子・徳江秀夫・三浦京子・酒井清治の各氏に有益な御指導と助言を賜った。記して深甚なる感謝の意を表す次第である。

註32 ここでいう韓式系土器とは、朝鮮半島の赤褐色軟質土器及び、その影響を受けて日本で製作された土器を指し、陶質土器は含まない。

註33 田中清美「古代河内地域出土の韓式系土器」『弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題』第21回埋蔵文化財研究集会発表要旨 1987

註34 酒井清治氏より御教示を頂いた。

註35 酒井清治「東国の朝鮮半島系土器」前掲註33

註36 西 弘海「土器様式の成立とその背景」前掲註1

V 科学的分析

群馬県勝保沢中ノ山遺跡出土炭化材の樹種

鈴木三男（金沢大・教養・生物）・能城修一（大阪市大・理・生物）

群馬県勢多郡赤城村の勝保沢中ノ山遺跡から出土した炭化材の樹種を同定した。この遺跡は渋川市の北東約4kmの赤城山西麓末端の台地にあり、縄文前期のA区3号住居址とA区26号土壙からでた炭各1点、古墳時代のZ区の17号住居址からの16点、18号住居址からの51点、19号住居址からの1点、それにZ区の奈良時代頃の1号墓壙からと江戸時代の1号炭焼窯からの各1点、合計72点を調査した。同定は双眼実体顕微鏡を用いて横断面の観察をして樹種のグループ分けを大まかにを行い、その各々のグループについて走査型電子顕微鏡あるいは光学顕微鏡を用いて観察し、同定した。その結果以下の8樹種と1草本が同定された。以下に同定された種類の同定の根拠となった形態について記載し、その顕微鏡写真を図版1～7に示した。この図版には光学顕微鏡による写真(LM)、双眼実体顕微鏡による写真(LSM)、走査電子顕微鏡による写真(SEM)がある。また、C、T、R、Lはそれぞれ横断面、接線断面、放射断面、縦断面を示し、その後の数字は拡大倍率を示している。同定された結果のリストを表1に載せた。これら同定した炭化材の証拠標本は顕微鏡写真の形で金沢大学教養部生物学教室に保管してあり、その写真は表1の右覧に示してある。写真番号を以て検索できる。

記 載

1. アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科

大部分炭化しているが一部に未炭化の部分がある薄板材で、切片をとり光学顕微鏡で観察した。これは年輪が明瞭な針葉樹材で、垂直、水平の樹脂道を持ち、分野壁孔は大型窓状、放射仮道管の内壁には著しい鋸歯状肥厚がある、などからマツ属のアカマツの材と同定した。

2. クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus* sect. *Eucarpinus* カバノキ科

丸みを帯びた小管孔が単独あるいは放射方向に数個複合して散在する散孔材で、横断面では管孔が全く分布しない部分、すなわち集合放射組織の部分がある。道管の穿孔は単一で内壁に螺旋肥厚を持ち、放射組織は1ないし2、あるいは3列で同性に近い異性である、などからクマシデ属のイヌシデ節の材と同定した。関東地方に分布するイヌシデ節には平野部から山地丘陵にかけて特に二次林に多いイヌシデ *Carpinus tchonoskii* Maxim. と山地に多いアカシデ *C. laxiflora* (Sieb. et Zucc.) Blume があるが、材構造での識別は今の所できていない。

3. アサダ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科

丸みを帯びた小管管が放射方向に数個複合するかあるいは単独で散在する散孔材で、前述のイヌシデ節によく似るが管孔はまんべんなく分布することなどから区別される。炭化材の小片ではイヌシデ節との区別はさらにむずかしいが、ある程度の大きさがあれば、集合放射組織の有無によって区別される。

4. ブナ属 *Fagus* ブナ科

角張った小管孔が均一に散在する散孔材で、道管の穿孔は単一と階段状、放射組織は幅の狭いものからかなり広いものまである、などからブナ属の材と同定した。この属には冷温帯の代表的樹種であるブナ *Fagus crenata* Blume とそれより下部に出てくるイヌブナ *F. japonica* Maxim. があるが、材構造での区別は今の所できていない。

5. コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

年輪の初めに大管孔が1列から数列あり、晩材部では角張った小管孔が放射方向あるいは火災に配列する環孔材で、道管の穿孔は単一、放射組織は単列と大きな複合放射組織がある、などからコナラ属のコナラ亜属のうち、ミズナラ *Quercus mongolica* Fis. ex Turcz.、コナラ *Q. serrata* Mur.、カシワ *Q. dentata* Thunb.、ナラガシワ *Q. aliena* Blume などコナラ節の材であると同定した。これは道管の配列などではクリに良く似ている。複合放射組織が見つければ容易に区別できるがコナラ節の材でもその出現頻度が極めて少ないものがある。そのようなものでは充分大きな試料を観察しないと誤同定する恐れがある。また、この大きな複合放射組織のため、炭化材ではしばしば放射方向の割れ目が沢山できる。これは大きな複合放射組織を持つコナラ属の炭にみられる大きな特徴であるが、その一方で、しばしば薄片状に放射方向に割れてしまうため、残った薄片状の炭の横断面を観察すると複合放射組織が全く見えないため、クリと誤同定することがあるので注意を要する。

6. カエデ属 *Acer* カエデ科

中型の丸みを帯びた管孔が均一に散在する散孔材で、道管の穿孔は単一、内壁に螺旋肥厚を持ち、放射組織は数細胞幅で同性、などからカエデ属の材と同定した。この属には多くの種類があり、詳細な区別はむずかしい。

7. トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科

年輪の初めに丸い大管孔が並び、そこから順次径を減じた厚壁の小管孔が単独あるいは数個放射方向に複合して散在する環孔材で、木部柔組織は周囲状あるいは晩材部では連合翼状になり、道管の穿孔は単一、放射組織はほぼ2列で同性、などからトネリコ属の材と同定した。この属にはヤチダモ *Fraxinus mandshurica* Rupr. var. *japonica* Maxim. やシオジ *F. spaethiana* Lingelsh. などがあるが材構造での区別はできていない。

8. アワブキ *Meliosma myriantha* Sieb. et Zucc. アワブキ科

丸くやや壁の厚い小管孔が放射方向に数個複合して散在する散孔材で、道管の穿孔は単一、放射組織は数細胞幅で背が高く、粗雑である、などからアワブキの材と同定した。アワブキは暖温帯から冷温帯の山地丘陵に普通な落葉小高木で、やや燃えにくく、燃やすと枝や幹の切口から泡が吹き出すことにより名がついた。

V. 科学的分析

9. ヨシ属 *Phragmites* イネ科

節のある中空の茎で、横断面での維管束は一カ所の原生木部とその左右の2本の丸く大きな後生木部道管、原生木部外側の篩部、そしてそれら全体をとりまく繊維組織でできており、それが茎全体に散在していることから単子葉類イネ科の稈であることが分かる。イネ科で標本の太さ(直径約0.8cm)の稈を持つものにはススキ、笹類、ヨシ属が考えられる。このうち、ススキは稈が中空でないことにより容易に区別できるが笹類とヨシ属の区別はややむずかしい。笹類は葉鞘が脱落した後は節の所に明瞭な1本の筋ができ、ヨシ属ではそれが不明瞭である。横断面でみると笹類の維管束は稈の内側から外側に向かって皆きちんとその軸が放射状に揃っているのに対し、ヨシ属ではその軸の向きが多少不揃いになる、などで区別できる。この標本はその2点でもヨシ属と同定できる。ヨシ属には低湿地に多いヨシ *Phragmites communis* Trin. と河川の中流域に多いツルヨシ *Phragmites japonica* Steud. があるが、その稈の一部の形態で区別するのはむずかしい。

考 察

以上同定した結果の一覧を第3表に示した。この大部分は古墳時代の住居址の炭化材であるが、それ以外を見てみると、縄文前期の2点はアワブキと広葉樹材の樹皮で、奈良時代頃の墓壙からのものは草本性のヨシ属の稈、江戸時代の炭焼窯のものはアカマツの材であった。関東地方でマツ類が増えたのは中世以降、近世になってと考えられているが、この結果はこれによく一致する。

さて、古墳時代の住居址の炭化材68点の同定結果を見ると(第3表)、圧倒的に多いのはコナラ節で、17号住居址16点のうち11点、18号住居址51点のうち44点、19号住居址の1点と、実に総数68点の内、56点を占めており、その住居址内の分布を見ると第126図に示されているように竪穴住居の主要な柱材がこのコナラ節の材でできていることが明白である。これについて多いのはアサダとイヌシデ節で各4点ずつあるが、図2に示してあるようにその分布はそれぞれ集まっており、それぞれの場所でもともとは1本の本木であったものが燃えてバラバラになったため標本数が増えているとも見なされる。さらにトネリコ属、カエデ属、ブナ属があるがいずれも、2~1点のみであり、これらの住居では基本的にはナラの材を用い、その補修あるいはその他の理由で、イヌシデ節、アサダ、トネリコ属、カエデ属、ブナ属などが使われていたといえる。コナラ節は残念ながら材構造で樹種を詳しく決めることはできないが、現在の勝保沢付近には二次林が多く、コナラが最も普遍的に生えており、太くはないが手頃な太さと長さの材が容易にしかも大量に得られる。また多少山間部にはいるとミズナラも出てくる。これは比較的大径木が多い。竪穴住居では別に大径材は必要ではないことから、その目的には付近に豊富にあったであろうコナラ材で充分であったといえる。そしてその補修などのためにやはり手近にあったイヌシデ、アサダなどの雑木林の木が用いられたと考えることができよう。

群馬県ではやはり焼失した住居址が諸処で発掘されており、同じ赤城山の南西麓に

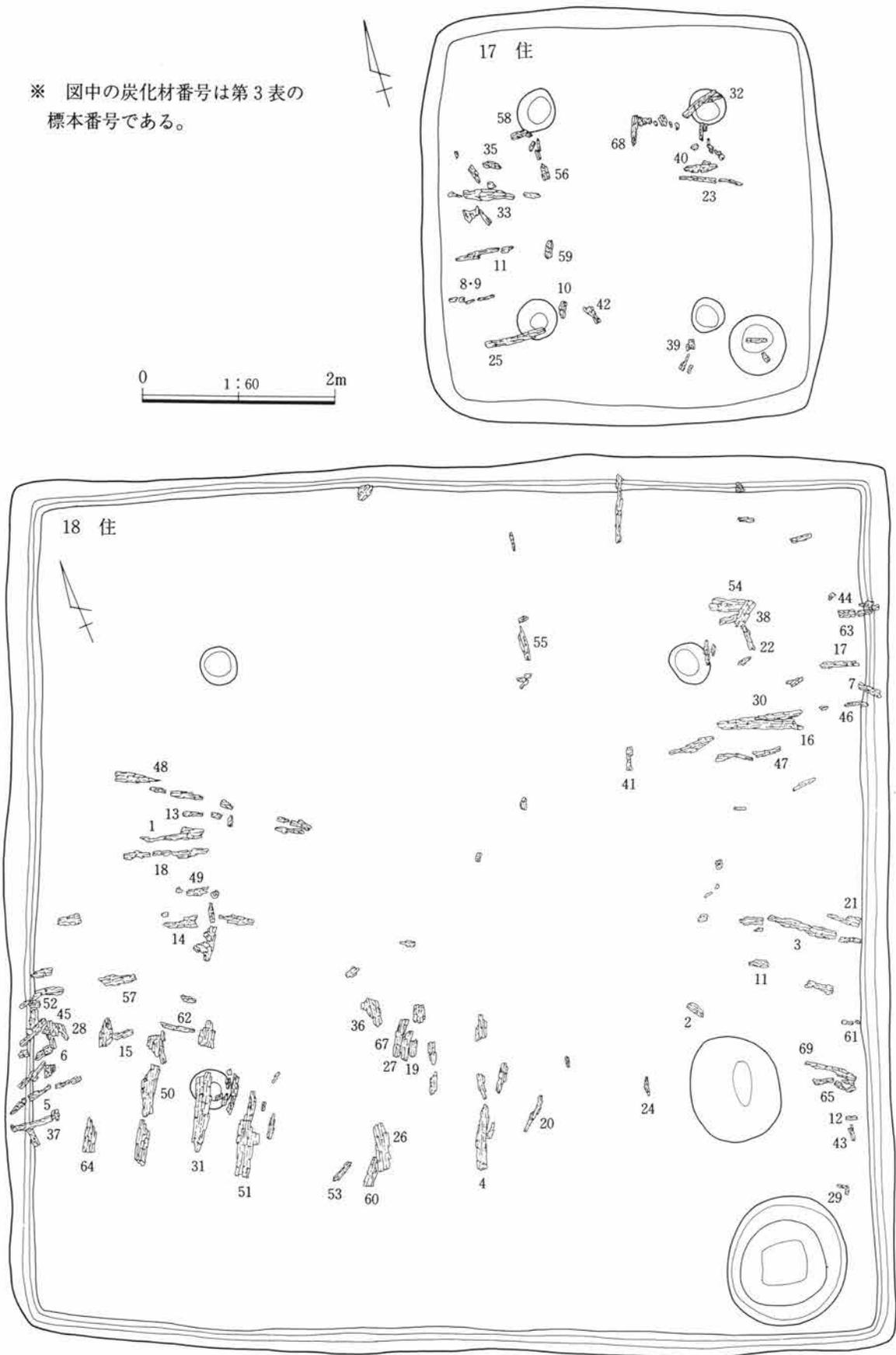
ある利根郡昭和村の糸井宮前遺跡では古墳時代の第38号住居址の炭化材の樹種が調べられている。^{註1}この住居址から得られた103点の炭化材片のうち、56点がイヌエンジュで、41がコナラ属、残り6点がニレ属であるという(三野：1985)。コナラ属としたものは報告文中に記述があるようにコナラ、ミズナラ、カシワなどであるというから、この報告のコナラ節に一致する。報告書の記載は簡略でよく分からないが、イヌエンジュと同定されたものは、顕微鏡写真が示されているのを見ると、晩材部の小管孔の配列が波状の斜め接線状であること、接線断面で層階状構造の気配が見えないこと、放射組織は異性で鞘状になっている。炭化材のため微細な構造がよく観察されないため断定はむずかしいところだが、この顕微鏡写真から判断すると、すくなくともこの写真に写っているものは、どうやらイヌエンジュではなく、ニレ科エノキ属の材であるらしい。もしそのように考えられるとすると、ニレ属として掲載されている写真のものもそこに見える形質から判断してエノキ属としてさしつかえないようだ。してみるとこの糸井宮前遺跡の古墳時代の住居の用材はエノキ属とコナラ節ということになる。

住居が焼失したままで保存され用材が炭化した状態で見つかることはよくあるが、その樹種を同定の根拠も明記して、きちんと報告されている例は多くはない。この報告でみた勝保沢の古墳時代のZ区17、18、19号住居址の出土材がコナラ節中心で、それにイヌシデ節、アサダなどが多少とも加わったものであったことと糸井宮前遺跡のそれがエノキ属とコナラ節であることを合わせ考えると、いずれも関東地方の平野部から低い丘陵地帯の二次林に普遍的なコナラ、エノキ、イヌシデ、アサダなどを想定させる分類群の材であることが分かる。これは古墳時代の竪穴住居が当時の遺跡周辺に普遍的に成立していたとみなされる二次林からある程度材質を選んで用いていたと考えられる。

註1 三野紀雄「炭化した木材片の樹種同定」『糸井宮前遺跡Ⅰ』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985

V. 科学的分析

※ 図中の炭化材番号は第3表の
標本番号である。

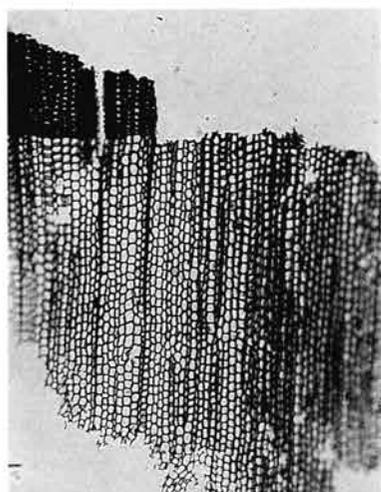


第127図 17・18号住居の炭化材の出土状況

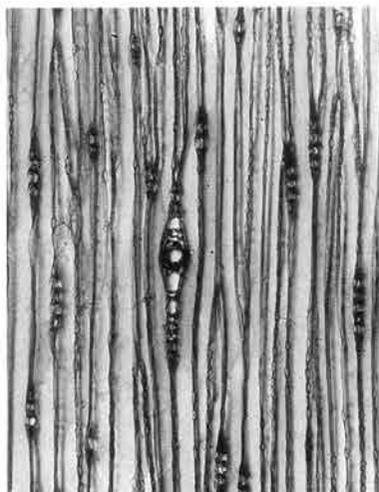
第3表 勝保沢中ノ山遺跡出土炭化材の樹種

標本番号	樹種名	遺構名	遺物No	時 期	写真No	標本番号	樹種名	遺構名	遺物No	時 期	写真No
GKF1	コナラ節	18号住	39	古墳時代	1-1	GKF38	ブナ属	18号住	45	古墳時代	2-6
GKF2	コナラ節	18号住	12	古墳時代	1-3	GKF39	コナラ節	17号住	15	古墳時代	2-7
GKF3	コナラ節	18号住	8	古墳時代	1-4	GKF40	コナラ節	17号住	13	古墳時代	2-8
GKF4	コナラ節	18号住	15	古墳時代	1-5	GKF41	コナラ節	18号住	55	古墳時代	2-9
GKF5	コナラ節	18号住	28	古墳時代	1-6	GKF42	コナラ節	17号住	1	古墳時代	2-10
GKF6	コナラ節	18号住	30	古墳時代	1-7	GKF43	イヌシデ節	18号住	2	古墳時代	2-11
GKF7	コナラ節	18号住	50	古墳時代	1-8	GKF44	コナラ節	18号住	47	古墳時代	2-12
GKF8	イヌシデ節	17号住	4-1	古墳時代	1-9	GKF45	コナラ節	18号住	31	古墳時代	2-13
GKF9	コナラ節	17号住	4-2	古墳時代	1-10	GKF46	コナラ節	18号住	51	古墳時代	2-14
GKF10	コナラ節	17号住	2	古墳時代	1-11	GKF47	コナラ節	18号住	54	古墳時代	2-15
GKF11	コナラ節	17号住	5	古墳時代	1-12	GKF48	コナラ節	18号住	41	古墳時代	2-16
GKF12	イヌシデ節	18号住	3	古墳時代	1-13	GKF49	コナラ節	18号住	37	古墳時代	2-17
GKF13	コナラ節	18号住	40	古墳時代	1-14	GKF50	イヌシデ節	18号住	25	古墳時代	2-18
GKF14	コナラ節	18号住	36	古墳時代	1-15	GKF51	アサダ	18号住	23	古墳時代	2-19
GKF15	アサダ	18号住	33	古墳時代	1-16	GKF52	コナラ節	18号住	32	古墳時代	2-20
GKF16	コナラ節	18号住	53	古墳時代	1-17	GKF53	コナラ節	18号住	18	古墳時代	2-21
GKF17	コナラ節	18号住	49	古墳時代	1-18	GKF54	コナラ節	18号住	44	古墳時代	2-22
GKF18	コナラ節	18号住	38	古墳時代	1-19	GKF55	コナラ節	18号住	43	古墳時代	2-23
GKF19	コナラ節	18号住	19	古墳時代	1-20	GKF56	コナラ節	17号住	9	古墳時代	2-24
GKF20	コナラ節	18号住	14	古墳時代	1-21	GKF57	コナラ節	18号住	34	古墳時代	2-25
GKF21	コナラ節	18号住	9	古墳時代	1-22	GKF58	コナラ節	17号住	10	古墳時代	2-26
GKF22	コナラ節	18号住	46	古墳時代	1-23	GKF59	カエデ属	17号住	6	古墳時代	2-27
GKF23	アサダ	17号住	14	古墳時代	1-24	GKF60	コナラ節	18号住	17	古墳時代	2-28
GKF24	コナラ節	18号住	13	古墳時代	1-25	GKF61	コナラ節	18号住	6	古墳時代	2-29
GKF25	トネリコ属	17号住	3	古墳時代	1-26	GKF62	コナラ節	18号住	35	古墳時代	2-30
GKF26	コナラ節	18号住	16	古墳時代	1-27	GKF63	コナラ節	18号住	48	古墳時代	2-31
GKF27	コナラ節	18号住	20	古墳時代	1-28	GKF64	アサダ	18号住	26	古墳時代	2-32
GKF28	コナラ節	18号住	29	古墳時代	1-29	GKF65	コナラ節	18号住	4	古墳時代	2-33
GKF29	コナラ節	18号住	1	古墳時代	1-30	GKF66	コナラ節	19号住	1	古墳時代	2-34
GKF30	コナラ節	18号住	52	古墳時代	1-31	GKF67	コナラ節	18号住	21	古墳時代	2-35
GKF31	コナラ節	18号住	24	古墳時代	1-32	GKF68	コナラ節	17号住	11	古墳時代	2-36
GKF32	コナラ節	17号住	12	古墳時代	1-33	GKF69	コナラ節	18号住	5	古墳時代	3-1
GKF33	コナラ節	17号住	7	古墳時代	1-34	GKF70	アワブキ	3号住		縄文前期	3-2
GKF35	トネリコ属	17号住	8	古墳時代	2-3	GKF71	樹皮	26号壙		縄文前期	3-3
GKF36	コナラ節	18号住	22	古墳時代	2-4	GKF72	ヨシ属	122 壙		奈良時代	3-4
GKF37	コナラ節	18号住	27	古墳時代	2-5	GKF73	アカマツ	炭焼窯		江戸時代	3-5

図版 1



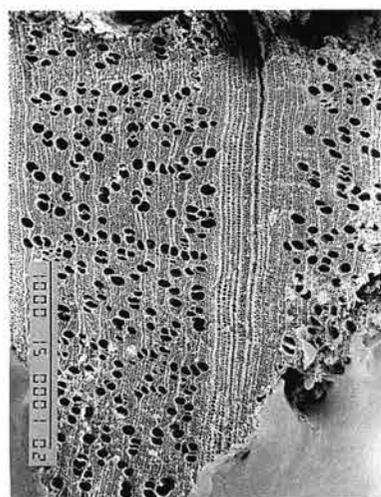
1. アカマツ(GKF-73) CX32(LM)



2. 同(GKF-73) TX80(LM)



3. 同(GKF-73) RX320(LM)



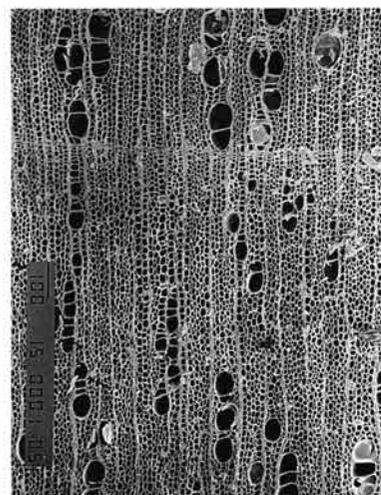
4. イヌシデ節(GKF-8) CX35(SEM)



5. 同(GKF-8) TX50(SEM)



6. 同(GKF-8) RX175(SEM)



7. イヌシデ節(GKF-50) CX50(SEM)



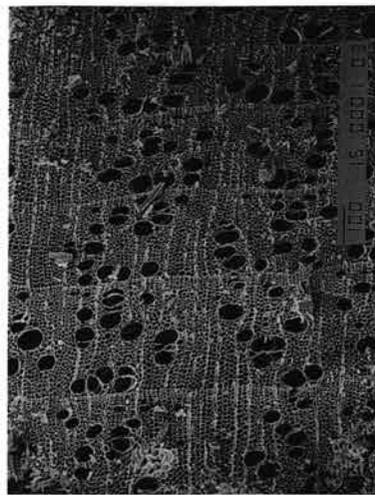
8. 同(GKF-50) TX100(SEM)



9. 同(GKF-50) RX100(SEM)



10. イヌシデ節(GKF-43) CX17(LSM)



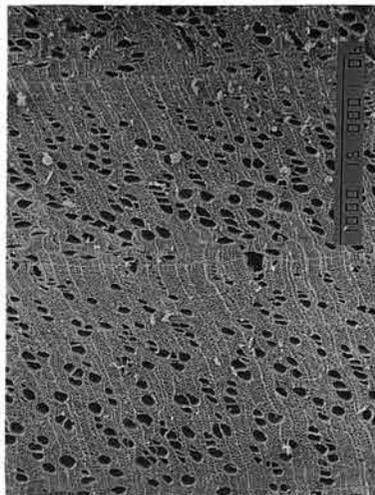
11. 同(GKF-43) CX50(SEM)



12. 同(GKF-43) TX100(SEM)



13. アサダ(GKF-51) CX17(LSM)



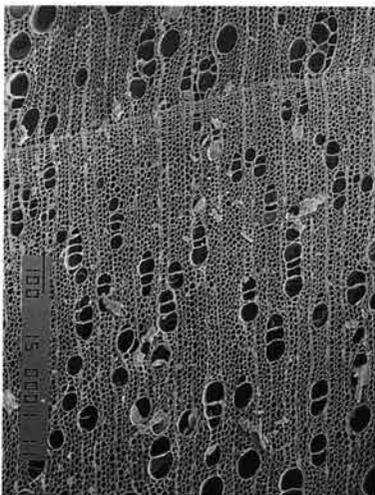
14. 同(GKF-51) CX25(SEM)



15. 同(GKF-51) TX100(SEM)



16. アサダ(GKF-51) RX100(SEM)

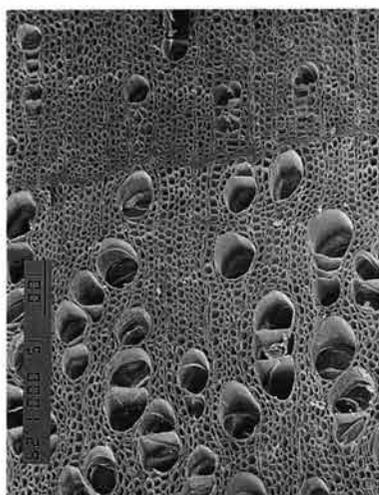


17. 同(GKF-64) CX50(SEM)



18. 同(GKF-15) CX17(LSM)

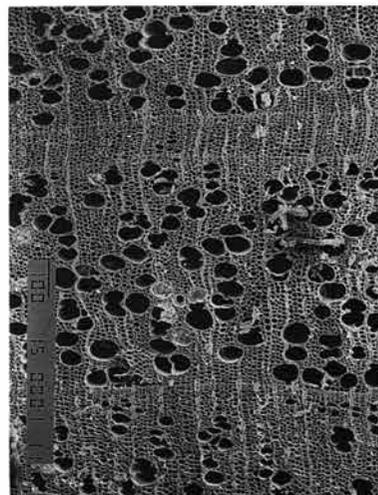
図版 3



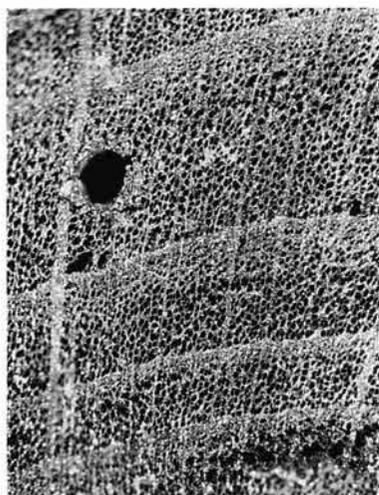
19. アサダ(GKF-15) CX100(SEM)



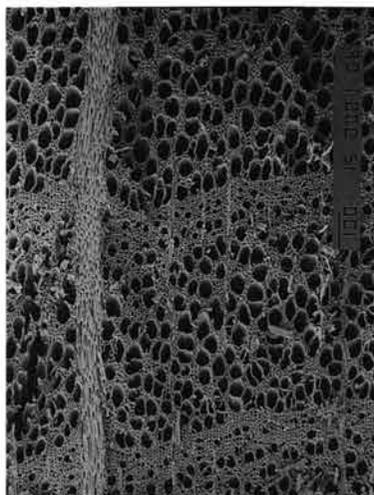
20. 同(GKF-15) TX100(SEM)



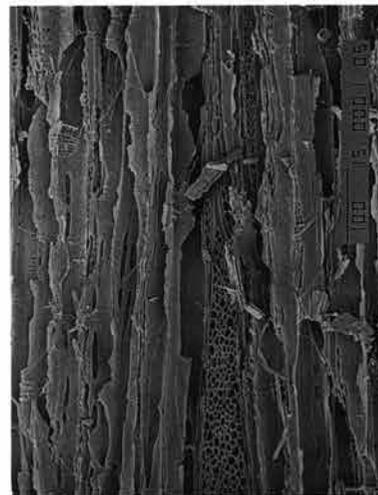
21. 同(GKF-23) CX50(SEM)



22. プナ属(GKF-38) CX17(LSM)



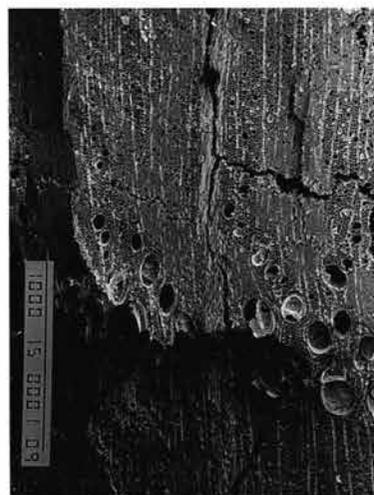
23. 同(GKF-38) CX50(SEM)



24. 同(GKF-38) CX100(SEM)



25. プナ属(GKF-38) RX100(SEM)



26. コナラ節(GKF-46) CX25(SEM)



27. 同(GKF-46) CX50(SEM)



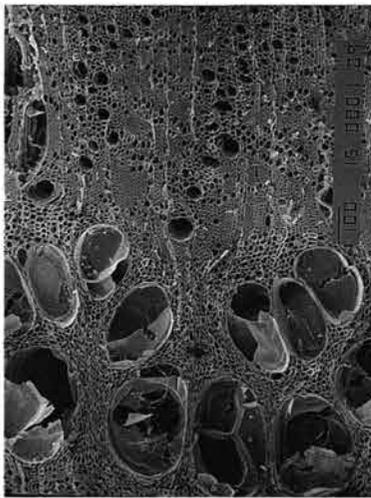
28. コナラ節(GKF-46) TX50(SEM)



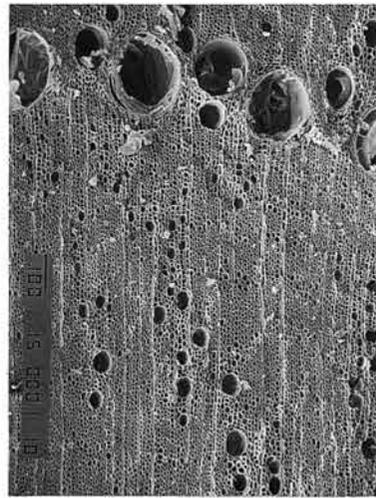
29. 同(GKF-46) TX100(SEM)



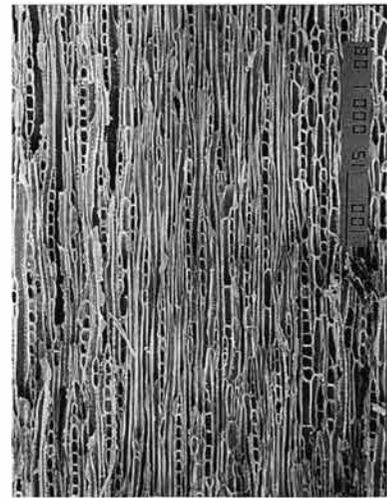
30. 同(GKF-46) RX100(SEM)



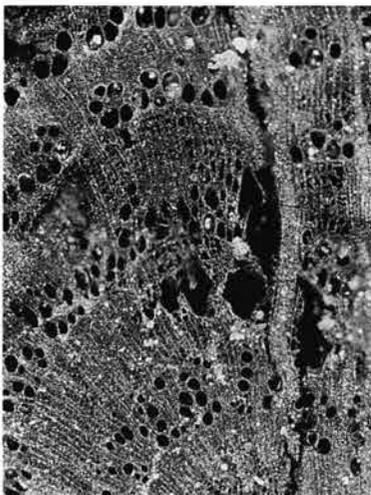
31. コナラ節(GKF-17) CX50(SEM)



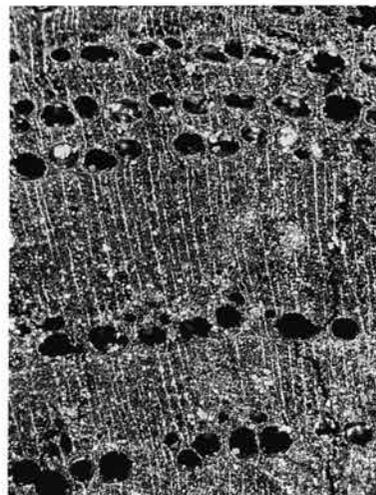
32. 同(GKF-49) CX50(SEM)



33. 同(GKF-49) TX100(SEM)



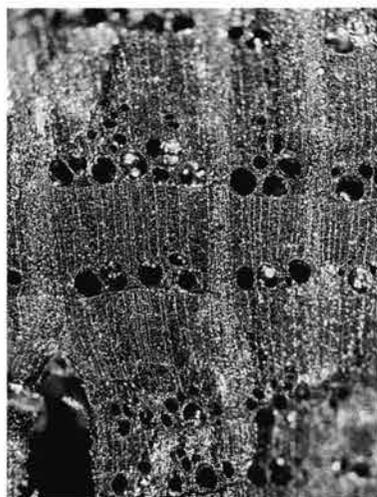
34. コナラ節(GKF-10) CX17(LSM)



35. 同(GKF-68) CX17(LSM)



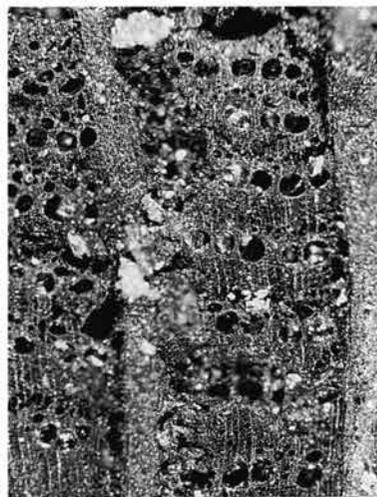
36. 同(GKF-16) CX17(LSM)



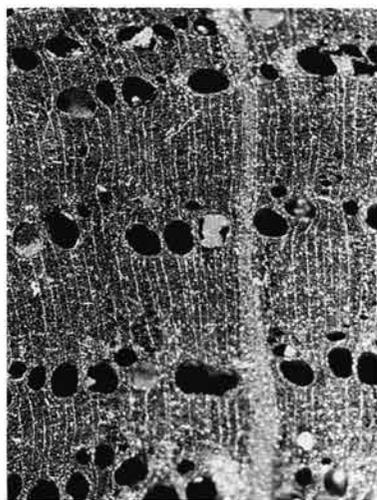
37. コナラ節(GKF-20) CX17(LSM)



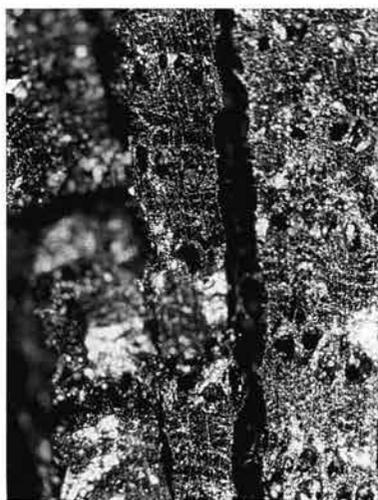
38. 同(GKF-4) CX17(LSM)



39. 同(GKF-32) CX17(LSM)



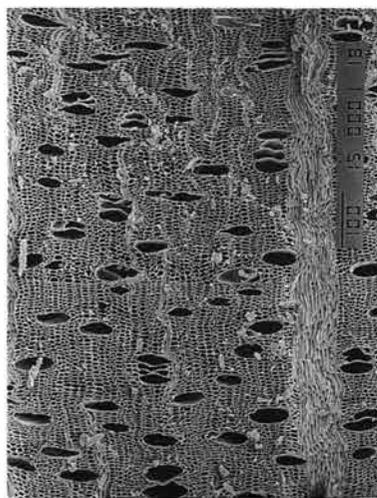
40. コナラ節(GKF-14) CX17(LSM)



41. 同(GKF-18) CX17(LSM)



42. カエデ属(GKF-59) CX17(LSM)



43. カエデ属(GKF-59) CX50(SEM)



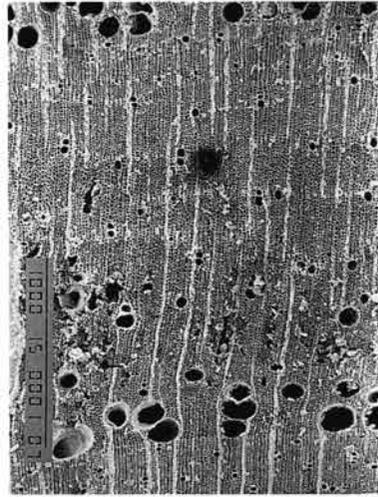
44. 同(GKF-59) TX100(SEM)



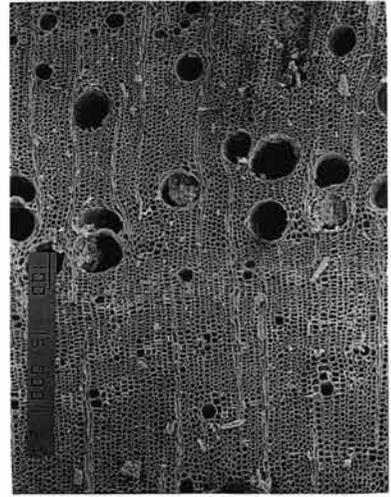
45. 同(GKF-59) RX100(SEM)



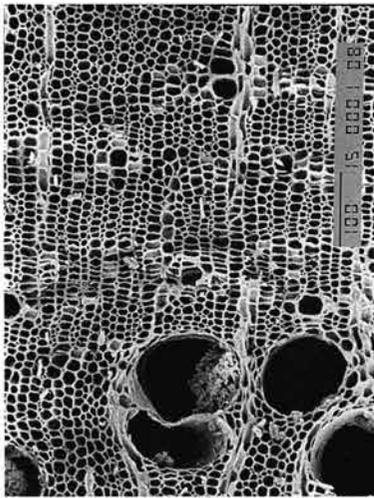
46. トネリコ属(GKF-25) CX17(LSM)



47. 同(GKF-25) CX25(SEM)



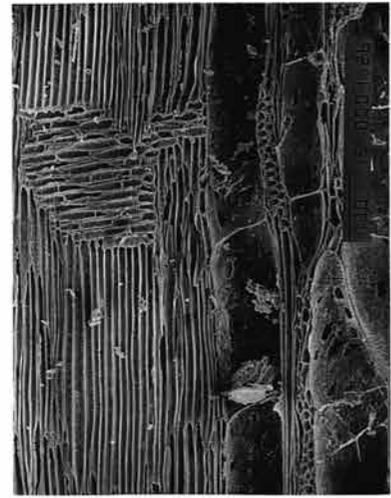
48. 同(GKF-25) CX50(SEM)



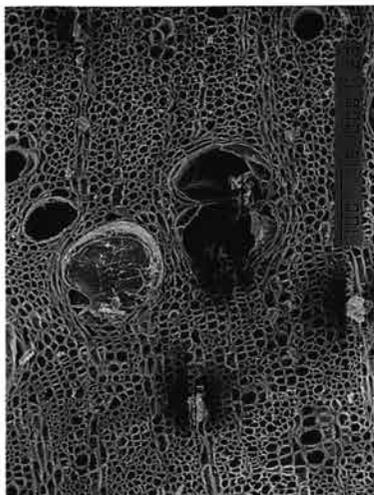
49. トネリコ属(GKF-25) CX100(SEM)



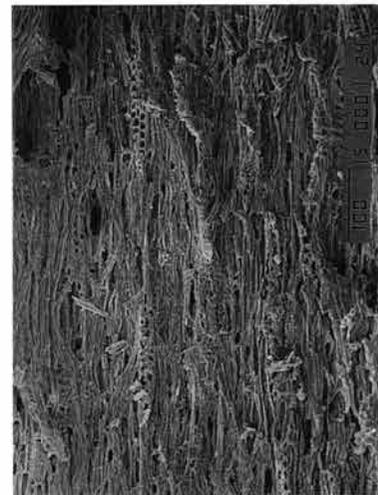
50. 同(GKF-25) TX100(SEM)



51. 同(GKF-25) TX100(SEM)



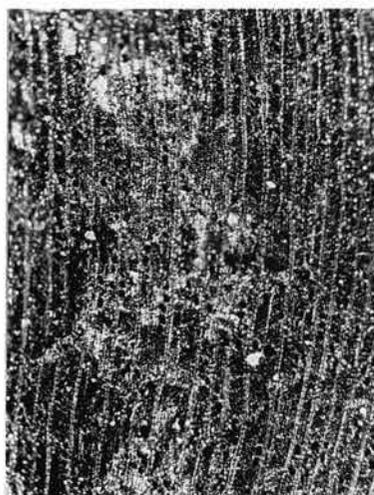
52. トネリコ属(GKF-35) CX100(SEM)



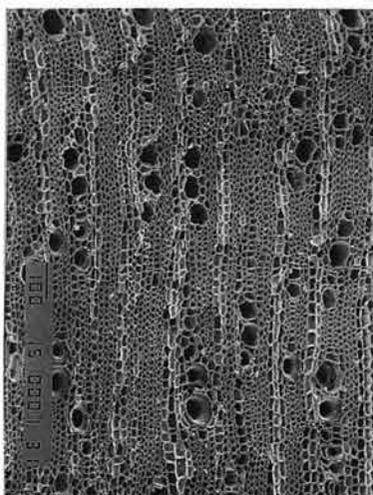
53. 同(GKF-35) TX100(SEM)



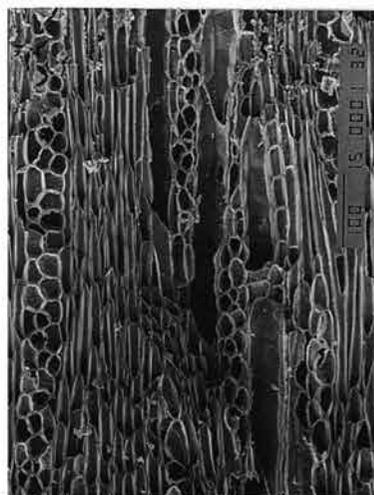
54. 同(GKF-35) RX100(SEM)



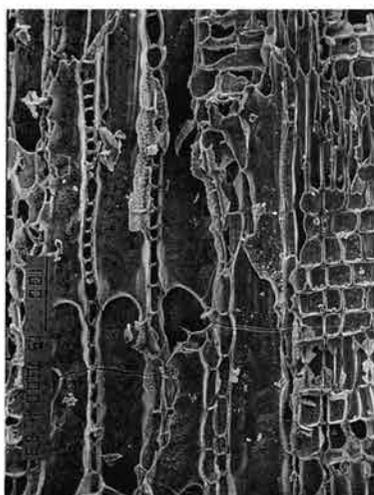
55. アワブキ(GKF-70) CX17(LSM)



56. 同(GKF-70) CX50(SEM)



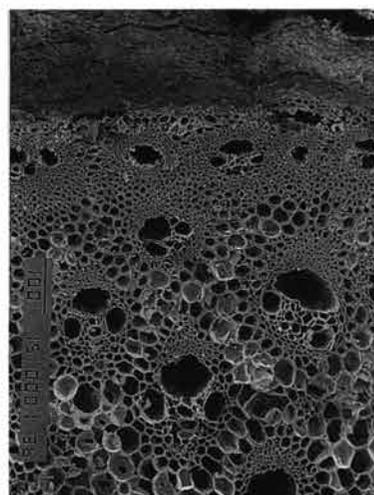
57. 同(GKF-70) TX100(SEM)



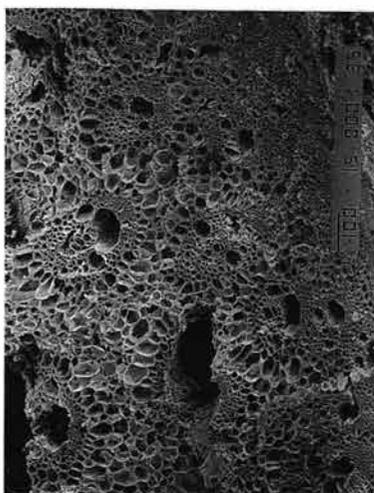
58. アワブキ(GKF-70) RX100(SEM)



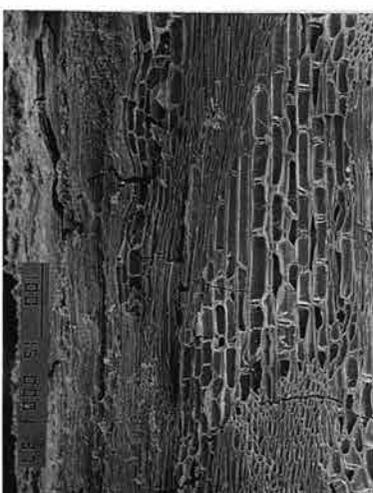
59. ヨシ属(GKF-72) CX5(LSM)



60. 同(GKF-72) CX75(SEM)



61. ヨシ属(GKF-72) CX75(SEM)



62. 同(GKF-72) LX100(SEM)



63. 同(GKF-72) LX100(SEM)

写 真 图 版



1. 遺跡の遠景（北より）



2. B・A調査区の全景
（北より）



3. A調査区の全景



1. 1号住居



2. 埋没土層の断面 (A-A')



3. 遺物の出土状況



4. 遺物の出土状況 (No21)



5. 3号住居



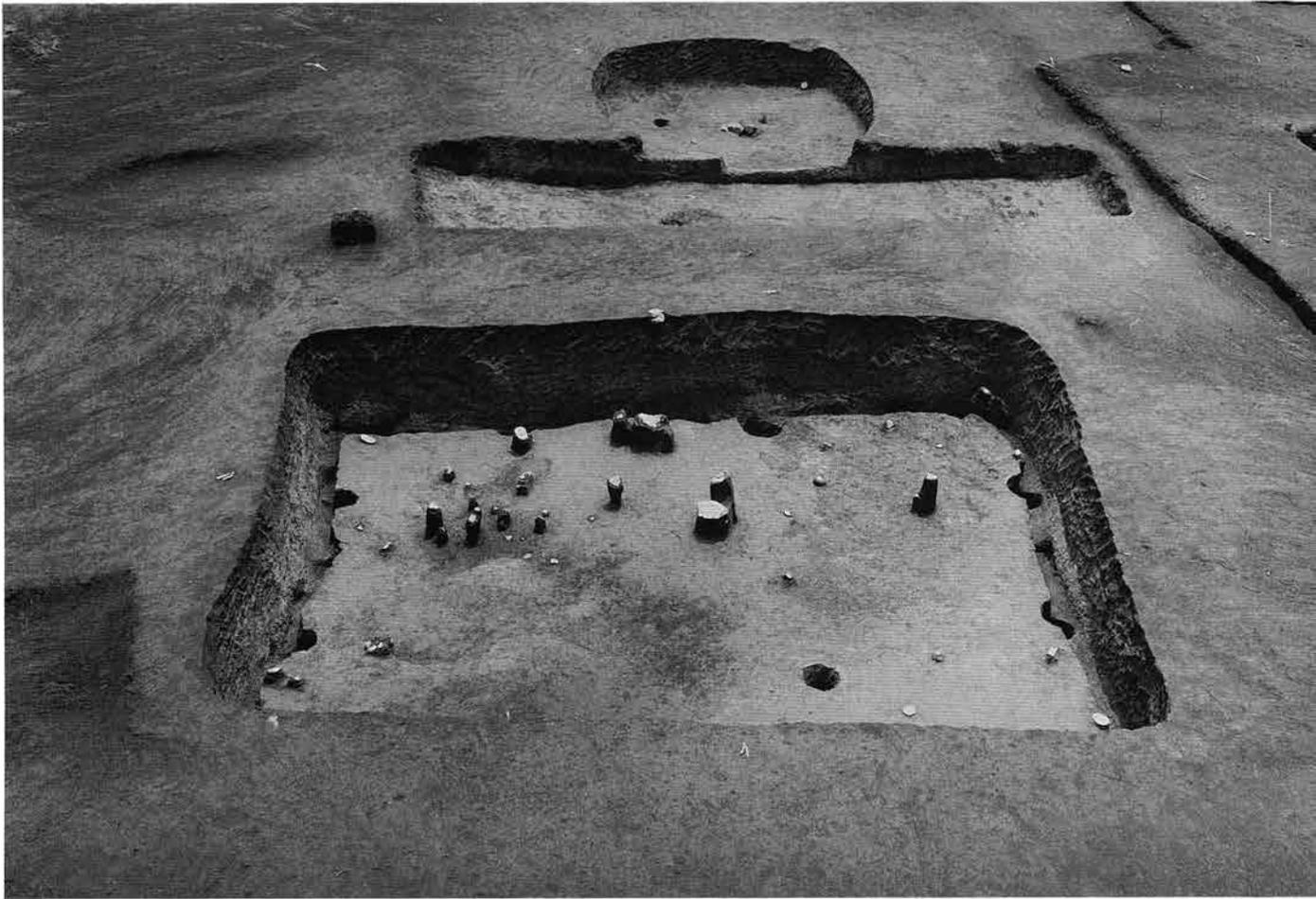
6. 埋没土層の断面 (C-C')



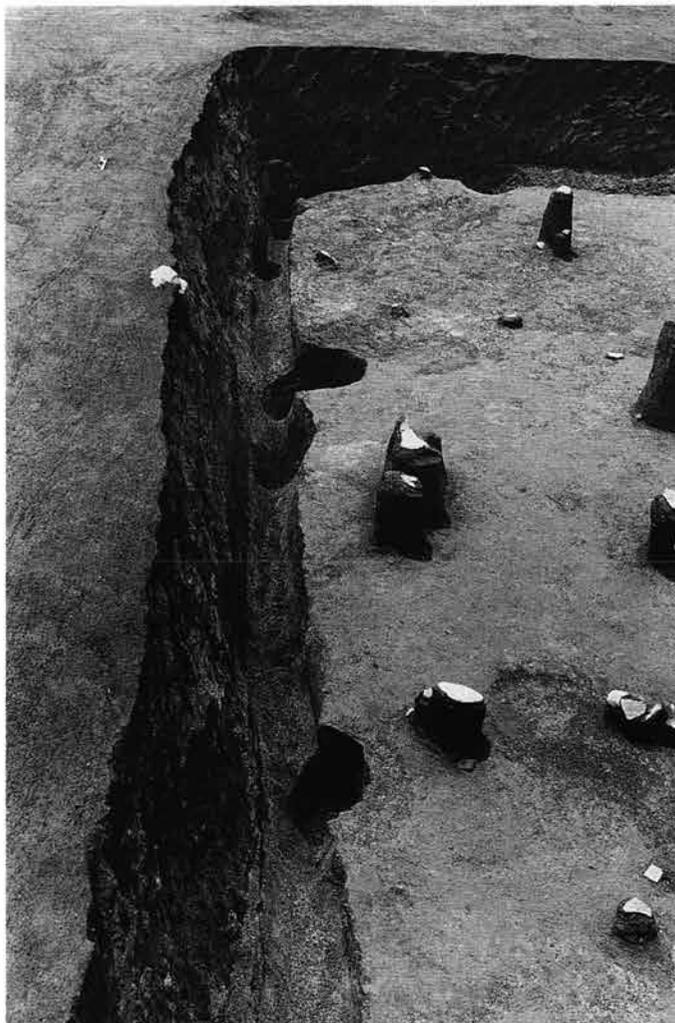
7. 炉



8. 遺物取り上げ後の状況



1. 2号住居（後方3号住居）



2. 周溝と柱穴の検出状況



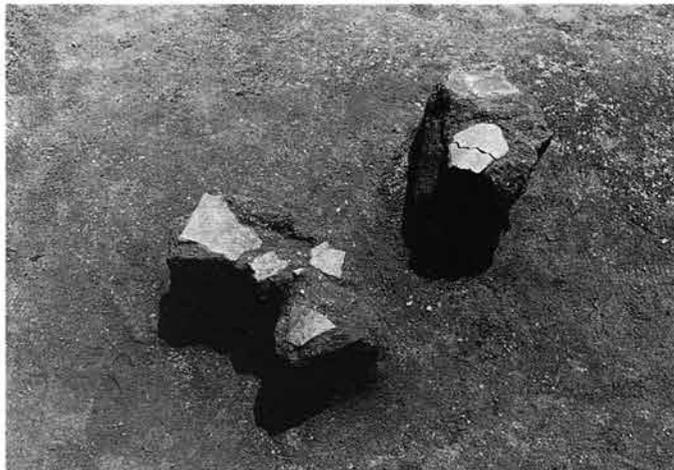
3. 遺物出土状況



4. 遺物出土状況 (No14)



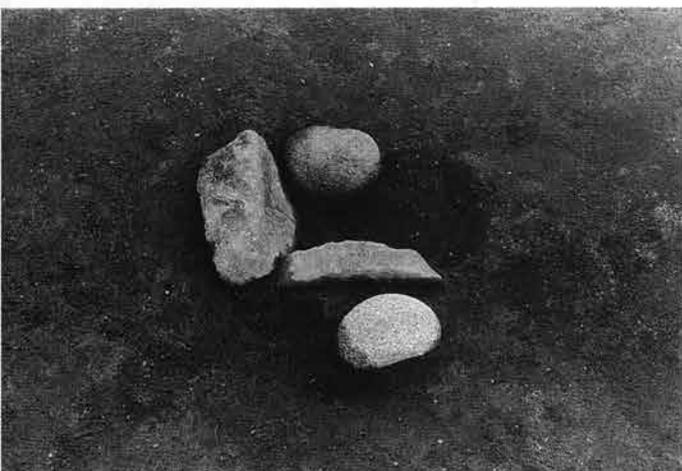
1. 4号住居



2. 遺物の出土状況 (No1)



3. 6号住居



4. 炉



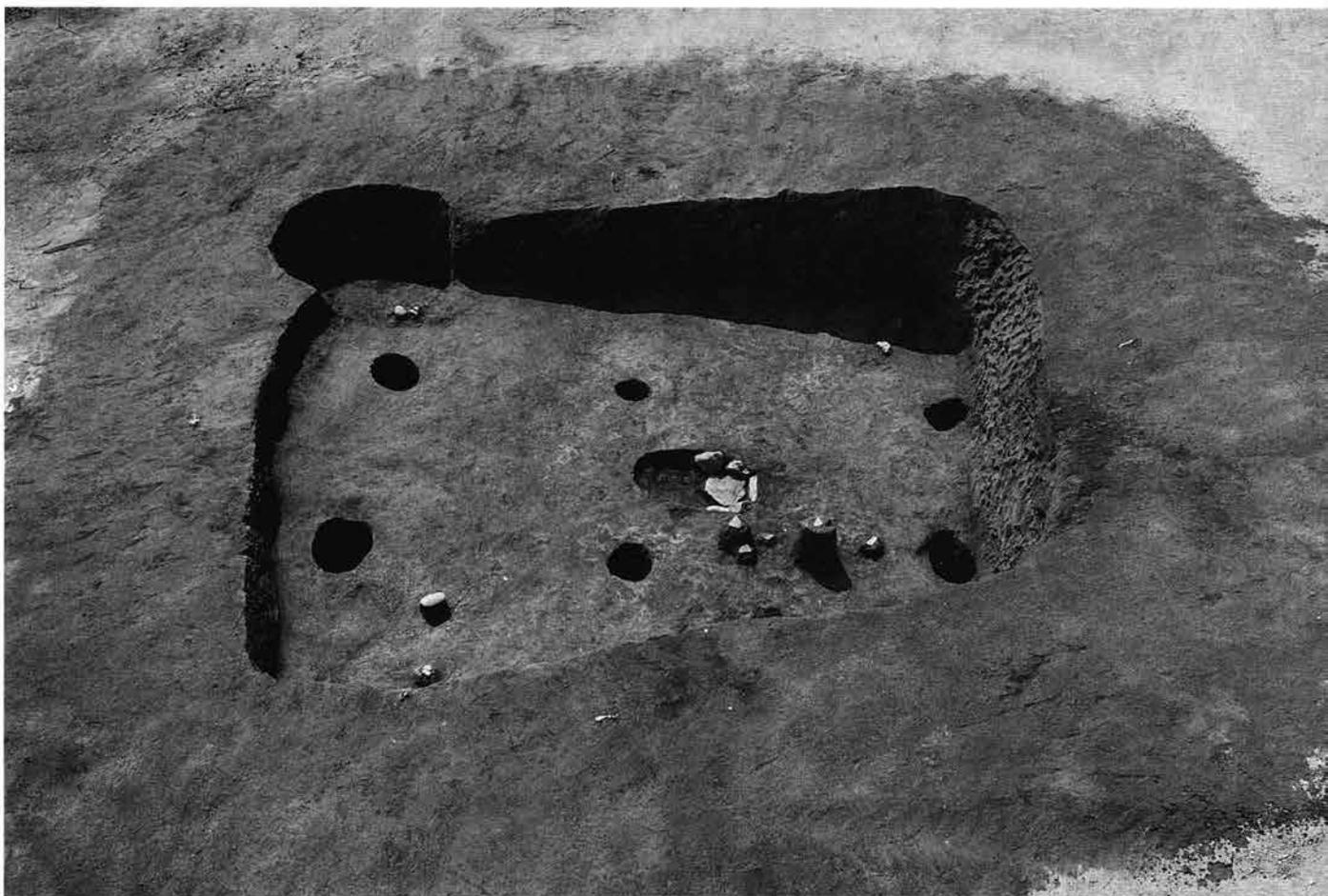
5. 埋没土層の断面



1. 5号住居



2. 遺物の出土状況 (No16)



3. 7号住居



4. 遺物の出土状況



5. 炉



1. 8号住居



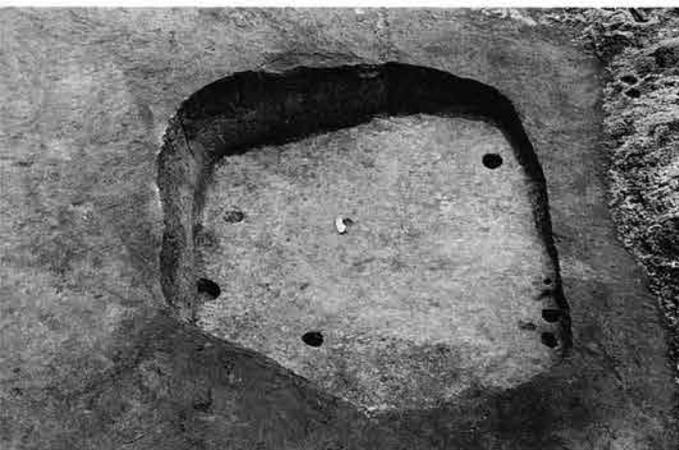
2. 埋没土層の断面 (C-C')



3. 炉



4. 遺物の出土状況 (No9・10)



5. 9号住居



6. 埋没土層の断面 (E-E')



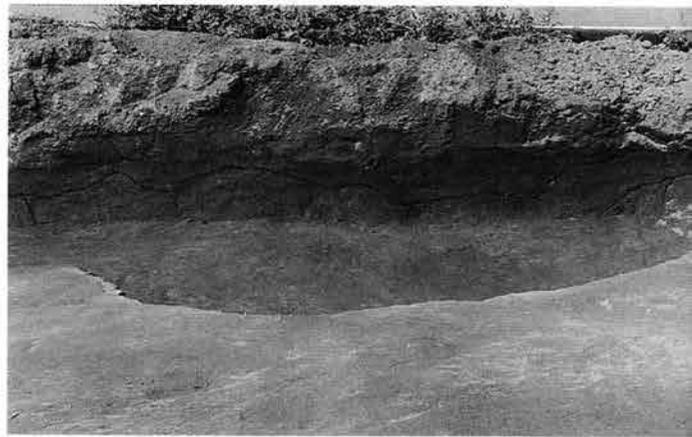
7. 10号住居



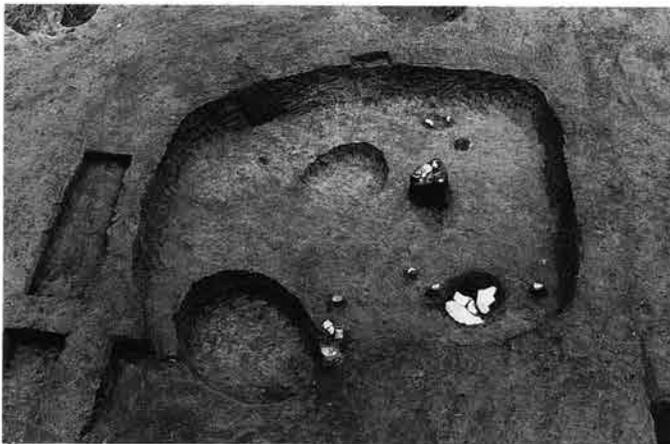
8. 遺物の出土状況 (No1)



1. 11号住居



2. 埋没土層の断面 (A-A')



3. 12号住居



4. 遺物の出土状況 (No3)



5. 13号住居



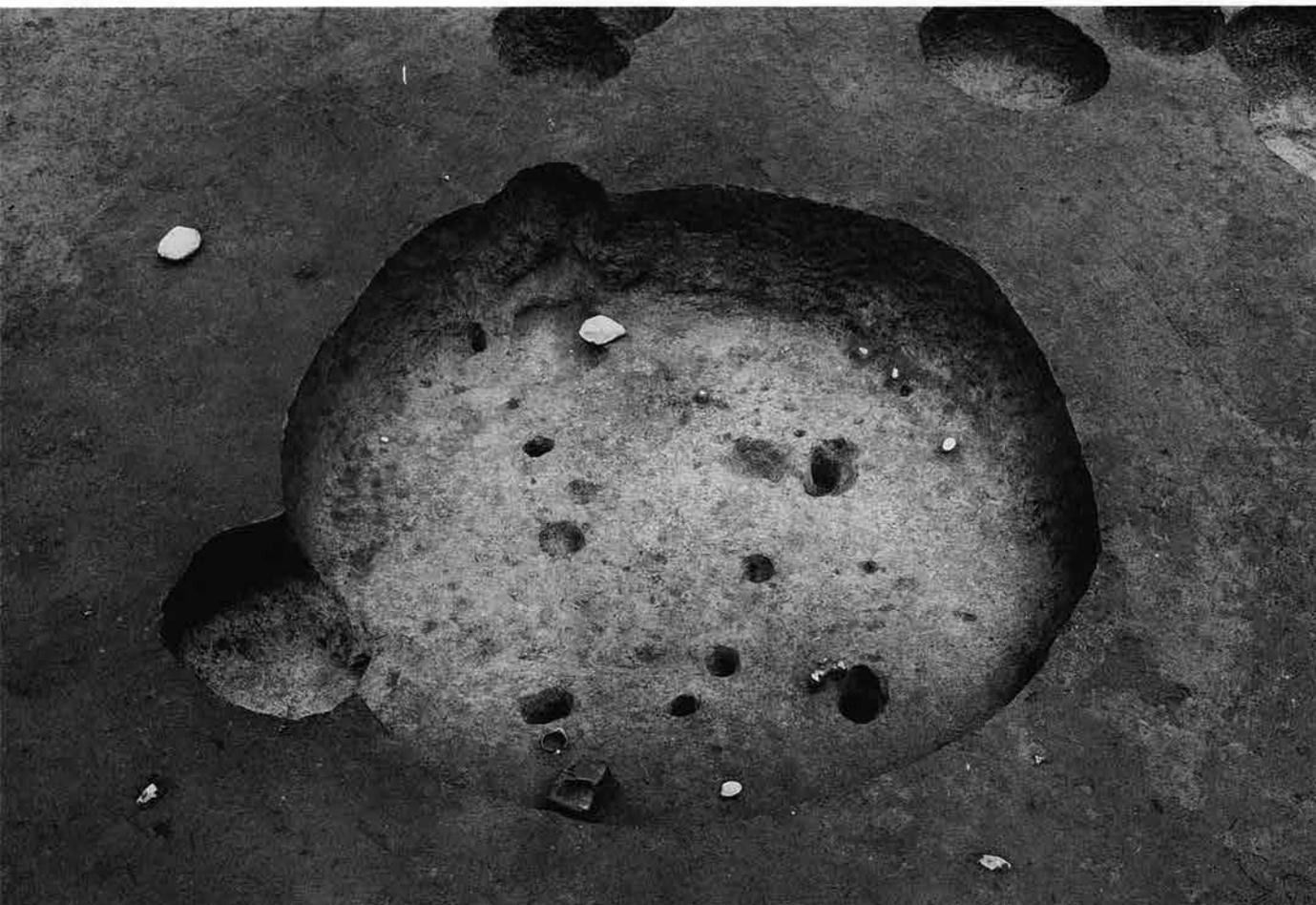
6. 遺物の出土状況



7. 炉



8. 遺物の出土状況 (No3)



1. 14号住居



2. 遺物の出土状況



3. 埋没土層の断面(A-A')



4. 遺物の出土状況 (No3・1)



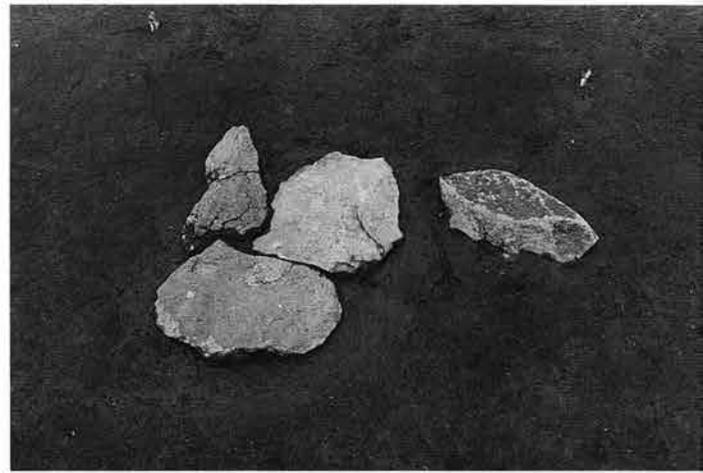
5. 柱穴(P₄)の検出状況



1. Z調査区の集石遺構の検出状況



2. 1号集石



3. 2号集石



4. 3号集石



5. 同集石下の土壌



1. 4号集石



2. 5号集石



3. 6号集石



4. 7号集石



5. 8号(手前)・9号(中央)集石



6. 8号(後方)・9号(手前)集石



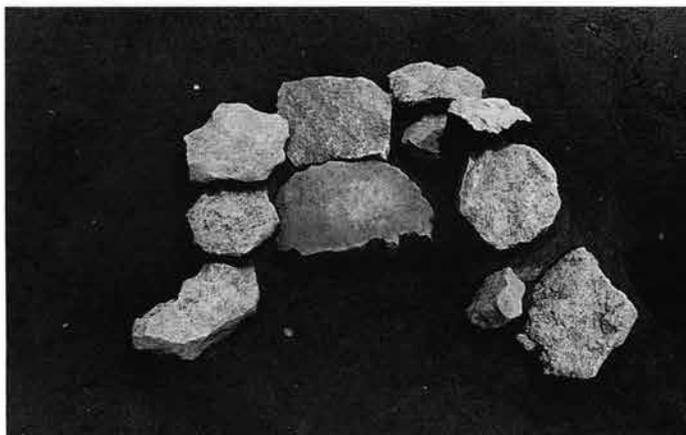
7. 8号集石



8. 同集石下の土壌



1. 9号集石



2. 10号集石



3. 11号集石



4. 12号集石



5. 12号(左)・13号(右)集石



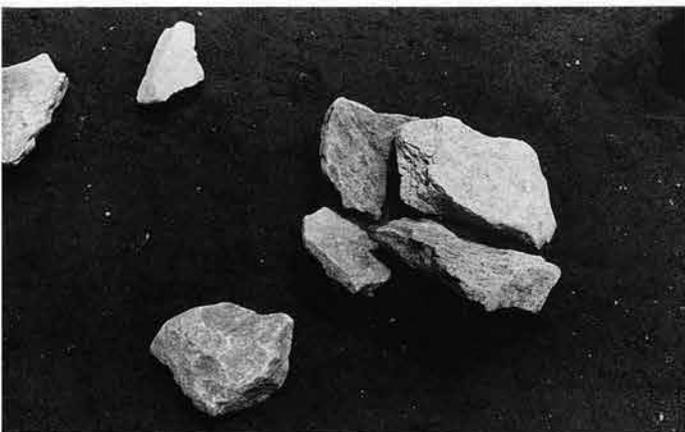
6. 同集石下の土壌



7. 14号(後方)・15号(中央)集石



8. 15号集石



1. 16号集石



2. 同集石下の土壌



3. 18号集石



4. 同集石下の土壌



5. 7号土壌



6. 25号土壌



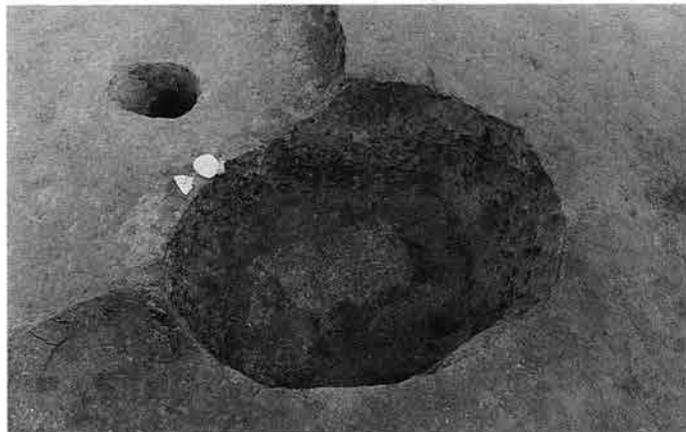
7. 28号土壌



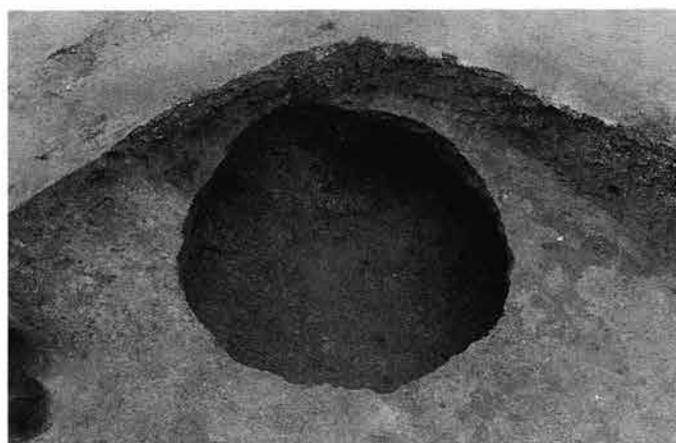
8. 44号土壌



1. 48号土壌



2. 49号土壌



3. 51号土壌



4. 56号土壌



5. 54号土壌



6. 同遺物の出土状況



7. 57号土壌



8. 同埋没土層の断面



1. 58号土坑



2. 61号土坑



3. 83号土坑の埋没土層



4. 同完掘後の状況



5. 同遺物の出土状況



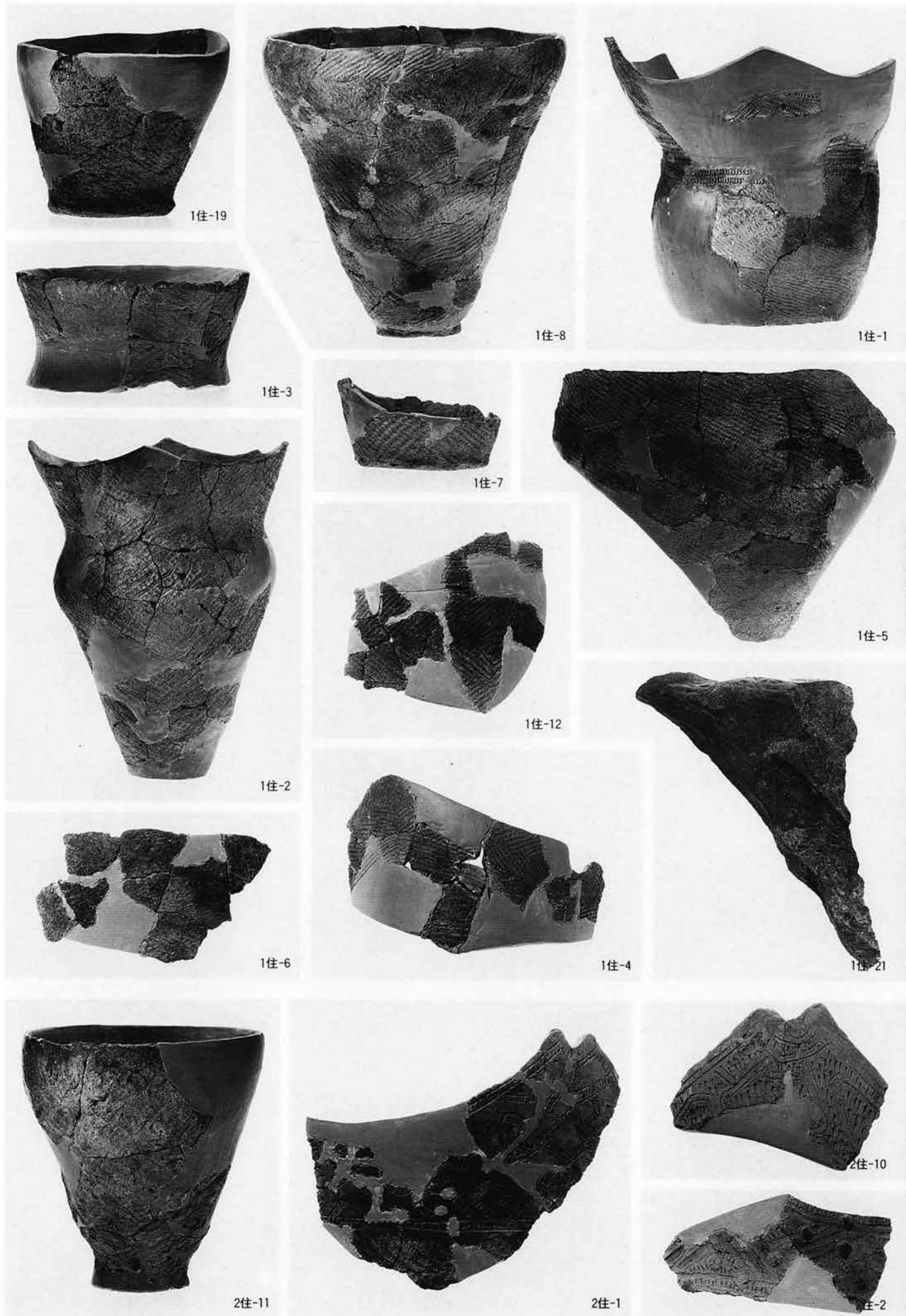
6. 同遺物の出土状況 (No2)



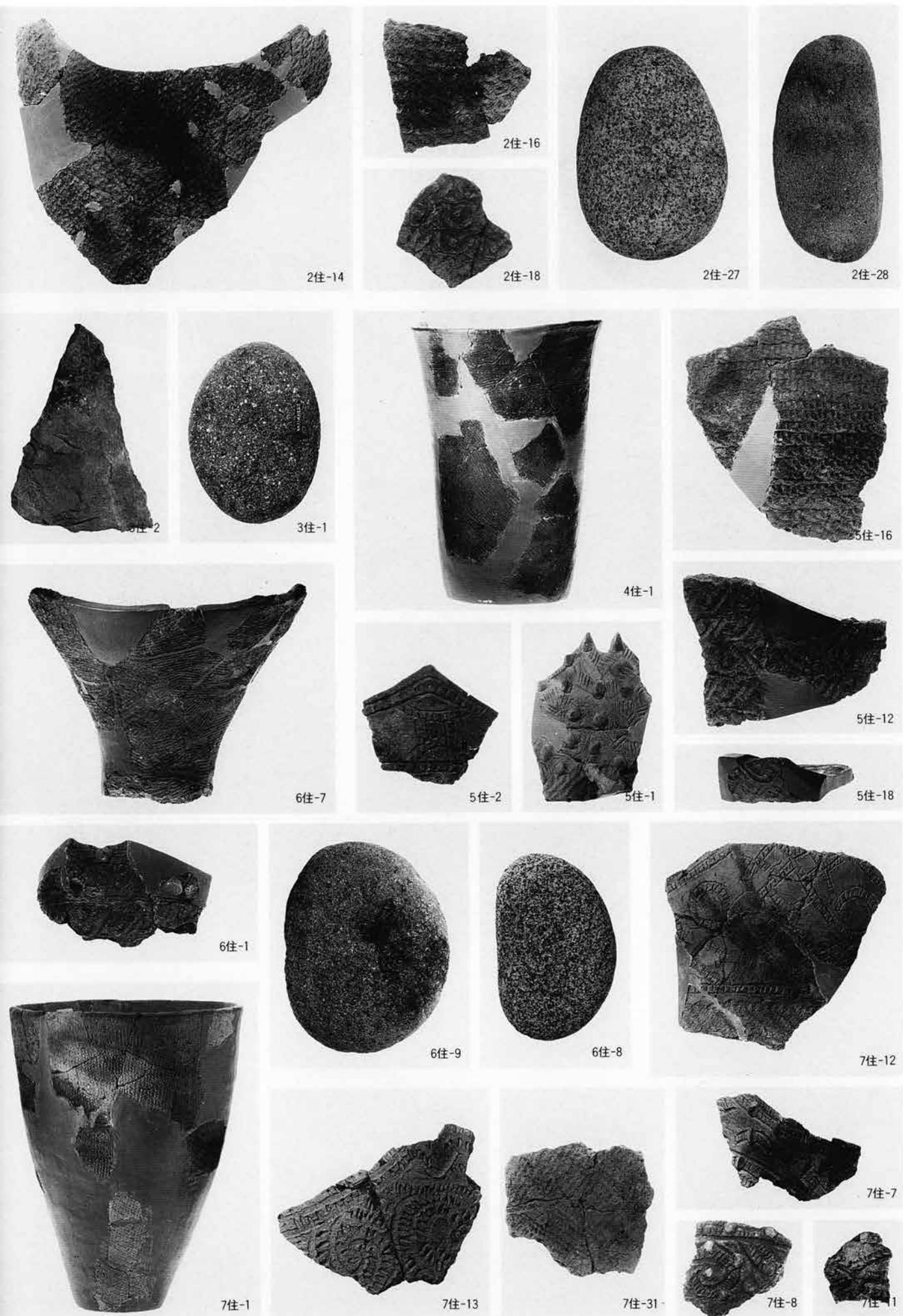
7. 95号土坑



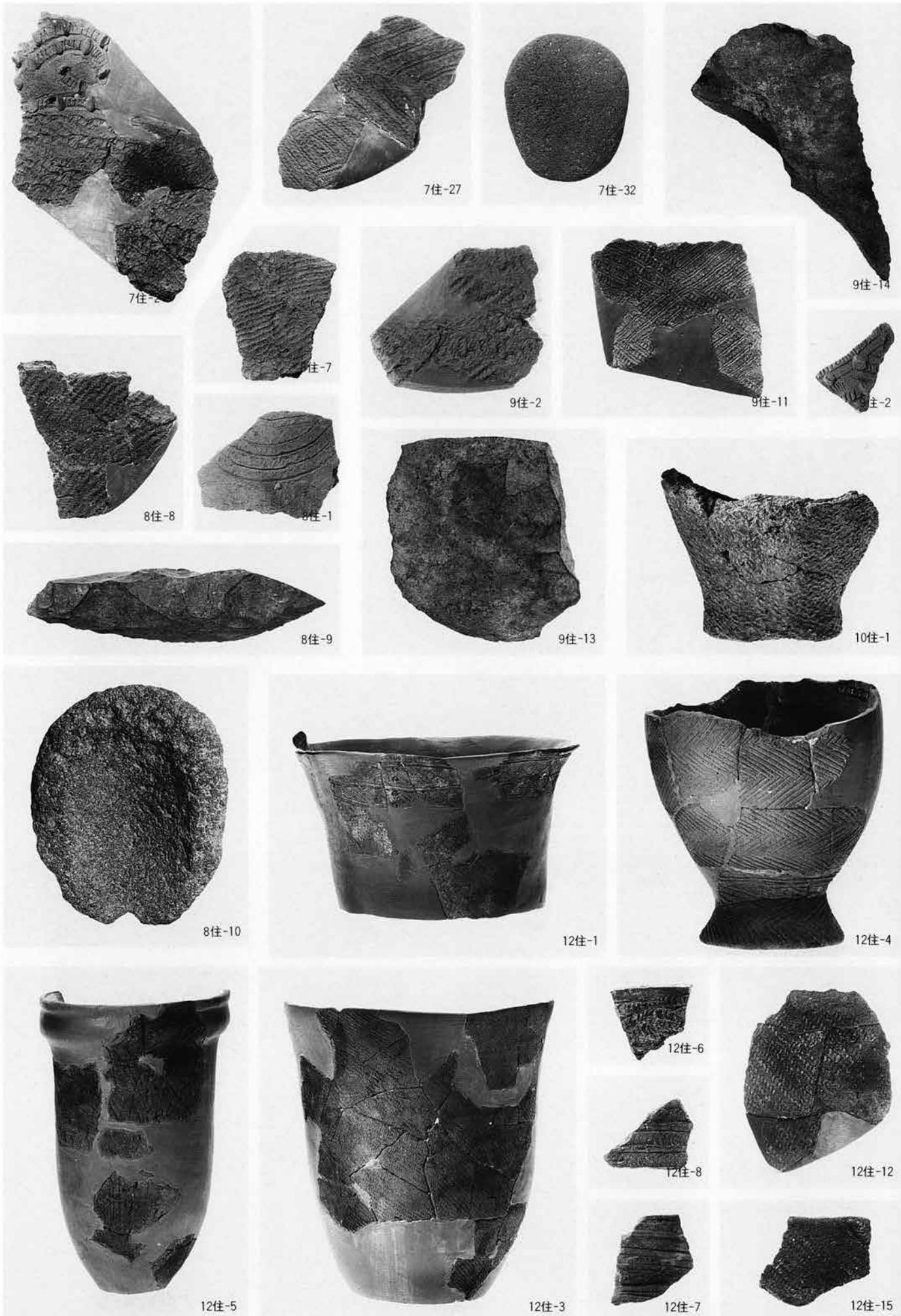
8. 121号土坑



1・2号住居出土遺物



2~7号住居出土遺物



7~10・12号住居出土遺物



12住-2



12住-13



12住-11



13住-3



14住-5



14住-1



14住-4



14住-2



14住-3



14住-6



14住-8



14住-7



14住-10



14住-11



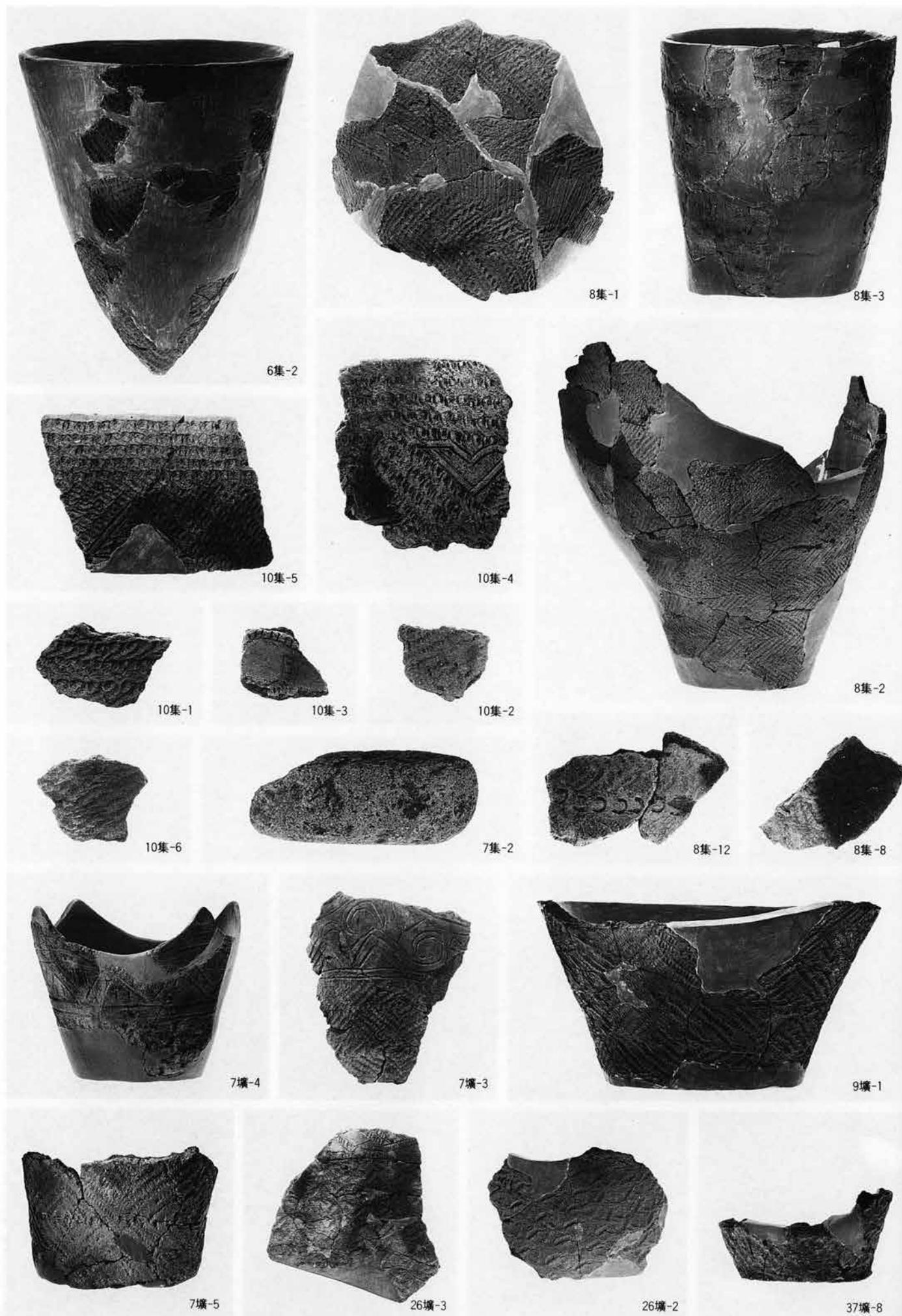
14住-22



14住-23



6集-1



6~8・10号集石、7・9・26・37号土壙出土遺物



30壙-1



30壙-2



53壙-1



56壙-1



56壙-2



61壙-1



54壙-1



56壙-6



56壙-7



83壙-1



83壙-4



83壙-3



83壙-1



83壙-5



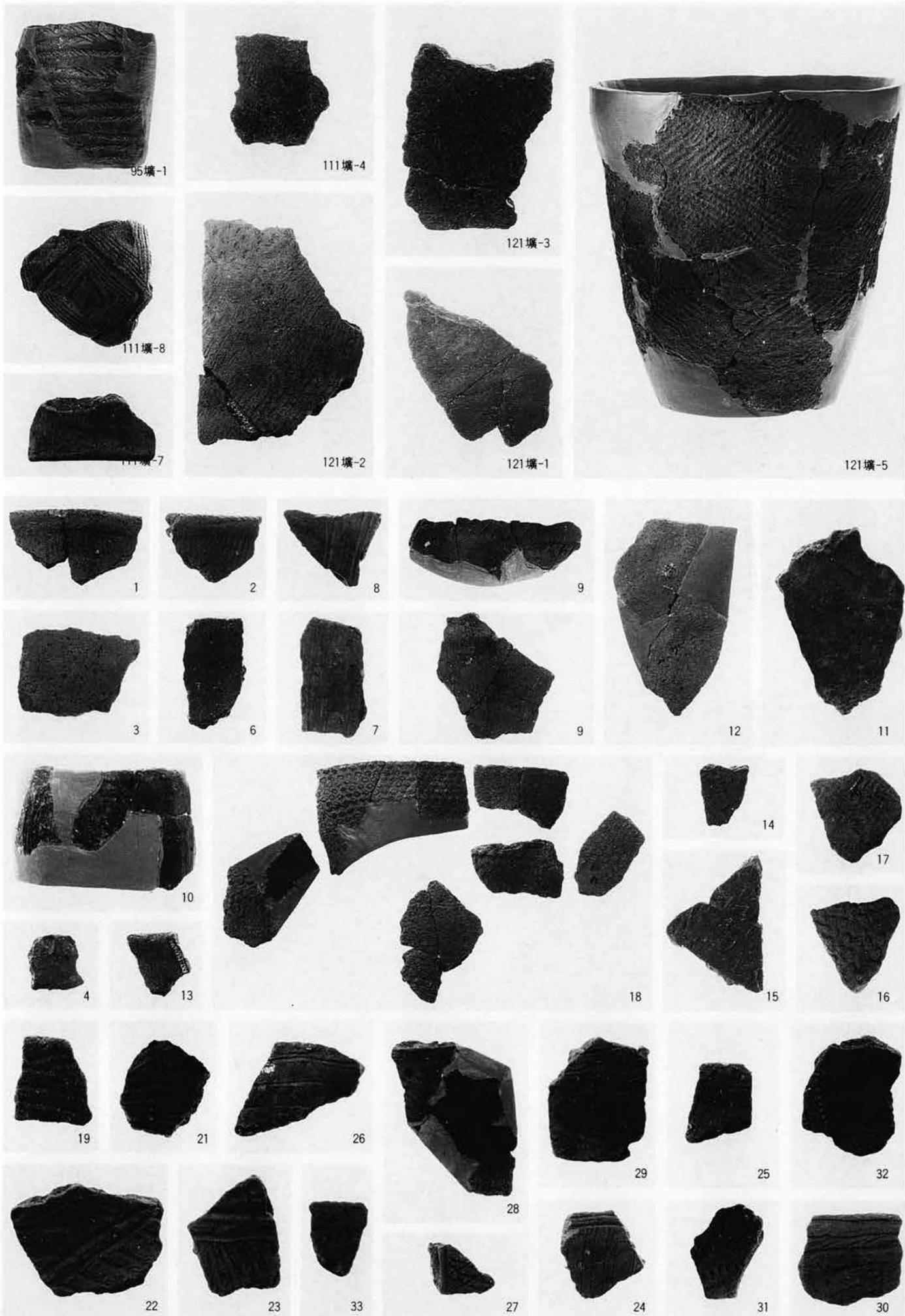
83壙-6



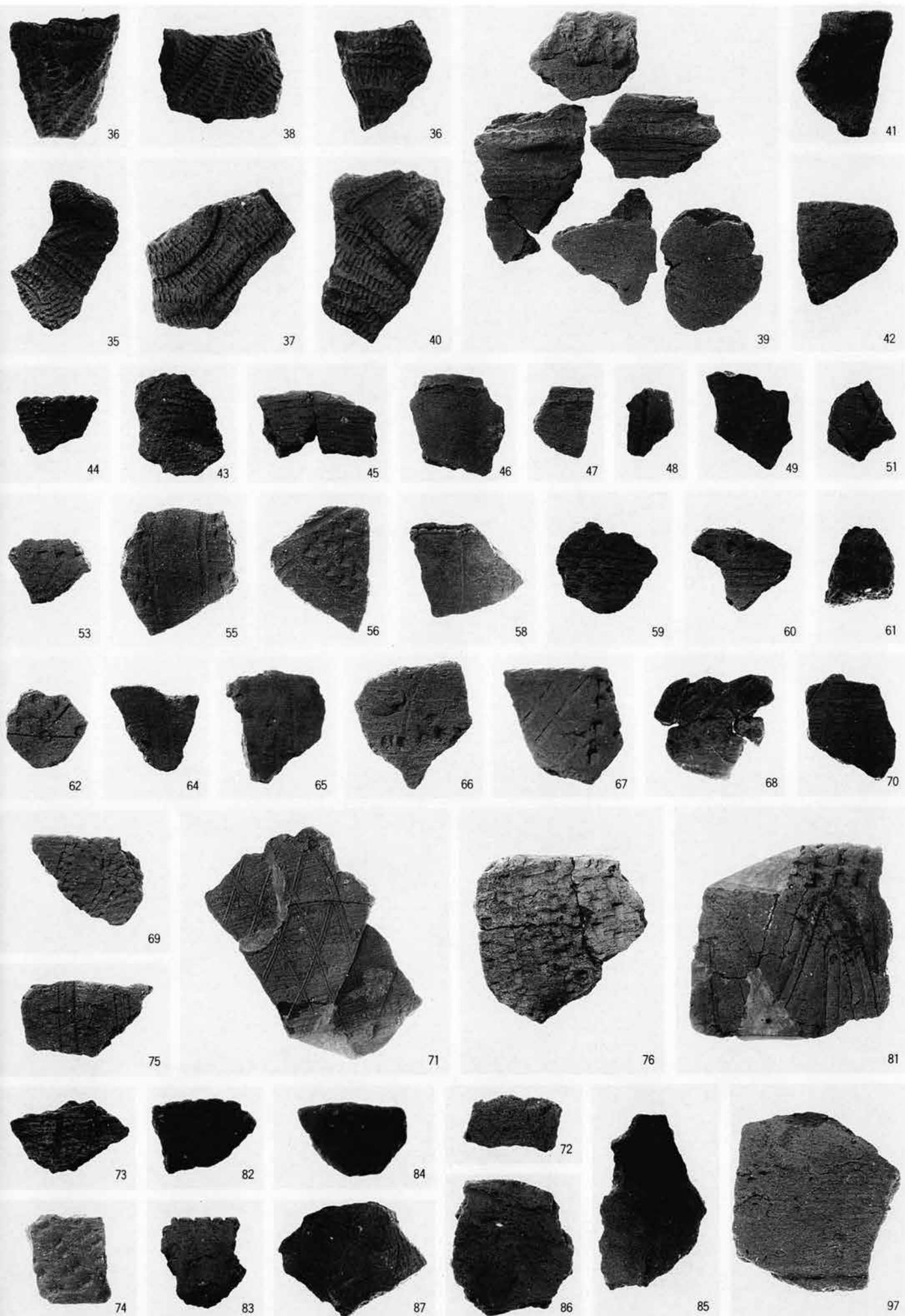
83壙-8

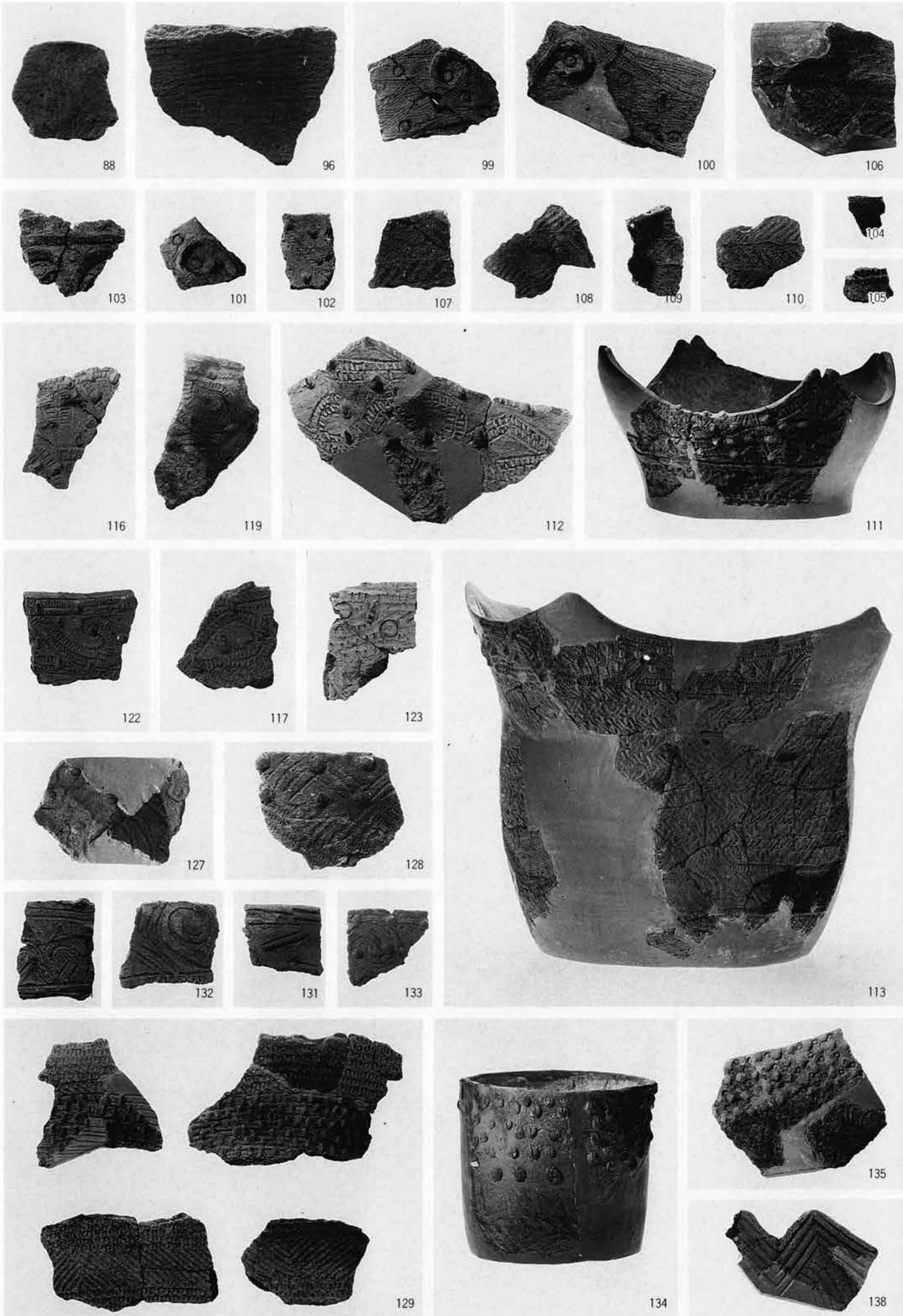


83壙-2

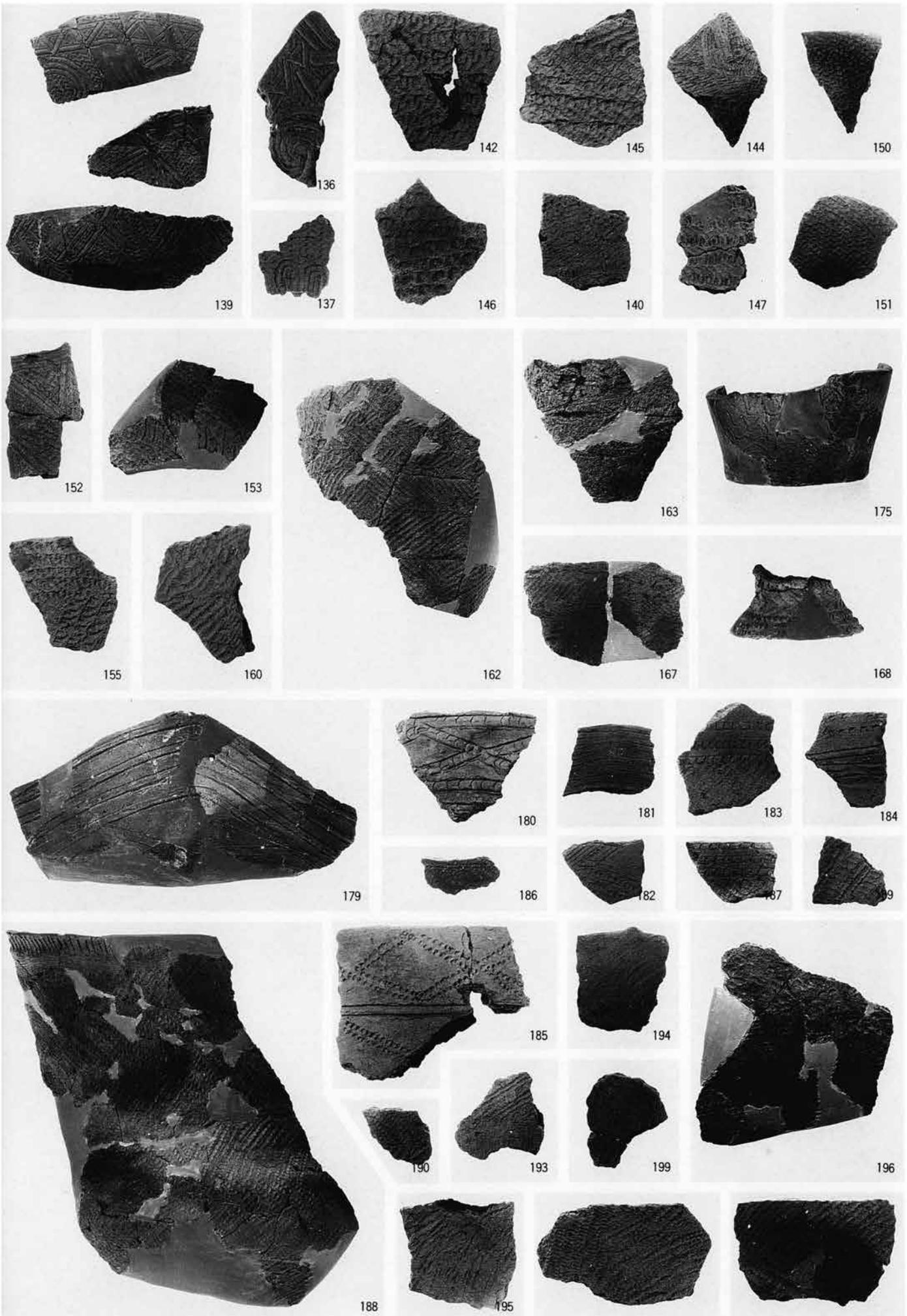


95・111・121号土壙、包含層出土の土器

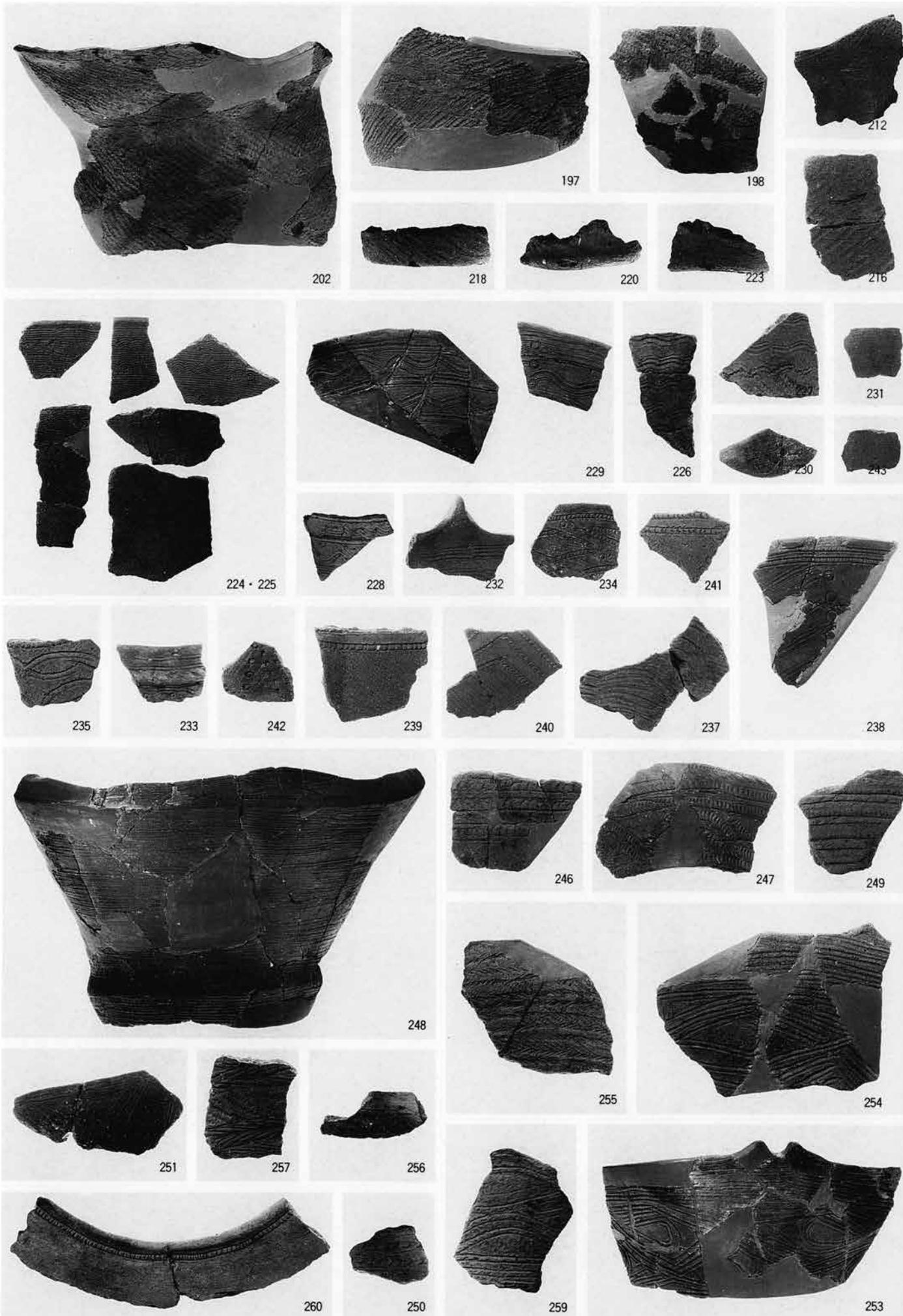




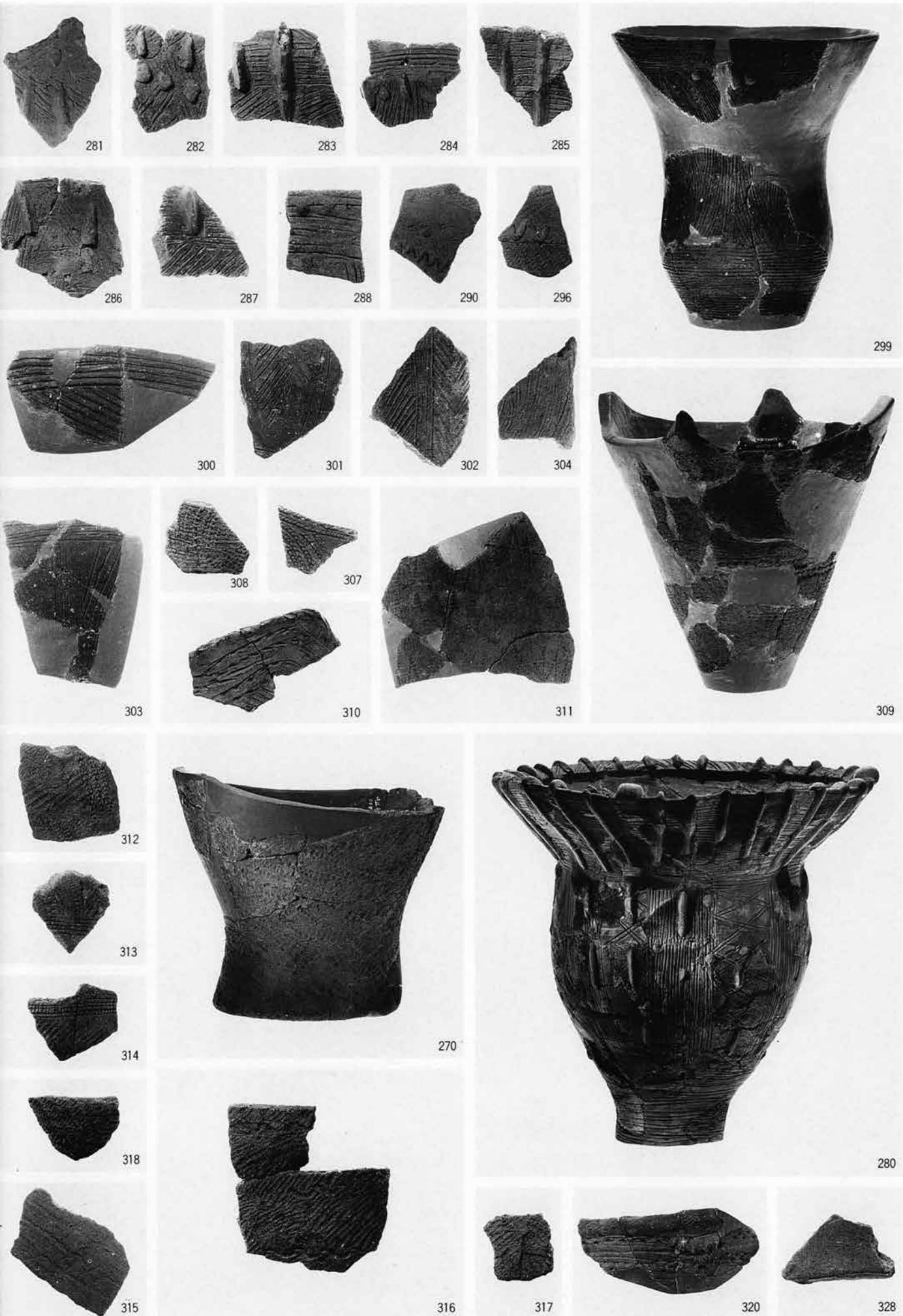
包含層出土の土器



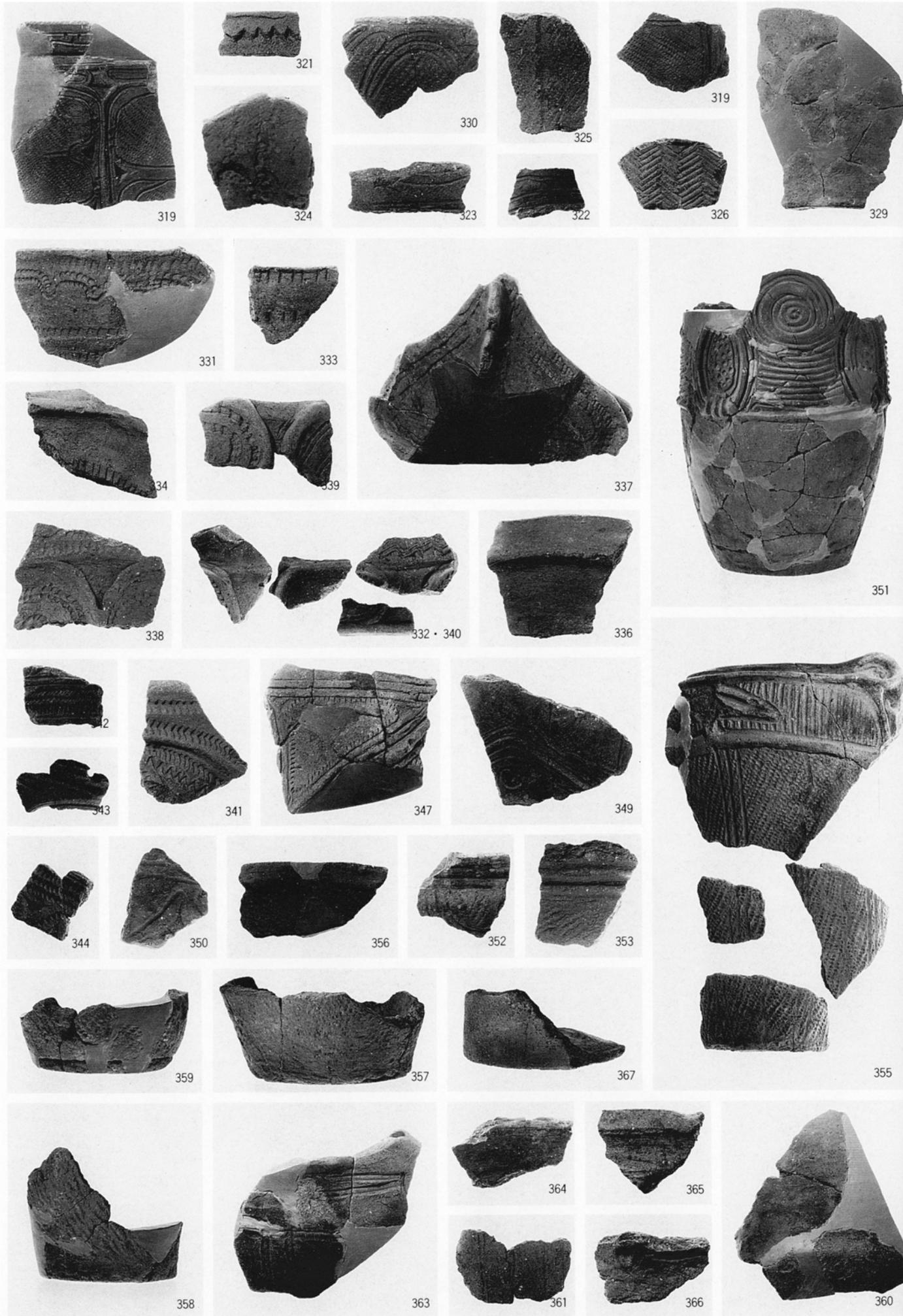
包含層出土の土器



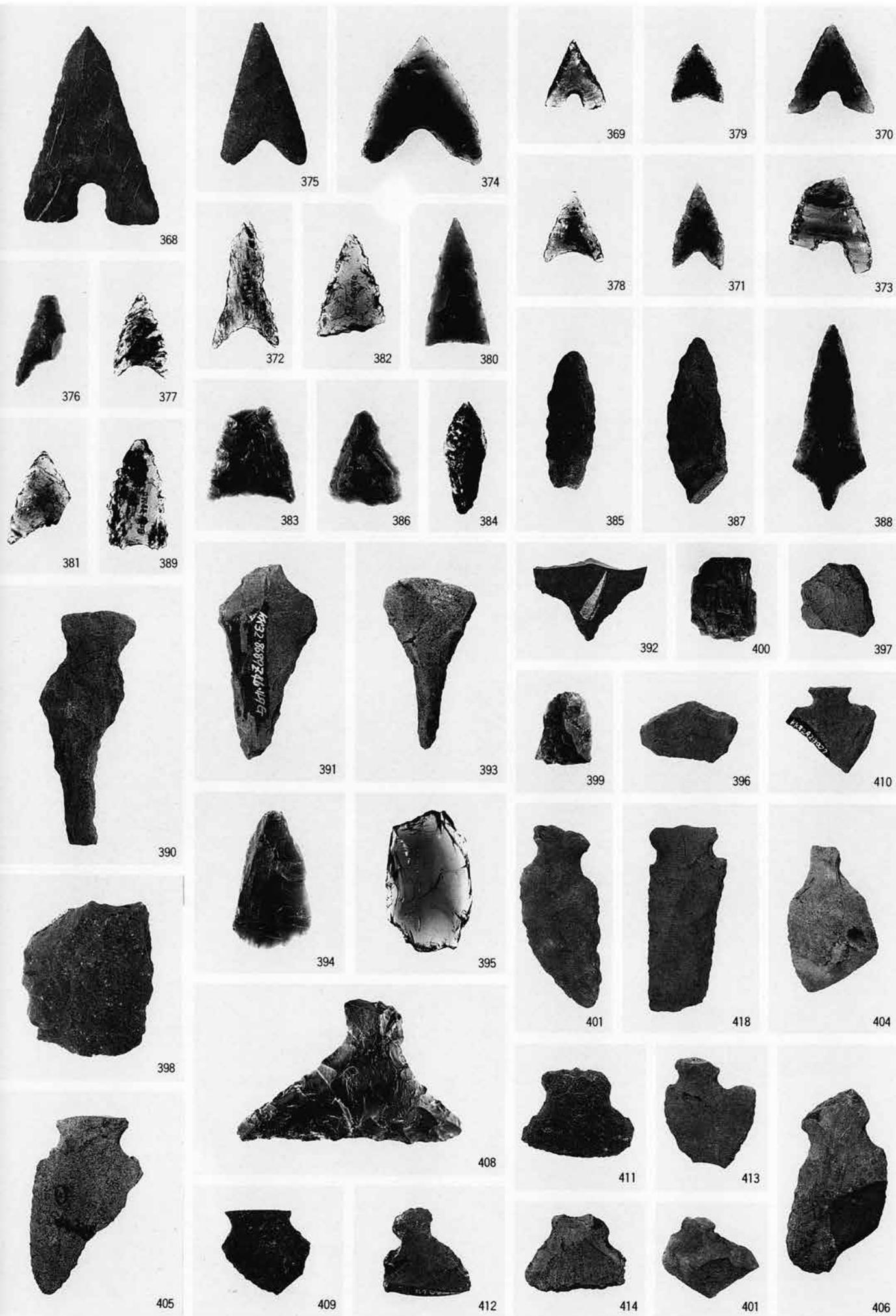
包含層出土の土器



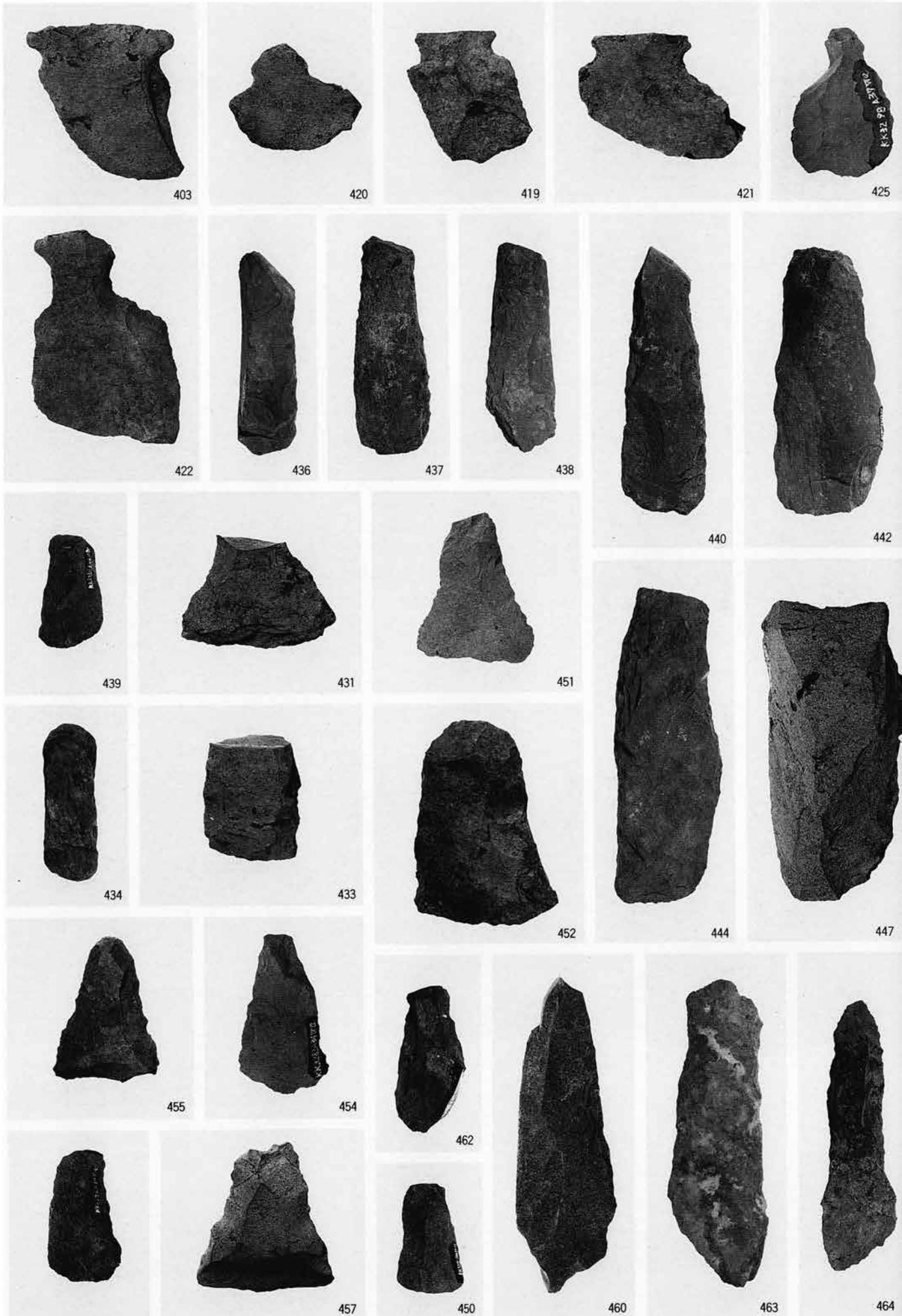
包含層出土の土器



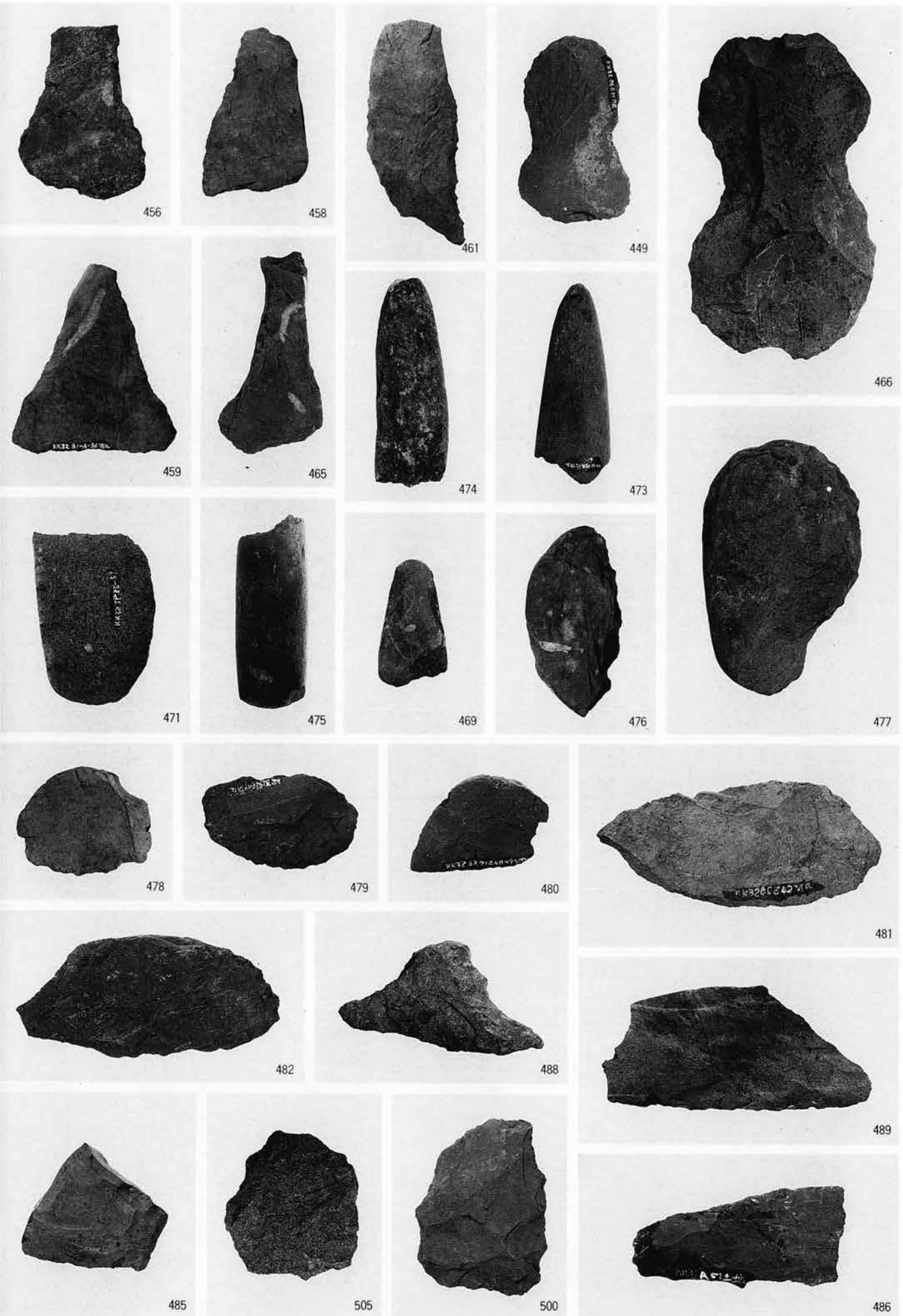
包含層出土の土器



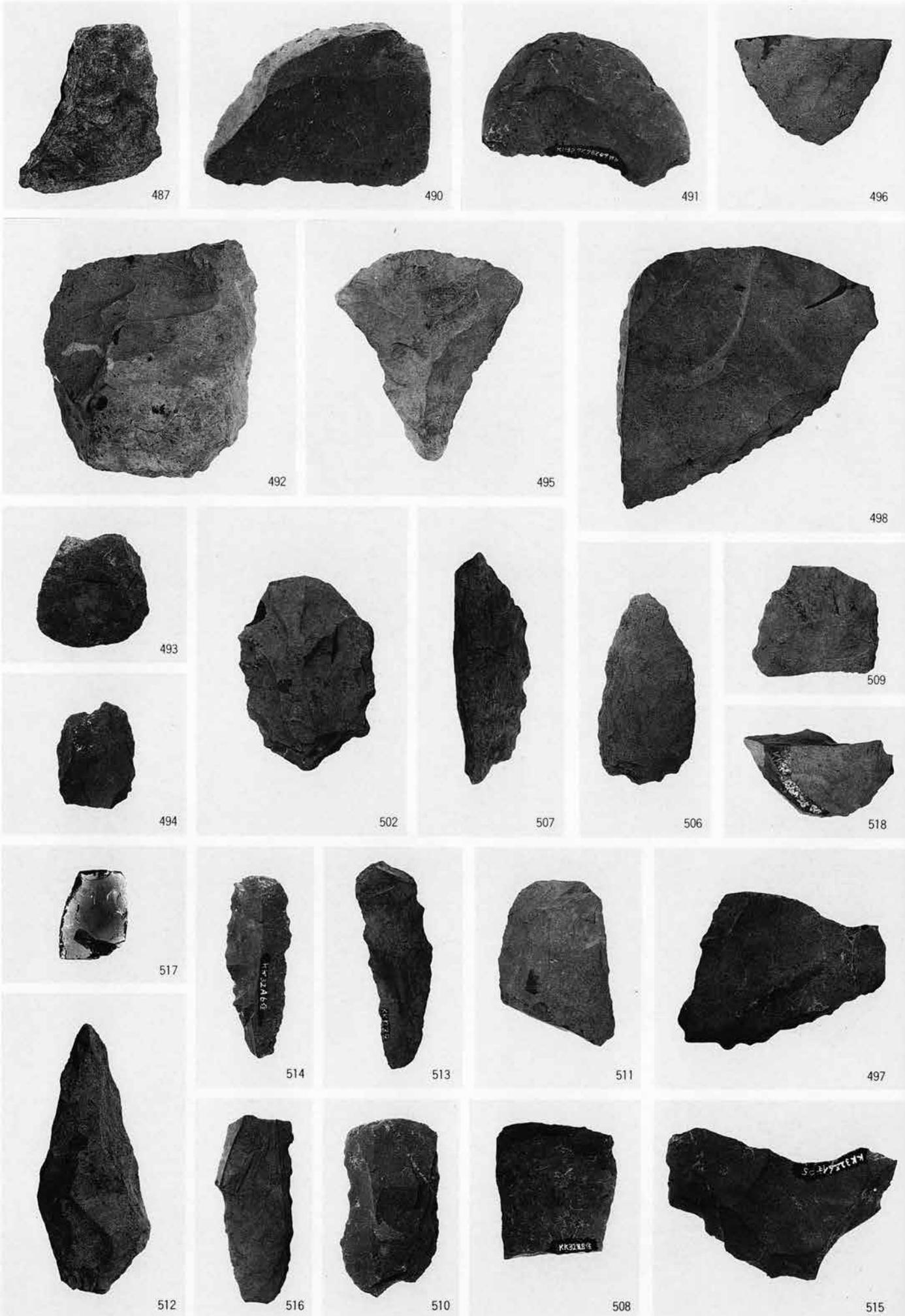
包含層出土の石器



包含層出土の石器



包含層出土の石器



包含層出土の石器



524



523



528



521



529



530



532



586



527



565



571



569



584



577



566



572



573



583



581



587



576



579



588



526

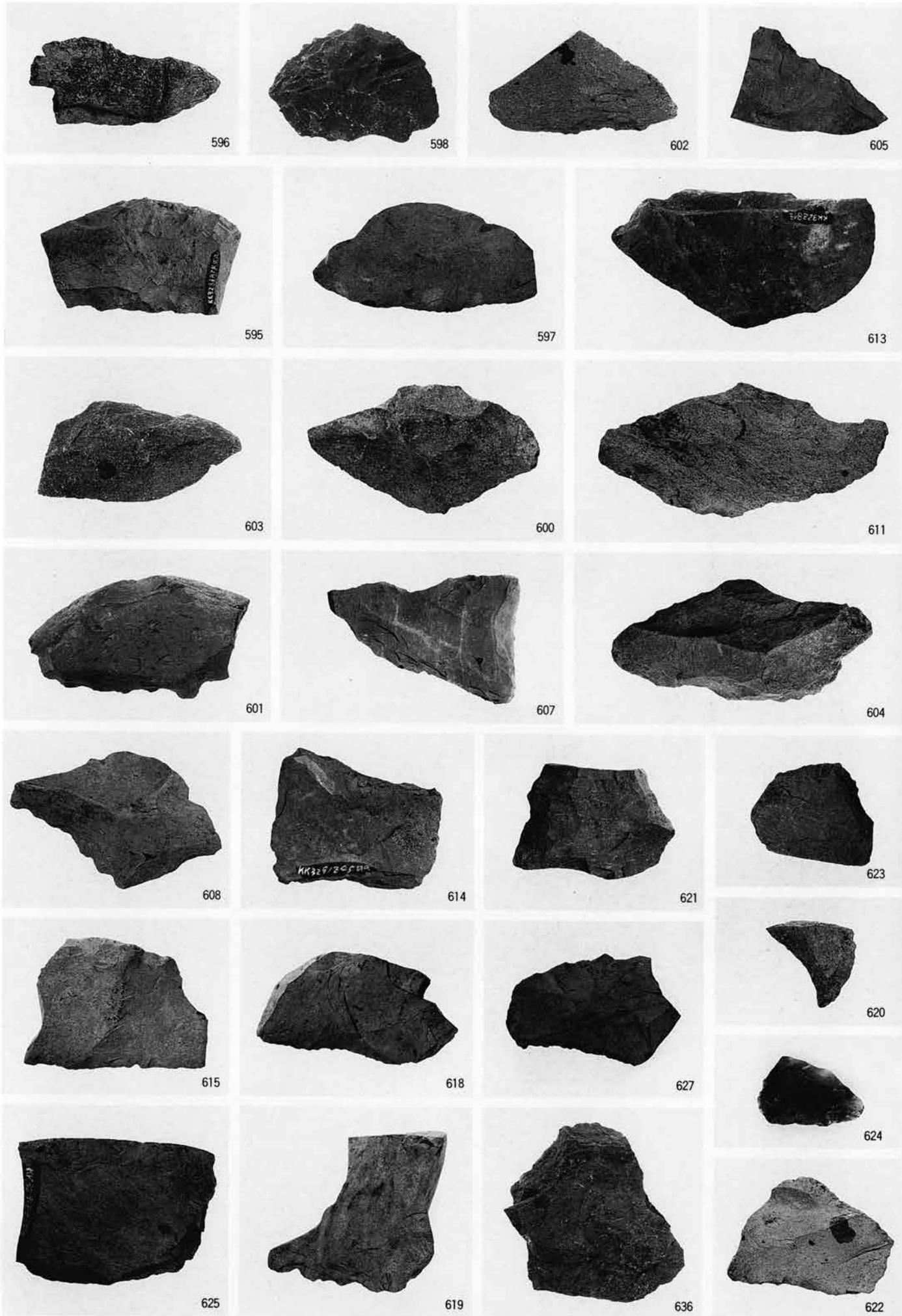


589

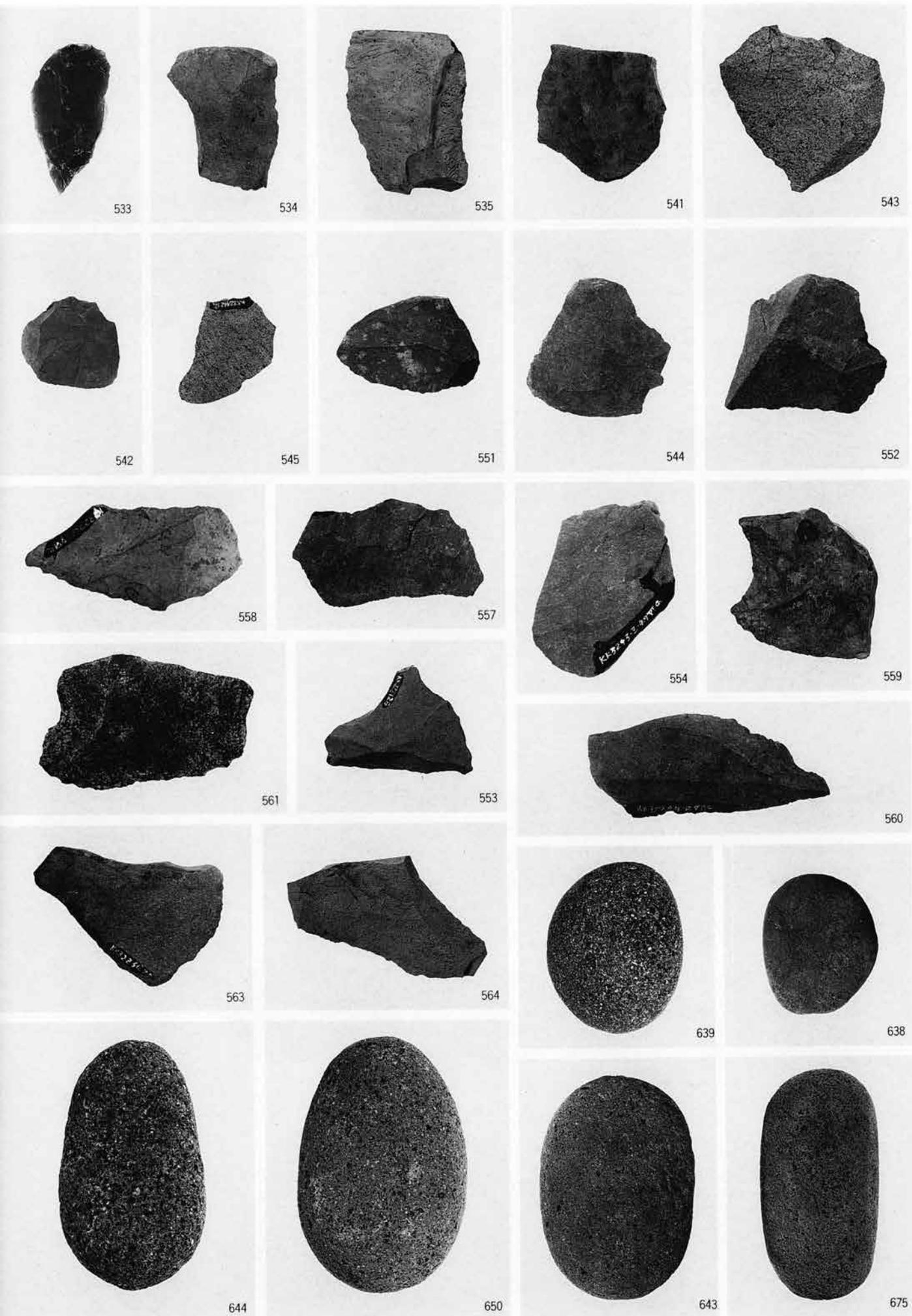


590

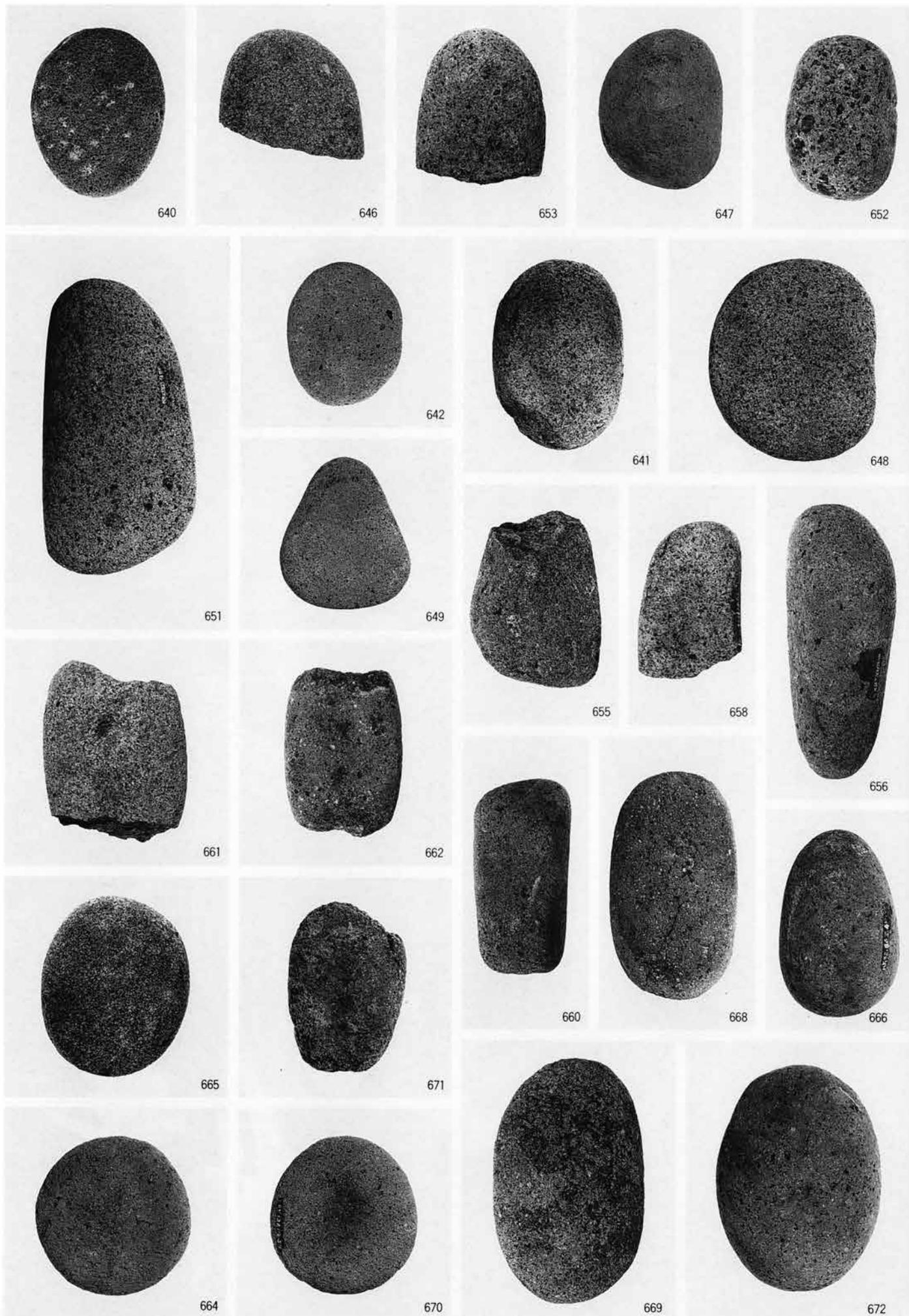




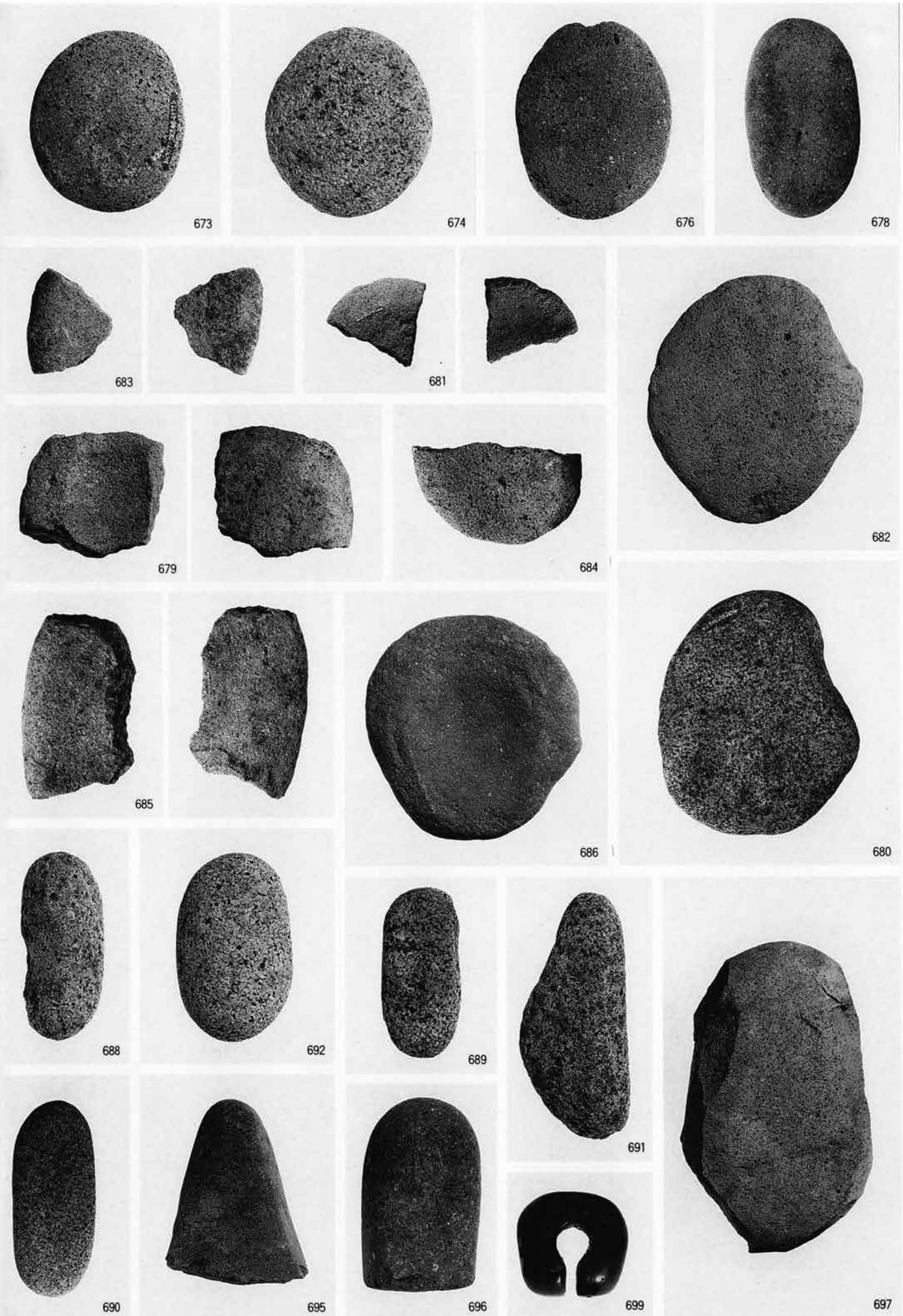
包含層出土の石器



包含層出土の石器



包含層出土の石器



包含層出土の石器



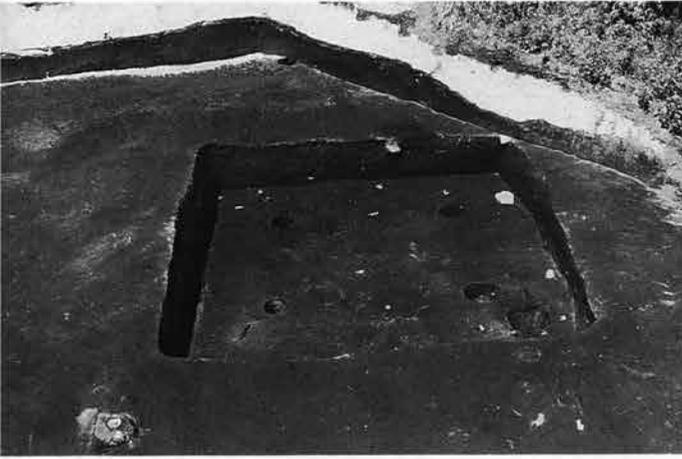
1. 15~19号住居の埋没土上層に堆積したFP(西より)



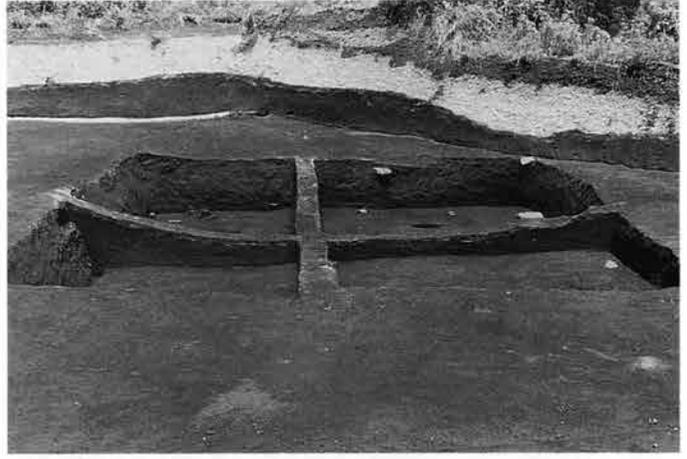
2. 15~19号住居の完掘後の状況



3. Z調査区の土層堆積状況



1. 15号住居



2. 埋没土層の断面 (A-A')



3. 貯蔵穴と遺物の出土状況 (No13・8・9・10)



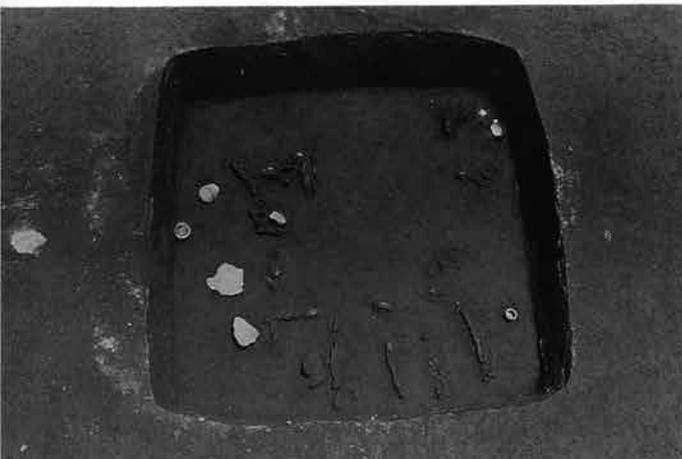
4. 遺物の出土状況 (No4・11・3・1)



5. 17号住居



6. 埋没土層の断面 (D-D')



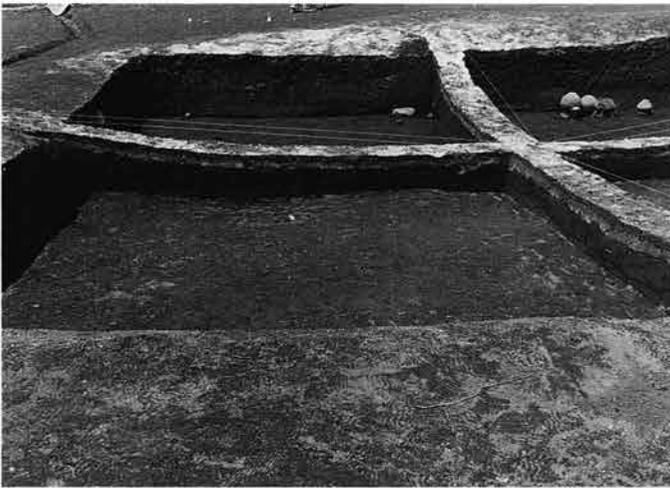
7. 遺物の出土状況



8. 遺物の出土状況 (No4・8)



1. 16号住居



2. 埋没土層の断面 (A-A')



3. 遺物の出土状況



4. 遺物の出土状況 (No1・13~15・17)



5. 貯蔵穴



1. 18号住居（後方17号住居）



2. 埋没土層の断面 (D-D')



3. 遺物取り上げ後の状況



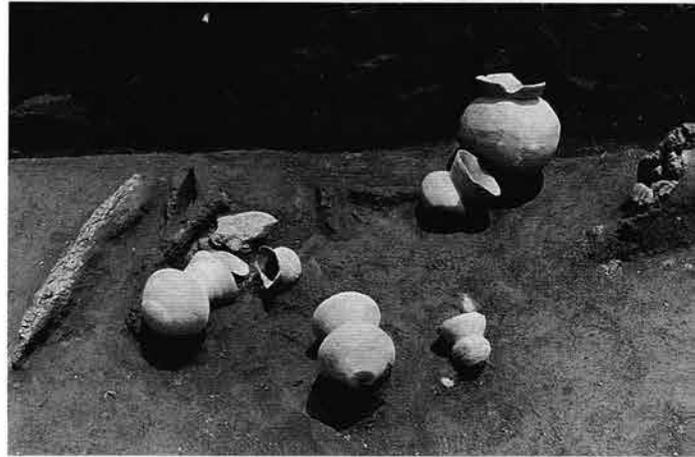
4. 遺物の出土状況（北壁際）



5. 遺物の出土状況（北壁際）



1. 遺物の出土状況（東壁から北壁際）



2. 遺物の出土状況 (No84・48・49・44・25・9・30)



3. 炭化材の出土状況



4. 炭化材の出土状況



5. 貯蔵穴



6. 同埋没土層の断面



7. 19号住居



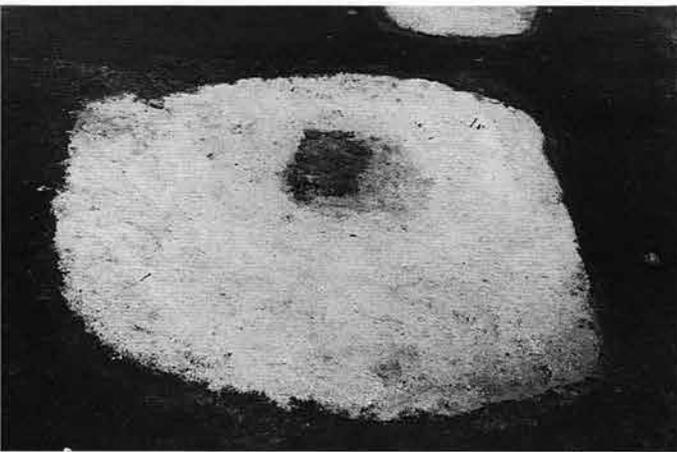
8. 遺物の出土状況



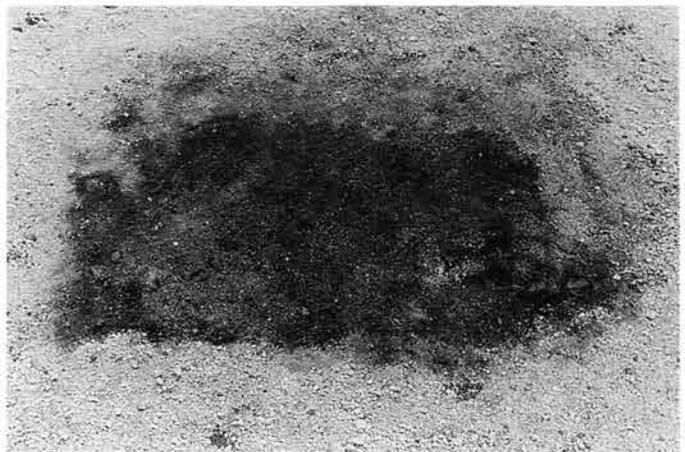
1. 1号階段状遺構（東より）



2. 1号階段状遺構（南より）



3. 122号土壇



4. 122号土壇



5. 同遺物の出土状況（No3~5）



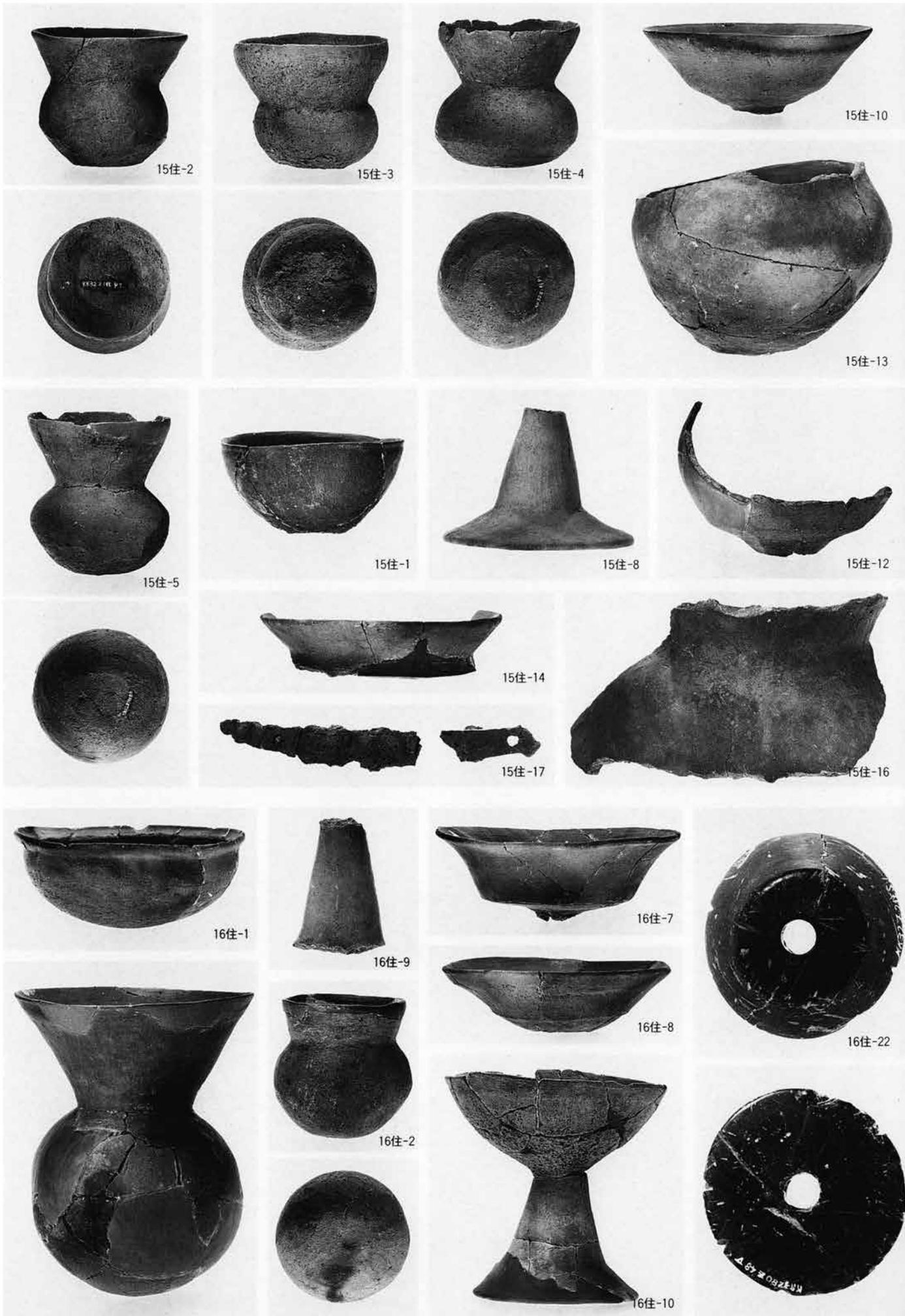
6. 43号土壇



7. 1号炭焼窯



8. 同煙道



15・16号住居出土遺物



16住-17



16住-6



16住-5



16住-11



16住-13



16住-15



16住-12



16住-16



16住-17



16住-21



16住-18



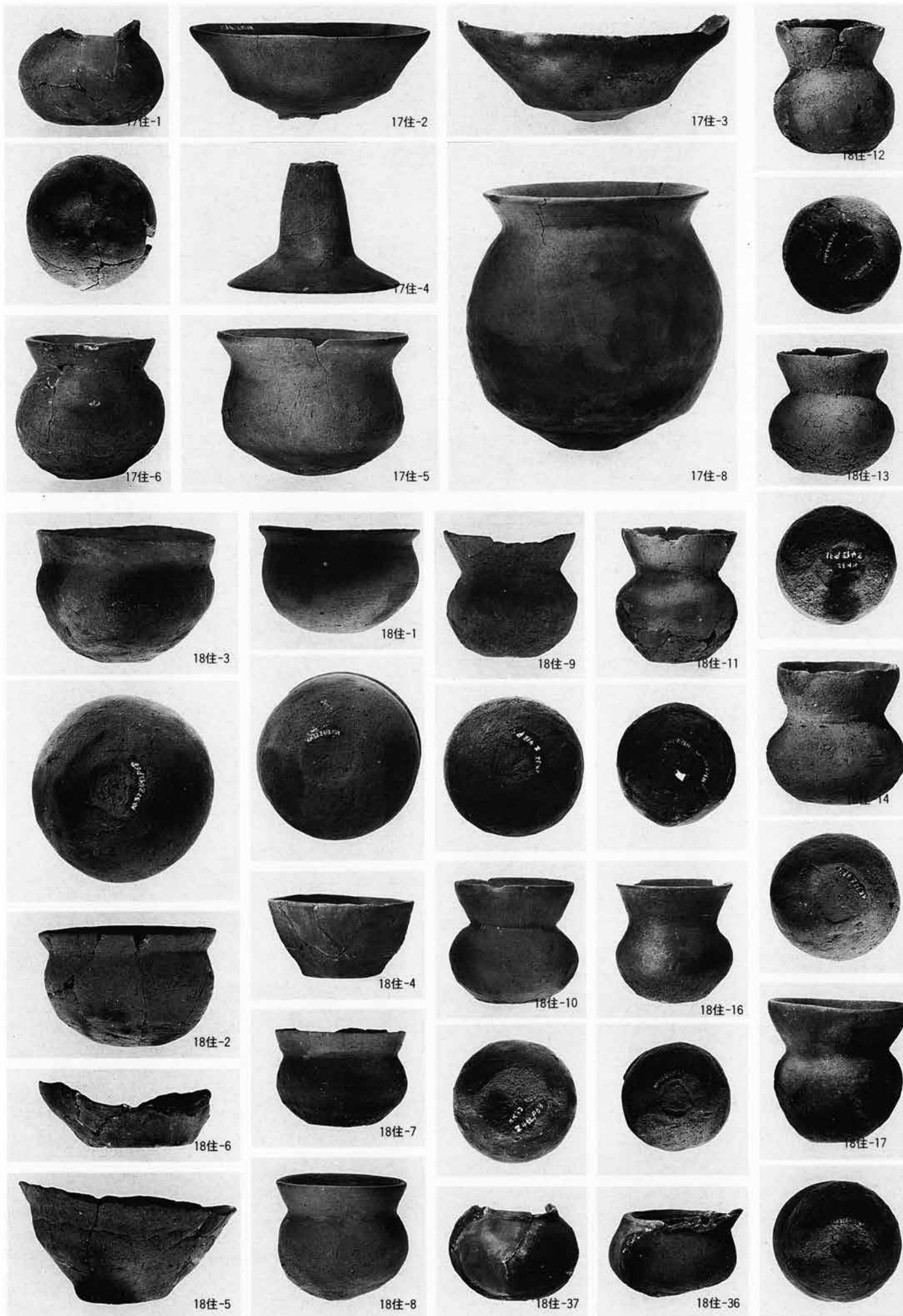
16住-19



16住-20



16住-14



17・18住居出土遺物



18号住居出土遺物



18住-40



18住-41



18住-42



18住-47



18住-43



18住-44



18住-49



18住-50



18住-45



18住-48



18住-46



18住-51



18住-52



18住-57



18住-61



18住-53



18住-58



18住-62



18住-54



18住-59



18住-64



18住-56



18住-60



18住-65



18住-68



18住-63



18住-70



18住-67



18住-71



18住-58



18住-65



18住-57



18住-66



18住-68



18住-63



18住-69



18住-71



18住-82



18住-78



18住-79



18住-73



18住-87



18住-76



18住-85



18住-88



18住-74



18住-84



18住-86



18住-75



18住-89



18住-77



18住-81



18住-90



18住-83



19住-1

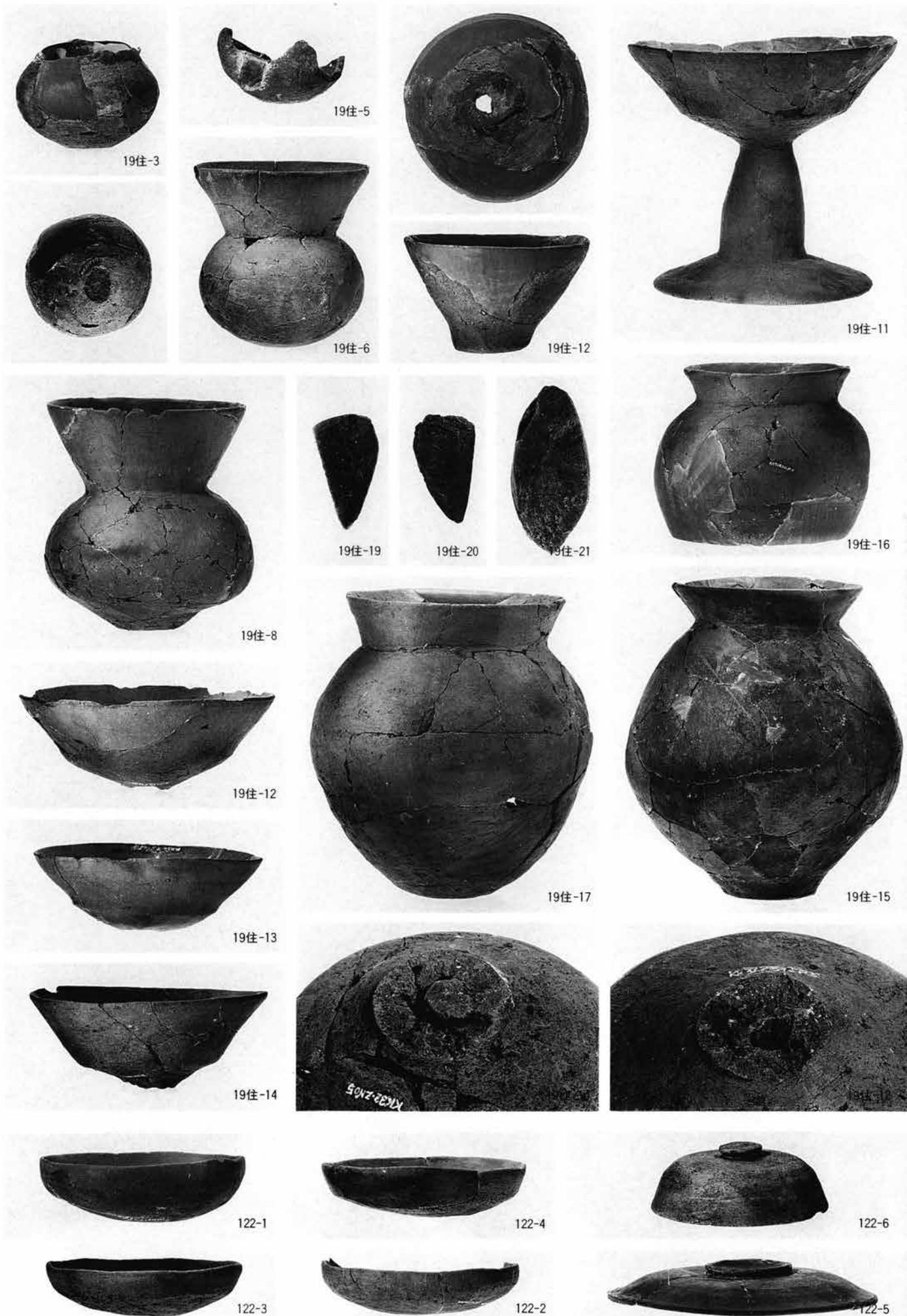


19住-2



19住-4





19号住居、122号土壇出土遺物



包含層出土の遺物

勝保沢中ノ山遺跡Ⅰ —関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第22集—

昭和63年3月26日 印刷
昭和63年3月31日 発行

編集・発行／群馬県教育委員会
〒371 前橋市大手町1丁目1番1号
電話(0272)23-1111(代表)

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毛新聞社出版局

勝保沢中ノ山遺跡

縄文時代の遺構位置図

